THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋期大附録號

第廿七年第九號

第貳百八拾二號

LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大隈伯爵家

を始め其他の諸名家より多數御注文の榮を辱ふす以て本器が如何に優秀なるかを知られよ!!!

新橋堂新式

組合せ箱本



△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

△室内の構造に應じて適宜に配置し得べし

△硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す

△書物を分類するに最も適當なる構造を有す

△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

定價 金二十六圓 檜製
金二十八圓 欅製
金三十圓 櫻製

運賃荷造費御自辨

△之れを要するに最善最良の本箱!!

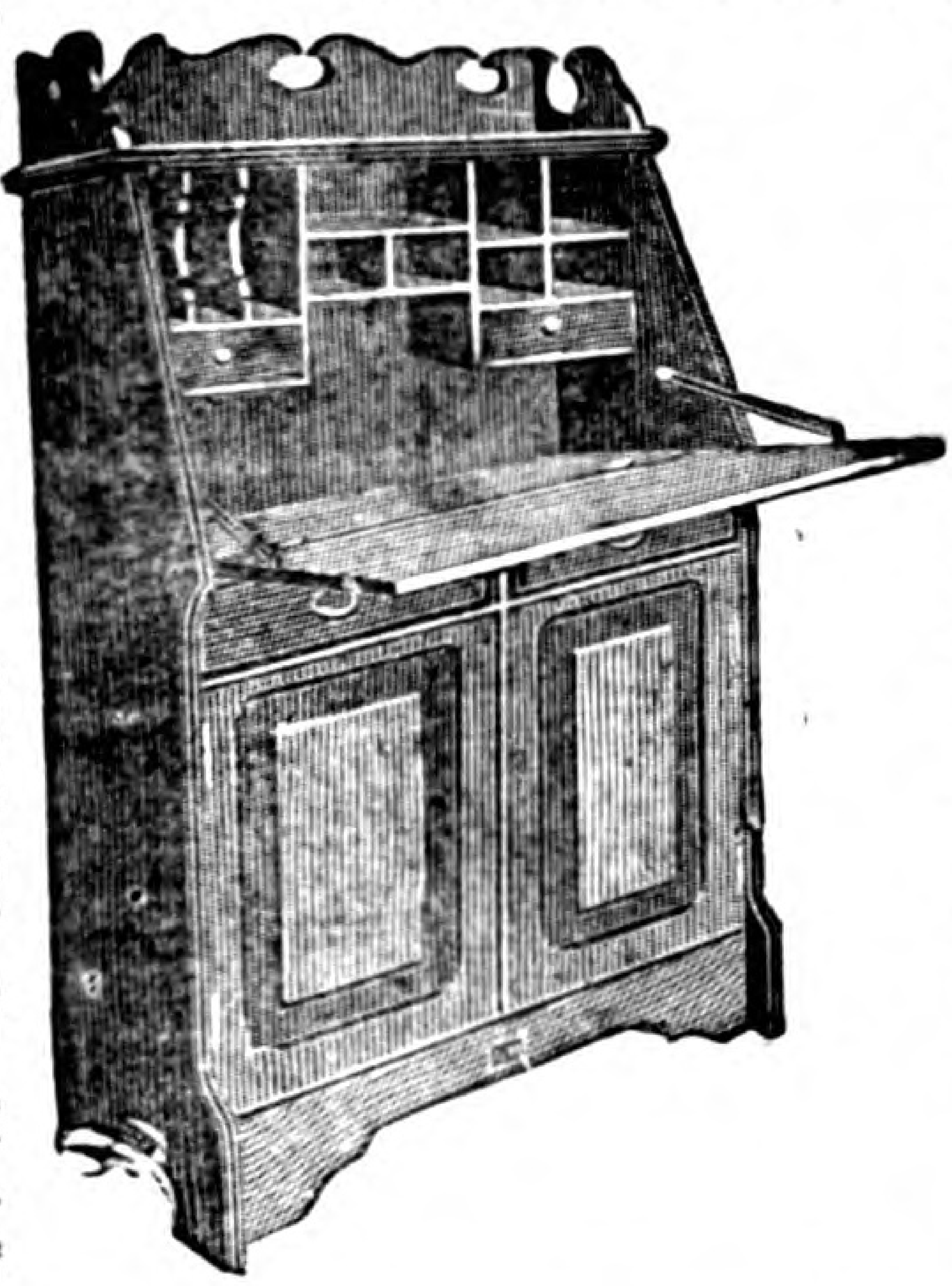
（構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈）

理想のデスク

＝事務用定價金廿五圓
書見用定價金廿二圓＝

荷造費各一圓八十錢
運賃は御自辨

●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用する様構造されて居ります●夫故日常必要の帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます●材料は兩デスク共檜です塗は木地色のラック仕上げてす



發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 新橋堂
電話新橋千九百九十一番
振替貯金口座二百番

理學博士谷津直秀先生閲
理學士大地原誠玄先生著

寫眞畫帖

紙上の動物園

補乳動物の卷

猿猴類 既刊 定價卅五錢 郵税四錢
肉食類 既刊 定價六十錢 郵税六錢
有蹄類 定價八十錢 郵税八錢
翼手類 齧齒類及食虫類 續刊
游水類 貧齒類有袋類、穴類 續刊

本帖は哺乳動物の全體に亘りて出來得る限り多くの代表的にして自然の狀態を示すに足る而かも最も興味ある寫眞を組織的に排列し之に和、英、獨、佛、羅甸名を附し一々詳に是れが說明を施したれば其等各種の動物の生立、相好、習性等を知得するに便なる**紙上の動物園**とも稱すべきものなり併せて本帖は現生代の獸類の祖先は果して如何なるものなりしやをも古生代に遡りて之を紹介せんことを力めたり、故に小中學生諸君に取りて動物に對する趣味と知識とを養ふの好指針たるのみならず、又小中學校等に於ける教授用の參考書として最も適當なるものなり

發行兼發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 新橋堂書店
振替東京二百番、電話新一九九一番

大正元年 當用日記

大正元年七月卅日より十二月卅一日に至る

大正元年の日記は大正元年の日記帳を以てせよ!!!

今や國家多事各人が日記帳にペンを走らすべき事件感想等多々あらん――此際此時筆を改め心を新たにし以て日記を大正元年最初の日より始めよ

紙質の善良なると裝訂の堅牢なるとは本日記帳の特徵なり!!!

定價卅五錢●郵税金六錢

東京市銀座大通新橋際 新橋堂書店
電話新橋一九九一
振替東京二〇〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田岡嶺雲先生 譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也 本叢書は此要請に應じたるもの

●全十二冊完成 總クロース堅牢美本
原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者
●内容裝釘等の詳細見本は郵券二錢を要す

- 第一編 和譯老子莊子 正價壹圓 郵稅拾貳錢
- 第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
- 第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
- 第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵稅拾錢
- 第五第六編 和譯史記列傳 上下二冊 正價各一圓卅錢 郵稅各拾貳錢

〰〰〰〰

- 第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵稅拾錢
- 第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
- 第九編 和譯墨子列子 正價壹圓拾錢 郵稅拾貳錢
- 第十第十一編 和譯春秋左傳 上下二冊 正價各一圓卅錢 郵稅各拾貳錢
- 第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵稅拾四錢

田岡嶺雲先生著（再版）

數奇傳

序文 三宅雪嶺、戶張竹風、藤井紫影、河東碧梧桐、國府犀東、笹川臨風、大町桂月、堺枯川、泉鏡花、德田秋聲、藤田欝峰、白河鯉洋、佐々醒雪、鹿島櫻巷、正岡藝陽、千葉秀甫、

◎批評◎

『譯文の簡淨、註解の明晰、亦嶺雲に非ざれば做し得ざるの特色あり』（東京朝日）。『これならば譯と云ひても原文の妙を損ぜず且つ今の青年にも讀易からん』（萬朝）。『想ふに是れ譯者嶺雲の學と識との他に超卓せるに因るなるべし』（日本及日本人）。

挿畫 未醒 芋錢 月村（計七枚） 總クロース美本 正價九十錢 郵稅十錢

發行所 東京神田雉子町 玄黃社 電話本局二〇九番 振替東京七九九五番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

海軍機關中佐 栗田富太郎君著

旅順閉塞回想談

菊版上製頗美本函入約三百頁
地圖コロタイプ網版十數葉入

定價一圓　郵稅八錢

好評忽ち三版

日露戰役に於ける我が旅順閉塞の擧たる夫のサンチアゴ港口封鎖とともに東西同一轍の壯快事と稱せらる本書は軍神廣瀨中佐と前後二回機關長として閉塞の事に從ひ軍神斃れ身亦重傷を被りたる栗田機關中佐の實歷を直寫せるものにして筆路暢達骨裂け肉飛ぶの慘狀を敍述すること頗る詳明を極む加ふるに袋中挿むところの寫眞版悉く當時苦戰の狀を語らざるはなく日東海國男兒が身を挺して國難に赴くの光景昨猶ほ今の如く一讀爲めに肌に粟を生ぜしむ

▲發行所　東京日本橋區
振替東京一二〇五五
電話本局二一〇〇番
株式會社 啓成社▼

(前付の二)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

太陽

九月一日發行　第拾二號　正價卅錢　郵稅三錢　前金稅共　四冊一圓廿七錢　八冊二圓四十四錢　十六冊四圓六十八錢

先帝陛下の御盛德……三上博士　副島博士

▼先帝陛下の御遺訓……
▼明治聖代の終焉　淺田江村
▼歷代の宮內大臣　南木摩天樓

□試驗廢止問題　山本良吉
□都市の經營　谷本博士
□追貝紀游　遲塚麗水

□新來思想と歷史思想との衝突　藤井健治郎
□地學者の觀たる英領印度　橫山博士
□教育の權威と教員待遇　建部博士
□先帝陛下を拜し奉たる折の感想　黑板博士
□維新志士と霞浦　橫山健堂
□伯林の女傑ハイル夫人を訪ふ　遠藤博士

▼隈伯時感(八)　大隈伯爵
▼氣まぐれ日記(三)　內田魯庵
▼桃山の沿革　記者

□小說工場主　後藤宙外
□小說海邊の町　長田幹彥
□小說兄弟　近松秋江

■陸海軍大臣に武官專任の可否　尾崎行雄、岡崎邦輔、鎌田榮吉其他諸氏談

東京　博文館　本町

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

Digitized by Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

鍾淵紡績株式會社 第五拾壹回決算報告

○貸借對照表(省略)

損益計算

一總收入金	貳八、貳六貳、四五四、參六八
一總支出金	貳六、七四〇、九〇六、四壹〇
差引	壹、五貳壹、五四七、九五八
內	
固定資産償却金	參〇〇、〇〇〇、〇〇〇
再差引 當期純益金	壹、貳貳壹、五四七、九五八
前半期繰越金	八八九、參貳四、七八四
計	貳、壹壹〇、八七貳、七四貳
內	
株主配當金	七〇九、五五七、〇〇〇
但年壹割貳歩(舊株壹株ニ付參圓 新株壹株ニ付金壹圓五拾錢)の割	
當期特別配當金	壹壹八、貳五九、五〇〇
但年貳歩(舊株壹株ニ付金五十錢 新株壹株ニ付金貳拾五錢)の割	
配當準備積立金	壹〇〇、四七參、〇〇〇
諸種積立金	壹〇〇、〇〇〇、〇〇〇
使用人病傷老衰退職恩給及職工幸福増進資金	壹〇〇、〇〇〇、〇〇〇
役員賞與金	六〇、〇〇〇、〇〇〇
後期繰越金	九貳貳、五八參、貳四貳

右報告候也

明治四十五年七月

東京府南葛飾郡隅田村

鍾淵紡績株式會社

倍大好評再版!!

島村抱月氏序
吉江孤雁跋

ビョルンソン氏著
矢口達氏譯

アルネ

四六判洋裝美本
紙數約三百頁

正價金六十五錢
郵稅金八錢

○世界の大文豪新國民文學の第一人者ビョルンソン氏の大傑作小說『アルネ』!空想に富んだ少年アルネの生涯!緑の野、雲の山にアルネは何を歌つたか?何を思つたか?清新にして健全なる絶好讀物として御奬めします。

○本書一度出て、新聞雜誌筆を揃へて激賞措かず近來出色の好著なりと絶叫せり、

批評摘載

讀賣新聞曰く『雨の日に「アルネ」の如き小說を讀むは、言ひ知られず細緻なる音樂の快感を生ず、極めて美聲を以て艶物の長きサワリを聽きつゝ、玩味するが如し。「アルネ」の譯文の婉曲にして流麗なる吾輩をして、卷を措くことを知らざらしめ、讀了する間を、吾書齋の雨に封鎖せられたるを忘らしめたり……』(横山健堂氏)

發行所 東京市小石川區高田豐川町 新陽堂
振替口座東京一五五七〇番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

三叉竹越先生著

惜春雜話

近時青年論の出づること雨後の筍の如くなれども多くは僞君子の虚高か道學先生の出來ない相談のみ此虚僞、誇衒なる氣風に激する所ありて、此書出づ其眞氣、溫味、恰かも嫋々たる一道の春風の吹き來るが如し

人、草木にあらず人生、牢獄にあらず、苟も高尚にして意義ある生活を送らんとする青年、紛々たる青年訓を棄て、、此書を讀まざるべからず

（定價壹圓貳拾錢　郵税小包八錢）

東京牛込拂方町　二酉社　振替口座四七一〇

信用なき店舗又は卑猥なる賣品の廣告掲載謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

戰記文學の白眉

▲英文肉彈　第九版
本田増次郎、ミスベーコン共譯
▲定價壹圓　送料八錢

▲隨想錄　第十三版
新渡戸博士著
▲定價壹圓　送料八錢

元帥陸軍大將公爵大山巖閣下題辭
陸軍大將伯爵乃木希典閣下題辭
伯爵大隈重信閣下序文
米國前大統領ルーズベルト氏書簡

天覽 肉彈

陸軍步兵大尉 櫻井忠溫著

一名旅順實戰記
定價金七拾錢
郵送料八錢

肉彈は英、露、獨、佛、伊太利、瑞典等の各國語に飜譯せられ其名聲歐米の文壇を震撼す

▲校訂略本八犬傳
曲亭馬琴著◎櫻井鷗村抄
▲全一冊讀切
定價壹圓貳拾錢　送料八錢

▲歐洲見物　▲第七版
櫻井鷗村著
定價壹圓七十錢　送料十二錢

東京麴町二丁目 ていび丁未出版社 振替東京七八四七 賣捌 全國各地書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

南條博士著

安心錄

物質の厭迫と信仰心の缺乏とによりて殆ど不安の極に達せる現代人は本書によりて始めて精神上の新光明を認め、人生の安全なる休息處を得たる者と謂ふべし。蓋し絶好の修養書たり。

菊判天金付頗美本函入

正價壹圓拾錢 ◉送料八錢

岡谷繁實翁著

袖珍名將言行錄

袖珍美本 拾冊各冊 六拾錢 送料六錢

萬世不朽の名著。歷史家の好參考書

内海文學士著 訂正增補 **文章十講** 正價壹圓廿錢 送料拾二錢

野上、水島 野村 共編 **和英作文辭典** 正價六十五錢 送料八錢

尾池宜鄕著 **豐太閤** 正價壹圓拾錢 ◉送料拾錢

市原降作著 **屋島と壇の浦** 正價八拾錢 ◉送料八錢

三博士閲 三學士編 **最新術語辭典** 正價貳圓廿錢 ◉送料拾五錢

牛空著 忽五版 **名士の片影** 正價四拾五錢 ◉送料六錢

彈棊著 未醒畫 滑稽百出 **番茶一杯** 正價三拾五錢 ◉送料六錢

東京本鄕區森川町 振替一九四六七番 **文成社** 送料不用

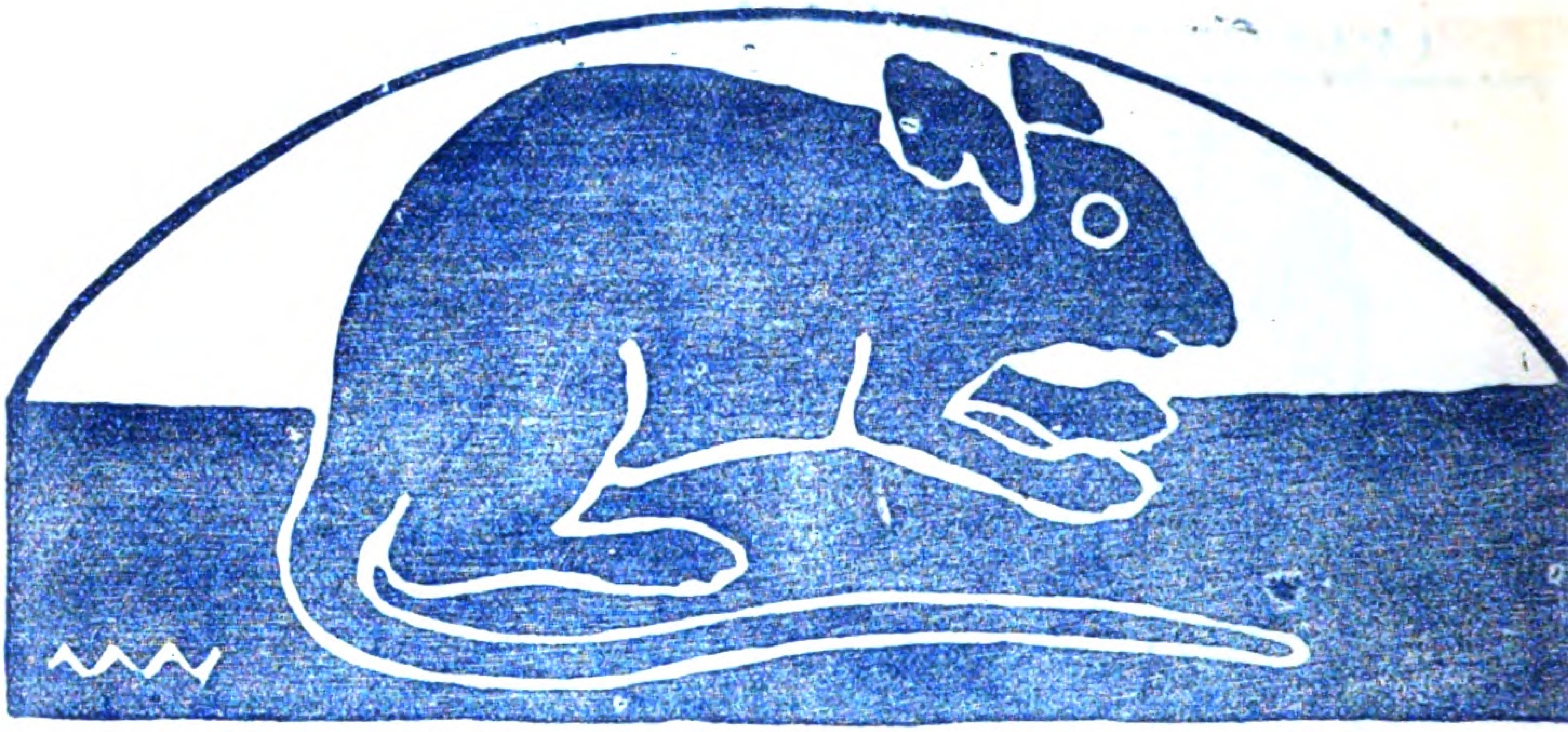
信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



中央公論第廿七年第九號秋期大附録號目次

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



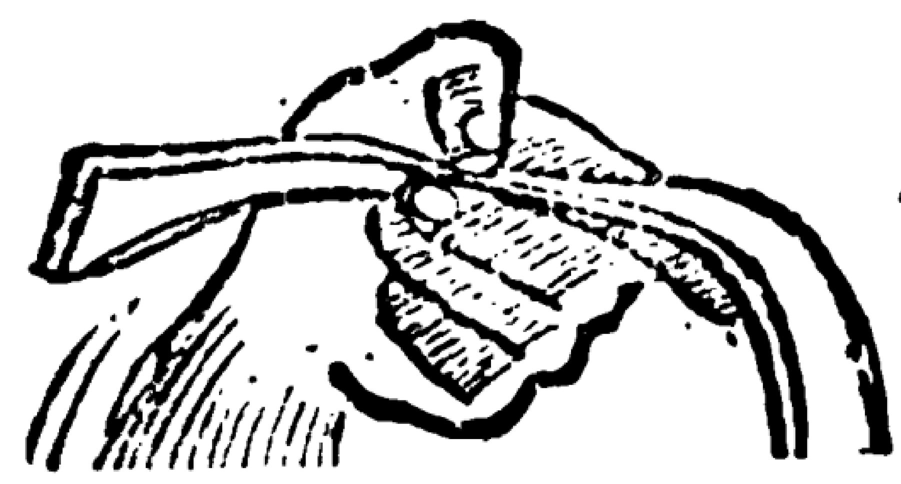
Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



外人の見たる日本人の不作法（朝日新聞所載）



日本の紳士について最もおどろき最も不快を感ずることは髯をそらない事である西洋の紳士は髯のそるべき部分は毎日そる毎朝必ずそる、病氣でなければ必ず朝にそると朝飯よりも確かである、一日そらないで決して他人は愚か、父母兄弟にも顔を合せない、（一家内であれば朝だけは許しておくが、晝飯の時にまだ剃らずに居ると父母兄弟でも其人を叱りつける）、然るに日本の紳士中には毎朝剃つたらしい顔を見ることは實に少ないのである、實に外國紳士の驚くことは、宮中に出入する時にもまだ髯を剃つて居らないことである、日本學生が更に最も不潔な顔をして居るので、西洋人の教師はその學生の顔をながめながら講義するのが苦痛でたまらぬ、西洋では下等社會の外の人は必ず毎朝剃る

オートストラップ自動研き安全剃刀

革砥及換刃付壹組　金拾壹圓五拾錢

送料　内地金拾二錢　臺、樺、朝、滿　金三十錢

東京・大坂・京都

丸善株式會社

信用ある店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

CAROLUS-DURAN



"PORTRAIT DE MADEMOISELLE S..."

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我が大帝を奉頌す

（一）

大帝は七月卅日午前零時四十三分終に崩御し玉へり、六千萬の臣民が神に祈り佛を拜して其の御平癒を願へるも効なかりき、九重の御奥は全く愁雲に蔽はれ、南は臺灣より北は朝鮮樺太まで、歔欷の聲地を動かせり、吾人また言はんと欲していふ能はず、悉さんと欲して悉す能はざる也。

然れども皇祖皇宗の威靈の永く天に在はすが如く、我が　大帝の大御靈も猶ほ長へに活きて、永く皇家と國家とを護らせ玉ふべし、乃ち其の崩御を哀むと雖も、　新帝を奉戴して以て國家に奉公し、業を勵み產に努めて益々　大帝の鴻圖を恢弘せんとは、吾人臣子の本分也、依て　大帝の御遺業を追懷し奉つりて以て其の万一を彷彿し、併せて後の奮勵に資せんと欲す。

吾人は敢て　大帝と稱し奉つる、然り、大ナポレオン、ピートル大帝、フレデリック大王の大と同じくして、更に尙ほ大なる天皇といふの意味也。

（二）

伏て惟みるに、　大帝の天資は實に英邁絕倫に在しき、御大祖父光格天皇を始め奉つり、御父孝明天皇も御氣象傑出し玉ひて、其の御容貌も極めて魁梧に在はせしと申す、積年王室の式微を嘆かせられ、

東 98337

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

密かに御恢復の御志あり、幕府は深く之を畏憚し奉つれるも、勤王の心敦き志士は乃ち大に倚賴し奉つれりといふ。

大帝は其の血統を繼かせ玉ひ、御容貌御氣質共に光格孝明の兩帝に肖させ玉へるのみならず、御母系たる中山家も、代々英異の人物を出し、御生母一位局の如きも、亦實に稀に見る賢婦人なりき、故に　大帝御幼時には、一位局能く之を保育し奉つり、常に『伊勢大神宮の御系統にして、一天萬乘の君たらせ玉ふ御方なれば』とて、文武の御教養に寢食を忘れきといふ、殊に强弓を以て海内無双と稱せられ玉ひし孝明天皇には　御射的每に　大帝に御矢拾ひの役を仰せ付けられ、曾ては從容として『朕の一代こそ幸ひに斯く的矢を射つれ、御身の御世ともならば、眞の弓もて敵を射玉ふ必要もあらん』と仰せ聞けさせ玉へりといふ、　大帝の御幼時既に武を以て　帝業を成すの御志萠せしと推知し奉つるべし。

御即位の後は、侍從として村田新八、高島鞆之助、山岡鐵太郎の如き豪傑力を協せ、英武一方に輔導し奉つれるのみならず、直諫强諫、死且つ避けざるの氣魄を以て、渾身を捧げ奉つれるあり、御學問の師としては、君を堯舜に致すがため寢食を忘れ、王佐を以て自から任じ、一言一行必らず名君賢主と成し參らせんと神明に誓へる元田永孚の如きあり、和歌の如きにすら、剛直正毅の人々ありて苟くも師道を枉げざりき、尋常人と雖も如何ぞ玉成せざらんや、然かも況んや　大帝の如き天稟極めて英明に渡らせ玉へるをや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（三）

大帝の御氣質は、實に剛毅、強忍、儉素に於て殆んど群を絶し玉へるが如し、明治三十七年末、糖尿病に罹らせ玉ふや、侍醫に命じて深く之を秘せしめ玉へり、蓋し御惱の事世に公けにせらるれば、國民の憂慮し奉つる結果、竟に海陸出征の將士をして意氣を沮喪せしむるの虞なしとせざれば也、當時先帝は『朕少しく風邪に罹りても深く秘し置けよ』と宣はせしといふ、故伊藤公曾て曰く『陛下御學問所には暖爐を用ゐさせられず、又煽風器等もあらず、故に冬時御下問に奉答するため三十分以上君側に侍立すれば、余は大抵風邪に冒されたりき、盛暑は日光の横に身を射て、流汗淋漓たるも亦忍ばざる可らず、然かも至尊は御平然として在はすを常とす、其の御強健にして而して剛毅なる、實に想像の外にあり』と

大帝の御質素なりしも亦意想の外にあり、皇室式微の後を承けて、御幼時極めて御不自由に馴れさせ玉へるのみならず、儉德を以て民を率ゆる御志高く、外臣の延見、臣僚の拜謁等には、皇室として相當の御儀式を具へさせ玉ふと共に、宮殿また自ら之に適へるも、大帝御親から奉じさせ玉ふとは極めて稀薄にして、御常の御坐の間の如き、極めて質素にして何等の裝飾なく、電燈の備すらあらずして、臣僚等も多く驚けりと聞く、大に文武を擴張して以て國運を恢弘する御志厚きがため、御食住の如き殆んど御心に掛けさせ玉はざりしもの乎、大帝の如きは實に躬を以て民を率ひさせ玉へる也、此の偉大なりし御人格を拜する我が國民は、今にして深く反省する所莫かるべからざる也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

君主はまた仁慈の情深からざる可らず、然かも兒女の態を學びて宋襄の仁に流る可らず、大帝日夕和歌を詠じて、杏嗟咏嘆を國風に發し玉ふ、實に詐はらず飾らざる大御心也、況んや其の御製なるもの總て深く秘して、毫も世に示すの御心なかりしをや、試みに其の二三を漏れ承はるに

とこしへに民安かれといのるなる
　我世をまもれ伊勢の大神

四方の海みな同胞とおもふ世に
　など波風の立さわぐらん

大御心の臣民と人類とにある斯の如く深く且つ厚し、大帝の如きは仁慈博愛、自然に大君たる御德を有し玉へりと謂べし。

臣僚の御裁可を奏請するや、細かに御目を透ふさせられ、裁可すべきは之を裁可し玉ふも、然らざるものは唯だ永く御手許に留め置かせ玉ふ、葬儀令陵墓令の稿成るや、宮内大臣御裁可を請ふ、而して久しく得ず、臣僚等大帝の御威光に打たれて多くは之を再びするを得ず、然れども事の重要なるがため、恐懼しながら再び御裁可を奏請するに及び、『尙ほ能く熟考し置く』と宣はせしのみ、御一生遂に御裁可なかりき。

英國のアーサア、オブ、コンノート殿下ガアタア勳章を捧持し至るや、同盟國に對する誼として、時の總理大臣外務大臣と共に大帝の殊に橫濱まで之を迎へさせ玉はんとを請ふ、大帝宣はく『可

也」と、然かも行幸の仰せ出されなし、大臣屢々之を奏請するも、唯だ「可也」と宣ふのみ、玆に於て故伊藤公に計りて御裁可を請はんとす、公以爲らく、必らず之を得んと、自ら參內奏請す、大帝また「可也」と宣すのみ、公仍て滔々として其の趣意を反覆す、大帝手を揮つて宣はく「卿の論甚だ永くして時既に過ぐ、一先退去せよ」と、公惶惑して退出す、更に山縣公に求む、公曰く「余また同一の勅答を拜せんのみ、然れども御勘氣を蒙むる覺悟を以て要領丈けは得參るべし」と、意を決して參內す、大帝宣はく「英國皇族來るべくして來るのみ、乃ち其れにて可なるにあらずや、殊に先例を破るは何の故ぞ」と、公また恐懼し、退きて之を閣臣等に告ぐ、玆に於て總理大臣外務大臣意を決し、辭表を懷にして更に最後の奏請を爲さんとす、侍從長等密かに其の狀を聞知して奏上する所あり、兩大臣拜謁するに及び、大帝先づ宣はく「請ふ所によりて朕は新橋停車場まで赴くべし」と、兩大臣始めて意を安んじ、辭表を捧ぐるに至らず、拜謝して去れりといふ、以て大帝の御氣象を推察し奉つるべし。

大帝の器宇恢弘、實に世界を狹しとし玉ふに似たり、若し偉大なる賢臣名將ありて能く皇謨を贊襄し奉つらば、其の御事業は更に或は鴻大雄壯なりしなるべし、憚かりなく之をいへは、明治輔佐の臣僚は、大帝に比し奉つりて頗ぶる下る所ありしが如し、吾人は以て遺憾とせざる能はざる也。

三條、岩倉、西郷、木戶、大久保、伊藤、山縣、大山を始め、川上、兒玉、桂、西園寺諸卿の如き、洵に王佐の材にして、其の君臣の遭逢、眞に千古稀に覩る所たりとす、然れども此の諸卿にして、若

し更に遙かに雄才を懐き、其の智勇辯力を傾盡して以て　大帝を輔佐し奉つらば如何、吾人は　大帝の御天資を拜して多くの遺憾を覺ゆ、而して我が　大帝の大や、是に由て益々明か也。

（四）

大帝の御偉業を總評し奉つれば、其の前半生は實に統一にありき、而して後半世は實に統一の結果たる國運伸張にありき。

幕府既に大政を奉還せるも、部下尚ほ不逞の藩將あり、士人あり、乃ち斷じて錦旗節刀を賜はりて之を討伐せしめ、　大帝また都を東京に進めさせ玉ふ、是れ實に天皇御親征の雄圖に出づ

東北平定せらるゝも、尚ほ藩あり、藩に藩主あり、臣從あり、朝命動もすれば洽く行はれざらんとす、玆に於てか版籍還附を斷行せしめ玉ふ、今明治元年五條の御誓文と併せて廢藩置縣の勅詔を玆に奉揭せん。

一廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ

一上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ

一官民一途庶民ニ至ルマテ其志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンヿヲ要ス

一舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ

一智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ノ道ヲ立テント欲ス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

慶應四年（明治元年）三月十四日

○

朕惟フニ更始ノ時ニ際シ内以テ億兆ヲ保安シ外以テ萬國ト對峙セント欲セバ宜シク名實相副ヒ政令一ニ歸セシムベシ朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聽納シ新ニ知藩事ヲ命ジ各々其職ヲ奉ゼシム然ルニ數百年因襲ノ久シキ或ハ其名アリテ其實擧ラサルモノアリ何ヲ以テ億兆ヲ保安シ萬國ト對峙スルヲ得ンヤ朕深ク之ヲ慨ス仍テ今更ニ藩ヲ廢シ縣トナス是務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ有名無實ノ弊ヲ除キ政令多岐ノ憂無カラシメントス汝群臣其レ朕カ意ヲ體セヨ

明治四年七月十四日

次て教育武備の基礎を確立し、先づ小學校令を定めて國民教育の制を設け、大中學校を置きて教育系統を明らかにし、又徴兵令を布きて全國皆兵の主義を實行せしめ玉ふ、是れ實に偉大なる改革にして、國民啓發の方針、國家組織の體制茲に定まれる也、後に軍人及び教育の基礎として賜はれる勅書を茲に奉掲せん

一軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスベシ

一軍人ハ禮儀ヲ正シクベシ

一軍人ハ武勇を尙ブベシ

一軍人ハ信義ヲ重ンズベシ

一軍人ハ質素ヲ旨トスベシ

明治十五年一月四日

○

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ茲ニ存ス爾臣民、父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重ンジ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト共ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

明治初年の政治改革は、主として大化改新の舊制を追はれ、別に泰西の法律を參酌して刑法治罪法等を定められしが、新たに完全なる法典を作り、又明治十八年官制を改正して始めて宮中府中の別を明らかにし、内閣官制を立て、又公侯伯子男の五爵制を定め、明治二十二年二月十一日には憲法を發布

し、及び皇室典範、議院法を定め、翌二十三年七月總選擧を行ひ、十一月貴衆兩院を開きて、茲に立憲政體を創設し玉ふ。

思ふに國民の皇室に忠なる、古來然り、然れども政權時に覇府に移りて、皇室と國民との間に一大鴻溝あり、皇室の式微殆んど言語に絶したりき、大帝の御治世に及び、大權を恢復し、文武を總攬し玉ふと共に、國民を啓發して專ら愛國忠君の思想を涵養せしめ玉ふ、即ち國民皆皇室を中心として結合し、茲に前古無比の統一を得るに至りし也、思へ、大帝の病ませ玉ふや、臣民皆神佛に祈りて御平癒を願はざるなく、其の忠誠の旺んなる、實に曠昔になき所ならずや。

凡そ國家組織の體統は、家族の制に相似、若くば其の制を擴張するを例とす、我が國にては往古カバネの制あり、氏の長者は其の大なる氏族を統御する大勢力あり、而して天皇は天照大神の御直系とし て此等總ての氏の長に君臨し玉ふ、隨て君臣の分始めより定まりて、臣民國土皆皇家の御領たりき、大帝に至りて此の國體に則り、以て大憲を發布し玉ふ、而して大帝の偉大なる御人格と、御仁德とは、深く國民を信服せしめて、益々其の統一を鞏くし、東西無比の國體は金甌無缺、世界何ものも以て之に加ふる能はざるに至れり。

（五）

大帝の御人格と御經綸とに由て、幸ひに統一の事成るや、發して二大戰役となり、條約改正となり、朝鮮併合となれるは、洽ねく世の知る所の如し。

明治六年以來、征韓の議屢々起れり、然かも抑へて發せざりしは、國力未だ充實せざるものありたれば也、丁汝昌北洋水師を率ひ來りて、頗ぶる我が上下を凌辱せるも、敢て動かざりしは他なし、準備未た整はざるものあれば也、然れども清國の背後にあつて煽せるを恃める朝鮮の非禮より、延きて清國の亡狀其の極に達するに至て、二十七八年の征清役は起れり、其の結果全然清國をして手を朝鮮より引かしめ、臺灣を納れて我が版圖と爲さしめたりき。

北清事變起るに及びて、我れは列國の依頼により、兵を出して天津北京を討平し、以て列國公使を兇徒の包圍より救解したりき、之によりて我が軍の列國兵に對する實力明白となり、東洋問題に對しては、日本を度外するの非なると、始めて列國に領會せられ、其の結果、曾て光榮ある孤立を守れる英國をして、來りて我と同盟せしむるに至れり。

朝鮮尙ほ動もすれば露國に賴りて禍亂を作さんとし、而して露國が清國の積弊に乘じて東洋に進出し、其の凶焔將さに我が邊境を焦さんとするに及び、遂に卅七八年の征露戰は起れり、其の結果として樺太の南半を收め、露國をして全く手を朝鮮より引かしめしのみならず、南滿洲に於ける露國の利權を擧げて悉く我れに移さしめ、且つ代りて遼東半島を租借するに至れり。

一昨年は又竟に朝鮮を併合して、純然たる我が領土としたり、神功皇后の三韓を征し玉へるより、列聖皆朝鮮の統治に窘められ玉はざるはなく、雄略、推古の兩帝に至ても、尙ほ朝廷の煩累甚だしく、政府の起覆一なるを得ざりき、唐大に與つて朝鮮を併合せしより關係一び絕え、後に豐公の征韓

により て深く恨を結べるが、明治六年以來朝鮮は實に我が政治上の大案件となり、千餘年來の宿題となれるに、大帝遂に群議を排して其の併合を遂行し、且つ恩武竝臻るの經綸を以て彼の人民を綏撫し玉ふ、是れ亦實に我が有史以來未曾有の偉業なりとす。

曩には條約を改正して治外法權を撤去し、後更に再び改正して、全く關稅權をも收めて、茲に純然たる對等條約を列國と締結するを得たり、幕末列國に强ひられて訂したりし不對等條約の一掃せられしは、國の名譽に於てまた特筆すべきものたらずんばあらず。

貧富の懸隔彌よ甚だしくして、窮民の窮洵に憐れむべきものあるや、大帝は昨年の紀元節を以て内努の費百五十萬圓を下して施藥救療の資と爲さしめ玉へり、其の詔勅に曰く、

朕惟フニ世局ノ大勢ニ隨ヒ國運ノ伸張ヲ要スルコト方ニ急ニシテ經濟ノ狀況漸ク革マリ人心動モスレハ其歸向ヲ謬ラムトス政ヲ爲ス者宜ク深ク此ニ鑒ミ倍々憂勤シテ業ヲ勸メ敎ヲ敦クシ以テ健全ノ發達ヲ遂ゲシムベシ若シ夫レ無告ノ窮民ニシテ醫藥給セス天壽ヲ終ルコト能ハサルハ朕カ最モ軫念シテ措カサル所ナリ乃チ施藥救療以テ濟生ノ道ヲ弘メムトス玆ニ內努ノ金ヲ出シ其資ニ充シム卿克ク朕意ヲ體シ宜キニ隨ヒ之ヲ措置シ永ク衆庶ヲシテ賴ル所アラシメムコトヲ期セヨ

明治四十四年二月十一日

卿といふは即ち時の內閣總理大臣桂公のこと也。

文武仁德、實に到れり盡せりといふべし、之を偉大なる天皇と稱し奉つる、世界一人の異言者な

きや必せり。

(六)

神武帝西陲より起つて中國を平定し、皇基を肇定し玉へるも、憚りなくいへば王化は尙ほ多く鈴鹿の關以東に及ばざりしが如し、信州に諏訪あり、下總常陸に香取鹿島あり、越後に彌彥あるより考ふるに、全く及ばざりしにあらざるも、唯だ洽ねからざりしのみ、景行帝日本武尊をして東夷を征せしめ玉へるも、白河關以東に出でしや否やは疑問也、桓武帝安倍比羅夫をして遠征せしめ玉へるも、北海道は尙ほ草莽なりき、覇府以來德川氏の末に至るも、北海道の西部僅かに治化に浴せしのみ、樺太には我が士人行きて領土の木標を建てしも、千島は漠焉たり、琉球は薩摩藩の隷屬といふも尙ほ曖昧にして、小笠原島も亦同じ、然るに 大帝の御代に至り、千島と樺太とを交換し、米國の異議を排して小笠原群島を我が版圖と定め、清國の抗議を斥けて琉球を我が領土と確定し、次で臺灣を併せ、樺太南半を取り、竟に朝鮮を併合し玉ふ、試みに幕府の末造まで、其の治化北海道に及べりとするも、其の土地面積は實に下の如きのみ。

本州	一四、五七一方里一二	隠岐	二一方里八九
四國	一、一八〇方里六七	淡路	三六方里六九
九州	二、六一七方里五四	壹岐	八方里六三
北海道	五、〇八三方里八七	對島	四四方里七二
佐渡	五六方里三三	計	二三、六二一方里四六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然るに　大帝の御代に至つて新たに加へて以て治化を布き玉へる新版圖の面積は左の如し。

琉球	一五六方里九一	彭湖島	七方里九九
小笠原	四方里五〇	樺太	二、二〇八方里九二
千島	一、〇一一方里四九	朝鮮	一四、一二三方里〇〇
臺灣	二、三二四方里一一	計	一九、八三六方里九二

若し北海道を以て　大帝の時に初めて王化に沾ひたるものとせば、其の面積は實に從前の二倍以上なりとす。

更に人口の點より視るに、推古帝の御代には四百九十八萬八千八百四十二人、聖武帝の御代には八百六十三萬一千七百七十人に過ぎず、大帝の大祖父光格帝の御代には二千五百六十二萬一千九百五十七人、御祖父仁孝帝の御代には二千七百二十萬一千四百人、御父　孝明帝の御代には二千六百九十万七千六百二十二人なりしに、　大帝の御代に至ては明治五年に三千三百十一萬八百二十五人なりしもの、四十年後には實に六千五百九十七萬七千七百八十二人となりて、殆んど其の二倍に上る、國庫歳入が明治初年には三千餘萬圓に過ぎず、貿易また輸出入總額二千六百餘萬圓に過ぎざりしに、今や歳入八億を超え、貿易九億六千百餘萬圓に上りしに視るに、其の富度は正さしく土地人口の增加以上なりと謂ふべし。

單に此等の數字よりいふも、我が　大帝の偉蹟や實に明著也、天下また誰か異言を挾まんや。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（七）

大帝の御人格は完全也、帝王として實に理想的也、常に『朕は天子也、朕此の事を爲さば四民如何』と宣はせ、常に民のため御身を犧牲にし賜ふの概あり、吾人は古來未だ斯の如き仁君を視しとあらず。

大帝の御事業たる國の統一は、民と共にし玉ふ大御心也、大に皇基を恢張して皇威を六合に輝かし玉ふと雖も、臣民に賜ふに憲法を以てし、自治を以てし、參政の權を以てし玉ふ、專制に偏せざるは勿論、また苟くも共和民主的なるを許させ玉はず、御志實に遠くして而して高し、其の御事業の發して大戰役となり、大に國運を擴張せる素より其の所のみ。

大帝の御事業は又世界的也、東洋の形勢を一變して、英佛獨露をして其の政策を變更せざるを得ざらしめ、就中英をして進んで同盟を締結し、以て世界平和の綱紐を緊くし、且つ波斯、土耳其、支那をして、我を推して立憲政治の模範と爲さしめんとす、其の風動する所實に大なりと謂べし、之をペートル、フレデリック、ナポレオンの諸大帝王に比して果して如何ぞや、臣民が永く大帝を思慕し奉つりて永へに其の御英靈に倚らんとする洵に宜也。

中央公論



第二十七年第九號
秋期大附錄號
第二百八十二號

內大臣論

(一)

七月六日帝都を辭して、其の廿一日露京に着せる桂公は、先帝御大患の報を耳にして、止まると僅かに一週日、匆皇として廿八日出發し、八月十一日朝歸京して即日參內せるが、翌々十三日內大臣兼侍從長に親任せられて、全然宮中の重臣となれり、身世の變化の著大なる、實に其の頂點に達せりと謂べし。

彼れは近時我が政事家として重きを中外に置かるゝに至り、聲望幾んど一代を傾むけんとす、然かも政事家として群心の應酬に努むる結果、鷄鳴狗盜の徒をも近けて平然たりしが如く、河海は細流を擇ば

ず、泰山は土壤を讓らず底の心事を以て、牛溲馬勃敗皷の皮と雖も倘ほ其の利用を逸せざらんと欲せしに似たり、政事家として大を成すに於て、素より然らさるを得ざりしのみ。

吾人の了解する所によれば、彼れは寧ろ律義にして且つ所謂涙脆き資質なるが如し、然れども多年政局に當つて、上は元老より抑へられ、下は議會黨人等より壓迫せらるゝに及びて、其の先天的智慧は大に發して、機敏縱横、能く上下の窘迫に對抗するに至れり、蓋し彼れは故川上、兒玉兩將軍と併せて、好個の武將たるがために、其の智略、忽ちにして玆に至れるならん、然かも彼が比較的後進を以て、現に其の初度の內閣には、第三流內閣の目を受けしに拘らず、日英同盟を締結し、日露戰役を終始して赫々たる功業を樹てしに止まらず、後には條約を改正し、朝鮮併合をも斷行し、且つ困難なりし財政に所謂大繰延なるものを行ひ、比較的人望を博し、身もまた大勳位公爵となりて榮爵人臣の極に臻りしがために、頗ぶる世の嫉妬を招き、殊に政敵よりは畏るべき咒詛を蒙むりたるが如し。

殊に同業者間にすら嫉妬排擠を事とし、犬の病み猫の斃るゝにさへ仰々しき筆を揮ひながら、苟くも他新聞の善行美事といへば、聾の如く盲の如く、殆んど古の御殿女中と彷彿たる新聞記者先生よりは、彼れは最も切烈なる咒詛を浴せらるゝを免がれざりき。

然るに今や卒然として宮廷に入り、新帝に常侍して輔弼の重臣となる、殊に彼の政客又は新聞記者等に取て、想像も着かざりし所なるに於て、其の反感は頗ぶる大に、咒詛は一齊に彼れの滿身に浴せ掛らるゝ也。

（二）

彼れ自からは辯じて曰く『先帝崩御し給ひ、殊恩未だ萬一を酬ひ奉つるに至らず、是より一身を新帝陛下に捧げて輔弼の重職を盡すべし、余は實に一び死して而して更に蘇せる也、曾て軍人として政治に容喙せざりしが如く、また元の軍人に立戻るべし、』と

吾人は兎にも角にも彼れ自身の言ふ所を信頼するの外なし、思ふに彼れ政事家として既に赫々の功名を立て、位また人臣を極めて、幾んど別に望む所あらず、若しありとすれば君國の事默視するに忍びざるがために、敢て最善の力を盡さんとするのみ、支那問題の如き、彼れ始めより小ならざる抱負ありと稱せらる、之に向て最良の解決を下さんと欲し、私かに瘙痒の感に堪えざりしならん、然れども之を除きて彼れ豈多くの希望を持たんや、彼れが歐洲に向ふの前、毛利公邸に於ける彼れの同郷人の送別會に臨むや、坐ろに君恩の渥きに感激し、涙を垂れて皇室のため一身を捧ぐべしと言ひき、既にして旅中突如として天子御大患の報に接し、匆皇歸途に就けるに、また幾くならずして崩御の凶報に接す、彼れが心中の悲痛は想像に餘りあり、歸京の日、直ちに參內して先帝の御遺骸を拜するや、彼れ歔欷して起つと能はざりしといふ、此の悲痛の感情の極まれる時、新帝踐祚して老臣の常侍輔弼を要し給ふに遭ふ、諸葛孔明にあらずと雖も、成敗利鈍を測らずして、先帝に仕ふる所以を以て新帝に事へざる能はざる也、況んや彼れが殊恩を蒙むれるの厚き、孔明以上なるをや、又況んや彼は日本國民として先天的に忠誠の至情の敦きものたるをや、彼れが從來の貪緣羈絆を擧げて一切擺脫し切斷し去り、死して而して復た活

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ける志を以て、新帝のために一身を捧げんといふ者、素より其の所のみ。

且つ憚かりなくいへば、新帝陛下御見學として地方を巡回し給へると先帝に過ぐ、故に御見聞に於ては或は遺憾なからん乎、然かも萬機を親裁し、政務を總攬し給ふに於て、御經驗乏しきがために、或は多くの御不便を感じさせ給ふべき乎、然れども日本の國體として、眞實主權者たる天皇が徒らに盲判を捺し給ふべきに非ず、政治上の責任は素より輔弼の國務大臣之を取るべきも、國務大臣を監督して大なる過失なからしめんと、乃ち我が天皇の御德にして、また實に皇家と臣民とのためならずんばあらず、新帝陛下新たに大統を承け、先帝の偉大なる皇謨を紹述し給はんには、實に大なる御決心を要す、露骨にいへば徒らに忠愨恪勤のみなる人物を常侍せしむるも、幾んど事に益なからんとす、是れ中外の政務に通曉して大體に老熟せる重臣を常侍せしむるを要する所以にして、彼れが其の任に當れる、また實に其の人を得たりといはざる可らざる也。

吾人は彼れの心理の一變し、全然政治上の關係を斷つて新たに宮廷常侍の重臣となれるを信じ、爾後其の心を一にし意を專らにして、以て偉大なる帝德を完成し奉つらんとを切望す、其の功あれば之を至尊に歸し奉つり、過あれば則ち自から居り、曾て功名の世に聞ゆるなし、吾人は乃ち彼れのため頗ぶる氣の毒の感なき能はずと雖も、彼れや政事家として幾んど成すべきを成し、達すべきに達せり、今後は宜しく心身を併せて全く新帝陛下に捧げ奉つりて、以て王臣蹇々の節を致すべきのみ、然らば則ち彼れや先帝の忠臣にして、又實に新帝陛下の純臣たるべし、思ふに彼れを識る者は勿論、一般の國民も亦彼れに期待する所是に外ならざるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（三）

彼れの宮廷深く入れるは、政治社會より彼れを亡へる也、伊藤公凶徒の手に斃るゝや、天下擧げて痛恨したりき、彼れにして若し第二の伊藤公たらば、天下また痛恨して、總ての同情を彼れに注ぐべし、唯だ彼れや政治界より去れりと雖も、御璽國璽を尙藏し、詔書勅書を管し、且つ至尊に常侍輔弼する大任に當る、天下の同情之に歸せずして、却つて往々惡罵を浴せらるゝまた已むを得ざるのみ。

然れども能く彼れの心事を解せず、又彼れを奬順して其の大節を全ふせしめんとせず、徒らに惡意を以て之を攻擊するは卑怯也、新聞紙上には某々將軍、某老政事家、黨某首領の名を冠して彼れを難ずるもの多し、人を批評するに其の名を出さゞるは卑劣の極にして、之を掲ぐる新聞紙の無責任もまた極まれり、獨り犬養毅氏と岡崎邦輔氏とが公然其の名を現はして避けざるは稍ゝ男らし、然れども思へ、犬養氏が彼れを目して勢力を宮廷に立て、以て私權を張らんとするものと爲し、宮中府中を混同すと爲し、竟に憲政の危機と爲すは、餘りに黨人根性を丸出しにしたるものにして、氏の心中唯だ政黨あつて國家なき反映に非ざらんや、吾人は寧ろ氏の心事を讀み得て、而して之を憫まざる能はざるのみ、岡崎氏が彼れの新帝に事へて忠誠ならんとするを以て『赤い信女』と做すは警拔也、然れども新たに鰥婦となりて貞女たらんとするものあらば、之を奬めて以て其の節を完ふせしむるこそ君子の事ならずや、冷嘲して以て赤い信女と做すが如きは、寧ろ輕薄なる、蕩兒の事のみ、岡崎氏果して黨人中の輕薄兒乎、非乎

（四）

黨人界に於ては、始め政友會と對抗するがため一黨を組織する計畫ありしが如く、現に國民黨中の多數と無所屬の一部の如きは、政友會中の一角を割取して以て一大團結を成さんと豫期せるが如く、而し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て其の團結の中心に置ける標的が彼れたりしや掩ふ可らず、然るに彼れや忽焉として宮廷に入りて全く政界を去れり、彼等の計畫素より畵餅に歸せざらんとするも得ざる也。

政友會と雖も、西園寺侯萬一の後は如何するや、其の多數は寧ろ彼れを迎えて新首領たらしめんと希望し、密かに其の計畫を怠らざりしに非ずや、思へ、西園寺侯居らず、而して彼れまたあらずんば、政友會は誰人を總裁として、誰人によりて內閣を擔當せんとするや。

西園寺侯に代りて異日內閣を組織するものが、寺內伯なるべきとは、何人も之を認むる所の如し、政友會は黨首なしと雖も能く寺內內閣と對戰し得べし、唯だ寺內內閣を破りたる後を奈何せん。

總じて之をいへば、彼れが去りし後の政界は、一時混沌たるべし、混沌たる後更らに或る發展を觀るなるべし、原內閣松田內閣の呼聲も聞ゆべし、大浦內閣後藤內閣の呼聲も亦聞ゆべし、斯くして漸次舊を送り新を迎へて、政界始めて進步すべし、而して新帝陛下の御宇、更に大に注目すべきものあらん、乃ち彼れが常侍輔弼の効果は漸くにして認めらるべきのみ。

（五）

吾人が政界の混沌を豫想して、敢て一言を禁ずる能はざるは、今や新帝陛下の御宇に方りて、一切既設の政黨を分散し、以て擧國一致の實を擧げんと是れ也、支那問題は實に重大也、我が國運の消長切に之に繫る、大に軍備を擴張せざる可らず、大に政治を整頓せざる可らず、此の時に方つて張家李家の陋見を捨て、敵味方の感情を撤し、元老も貴族も、富豪も、貧民も、皆一致して臥薪嘗膽の精神を以て事に當るを妙とせずや、今日心機を一轉すべきもの何ぞ一の桂太郎其の人に止まらんや、六千萬の國民皆然るべきには非ざる乎、

公論

トルストイ論

中澤臨川

（一）

トルストイが傑作『アンナ、カレニナ』を書き終つたのは一八七六年であつた。彼の生れは二八年であるから、その時が丁度數へ年の四十九歲で、人間の一生の熟する時期だ。それまでと云ふものは、露西亞の金持の貴族の家に生れて、若い時から兩親に別れ、叔母の手一つで育てられて、隨分我儘勝手な生活を送つて來た。大學へ這入つたが、秩序立つた學問を爲たわけでもない、中途で退學して田舍へ引込んで見たり、都會生活を送つて見たり、放蕩のあげ句が借金で首が廻らなく無つてコーカサスへ高飛したり、露土戰爭に從軍してセバストポールの城砦で硝烟彈雨の中をくぐつたりして來た。モードの書いた傳記に恁んな意味のことが言つてある。露西亞の青年は世の中の實務から遠ざかつて育て上げられるばかりでなく、比較的孤獨な田舍生活をすることが多い。それが爲めに彼等はとき〴〵突飛な人生觀を懷くやうになる。玆に一人の人間があるとして、其者を實社界の重ひ桎梏で縛いで見よ。彼は遲々として進むよりほかに途がない。然かし彼の進んだ一歩々々は多大の努力を意味すると同時に實踐的の敎訓に富んでゐる。然るに今若し彼の手足からその桎梏を取り除けて遣るとすると、彼は容易に愉快に順

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

風に乘つて大空の一番高い世界までも昇るてあらうが、實社界の同胞とは沒交渉なとが多かろう。トルストイの心意が他人に影響するよりは、彼自身により多く重要てあつたことも、彼が世間の實踐家の教訓を無視してゐたとも、全く彼の生ひ立ちから來たのであると。この説はトルストイを學ぶ者の皆な頷く所てあろう。鬼に角トルストイは氣儘勝手な少壯年の時代を送つて來た。彼は放蕩の結果の借金を拂ふとよりほかには金の苦勞をしたともなければ、小説の原稿料を受取つた時よりほかには一生に唯の一度も自分の手て稼いだともない。

物質的には斯樣に我儘な生活を送つて來た彼も、天から貰つた異常な才分の有難さには幼少の時から世にも稀なほど眞面目な内面生活を閲みした。自然に發達して囚はれない健全な生一本な精神の發達を遂げた。それが前に言つた『アンナ、カレニナ』の完結に近づいた頃から漸く實を結び始めた。

トルストイの結婚したのは比較的晩年(三十四歳)て、それからと云ふものは家庭の幸福に沒頭して、彼の生涯ての比較的平和な幾年かが續いた。『戰爭と平和』と云ふ大作の出來上つたのは丁度その時代である。世界の文學はこの偉大な怒濤の如きソールの所有者に暫らく平和と快晴を齎らした幸福な結婚に感謝せなければならない。なぜならばトルストイにこの祝福な瞬間が無かつたなら、世界の文學はそれ自身量に於ても質に於ても廣げられた二大傑作を失なつたからてある。然かしそれほど平和な家庭生活も何時までも彼を牽き付けるわけには行かなかつた。『戰爭と平和』を書いてゐるうちから、彼は時々續けて不安な惡夢に襲はれるやうなとがあつた。暫らくは『アンナ、カレニナ』に對する努力に氣を取られた爲め、その不安が頭を擡げ兼ねてゐたが、それが完結に近くに從て愈よ彼の心の平和は亂されるやうになつた。彼は急いて其述作の終を告げた。所謂『轉機(コンヴアーシヨン)』が來たのだ。

いつの頃からか彼の心中に一種名狀することの能きない不可思議な現象が起つた。時々彼は『自分の生活が

Digitized by Google / Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

惑はされ四へられたやうな氣分に成つて、如何に其日を送り、如何なることを爲すべきかをさへ知らないやうなことがあつた。』その顯象の發作は初めは極く偶まであつて、速ぐに忘れて了ふほどであつたが、時が經つにつれて度重つて起るやうになつた。『何の爲めに?』とか『その次は?』とか云ふやうな問題が繰返し々々々彼を責めた。何だ、恁んな問題なら、解りきつたとて、暇さへあれば何時でも釋ける位に考へてゐたものが、次第々々に其壓力を彼の心に加へるやうになつた。最早ひと時も猶豫が能きなくなつた。一つには是等の疑問は小供らしい馬鹿げたものでない、人生の問題のうちでも一番必要で深遠なものだと云ふこと、また一つには今の自分の位置では兎ても之を釋くことが難づかしいと云ふことを覺り始めた。

所領地の整理も爲なければならない。小供の教育も爲なければならない。それから文藝上の創作にも勵まなければならない。要するに溫かい家庭を作つて、其幸福の空氣の中で、文學者としての名聲を樂まうと云ふ希望を持つてゐた彼の身の上に急に(?)邪魔な不安が降り懸つて來た。『よし、お前はサマラに壹萬六千エーカーの土地と三百頭の馬を持つてゐる、然かしそれがどうした。』『小供の教育が何うした』。『それから亦お前はゴーゴルなり、プーシキンなり、乃至は沙翁なりモリエールなりより豪くなるとする。それが何になる。』……一々答が能きない。然し疑問は切迫してゐる。速ぐにも答へなければならない羽目になつてゐる。答が能きなければ一日も生きてゐられないことになつて來た。彼はその後『懺悔』を書いた中で斯う言つておる。『その時私は五十歳であつた。私はそれ迄愛しもし、愛されもして來た。善い子供も持てば、大きな領地や名譽や健康も持ち、肉體上にも精神上にも元氣が滿ちてゐた。何んな百姓にも負けないだけ勞作することも能きた。十時間働き通しに働いても疲れないほどだつた。然るに急に私の生活が停まつた。勿論呼吸をしたり、飮み食ひしたり、睡つたりすることは能きたが、それだけでは人は生きるとは言はれない。私には最早希望と

云ふ物が無くなつた。眞理を知らうとも思へない。人生は迷妄の一片であると云ふとだけが眞理に受取られた。私は暗い淵に立つた。明らかに私の前には死のほかに途がなかつた。幸福で健康な私でありながらこの先き生きてゐられなくなつた。ある不可抗力が私の生命を棄てさせるやうに强いた。……勿論私とて自分で自分を殺したくはなかつたが自分の生命を取らうとする壓力の方が自分よりも强かつたのだ。その力は一種のアスピレーションであつた。以前私が生活に憧がれたやうに此度は死に憧がれた。戯談を言つて見たり、自分で自分を騙まして見たりして、紛らさうとした。幸福に生きてゐられる身であり乍ら、自分の居間の梁から首を括るのを恐れて繩を隱したりした。銃を持て獵に出るとも已めた。……人は生活に醉つてゐる間こそ安生も出來るが、其醉の覺めると同時に世事萬端が唯だ虚僞で、馬鹿らしい詐詭に成つて了ふ」と。

トルストイは今や絶壁に立つた。死！死！自分で自分の生命を絶つより他には途がなくなつた。然かし彼は容易く死に誘はれる程弱い人間ではなかつた。苦悶に苦悶を重ねた結果が、漸く一道の進路をめつけた。救生が農民から來た。農民を愛すると――額に汗して其生活を送つてゐる貧しい質樸な者の間に人生の眞理を見出さうと云ふとであつた。斯樣にして起つたものが所謂彼の『轉機』である。彼の據て得た信仰、理想などに就ては世間に能く知れ渡つてゐるから玆には述べる必要がない。

ゲーテが『ウエルテルの悲』を書いた時代には世間に能く自殺が流行つたと云ふが、ローマン、ローランの『トルストイ傳』に據ると一八八〇年代の歐洲殊に露西亞の上流社會にもこの自殺病が流行して幾千からの犧牲者を出した。當時のトルストイも矢張その病氣に感染したらしい。彼の『轉機』の動機には幾分この流行病が手傳つてゐる。て、丁度靑年として其時代を記臆する人達には、彼の『懺悔』に書いた經驗は歷史的の價値を有つものであつて、取も直さず彼はその時代の隱れたる悲劇を書いたものであると。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(二)

よく人の言ふことだが、所謂『轉機』を劃して其前後のトルストイの人物が全く變つたと云ふことも嘘てあれば、彼の後半生には全く藝術を捨てて了つて、世界はあたら大文豪を失つたやうに言ふのも嘘てある。彼は眞に生きんが爲めに生きた人て、健全な精神を持つて、死ぬまでも充實した生活——彼の所謂 drunken with Life の生活——を送つてゐた。眞に生きると云ふことは常に變ると云ふことてある。彼はあらゆる活動——藝術ても信仰ても——に於て斷えず變りつつあつた。淀んだ無意義な生活は彼の生涯の一瞬間にも見出すことが能きぬ。昔から彼ぐらい眞の意味に於て生きた人は殆んど無い。從て彼の所謂『轉機』の如きも、彼の幾變化ある生活の山脈の唯だ比較的高い一峯に過ぎない。常に向上する者に取て最も貴いものは現在と未來てある。その人には過去は缺陷と罪惡てなければならない。て、昔からトルストイほど自分の過去を罪惡視した者はなかろう。また現在の生活の充實に執着し、熱心てあり過ぎる所から彼はその「神」即ち眞理を發見する度毎にいつても是が新發見てあり、新意義てあるやうにばかり思込んだ。『轉機』の場合も彼の口から言はせれば、矢張さう取れるが、實はたび／＼彼の生涯に起つたクライシスの比較的大きなものに過ぎない。

一八七五年、即ちトルストイの『轉機』の起る五年ほど前に、有名な批評家のミヘーロフスキーが『杜伯の右手と左手』と云ふ論文を公にした。著作を通じて觀たトルストイの心中には、相矛盾した、常に猛に鬪いてゐる二個の人間がゐると云ふことを推定して、その所謂『轉機』を豫言してゐる。その鬪爭が劇しくなるにつれて、早晩苦き解決を要すべき危機が來なくてはならない。そこて『斯う云ふ疑問が起る。斯樣な時、その人は何んな態度を採るてあろうか、何に依て生きるてあろうかと。勿論彼はその靈魂の內部悲劇を片付けるために、その幕を下ろす爲めに努力せなければならない。然かし其解決が何うして出來るか。若し普通人ならば斯樣な羽目に立到つた場合は、自殺を遂げるか、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それとも自墮落に陷るほかはない。然るに有爲の人は別に他の活路を索めるであろう。て、その活路にも色々ある……」

「トルストイの心中に蹈つてゐる悲劇なるものは實に私の假説に過ぎない。然し其假説は合理のものであつて、是なくば彼の著作を解することは全く不可能である」とミヘーロプスキーは其説を結んでゐるが、全くその通りである。彼の幼年時代からの詳しい自叙傳とも謂ふべき其著作を次ぎ〱に繙いて見るに、トルストイの靑年時代が決して彼自身告白してゐるやうな「哲學的虚無主義者」でもなければ、彼のいかにも愛着してゐた家庭の幸福が其實、最上の理想でもなかつたとが解る。實際トルストイの後年の思想は彼に取つては別段新しいもので無かつたのだ。反對に、彼の生涯のやうに幼少からずつと續いて固着力の強い、變化を嫌ふ人格の發現は多く其例がないとも言へやう。初期の作「少年時代」の主人公イルテニエフ（トルストイ自身たるとは言ふまでもない）からが、既に基督教の敎旨に熱狂してゐた。哲學や道徳の問題がその頃から最も強く彼の頭を惱した。「感情の淸新も推理の明拆もその爲めに破壞されたほど斷えず道德問題を解剖する習慣」を作つた。「田舍貴族の朝」と云ふ作では彼は斯う言つてゐる。「自分が今迄知つたと、信じたと、愛したとは渾んな虚僞である、愛と克己の他には確實な幸福は得られない」と。それから「コサック人」の中のオレニンも亦同じ型の煩悶を續けてゐる。

> 今迄私が自分で要めたり考へたりした多くの事は、ただ恥と心配を重ねるに止まる物だつた。幸福の爲めには別に何も要らないではないか。幸福を得るには他人の爲めに働くほかはない。幸福の要求は一種の法則のやうなもので、誰も之を感じてゐるが、然かし之を擬む爲めにいろ〱と自利的に富や名譽のやうなものを集めるのは、それ自らが既に幸福に背いてゐるのだ。愛と亡我の他に何んな手段があるか。

之を讀んでトルストイの後年の敎訓と比べて見るに、何れだけの相違があらう。そのほか「戰爭と平和」のアンドレー公爵にしてもピエル、ベスーホフにしても、「アンナ、カレニナ」のレビンにしても同じやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

途を辿つてゐる。一生八十餘年の間トルストイの思想には終始一貫した徑路があつた。「轉機」後の彼も矢張斯樣にして變つて行つた。熾烈な内心の要求に責められて彼は死ぬまで變つた。彼は「復活」の中のネフルドフのやうに幾度か彼の「良心」を洗濯した。」

(三)

彼の「轉機」が果して彼の生涯の一貫した徑路の或る部分に過ぎないとしたならば左程重く見る必要がなからうと言ふ者がある。現に獨逸のブルクナーのやうな人までが、その大著「露西亞文學史」の中で「安價な勝利」だと言つて見下げてゐる。併かし何んな理由があつたにしてもトルストイに取つては決して安價な犧牲ては濟まなんだ。その煩悶の漸く熟する頃から、彼は友人に隱くし家内に隱して、獨りで苦悶すると三年に及んだ。三年と云ふ歲月は決して短かくない。それだけの長い間、繩を隱くしたり鐵砲を遠ざけたりしてまでの良心の苦闘を續けたと云ふとは決して尋常人の能きるとてない。それて、基督教の信仰に安心立命の地を得てから後の彼は何うしたかと事ふに、せつせと正教會へ通つて見た。その敎會の信者となり、一員と成ろうとして從順に努めた。馬鹿げた敎會の空氣が自分の思想に合はないやうなとが在つても、何時かは「愛が彼に眞理の戶を開けて吳れるだろう」と云ふ至極温和しい考から隱忍してゐた。恰度三年たつた。然るに世間の敎會の虛禮詐詭は遂々彼をそれから引裂いて、劇しい爭をさせるやうにした。世間では能くトルストイの事を人と相容れない傲慢な性質のやうに言ふが、それは誤て、之を見てもどれだけ彼が眞理の前には柔順であつたかを談つてゐる。兎に角彼は都合六年間と云ふもの煩悶もすれば忍耐もした。彼の所謂「轉機」は決して容易い仕事ではなかつた。

悟つてから後のトルストイは何うしたかと云ふに、東洋流の禪坊主のやうに、山に隱れて、徒らに高尚な理屈ばかり並べると云ふやうなとはなかつた。彼は道に入れば入るほど實世間と近いた。自分の高い信仰を日常生活の行爲にまで飜譯して、鄙夫野人の言動に神

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の理想を鎔かし込む工夫をした。エドマンド、ゴッスの批評に、確かトルストイのことを東洋流の坊主(ボンズ)の衣物を着た科學者だと言ふ意味のことが述べて在つたが、印度や支那の神秘家(ミスチツク)のやうに山へ入つて木の實を食つて唯だ入禪(エクスタシー)を樂むと云ふやうな呑氣な眞似は彼には能きなんだ。彼は僧衣を着した化學者だ。神秘的科學者だ。然かも實踐的科學者だ。高い理想の裏には曲ぐべからざる理性と實行慾を藏してゐた。神の啓示を常住座臥の規矩まで引き下げるのが彼の努力であつた。彼は天の物を厭くまで地上に降ろさうとした。否や、彼は天よりも地を高く見てゐた。土臭い肉と汗ばみた血の中にのみ彼の理想と神は宿つた。一方から言へば彼は厭くまでも露西亞人であつた。露西亞人は地理から觀ても歴史から觀ても東洋人と西洋人の中間人種だ。東方の瞑想と西方の理性がウラル山下、ヴオルガ河畔の曠野と森林の中で溶け合つてスラブ族一流の文明を構成した。で、露西亞の天才は渾なこの神秘主義と現實主義の合體でないものはない。ゴーゴルは初め現實主義(文學上では寫實主義)から晩年は神秘主義に傾いた。ドストイフスキーは神秘主義の最も偉大な代表者で、トルストイは現實主義の最も偉大な代表者である。

で、彼は徹底理性主義の信者であつた。理性即ち彼の神であつた。彼は一生涯、神を呼ぶに「It」を以てしたほどだつた。この點に於て彼は露西亞のパスカルとも謂はれやう。ローマン、ローランは『理性の神秘家』だと言つたが、如何にも穿つた稱呼である。然かし彼の理性は普通世に言ふ科學的理性ではない。『人生を支配する聖律である。理性的生物即ち人間が據て以て必然的に生活せなければならない法則である。』その方則は日月の運行を司り、花の開落を司る方則と並立したもので、人間は唯だこの方則に從ふことに依てのみ眞に生きるのである。『人の知る所のものは渾な理性に據るのであつて信仰に據るのではない。……理性が充分に働く時初めて人間の眞の生活が始まる。惟一眞實の生活は理性の生活である』と。

然らば理性の要求、理性の活動は何であるか。曰く、

愛である。人は理性に據て其眼を開いて、眞愛の道に從はなければならない。理性は神で、その神の道が愛である。で、愛に生きるのが信仰である。然るに信仰は理屈ではない。『信仰は行爲である』。『神を知ることと生きることとは同一である。神即ち人生である』と。これがトルストイの教義の眞髓で、いかに理性的、實踐的であるかが解かる。

（四）

畢生の心血を濺いで漸く新生に生きたトルストイは果して安住の地を得たであらうか、平和の港に達したであらうか。否や々々、それは唯だ新しい活動の始であつた。彼が嘗て齎した苦悶と惡戰の初期に過ぎなんだ。やがて第二の危機が來た。一八八二年から彼は一時其家族と與に莫斯科に住つてゐた。その頃街々の戶籍調査が始まつて彼もそれに手傳つた。從て彼は偶然にも大都會の貧民窟を詳細に視察する機會を得たが、その悲慘な情態が非常に彼を驚かした。『彼はその拳を揮つて號哭した』と言はれてゐる。視察の情況は彼の著『何を爲さねばならぬか』に詳しく描かれて在つて、それが更に彼の信念を一變させた。『人は恁んな風で生活出來るものでない、不可ん々々』と言つて、彼は數月間絕望の姿で過した。その頃、伯爵夫人が夫に送つた手紙で次のやうに言つてゐる。『貴夫は信仰が得られないから能く死なねばならぬとお仰つたが、最早確かな信仰をお持ちになつた今日までなぜさう失望なさるでしやうか』と。

なぜなら、彼の失望するのは反對に彼が信仰を得たからである。その信仰は愛であつて、それが更に實行の愛でなければならぬから、なぜなら——『私は能く人が斯う言つてゐるのを聞いて驚く、「理屈はさうだが實行が難かしい」と、全て理想と云ふものが、實行には些の關係もない、無駄話の題目でもあるやうに、私としてはある一事を考へてそれを諒解した曉には、自分の解釋通り實行するよりほかには途が無い』と、彼自身言つてゐる通り、彼の最も忌み嫌ふ所はエピキュラス宗の慰樂の爲めに其信仰を護る富有な所謂正統思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

想の徒であるから、パリサイの徒のやうな似而非信仰者であるから、自己の救生にのみ沒頭する利己的の神祕家であるから。

　何うして彼は失望せざるを得やう。一度目擊した大都會のどん底の慘めな生活と其墮落の光景を忘れないうちは彼の心に平安の來らう筈がない。彼の苦悶は『轉機』のそれにも增して劇しかつた。彼の眼にはその民衆の悲慘も墮落も全く自分の責任のやうに感じた。近代文門の生んだ矛盾の生活、理由のない特惠制度——彼自身がその特惠を受けてゐるもの丶一人だ——が斯樣に多くの犧牲者を出したかと思へば、その罪惡の特惠を受けてゐる者は取も直さず同類者である。て、彼は自身の特惠を振り捨てる事は勿論、進んで其救濟の道を講ずる爲めにどれだけ苦悶したか。『その危機は第一の危機よりも遙かに悲劇的であつた。同時に結果に於ても遙かに豐富であつた。人生の悲慘な大海——自暴的な怠惰者が一人で作つた悲慘でなく物質界の悲慘——に於てトルストイ自身が忍んだ宗敎的懊惱は何れだけ深かつたろう。其れに向て眼を閉ぢるとは彼には到底能きなんだ。て、一たん觀知つたが最後、どんな價を拂つても、彼は之を防がなければならない。然るにそれが能きる事であろうか。』恁うローマン、ローランは言つてゐる。

　實際、トルストイの所謂『轉機』は自暴的な怠惰者が一人で勝手に作つた煩悶であるとも謂はゞ言へる。て、その目的は自巳の救生に在つた。然るに『何を爲さねばならぬか』に書いた第二の危機ではそれが全く變つてゐた。目指す所は民衆の救濟である、社會制度の改善である。神の名に據て理性の名に據て愛の名に據て、一切の自巳を捨てて懸らねばならぬ大慈悲の願望である。それかトルストイのやうに熱烈な實踐主義の性癖と相俟つたから堪らない。一たん感じ思つた事は、何んな難事でも、唯つた一人の力でも、片時も猶豫なく仕遂げなければ安息するとか能きないのだ。高い理想と極端な現實癖——この二つが相衝突して起した矛盾が彼の一生である。然がしてこの矛盾は彼の美點でこそ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あれ、決して人々が能く非難の材料にするやうな弱點てはないのである。なぜならば、この矛盾のなかには、一點虚僞の分子がなく、寧ろ彼の誠實(シンセリチー)を曝露するものであるから。

彼の到着した結論は大膽で明白なものであつた。誰も正面には仰ぎ視ることの能きないほど公正なものであつた。人は『僞つてはならぬ』、『眞理を恐れてはならぬ』。『悔い改めねばならぬ』そして教育の教えた傲慢心を根こそぎ除き去らなければならない。斯樣な信念から彼は社會の罪惡の根滯に立入つて考へて見た。第一は富の私有である。それが遊蕩の階級を造り出し、人の精神を腐敗させる基(もと)である。『汝は汝の額に汗して其麵麭を得なければならない』、私財を有つてはならない。是が健全な社會生活の根本條件である。それから暴力を以て小數者の利益を計る國家組織が第二の罪惡である。從て之に附隨して其罪惡を補助する教會、斯樣な不健全な社界に生長した文學、科學の凡てが非であると云ふのだ。

之を防ぐには何うすれば可いかと言ふに、トルストイの考では、先づ斯樣な罪惡の凡てに携はることを避けなければならない。國家に仕へてはならない。て、トルストイは第一に自分の土地と財産の所有を棄てゝ懸らうとした。國家とあらゆる社界とを敵として、些の讓歩なしに、極端まで戰はふとした。然るに斯樣な事が一人の力で能きうることであろうか。事の成敗はトルストイの問ふ所でない。彼の深い信念と劇しい現實癖とは以後二十餘年間彼を驅つて一日も安息のない貴い努力の生活を送らしめた。然かし孤獨な天才の努力は決して空拳には終らなかつた。彼はよし失敗したにしても、彼の殘した經驗は世界でも一番貴い經驗の一つであつた。クロポトキンの言つたやうに、ルッソー以來彼位世の人の良心を沸騰させた者はなつた。

その二十餘年間彼は何れだけ社界を敵として戰つたか。彼が國家や帝王や科學や文學や教育や宗教やその他彼の罪惡と目したものに向つて發つた抗撃は隨分劇しいものであつた。その爲め彼は教會から破門された

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り、いろ／＼の方面から迫害を受けたりした。家庭の中でさへ彼は自分の意志を枉げさせられて、孤獨の生活を送つた。それ等の事實は能く人の知る所であるから茲には繰返さない。

孤獨と言へば、實際トルストイの晩年ほど貴い孤獨の生活はなかつた。彼が傳導した宗敎上の信仰も、彼が企てた社界上の改革も殆んど失敗に終らないものはなかつた。殊に彼の失望の大きかつた第一原因は、彼がその信仰を自分に一番近い者——その妻や小供にさへ頒けることの能きなかつた事である。藝術上の事業では何よりも彼の援助(たすけ)であつたその妻までが、彼の晩年の信仰には沒交渉なばかりか、却て反抗的態度を採つた。一八九二年に彼等の間に出來た最愛の末子が亡くなつた時なども、彼は其妻の悲嘆を慰める道を知らなんだとほど彼等の間は懸け離れてゐた。その時彼が友人に遣つた手紙に次のやうな文句がある。「夫婦は一身同體であると云ふ詞があるが、私は眞底からそれを信じてゐる。……て、せめて私の宗敎上の信念の一部なりと自分の妻に頒つだけの力が私に在つたらと赤心(まごころ)から願はないとはない」と。レロア、ポリユーの書いた物によると、その小供達が父に對する態度は猶ほひどかつた。ヤスナヤ、ポリアナの晩餐の席で、彼が熱心に話をしてゐる側に居並んだ、其小供達には退屈と不信を隱すことの能きないやうな不行儀が見えたと。

彼の名が高くなればなるほど、世界のいろ／＼の果(はて)から、彼に手紙を書いたり、訪問したりする者が多くなつた。多くの客は好奇心から彼を見舞つた。彼は殆んどそれ等の不眞面目な閑人(ひまじん)に忙殺されざるを得なかつた。一時各地に起つた『トルストイ宗』の實行も渾な失敗に終つた。彼が晩年の勢力を傾注したデユーボルの救濟運動も結尾は至極面白くなかつた。彼の描ひた露西亞の未來の夢も果効なく消されて了つた。剩さへ諸方から迫害が起つた。彼の唯一の賴みとした農民までが、蓆の旗を押立てゝ革命運動に加はるやうになつた。そして彼の靜かな莊園の窓の下でも Vengeance の聲が聞かれるやうになつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

森が出來上るには「種の萌すまで、若芽の吹くまで、葉の出るまで、そして幹が大きな樹に成るまで待たねばならない。」然るに森を造るには一本の樹では足りやうがない。その樹から種が落ちて、やがて大きな森に成るまでには幾百千年かゝるであらう。トルストイは正に孤獨の大樹である。彼の名が世界に轟くほど、彼は益々悲慘な孤獨の位置に立つた。彼の晩年は一人の愛孃と數人の友人に據て漸く慰みを得るのみであつた。(その中にはゲーやレピンのやうな畵家もゐた)「我等はお互同士で索めてはならぬ。皆神を索めねばならぬ。……「協力すれば事が容易だ」とお前は言ふが、それは何う云ふ仕事でか。勿論、勞働や耕作ではさうであらう。然かし神に近くのは、孤獨のうちに爲さねばならぬ。……世界は丁度大きな寺院のやうな物で、その眞中に天から光が落ちる。で、我等がお互に結び付く爲めには皆んながその光の方へ行かねばならない。斯樣にして四方の端(はて)から來た者が喜の光の中で各自を見出すのである」と斯う彼は言つてゐる。然るに世界の幾人の人がトルストイと一緒にこの光のもとに慕ひ寄つたであらう。よし、自分一人でもよい、神と共に在るならば——斯う彼は自ら慰めざるを得なかつた。「他(ほか)の物に火を移すのは自分で燃えてゐる物でなければならない。そのやうに人間の眞實の信仰と生活でなければ他人に眞理を傳へるわけには行かない。」かくて彼はその高貴な孤獨も自分自身の罪に歸せざるを得なかつたのであらう。孤獨の寂涼が、苦痛、その恥辱が何れだけ彼の晩年を嘖(さいな)めたか。彼にして今少し理性の力を缺いてゐたならば彼の晩年はゴーゴルのやうなミスチシズムに陷つたのであらう。

寂涼の味は彼の晩年の教義をして益々慈悲深いものにした。「自分でもその苦みを嗜めた者でなければ、苦んで來た者を教えることが能きない」と彼の言つてゐるのは、ウイルヘルム、マイステルを思はせる詞である。然かしゲーテの靜平な晩年とトルストイのストーミーな晩年とは何れだけの相違であらう。總じて大成した天才の晩年には嵐の日の後の落日の徐かに西に落つる

やうな靜寂と多少のイゴイズムの色彩を觀るものであるが、トルストイにはそれが無い。彼は寧ろ厭くまでもそれを厭み避けたやうな氣味がある。その謙遜な慈悲心は世界のあらゆる罪惡に對してたゞ自分を責めるよりほかには途がないと云ふやうにも見えた。一生骨の髓までも嫌ひ通した革命黨員に對しても、己を迫害した皇帝(ツァア)に對しても晩年は折れて掛つた。意志が老衰したからではなく、慈悲心が宏くなりイゴイズムの感情が削れたからである　罪を惡まなくなつたからではない、人を許すやうになつたからである。「私の言葉や筆の爲めに若し苦んだ人があるならば、何卒(どうぞ)許して呉れ」と言つて彼は切に願つた。兵役忌避事件で彼の辯護したゴンチヤレンコの場合でもデユーホボルの場合にても、彼は味方の爲めには切に眞心から出た行動を望み、何んな事が起つたにしても『苦める者と苦められる者との間に情味ある關係(アフエクシヨネート、レレーシヨン)を斷たないやうに』と望んだ。人はヘロツドでも愛さなければならない。「ヘロツドが愛せるものかと、恁う貴君(あなた)は言ふであらう——實際私にも解らないが、私にしても貴君にしても、どうしても彼を愛しなければならぬやうな感じがする。私にしても貴君にしても若し彼を愛さない曉は必ず心が安まらない、自分の命が無いとになる」と。彼に取つては愛は唯一の生命である。一寸の私心でも一分の憎惡も命を斷つ刄でなければならない。何たる聖淨の愛であらう！何たる無邊の悲心であらう！「汝自身の如く汝の隣人を愛せよ」と言ふ福音者の詞でさへ、晩年には彼を厭足らなく思はせた。功利派の巨匠ステユアート、ミルが取て以てナザレの聖人の教も功利に其の基礎を置くと言つて引合に出した意味に於て彼はこの言葉を嫌つたのである。トルストイは曰つた。『この言葉は水壓器械の割目のやうなものである。我々が人間の精神から絞り出さうとするイゴイズムの蒸氣が其處から再び歸つて來る』と。

メレジコーフスキーのやうにトルストイの利我主義を極説する人も、彼の晩年の斯樣な行動を何と觀るであらう。無汚の愛、無邊の悲心！然かし「抽象の愛(アブストラクト、ラブ)」で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はなかつた。否や、彼位抽象の愛を嫌つた者はなからう。『近代の最大罪惡は人道上の抽象的愛である。何處ともなく漫然存在する者に向つての非人格の愛である。…我々が未だ知らない人、まだ見たこともない人を愛するとと云ふとは到て容易なとである。我等は何等の犠牲を拂ふ必要がなくして、同時に自分て樂しむとが能きる。斯樣なとは良心の痴化である。否、我等は我等の隣人を愛さなければならない——我等と與に住ふ者を、我等の行く道に横はり我等に迷惑を懸ける者を。』

玆にもトルストイの性癖の現實性が現はれてゐる。時々彼と並び稱せらるるマアテルリンクが靜かな隱遁的生活を送りながら、後園の花の香と蜜蜂の囁きの中から、深遠の哲理を世に說つてゐるのに較べるとき、何たる對照であらう。然かしそれにも相當の眞理がある。マアテルリンクに言はせると、斯樣に悲慘と不公平の滿ちた世の中に、閑々として筆を取るのは心苦しいとてある。併かしそれかと言つて、誰も皆貧民を訪問したり、病者を慰めたり、模範的工場や病院を建てたり爲なければならないかと言ふに、さうばかりは行くものてない。醫者は病氣を研究する爲めには、先づ健康な身體の解剖學からかかる。て、不可解な幸福を尋ねたり、思索家が其思想を發表したりするのも一面の必要てあると。要するにトルストイのやうな道に進むのも、マアテルリンクのやうな道に進むのもその人の性癖に據るので、その間に是非を別つとは能きなからう。唯だ前者の道にはより多くの困難があり、矛盾が伴ふ。後者の道には靜平があり、調和が成り易い。然らばどちらが幸福てあるか。誰がそれを知つてゐやう。天才は唯だ自己の天分に應じて生きるとを知つてゐる。ラマルチンの所謂 Sad and Noble Art of Living を解して、之に依て進むに過ぎない。

然かし私の性癖から言はせると、危險な道を踏んだトルストイの方が大きくとれる。自然とは大矛盾を含んだカオスてあるならば、その嵐の姿を現はしたものがトルストイてある。なぜ世の中の人は彼の生涯に小

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平和と小調和の無いことを咎めて、其の大矛盾を嘆稱せないのであらうか。

（五）

トルストイの祖先に就てはいろ／＼の説が行はれてゐるが、兎に角露西亞の古い名門であることは疑はれない。一世トルストイ伯は彼得大帝に仕へた有名な政治家で、皇太子アレキシスの逆殺に携はつたと言はれる人である。特にその母方の祖先は紀元八百年代に露西亞帝國の基礎を作つたルーリックから血統を引いた名高い豪族で、今の皇室のロモノゾフ家などよりも古い家柄である。偉大な世界人（コスモポリタン）と稱ばれてゐるトルストイの生ひ立ちが生粋なスラブ民族の血を受けて出てゐると云ふことは意味のある事である。モードの傳記には斯う曰つてゐる。『この事を知る者は誰でも彼の思想の傾向が如何に深くスラボフィルの思想感情に染んでゐるかと云ふことを覺らない者はない』と。であるから、トルストイの性行を充分に嚙み分ける爲めには是非ともスラブ民族の特質、殊に彼の最も親しみ近いた農民の性格を知つてゐなければならない。

世界の中でも露西亞人ほど宗教的な國民は尠ない。一時その邦の青年間には Obchtcheleé Microssozertsanie と言ふ詞が流行つた。概括した人生觀と言ふやうな意味で、一切の生活を總括してその人の思想をも行爲をも支配する信念を指したものである。それは單一な政治的または社會的の主義と云ふやうな皮相のものでなく、彼等の全人格の上に影響する生きた力である。彼等の日常の行爲も社會的運動もみなこの信念から發動する。其邦の有名な政治記者にブルガコフと云ふ人が在るが、彼は公衆の名に據て其希望を述べるのだと曰つて、露西亞未來の政黨は須らく廣義に於ける——無神論をも包括した——宗教的團體でなければならぬと云つた。なほ眞の政黨は渾然たる一個の精神的完體として、共通の心靈、共通の思想、共通の意志を有つた有機體であつて欲しいと。斯樣な宗教的性癖は昔も今も露西亞の青年を支配する唯一の原動力で、他の邦には見ることの能きないものである。それが國民の自由

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意志を許さない一種の國家制度のもとて、神秘的色彩を帶び、異樣な偏癖となつて現はれるのが常てある。されば八十年代にトルストイの閲みした危機(クライシス)のやうな事件は露西亞の天才には有勝な事柄てある。ゴーゴルが晩年ミスチックに陷つたのもその爲めてある。ドストエフスキーは十幾年間西比利亞に追放されてまて苦勞した自由主義を捨てて加特教の信者となり、皇帝(ザア)の忠臣とまて成り了せたのだが、それも意志の老衰から來た譯てはなく、全く宗教的轉機に依つたのだ。有名な思想家のウラヂミル、ソロブフォフも矢張同じ動機から晩年は加特教に歸依した。現代の人ては彼の無政府主義者のクロポトキンが中年から頓悟して、科學者から社會改革家となり、公爵から平民の友となつた。それから、敎父ペトロフは宮室の宣敎師から一轉して百性の傳道者となつた人てあるが、今日てはその邦の農民間にトルストイよりも勢力があると謂はれてゐる。斯樣な譯合て、トルストイの所謂『轉機』が彼の邦ては敢て珍らしいものてないと云ふとが解かる。

然かし露西亞國民の清新な宗敎的氣分の發育所は何時も原始的な農民の間に在る。さればその邦の天才は、ドストエフスキーにしてもトルストイにしても、其の思想を彼等のうちから借りて來ない者はなかつた。それが前言つたやうに、幾萬の無意識な民衆の憧憬心の神秘的方面を現はしたものが前者て、その理性的方面を現はしたものが後者てある。

露西亞の農民の間には、宗敎は決して社界的の一形式てはないばかりか、實に生きた良心(コンスシェンス)の問題てある。その邦の革命運動は政界に於ては漸く十九世紀になつてから起つたのてあるが、宗敎界てはもつと以前から隱密の間に氣ざしてゐた。敎父ニコンが希臘正敎を捧げて國内の宗敎統一を計つた時から既に反對者が現はれた。その後、露西亞の農民間に幾百からの『セクト』——宗敎上の自由團體——が現はれたとは、その邦の文明史上て重要な出來事てある。遠い田園の間て徐かに盛衰しただけてあつて、其聲は至て微かてあつたが、幾百年の間には政界の革命運動にも劣らぬだけの迫害

を受け、幾萬の殉教者を現してゐる。近き例は『スタンヂスト』や『デューホボル』の迫害事件がそれてある。福音書の俗語譯を十九世紀の初めに成し遂げたのはこの『スタンヂスト』派てある。獨逸のある旅行家に依て次のやうな話が談られた。『十九世紀の後半に到て讀み書きの道が拓かれると與に、聖書が露西亞の村々に擴がるやうになつた。其勢力は實に偉大なものて、あらゆる虚無主義者が爲した事業よりも有力てあつた。若しその邦の聖教院が精神的奴隷主義の政策を一貫しやうとするには、先づこの聖書の傳播から停めて懸らねばなるまい。……露西亞人の宗教的感情は幾世紀間空漠な形式の上を迷つてゐる、それが壓伏された精神生活の憧憬と結び付ひたので、單純な實踐的な教義が現はれるや否や急に人心が之に向ふやうになり、スタンヂストの運動が瞬く間に南方一帶の地を風靡した。ある村に露西亞語の聖書が一册來たとすると、その學者の持主の周圍には直ぐに一つの團隊が出來上る。彼は熱心に謹聽せられ、「詞」は直ちに効果を現はした。……その火花は村から村へ擴がつて火の手を昂げた。それほど人民は精神的、宗教的の生活に渇えてゐたので、彼等は是に由てその物質的貧困を慰め、心の糧を得たのてある』と。

トルストイは若い頃から農民の間へ往つた。彼の一生は殆んど彼等と親しい關係て過ごされたと云つてもよい。それが知らず〳〵の間に深く彼に影響したので、彼の人生に關する凡らゆる智慧は皆な農民から得たものばかりだつた。彼は心の奧底まて百姓を知り、彼等の言葉も話せば、その言葉て宗教や道德上の教訓を綴つてゐた。彼の謂ふ所の眞理とば『單純な農民の眞理』てあつた。彼の考ては正當の生活は農民生活よりほかにない。て、是等の眞ことの勞働者の單純な思想、明白な判斷を知るとが即ち人生を知るのてある。丁度、彼がその最晩年に家を脫け出して、自分の娘と一緒に或る村を通り掛つた時に、斯う曰つた。『私は未だ能く農民を知つてゐないが、斯うして杖を引ひて戸毎に訪れて、彼等の與へて吳れる答を傾聽して歩いたなら、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恐らく彼等の心の奥底まで解かるであらう」と。

人はその時の光景を胸に浮べて見るがよい。何と云ふ驚くべき言葉であらう。一生八十年凡らゆる世界の人の爲めに幸福を夢みた人が、その爲めには天から貰つた自分の偉大な才能ばかりか、在りと在る物を犧牲にして懸つた人が、半ばは失望から、半ばは遣る瀬ない慈悲心から、内心の要求に驅られ神の聲に追はれて、最後の努力の爲めに家を出て、あてどのない旅に上つた時に、貧しい百姓の家の戸を一軒々々叩いて土に隱れた眞理を知り鄙に埋れた愛の泉を汲まうと云ふのだ。これほど貴ひ光景、これほどハンプルな心の閃めきが復と世にあらうか。愛弟子フエドンの美しい頭の髮を撫でながら、道を說き說き毒を仰いだと云ふソクラテスの最後よりも、基督の悲劇的な最後よりも、私などにはトルストイの斯うした末期の方が餘程親しみ易い。

斯樣にトルストイが親しみ近いた農民は何を彼に敎えたか。前にも言つたやうに、トルストイは彼等の理性的方面を現はしてゐる。彼は人民が如何に希臘正敎會の空虛な信仰の形式に滿足能きないで、自から單純な日常の信仰を福音書の中から搜し出してゐるかと云ふことを知つてゐた。彼は幾許の「セクト」の信條が理性の上に其土臺を置いてゐることを觀た。彼はその儘彼等の信仰を享け入れて自分のものにした。「スタンヂスト」派の宗祖リアバシャブカが農園の間から稱へて立つた信仰の綱領と云ふのは原始基督敎への歸復で、世界的博愛と極端な平和主義、非抵抗主義を旗幟としたものである。之を學んだトルストイの敎義を一概に排斥するのは、未だ深く露西亞の國民性を研めない者の輕卒な判斷に過ぎない。實際露西亞の幾億の民衆は斯樣な極端とも見える信條に據て生活し、その爲めにはいかなる困苦をも死をも平氣で忍んでゐる。

農民間に行はれる斯樣な『セクト』の信者で、直接に最も深い感化をトルストイに與へたものがある。「私の一生中で最も大きな道德的影響を與へられ、私の心を富ませ、私に世界觀を解いてくれた二人の露西亞の思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

索家がある。彼等は二人の百姓のズータイエフとボンダレフであつた」と、彼自身言つた。「何を爲さねばならぬか」の中で彼はズータイエフの肖像まで掲げ、その人との會話を載せてゐる。

バシル、ズータイエフは中央露西亞に生れた無教育の石工であるが、若い時から世の中の事に眼が開いてゐて、樣々な悲慘な出來事に就て考へるやうになつた。幾人もの僧侶を尋ねて其解釋を聞いて見た。自分でも「いろは」から勉强して、終ひには熱心に聖書を披いた。或時彼は最愛の兒を喪つて、その遺骸を最寄の寺に運び込むと、坊さんから五十「コペック」だけねだられたが、持合せが三十「コペック」しか無かつた。坊さんと彼との間に葬式代の値切合が始まつた。彼は憤然として愛兒の遺骸を持歸つて自分の家の庭に埋けた。この一事は一層深く彼をして世の中の事を思はしめた。彼に石工を廢めて、自分の故郷へ歸つて田を耕した。彼の宗教的活動は是から後に創まつたのである。

ズータイエフは總ての宗教的儀式を否定した。婚姻、洗禮そのほか虚僞に陷り易い外面の表式は何でも嫌つた。彼の教義には天使も惡魔も無く、一切超自然の分子を認めてゐない。靈魂の不滅、未來の生命のやうなことには彼は一切關らなかつた。吾等は唯だ斯の世の幸福と正義とを追求すべきであると。また、ズータイエフの說に由れば、人間の道德的復活と社會組織の改造とは深い因緣がある。私有財産の制は社界のあらゆる罪惡不幸の源である。然かし今日の社界組織を改造するには決して暴力に據ては可けない、說得によらなければならない。彼はまた納稅を拒み、彼の弟子達は兵役の義務を拒んだ。凡ての國民は皆な兄弟である、何の爲めに戰ふのであるかと。

ズータイエフは一生農夫の生活を送つた。ある日彼の小屋に盜賊が這入つて穀物の俵を盜み出したとがある。それを彼が見付けたので、まだ殘つてゐた俵を肩にして賊に追付いた。「兄弟よ、お前の所では食べ物が要るのだらう。この俵も持つて行くがよい」。

「眞理とは何ぞや」とある人がズータイエフに尋ねた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とき、彼は答へた、『眞理は愛である』と。

之を觀るとトルストイの敎義が何處まで深くズータイエフの感化を享けてゐるかと云ふとが解る。リアバシヤプカ——ズータイエフ——トルストイ、みな一體である。幾百年間露西亞の農民の間に欝結してゐた宗敎思想が、トルストイに到て漸く世界的の聲を擧げたのだと謂つてもよかろう。彼は宗敎的『スラボイリズム』の代表者である。世界人(コスモポリタン)の假面の中に隱れた純血スラブである。

トルストイとその邦の農民との交渉には今一つの複雜な意味がある。唯も知るやうに、露西亞の人民は昔より政治上からも宗敎上からも長い間迫害を享けてゐた。て、それが知らず〱の間に犧牲的の精神を養成し、亡我の中に神秘的な喜びを味ふやうな偏癖を形作つた。斯樣な方面を最も好く現はしてゐるのはドストエフスキーの作品て、その中ては笞(しもと)の雨を不平もなく愁嘆もなく浴びてゐるやうな者が英雄(ヒーロー)と崇められてゐる。然かし、その偏癖が嵩ずると、自分て自身の力も知らないやうになり、人生の光榮に對して餘りに消極的に餘りに不關心になる恐がある。トルストイは深く農民を研究してゐるうちにこの短所を發見して、それが救濟を企てた。犧牲と云ふ事は其根底を自覺の上に置いて初めて價値があり威厳のあるもので、生の圓滿(パーフエクシヨン)に對する憧憬の喜びを伴ふ物てなければならない。然るに西歐の文明のやうに其根底に宗敎的または哲學的の動機の無い利己的な自己承認は一層惡るい。將來の露西亞の人民は將にその宗敎的感情を更に堅實な理性の上に置いて自己の良心に威厳を持たせねばならないと云ふのが彼の說である。一生涯農民の友たり、自らも農夫の衣服を纏ひ、農夫のやうな顏付をしてゐたばかりてなく、農夫の言葉を使ひ、賢明な農夫のやうに考へ且感じたトルストイは、實に露西亞國民に向つて貴い自覺——宗敎的信念の上に建てられた個性の獨立、向上的喜悅の伴つた犧牲の道を敎えた第一人てある。その道はドストエフスキーが暗示した未來の露西亞よりも、更に未來のある光明てはあるまいか。後者

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の Man-God よりもより輝いた人格の素地を造るのてはあるまいか。

世の中の人はトルストイの無我的教義の一面ばかりを觀て、個々の心靈の絕對的尊威を認めた彼の教義の一面を閑却する傾がある。實際彼位人間の靈魂を光榮化し聖化した者はなかろう。彼の說は人間の精神に無限の向上慾を吹き込む點に於てニーチエの『超人』に優つてゐる。

(六)

トルストイは非常な革命黨嫌ひてあつた。彼は殆んど一生彼等と離隔して暮し、彼等の運動を疑ひ通したと云つても可い位てある。トルストイと云ふ人は一體に生來自我の强い人て、人と携へて事を與にすると云ふとの能きない人てあつた。彼が革命黨を嫌ふには二つの原因があつた。第一は彼等の金科玉條とする科學てある。然るにトルストイの科學に對する侮蔑は殊のほか劇しいもので、寧ろ食はず嫌ひの傾があつた。ブランデスはトルストイの科學的推理力の有無をさへ疑つたほどてある。虛無主義者(ニヒリスト)などがカール、マルクスの經濟論を唯一の盾として、その上に社界の再建を企てやうなどとするのが、彼には氣に入らなかつた。それから第二には彼等が碌々農民の感情も解しない癖をして、空漠な理論て彼等を敎えやうとするのが間違がつてゐる。西歐の淺薄な自由風を吹き込んて、あたら田園の美風を毀つ者は彼等てある。と、トルストイは考へた。殊にその邦に暴力黨(テロリスト)が現はれて、いろ〳〵の暗殺騷ぎが持上るやうになつてから彼の疑惑は一層强くなつた。要するに、彼等は唯だ心の貧弱な智識一方の徒てあつて、理想をば愛しうるが人間を愛するとの能きない手合てある。更に其理想にしても至て卑近なものて、『社會主義の目的とする所は人間の最低級な要求の滿足即ち物質的の安逸てある。然るに彼等の提唱する方法ては其目的をさへ達し得ないてはないか』と。て、彼の作品の中ても革命黨員とさへ言へば殘酷な取扱がしてある。『復活』に出て來る同黨の主領のノボトボロフは虛榮心と自我心が强過ぎた爲めに生來の賢明

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な性質を失くして了つて、想像の泉をも枯らし盡した。『懷疑の源である道德的及び審美的情調の皆無』までも行つたとしてある。

然かしこれはトルストイの後年の理想から觀た革命黨であつて、その以前彼がまだ壯年時代の頃に逢遇したニエーブな初期の虛無主義者の驚くべき新運動に對する彼の態度とはおのずから別問題である。

クリミヤ戰爭の敗北から殘虐なニコラス皇帝の治政が終を告げると間もなく、一八六一年の農奴開放が行はれた。この改革ほど露西亞の歷史上で有意義なものはなかつた。之に次ぎてその邦の青年間に一種の新運動が起つた。農奴開放は行はれても、昔からの固陋な風俗習慣や政治上宗教上の壓迫が依然として社界の上下を支配してゐた。ニヒリストの努力は先づ第一にこの『文明の陋習』を破壞するとにあつた。彼等の旗印は絕對の誠實と云ふ事で、彼等はこの誠實の名に由て、自己の理性が承認する事の能きない凡らゆる社界上の慣習、迷信、偏見を抛つべき事を提唱した。彼等は理性以外には何等の權威をも容れるとを拒んだ。心理上の要求に基く純白な信仰を保存し、虛禮と迷信に充ちた敎會の宗敎に反對する爲めにはスペンサーの進化論や科學的物質論まで持出した。青春の憤と情熱の爲めに、彼等は無經驗と一緒に埒の外へ出た。若い男達はその長い髮を梳らず、手も洗はずに異樣な服裝をして街を步けば、また若い娘達は髮を短かく刈り粗末な衣物を着、百姓の使ふやうな無作法な詞を使つて、其の獨立を表明するのであつた。

『痛ましや、麵麭は奴隸の手に造られたり』と其當時詩人ネクラゾフが謳つたやうに、彼等は事實上その麵麭を食ふ事を潔しと爲なかつた。祖先傳來の財產に依て虛榮の生活をするのを恥ぢて——女は僞結婚の手段まで採つて——遠い町々からの青年が聖彼得堡や莫斯科へ集つた。其處には幾つもの小團隊が形作られて、自己改造、自己敎育の途が拓かれた。獨逸の哲學書や經濟學書や若き露西亞の歷史派の著作などが非常の熱心を以て研究された。いかにして其前途に橫はる問題

を解決すべきかと云ふとが唯一の目的であつた。彼等は期せずして其眼を幾億の民衆の上に注ぐやうになつた。この民衆を啓發し教育するのが即ち彼等の任務であると感じた。『平民の中へ』"V narod"の運動が起つた。青年達は或は醫者として、教師として、または鍛冶屋となり樵夫となり百姓となり、女は産婆となつてまで、遠い村々へ、平民の中へ散らばつて往つた。

純白な青年間に起つた斯樣な貴い犧牲心に富んだ運動が他の歴史上に在つたてあろうか。それは恰度トルストイが幸福な家庭生活を營んでゐる頃から『轉機』時代にかけて起つた事件である。彼は其事件を知らなんだてあろうか。ヤスナヤ、ポリアナの靜かな平和な家庭の中まではこの勇ましい若々しい聲も聞へなんだてあろうか。『戰爭と平和』や『アンナ、カレニナ』はそれだけ深く彼の心を引付けてゐたてあろうか。それに就てクロポトキンはある書物の中で次のやうに說き及んでゐる。

トルストイは以前の無意味な生活を悟つて、非常に苦悶し、自殺までしやうとしたのが、遂に農夫の間に人生の眞意義を發覺して彼等の間に行つた。

(一)然かし同樣な思想が丁度その時代の幾千の露西亞の青年をも感動させた。『平民の中へ』の大きな運動は實に是から起つた。トルストイは其著『何を爲さればならぬか』の中では、一八八一年に莫斯科の細民窟が彼に與へた印象を談り、それが外部から彼の思想の啓發を助けたとを言つてゐるけれども、一八七五年から八一年の間に彼をしてさまてに強く從前の生活の無意義を感ぜしめた事實と印象が何處に在つたかと云ふとは知られてゐない。それは恐らく斯うであろう(私の想像が過ぎたてあろうか?)幾多の露西亞の青年を驅つて農村や工場に赴かしめ平民の生活に就かしめた、彼の『平民の中へ』の運動、其同じ動機がトルストイを動かし、富有な地所持としての彼の位置を再考せしめたのではなかろうか。

て、クロポトキンは筆を進めて、其革命運動が如何に顯著であつたか、そして如何に眞面目であつたかと云ふとを說き、トルストイが之れを知らずにゐたと云ふ謂はれのないとを例證してゐる。一八七一年にはネチヤエフ等一味の徒の尋問があつて、其顚末が詳しく當時の新聞に載つた。その時の被告の答辯を見ると、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分別の足りない若氣(わかげ)の中にも、いかに彼等が人民の愛に牽かされてゐたかと云ふとが解かる。一八七五年に起つたドルジエシン等一味徒黨の尋問は更に深い印象を世間に與へた。然かし、その翌々年五月に起つた超世間的の出來事——バルヂナ、ルバトヴイッチ、スボチン姉妹等の審問ほど人々動かしたものはない。この若い娘達は皆名門の出であるにも關らず、女工に身を竄して工場に這入り込み、一日に十四時間から十六時間の勞働に服しながら、ほかの勞働者と寢食を與にして彼等を敎え導かうとしたのである。それから一八七八年には『百九十三人黨』の尋問に次いでベラ、ザスリッチの尋問が起つた。

如何にトルストイが革命黨嫌ひであつたからとて、是等の尋問の新聞記事を讀んだとき、英斯科や彼の故郷のチユラ縣で起つた是等の出來事を聞いたとき、又は彼等が播いた感化を睹た時に——彼、偉大なる文學者は、それ等の青年の一群が彼自身の青年時代に近い事を思つたであらう。よしんば彼が其等の記事を見ず、それ等の青年に就て何事をも聞かなかつたとした所で、一八七七年に出版されたツルゲーネフの『處女地』だけは讀んだであらう。そして若き露西亞の如何なるものであるかを知つたであらう。……周圍の事情が既にさうであり、特に『最も人間の心を動かし、各個人の深き道德的革命の素地となる槓桿は何處にありや』と云ふ疑問を斷えず心に懷いてゐた彼のとであり乍ら、如上の運動と全く同一の進路を探るやうになるには、非常な苦悶を重ねねばならなかつたのは何う云ふ理由(わけ)であらう。然るに一方には、是等の運動に加はつた若い青年男女は、平民の事業に感謝し、其代償として彼等の爲めに努めると云ふ——唯だこれだけの理由で充分であつた。彼等は富んだ家庭を去つて、殆んどたゞの勞働者と異らない簡易生活に就いた。て、其一生を平民の爲めに捧げた。然るにトルストイに在つてはいろ〳〵の理由からして——敎育、習慣、境遇、年齡、それに(恐らくは)彼の心中に蟠つてゐた大きな哲學的疑問——それ等の理由からして、同一の歸着點に達するにも非常に苦酸な鬪爭を必要とした。

と言つてある。このクロポトキン自身は矢張初期のニヒリストに屬した一員で、大公爵の家柄に生れ、幼い頃は皇帝の侍童として宮中に出入したほどの身てありながら——地質學者としては重大な發見もし科學者の喜びを充分に解した身てありながら、一たん頓悟して平民の味方となつてからと云ふものは、獄窓生活を送りたつ樣々の困苦を積んで、今では英國に逃遁の生

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

活を迄つてゐる。ブランデスが彼とトルストイを比較した言葉が面白い。『今日露西亞人の爲めに考へてゐる人て、その人の思想が世界に亘つてゐる二大偉人がある。それはレオ、トルストイとピーター、クロポトキンだ……如何にこの二人は根本的の相違してゐるにしても彼等の生活と人生觀の間に一道の對照を作ることが能きる。トルストイは藝術家て、クロポトキンは科學者てあつた。然かし彼等の生活には同樣に、その生れ乍らの才能が彼等に與へてくれた事業を滿足して繼續するとの能きない時期が起つた。トルストイは宗教的見地から、クロポトキンは社會的見地から、與に今迄採つて來た行路を捨てるやうになつた。二人とも人類に對する愛を以て充されてゐた……そして蹈みにじられ虐待されてゐる人民の生活に心を牽かされた。二人とも理想家てあり、また改革者（レフォーマー）の氣分を備えてゐた。二人とも平和好きな性質てあつたが、そのうちてもクロポトキンの方がより多く平和的てあつた――假令、トルストイは常に平和を說き暴力に訴へる者を責めたのにも關らず、クロポトキンは斯樣な行爲をも承認し暴力黨（テロリスト）とも好い間柄てゐたのだが』と。

實際、クロポトキンは理想的の革命黨員てあつた。トルストイは斯樣な人達と同じ邦、同じ時代に生れて、よしんば其信念は違ふにしても同じ目的のもとに、同じく農民の爲めに働きながら、なぜ彼等の生活や運動を無視することが能きたのてあらう。それは彼の狷介な性質に由るのてあらうか。それとも、ツルゲーネフが『親と子』を書いてバザロフを理想化し乍ら、終に感情のどん底まてはニヒリストに左胆し能はなんだ樣に、四十年代のトルストイは矢張六十年代の新時代者の心持を諒解能きなんだのてあらうか。

然かし私はこの點に於ても最後まてはトルストイを咎めたくない。なぜならば彼自身が既に革命の信者てはなかつたか。て、その晩年には彼が革命黨員に對する感情も次第に柔いて來た。『復活』のネフルドフを通じて彼は斯う自白してゐる。『この時まて彼は彼等（革命黨の國事犯者）の殘忍、僞善、暴擧、得意、自足、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

虚榮などに對して反感を持つてゐた。所が、今彼等を親しく知るにつれて、そして彼等が官憲から何んなに虐待されてゐるかと云ふ事實を見るにつれて、彼等の行動の無理でないことを覺つた」とある。

彼の無抵抗(ノンレジスタンス)の教義も晩年は稍や緩んで來たのではあるまいか。

（七）

トルストイが現代の科學や文學に對して向けた攻擊の何れだけ極端なものであつたかと云ふことは偏く世の中に知られてゐる。然かし彼とても絕對に是等のものを否認したわけではない。「文學と科學は麵麭(パン)や水と同じやうに必要缺くべからざる物である、眞の科學は全人類の眞の平和を司るものである」と、彼は曰つてゐる。彼の攻擊の動機は莫斯科の貧民窟の慘狀を視察してから、現社界の組織の缺陷を痛切に覺り初めた時に起つたので、例の頑固(いつこく)な性質(たち)から斯の社界の罪惡を幇助する一因として之等のものを嫌つたのであつた。自滿自足してオリンパスの山上に立つ思想家や快樂主義り藝術家が氣に適(じ)らなかつたのである。

科學や文學の活動はそれ自身が過當な要求を爲さゞる時、唯だその義務ばかりを思ふときにのみ有益である。唯だ斯樣な活動を旨とし、その主意が犧牲である場合に人類が其德を尊重するのである。精神的事業を以て他人を救はうと云ふ人は必ず其事業の遂行に於て苦しみ惱む。なぜならば、精神界は唯だ懊惱と苦力に由てのみ生れるものであるから。犧牲と勞苦と、是だけが思想家や藝術家の運命である。斯樣な人達は必ず不幸である。彼等は惱み、彼等は死ぬ。彼等には逍遙の時間もなければ、慰樂の時もない。思想家や藝術家は決して我等の考へてゐるやうに、オリンパス山上に遊んでゐる者ではない。彼は何時(いつ)も苦惱の情態に在り、また感激の情態にある。彼は決心しなくてはならない、そして人類の平和を増進する所のものを發表せなければならない。決しなければ言ふことが能きない。そして明日(あす)は既う遲い、彼は死ぬであろうから……

然るに今の思想家や藝術家と稱ばれる人達は博士號や年金を欲しがる人達である。肥えた人達である。生活の愛欲者である。そして自滿自足の連中である。トルストイの攻擊はおもに斯樣な方面にむけられたので、眞の科學や文學その物を疑つたわけではない。唯だ彼の言說がその一剋な性質から、論歩の大膽な所か

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら、稍や極端に流れた傾はあるにしてもそれが何れだけの僞になろう。社會に厳存する事物――萬人が一樣に承認し謳歌してゐる事物――の否定、破邪に當って斯樣に公明な一點の疑惑をも挾まない天才の抗議は昔から聞かれたゞがない。よし、人は彼の意見に對してどれだけ反對の態度を採ろうと勝手だが、唯だ現在も未來も彼に對して不眞面目であるとは避けねばならない。偉人の天才の苦惱の聲は世人の之に對する反感よりも麗はしいてあろう。

然かも、トルストイの斯樣な意見の裏には彼が後年に甞めた苦慘な社界的感激以上にもっと深い理由がある。彼の『藝術論』は十五年間準備の結果だと云ふからには、彼はその轉機以前から、莫斯科の貧民窟を見舞つて『何を爲さねばならぬか』を書いた以前から既に大體の意見を堅めてゐたらしい。唯だ其作が晩年に成つただけに、それから後に起つた彼の宗敎上や社會上の見解がいろ〳〵と着色されたまてである。斯樣な色彩を取除いて了つた跡の純粹な意見は一言にして蔽へば

露西亞流の現實主義てある。獨逸の形而上學が十九世紀の初期から露西亞の「インテリヂエンチヤ」の間に與へた影響は著しいものであつたが、そのうちて美學だけは殆んど顧みられずに濟むだと云ふ事實がある。抽象的な『美』の詮索は、現實癖の强いこの國民には所詮不向てあつた。十九世紀の初めに、露西亞の批評界の鼻祖とも呼ばるべきウエネウイチノフが稱へた說に由ると、藝術品は單に美の表現のみては厭足らない、其作品を貫通する『哲學的』乃至社界的意味に據て批判さるべきてあると曰つてゐる。その後一時西歐からローマンチシズムの影響を受けた時代もあつたが、ゴーゴルの作品に刺撃せられてピエリンスキーが現實主義自然主義の文藝を唱道し創めてから、チエルニンエフスキーが美即ち人生の說を樹てて之に和し、ブロリユーボフ、ピザレフ、ミヘーロフスキーなどの有名な批評家が相次いて同じやうな意見を世に發表した。殊にドブロリユーボフの如きは極端に人生の爲めの藝術を皷吹した人て Realist-Idealist の典型とまて稱へら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れてゐる。彼は文藝即ち人生を判斷するにいつも道德的見地を離れたことがない。『是等の書は農民に如何なる益を齎すや、農民の爲めに働かんとする人達の事業を何れだけ補ふや』と云ふのが彼の批評の尺度であつた。（然かし彼は決して勸善懲惡の爲めに書かれたやうな狹い作品や問題小說を稱導したわけではない。天才は知らず識らず活きた人生の實相を捉へて之を描寫する。而して其描寫が忠實であればあるほど、人生に近ければ近いほど道德的にも價値があると言ふのだ。）

要するに過去一世紀間の露西亞の批評家は、文藝存在の意義を釋ねて、『社界を益し』より高い人道の觀念を世界に鼓吹するにありとした。ブラウドホンに據て始めて其れが提唱されたとき、何んなにか西歐の騷壇を驚かしたことのある斯の思想は、露西亞では長い間誤りのないもの、決りきつたものとして受取られてゐた。藝術至上主義や獨逸の審美說は殊んどスラブ民族の國民性に容れられる餘地が無かつたと言つてもよい。

トルストイの『藝術論』か初めて世に現はれたとき、他國の人を驚かしたほどの好奇心や反抗心を自國の讀者に與へなんだのは理由のあることである。否ろ反對に、『何を爲さねばならぬか』の中で、彼が其藝術上の見地を反めかした折に、失望したのは其邦にゐる少數の純藝術主義の人達であつた。なぜならば、彼等の心では、トルストイは藝術至上主義の味方であり、ドブロリユーボフのやうな『藝術上の虛無主義者』の敵であると考へてゐたからである。彼の少壯年には實際左樣な傾向があつた。モードの傳記に據ると、一八五九年に彼が莫斯科で露西亞文學好愛者協會の一員に擧げられた時公けの演說をしたことがある。その演說の草稿は不幸にして今日殘つてゐないが、何でも文學は日常の些事に關はつてならないと云ふやうなことから、後日の『藝術論』とは全然正反對の主旨を述べたさうである。然るに其協會の會員は皆純露派の集りて、丁度農奴開放に熱中してゐた連中であつた。そこで、座長のホミヤコフが立つて劇しい反對論を試みた。その論旨が當時の露西亞の批評家や讀者の態度を最も能く說明してゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。

……勿論、藝術は充分自由であり、それ自身承認の權利とそれ自身の目的を持つものである。然し乍ら理論上の藝術の自由は作家の内心生活に些の干渉をも及ぼすべきものでない。藝術家は論理でなくて一個の人間である。而かして常々その時代の人、然かもその時代の精神と其活きた熱望とを以て完全に染められた最も善き代表者である。彼は藝術家の要素なる感激性により常人以上に彼の生れた時代の總ての苦みをも喜をも受け入れる。……

かるが故に、純藝術の婢僕(しもべ)なる作家も或時は無意識に、または自己の意志に反してまでも、一個の反抗者となることがある。伯爵よ、今貴下を例證することを宥せ。貴下は自覺して忠實に迷はずに正當な道を踏んでゐられるが、然かし貴下とても眞に公憤(インヂクトメント)の文學に風馬牛であると謂はれるであろうか。冷酷な仲間達に取かこまれて、暖爐の上で死にかかつてゐる肺病やみの馬丁を描かれた時に(『三つの死』)貴下は何等の社界的缺陷をも罪惡をも感ぜられなんだであろうか、果して其死を描かれた時に、貴下は尋眞な然かしまだ覺めざる人間(ソール)の頑(かたくな)な冷酷を悲まれなんだであろうか。然り、貴下も亦自然に公憤者であり且あるべきである。

實際トルストイは生れながらの公憤者であつた。て、彼が後年に『藝術論』を發表した時にはその邦の讀者は、彼れ偉大なる文學者も亦他(ほか)の自國民と同様な藝術上の見地を採り、彼自身の深い藝術上の經驗から其說に力を添えてくれたのを頷いたまでであつた。彼の藝術論は歷代の批評家が固持して來た說を擴張したと云ふに過ぎない。トルストイの說に由れば、藝術家とは彼自身が自然または人生で經驗した感情を他人に傳へる者である。チエルニシエブスキーの言つたやうに、その感情を他人に『納得(コンビンス)』させるのではない。『傳染(インフエクト)』させるのである。所が、感情と思想とは分けることの能きないものである。感情はそれ自身を現はす詞を索める。て、感情が詞で現はされた時にはそれが一つの思想となる。それから、『人生が達しうる最も高い感情』即ち『宗教的』感情を傳播するのが藝術的活動の目的であると。茲に彼の所謂宗教的藝術とは文學なり繪畫なりを教會の道具に使つたり、一宗派の喧傳に利用したりするやうな狹い意味ではない。その時代の特種の宗教的意識を表現する所の作品を指したものである。

『何れの社會にも人生に對する宗教的意識がある。そ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は其社界が頼り進む最大幸福の標的である」と。また「宗教的意識は常に存在する。これは水の流れる河床である」と彼は説明してゐる。て、この社界的傾向を半意識の民衆に闡明して遣るのが即ち藝術家の任務であるのだ。かくて彼の藝術論は世の人の考へてゐるやうに其物の活動の範圍を縮めてゐないばかりでなく、却て之を擴大した趣がある。「藝術は我等のあらゆる生活に附纏ふ。我等が藝術と稱してゐる演劇、音樂、文學、繪畫は唯だその一微分に過ぎない。我等の生活は小供の遊戯から宗教の事業に至るまで各種の藝術的表現に滿されてゐる。藝術と言語とは人間の進歩の二つの機關である。一は心の交通を司り、他は思想の交通を司つてゐる。若しもその何れかが邪路に陥るならば社界は病まざるを得ない。然るに、今日の藝術は迷へり」と。

今日の藝術は何んな途に迷つてゐるのか。トルストイの説に從へば、それは特惠を貪つてゐる社界、遊惰社界に生れた不具な産物である。「生活する爲めに自から勞働しない社界の經驗する感情の範疇は勞働社界のそれに較べて甚だ狹いものである。現代の我等の社界の情操を大別すると凡そ三つとなる、曰く驕慢、曰く肉慾、曰く生の倦怠。是等の三つの情操とその枝とが殆んど藝術上の凡らゆる題目でないとはない」。新かる審美上の詐僞と富者の娯樂の矢面に立つて、我等をして生きたる人間の藝術の旗印を昂げしめよ。凡ての階級凡ての民族を共通せしむるやうな文藝を起さしめよ……と云ふのがトルストイの藝術觀である。

て、彼の考に從ふと、藝術品の價値の高下は、その作品が如何に多數の民衆に了解せらるるかの度合にありとする。この説は一時は多方面からの攻撃を受けたもので、嘲笑までされた傾がある。然かし彼の説明の方法が餘り極端であつたからにしても、この説には非常に未來の眞理が含まれてはゐまいか。實際今日の藝術には稍や專門的に過ぎた表現法が行はれてゐて、率直な感情の流露を遮げるやうなとはあるまいか。曩にも述べた教父ペトロフはトルストイと並んで露西亞農

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

民間に二大恩人とせられてゐる人てあるが、彼の經驗に由ると『カントてすら農民は了解することが能きる』と曰つてゐる。我等の藝術も亦その高い感情と深い思想とを田夫野人にまても呑込ますことの能きる表現法を採る道はないてあろうか。クロポトキンがそれに就て次のやうに言つてゐる。佛蘭西の歴史家ミケレーが既にこの事に考へ及んてゐたことから、地理學者のフンボルトが『コスモス』の大著て其れを企てて失敗したことを述べ、藝術の領地には近代人の斯樣な要求に近い者さへ無いことに言及し、

その理由はおのづから明かである。なぜならば藝術は餘り人工的になつたから。なぜならば、富んだ者ばかりを對手にする所からその表現法を餘り特殊なものにしたから。この點てはトルストイの說は全く正しいと言へる。それが證據には文藝上の多くの優れた作品を採つて見よ。そのうちの幾冊かが多數の公衆に親まれうるであろうか。斯うしてみると、實際新しい藝術が必要になつてくる。で、ある藝術家がトルストイの斯の思想を了解して、彼自身次の如く言ひうるやうになつた時に初めてそれが現實される。曰く『私は現代の高い教育を受けた優雅な紳士の內部悲劇を現はす高尚な哲學的作品を書くことも能きれば、自然の生命の深い智識と悄察を含んだ最高の自然詩をも綴ることが能きる。よし然らば、私にして眞の藝術家てあるならば、萬人に讀まれるやうな物の書けないわけはない。同じやうに深い思想を盛りながら、それが最下級の坑夫や農民にまでも理解され愛讀される物の書けないわけはない』と。

トルストイの藝術論の本旨は以上述べたやうな物てあるが、其議論には隨分極端な事まて言つてゐる。彼の論理は厭くまて大膽て獨斷的直覺的てある。曰くビートーベンのソナタより民謠の方が貴い、曰く『リア王』は愚劣な作品てあると。ローマン、ローランに言はせると、元來トルストイと云ふ人は文學以外の藝術には極くの素人てあつた。何時彼は繪畫を學んだか、何時彼は歐洲の音樂を聽いたか。人生の四分の三をマスコバイトの草田舍て暮らした人が、一八六〇年に一寸歐洲を觀て來ただけの人が、それも大急ぎて教育制度だけを視察して歸つた人が、歐洲の藝術などの判ろう筈がない。彼は又聞きてマネーだのモネーだのベックリンだのを引合には出してゐるが、ミケル、アンゼロを侮蔑したり、精神的畫家の中てレンブラントを否

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く知らなんだりしてゐる。音樂の方でも矢張少年時代の記憶を辿つてゐる位のものて、ストラウスを貶(けな)すやら、ビートーベンに物を數へるやら。それからワグネルの智識を得た爲めに『シーグフリード』の第一齣か始まつてから大慌てて席に着いたかと思ふと、二齣目の眞ん中で去つて了つたと云ふやうな始末だと。

文學の上でもトルストイは稍や田舍者の觀はあるが、流石に其道の天才だけに批評も正鵠に近い節が多い。その田舍者だけに却て彼は自分の作品を自個の天才にばかり任せて書いて古來の慣習に囚はれなかつたと云ふ貴い利益を得たことも多かろう。それから彼は『私の沙翁に關する意見は、全歐洲に亘つてゐる定説とは全然違つてゐる……私は沙翁を以て第四流の作家にも伍すべからざるものたることを證明しやうとする。性格描寫に就ては彼は全く零(ゼロ)である』(『沙翁論』)とまで極言してゐるが、その中には多少の眞理が含まれてゐやう。唯だ彼がイブセンを誤解してゐたことは由々敷缺點て無ければならない。恐らくトルストイは彼と時代を同じくした諾威の大詩人を熟讀吟味する機會を惜しんだのであろうか。

(八)

よく世間で言ふことだが、トルストイの後半生は殆んど全く文學を棄てて了つて、藝術家としての彼の活動は所謂『轉機』を境にして大半終つてゐるやうに推測するのは甚だ謬つた見解である。天才は假令自分で如何やうに忌避しても其筆を折れるものてない。トルストイは其人生觀や社會觀に於て新たに生れたやうに、文學に於ても矢張新しい方面に向つて新しい途を拓いた。内容ばかりでなく形式まて改造してかかつた。之か彼の偉大な點てある。凡そ普通の人が世の中に立つには専門の技能か大切である。なぜなら彼等はこれに據らなければ秀てることが能きないからである。然かしトルストイには其の尋常人に能きないことが能きた。そして彼は常に専門と云ふことに就いていたく忌み嫌つてゐた。彼の人生に於ける目的は、屢々繰返す通り、たゞ生きることであつた。生きつつ經驗に應じて彼は變つ

て行つた。いかなる經驗に對しても其的を失はずに容易に凡らゆる仕事を爲し遂げるとが能きた。恁うして彼は藝術家になつても專門家にはならなんだ。宗教家に變つても藝術をば忘れなんだ。内心生活の變る儘に其藝術の內容から形式まで變へて行くとが能きた。斯うして『イワン、イリッチの死』や『闇の力』や『クロイッエル、ソナタ』や『通俗物語』や『復活』や『活きた屍』などが出來上つた。

トルストイの前半生は、人間の『內部悲劇を現はす高尙な哲學的作品を書くとも能きれば、自然の生命の深い智識と洞察を含んだ最高の詩をも綴ることの能きる』眞の藝術家であつた。さらば彼は萬人に讀まれるやうな物の書けない道理はない。最下級の抗夫や農民にまでも理解され愛讀される物の書けない道理はない。彼がその『藝術論』で述べたやうな自覺に達してから後の最初の努力は、先づ農民の爲め下級の民衆の爲めに通俗な物語を綴るとであつた。彼の人民に對する愛は幼少のうちから養はれた。搖籃の中で物乞の歌うたひの聲に慰められた頃から、成人して立派な作家になつた後までも、彼は常に農民間に傳はる物語やお伽話に深い藝術的の趣味を味ふのであつた。『是等の農民は實に大家である』と彼は曰つてゐる。『復た私は古い頃、背嚢を負つて能く田舍の門口を通る漂泊者を呼止めて、一生に嘗ても耳にしたとのないやうな彼等の詞の言廻しに聞き惚れたとがある。その詞は我々の近代文學の會話の中には忘れられたものであるが、然かもいつも聞き好い健全な音の露西亞語である。……然かり言語の天才は是等の農民の間に在る』と。

斯樣にして彼は農民間に傳はる傳說を聞き、彼等の純粹な詞を記臆えて、之に由て萬人に讀まれるやうな物語を書き始めた。それ等の物語は形式も用語も極く單純簡明なもので、それでゐて藝術的の香ひに滿ちた高い淨い感情を盛つたものである。その中には福音書の精神と人間の友愛の至情とが素朴な農民の智慧の微笑の中に輝いてゐる。『是等の作品は近代文藝の中で唯一獨持の地步を占めてゐる。これ實に藝術以上のもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てある。なぜならば、之を讀みながら誰が藝術を思ふものがあろう」、とロ－マン、ロ－ランは言つてゐる。

マルチン(「愛のある所に神あり」)は或る田舍町に住む靴屋である。床下の狹い一間を借りて年が年中町の者の靴を直しては暮してゐた。値は安し品も充分吟味するので商賣は繁昌した。床の硝子戸から街を通る人の足だけを見て、直ぐ彼は誰々だと言ふヿを知つてゐた。凡そこの町の人の穿いてゐる靴で二三度は彼の手に懸らないものはない。マルチンは生來が正直者であつたが、老年は愈信心深くなつた。彼がまだ此の町で開業しない前は主人持で勤めてゐたが、幾年か前に連合を失くしてから暇を取つて獨立した。唯つた一人の三つになる赤兒を殘されて其妻に逝かれた時にはほと〱仕末に困つて、いつそ田舍の姉の所へでも預けやうかと思つたが、可愛相で手離せなんだ。そこでこの床下を借りて、自分の手鹽にかけてやつと手助けにもなろうと云ふ頃まで育て上げると、急に熱病で取られて了つた。マルチンにはほかの小供もあつたが皆若くて逝くなつた。彼の失望は何んなであつたろう。いつそ自分も死なうかと思つたほど慨き悲しんで、神も佛もない世と思つた。教會へも足を止めた。それから幾月か立つてから、彼の生れ故鄕の人で八年から諸國を巡禮してゐると云ふ者が尋ねて來た。色々と自分の不幸をその人に打明けて話すと、巡禮の言ふには此世に神樣の御座ると云ふヿは基督が敎えて與れた。お前は字が讀めるなら福音書を買つて御覽ん。恁う言はれたのでマルチンは早速新約全書の活字の大きなやつを買つて來てぽつ〱と見始めた。店を仕末つてから暗いランプの下で遲くまで讀み耽けるヿもあつた。その中の文句が何れだけマルチンの心を慰めたであらう。「彼は眼鏡を取つてその本の上に置いて、臂を机にもたせ乍ら考へ込むヿがあつた。」斯うして或る晩はその儘寢込んで了ふと、枕元で神樣が自分の名を呼んでゐらつしやる夢を見た。慌てて起上つて目を擦つて四方を見たが人の影もない。今度は戶口の方で、また『マルチン、マルチン』と呼ぶ聲が明かに聞えた、「翌日は街を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見て居れ、俺が遣つて來るから。』マルチンはまた眠つて了つた。で、翌日は早くから起きて店へ出て、通る人の足を見逃すまいとした。雪の降る寒い朝であつた。いつまで待つても神樣らしい者は通らなんだ。俺も餘程耄碌したわいと彼自身でおかしくなつた。ふと見ると隣の門番の翁さんのステパニッチがマルチンの窓の前の雪をかいてゐる。堪らない寒さにいぢけてゐるらしい。彼は氣の毒に思つて自分の室の中へ呼込んでサモーヴルの熱いのを御馳走してやつた。昨夜の夢の事を話したりして、二杯も三杯も茶を勸めた。そして神樣や福音書の話をしたので年寄のステパニッチは最う涙ぐんで茶どころではなくなつた。彼の去つた後でもマルチンは昨夜の夢が氣懸りて、街の方ばかり眺めてゐると、やがて一人の若い女がこの寒空に薄い紙衣で赤兒を腕に抱え乍らとぼ／＼と遣つて來た。マルチンはそれを呼び止めて、暖爐の火を起したり、着物を上から掛けてやつたりして慇懃に勞はつた。小供を下ろさせて温い食べ物まで御馳走した。女は十字を切つて食卓に就いたので、その間マルチンは赤兒の番をさせられた。『ちゆう／＼舌を鳴らしてあしらつたが、何分にも齒がないのでうまくいかない。赤兒は猶泣き出すので、今度は無格好な指を小供の口へ突込むやうにしては急に引もどす眞似をして見た。嚙ませては堪らない、靴の油で眞黑になつてゐる指だから、そのうちに赤兒は彼の指先を見つめてゐるうち泣き已んだ。』女の夫と云ふのは兵卒だが、既う八ヶ月間行衛が知れない。小兒が出來たので勤口も無くなつたのだと云ふ。マルチンは女に衣物を着せ、些少な金まで持たせて歸した。まだ窓先が氣懸てならない。すると戸外では林檎賣の婆さんが林檎を盜んだ小供を捉まえて大層怒號つてゐる。マルチンは驚いて道具を棄てて立つた。階子段に躓づき乍ら慌てて眼鏡を落したまま街へ出て仲裁した。終ひには婆さんも小供も喜んで一緒に歸つて行つた。マルチンは彼等の後影を見送つてから、階子段で眼鏡を索し當てて、漸く心を落付けて再び仕事に掛つた。最う火を點ける頃だと思つて、ランプを點火して

漸く一足の靴を仕上げた。一應検めて見てから、道具を仕末つた。それから聖書を披いてみてゐると急に昨夜の夢を思出した。何だか戸口て足音がするやうだ。振返つて見ると、暗い隅つこに人が立つてゐるやうにも思はれる。『マルチン、マルチン俺を知つてゐるか』と云ふ聲がする。

『何人てす』斯うマルチンが聲を懸けた。

『俺だ』と云ふ聲がして暗い隅にステパニッチが立つてゐる。笑ひ乍ら雲のやうに消えて、最う見えない。

『俺だ』斯う云ふ聲がまたしたかと思ふと、今度は女が小供を抱えて暗から出て來た。女はほゝえみ赤兒は笑ひ乍ら復た消えて行つた。

『俺だ』と云ふ聲が三度した。婆さんと林檎を持つた小供が現はれて、二人とも笑ひながら、復た消えて了つた。

マルチンの心は悦びに燃えた。彼は十字を切つて、再び眼鏡を懸けて聖書を讀み始めた。『爾曹この兄弟のいと微者の一人に行へるは即ち我に行しなり』と云ふ句が出た。マルチンは昨夜の夢の事實てあるとを覺つた。彼は今日救世主を迎へたのだ。

古來の文學者て誰が斯様に素直な物語を綴り得たてあろうか。其處には單純自然な藝術もあれば、トルストイには稀なユーモアもあり、殊に其結末は超自然の光に包まれてゐる。近代の文學に斯様な超自然の分子を加へて成功したのは恐らくトルストイに限られるてあらう。

時として斯様な物語の中には露西亞流の神秘見が露西亞流の冷酷な姿を採つて現はれてゐるのがある。『三つの死』の中て肺病の馬丁を死なしたやうな死態を、トルストイは『どれだけの土地を人間は要するや』の中て百性のパホムにさせた。パホムは中年まて滿足して田舍の狭い土地を耕してゐたが、ある時其の土地の地主が領地を切賣すると云ふのてパホムも慾を出して、今まて溜めた金を出して一角の地主になつた。すると亦或る日ヴォルガ河の方から來たと云ふ旅人から聞くと、其方面には廣い未懇の土地が在つて、誰ても移住する者には頒けて呉れると云ふとを聞いた。パホムは早速其方面へ出掛けて百二十五「エーカー」からの土地を得た。けれども二三年經つて見ると、矢張何かと不

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

都合なとが起つてくる。パホムは復た慾を出して、今度は從僕一人を連れて三百哩からの道を歩いてバシュキル地方へ遣つて行つた。その地方では一千留（ルーブル）拂へば、一日歩けるだけの土地を呉れるのだと云ふ。日出から歩み出して廣い際限のない曠原を廻つて、大陽が草原の中に遁れるまでに復たもとの位置に歸つて來ると、その人の廻つただけの土地を貰ふとが能きる。然るに萬一その人がその時刻にもとの位置まで戻れないものとすると、其金はふいになつて了ふのだ。で、パホムの歩いた日は至て暑い日であつたが、歩き出して見ると眼の前へ何處までも沃えた高原が廣がつてゐるので、一歩々々と先へ引きつけられる。パホムは精限り魂限り飛んで馳けつて、漸く出立點へ近いた頃には、既う日が暮れかかつてゐた。身體（からだ）は綿のやうに疲れてゐた。

丘の上には會長が地面に座つて彼の馳けつて來るのを見てゐた。會長は兩手で腹を抱へながら笑ひころげてゐた。その前へパホムが倒れた。

「やあ、でかしたぞ大將」と會長が叫んだ、「貴公は大變な土地を儲けた。」

パホムの從僕は慌てて飛び出して來て彼を起した。然かし彼の口からは最う血が流れてゐた。パホムは死んだ。

會長は其處にあつた鶴嘴を從僕に渡し乍ら曰つた。

「埋めてやれ」

從僕は一人（ひとり）でパホムの爲めに穴を堀つた。丁度頭から足まで六尺位。そこへ彼を埋めた。

斯樣な通俗物語を公にするに就ては彼の弟子のチェルトコフやビルコフが骨を折つて、莫斯科の小さな一出版會社から出させた。ビルコフの話に由ると、どの物語も大概一版に二萬四千部以上づつ刷つたが、それが一年には五版位出る。で、五年間に賣つた總高を調べて見ると約壹千貳百萬部に上つてゐる。加之（しかのみならず）、是等の出版物には版權が無いので他の書肆でも版を起してゐる物が多いと。

（九）

一八八六年にはトルストイは『イワン、ノリッチの死』を書いた。この歳は彼の後半生で最も文學的活動

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の劇しかつた歳である。一八八九年には彼は『クロイツェル、ソナタ』を書いた。純朴な百性の智慧の微笑を見るやうな通俗物語を書いてゐるてまに、彼は斯樣な中等社會の腐廢墮落を痛罵した物を綴つた。丁度チエーホフが同じやうな題目で數限りない短篇小說に筆を下してゐた頃である。この靜平な客觀詩人ですら、時には「インテリジエンチヤ」の無意義な生活を骨までも憎まざるを得なかつた。『彼はアポギンをも其妻をもパブチンキスーをも、斯うした薔薇色の薄明と花の香の中に住むやうなあらゆる社會の者をも責めた。彼は苦痛を感じたほど是等の人々を憎み蔑むだ。て、心の底までも彼等の生活の無意義を自覺した』とある(『二つの悲劇』)。

『イワン、イリッチの死』には陰欝な寫實を以て極く普通な所謂賢こい俗人の一生とその死とが敍してある。彼は相當な家柄に生れて、或る法律學校を出てから司法官になり、勤勉て吏才にも長じた上に官界遊泳術をも心得てゐる所から、何處でも尊敬せられて段々と官等も上つて行くうち、遂には聖彼得堡て一かどの役人になつた。世間並に賢こい處置を採つて妻君をも迎へた。相當に官吏としては威張りたがる。虛榮心に訛されて、有勝な家庭のいさくさもまぎらして行く。是が無事平穩に續いたら文句はないのであるが、世の中はさう甘くばかり行くものでない。

輕薄、虛榮、傲慢、不信、嫉妬、無意義——恁うした笑ふべく悲しむべき生活は、笑ふべき些細な事件から全く崩されて了つた。彼は一日其部屋の窓掛を直す爲めに梯子から墜ちて腹部を打つた。初めはたいしたとてもなかつたのだが、それが元になつて數十個月間苦み上げた。三日三晩も呻吟り續けるとがある。二つ離れた部屋からでも恐らしくて聞いてゐられないほどである。

『うう！うう！うう！』と云ふ聲が高低して聞えて來るかと思ふと、今度は『死にたくない、死にたくない』と叫び出す。それから『う——』と長い呻り聲が跡を引く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

長い苦しい病中に何れだけ彼は世の中を果敢なみ憎んだであらう。虚僞——生活の虚僞、病氣の虚僞、醫者の虚僞、妻子の虚僞——否ろ露骨な世界的虚僞に。然り、彼の一生も亦全き虚僞ではなかつたか。彼は『爾の今迄送つた生活、今後も送ろうとする生活は、再自身から生と死を隱くす虚僞である』と云ふ聲を聞いた。然かし『まだ遲くはない』恁う彼は考へた。誰か彼の手に接吻する者がある。見れば自分の小供だ。其處へ彼の妻君も這入つて來た。イワン、イリッチは彼等を憐んだ。病氣になつてから一日も不快に感ぜなんだとのない骨の底までも憎いと思つた彼等の動作も今は彼を慰めた。さうだ、早く死んで彼等に迷惑を掛けないやうに爲やう。

『連れておいてこの子を……可愛相に……お前も行くが可い』

妻に目くばせしながら、恁う彼は曰つた『それから『免してくれ』と言ひたかつたが、たゞ『心配するな』と言つて見た。急に氣が輕くなつた。

『苦痛よ、お前は何處へ往つたのだ。……よし、お別れとしよう。今度は死だ。お前は何處にゐる。』

死のかわりに其處に光がゐた。『見よ、何たる喜ぞや』恁う彼は叫んだ。

彼の肉體の苦痛はそれから約二時間續いた。何んだか彼の胸の中で躍つてゐた。彼の衰弱した身體は次第に腐つて行つた。

『遂々お了ひだ』恁う誰だかが囁いた。

彼は其言葉を聞いてゐた。そして自分の心の中で繰返して見た。死んだのだな。最うこれ以上死につこはない』恁う思つた。

彼は深い息を引いて、半ば呻つて身體を延ばした。そして絶命した。

『クロイツエル、ソナタ』は作者が『イワン、イリッチの死』で狙つたやうな世界の虚僞に對する更に手痛き抗撃である。女の僞善に對して、戀愛の僞善に對して、結婚の僞善——『家庭的淫賣』——に對して、あらゆる社會の僞善に對して。然し、何たる赤裸々の筆であらう。何たる深酷の描寫であろう。古來から人間の獸性に對して恁くまで手痛い抗撃が他にあろうか。果然、トルストイの寫實は彼自身をさへ驚かした。『クロイツエル、ソナタの結論』の中で彼は斯う言つてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私は全くこの作を爲すに當つて、峻嚴な論理が斯樣な風に私を運ばうとは思ひ設けなんだ。私自身でした結論が先づ私を驚かした。で、私は何うかして之を避けやうと思つたが、然かし私の理性と良心の聲を斥かない譯にいかなんだ」と。天才の本能が作家を連れ出して、知らず〲の間に思想家の殼を脱がしめた。世界の藝術が時々とんだ所で意外な拾ひ物をするのは、斯樣な譯合からである。『その效果の力に於て、その情熱的集中に於て、其印象の野性的明白に於て、其形式の充全と成熟に於て、トルストイの如何なる作も之に及ばない』と、ローマン、ローランは評してゐる。『彼はいつも苦悶の情態にあり、また感激の情態にある。彼は決心しなくてはならない、そして人類の平和を增進する所のものを發表せなければならない。決しなければ言ふことが能きない。そして翌日は既う遲い、彼は死ぬであらうから……。』で、トルストイのやうな天才は墓の前まで苦悶し勞作する運命を持つてゐる。彼は實に七十歳にして大作『復活』を成し遂げたのである。この書は現代の良心を支配するとまで謂はれ、「基督的ゲーテ」の著書であるとも謂はれてゐる。さもあれ、斯樣な大作を紹介し解剖するとは短い論文の及ぶ所でない。

既う十二三年も前であつたらう。私がまだ學窓にゐた頃、丁度出たての『復活』の英譯を買つて讀んだことがある。私が初めてトルストイの物に接したのはその時であつた。私達はどんなにか驚嘆して頁から頁を繰つたであらう。大都會にも春が來れば、並樹通りの芝生や石疊の隙から雜草が蘇つて、柔らかな香ひのある若芽を吹出すと云ふ書出しから、昇天祭の日の春野の遊びに若い男女が連翹の木叢の蔭で無心の接吻を交はす所から、それから三年後の彼の晩ネフルドフが罪のないカチューシヤを誘惑する條などが、何れだけ私達の心を唆つたであらう。丁度初つ春のことで、濕め〱と溫かい暗の夜を白い霧が一面に立罩めて殘んの雪を解かすと、解けた雪からは復た霧が上つて、僅か五六步先きは既う何も見えない。丘下の『河の方からは氷が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

解けて、泣くやうな、物の缺けるやうな、割れるやうな、鈴の鳴るやうな奇妙な音が斷間なく聞えた。すると餘り遠くない處で突然鷄の聲が濃霧を劈くと、忽ち何處かで直ぐ啼返し、繼いて村の遠近、彼方でも此方でも一時にコッケーコーと合唱して夜の寂寞を破つた』(内田貢氏譯)。女部屋の窓からは薄ぼんやりした小さなランプの影が差してゐる。その窓の下で自分の胸の動悸と奇妙な川の音に耳を傾けてゐる青年、部屋の中に悄然とテーブルに向つて目的なく凝視めてゐる夢みるやうな女――是等の條下が何れだけ私達の新しい詩情を誘つたてあらう。人間の青年期にその眼を醒ましてくれた書物は、例へば初戀のやうなもので、何時ても鮮やかな印象を殘してゐる。然かし今改めてこの書に對ふと既う昔の幻影は跡方もなく消されてゐるが、更に新しい意味で我等を牽き引ける。

それは恁うてある。よし、この書の主人公のネフルドフが著者の教義の傀儡であるにしても、くだ〳〵しい說法が全篇に繰返されてゐるにしても、それが少しも描寫の筆を濁してゐないとである。說法と寫實が毅然と對立して、宗教家が藝術家を冒してゐないとてある。トルストイの宗教は段々と神秘の霧に閉されたが、七十年のその歲まで彼のリアリズムは却てより精錬されより擴げられて來た。世間には能く彼の『轉機』を心的老衰に歸する人があるが、左樣に變調な心の働を持つた人に、彼のなしたやうな正當な觀察と描寫が能きたてあらうか。否、彼の見る世界は彼自身の神經に累せられるやうなとが無かつた。何んなに悲慘な經驗ても彼の判斷までは鈍らせなんだ。沙翁すら『惡善のタイモン』を書いた時は人生に對する偏見と恐怖心を免れなんだが、トルストイには志操の迷忘も不安定も、努力の不充實もない。よし彼の作中に挾まれた意見が何れだけ馬鹿げたものであつても、それが彼の描かうとした事件や性格を誤つたとはない。彼の說法は到て表はて無邪氣て、假令へ其目的の爲めに出された人物までが唯だ其口を貸すだけのとてあつた。彼のは人間は厭くまで人間であつた。斯う見てくると、誰がトル

ストイの晩年の心的健康性を疑ふことができやう。彼の天才は死ぬ境まで圓熟を續けた。

「理性」と『愛』がトルストイの心中に獨立して存在した。ゴーゴルは晩年愛の爲めに理性を棄てて神秘宗に歸依し、フローベルは愛を斥けて理性に據つてゐたが、トルストイは觀照意志と實行意志を相傷けることなしに並行させることが能きた。彼は同時にルッソーでありフローベルであり得た。然り、『復活』はこれ等二人者の合作と見ることが能きる。偉大な天才の心靈には如何に矛盾した思想でも、安全に其處を得べきである。

トルストイの天才の驚くべき發露は『暗の力』である。彼はこの戯曲を全然百性の言葉で書いた。その爲めに彼はそのノート。ブックを漁り盡したとある。盲目な農民生活の間に起る悲劇、盲目な意志の努力——善の方へも惡の方へも——冷酷な野性、原始的な宗教の力、是等のもので其一篇が成立つてゐる。

金持の百性のピーターがアニシヤと言ふ若い女を後妻に貰つた。その家にニキタと云ふ作男がゐて、それがアニシヤと不倫な戀に落ちた。ニキタがまだ鐵道工事に傭はれてゐた時分、孤兒のマリヤと云ふ娘を瞞したことがある。ニキタの父親のアキムがそれを聞知つて、ニキタにマリアと結婚せよと言つて迫る。このアキムは作者の『創造』した人物のうちでも一種獨特なもので、理性も明らかでなければ、口をきかしても甚だ要領を得ない到て頭の惡るい翁さんだが、それでゐて神を恐れる念が深く、正義の觀念だけは非常に發達してゐた。然るに母親のマトリオナは之と正反對で、利己主義の極端まで發達した冷酷の人物である。惡い智慧なら何處までも利いて、何んな大罪でも平氣で遣り遂げる。で、自分の小供が主婦のアニシヤと怪しい關係に爲つてゐるのを嗅ぎ知つて、老主人のピーターを殺害させて、ニキタを其跡釜へ据へやうと企てる。舞台の隅には何時も聖像(アイコン)が安置して在つて、誰でも其部屋へ這入つて來る者は必ず先づ其前で十字を切る。大罪の計畫(たくらみ)をしてゐる鬼婆のマトリオナでもアニシヤでも同樣に。で、ニキタは母親に唆かされて、孤兒のマリ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

アとは全く關係が無いと言ひ切るのだが、獨りて其部屋の中にゐると何うも氣が咎める。『何だか聖像の前で怯んな誓を立てるのは異なものだなあ、俺は心持が惡るい』と言つて、急に燥ぎ出して之を紛らす。

マトリオナとアニシヤは愈々大罪の實行に取掛つて、主人のピーターに毒を盛る。所が、仲々急に死にさうもないのに、ピーターの妹のマルフアが遣つて來さうだ。ピーターは薄々彼等の企らみを嗅知つて、金を隱して了つて妹に手渡しやうとする氣配が見える。マトリオナは氣が氣でない。內々主人の身體に觸つて見ると確かに金がある。マルフアの來ないうちにと云ふので、無理に復た茶の中へ毒を盛つて、遂々ピーターを殺して了ふ。金はニキダが預ると云ふ段取になる。罪は更に罪を產んで、三幕目ではニキタがピーターの先妻の子の十六歲に成るアクリナと云ふ娘を無理やりに手に入れて、其子が長女として父の財產を繼いだやうに裝はせる。が、アクリナにも新郞を採らせなければならない時が來た。然るに彼女は既うニキタの種を宿してゐて子供を產んだ。其赤兒の處置を附けるに就いて、母親のマトリオナは復たニキタを唆のかして之を殺させやうとする。アニシヤはアニシヤで段々ピーターの寵を失つて來るし、夫を毒殺してから兎角神經に異常を來してゐるので、之も無理やりにニキタに强いる。

『何うしたつて自分獨りを罪人にするわけに行かん。ニキタも人殺しの仲間に入れてやろう。思ひ知らしてやろう。』

て、ニキタは遂々强いられて厭々ながら其子供を殺すとになる。『俺は穴藏の中へ赤兒を入れて板で壓し付けた。俺はその上へ座つて壓しつぶした——すると骨がミリ〳〵云つて碎けた。俺はそれを埋けた。

然るに其犯罪の半ばて、彼は最う堪らなくなつて飛び出して了ふ。氣も轉倒して來る。

ニキタ。　まだ生きてゐる。どうも困まつた。まだ生きてゐる。
アニシヤ。　生きてゐる者を、お前はその儘棄てて置かうとお言ひか。
（ニキタを留めようとする）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ニキタ。 よせこの阿魔め。貴様を殺すぞ。貴様を殺すぞ。貴様を殺すぞ。よせと言へば。

マトリオナ。 この子は全然驚いて了つたのだ。まあ／＼今に氣が落付くだらう。

ニキタ。 何と云ふ事を俺にさせた物だ。赤兒め、ぎやあ／＼泣きやがつた。……から音を立てて俺の下で潰れ居つた。まあ、何たる事を俺に爲せたものだ。……まだ生きてゐる、實際生きてゐる。（耳を立てて聞く）泣いてゐる……それ其處に泣いてゐる。（また穴藏へ驅け込む）

舞台の隅のアイコンは一部始終を眺めてゐる。今迄も眠つてゐたのではない、待つてゐたのだ。Vengeanceが來た。次の幕のアクリナの結婚の席でニキタは遂々自分の罪惡を懺悔してマリヤやアクリナに宥を乞ふとになる。彼は初め庭で首を縊つて死なうとしたが、兵卒上りの酔つぱらいの老庭守の言葉からふと氣が變つて、公衆の前へ出て自白する。ピーターを毒殺したとまで自分の罪として引受ける。この庭守がまたアキムと同じやうに、トルストイの發見した獨特の人物で、世界の文學に類例のないものだ。バーナード、ショーがトルストイに遣つた手紙に次のやうに言つてある。「貴下の「暗の力」の中へ出てくる老兵士ほど古今の戯曲の中で私を感動させたものはない。……信心深いお人好の父親でさへ能きなんだ事を、この老兵士が、恰も彼自身神の聲である如くに仕遂げた。あの二人の酔漢（ニキタと老兵士）が藁の上を轉び廻つてゐるうちに、老ひぼれめが一方の若者を捉まへて其怯懦と利己心を棄てしめる所の光景は物語以上の感動を私に與へた」と。

要するにこの劇は無智と名のつく罪の重荷を負つて暗い土の上を匍ふ廻る者の悲劇だ。その中には野性の冷酷がある（赤兒を殺す一段の如き）、また自然その儘の悲哀がある（秋の夕暮に恐ろしい犯罪が裏の穴藏の中で行はれてゐる時、表戸では老兵士の作男が枯草を掻集めてゐる、部屋の中では十歳になる小娘が虫の知らせか身も縮むばかりに怖ぢ恐れてゐる）。殊には最後の幕で神信心のアキムがニキタの懺悔を聞いて、自分の子の不幸を悲しむとをも忘れ、却て其言葉に聞惚

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れる一節の如きは暗き自然の冷笑を深く思はせずにはゐない。

部屋の隅の聖像(アイコン)は沈默の眼を睜つて、ピーターの毒殺をも視た。アクリナの誘惑をも視た。アニシヤの物狂ほしい姿をも視た。恐るべき小兒の殺戮をも視た。ニキタの懺悔の場も視た。遂に『神の仕事は爲された。』超自然の力が重く舞台一面を取卷いてゐる。

自然と超自然が人間の身體(からだ)で戰つてゐる悲劇だ。シエクスペリアン、ドラマだ。然かも『マクベス』などよりは更に更に力強い運命劇だ。

(十)

晩年が來た。後生涯の初めからずつと天才の一身に附纏つた悲劇は次第に其度を高めつつあつた。

前にも述べたやうに、トルストイの晩年は實に孤獨寂涼なものであつた。第二の危機(クライシス)を經てから、社會的罪惡を敵として戰ふべく決心はしたものの、自分に最も近い家族の者にすら其信仰を頒けるとの能きなかつたと云ふとが第一に彼の途に横はる障害であつた。彼はその爲めに何れだけ苦しんだか。財産の私有を根本の罪惡として公言した彼もその妻の異議に逢つては、宏大な地主としての自分の地位をすら脱するとが能きなんだ。て、彼は自分の言行の矛盾をも、世間の之に對する批難をも能く心得てゐた。『私の事業がある一部の人の間には何れだけ有益に見えやうとも、私の生活が私の告白と全く一致しない間は、それ等の事も大半無意義に終つて了ふ』と自分で言つてゐる。英國のジョージ、クンナンの『杜翁訪問記』に次のやうな一節がある。

翁は眼に涙を浮べて、熱心な調子で話出した。

『人がよく私に恁う言つて呉れる、「レオ、ニフラエヴィッチよ、お前は説教はよくするが、自分の實行は何うだ」と。實際この問は自然である。いつもさう聞かれる度に私は言葉が出ない。

「お前は説教するが、自分では何んな生活をしてゐるのか」。

私は是に恁う答へるほかはない。私も説教したいと

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は山々だが、然かし說敎はしない。私は自分の行爲でなら說敎も出來やうが、然かし自分の行爲が惡いのであるから覺束ない。私の言ふとはあれは說敎てはない。唯だ人生の意義を發見したいと云ふ自分の努力に過ぎない。また、人が能く私に恁うも言つて吳れる。「もしお前が基督敎のほかに正しい生活がないと考へるなら、なぜお前は基督の敎を遵奉しないのか」と。

實際罪は私にある。私は非難すべく輕蔑すべき人間だ。なぜなら私はその敎を實行するとが能きないからだ。然がし——決して私は自己を辯護する爲めではない、自分の矛盾を說明する爲めに言ふが——私の前生涯と今の生活とを比較して見てくれ。兎に角私がその敎を遵奉しやうと努めてゐるとだけは解つてくれるだろう。尤も私がその聲の八萬分の一も實行してゐないとは確かだ。私は批難さるべきだ。然かしそれは私に殉敎の意氣志がないからではない。私の弱い爲めだ。どうぞ、私の懸つてゐる誘惑の網から救ひ出す方法を敎えて吳れ——助けてくれ。たとへ人の力を藉りるまでもなく、私自身も努めてゐる。どうぞ、責めるなら責めてくれ——私自身も自分を責めてゐる——然かし、唯だ私を責めてくれ。決して私の行く道を責めてくれるな。若し私の歸るべき家路を私が知つてゐたとしたら、私が泥醉してその道を千鳥足で步るくにしても、それが其道の惡い證據になるだらうか。若し、私が蹣跚として迷ふやうなとがあつたら、どうか來て私を助けてくれ、さうして安全な道に導いてくれ。貴下がたが殊更に私を迷はして側路に連れ込んで、「野郎見ろ、自宅へ歸るつて、あんな沼に塡り込んだ」と、言つて笑ふやうなとがありはせまいか。貴下方も沼の主てはない。矢張人間であつて見れば、私が獨りぼつちで、何も醉狂に沼に塡りたくないとを知つてゐるなら、萬望、私を助けて吳れ。私の心は失望で破れさうだ。なぜなら我等は總て道を失つた。それで、私があらん限りの力を出してその道を搜して ゐるのに、貴下方は私を憐れとも思はないで、「御覽、野郎も矢張沼におつこちた」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と。言つて笑ふ積りてあるか』

なぜ、彼は自分の信仰に殉せなんだのてあるか。若し自分の家族が自分の行く途を妨げるなら、足手纒ひを斷つて自分獨りにさへならば、身輕て行を澄すとも能きやう。世間の批難から免れるとも能きやう。昔から世を捨てて閑雲野鶴を伴とした高士も世には尠くない。何の宗敎の歴史を見ても恐れず撓まず道の爲めには自分の周圍から脱却し得た哲人使徒の幾人かを數へることが能きる。然かしトルストイにはそれが能きなんだ。彼も其事を思はなんだわけてはない。幾度が家出を覺悟しながら、何時も果さずに了つた。なぜなら、彼は餘りに弱かつたから。なぜなら、彼はその隣人――『我等と與に住み、我等の行く道に横はり、我等に迷惑を掛ける者』を第一に愛しなければならなかつたから。なぜなら、彼は脱俗者のイゴイズムを缺いてゐたから。然り、彼は弱い『人間』てあつたから。

満足と傲慢の伴つた超世的のイゴイズムよりも、羞恥と未練の附纒ふハンブルな人の子のイゴイズムの方が何れだけ親しみ易いてあろう。『若し人が私を餘りに豪い者にとるならば、私の失錯は一々虚僞か僞善に見えるてあろう。然かし私を一人の弱い人間と考へて呉れるなら、初めて實際の私が解かる。私は憐むべき、しかし正直な人間だ。斷えず自分の全精神を擧げて一個の善人に成ろう忠實な神の婢僕に成ろうと努力する人間だ』と、彼自身て言つてゐる。

何れだけ彼は其晩年に苦しんたてあらう。死後彼の筐底から伯爵夫人に宛てた手紙が幾つか出た。皆な逝世の意を仄めかしたもので、載せてビルコフの傳記にある。それ等を見ると、天手の不幸な孤獨な晩年を思ひ遣ると與に、彼の一生を諒する情を禁じえない。

親愛なるソフイーよ。私は永年自分の生活と信仰の矛盾に苦しめらてゐた。私は御身に其生活法や習慣を變へよとは強いられない。それかと云つて今日まで御身等と別れるとも能きなんだ。まだうら若ひ小供を殘して、些さかたりとも自分の感化を與へずに行くのも殘念なら、また御身に非常な苦痛を與へるのも忍びなんだからである。然かし過ぎし十六年間のやうに、或る時は御身と爭ひ、或時は御身の氣を激らだたせ、或時は今迄馴れた周圍の快樂に身を任せたりし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て生活するのは、最早私には堪えられなくなつた。依て私は今、久しく決心してゐたことを實行しやうと思ふ。この家を出て行かうと思ふ。……その昔印度人が六十歳にして森に隱れたやうに、年老つた宗教家がみな其晩年を神に捧げたやうに、私も今日全力を擧げて安息と孤獨を索め、私の全生活と良心との間に絶對の調和は得られないにしても、今迄のやうな切迫して矛盾だけは避けたいと思つてゐる。若し私が公然家出をすることになれば懇願や論爭が持上つて、私の心は緩み、志も挫けることであらう。されば、若し私の今度の行爲が御身に嘆きをかけるやうなことがあつても、萬望宥して呉れ。殊にはソフイーよ、御身自身だけは快く私を去なしてくれ。決して搜してくれるな、怨んで呉れるな。私が御身を棄てて去るのは御身に慊らない證據ではない。……私は御身を咎めないばかりか、却て過去三十五年間のわれ等の共棲生活を愛情と感謝を以て記憶えてゐる。殊にその前半期に、御身は慈母の勇氣と情愛もて何んなに忠實に御身の任務を果されたであらう。御身は私へも世界へも御身の與ふべき物を與へて呉れた。御身は溢るる母の愛情をも濺がれ、多大の犠牲をも拂はれた。去れど我等の生涯の最後の十五年間に我等の途は疎隔した。私は自分に罪が在るとは思へない。私の生涯はそのうちに變つた。それは自分の爲めでもなく世界の爲めでもない、變らざるを得ずして變つたのであるから。然かし、私は御身か私の道に從はなんだのを更らく咎めるわけはない。却て御身の過去の愛をばはぐくみ愛しむであらう。

さらば親愛のソフイーよ。

一八九七年七月八日

御身の愛する　レオ、トルストイ

誰か之を讀んで偉大な孤獨の精靈の晩年を憐み親しまない者があらう。誰れか Milk of human Kindness を味はずにゐられやう。

一九一〇年十一月十日の朝が來た。トルストイは多年の内心の要求に追はれてヤスナヤ、ポリヤナの莊園を出た。『一つの壁も慰みの種だ』と言はれたほど住み古した其家を棄てて目的もない順禮の途に上つた。數日の後、彼は不思議の運命に伴つて其死の床に音づるる神の姿を觀た。南露西亞の淋しい停車場——オスタポの赤塗の小さな小屋で我等は圖らずも遠いガリレヤの悲劇に似た最後の一齣の演ぜられたのを見た。『世の中には苦んでゐる者が數限りなく在るのに、なぜお前達は私にばかり氣を取られてゐるのか』、斯う言つて彼は死んだ。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(十一)

『人生は運動てある』と、トルストイは言つた。彼の心中にはその昔若い頃にレビンやネフルドフのしたやうな懷疑、斷えざる不安が老年までも附纒つてゐた。その晩年に彼は次のやうな小說を書いて見たいと思つてゐた。――茲に一人の若者が在つて、初めは革命黨から、平民黨となり、社會黨となり、正敎信者となり、アフォーンの僧侶となり、それから一轉して無神論者となり、善良な家庭の父となり、最後にデューホーボル宗に歸依する。彼は何んなものでも取入れ、また何んなものでも捨てる。なんにも爲ないでゐる所から、世の人からは愚弄され、遂に忘れられて、病院で無慘な最後を遂げると云ふのだ。『死にながら彼は自分でその一生を浪費したと思ふ。然かし彼は一個の聖人である』……

『人間は自分自身の不安を神に謝さなければならない。人生の破調即ち人生の記章である。……人間が靜平にして自己に滿足するは惡いとてある』と。て、トルストイほど人生の色々な經驗に生き、色々な懷疑を閱みした者はなかつた。彼の心には何時も色々な思想感情が蟠つてゐた――ある時は調和し、或時は反目して、寧ろ多くの場合激しく軋轢して。世人の强ひて求めたがる統一は彼の思想にも信仰にも無かつた。それはたゞ彼の感情の劇しい衝突と苦悶のうちに在つた。一生八十二年の長い惡戰苦鬪には、人生のあらゆる力が加擔した。强い肉慾も、極度の憎惡心、嫉妬心すらも。『彼は幸福と不幸とに同時に醉つた。死と不滅とを同時に飮んだ。彼の自己生活の否定はやがてより高い外面生活に對する叫である。彼の發見した平和、彼の求欲した心の平和は死の平和ではなかつた。それは寧ろ無窮の空間を重力の法則に據て航進する彼の焦熱世界の靜寂である。彼に在ては憤怒は靜寂であり、靜寂は火焰であつた』と、ローマン、ローランは言つてゐる。

その一生の戰を最も好く象徵したものは幼時から晚年までの彼の肖像である。

モードやビルコフの傳記を披くと數多くの彼の寫眞

像や畫像を眺めることが能きる。元來少青年のトルストイは至て醜い容貌をしてゐた。一八四八年に彼が大學を卒業した折の寫眞（モード著『トルストイ傳』上卷第四拾八頁）を見ると、濃い硬はさうな髮の毛を厚く前額に垂れて、小さい窪んだ眼が意地惡る相に光つてゐる。無格好に大きな鼻と厚い脣とがいかにも不釣合に並んで、其耳がまた馬鹿に大きい。總體が陰氣な殘酷さうな顏をしてゐる。彼の少年時代には、何でも自分の容貌の醜いことを非常に苦にして、一生の幸福もその爲めに破られたやうにまで思つてゐた。て、ある時は神の奇蹟で之を直してくれるやうにて祈つたことさへある。それから暫く經つて一八五六年に彼がグリゴロヴイッチ、ゴンチヤロフ、ツルゲーネフ、オストロプスキーなどと一緒に撮つた寫眞、その翌年矢張ツルゲーネフ、グリゴロヴィッチ、ネクラゾフなどと一緒にとつた物を眺めると當時の彼の態度が明かに讀まれる。彼れはまだ其頃三十歲に滿たない青年であつたが、急に文學者としての名聲を昻げた。隆とした軍服姿で、是等の寧ろ質素な柔和な老大家の中にひとり傲然として立つてゐる。きついまなざし、不安な瞳、不確實な口元には羞恥と驕慢が相鬪きてゐる。ツルゲーネフが或時トルストイを評して『彼の一大汚點は精神上の自由の缺乏である』と言つた言葉を考へさせるやうな肖像である。

然るに時は過ぎた。天才の心中ではいろ〳〵な經驗や苦悶が行はれた。次第に精神の自由と權威が現はれて來た。最早その容貌には不安な瞳も不確實な口元も失くなつた。一八七三年にクラムスコイの描いた肖像を見ると——長い髮を後ろに波打たせて、漆黑な顎髯が喉まで垂れてゐる——深い理解力と意志の集中を思はせる。更に一八八四年にゲーの描いたもので（モード著書下卷第一九一頁）トルストイが机に向て筆を下してゐる肖像があるが、其雄大な態度は丁度晩年のイブセンを見るやうだ。その偉大な沈着と注意力とで、何を彼は觀察し、何を思索してゐるのであろうか。尠くとも斯樣な人の筆から現るものが虛榮であり空疎で

あるとは誰に思はれやう。

トルストイの肖像のうちでも一八八五年に撮つた寫眞ほど世に行渡つてゐるものはなかろう。それは丁度彼が第二の危機に出逢つた頃の物である。彼は百姓の上衣を着て、革帯を腰に締めてゐる。矢張その土地の百姓流に長い髪を眞ん中から分け、蓬々たる顎髯が組んだ手の先まで達いてゐる。頭髪はまだ黒々としてゐるが、髯には既う眞つ白く霜を置いた。額は廣々と出て、深い幾條かの皺が顔中を埋めてゐる。彼は苦んだ。その口元や太い皺の中にはいかにも慈悲深い相が現はれてゐる。その眼を看よ。何んなにか正直な透明な色て我等に見入つてゐるかを――憐みながら、訴へながら、そして我等の心の奥底まで讀みながら更に看よ、瞼の下には深い條が喰込んでゐる。彼は泣いたのだ。その容貌には稍や神秘家の面影が無いでもない。然かし彼は力である。彼は戰ふべく用意してゐる。

彼の戰場は大自然である。レピンの描いた傑作に一人の老農が耕作に従事してゐる圖がある。遠い森林を背景とした曠原で、彼は露西亞流の木の鋤に二頭の白馬を鎧へて重い土を耕してゐる。彼は柔かい帽子で照付ける日を避け、青いシャツの胸を廣げて毛だらけの膚を露してゐる。勞働よ、戰よ。いかに莊嚴な姿であろう。で、この老農は露西亞の貴族である。トルストイである。然かし彼の廣い肩、大きな鼻、髯武者な顔には昔からのムジックの面影が其儘輝いてゐる。彼は農夫の言葉も使へば賢こい老農のやうに考へるとも能きた。然かし何たる驚くべき農夫であろう。彼は何を耕さうと云ふのか――露西亞の肥えた「黒い土」の中から、マスコバイトの民の心の中から――農神ミクラのやうに、國民的祖先ムロムのイリヤのやうに。

晩年になるほどトルストイの容貌は變つて來た。髭も髯も白色に染つて、其大きな顔の皺は次第に深くなつた。ます〳〵柔和になり益々寂涼の色を帶びるやうになつた。失望、不健康の相をさへ加えた。然かし彼の長い純白な眉毛の下に隠れてゐる眼からは相變らず深い洞察の光を發つてゐた（モード著書下卷々頭）。そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れから、彼が伯爵夫人と與にクリミヤ海の岸邊に佇んで殿打つ波に眺め入つた光景は何に喩へやう（ピルコフ著『トルストイ傳』第九十頁）。彼は何を觀、何を冥想してゐるのであろう。大海の水の深ければ深いほど波は荒れる。人の心の海も深さに從つて怒濤をば卷くであろう。トルストイの心靈には一生涯の一日も濤の立たない日はなかつた。『彼はいつも苦惱の情態に在り、また感激の情態にある。彼は決心しなければならない‥‥そして明日は既う遲い、彼は死ねてあろうから。』（おはり）

附記。本篇は紙數の都合で、トルストイの前半生の事蹟を全く省略した。何れ他日補ふとの能きる時があろう。

財政の根本策を確立せよ

（今にして誤魔化し政策を拋棄せずば日本の財政經濟共に危し）

武富時敏

今年上半期に於ける輸入超過は一億二千何萬圓て、彼此一億三千萬圓に近くなつて居る。其貿易の性質を見ると、輸入の一番主もなるものは綿花其他の原料品、並びに器械類といふやうなものであつて、何れも內地の工業の進歩を幾らかあらはして居る。そこで此輸入は又再び輸出さるゝ性質のものであることは間違ひがない。例へば綿花の如きは綿布となつて、支那其他の所に輸出するものには相違はない、從つて近來は支那に對する輸出はポツ〳〵増えて來た。それで今日では最早や輸入超過も止まつて、先月の如きは輸出の方が些か超過することになつた。それが爲めに世間の樂觀的に觀察する論者は、一億三千萬圓近い上半期の輸入超過も、今年中には之を取返すことが出來やうなどと豫測して居る人もある。然しさういふ事は到底も覺束

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ない。今年中といつても今から僅か五ヶ月しかない。僅か五ヶ月の間に一億三千萬圓を取り返すといへば、月に二千萬圓以上の輸出超過を見なければならぬ譯だ。さういふ事は到底思ひも寄らぬ事であるから、先づ其半分でも取返すことが出來たら、餘程上出來の結果といはなければなるまいと思はれる。先月の如きは輸出超過があつたとはいふものゝ、其れは僅か二百萬圓位に止るから、二千萬圓などいふ事はどうあつても想像がつかぬ。それで貿易がよく〳〵順潮に行つて、先づ今迄の半分取返すことが出來れば最上といはなくてはならぬ。さうすると年末の決算には矢張り七八千萬圓の輸入超過が殘るものと見なくてはならぬ。

そこで其輸入超過はどうして決濟をするか。七八千萬圓といへば今日の日本の經濟では餘り少くない金高である。昨年電車市營の爲めに募集した外國債の現金がまだあるから、それで以て七八千萬圓を拂ふに差支ないかも知れぬ。然し現金拂の必要は獨り輸入超過ばかりでない。外國債の利息も年々約八千萬圓を拂はなければならぬ。そこで今の輸入超過の方は電車市營の分で拂ふとしても、外國債の利息の方は何で拂ふ積りであるか。

今政府が持つて居る在外正貨も今日では餘程減つて居る。只在外正貨としてあるのは日本銀行の所有が、二億萬かある限りで、政府の所有の分は餘程少い、そこで政府はどうする積りであるか。成程海外から入つて來る金も多少あるに違ひない。例へば外國へ出稼ぎしたものゝ內地への仕送り。又外國人の內地へ遊覽に來るものゝ消費金等は多少あらう。然し此等は高々二千萬か、いくら多く見積つても三千萬圓に過ぎない、其位には又政府から外國へ拂はねばならぬものがある。例へば軍艦注文の金とか、或は各省の外國からの買物などがあるから、差引すれば殆んど何にもない事になる。そこで輸入超過の金と、外國債の利息はどうしても現金で以て外國に拂ひ出さなくてはならぬといふ事になる。處が其金が無いと來てはどうするか。

政府所有の在外正貨が無いとすれば、詰り日本銀行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の在外正貨で以て拂はなくてはならぬ。處が日本銀行の在外正貨は日本銀行の兌換の準備になつて居る。そこで其れを減らすといふ事は、政府當局の年來恐れて居る所であつて、又日本銀行でも固より之を嫌つて居る。そこでどうするかといへば、又外債でも募集するのであるか。外債を募集して外國債の利拂をするといふ事になれば、又詰り借金の利拂に借金するといふ事になる。其上今俄かに外國債を起さうとしても其抵當にすべき相當のものも容易に見つかるまいと思はれる。政府當局は實際どうする積りであるか。或は鐵道を廣軌にして外國債を募集する口實にするのであるか、我々門外漢には其間の消息はよく分らんけれども、蓋し當局者の苦心さこそと察せらるゝ。

然しながら借金の利拂の爲めに更らに借金するといふやうな政策で以て、果して國の財政が持てるものであらうか、どうか。今のやり方では、輸出超過で以て、外債の利拂をするといふ國の經濟の自然の成行は到底望まれない、といふのは日本銀行の兌換の働きを失つて居る。否な失はして居る。外國の元金拂が多くなれば、日本銀行が取附けられ、正貨準備が減る、從つて兌換劵が減る。だから通貨が縮少して物價が安くなる。物價が安くなれば輸入が減つて輸出が殖える。從つて正金を取返すことになるのは、兌換の自然の妙用である。處が今迄のやり方では、外國に元金拂の必要あれば、外國債を募集し、其現金を積込んで、日本銀行に兌換劵を發行させる。近き一例は電車市營である。外國債を募集して其金を倫敦に預け、日本銀行では兌換劵を發行して、内地の株主に支拂つた。其結果は通貨が著しく膨脹した。此れは只一例である。總てのやり方は皆此通りである。五分利の公債を四分利に借換へるといつて、其金を英吉利に預り、在外正貨は幾らくあるといつて誇り顏をなし、一方には全じ其金を抵當にして兌換劵を發行し、益々通貨が膨脹し、物價が騰貴し、近來の如きは物價の騰貴殆んど底止する所を知らざるの有樣である。物價が騰貴すれば輸出の出來ぬのは自然の勢であるといはねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一體日本の如き借金國といふものは、どうしても、輸出を盛んにして、輸出超過の金で以て外國債を拂つて行くやうにせなくては、國の財政經濟が持ち切れぬ筈てあるのに、通貨を膨脹せしめ、物價を騰貴せしめ、輸出が出來ぬやうに仕かける政策を取つて居るといふ事は實に間違つた話て、全く自殺的財政策といはねばならぬ。是れては我國の財政が何時まて持つて行けるものか甚だ掛念に堪えざる次第てある。畢竟政府當局などの考ては、今俄かに在外正貨を減らすのは國の信用にかゝるといふ事を心配して思ひ切つた事が出來ないのだらうと思ふ。そして又其中には内地の産業も發達し、輸出も增し、追々は輸出超過て以て利拂が出來るといふ空頼みをして一日送りの政策を取つて居るのらしい。然し前にもいつた如くかゝる間違つた、一日送りの政策を取れば取る程、益々輸入が殖えて輸出が減るといふ事は經濟學の原理てある。通貨膨脹、物價騰貴、輸出減少は實に相離るべからざる三人兄弟てあつて、通貨膨脹、物價騰貴を防がずして、輸出を奬勵するといふ事は到底出來る事てない。そこて、一つ思ひ切つて、貿易の自然の順潮に復させる政策を取らなければどうしても日本の財政を救ふことが出來ぬ。それをするには先づ借金の利拂の爲めに借金する政策を思ひ切つてやめて、外國に現金拂の必要があれば、日本銀行の正貨準備が減つて取附けられても仕方がないから、日本銀行の金て以て拂ふ。さうすると通貨が縮少して物價が安くなるといふ事になつて、日本銀行の兌換の自然の妙用を發揮する事になつて行くのてある。病患に犯されたものは之を治するには一度は痛い思も忍ばねばならぬ。一時の不景氣、一時の日本銀行の取附の如きは大事の前の小事てあるから、思ひ切つて財政の方針を立直さなければなるまいと思ふ。今にして財政方針を立直さなければ、日本銀行の兌換制度の維持が六つかしい有様に陷つて居る。財政の當局者はこゝて大いに奮發して、是非共財政策の根本を改めて欲しい。若し然らざれば財政が持てぬのみならず、日本の經濟も持てぬ危地に陷るてあらうと心配するのてある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

官立學校と私立學校

（高等學校入學試驗に落第せる學生に告ぐ）

黑岩周六

高等學校の入學試驗に落第したる人が、更らに來年まで待つて試驗を受け直す方がよいか、或は私立學校へ直ぐに入る方がよいか。之は此頃大分迷うて居る青年が多いやうに思はれる。

私の考からいへば、明白な問題のやうに思ふ。普通の中學を卒業した、十八九から廿歳頃までの人が、一年を無駄に棄てるといふ事は大變な損害である。此時代は最も學問の進む時代であるから、何でも早く學校へ入らなければならぬ。それには私立學校へ入る外はない。

只官立學校は大學へ入る便宜。或は大學を出てから官吏に備はれる便宜などは多少優るかも知れないけれど、大學を卒業し、又は官吏になるといふ事が、人間の大いなる目的とは思はれぬ。殊に此頃は試驗廢止問題などもある位て、試驗の爲めに餘り頭腦を使ひ過ぎることの利害は大いに考へねばならぬ。私の知つて居る五六の學生について見るのに、試驗のみを目的に勉强して、試驗問題集てあるとか、或は答案集てあるとかいふやうなものを熱心に見て居るが、之などは全く學問の目的を誤つたもので、若し自分の特に勉强した部分が出ればよき點數を得るけれども、不幸にして其他の問題が出れば、反對に大いなる不結果を來たすやうてある。のみならず學問の力が總體に上るといふ事はそれては出來ぬ。此等は試驗制度の弊てあらうけれども、官立學校の方が私立學校よりも試驗が嚴しいのてある。官立學校に入らうとする目的の人には尙更らかゝる傾向が多いのではあるまいかと思ふ。

我國の今日の有様ては何事も規律がよく立つて、今

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

程規則的になつて來たが、列國との生存競爭の有樣などを考へると、まだ〳〵規則を超脱した不羈の人物を餘程要求する時代だらうと思ふ。西洋でも十六世紀頃から十九世紀の半程までは國運勃興の時代で、規則以外に超脫して或は冒險をやつたり、或は利益の見込のない科學的の試驗を行つたり、種々樣々の事をした人達が世運を進步せしめたやうに思ふ。我國の今日では誰も彼も政府の作つた鑄型の中へ入つて了つて極めて大人しい、粒の揃つた人が出來はするけれども、獨立の氣象は餘程缺けて居るやうに思ふ。かういふ時代は政府萬能主義のよく行はるゝ時代である。けれどもなか〳〵我國運は政府の力のみて列國と角逐する地位を保つことは出來ぬ。政府の力或は規則に拘らず英語でいふイニシエーチヴの態度を取る人が多くなければならぬ。此點からいふと、私立學校は寧ろ官立學校に優つて居る。單に試驗の點數を得る競爭からいへば劣るかも知らぬけれど、茲に一つ考ふべきは學び得た智識と、之を應用する手腕との問題である。學問を詰め込む方に頭腦を餘計に使へば、應用する方の能力は鈍くなる。それで多少の自由、多少の面白味を伴ひつゝ得る知識は、知識としては不充分であつても、應用が餘計に出來る。之に反して知識を專らにし、規則的試驗を以て人を導く鮎取學問は應用の力を鈍らせる。之は今までの教育家も大分言うてあるやうであるが、今の日本の實際に於いて隨分實例の著しきを認めるやうである。

若し專問の知識を得て教師になるとか、技師になるとかいふ如き人は別であるけれども、其やうな仕事がなか〳〵多數の青年を收容することの出來るものではない。私共の見る教育の主義は、青年に後來の獨立を敎ふるにあるので、此點からいへば益々私立學校の方が好ましいと思ふ。少くとも私立學校を嫌うてそれが爲めに、一年の青春を徒過することは大いなる心得違ひであらうと思ふ。

勞働者の生活賃銀

田川大吉郎

◎米價騰貴、生活難逼迫のため、所在に慈善救濟の運動が起つたのは、僕等が市の理事者として、痛切に慚愧し且感謝する所てある、どうぞ、其れ等の運動により、有ゆる市民に、今日に處する相當の活路を維持させ得んことを熱求する次第てある。

◎所て、海外には、今「生活的賃銀」の語が繰込され、其運動が所在に勃興しつゝある、先づ「生活的賃銀」とは何ぞやといふと、或經濟學者は、家族の數を普通に觀て、又其家婦は最も經濟的に暮し向を繰廻し得るものと觀て、而して今日の地方的文明の程度に照し、肉體上精神上の必要を欠ぐべからざる程度に維持し得る收入、又は、普通人類自重心の要求する賃銀高と定義を下した、然るに或學者は「最も經濟的に繰廻す」と言ふ所に語弊がある、普通の家婦の知識に相當して經濟的にと言はねばならぬと曰つた、又人類相當の自重心と曰へば、獨立の老年に對する充分の貯蓄をも要求する筈に爲るかと曰つたものもある。

◎定義は兎も角として、海外に今此樣の運動のあることは深く注意すべき現象てある、僕は、此運動が早晩我國にも發動するに至ることと信ずる、而して其備へを今日から爲すことは、極めて大切の社會問題若くば國家問題だと思ふ、否、それが既に今日眼前の問題と爲つて居ると思ふ、所謂施し米若くば米價の補給を爲す人の胸中には、そこに、稍判然たる一定の生活、一定の收入なるものが無くてはならぬ、試みに問ふ、諸君は之を如何に視、如何に考へて居らるゝか。

◎僕は、今春の議會に米價調節案を提起したことがある、其際、僕は或一部勞働者の生活狀態を左の如くに述べた。

甲、一家五人の生計費（概算）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一金十七圓　　收入全部

內

イ、十四圓、夫の勞働賃銀、一日七十錢、二十日分

ロ、三圓、妻の內職賃銀、一日拾錢、三十日分

二、十九圓四十一錢　　支出全部

內

イ、二圓五十錢、四疊半乃至六疊一室の家賃

ロ、九圓三十三錢、一圓に付四升五合の白米一日一升四合、月額四斗二升の米代

ハ、三圓十五錢、一日に味噌二錢、醤油一錢五厘、香の物二錢、野菜五錢として三十日間の副食物代

ニ、三圓六十八錢、手拭五錢、下駄草履四十三錢、夫の草鞋代四十錢、薪代四十五錢、炭代四十五錢、油代四十五錢、風呂錢二十四錢、理髮費十五錢、諸器物代十錢、其他、長屋の交際費、小供の小使、水代等合せて九十六錢

ホ、七十五錢、總て古着の被服費

三、二圓四十一錢、收支差引不足高

一家五人、病人なく、癈疾なく、神妙に働いて暮して居て、而して一ケ月二圓四十錢の不足である、若し病人あり、死人あり、醫者よ、藥よ、棺桶よと騒いだ日にはどうするか、其窮狀は之を想ふだに、身の毛のよだつ程てある。

◎然し以上の計數は、尚よい方の部類てある、事實は、更に難澁なものてある相な、今、萬年小學校長坂本氏から、東京市の特殊小學校後援會へ差出された報告書に據ると、凡て左の如くてある。

乙、一家五人の所帶生計費調査

一金十四圓　　收入全部

內

イ、十一圓、男一日五十五錢、一个月二十日の收入

ロ、三圓、女一日十錢、一个月三十日の收入

二、金十八圓二十九錢　　支出全部

內

イ、二圓七十錢　　家　賃

ロ、九圓四十五錢、一升二十二錢五厘の外國米を大人四合、小兒二合づゝ一日一升四合づゝ、一个月四斗二升の米代（本年七月十一日調）

ハ、三圓十五錢　　副食物費

內容は、甲の分と同樣

ニ、二圓四十九錢　　雜　費

內

四十五錢、薪炭、四十五錢、油、四十錢、草鞋、十五錢、履物、五錢、手拭、五錢水代、五錢、長屋費、五錢、道具費、二十四錢入浴費、十錢、理髮、四十五錢、小遣、五錢、其他

ホ、五十錢　　被服費

三、四圓二十九錢、以上收支の不足

既に不足てある、故に、九圓をかけねばならぬ米に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

五圓十五錢しか、かけることが出來ない、即ち、約半分しか食ふことが出來ない、精々切り詰めてそうてある、出來るだけ始末をしてそうてある、我一部階級の暮しが、今日、既に非常の窮境に陷ゐつて居ることは、爭ふべからざる事實てある。

◎所て、前記乙の一ヶ月十八圓二十九錢の暮しを立てるには、其男は一日七十八錢の賃銀を得ねばならぬ、一日七十八錢、二十日十五圓六十錢、それが其暮しを支へる最低の賃銀てある、前記甲の十九圓四十一錢の暮しを立てるには、一日八十二錢の賃銀を得ねばならぬ、一日八十二錢、二十日十六圓四十錢、それが其暮しを支へる最低の賃銀てある、而してそれは何れも、病人なく、災害なく、又一錢の餘裕を存せざる絕體の場合てある、而して其七十八錢乃至八十二錢の賃銀が、最低の賃銀として、支給され得るか、どうか次の問題てある。

◎待ち玉へ、それは以上の生活を標準としての最低賃銀てある、而して以上の生活が、人間の生活らしいそれに不似合てあることは申す迄も無い、敢て贅澤をすゝむる譯ては無いが、部屋の四疊半一間といふことや、味噌醬油ばつかしの副食物といふことや、其被服費の古衣づくめは辛抱もするが、一个月僅に五十錢といふことやは、どうしても、更に之を增してやる必要がある、增させた生活を得せしむる目的を以て其標準を立てゝ見る必要がある、然らば其費用は幾何に爲るか、又其標準はどうなるか。

◎米國にある勞働調査委員といふが、一萬一千百五十六家族の生活狀態を調査した中其四百圓以下の收入ある者の平均支出は左の如くに爲つて居る。

丙、一年の收入四百圓以下(これが米國勞働者の最低の收入である、而して其家族は平均三人二分)

其支出の內譯

イ、食物	百九十九圓十八錢
ロ、家賃	六十六圓三十二錢
ハ、衣服	三十四圓
ニ、燃料	二十六圓二十錢
ホ、燈火	四圓九十六錢
ヘ、其他	六十一圓〇四錢
計	三百九十一圓七十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

以上の支出を、更に百分比例にして見ると下の如くに爲る。

食物	五割八厘五毛
家賃	一割六分九厘三毛
被服	八分六厘八毛
燃料	六分六厘九毛
燈火	一分二厘七毛
其他	一割五分五厘八毛

これは、此後にも示す如く、決して滿足なる生活の標準では無い、現に米國に在る、而して極めて氣の毒な生活の狀態である、其生活費の內容である。

◎假に以上の標準により、我勞働者の生活をも、米及び副食物の費用を以て、其總支出の五割を占むべきものとする、左すれば、其米は一个月九圓四十五錢（乙の表に據り）副食物は三圓十五錢で、合計十二圓六十錢だから、其總支出は二十五圓二十錢に爲る、我勞働者は、どうしても、一个月二十五圓の收入を得ねばならぬ、其內、家內の收入が三圓であるから、男は一日一圓十錢の賃銀を得なくてはならぬ、今、五十五錢を普通の稼ぎとして居れば、即ち其倍額である、而して我工業界、並に經濟界は、之を支給するの餘力あり、同情あり、並に理想があるか、結論は容易に下したくは無い、容易に下さるゝ結論には誤りを免れないが、それにしても大方の諸君は、それを如何に思はるゝか、お尋ねして見たい。

◎そは兎に角に、米國では、凡そ一年一千三百圓の收入を、生活賃銀としての最低の部と考へて居るらしい、而して其標準は左の如くである。

丁、一家五人の最低生活費

（米國勞働調査委員の報告）

一、千二百九十八圓、總支出額

內譯

食料	五百九十四圓
家賃	二百圓
被服	二百四十圓
燃料	八十圓
敎會及其種類	四十圓
醫藥	二十四圓
娛樂	四十圓
其他	八十圓

以上に由れば、食糧費は總支出の四割六分弱である、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然も以上の表は、左の表を整理節約したものである、而して左の表は、委員が參考のため、某職工の意見を求めた其答へである、其職工は本來は染物師で、而して勤勉篤實の譽れある人であつた、委員は其職工に對し、單に肉體的精神的能力を維持するに足る最低費用を知りたいと特に注文したのであつた、而して其費用は左の如くであつた。

戊、米國に於ける一家五人の最低生活費

一、千四百十八圓四十錢、支出總高

其内譯

家賃		二百四十圓
燃料		
石炭	五噸	七十圓
薪	一荷	十圓
食糧		
麪麭其他		三百三十六圓
牛乳（毎日六合三勺、十六錢の割）		五十八圓四十錢
野菜		四十八圓
肉と魚		百三十二圓
被服		二百八十圓
教會其類		四十圓
娯樂		四十圓
醫藥		二十四圓
其他		八十圓

委員等は、其職工の此回答を得て、少しも無理とは思はなかつた、然しながら、家賃に於て四十圓、被服に於て四十圓、食糧に於て四十圓四十錢、合計百二十圓四十錢を減じて、前表の如く千三百圓餘（嚴密に曰へば千二百九十八圓）を作つた、其際にも特に曰ふて居る、其職工の家内は、決して小奇麗な衣裳を着けては居なかつた、けれども、最低といふからには、四十圓位ゐは減じても差支へなからうと思つた、現に博士チャピンは、二百圓が一家族の最低被服費である、それ以下ては到底やり切れないと主張したこともあつた、それて之を二百四十圓に節減したのであると。

◎尚、前記の職工は、コンネクチカット州ミッドルタウンの人である、故に、米國に於ては比較的物價の廉い所の人である、其邊も斟酌せねばならぬ、紐育の慈善委員等は、實に紐育に於る一家五人の生活費を一千七百圓と見積つた程てあつた、其内容は略するが、そ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れだけ無ければ、紐育では、職工らしい生活を維持し、肉體のみならず、精神上の安慰、奬勵を受くるに足りないと議定したのであつた、然も全米國を通じて、一年八百圓以下の收入しか無い職工が、百十一萬六千百九十九人あり、一年一千圓以下の收入しか無いものが二百萬九千九百十四人ある、即ち生活難の聲が、米國全土に響き渡り、而して其救濟、改革、整善の法が、有らゆる政治上の最大問題と爲り、盛んに攻擊され、盛んに論議され、盛んに研究されつゝあるのは、萬々無理からぬ次第である。

◎尙申して置く、米國では一日一人の最低食費を四十六錢乃至五十錢と見積つて居るやうである、これは紐育邊を標準とした敎授アトゥオーターの意見であるが、前に述べた、標準生活費の中、五百九十四圓の食料は、一日四十四錢を標準としてあるやうである、而して大人と小兒との割合は、大人、男を百とすれば、細君を九十とし、十一歲から十四歲の子供を同じく九十とし、七歲から十歲の子供を七十五とし、四歲、五歲、六歲の子供を四十とし、三歲以下の分を十五とすることが、米國に於る專問家の研究した適當の標準てある相な、此標準に本づき、一家五人、其三人の子供は、二歲、五歲、十二歲であるとすれば、

一〇〇、加九十、加十五、加四十、加九十、計三百三十五

即ち大人の三人三分五厘の割合にて食糧を準備することが、其家族の必要なる要求、欠くべからざる要素と爲る相な。

◎日本人も人並相應の生活をせねばならぬ、日本人だからとて、人並以下の生活ていゝ理由も無ければ、それて滿足しなければならぬ義務も無い、而して彼等米人の標準此の如く、準備此の如く、經營の目標此の如しとすれば、日本たるもの之を如何にすべきか、況や、日本の職工も、今日では最早日本のみの職工では無い、總ての生產物は世界の生產物であり、世界は公開されたる一大市場てある、日本の職工は、世界の職工と、同一の標準に據る同一の批判を受けねばならぬ、日本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の職工の體力は、海外の職工のそれと釣合を保つべきてある、日本の職工の伎倆は、海外の職工のそれと釣合を保つべきてある、日本の職工の品性は、海外の職工のそれと釣合を保つべきてある、即ち其生活上の準備、教育、宗教上の訓練、決して之を島國的に、鎖國的に、範を舊幕の時代に取つて、晏閑として、呑氣に濟して居るべきては無い、而る時、日本の政治家、日本の工業家、日本の社會改良家の用意、苦心、努力は、嗚呼、之を想ふだに情けなき次第て無いか、呼吸苦しき次第ては無いか、所謂一等國との評判の高い此國の將來は、遂に如何なる所に往き着くのてあらう、慄して慨せざるべからざる次第てないか。

◎何にせよ、我職工の所謂生活賃銀は、一圓以上て無くてはならぬ、一圓以上ならば、どうにか、かうにか暮せるが、其以下ては到底暮しやうが無い、其一个月の暮しは即ち二十五圓てある、即ち二十五圓が我勞働者の最低生活の程度てある、勿論、前に掲げた甲乙の例の如く、或は十九圓ても暮せる、十八圓ても暮せるかも知れん、然しそれは萬年町とか、鮫ヶ橋とかに居る特別なる細民階級の人てある、一般の勞働者を其位地に呻吟せしめることは忍びがたい、或は忍び得るかも知れんが、それは國家社會の不祥事てある、然し、それをも我慢をするとして、尙、八十二錢が最低賃銀てある、七十八錢が最低賃銀てある、而して其七十八錢を如何にするか、八十二錢を如何にするか、それだけ無ければ、所謂、鮫ヶ橋、萬年町式細民の暮しも出來ないのてある。

◎或は一家一个月二十五圓の暮しを贅澤といふ人があるかも知れぬ、眞逆にと思ふけれど、二十五圓を標準として所得税の課せらるる、世の中てある、ヒヨツとすると、一般の勞働者を其位地にすゝめんとするは、過分の非望てあると難じ咎める人があるかも知れん、其人々に參考を仰ぐ好き例は、英國の養老年金法てある、其法は言ふ迄も無く既に御承知の通り、七十歳以上の老人て、一年三百圓の收入の無い者には、それが三百圓に充つるまて補ひ足すのが、同法てある、即ち、こ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゝに年收二百圓の老人ありとすれば、國家はそれに百圓を足して、三百圓の生活を維持することを得せしむる、若し年收百圓しか無い人があるとすれば、國家はそれに二百圓を補給して、矢張三百圓相當の生活を維持することを得せしむる、七十以上の老人であるから、多少優遇しなければならぬ理由があるとしても、然も只一人である、獨り暮してある、彼には獨り暮しに、漸く足るか足らないの資である、日本貧なりといへども、一家の暮しを、其一人の暮しと駢行せしむる位ゐのことは、出來相な望みては無いか、有り得べく、有らしめ得べき標準目的ては無いか、どうしても、我職工生活の狀態は、モツト改善、促進せしめなければならぬ、差詰め、英國の養老法は好き手本であらう。因て、米價騰貴の厄難まぎれに、蕪雜ながら、此說を述べて、敢て世上の注意を喚び求める。

尙、序を以てと申しては失禮なれど、貴誌、前々號の稻葉氏の「勞働者の生活問題」は近頃珍らしく綿密なる研究の發表てあつた、僕は、幾度か之を繰返して、益を得たる少小ては無つた、深く感謝する。

こゝに問ふて見たいのは、日本の職工に必要なる營養量である、稻葉氏はそれを必要の熱量二千八百乃至三千カロリとし、事實は、二千六百五十乃至二千八百三十カロリ位ゐてよかろうと論ぜられたが、果してそれて不足なからうか、前のアトウオーター氏は三千四百カロリと論じて居る、且、實際力仕事をする種類の人は、少くもそれに二割を加へねばならぬと論じて居る、而して僕には其三千四百カロリが稻葉氏の事實の二千六百カロリを意味して居るものゝやうに讀まるゝのてあるが、それは僕の讀み違ゐてあらうか、而して若し讀み違ゐて無いとすれば、其差があまりに多過ぎるやうてある、如何のものであらう、教示を受けたい點である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



淪落の女

新聞記者　松崎天民

「淪落の女」は、新俳優喜多村緑郎、小説家正宗白鳥、教育家宮田脩、牧師綱島佳吉、救世軍山室軍平の五氏に宛たる、一種の通信文なり。其の一を「黒縮緬」、其の二を「捨ばち」、其の三を「お小夜」、其の四を「さまよひ」、其の五を「十二階下」と云ふ。何れも、予が新聞記者生活中の副産物にして、また、人生探訪の報告書なり。

四、さまよひ

はしがき

――此の一篇を、予が同郷の先輩にして、基督教牧師たる綱島佳吉氏に呈す――

一、東京朝日新聞記者松崎天民が、長い夜勤係の仕事から解放されて、久し振りに山水放浪の旅路に上つたのは、明治四十四年六月中旬のことであつた。

二、彼が今度の旅行は、東京から一日程の近縣各地に散在する、いろ〳〵の避暑地を訪問して、面白い通信を書く事てあつた。山も好し海も佳し、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十日間に歩かれるだけ歩いて、紀行とも付かず、案內記とも付かぬ文章を、旅の先から送るのが、其の任ぜられた仕事であつた。

▲三、午前一時―二時頃まで宿直して、情死や殺人の新聞を編輯して居た彼は、此の旅行を何んなに喜んだてあらう。暗さに囚はれて居たものが、明るさに放たれた愉快の情を以て、彼は…日未明に、十日の旅路に就いた。

四、萬年筆に原稿紙、封筒、切手、手巾、カラー、唐詩選、白氏文集、避暑地案內などを詰め込んだ小い鞄を抱へて、四谷停車場のプラツトホームに立つた時、彼は半歳振りに、樂しい旅客の心持を味つた。

▲五、鼠色薄メルトンの背廣に、荒い鬼縞の麥藁帽、深ゴムの赤靴に細卷の洋傘といふ扮裝で、信州行の汽車に乘つた時、彼は凡ての桎梏から脫れた樣な氣持になつて、何とは無しに安心して、ヤレ〳〵と思つた。

▲六、一等室と仕切つた舊式の二等室の中で、彼は先づ今度の旅程を考へた。第一日は上諏訪に立寄つて長野泊、第二日は輕井澤を經て高崎泊、第三日は伊香保から前橋に出て、第四日は日光泊、第五日は宇都宮を經て水戶泊。第六日は平磯から祝町を通つて大洗泊、第七日は助川から霞ヶ浦に近い土浦に泊り、第八日は千葉から一の宮を經て大原泊、九日は大原から外房州を急行して、北條か館山に着かうといふ豫定。

▲七、のん氣な旅に似て、決してのん氣ならず、隨分あはたゞしい新聞記者的旅行だと思ひながら、それでも此の旅中の遭遇には、幾多の雜報があらう、詩があらう、小說があらうと、彼は何となく心の躍るを覺えた。そして未だ見ぬ山の容や水の態、其の日其の日に換つて行く旅宿の樣などを、いろ〳〵と思ひ浮べて見た。

▲八、題目を極めてからで無いと、內容の記事に着手し得ない癖のある彼は、先づ新聞社に送る通信の題名を「避暑地探訪記」と附けて、標題だけは、その

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日その日の土地に因んだものを附ける事にした。これと同時に、東京の宅に留守してゐる最愛の妻にも一日一信を送ることに極めた。

▲九、夫婦になつてから十年、三人の男の子まで擧げた妻には、並大抵ならぬ苦勞を掛けて居る。何時か機會があつたら、感謝の意を表しやうと思つて居たが、今度の旅行は絶好の機會である。旅から旅への宿屋〳〵て、見聞なり所感なりを、一日に一度は必ず書かうと、彼は汽車の中で考へた。

▲十、新聞の通信を一段半以上も書く上に、妻への手紙は大事業である。然し、書かう、有の儘を書かう。十日の旅路に接觸する女の上に就いても、欺かず僞らず書かうと決心した。そして、何でも宜い書いて置きさへすれば、此の人生を眺め、此の世相を觀る上に於いても、何かの備忘錄にならうと考えた。汽車は八王子を出て、不愉快なトンネルを、既に四つ過ぎた頃――。

一、政治文學を語る女

新聞社への通信を書かぬ前に、此の手紙を書く。今日は上諏訪に寄つて、木曾福島の材料などを貰つて、夜遲く長野に着いた。停車場には、桐生悠々君が出迎ひに來られて居て、一所に車を連ねて、今こゝへ落着いた所である。暑くて草臥れもした、閉口もした。

今朝出發する時、シャツとズボン下が小さかつたと云つて、怒り散らしたのが氣になる。たとへ短い十日の間でも、旅へ出て行く者が、留守の人に怒つて出ると云ふ事は、氣持の好いものでは無い。「シャツもズボム下も小さくはないのです、貴郎が肥滿たのが惡いのです」と云つたものだから、「肥滿る樣なものをなぜ食はせる」と、ツイ腹が立つて、香水の瓶を打割つた。お隣の前田さん――高橋署長前田警視の宅――では、能く疳癪を起す男だと云つて、笑はれた事だと思ふ。お前も善くは無かつたが、私の方も善くは無かつた。社の旅費規定が二等だから、此所まで二等で遣つて

來たが、凡そ世の中に汽車の二等客ほど氣に食はぬものは無い。他人の顏ばかりジロ〳〵見て、己はすまして納り返つて居る。先方が見たら此方も生意氣な奴に見え様が、こんな事なら一等に乘れば好かつたと思つた。「歩行」と「空腹」とを、人生の最大苦痛に感じて居るので、今日も汽車中で食つた、食つた。八王子でお鮨を二個、甲府で上辨を二個、夏蜜柑が二個とサイダーが四本、敷島は三袋空になつた。そして上諏訪でも宿屋へ一寸寄つて、ビールを一本と飯を六七杯食つた。本を讀むのは面倒だし、話相手はなし、半日以上も汽車の中で過ごすのは、大飯でも食つて、睡む氣を誘つて、コク〳〵と遣るに限る。船の中か人力車の上ならば、大きな聲で、詩でも吟じて居られるが、二等室では、好きな雲入道も唸れなかつた。

　桐生さんだけは、今=午前一時=歸つたけれど、私は今夜こゝで寢る事にした。遲ひから三味線を彈かなかつたけれど、長野の藝妓が三人、私を左右から煽いでくれた。衣服や姿態は、澁谷藝妓位のものであるが、容色の好い若いのも居たし、話題の豐富な年增も居た。東京では新聞記者だと云ふと、決して好い顏はせぬものだが、長野の藝妓は新聞も了解して居るし、記者その人をも正當に理解して居るらしい。山路愛山先生とか、茅原華山先生とか、久津見蕨村先生とか、結城禮一郎先生とか、曾て一度、こゝで新聞記者たりし人々は、今も尚、藝妓仲間の話題に上つて居る。危なくはあるが、政治も談ずるし、紅葉、鏡花、花袋、藤村の文學を語る妓も居る。桐生さんが、こんなのばかり選抜して、見せてくれたのかも知らないが、面白いと思つた。中に一人お前と同じ名のが居たけれど、三十四歳だから、心配しなくても宜しい。百圓足らずの世帶を持つて、美い衣服も着られず、避暑旅行も出來ないでも好いか。美い衣服を着て、美味い物を食つて、浮いて騷いで世を暮す、婆藝妓の方が好いか。私はお前の爲めにも考へた、世の女達の爲めにも考へた。

　大阪のお玉さんに似た女も居た。お玉さんは長い間の妾生活に倦いて、藝妓になりたいと云つて居たさう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なが、其のお玉さんが、長野へ流れて來て、藝妓になつたのかと思ふほど、顏も姿も能く似て居た。越後の生れださうて、新潟節が巧いのだけれど、箱が無いのて聽かれなかつた。色が白くて髮が濃くて、痩せて背の高いものごしで、靜かに話す工合がしんみりして居た。喜多村緑郎の舞臺顏よりも、試演會で見た女優の初瀨浪子の型て、小說ならば泉鏡花が、好んで描きさうな女てあつた。名は何と云つたか、聞きもらした。

　長野へ來ても暑い。哲郎、達郎、俊郎、三人とも寢冷をさすな。新聞に出る私の通信は、毎日〳〵切拔いて、書棚の抽斗の中に藏つて置いて吳れ。洋服屋が來たら、月末には歸ると、唯それだけ云ふべし。明日は高崎の宿で、何か書いて送る。睡むい〳〵。（長野にて）

二、一夜泊の客に惚れ

今朝の「信濃毎日新聞」に、四號標題て、「夏目漱石氏の來遊」と書いてある傍に、同じ四號標題て、「松崎天民氏の來長」と出て居たには驚いた。昨夜の宿を出て、信毎社に行く途中て、其の夏目漱石氏にバッタリ出逢つた時には、何んだか知ら少からず面食つた。

　私は一人旅だけれど、夏目さんは奥樣と同道てあつた。「この方が社の松崎天民君」と紹介された時には、ヘドモドして挨拶した。「昨夜は何所にお泊りてした」と問はれた時には、汗を流して「あの桐生君と……」と答たのみ。これて私が昨夜の手紙を書いた所が、普通の宿屋て無い事だけは判つたらう。十時頃まて信毎社に居て、十一時頃停車場前の宿屋て朝飯を食つて、輕井澤を雨の夕暮に見て、今、高崎停車場前の宿屋に着いた。通信は長野て一回、こゝて二回書いたから、これから、酒を飲んて寢るだけのことだ。

　社の薄井君と電話したら、東京は大暴風雨て、大分被害があつたさうな。青山方面は何うか、南町五丁目は何うかと聞いたが、異狀が無いので安心した。上半期の賞與金も、昨日渡されたさうな。急に入用なら机の抽斗から、水晶の印を持つて行つて、薄井さんか渡邊さんに受取つて貰ふべし。去年の暮と同じだと云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から、八十圓はお前に上げます、殘部は其の儘預つて置いてくれ。高崎は日暮頃から風雨になつて、この三階の上等の室も、メキ〳〵云つて心持が惡いけれど、宅さへ異狀なくば安心。十六七の女中が二人、赤い腰卷を出して、バタ〳〵と雨戸を閉めながら、何を唄ふかと聞いて居ると、「一夜泊りの兵隊さに惚れて、連れちや行かれぬ泣き別れ」一人が唄ふと、一人が「はアちんかいなア」と調子を取る。十六七でこれだから、宿屋の女中なんか、實に問題である。

　同じ宿屋でも、停車場前の宿屋は、客の出入が繁くて、あはたゞしいだけに、少しも落付いた所が無い。一夜泊が最も多くて、長くも三日と滯在する人は無い樣である。宿屋の方でも、宿泊人その者の人柄なんか、頭から氣を付けては居ず、唯、金を澤山支拂ふ人が、上等の客として羽振りを利かせる。私は驛員の案內で投宿したものだから、何處かの官員さん位に思つて、三階の一等室に通したのであらう。番頭が宿帳を記けに來ても、ヘイ〳〵と敬意の無い頭の下げ樣をする。女中が給仕に來ても、人の顏ばかりジロ〳〵見て、妙にオド〳〵する。給仕に來た女は、何でも前橋在の者ださうで、高等小學校の二年生であつたと云ふ事だ、せめてもの心休めにして居る樣な口振りであつた。「女學校なんか上つても、家庭の何には駄目だつて、家の伯母さんがさう云つて居るんだわ」とて、他を蔑すむ樣な厭な眼をした。女學生と云ふことと、宿屋の女中と云ふ事とを、此の女は差別無しに見て居るのであらう。小さい肩揚げをして居るけれど、步く度に裙が亂れて、赤モスリンのゆもじの中から、太股など出す所を見ると、此の女中も最う、男の味を知つて居る一人だらう。

　旅の心をしみじみと味はうとするには、上等の宿屋に泊るよりも、停車場前か何かの、中等に泊る方が好い。帳場へ通ずる電鈴はあつても、それは唯體裁ばかりで、幾ら押してもチリンとも鳴らない、と云つた風の所に、田舍宿屋の特色がある。お刺身やら、吸物やら、鹽燒やら、オムレツやら、所謂二の膳付きて出た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けれど、何一つとして美味く無い。麥飯に茄子の漬物、宅に居て茶漬をさら〲遣る方が、何んなに美味いか知れない。女中は膳を下げて行く時、「旦那さんの眼鏡は、まあなんて厚いのでせう」と驚いて居た。

東京を出てより二日目に過ぎないけれど、今日は大分、旅らしい氣持になつた。斯うして一生涯、旅から旅を放浪するのも、面白い樣に思ふ。東京に居る私の有樣が、他人の事でも見る樣に浮んで來る。今度の手紙は、私の歸るまで、凡て大切に保存の事。（高崎にて）

三、落籍されて歸る所

高崎から澁川までも電車、澁川から伊香保までも、山坂を登る電車、今日は終日電車に乘つて、日暮れ頃前橋の宿に着いた。宿は白井屋と云つて、一二度泊つた事のある家だけれど、給仕の女中も、風呂場の三助も、二年前の顔馴染は、最う一人も居なかつた。

前橋は其の昔、私が未だ十二三歳の頃、母上が妹を連れて、來て居られた所である。國民新聞に居た頃、縣會の政友非政友騷ぎの時に一度と、朝日に入つてから、共進會の棟上式の折に一度と、來た事のある土地だけに、何となく懷しい。前橋に來る毎に、何時も此の宿で、代議士細野次郎君と、云ひ合はした樣に落合ふが、今夜も珍らしくも邂逅した。「何時も此處で逢ひますね」と云ふと、「何うも不思議ですね」と、細野さんも笑つて居られた。何でも無い事の樣だけれど、斯うした遭遇が、旅の心の哀れを誘ふものである。

伊香保では、知合の木暮武太夫さんに逢つて、其の所有の公園地や、建てかけの貸別莊などを、見せて貰つた。社の通信員にも逢つて、古い溫泉場の過去と現在を相應の興味を以て聞いた。榛名湖への登り口へも行つたし、湯宿の表裏を通つて、蒼白い顔をした湯治客も見た。山の上の湯の湧く町、お前や子供達と一所ならばこんな所ろへ來なくても、修禪寺の方が好い、鹽原の方が好いと思つた。それにしても、常に米鹽の苦勞のみ掛けて、芝居と云ふ芝居へも連て行かず、避暑と云ふ避暑もせず、溫泉場と云ふ溫泉場へも、一所に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

行き得ない事を、何となく腑甲斐無い樣に思ふ。女は人の妻となつて、子を生み子を育て、飯を炊いたり、洗濯をしたりして、一生を過ごすだけの者で無い、と平生から主張して居る丈けに、今日、伊香保の山氣を吸つて、殊にお前に對して恥づること深い。

昨日の暴風雨で、前橋への電車は不通となり、歸りも澁川から電車で高崎へ出た。いろ〳〵の小虫が飛び入る田圃道の電車の中、乘合は百姓か、役場員か、土木吏か、土方か、土地の親分らしい者ばかり。その中に唯一人、水際立つて四邊を拂ふ、二十三四歲の女が居た。連の男は太い白縮緬の兵兒帶に、黃色の勝つた金鎖の大きいのをからませた、色の黑い、背の高い三十恰好の親分で、二人は席が空いて居るのに、兩側に向ひ合つて腰を掛けた。澁川から乘つて、高崎へ中程の小さな町で下車したが、二人が居なくなると、電車內は彼等の取沙汰で持切つた。何でも其の女と云ふのは、高崎在の大百姓の二番娘ださうなが、十七八の頃からお尻が輕くて、誰れ彼れの差別なく浮き名を立てられた。果は生れた村を飛び出して、宇都宮では酌婦になつた、日光では藝妓になつた、水戸、結城、古河と方々を流れ渡つた後、澁川の町へ戾つて來て、こゝでも左褄を取つて出た。「色が黑くて、大い顏で、愛嬌の無い妓だんべや」と一人が云ふと、「衣服の柄や着こなしは爭はれねいもんだよ」と一人が云ふ「あん畜生したゝか者だアね」と、又他の一人が憎く相に唾を吐いた。

連の男と云ふのは、女の實の父に賴まれて、百何十圓かの前借を立替へて、女を抱へ主から受取り、その實家へ送つて行く所であつたさうな。紅白粉のお化粧の仕方は、東京の女に及ぶべくも無いが、髮の香も袖の匂も、田舍にしては垢拔けがして、斯うした田圃の電車の中では、一際眼立つて好く見えた。前髮は縮れて居るし、瘦せ形の高い方で、利かぬ氣の口許にこそ、好き嫌いの激しい性質を現はして居れ、その濃い眉と丸い眼とには、男の心を蕩かすには充分な、力と露ひとを見せて居た。一言にして盡せば、浮氣者である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方を旅行して居れば、能くこんな類の女を見受ける。前借を拂つて貰つて、父母の許へ歸つた所て、それが何時まて續くことか。こんな女の行末は、何う始末をして宜いものか、神樣も並大抵のお骨折てはあるまい。通信員が來たから、これにて擱筆。（前橋にて）

四、其の一顰一笑の裏

日光に來た。材料を得て、直ぐ引返す豫定てあつたが、足尾暴動事件や谷中村事件て、數年來知合になつて居る、日光警察署長に引き止められて、今夜は小西別館の三階て、穩かな夢を見る事になつた。哲、達、俊へ土產として、日光羊羹を澤山送つて置いた。

六月の下旬、東京は暑くて堪らないのに、日光の今夜は殊に涼しい。町を步くにも、浴衣の上に褞衣を重ねて、汗が少しも出ないほど、心地好い冷氣を感ずる。今夜は通信員と一所に、藝妓屋兼料理屋へ登つて、初めて日光の藝妓を見た。足尾銅山暴動事件の折、雪の細尾峠を越して、十日振りに此地まて歸つて來て、初めて人心地を感じた時には、藝妓を見るほどの勇氣も出なかつたが、今夜は初めて日光の藝妓を見ることが出來た。日光の藝妓は、數年前から、見んとして見る能はざりし所のもの、今夜の得意察すべし。

日光の藝妓は、矢張り田舍の藝妓である。「日光の」が、「栃木の」と變つても、「下館の」と變つても、「田舍藝妓」たるに於て、何所にても共通して居る。唯、私等の登つた家は、藝妓屋てありながら料理屋然たり、料理屋てありながら藝妓屋然たる事に依つて、他とは少し趣致を異にして居る。こゝの藝妓は、最初先づ女中として應接し、着換へをしてから、藝妓となつて出現した。衣服も粗末だし、容色だつて紡績工女然たるも居れば、看護婦然たるも居り、これぞと云つて別に感興を惹くに足るものは無い。いろ〳〵話をして居る内に、私は彼等を藝妓として容認せねばならぬ旅客の心を悲しみ、また、藝妓たりと自負して居る彼等の心を憐んだ。土地が神境とか靈域とか云つて立つて居る所だけに、一層この種の藝妓が悲慘にも見え、亦氣の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毒にも思はれ、浅間しくも思はれるのである。

彼等は殆ど口癖の様に、警察が八釜しいとか、宇都宮の新聞が五月蠅いとか云つて、操を賣る事を拒む氣の擧動をしたが、其の實は正眞正銘の賣春婦なのである。「東京にはこんな歌が流行つて」とか、「帝劇を見たいわねえ」とか、「妾、東京へ行つて、踊のお稽古をしたい」などゝ、藝妓らしい事を言つたけれど、彼等は藝に依つて立行かれず、春を賣つて生活して居る。都會と地方とを問はず、凡て藝妓が操を賣ると云ふ事は、供給者も需用者も、また仲介の取引商人も、暗默の間に當然の事として、何時とは無しに今日の大勢をなすに至つた。彼等の市場はこれがために榮え、彼等の收入はこれがために增加して居る今日、別に四の五と云ふ可き程の問題でないが、然し考へて見れば、彼等は痛ましい一種の犠牲者である。海山千年の齢とつた女は、最う何も彼も自覺して居るので、相手にそれほどの悲惨さを想はせないが、藝妓になつて一二年、美しい衣服が着られるのを、無上の喜悦にして居る様な輩は、その行末が長いだけに、見て居ても可愛想である。自分で自分の境涯を自覺して居ないだけに、その一顰一笑の裏には、暗い人生の影が潜んで居やう。

二時間ほど飲んで、小西の三階に引き揚げると、警察署長やら、宿の主人やらが來て、夜遅くまで語り合つた。斯うして寢轉んで居ると、裏の山から流れ落つる竹筧の水の音や、樹立の風に戰ぐ音が聞えて、何とも云へぬ好い氣持である。子供三人にお前と五人連で來ても、一日の費用十圓あれば足りやう、何時と堅い約束は出來ないが秋にでもなつたら、二三日泊て來たいと思ふ。一家打揃つて宿屋の飯を食ふのも、平生の生活から飛び放れて面白い、殊に子供達のためには、時折さうした旅行が必要でもあり、有益でもあると思ふ。

それにしても、お互は幸福である、一人位はあつても善さ相な女の子は生れず、三人とも壯健な男の子である事は、何と云ふ仕合せであらう。何んなに出來損つた所で、松崎の家から「藝妓」を出す氣遣ひが無い

と云ふ事は、お互の誇であり光榮である。(日光にて)

五、凄慘な運命の縮圖

今日は午前中、日光と其の附近を歩いて、午後宇都宮へ寄つて、夕暮れに水戸へ着いた。特置員の東君を訪ねると、某の料理屋で小宴を開いて居るとのこと。私も招かれて行つて見ると、いばらぎ新聞の主筆伊藤君、編輯長渡邊君なども居て、旅の疲勞を忘れた。

あやめと云ふ美しい藝妓も居たし、吉原に居たといふ淺黒い中年增も居たし、磯節の巧い幇間も居た。日光や長野と違つて、萬事が大分東京に近く、藝妓の樣子なども地方的臭味が無く、料理も酒も相應に美味かつた。殊にいばらぎの編輯長渡邊君は、私と同じ岡山縣美作國眞庭郡の人で、幼い頃には其の令弟と遊び仲間であつた因緣もあるので、旅に行つた樣な氣持はしなかつた。渡邊君が私と同じ浪花節黨で、桃中軒雲右衞門の信者であると判つてからは、座も一層面白くなつて、誰も彼も精限り唄つたり唸つたりした。

汽車中では女を見ず、唯、水戸にあやめと云ふ美しい妓が居る、と云ふ事だけが今日の獲物、今日の發見であつた。水戸は常陸山の出た所であり、菊地幽芳、相島虚吼、永井鳳仙、蛯原詠二など、面識ある人々の故鄕であると思ふと、何となく懷しさを覺える。昨日までは山ばかり見て歩いて居たが、明日からは愈々海の方へ廻り、「己が罪」で其の名を知つた平磯の海岸、磯節で夢にのみ見て居た祝町、大洗、湊へ行くのかと思ふと、何となく心が落ち着かない。殊に大洗には、日本に於ける唯一人の磯節の名手、按摩の安中が居る筈である。久し振に彼と逢つて、寄せては返す波の音を相方にしながら、其の幽艷悲痛な唄の聲を聞かれるかと思ふと、そゞろに胸の湧き立つを覺える。磯節の本場たる大洗の海岸で磯節を聞かん事は、私が十年來の宿志であつたが、愈々その日その時が來た。

今夜は此の停車場に近い宿屋で寢る。風呂に入つて糊の堅い浴衣に着換へて、枕頭に冷へたビールを湛いて、斯う寢そべりながら、今日まで逢つたいろ〳〵の

女の上を想ふ。個々別々て有るべき筈だのに、長野の藝妓も、高崎の女中も、電車中の女も、日光の藝妓も、水戸の女も、皆一つになつて、同じ人間の樣に浮んで來る。顏も、言葉も、衣服も、態度も、五人には五人のそれ〴〵異つた色彩があつたに、それが皆一つになつて、女の生涯を物語る樣な氣がする。その一人〳〵の過去なり、現在なり未來なりが、五人の上に時を同じうして現はれたとも見られて、一種悽慘なる運命の縮圖に對する樣な、冷たい氣持を感ぜずには居られぬ。あゝ「さまよひ」の旅に見る「さまよひ」の女の一生、こんなのは山にも居る、海にも居る、都にも居る、村にも居る。そして皆、判て押した樣に、同じ道を歩いて、同じ路傍に倒れ、同じ墓場の土に化り行くのかと思ふと、何とも云へぬ胸苦しさを覺える。宗教が何うとか、法律が何うとか、敎育が何うとか、八釜しく詮議立てをした所で、「悽慘なる運命の縮圖」とは、昔も今も行末も、未來永劫までも沒交涉であらう。

按摩を呼んだら女按摩が來た。三十を越して間も無い年配だが、眼が見えぬので何となく淋しい。瘦せた手尖に力を籠めて擦りながら、水戸は梅の頃が好いとか、大洗は盛の夏が好いとか、いろ〳〵と能く話す。「何時頃から盲目になつたのか」と尋ねると、「これてもね旦那、若い時は男五人持ちや五々二十五日、後の五日は誰と寢ようなんかと、好い聲をして唄つた事もありますが、餘りお尻が輕かつたので、天罰てすよ、梅毒てねえ」と嘲ける樣に云つて笑ふ。女按摩も矢張り、田舍酌婦のなれの果を具體化した一人であつた。

今夜は眼が冴へて、何う云ふものか寢付かれない。こんな晩は、文章が能く書けるものだが、最う此の上書く氣にもならぬ。東京を出て五日目に過ぎぬけれど、ボツ〳〵東京が戀しくなつて來た。何處からも手紙は來ては居ないか、倭坊に破らせぬやう御要心。

（水戸にて）

六、哀れ深い波の磯節

水戸から湊まで汽船で下り、湊から平磯の方は人力

車で廻り、祝町から磯濱の方も見て、大洗の金波樓へ落着いた。水戸の東君から紹介の電報があつたとかて、警察署長が出迎いに來たり、巡査が二人で案內したりして、今日の視察は、頗る便利で頗る振つて居た。

濃い髭を生した人柄の好い巡査と二人連れて、大洗神社の松並樹の中に立つた時、私は最う死んでも好いと思つた。松吹く風の涼しい所、砂白い濱邊に飛ふは何の鳥ぞ、大平洋の怒濤寄せては返す眺めの美しさ。山には山の景趣があるけれど、海の大觀は又格別、こんな所に別莊の一つも有つて居れば、富貴榮達なんかは何うでも宜い樣な氣持になる。「磯は戀しや大洗樣の…松が見えますほの〴〵と…」、その大洗神社の境內に立つて居るのかと思ふと、涙がこぼれる程嬉しい。今日は日本晴の好天氣で、一片の浮雲も無かつた。

金波樓の三階は、吹き倒されるかと思ふほど涼しい。こゝで原稿を二回分書いて、風呂に入つて、水貝と海老の鬼から燒で、冷たいビールを飲む心地好さは、千金を以てするも購ひ難からう。未だ避暑客は一人も來て居ないが、水戸邊から藝妓を連れた一組が、二室隔てた隣で、キャッ〴〵と騷ぐのが、手に取る樣に聞える。夏の盛りになると、避暑時分に限つて出稼ぎする女中が、一軒に十四五人も來て、隨分賑やかになると云ふが、今は三階も二階も、大方は雨戶を閉めて居て、唯ガタ〴〵と風に搖れる音が激しい。案內して吳れた巡査に、「一所に晩飯を食べませう」と云ふと、「いや私は公務がありますから、これで失禮いたします、御用がありましたら、何うぞ使ても寄行して下さい」と云つて、止めるのも聞かずに歸つて了つた。袖擦り合ふも他生の緣、この良巡査の上に祝福あれ。

隣の室で磯節が聞える。「沖の鷗に潮時問へば…私や立つ鳥波に聞け…」、一昨年の夏、常陸山が筑波山に登つた時、一行に加はつて、音頭を取つた安中の聲である。明日は愈々登山と云ふ前の夜、筑波の山麓で痛飲した時、好い聲で磯節を唄つた、その安中の聲に相違ない。あゝ安中、兩眼盲いて僅に明暗の差別が分るだけの安中よ、私が大洗に來たのは、お前が居るからで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある、お前に逢はんが爲めてある。お前の磯節を聞かんが爲めてある。襟が黒くなつて、洗晒しの浴衣の上に、常陸山から貰つたと云ふ黒縮緬の羽織を着て、首を左に傾けながら、手拍子取つて唄ふ安中の磯節は、安中にして初めて唄ふを得る獨得の哀調てある。筑波て聞いてさへ心を動かしたものを、唄の本場の大洗てそれを聞いては、何んとなく胸の迫るのを覺える。安中はこの隣の室に、自分の唄の渴仰者が、涙を流して聞いて居るとは知らず、折々疳高い聲で客を揶揄いながら、「舟は千來る萬來る中に…私の待つ舟未だ來ない…」とか、「磯て下り松湊の女松…中の祝町は男まつ…」とか唄つては、さも面白さうに手拍子を打つて居る。沖の方は、黄昏れて、最う洋燈の點く頃になつた。

安中は隣の室から出て、私の室の外を默つて通り拔けやうとした。「おい、安中さんぢやないか、お入りよ、松崎だ、常陸山と一所に筑波山に登つた……」と聲を掛けると、安中は「へつ常陸山、筑波山、松崎さん、あア彼の新聞社の、朝日の、松崎先生てすか。これは何うも、お珍らしい、何時こゝへ、へイ、これは何うも、お珍しい、成る程、松崎さん、へイ」笑ひながら入つて來た。「君の磯節が聞きたくてね」と云ふと、「何うもこれは、さう〳〵、貴君は磯節がお好きの樣てしたねえ」と、懐しさうに夫れからそれへと話し出した。

祝町から呼べば、藝妓も來るさうてあるが、今夜は安中と二人差向いて、心ゆくばかり磯節を聞いた。これは少いがと云つて、二圓遣つたら、これは粗末てすがと云つて、鯛味噌の鑵詰をくれた。安中にも小學校へ行く樣な子が三四人ある相てある。（大洗にて）

七、醜惡猛烈な腐肉團

助川の東睦舘て晝飯を食つて、霞ヶ浦の汽船發着所まで來ると、銚子廻りしか最う出ないと云ふ。少し早いが今夜は土浦に泊つて、明日は汽車で千葉へ出る事にしやうと、今この宿屋へ落着いた。常陸山と筑波山に登つた時、一度泊つた事のある宿屋てある。

飯を食つて居ても、原稿を書いて居ても、小虫が澤

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山落ちて來る。宿の女中は霞ヶ浦の虫てすと云ふが、何にしても堪つたもので無い。町には新俳優櫻井猛夫と云ふのがかゝつて、金色夜叉を演つて居るさうて、隣室の縣吏員は女中を連れて見物に出た。土浦には澤山の藝妓も居るし、多くの達磨も居るさうて、料理屋の女中てゝ宿屋の女中ても、賣笑婦ならぬは無いと云ふ。此の宿屋の女中も、白粉をベタ〳〵付けて、安香水の匂をプン〳〵させて、赤い蹴出しをヒラ付かせて居る所を見ると、何うも唯の女中て無いらしい。

今夜は何うしたものか、非常に腹痛がして苦しんだ。按腹する者を呼んてくれと言ふと、「そんな者呼ばなくても、妾がもんて上げませう」といつて、女中が一人ならず二人三人と遣つて來る。そして「酒を召し上がると治りますよ」とか、「元氣を出して、はしやぎなさいましな」などと云ふ。二十七八の束髮した金齒も居るし、二十三四の肥滿つた銀杏返しも居るし、十七八の庇髮も居る。凡てだらし無い身の扮裝て、男の心をそゝる樣な身の態度をする。白粉と髮油と香水の他に、斯うした女に特有な一種の匂を以て、相手の男を刺戟しやうとする。「隣の方、お床敷いても宜い……」と一人が云ふと、「おとこは入らない、おなごが御入用かも知れないよ」と、他の一人が云ふ。こんな事を客の前て平氣て云ひ得る程に、この邊の宿屋の女中は、賣淫婦化し私娼化して居るのてある。

土浦と云ふ土地が、凡て斯うと云ふのてはあるまいが、兎に角猛烈な女達てある。最初の間は二人なり三人なり來て、何かとチヤホヤ云つて居るが、お客の眼色顏付きを見て、ははア、何々さんに御氣があるなと睨むと、他の二人はせつせと出て行つて、お客の氣のあるらしい女一人だけを殘す。殘された女は又女で好い氣になつて、今までとはより露骨に、より猛烈に、男の情をそゝらうとする。甚だしきに至つては、「妾最うこゝを動かない、今夜は、貴郎の看護婦さんなんてす、貴郎今夜だけは、貴郎の思ふ存分になつてよ」などゝ膝をくづす。固より此方が最初から眞面目て、戲談口一つ叩かないだけの威儀を持して居れば、女は乘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずる機會が無くて引込むであらうが、ビールの一杯も飲んで、「姉さん何うだい、こゝには美しい藝妓が居るかね」位の事を云ふと、大概の男を男と思はない彼等は、待つてましたとばかりに、有ゆる媚を呈し様とする。さうして得た所の一圓なり二圓なりの金を、香水なり半襟なり片側帯なりに代へて、女としての榮を飾らうとする。斯うした宿屋と斯うした女中は、東京にもあるけれど、殊に地方に多い様に思ふ。

醜悪猛烈な腐肉團、と云ふのが彼等の事であらう。宿屋の女に檢黴を強るのは怪しからぬとか、善良な女性を私娼扱ひするなぞと云つて、憤慨する人々もある様子だが、此の分なら檢黴、檢梅は愚なこと、何んな苛酷なことしをても、宜さ相に思はれる。唯、警察力位を以てして、其の存在を絶滅し得るか何うか、これは疑ふまでもなく不可能である。法律でも、教育でも、宗教でも、人間本能の恐るべき力を輕視して居る間は、この問題を根本から解決すること、到底思ひも寄らない。あゝ今夜は、頭が痛くて、何事も腹立たしい。

隣の部屋では、縣廳の役人と廂髪とが、キャツ〳〵云つて騒いで居たが、やがて小さく呻く様な聲が聞え出した。こんな宿へは泊るではなかつたに、取返しの付かぬことをしたものだ。松風の聲、怒濤の音、風情あり、感興あつた大洗の一夜が想ひ起される。(土浦にて)

八、男女混浴の自然觀

霞ヶ浦を汽船で縦斷して、佐原へ出る豫定であつたが、時間の都合で千葉までも、千葉から一の宮を經て大原までも、凡て汽車で急行した。夏の眞晝の汽車の旅は、決して愉快なもので無いが、汽船の中で小一日を暮すのも、餘り氣持の好いものではあるまい。

一の宮は氣に入つた。親切な驛長に就いて、避暑の事をいろ〳〵聞いたが、若し御家族一所にお出になるならば、然るべき農家を周旋しませうと云つて居た。野菜物も豊富だし、海魚はお手の物斯うして世人のために避暑地を紹介するばかりが能では無い、一つ松崎の一家も奮發して、今年は一の宮で暮らさうではない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か。新聞社への通勤には大不便利だが、哲郎、達郎、俊郎の喜悦如何ばかりかを思へば、少し位の不便は辛抱せねばなるまい。四五日なら日光か、大洗一ヶ月も居る積なら一の宮か、房州が宜からう。

日暮れんとする頃、大原の大きな宿屋に着いた。中形の浴衣に厚化粧した女中が三四人、「入つしやまし」と景氣好く迎へて、二階の奥まつた室へ案内した。家も古いし間取も感心しないし、それに案内された室は、餘り上等でもなかつたが辛抱した。八日の旅に色黑くなつて、洋服も皺だらけの大分見すぼらしくなつて居るので、宿屋でも變な男位に睨んだのであらう。そんな事は何うでも宜い、飯の出來るのを待つ間に、通信を一回分一氣呵成に書いたが、風通しが惡いので暑いこと甚だしい。それでも膳の上には、好物の水貝があつたし、蝦の煮たのがあつたので、キリンビールの味も佳く、好い心持になつた。膳を下げてから宿帳を持て來たから、默つて職業姓名年齢を明ら様に記入して遣ると、女中は能くある癖で、私の顏を穴の明くほど見詰めて、丁寧に辭儀して降りて行つた。

やがて此の家の若主人と云ふのが來て、「私は御社の千葉支局員吉田さんとは知合の者で御座います、少しも存じませんので失禮しました」と云つて、何かと夏場の景氣を話した。田舍へ行くと、何所の宿屋でも料理屋でも、新聞記者は善い意味に見る者と、惡い意味に取る者とがあつて、善い意味に見る方は、普通の待遇或はそれ以上の待遇をするが、惡い意味に取る方に出會ふと、無暗にペコ〳〵して敬遠するか、腫れ物にでも障る樣にして、オヅ〳〵するのが常である。何れにしても決して心持の好いものではないが、ここの主人の樣に、新聞記者の職業を了解し、私の聲名(?)等でも知つて居てくれると、少しも心が置けなくて好い。但し宿帳を持つて來た女中だけは、私が新聞記者と判つてからは、妙に禮儀作法をキチ〳〵して、お給仕をした先刻までは、「こゝにも抱への藝妓が二三人居ります、何なら呼びませうか」と立つて居た癖に、今度は言葉を濁して、「あれは隣の藝妓なんですよ」と云ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新聞社の方は氣が置けなくて好い、と云ふ家があるかと思へば、新聞屋さんは何を書くかも知れない、と險呑がる者も居る。旅をして居ると、これが面白い。

風呂へ案内したから行つて見ると、二十人位は入れる大きさて、既に男が五六人と、女が二三人浴びて居る。幼い頃生れ故郷にあつた男女混浴その儘て、明治二十年頃に復つた樣な氣がして、何となく面白かつた。男は近在の若い衆や行商人らしく、女は東京て見る小待合の女中然として居たが、後て聞くと夫れが抱への藝妓てあつた。男女混浴は風俗壞亂だと云ふが、斯うして一所に入つて居ても、少しも邪念が起きない。反つて人間の赤裸々たる本體が見えて、男と女との差別を忘るるの自然境に入つた樣な氣持がした。

明日は愈々大原から勝浦を經て、外房州を急行する筈てある。東京へ歸るのも、最う二三日の後かと思ふと、重荷の大半は下した樣な氣持になる。宿から海邊までは大分あるので、今夜は波の音も聞えず、何うやら安眠が出來さうてある。別便て小包を送る。（大原にて）

九、女性美か女性醜か

大原から勝浦までは、海も餘り見えないけれど、勝浦から天津を過ぎて、鴨川に着くまでは、所謂外房の怒濤岸を嚙む樣が、何とも云へぬ壯觀てある。道中は凡てガタ馬車て通したが、勝浦の晝飯も、鴨川の晩飯も、魚が新鮮なので、何とも云へず美味かつた。

大原を朝の八時に出て、北條へは夜の八時半に着いた。鴨川からは最う馬車が出ないと云ふのを、一臺三圓五十錢て買切つて、螢飛ぶ山徑や田路を疾驅した面白さ。「親の死に目にても逢はうと云ふ急ぎの旅なら格別、避暑地を見て歩くと云ふのに、馬車の買切は豪勢だなア」と、馭者や馬丁は眼を丸くした。天津にも宿りたかつたし、鴨川にも滯在したかつたが、何となく急き立てられる樣な氣がして、當もなく急ぎに急いて、今この宿屋へ落ち着いた所てある。こゝまてくれば最う丈夫、風さへ吹かねば、東京へ半日程て歸れる。

外房州を見た眼には、館山灣は餘りに女性的てある

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、由來房州は女を以て誇とする所、外房沿岸の男性的壯美に配するに、鏡ヶ浦の女性的優美を以てするも、面白い對照であらう。この宿へは一二度泊つた事があるので、老主人は商賣氣を放れて、歡待してくれるし、美しい若い女中も二三人居て、快活に能く語り能く笑ふ。今夜は旅に居る樣な氣持がせず、酒も少しは過ごしたし、海魚も好きな物は皆注文して食つたが、唯、米の飯だけは色が黒くて大に閉口した。飯と云へば宅で食つて居るのも上等だが、旅行先では靜岡縣藤枝町、彼所の米の飯の味だけは、一生涯忘れる事が出來ぬほど美味かつた。人並よりは米の飯を好み、人並よりは米の飯を食ふことの多い私は、先づ何よりも飯の味は珍重する。東京へ歸つたならば、新茄子の漬けたのか何かて、先づ何よりも美味い米の飯が食ひたい。

房州の宿屋や料理屋には、夏になると何處からともなく、若い美しい女が現はれる。房州に生れて房州で育つた女も、其半を領して居るが、他は悉く東京方面から來るさうである。さうして書生さんと勤人さんと、商人と若旦那とは問はず、こゝに暑を避ける程の人とは、何時となく懇意を結んで、戀の幾幕かを演じて居るさうな。女中であるべき分限を越えて、いろ／＼の男と關係を付ける事は、夏場に於ける女の書入とも云ふべく、彼等は平氣で私娼を營んで居る譯である。房州が繁昌するのは、其の自然の風光と季候とにも依るが、この私娼の群の跋扈にも、負ふ所が多いと思はれる。東京から流れ渡つて來る者は、旅から旅への「さまよひ」を生涯として、少し金が出來れば、跡を濁しても立つ鳥にならうとする。房州に生れた者は、磯育ちの頑丈な體軀を資本として、若干の金を貯へたいばかりに、紅白粉の化粧をする。今は未だ左樣でもないが、七八月の暑い盛になると、宿屋と云ふ宿屋、料理屋と云ふ料理屋には、これ等の化粧の者が出沒して、いろ／＼の流行唄を唱ふさうである。何處へ行つても、此の種の女が居るには、驚嘆せざるを得ぬ。

「東京へ仕込に行く」と云ふ言葉を、能く宿屋の主人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

や料理屋の女房などから聞く。東京へ行つて仕込むのは、米でもなく醬油でも無く、反物でも無く小間物でも無く、實は女である。房州の仕込人は、汽船で靈岸島に上陸すると直ぐ、豫て取引のある桂庵を歩き廻つて、「房州行の女」を探索する。それと明ら樣には云はないが、多くは私娼にする事を暗默の間に承知して買はれて行く。中には唯單に、女中奉公とのみ心得て行き、不知不識の間に、墮落する者も少なく無いと云ふが、こんなのは百人の中に、十人位のものであらう。

問題として考へれば慘憺な樣に思はれるが、彼等自身は案外平氣なもので、面白可笑しくはしやいで居る。斯うして髮が拔けて、病身になり、齡老いて行くことを、彼等は考へ樣ともしないで、唯、飮んだり唄つたりして居る。淺間しいではないか。（北條にて）

十、これ人生の一事實

北條から町續の館山に來て、今日一日は休養する事にした。尤も那古、舟形邊までは、午前中車で廻つて見たので、十日の旅も愈々今日で大團圓である。明日の一番で歸京、一寸社へ寄るから、青山へ歸るのは五時頃にならう。御馳走は澤山して置く可し。

この宿は北條と違つて、萬事が眞面目な樣であるが、それでも變な藝妓を上げて、サノサ節か何かを唄つて居る客がある。宿の女中の話に據ると、こゝの藝妓は大した權幕ださうで、變な話を持ちかけると、へゝんと鼻の尖で遇ふ奴があるさうな。周圍の女輩が皆賣淫婦だもの、「妾は藝妓です」と立派に立ち行かうとするには、其の度胸が無くてはならない。然し其の藝妓なるものも、大抵は土地の丸持を旦那にして、時に流れ渡りの浪花節藝人を買ふ位の事はあると云ふ。房州にも藝妓なる者が居るから不思議である。

宿の女中は一種の物識りだと見えて、尙いろ〳〵の事を話した。東京へ仕込みに行つた位では、到底この忙しい夏場が追付かないので、私娼を本業にして居る女將連は、靈岸島通ひの汽船の旅客係を手に入れて、目星しい女の誘拐を賴んで居る。賴まれた旅客係は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下等の船客の中で、途方に暮れたらしい樣子の若い女が居ると、言葉靜に話を仕向けて、房州へ行くのなら好い所へ世話しませう、と如何にも親切らしく持ち掛ける。又日毎夜毎の客商賣に堪え兼ねて、前借金の若干を踏み倒し、東京へ逃げる者があつても、それ等は大概旅客係の手に押へられて、金を支拂ふか、然らずんば前の雇主へ突き戻されて、前にも增した憂き目を見せられるさうな。新聞記者と云ふと惡い事しか書かない者の樣に心得て、つべこべと頭を下げる、彼の旅客係が、そんな一種の內職をして居るとは怪しからぬ。

房州通ひの船は一種の小說である。何時か折があつたらば、靈岸島發夜航の下等に乘込んで、「流れ渡りの女」を觀察しやうと思つて居たが、女中の話に據ると、船中の怪事實は、私の空想ばかりでも無いらしい。これまでも彼の汽船の中で、白金巾の風呂敷包を枕にした、銀杏返しの亂れ毛を見た事あるが、彼等の現在と行末とは、眞に輕からぬ問題である。公娼制度を廢止せねばならぬ、と絕叫して居る天下の識者達や、娼妓の自由廢業にのみ努力して居る救世軍は、何故この墮れたる私娼の群に着眼しないのであらう。國の法律が許して居る公娼を、彼是と論議するよりも、法律の眼を忍んで生きて居る蟲のために考へる方が、より急務であるとは思はないのであらうか。公娼廢止會の空論者流を、蛇の樣に嫌ふ私は、鐘や太皷で娼妓の自由廢業を煽動する救世軍も、大嫌ひなもの丶一つである。尤もこんな連中が如何に騷いだ所で、公娼も無くならねば、私娼の群も絕滅しない事は、判り切つた事實である。私は唯彼等の存在を、悲痛なる人生の一事實として傍觀し、そこに種々の雜報を書き、そこに種々の詩歌を誦じ、そこに種々の小說を作りたい。

思へば此の十日の旅は、私に取つて眞に多事多忙であつた。私自らが「さまよひ」の人となつて、山に海に幾多「さまよひ」の女を見ただけに、興會の淺からぬものあるを覺える。甲、信、野、常、總、房、の六ヶ國にして既に然り、思ふに斯る類の女は、日本の到る所に巢居して、高低緩急斷續常ない、一種の詩歌を彈じて居る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事であらう。或は戀の曲となり。或は運命の賦となり、或は絶望の歌となつて、行路の人を泣かしむる事であらう。彼等の存在は、これを物語りとして見るも悲しく、これを事實として見るも痛しい。

十日間の通信これにて全く終る。凡べての責任を果して省れば、私は最う東京へ歸らねばならぬ。懷しい東京、苦しい東京、愉快な東京、悲慘な東京、明るい東京、暗い東京は、四方八方から手枉足梏を投出して、山水放浪十日の人を捉へ樣とするのか。（館山にて）

筆者曰く、「淪落の女」これにて四篇を終る。餘す所「十二階下」の一篇のみ。「十二階下」は、篇者が最も力を注いで、縱橫に描寫せんとする所。唯、九月は大葬の盛儀ありて、筆者の身邊事繁し。其のこれを公にするは、十一月の誌上を以つてすべく、豫じめ大方に謝し置く。

青山博士と三浦博士

鵜崎鷺城

○晉語に晉の平公疾あり、秦伯醫和をして之を視せしむ、文子曰く醫は國家に及ぶか、對へて曰く上醫は國を醫し其次は人を救ふとあり。醫を國手と言ひ來りしは朱子題跋に聞訊袖中醫國手、不應長與一節閑とあるに出づるか。

○世間普通に國家の病を醫するは政治家の任にして、民の病を癒すは醫師の業なりといふも、國の政は民命の繋る處、人命を重んずるは國の昌ふる所以の本源なり。國を醫すると民を醫すると名は異るも、國家民人の幸福を目的とするに至ては即ち一。是を以て古より

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政道と醫道とは相離るべからざるものとし、醫を以て經國の業に携はりしもの尠からず。

○今の時醫業に從ふもの萬餘を數へ、中には學問治術の稱するに足るべきあり。當今醫界の元老には三宅秀片山國嘉、緒方正規、佐藤進、小金井良精、大澤謙二あり。幾多の後進を養ひ、醫事に貢獻したるの功大なるあるも、醫界を談ずるもの必ず博士青山胤通、三浦謹之助に及び、二者の存在に依て我刀圭界を重からしむるは何ぞや。

○尋常醫師の長時間に亙る診察よりも、青山三浦の僅に三十分に過ぎざる一診は病者に起死回生の感を與へ、他の千言萬語よりも二者の一言は福音の如く耳に響く。

○百の名醫も最早施すの術なき患者も青山三浦の手に罹りて初めて人事の限りを悉したりとし、二者匙を投ずるも天命なりと諦め、安んじて死に就くを常とす。

○斯かるは一種の宗教的信仰ともいふべきものにして、二者の宣告は即ち名僧智識の引導と其揆を一にす

而して其由來する處は一は學と術の力にして一は人格の力に外ならず。

○青山、三浦の聲聞を世に馳する既に久しきも、今次先帝の御重患に際して拜診の榮を荷ふや、日本の名醫としてよりも世界の名醫として知られ、醫界に於ける二者の位置は益々高きを加へにき、

○先帝は固より神種、殊に列聖の呵護あり、億兆亦た滿幅の赤誠を傾けて御快癒を祈願したるも、元と容易ならざる御症狀にしあれば上下擧げて憂ひを同うし、此上は一に兩博士の手術に待つの外なかりき。

○兩博士も一は君恩の萬一に報ひ、一は國民の信賴を空うせざらん爲め、坐ろに責任の大なるを自覺せしならん。而も獰猛なる病毒は深く玉體を冐し、兩博士の靈妙なる治術も最早如何ともする能はざりき。

○先帝崩殂の報一たび傳はるや、萬民哀悼して愁雲天日を蔽ふ。殊に親しく玉體を拜診したる兩博士の衷情の如何なりしかは察するに餘りあり。爾來客を謝して專ら謹愼の意を表し、尙ほ自家の手術の足らざるを恥

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぢて近く外遊の途に上り、更に醫學の蘊奥を研精すべしと傳へらる。

○さる感想の起るは無理ならざる事ながら、醫として最善を盡したる兩博士に對して何人も責任を論ずる者なかるべし。されど至尊の玉體に對して平素重大の責任ある侍醫寮の態度に至りては遺憾に堪へざるもの多し。

○假に先帝の御病癒ゆるとするも尙且つ侍醫の怠慢は免るべきにあらず、況んや今日の如き國の不幸を見るに於てをや。

○既に御發病の當時より侍醫寮の爲すなきを口にする者ありたれど、斯かる場合なれば謹愼を守りて公然論議するを憚りしが、最近に及び都下一二の新聞紙は初めて侍醫寮の職責を質すに至れり。

○而も其動機の侍醫頭岡玄卿の不謹愼千萬なる言議にありといふに至ては、益々其非常識を嗤はざらんと欲するも得ず。藪蛇とは眞に是れ。

○蓋し岡が場合を顧みずして先帝の御病歷を發表したるは、世評を氣にし、また實際には心に恥づるの餘り之に依て自家一輩の辯護を試みたるに過ぎず。

○岡の言ふ處、新聞紙の揭ぐる處果して共に實を得たるものなるや否やを知らず。去れど侍醫寮の無責任を看過するは皇室に對して却て不忠なりと信ずるが故に、靑山、三浦兩博士の本論に入るに先ち少しく叙する處あらんとす。

二

唐の魏鄭公嘗て太宗皇帝に言ひけらく、願はくば臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむるなかれと、帝忠と良と異なるかを問ふや公答へて曰く、稷契皐陶は君臣心を協せて俱に尊榮を受く謂ゆる良臣龍逢比干は面折廷爭して身誅せらる謂ゆる忠臣と。

○斯くの如く忠良を別つは鄭公の一家言のみ、名は異るも良臣にして君に忠なるを得べく、君に忠にして良臣といふを得べし。凡そ君國の憂ひは忠良の士なきより甚だしきはなく、今や宮中府中を通じて眞に忠良の士と目すべきもの幾人かある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○宮內官は平素忠君を自家特有の如く振舞ふも、實際は君恩に狎れ形式の事に走るの嫌なからず。

○侍醫頭以下侍醫等にして眞に忠誠の心あらば先帝の御健康に對して平日充分の注意を拂ひ些子見の遺漏なきを期せざるべからず。然るに今回の因をなせる糖尿病は過ぐる三十七年以來の御宿痾なるに拘らず彼等は侍醫として當然爲すべきの責務を懈り、君の殊恩に孤負す何の顏ありて先帝の靈に對し六千萬赤子に見えんとするか。

○殊に御發病一週前既に御兆候の顯著なるあり、苟くも醫學上の普通知識を具ふる以上、侍醫頭は事の容易ならざるを察して直ちに適當の御手當を爲すべき筈。然るに御發病の前日拜診して何等氣附く處なきのみならず、岡は還曆の宴を自邸に張り、他の侍醫亦た之に招かれて侍醫寮を空虛にしたりといふに至ては重々の失體にあらずや。

○道路傳ふる處に據れば、十九日御疾患の大漸するも侍醫等は恐るべき尿毒症たるを知らず、青山、三浦の召されて急遽參內し、玉體を拜診するに及びて始めて其然るを知り錯愕狼狽したりといふ。彼等は頻に之を打消すも從來の態度に照らせばさる事ありしとも惟はれざるにあらず。

○從來侍醫は紗を隔てゝ御脈を拜診したりとの說あり、假にさる事なしとするも、兎も角も泰然として、玉體に咫尺し得たるは岡一人のみにして、他は手を顫はして確實に御脈搏を數ふるに堪ふる者なし。恐懼するは可なるも、斯くては完全に侍醫の任を盡し得たりとすべきか。

○青山、三浦の宮中に召されしは西園寺首相の渡邊宮相、德大寺侍從長に諮り、一面山縣公の意見をも徵したる結果なるらし。然るに侍醫寮は醫を宮廷以外より招くは先例になき處なれば、勅許を仰がざるべからずとて先例論を以て之を沮むの狀なきにあらざりき。

○宮中に於ける儀禮上の手續の嚴なるは固よりの事なれども、今日はさる古格舊法に拘泥する場合にあらず、殊に勅許を經るの事實上不可能なるあり。是に於

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て渡邊、徳大寺は臨機の策として皇后陛下に言上し、陛下の御思召に出づるの形式を取りしなり。

○岡以下各侍醫の内心青山、三浦を喜ばざりしは其謂れなしとせず。蓋し斯くの如きは一面に於て侍醫の不信任を意味し、一面侍醫寮は無用の長物に外ならざるを世に暴露すればなり。

○岡は作州津山の人、明治九年の大學出身にして侍醫の職にある二十餘年、一昨年池田謙齋の館を捐つる後を承けて侍醫頭に拜す曾て獨逸に留學し、萬更の凡醫にあらざるも、久しく宮廷に隱れたる爲め最新の醫學に通せず、加ふるに人格上指議すべきなからず。

○侍醫には田澤敬輿、伊勢錠五郎、片山芳林、西郷吉義、三浦省軒、相磯慥、樫田龜一郎あり、皆な大學出身にして中に就き西郷は最近獨逸に遊び、樫田は博士號を有し比較的良醫の稱あるも、久しく臨床の實驗に遠かれる爲め自ら術の荒みて凡化し、一代の名流と認むべき者なし。

○曾て佐藤尚中翁の大典醫に任ぜらるゝや、龍體を拜診するに際し出入共に匍匐膝行せざるべからざるに堪へず、醫は天下の學者なり、然るに、犬や猫の眞似を爲すは國手を待つ所以にあらずとて侍醫寮の舊慣を非議し、且つ改革案を草して時の宮相に建議したるも容れらず、終に骸骨を乞ひにき。

○佐藤の意見は侍醫の數を減じ臨機醫界の名手を選拔して拜診醫療の任に當らしむべしと謂ふにありしが如し。

○宮内官の保守固陋なる、斯くの如きを言はゞ直ちに不忠呼ばりを爲すの常なれども、其弊を認めつゝ尚且つ改革を忌み、徒に舊思想に囚はるゝは果して皇家に忠なる所以なるか。

○此次青山、三浦の拜診に列せる、單に帝國大學教授たる官職の上より然りしにあらずして天下の名醫たる點にあらん。佐藤の意見の一部分は即ち三十餘年を隔つるの今日漸く用ゐられしなり。

○斯くの如く侍醫寮改革の聲は夙に醫學者間に存し、實に多年の宿題たり。今日國家稀れに看るの重大事あ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るに及びて一層痛切に其必要を感じ、或は近く其事の實にせらるべき日あらん。

三

○青山は岐阜の人、明治十五年大學を出て翌年官命を以て獨逸に留學し、居ること五年にして歸朝するや、直に醫科大學教授に任ぜられ、後ち醫科大學長に進み兼ねて大學病院を宰して今日に及ぶ。

○同時代の卒業生中、醫として世に著聞せるは外科に博士佐藤三吉あり、內科に緒方收二郎あり、山根正治は醫としてよりも議會の人として多く知られ、侍醫西郷、相磯亦た同級なり。

○青山の名の頓に江湖に高まりしは二十七年黑死病の印度に猖獗を極めたるに際し、博士北里柴三郞と共に政府の命に依て香港に出張したる時にありとす。

○而して二者各々其使命を異にせり、北里は黴菌學者として病源を發見するが爲め、青山は臨床學者として專ら治療の術を研究せんが爲め。

○青山は端なく病毒に感染し。危篤を傳へられたる一再ならざりしも、幸にして九死に一生を得、且つ自己の經驗に依りて治術上少からざる智識を齎らして歸朝す。朝野の士擧げて彼の功勞を稱し、東京の醫師會は紀念の爲め贈るに一箇の金時計を以てせり。

○後年其金時計に關して一奇談あり。彼れ曾て大阪の富豪金澤某の重患を診したる時、招かれて醫師の歡迎會に臨み、夜直に京都に赴く爲め宴半ばして辭す。

○當時京阪間の滊車中掏摸の難に罹るもの多かりしを以て、列席者の之を注意するや、彼は掏摸兒も天下の青山に對して豈に一指を觸るゝを得んやと豪語し、深く意に介するの色なし。

○既にして滊車七條驛に着するに及び、ポッケットに入れたる金澤家の謝禮三百金の一包は言ふまでもなく、紀念の金時計の紛失せるを知りて初めて不注意なりしを悔ひ、二日を經て東京に歸れば、其金時計は一通の書と共に留守宅にありき。

○病を抱きて異鄕に呻吟せる時、彼は優渥なる聖勅に接して感激の涙に咽びき。今次先帝の御不豫に際し、當時を追憶して一層情の切なるありしは固よりの事なるべし。

○三浦、は青山より後るゝこと六年即ち二十一年を以て大學を出づ。同級には博士大澤岳太郎、外科の名手阪田快太郎等あるも、彼を以て成績第一位とす。

○維新前福島に三浦道生なるものあり、醫名夙に一藩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に鳴る。三浦は其男にして道生の養嗣子たる侍醫三浦省軒は即ち彼の義兄に當る。

○醫家に生れたる三浦は初めより醫を以て身を立てんと志し、家に在る時診療の實地を研究し、夙に醫學の大體に通ずるを得たり。卒業後兩三年大學病院の助手たりし間に更に臨床上の實驗を積み、既にして歐洲留學を命ぜらるゝや、初め獨逸に至り次に伊太利に轉ず。

○滯歐四年にして歸朝し醫科大學教授に任ぜられ、內科第二講座を擔任して今日に及ぶ。青山の博士となりしは大學總長の推薦に因るも、三浦は一篇の論文を提出して之を得たり。

○青山も三浦も倶に內科の翹楚たるも、青山は內科全般に亘り、三浦の最も得意なるは神經科にあり。從來神經系統の學に就て深く研究する者なかりしが、三浦の伊國大醫シャルマーを師とし其蘊奥を極めたるを以て嚆矢とすべく、神經學の講座は彼に依て初めて完全なるを得たり。

四

○我邦醫界の系統を觀るに自ら三大派に別るゝが如し。大學派、內務省派、軍醫派及び濟生學舍派是れなり。而して其最も勢力あるものを大學派とす。

○大學派は青山自ら代表的人物たる形をなし、內務省派は北里、軍醫派は陸軍に於て森林太郎、海軍に於て高木兼寛、實吉安純等之が牛耳を執り、濟生學舍派は長谷川泰の舘を捐てゝ以來首領を失へる形あるも、今日は內務省派と結びて大學派に拮抗せるが如し。

○開業醫の最も多きは大學派と濟生學舍派なり。後者にはさして醫名の著聞せる者なきも、前者には各專門の名家なきにあらず。婦人科には博士濱田玄達、吾妻勝剛あり、泌尿科には博士朝倉文三、阿久津三郎、額田豐あり。

○朝倉は其學問治術最新といふにあらざるも、實驗家として知られ、腎臟病より尿毒症を併發するを豫防する爲め或る外科術を用うる一事は彼の最も誇る處なりと稱せらる。されど品性の高潔ならざるは夙に醫師の間に定評あり。

○當今新陳代謝病に關して最新の智識を有するは額田と阿久津なり。額田は青山の高弟にして最近まで獨逸にあり。病理に於ては第一人と稱せられ、阿久津は治術に長じ、殊に膀胱鏡使用に熟練にして且つ腎臟外科に巧みなる恐らく其右に出づる者なからん。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○大學教授中解剖學の片山國嘉、細菌學の緒方正規、整形外科の田代義徳等を除き、專ら臨床醫學に携はるものは概ね內職を營み、其收入は寧ろ教授給よりも多し。中に內職根性の最も甚だしきは眼科の河本重次郞、耳鼻咽喉科の岡田和一郞、內科の入澤達吉にして、目星しき患者は大學病院に廻さずして自宅に來らしむ。

○青山、三浦も自宅に於て患者を診察し、また富豪貴族の請ひに依て往診せざるにあらざるも、初めより收入を目的とするにあらずして多くは餘儀なくさるゝのみ。

○青山の自宅診察料は初め五圓なりしに、最近十五圓に改めたるを以て兎角の評を試むるものあれど、青山自身のいふ處に據れば、實は其煩に堪へざるより、之を豫防する爲め斯くせしのみ、されど十五圓の今日も診脈を乞ふ者の依然として多き五圓時代に異らずと。

○若それ三浦に至ては公務以外の患者は一日三人を限り、之に全力を集中す、而して青山も三浦も面倒なる患者は決して自宅に於てせず、必ず大學病院に來らしむ。

五

青山と三浦は其對照(コントラスト)の妙なるより二者を併せ評するの最も興味あるを覺ゆ。先づ其形貌に就て看んか、青山は軀幹長大にして一癖あるらしき面構へなるも、三浦は瀟洒温藉宛として貴公子の風あり。前者の醫者らしからざるに反し、後者は其風貌を一觀して直ちに醫たるを知るべし。

○青山は政治家的にして居常政治を談ずるを好み、時に元老を罵り議會を嘲り訥々辯ぜざる中に間々奇警の語を挾む。恰も雪嶺博士のそれに似たり。

○三浦は談論の人にあらざるも、一たび口を開けば諄々として說き要領を徹底せしめずんば已まず。されど青山に比すれば談に奇なし。

○青山は豪放にして圭角多きも、三浦は其名の如く謙厚和易にして春風の如し。故に人に接するの態度の如きも前者は無愛想千萬なるも、後者は極めて慇懃の禮を以てす。

○青山は容易に人言に動かされず。大學教授中時に醫學上新說を進むるも、之を採用せず自我を貫くより其頑固に過ぐるを指議するもあり。去れど近刊の醫書は必ず之を購ふて讀み、一日も新智識を養ふを怠らず。

○醫を以て商とせず飽まで學者の態度と心を失はず。診脈醫療の事に從ふも此立場よりするを以て迎ふるに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

禮を以てせざれば斷じて應ぜず。彼の眼中貴族も富豪もなし。

○曾て某權家の請に依て往診したるに、執事禮を解せず別室に控へしむること多時に及びたれば。彼れ執事を呼び、余は座敷を見んが爲めに來りしにはあらずとて憤然席を蹴て起つや、執事等の大に狼狽して罪を謝したるも、我れ再び此門を入らずといひて歸れり。

○岩崎家より一患者の入院を大學に依賴し、且つ二三室を專有せんことを交渉するや、青山之に答へて曰く、大學病院の病者に對する一視同仁のみ。豈に一富豪の故を以て便を計り、一般患者に不便を與ふるが如き沒道理の事をなさんやと。

○前年黑死病の流行するや、各停車場に於て鐵道旅客の檢疫を行ふ。人あり青山を訪ひて黑死病豫防に關する意見を徵するや、ペスト菌はヒマラヤ山麓の泥溝より各方面に散布しつゝあり、さる形式的の檢疫にて豫防し得べしとするは素人考へのみと口を極めて後藤の無識を笑ひ、且つ曰く青山が斯く言ひたりと後藤の敲に傳へよと。

○彼れ一週一回早稻田に抵りて大隈伯を診す。伯は青山をして政治家たらしめばと稱讚したる一人にして深く彼の人と爲りを愛し、青山も亦た伯の人物に心醉し、二人相會すれば談必ず半日に及ぶ。

○曾て伯の腦を患ふるや、青山は客に接し書を讀むを禁じ、且つ家人を警むるに長く談話を交ふるなからんことを以てす。

○斯くいふ口の下より彼は時局を談じ、伯亦た之に和し更に烏鷺を挑むや伯も之に應じて何時果つべしとも思はれず。夫人之を看て伯の病に害あらんを憂ひ傍らより注意するや、青山の曰く、余とならば何を爲すも大丈夫なりと。何ぞ其答辯の奇なる。

○蓋し青山は飽まで直情徑行の人なり。阿兄某曾て職を官に奉じたるも奇骨餘りありて居るに堪へず、致仕して卜筮の事に從ふ。青山の風變りは骨肉相承けたるものか。

六

青山、三浦は診察振りに於ても亦た絶好のコントラストをなす。前者は勿體らしく聽診器を耳にするが如きなく直に耳を胸部に當て、更に體の要部を打診し、容體を一見して疾患のある處を察す。未だ嘗て斷案を誤らざるなり。

○曾て一書生を診し、警めて曰く、吾子今日の病は敢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て要ふるに足らざるも、酒を禁じて攝養を加へざるに於ては不治の肺患に變じ、兩三年の後を以て命を失ふべしと。果して青山の豫言の如くなりき。

○世或は青山の大雜把に失するを貶し、寧ろ三浦の勝れるを稱するものあれど、臨床上の技能は當代の第一人とすべく眞に三昧に入れるものなり。

○三浦は青山の直覺力なきも、精細周密にして滴水の微も忽にせざる點は青山の及ぶ處にあらず。隨て患者に接する助手を待たずして自ら病症日誌を錄し、其病源に至ては微を探り幽を闡かずんば止まず。健康診斷の如きは最も確實にして一點の疑ふべきなし。

○三浦は患者の納得するまでに病氣の說明をなす恰も學生に講義するが如きあり。青山は唯だ病名を告ぐるの外多く言はず。蓋し疾病のこと素人に說くも分るものにあらずとすればなり。

○先帝の御病狀に關し、三浦は日夕蠅の如く襲ひ來る新聞記者を一々引見して具さに語り、之に反して青山は固く面會を謝絕したれば新聞紙上の聲望は專ら三浦に集中しき。二者の性格の異る此一事に徵するも明かならずや。

○青山を以て天才肌に近しとせば、三浦は確かに修養の人なり。東北の首下病及び北越地方の恙虫病に關し調査の結果を發表して世界の學者に地方病研究の好資料を與へ、其他矮小條虫、視神經床に於ける腫瘍の如き彼の研究に依て初めて病理を明かにし醫學上益する所少からず。蓋し彼が如きは學に忠なる者と謂ふべし。

○斯く二者の性行相反せるに拘らず肝膽相照らし、從來青山の洋行したる時は後事を三浦に托し、三浦の不在中は青山之に代り其關係恰も骨肉の如きあり。

○大學病院には青山、三浦、入澤の三內科あり。入澤は夙に名國手の名あるも、到底青山、三浦と駢儷するに堪へず。去れど性質如才なきを以て患者の氣受は恐らく第一ならん。文學趣味あるは今の醫學者中彼と森鷗外の二人とす。

○三內科の助手各々青山、三浦、入澤の氣風に酷似せるは私淑するの深きに因るとはいへ奇と謂はざるべか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らず。

○世に天下一品といふことあり、多く他に類を見ざるの謂ならば、青山、三浦の如きは確かに醫界の天下一品にして、政界に於ける犬養木堂、言論界に於ける三宅雪嶺、浪人界に於ける頭山滿の孰れも天下一品たると同じ。

御大葬式の沿革

文學博士　萩野由之

大行天皇の御大葬式はいよ〳〵九月十三日を以て行はせらるゝことになつた。それについて私は、日本歴史にあらはれた古來からの御大葬式の變遷を簡單にお話して見やうと思ふ。

一體大葬の事については、古い所の歴史に書いてないけれども、先づ大別すると神葬と佛葬の二つに分つことが出來る。然し神葬といつても今日の神道家のやる通りといふ譯ではないが、名づけやうがないから先づ假りに神葬として置くのである。つまり皇室御自身で御葬式をなさるのである。佛葬は皇室の人も神官も式をなさずに只僧侶任せにするのである。だから或意味に於ては神葬佛葬を指して自葬他葬といつてもよいかも知れぬ。

之を時代別けにして見ると、神葬は神武天皇以下御歴代に行はれて來たが、推古天皇の頃から段々佛葬をなさるやうになつて來た。それから引續いて極く近頃まで佛葬であつた。即ち孝明天皇まで佛葬であつた。英照皇太后の御葬式は、明治になつてからで神葬であるけれども、之は普通の臣民の神葬とは違ひ、御自葬と申上げた方が適當かも知れぬ。

古い所の神葬の式は、天皇の御葬式即ち御大葬式としての記事としては、弘文天皇以前は委しい事が出てゐない。只神代の所に皇族の御葬式が一つ書いてある。それには今日から考へると妙な行列がついて行くことが書いてあるが、それが悉く古代の神葬の全般の式といふ事が出來ぬかも知れぬ。要するに古の大葬の御儀式はよく分らぬといつてもよい。只御柩の前に、御饌を供へ、誄詞(しぬびこと)を讀むといふ今の神葬の式と略ぼ似寄つたものであつたらうと想像される。只其時に讀む誄詞(しぬびこと)を、各階級の代表者が出て讀むといふ事が天武天皇の所に出て居るが、之などは面白い事で、其時は大體は佛葬であるが、其間に又古來の式が殘つて居る。

佛葬になつてからは最早や僧侶任せであるから、僧侶が總ての儀式をするのである。時代によつて多少違ふけれども、多くは南都北嶺といつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て奈良の興福寺と比叡山の延暦寺の僧が出て來てやる。後には泉涌寺で行はせられた。

御葬式も初めは無論土葬で其山陵は餘程宏大なものであるが、それも三通りの沿革がある。一番初めは圓形で、それから崇神天皇の頃から前方後圓といつて、前が四角で後が圓い形となり、崇峻天皇の頃から復た圓形になつた。前方後圓式の中で、仁德天皇の大山陵（だいせんりやう）の如きは未曾有の大山陵である。之は天皇の御在世中からお造りになつて置いたものである。

佛教が盛んになつてからは火葬が行はれるやうになり、持統天皇以後の御歴代は皆御火葬であつた。初は御火葬にしても圓形の山陵が作つたが、平安朝の末頃からは全くお骨を埋めた上に石塔を建てゝ置くといふ極めて簡單なものになつて了つた。殊に甚しいのは淳和天皇は御遺言なされて、御骨の灰を野原に撒き散らさしめられた。之は勿論佛教の影響もあらうけれども、一つは葬式に費用を掛けさせまいといふ御仁德からでもある。一體山陵を作るには莫大の費用と多數の人夫を使はねばならぬので、之を作るのは並大抵の事でなかつた。それに御生前に用ひられた貴重品愛玩品の如きものは山陵に埋める風習があつたので、實に餘程の負擔であつた。獨り天子のみならず、他方の豪族なども葬式に金が使つたもので、其爲めに家のつぶれて了つたものも少くなつた。そこで御子孫に御迷惑をかけぬやうにといふので、薄葬の御遺詔といふものが例として出て居るからでもあらう、前に話したやうに淳和天皇が御遺言をなされた時に藤原吉野といふ大納言が、日本の山陵は支那の宗廟と同じもので、臣子の尊敬する所なれば是非山陵を作りたいと申上げた所が、然らば嵯峨上皇によく申上げて其思召通りにせよといふ御遺言であつた。所が矢張り先きの御遺言通りにするといふ事に決著なつたものと見えて、御骨を粉にして大原野に撒き散らすことにしたといふ、誠に恐れ多い極端な例もある。

普通は先づ火葬場を新規に作られる。之を爐といふのである。御葬式は何時も夕方から初まり、御葬式が濟めば御遺骸を爐の上に安置し、薪（たきぎ）を澤山積み重ねて僧侶が經を讀みながら之に火をつける。そして夜明けには灰になり、翌朝白骨を壺に入れ首にかけて持ち歸り、法華堂などいふ寺の堂に暫らく安置するといふやうな簡單なものであつたが、中には御火葬はお嫌だといふ天子様もあつた。けれども思召通りに行はれなかつたやうである。例へば一條天皇の如き、火葬は嫌だから土葬にせよと仰せられた。けれども其御遺言を受けた藤原道長などは其御遺言を忘れて火葬にして了つて、どうも今更ら仕方がないといつたといふやうに書いてある。然しそれは忘れた譯ではなく、此頃は特に先例典故の矢釜しい時代であるのに、火葬になつてから既に數百年經つて、土葬の禮は忘れられて居るから、忘れた風を裝うて御火葬にしたのぢやないかと思はれる。

御火葬は德川の初期まで代々續いたが、然し疱瘡でお亡くなりになつたお方の葬式は、疱瘡神に對する迷信からして、火葬にはせぬといふ一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種の習慣があつた。後光明天皇の如きは疱瘡でお亡くなりになつたのであるが、かういふ時は火葬の形式による土葬をするのである。詰り火のない爐の上をお棺を三遍廻して土葬にするのである。其頃からして漢學が大分開けて來て、君父の御遺骸を臣子として燒くといふ事は、罪人を刑するが如く、甚だ不都合にして忍び難き事であるといふ議論が盛んになつて、火葬を嫌ふといふ觀念が一般に行はれたから、其後疱瘡で亡くなられたお方でなくても土葬にすることになつた。然し何しろ千年以來の習慣であるから、矢張り爐の上を三遍廻し、表面は火葬、内實は土葬といふ事にしたのである。然るに孝明天皇の御崩御の時に山陵奉行の戸田大和守が、建議して、千年以來の習慣を破り、純然たる御土葬になつたのである。先づ此位の事で御免を蒙りませう、

數奇傳 補遺（二）

田岡嶺雲

(15)

予の左の手首から五寸許り腕に偏つた處に一つの黑子がある。其黑子は普通と異つて色が青い。

此黑子は予の肉身の上に父の遺傳を證する者てある。予の黑子のあると同じ箇處に、父の手にも撒散らした樣に小さい青い斑點が有つた。花火用か何かの煙硝を扱つて居る際、誤つて爆發して皮膚に吹き付けた其痕ださうである。場所も同じ青さてあるから推して、即ち此れが黑子として予に遺傳せられたものてあらうと思ふ。

肉身の上てなく、心理の上にも父の遺傳と自ら認むるものが一つある。

父は寡默深沈て、喜怒を色に形さぬ人てあつた。短氣性急な予の遺傳したのは此れてはない。又父は操行嚴正な人てあつた、放縱無賴な予が遺傳したのは此れてはない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

予等の眼からは極めて完全な父にも、缺點はあつた。予の遺傳したのは其父の長所でなくて、寧ろ其唯一の短所であつた。

父は寛裕な人であつたに拘はらず、他人の爲た事では何うも氣に入らぬ慊らぬといふ癖があることを、祖母が母などに話すのを聞いた。他人の爲た事は氣に入らぬ、是れ父に於ては、やがて自己の努力自己の勤勉を以て、自己の運命を開拓した勇氣となり、忍耐となつたのであるが、予に於ては我慢となり、不平となり、放肆となり、自棄となるに過ぎなかつた。

父には縱使此れが缺點であつたとしても、之を蔽ふに十分な他の美德があつたが、予には此の父の唯だ一つの癖といふに過ぎない者が、殆ど予の心理の作用の凡ての背景となつてゐる。

予が何者をも信じない、何事にも滿足しない、何時も不平であり、不安であるのは、予の心の奥に父と同じく他人の爲た事には慊らないといふ氣質が、覗いてゐる爲めではなからうか。

宗教上に無信仰に、政治上に不服從に、「今」の外に歷史を認めず、「己」の外に權威を認めず、獨斷を以て獨創なりと信じ、無秩序を以て自由なりと信ずる、此れも亦其病根は他人に慊らぬ所にある。

我を立て、世と逆ひ、人と容れず、予が半世の數奇亦此れに由らずとは云へない。

父の遺傳を黒子に於ては縮少されて受けたが、心には擴大し惡化して受けた。

(16)

予の母の母は微祿な家に、而かも女と生れたに似ず、文字の嗜が深かつたらしい。固より貧乏侍の家内として、五人の兒持であつたから、目まぐろしい程忙しなかつたこと想ひやられる。而るに暇さへあれば、打向うた火鉢の灰を均しては火箸で字を書いてゐたと、母が予等に語つて聞かせた事がある。此の祖母は予の生れた頃に沒したから、此事の外には知る所がない。

併し此母の母、即ち吾等の曾祖母に當る人と、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

母の母の兄弟に當る人は、吾等が物心ついて後も永く生き存へてゐたから、夫から推して此母の母の性格も略察しられる。

此母の母の母は、九十許の長壽を保つたに適うた柔和な相を具へた、小兒心にも懷かしい人であつた。

母の母の兄弟に當る人も、濃い地藏眉の、心持垂れた眼の大きい、耳の厚い、齒並の揃うて白い、何時も機嫌の良い伯父さんであつた。茶好きて、甘い物好きて、話好きて、能く其江戸勤番中の出來事などを、稍々含み聲の音調て、面白可笑しく語るを聞いた。淺田宗伯の名醫である事、自分が其頃に所謂コロリ（今のコレラ）に罹つた九死一生の場合を、此人の治療て命を維ぎとめた事、其の快癒に向うて食禁のやかましい時、茶腹も一時といふからと云つて、茶を喫むことの許された話のみは、今も猶予の耳に遺つてゐる。

(17)

祖母（父の母）の生家は我等の家と極めて近かつた。祖母の弟に當る當主は、親族間て吝嗇と評判のある程約やかな人て、疊には何時も反故を張り堅めて澁を引いた厚紙が、座敷一杯に席かれ、唐金の火鉢の耳には、何時も一度使つた鼻紙が火氣て乾くやうに挿まれてあるのが、小兒心にも薄汚ならしかつた。相當の財產は有つたらしいのに、傘張を內職にして、井戸の傍の小庭に何時も、紺色や赤澁色が、引かれた油に匂うて日に乾かされてあつた。

我等の再從兄に當る此の伯父の一粒種の繼嗣は、黑い長い髮の、蒼白い額にかゝつた、聲なども女のやうに優しい、其の弱々しい貌が、陰氣な薄暗い、何だが古びた黴の匂のするやうな其家の雰圍氣の中に、如何にも痛ましく見えた。

予は何時か鬼事か何かの遊びに、喉が渴いて、此の伯父の家に駈込んで、青苔のドロ〳〵とた水甕の底に、僅か許り殘つてゐた水を、批杓て掬うて一口飲むと、生溫く、日向臭い。ムカ〳〵と嘔氣を催して、此れ以來生水を口にすることを絕つた事があつたのでも想像せらるゝ程、此家の凡てが予には不快な感覺を與へる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ものゝみてあつた。夫にも拘はらず予が足繁く此家に出入したのは、再從兄が、此れも其父の命に遵つての内職てあつたらう、紅黄藍さま〴〵の繪の具を溶かしては、凧繪を畫くのに、心が牽かれたからてある。

予は此の再從兄から種々の繪の具の名を敎へられた。予は此の再從兄の繪が、果して巧みてあつたや否やを知らない。併し、其藝術家に相應しい様な弱々しい態度と、及び其の習はずして兎に角繪らしいものを畫いたのとから見て、天才てないまても美術の材能は有つてゐたと想ふ。

此の再從兄は、鈍い煤んだ家の中に埋められたまゝ、方言て疳症といふ一種の神經病に罹つて夭死した。

(18)

予が父は鐵の様な意志に、玉の様な感情を包んだ人て、無口てはあつたが、不愛嬌ては無かつた。物に動ぜず、堪忍强い所があつて、子たる吾々兄弟をさへ、殆ど叱るといふことが無く、殊に神經質な予に對しては、唯一度母が病氣の時、傍に寢ることをせがんて已まなかつた時、門の外へ捨てるのだと云つて、暗い夜を抱きかゝへられて行かれた外は、母が小言をいふのをすら、餘り叱つては其子は萎縮けて仕舞ふと制するのが常てあつた。

此様に堪忍强い父が、他人に對して怒つたのを、予は唯一度見たことを記憶する。

或時、隣家の酒宴に招かれて父が行くのに予も連れられた。

大人許りの宴席に厭倦を感じて、門の外へ出て遊んてゐた。何ても外は黄昏れて、家の内に華やかに燭臺が點さるゝ頃てあつた。突然父か家の中から跣足て飛び出して、我家の方へ駈け去つた。予は驚きながらも、父の後を追うて歸ると、家の内て祖母や母が父に縋つて詫びる様に何か言つてゐるのが、小兒心にも啻ならぬ光景と思つた。

此れが何が原因てあつたかは知らぬが、前に言つた祖母の弟、即ち父の母方の叔父に對しての怒てあつて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

父が馳せ歸つたのは、其の叔父を斬る爲めに刀を持ち來る爲めてあつた。

父のやうな人が、現在の叔父を斬らうとしたのであるから、父としては非常な侮辱を受けたものであらうと想はれる。

兎に角、此の人と父とには、何うしても反の合はぬ性情の相違が存じてゐたのらしい。

(19)

今言つた予等の大叔父の、涸れた樣な曇つた樣な性格に對して、其の人の弟に當る予等の大叔父は、冒險的な企業心の有る人てあつたらしい。

予等の知つた頃は、國の西の端の幡多といふ處て、珊瑚の採收をやつてゐた。

我家の床の間の置物にしてあつた可なり大きな白の枝珊瑚樹は、此の大叔父から贈られた物てあつた。

此の事業は大した成功を見なかつたらしく、村へ歸つて後は小學校の隣りて文房具を商つてゐた。

二人の男の子があつて、兄の方は所謂四方の志を抱いて、早くから放浪の旅に上つてゐた。弟の方は予より二歳の年長て、學問好きな秀才てあつた。

予の幼時に於て、此の再從兄から受けた感化と刺激とは、少々てなかつた。臆病て、外に出るのが嫌ひて、多くの友を有たなかつた予は、此の再從兄が又無き親友てあり、又尊師てあつた。

此の大叔父も土佐特有な「テニハ」と稱する狂句が巧かつたが、再從兄も其の同じ血を傳へたらしく、文學的の材能に富んてゐた。予が文學に身を立つるに至つたのも、溯れば此の再從兄の予の幼時に於ける感化と刺激とが、其の一部の要素を成してゐるかも知れない。

(20)

父は勤儉てあつたが、決して慳吝な守錢奴てはなかつた。小金をも貸し、又後には鑑札を受けて小質をも取り、貨殖の途に勉めたが、夫れも決して卑しい町人根性から出たのてなく、予等兄弟四人の學問の費用を作り出す爲めに、已む無くせられた手段てあつたらし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。實に其頃千圓にも足らぬ公債（士族の家祿にかへられた所謂金祿公債）と、數町の田地を有つたのみの痩士族で、一人前十圓とするも、毎月四十圓を要する其の子等の遊學費を支辨する事は、容易でない。尤も一番季の弟は國を離れることが遲かつたから、費用が少くて濟んだとしても、其頃吾等兄弟の中では、一番放膽な長兄が純粹な學資以外に費消する額が少くなかつたから、平均すれば一箇月四十圓以上を出づるとも、降ることは無かつた。

米が石に四五圓の相場しかせぬ其頃の四十圓は大金である。年四百八十圓は、米九十六石の價、米九十六石は殆ど田地十町歩の收穫（小作人より收むるとして）である。之れを中産なる我家の如きより毎月缺かさず支出せねばならぬのであるから、父の慘憺たる苦心は察するに餘りがある。

予が家の玄關前に質屋の鑑札が懸けられた時は、商賣といふことを一種の賤しいものに考へてゐた予は、安からぬ事のやうに考へた。父に對しては勿體無い至りである。

斯く父は貨殖の法を講じたものゝ、貧しい者、賤しい者に對して些しの因業な所作も無かつたらしい。父を恩とし、德とする者こそあれ、憎み怨む者は村中に絶えて無かつた。

父は又、吾等にも勤儉と獨立とを敎へる爲めであらう、兄弟夫々に若干宛かの金を分つて、固より其頃は郵便貯金は勿論銀行貯金も發達せぬ頃であつたから、父自からの手に此の予等の小財產は運轉利殖せられて、月々に其額を加へた。予の金庫たる赭色の古文箱に、出入を詳記した小帖面と、其れに入れられた、裏に龍紋の有る縱長な長方形の銀行紙幣の數の殖へ行くのが嬉しかつた。

大阪に遊學する頃に、予の財産は全部は四十餘圓を算するまでになつてゐた。

吾等に智識の種を植えた其頃の小學校は、極めて不整頓な原始的のものであつた。敎場に、机腰掛の設備

は有つても、習字の教室へは、菅原傳授手習鑑の寺小屋て見る樣に、銘々の机文庫を持ち込んだのても想像される。

予が入學する歲に、學校の建物だけは新築せられたが、教師には正式に師範學校の教育などを受けた人は一人も無かつた。予が卒業近い級に昇つた頃、師範の卒業生が始めて來て、其の學問と其の性格とが著しく水際立つて、生徒間の崇拜する的となつたが、其時にすら猶ほ物理の教授は、四角な赭ら顏の、眼の細い、頤の括れた老先生が、物理階梯といふ二冊物を、素讀しては文字通りに字義を解くに止まつた。

手習の先生は講談物の惡劒道者を想ひ出させる樣な總髮の、鼻と眼の大きい、丈の高い、風采の魁偉な人て、高い聲て生徒を叱るので、吾等の最も怖ろしい先生てあつた。吾等が今に字の拙いのは此の先生に睨まなかつたのも、一部の原因てあると思ふ。手跡は勿論御家流てあつた。

中頃から代つた先生は、前とは反對に小作りな優しい老人て、此の人は董其昌を習つたといふ線の細い字が、吾等の目にも上手らしかつた。

(22)

氣の弱い母が、男勝りの祖母の機嫌を稍もすれば害ひがちなのを痛ましいと思ふ外には、比較的に安らかな家庭の中に育つた予は、小學校に入つて始めて人生の壓迫、人生の苦悶といふ事の初步を經驗した。

予は前にも言つたやうに伯母の手に養はるゝことになつてゐたから、母の懲戒の鞭に對しても治外法權て、伯母が舐犢の愛の蔭に「我儘」の羽を展してゐた。着物なども、伯母が公卿の奥老女を勤めた折の柔かい物を仕立直しては着せられた。兄弟中て、一人のみ絹衣を數多く有してゐることは、兄弟の美みと妬みに値した。土用干の折など、伯母の簞笥から金絲銀絲の刺繡の文に彩られた裲襠などが取出されて、緋や紫のケバ〳〵しい色が、吾等の眼を射るやうに輝いた。此れが芝居の衣裳に貸されたことも屢々有つた。

手織木綿を常用の質朴な田舍て、黄八丈の振袖は予

の幼い誇てあつた。

斯く伯母の愼子として、寧ろ身分不相應に甘やかされて育つた予が、小學校て始めて觸れた浮世の風は冷かたつた。

* * * * *

殊に今も猶忘れ得ぬのは、一人の年長な級中の暴主(たいらんと)の爲に虐められた鬱憤である。

此の暴主は元と上級にゐた落第生て、何處かに我等を恐怖せしむるに足る威壓力を具へた男てあつた。我等同級生を脅迫して、其の所有の物品を强奪し、或は新たに買はせては之れを己の有とした。

元來臆病て卑怯て、假令正義正理と信ずることも、他人の前、殊に況んや其の暴力の前に敢て主張する勇氣を缺いた予は、只怯々(おづおづ)と其の威令に盲從するの外は無かつた。

併し外面に此れに反抗する勇氣を缺いだだけ、其の壇まな振舞に對する內心の反撥は强かつた。自己の非力の自覺も此に憤慨の度を加へた。予は面に現はし得ざる燃ゆる如き不平を胸に抱いて、此の非道なる、自由と獨立との蹂躙に、堪へざるを得なかつた。

* * * * *

予が常に平等と自由とを我が主義の警語として、賤者弱者の味方たるを忘れざらん事を期するのも、當時の經驗が予に與へた苦がさの爲めてある。

後年ユーゴーの小說を讀んて、倫理の基礎を良心に置いた其の見地は、殊に予が心を牽いた。予は先天的に良心の存在を躬證するに足ると信ずる程、倫理的情操が比較的早くから芽生してゐた。

吾れ識らず踏み殺した一匹の蟻にも心を責められて、取り上げて壙に葬つた同情、西南戰爭の際に自分は官軍だと言つて、兄達の西郷軍たらんといふに反對した正邪の判斷、共に固より稚氣は帶びてゐるが、道德上の觀念が他の性情に比して、予には比較的に著明てあつた樣に思ふ。

* * * * *

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其頃小學校に用ひられて居た讀本は、「家、人の住處にして」といふから、第一卷が始まつた、文部省編著のものであつた。其の第四卷は丁度ユニオンリーダーの樣に此の卷のみ際立つてむつかしい。殊に其の初めの數章は倫理の問題に觸れたもので、文字も難解な漢語が多く、德慧術智とか蛙鳴蟬噪とか切磋琢磨とか、吾等の眼に如何にも佶倔に映じた。

併し、其の書かれてある趣意が倫理の問題であることが、予に多大の興味を與へた。

予は此の難解な文章を繰り返し繰り返し讀んでは、其の道德的敎訓に滿ちた言葉を暗誦した。讀むのみにては足らず、更に其の一字々々を强く心に銘せんが爲めに、筆を執つて寫しさへした。

此れは予が九歲か十歲かの時であつたと思ふ。予にして若し此の幼な心が世俗の濁りと冷かさとに汚化せず硬化せず、純粹のまゝに維持し得られたりとすれば、予の一生は、予が現に歷たとは別な幸福な人生を經驗したかも知れぬ。

字を識ると直ちに小說を耽り讀んだ影響も有つたらう、感情的な予は戀にも早熟であつたやうだ。

伯母と一處に別家した頃、伯母は學校の裁縫敎師をしてゐたから、四時過ぎまでは歸らなかつた。其の間は自分獨りで、誰に憚る所も無いから、友人と集つては縱まゝな遊びをした。中に男のやうに濫な女の子も混つてゐた。年長の友に敎へられて恥づべき行ひの眞似をさへした。自から辱めることを覺えたものも此頃からであつたらう。

何せよ今から三十四五年も前の事であるから、女の子の學校に入る者などは餘り多くは無かつた。予等の同級で可なり上級まで留まつたのは、只一人に過ぎなかつた。

所謂豐頰曲眉の肉附の好い、稍扁平目（ひらめ）な側顏の、眼の黑い唇の紅い、活々とした女であつた。此の女の姉も、妹とは違つて面長な輪廓の正しい、但較々睫毛の長い眼に沈鬱の影はあつたが、二人揃つて村中での花

てあつた。殺伐な我が故郷では、女は極めて賤しめられてゐた。女と親しく口を聞くさへ懦弱な、男として至つて恥づべき事と考へられた。此の同級の女生に對しても、予等は故らに荒々しく振舞つて、此の弱い異性を惱まし苦めるのを誇とし喜んだ。

併し、陽には斯く擯斥と迫害とを之れに加へながらも、其の眼其の聲其の笑靨に吾識らず惹き附けられる柔かな强制を感じて、之れに抵抗するには予が心臟は餘りに皷動し易かつた。

是れも少年の淡い戀といふのであらう。

其後予が大阪に居た頃、此の姉妹も大阪に居て、二人とも親の目を竊んだ戀人が出來て、終に其家に嫁いだ事を聞いた時、予は妬みの交つた憫みと憎みとを感ずるを禁じ得なかつた。

(25)

予の行が動もすれば常軌を逸して、矯激猖狂に陷るを免れざりしが如く、予の學問も亦秩序的な正當の路を蹈んだ爲方に由つたもので無かつた。

小學校から予は科程の全部を履修しなかつた。卒業の一年許り前に退學して、主として自由主義の人々の經營になつた共立學校といふ私立の教育を受けた。

此の共立學校も大阪に遊學する爲め在學一年許りで退學した。

大阪では文部省直轄の官立中學校へ入つて始めて正則な、而して又其の當時に於て最も進歩した中等教育を受けたのであつた。而かも此れも亦病の爲めに中途て退いた。而して修學上の最も大切な時期の數年間の廢學を餘儀なくせられた。

纔に卒業した水產傳習所も、其の名の示すが如く速成を主とした一種の徒第學校で、其の後身たる講習所が正則な專門學校としての秩序を有するに比し、極めて實際的な變則な者に過ぎなかつた。

予等の如き、正當な順序を履んで修學すべき「時」を失うた者が、最高學府なる名に憧れて、茲に學問の蘊奥を叩かんと欲する時、其の捷徑として趨むうべき路は選科生たるより外に無い。但大學なる名に聞き怯

して、窃かに自己の不完全な學歴と不十分な學力とを危んだ予は、竄入するに最も容易なる一角を索めて漢文科を選んだ。併し論語一部の豫習のみて入學した者が、僅か三年の講義傍聽て中學教員の無試驗檢定の證書を得たのすら、後ろめたい。

予の學問は竟に小學に始まり、大學に終るまて、秩序立たない變則を以て一貫してゐるのである。

此くの如く不滿足な教育を受けた結果として、予の思想は豫備の訓練を缺いて、動もすれば獨斷に陷り、予の智識は參照の憑據を缺いて、動もすれば偏見に陷ることを免れぬ。唯何事をも一己の我見自信より主張して、精密な實證、中正な折衷を顧みない。予は此の自からの病處を認める。但博覽に伴ふ衒學、多讀より生ずる亂想、雜識に現るゝ淺薄に濁されない質直と大膽とが、若し予の言論の上に多少だも有らば、幵は或は却つて予が此の變則な學問の賜であるかも知れぬ。

立秋

黒頭巾

其一

◉立秋の翌日、鉢植の朝顔にいろ〳〵の色の花咲きて、天、陰もり、稍、涼しき朝なりき。蟲音來る。

◉珍客の來訪は、人の氣分を引き立たしむ。書齋の窓を、一杯に開放して語る。垣の向ふの、茅屋を指ざして、東京には珍らし、田舍の趣味を憶ひ出すなどといふ。茅屋根の古びたるなど、何と無く、此の朝の空模樣に調和して見らる。

◉客は、痩せたるに似ず、元氣ある男なるに、此の朝は、稍、蒼ざめて先きごろの大病の憔悴の未だ去りやらずと見ゆ。薄色の洋服の左腕に纒へる、喪章の黑紗の、際だちて、鮮やかに光かる。

◉上野方面に向うて、共に散策すべく、杖を曳いて出づ。彼は、滅多に、ステツキを用ゆることと無し。此の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日も亦た洋傘也。

◉駒込の避病院に沿ひて、目赤不動の舊蹟の前を降り、藍染川を渉りて、中田端の森のかげに出づ。左轉すれば、小杉未醒の家に近し。

其 二

◉先きの夜、未醒は、吾輩を訪ひ、新築の浴室に、トタン葺の屋根を用ゐし事を語りて、趣味ある話を爲せり。

◉彼は言ふ、數日前入浴中、夕立雨の激しく屋根を叩きて、頭上に、瀑布の聲を爲す。忽然として黄州竹樓を思ひ出す。這般の、趣味の雨聲は、トタン屋根に依つて、始めて聞き得可しと。

◉黄州は竹の名所也。巨竹多し。割つて、瓦と爲して、屋根を葺く。本と、安價なるが爲に流行すれども、亦た甚だ雅致あり。雨には瀑布の聲を爲し、雪には碎玉の聲を爲す。琴を皷くに宜しく、琴調和暢し、詠詩に宜しく詩韻淸絶なり、圍棊に宜しく、子聲丁々然たり。投壺に宜しく、矢聲錚々然たり。皆竹樓の助くるところ也と記す。

◉吾輩も亦た、黄州の竹樓を憶ふ。京都には、竹材を利用したる家無きに非ざるも、未だ、竹樓といふべきほどのものあらず。若し、瓦も、壁も、悉く竹を用ゐて、竹樓を、閑雅の地に起さば、風流の一樂事たるを失はじ。而して名は樓といふも左までの大厦を設くるに及ばず。小さき茶亭位のものにても可なり。

◉黄州竹樓は、遠く山光を呑み、平に江瀨を挹し、幽闃、遼夐の景情ありと記す。未醒の家、これほどの遠景なしと雖も、田端の森を控かへ、巣鴨の臺を望み、藍染川に臨む。また以て竹樓を起すに足る。

◉門に入れば、芭蕉の綠葉、逕を蔽ふ。葉かげに、小さきトタン屋根の微に露はる。既に園中に入つて見れば、未醒が「趣味の竹樓」は、あり〳〵と現はる。壁の外に、小笹、鷄頭花などありて、中に、風呂桶の見ゆ。

其 三

◉吾輩は、書齋は、書室造りなるが宜しと思ふ。書室に、いろ〳〵の倚子など取出して、語るは快適なるべし。

◉瑣音は俳人なり、瀟洒たる浴衣でも著て行くべく思はれて、彼はつねに、洋服を著て外出す。彼は、倚子にて語るが宜しといふ。未醒は、草花の見ゆるところにてといふ。

◉八疊の坐敷の、縁先きに、近く、曲がれる松ありて、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その邊より、庭は、トロ〳〵下りに、傾斜は垣根の草花の中に沒しさる。

◉垣根を隔てゝ、畑は、青々として、駒込の臺に續く。さま〴〵の人、時々、此方に向つて、玉蜀黍の中を分けて歩み來る。垣根の一間ばかり彼方にて、忽ち、東に、或は西に折れ去る。未醒は、垣根の彼方に、川ありといふ。伸び上りて見れば、崖見ゆ。藍染川は、塹濠の如くに、低く流れゆく。此の邊、乃ち籔澤の地なるべし。

◉三人は、草花の上に浮ぶ駒込の森を眺めつゝ、或は、箕踞し、或は臥して語る。笑語、凉語は、氣儘の團欒より湧く。

◉未醒は、時々、彈かれたるように立上る。空氣銃をオッ取り雀を狙擊するなり。草花の根に潜ぐりたるを打てば、蛙なりけり。

◉薄暗らき雲の、漸く擴がりて、時々、遠雷を聞く。むし暑し。白雨の、ハラ〳〵と一過せよかしと祈る。

◉風の強くは吹かず、多くの木葉は、搖ぐとも見えぬに、閃めくように飜へるものは、ポプラなり。此の頃のポプラは、青くして、尤も凉味あり。將來、園中に栽培して、飜へる葉を賞すべき、流行樹となるべきものなるべし。

◉此の家の軒には、甚だ巨大なる風鈴を釣る。支那傳來とかにて、實は、小さき鐘なり。鈴は重くして微風には鳴らず。自然の風鈴は、ポプラにあり。ポプラの葉は、響かぬ風鈴ならずんばあらず。

◉木葉の風鈴は、公孫樹とポプラとなるべし。廣き葉の直線に、直角を爲して、小さき葉莖の附著するは、則ち、微風にも、輕く飜へり易き所以也。殊に、ポプラは、莖細く、葉薄し。且つ、附著點、殆んど正しき直角を爲すこと、恰も、紙撚にて短冊を釣りたる如きものあり。

◉此の邊のポプラは、すべて生育甚だ遲し。地味に適せざるにや。苗を下して四五年を經過せるも、未だ、軒を過ぐるに至らず。然れど、ポプラの餘りに高大なるは、水郷のものなるべし。騷々しくて家園に宜しからず。家園には、小さきが、愛らし。

◉近傍のポプラ倶樂部の、ポプラは、小豆島より送り來れるものといふ。太平洋畫會の畫伯が、寒霞溪に遊びし記念にして、當時の、面白ろき回想も、つねに、此の葉の飜へるに付けて、心頭に閃めくこととなるべし。

◉倶樂部のポプラの生育は極めて遲し。幾年を經過す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るも苗の儘なり。垣根の、低く、小さき葉の、此の頃、闘へりつゝあるなるべし。或は、ポプラの生長を待つは、則ち書家の呑氣なる所以など〻言ひし人もあれど、其は、ポプラの本性、生長の甚だ早きを知らぬ人也。されど、倶樂部のポプラの生長を待つは、事實に於ては呑氣者たるを失はず。

◉垣根の内外に、黃蜀葵、女郞花、その他、さま〴〵の花咲く。三人は、互に、花を指して、其の名を聞く。主人は、吉江孤雁にして、此の坐に在らしめば、彼は、花木の事に、妙に、委しきになどと言ふ。

◉主人は語る。草木の中の王ともいふ可く、人間の勢力にも比すべきは蔓草なりといふ。而して彼は、朝顏を好まず。鉢植にすれば、手入面倒にて、垣根に這はすれば、何ものをも纒ひ倒すになど〻嘲ける。

◉此の頃、彼の家族は、日光に歸省して在らず。主客三人、蔓草のように、坐敷の中にひろがりて、詩趣、書趣を語りつ〻あり。やつれたる瓊音は、時々、起き直りて、花火線香のように、氣焰を吐く。

◉瓊音は、大病後、未だ飯を食ふを得ず。洋食に日を送るといふ。此の頃の食味は、茶漬飯に在り。バタとパンとは、日本人の詩興を培養するに足らず。飯を喰はざる詩人こそ憐れなれ。而して野花を看るは麥飯を可とす。

其　四

◉午後二時、雨雲去りて漸く酷熱を催ふす。主客、三人、洋服を着けて、野趣を探るべく出づ。白梅園の前を過ぎ、田端の阪の上に立ちて、三河島の平野を展望す。無數の烟突、懷爐の灰筒を立て並べたらんよう、黑烟は、空の陰りを添ゆるなるべし。

◉右轉して、斷崖の上の路を、道灌山に辿る。處々、風流の家あり。佐竹家の屋敷跡、今は渡邊治右衛門の手に歸す。築山あり、森あり、草茫々として、蟲聲は、畦行く人に迫り、足元を厭し來る。

◉斷畦に沿ひ、路幅の二尺にも足らぬところあり。畦は、刳り去りたらんように、赤土あらはに、草も生ゑず。此の如き絶壁の上に立ちし時、誤つて墜落し行く時の刹那の感を、想像したる事は無かりしやと話す。

◉畦に沿ひ、ところ〴〵茶店を設けたる。いづれも、入口を路に面せしめて、坐敷は半空に浮ぶ。京都の淸水の舞臺の、小さきものとも見るべし。

◉前路に、途に跨りて、日蓋を設け、途狹く、恰も、行人をして家の中を、通過せしむるものあり。あれは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

安宅の關ぞと笑ふ。未醒は、聲音が勸進帳を呻るべきところぞと笑ふ。勸進帳は、彼の隱し藝にして、聲、梁塵を飛ばす、或は艶人を惱殺するに足るものあらんともいふ。行きて其の處に到れば、日蓋の下に、安宅關の舞臺を飾りつけてあり、三人笑つて過ぐ。店頭の男女、怪しめる顏して、吾等を目送す。

◉畦上の途、稍、平らかなるところに到る。未醒、先づ杖を留めて、遙かに下なる鐵路の踏切を指す。

◉此處は、田端驛の區域内なるべし。踏切の番所の戸口に當りて、イナセの男、手に竹杖を持ちて立てり。バナマ帽子、法被姿の、突掛け草履にて、聲調、態度まさに純粹の江戸兒なるべし。竹杖を以て、地を叩きつけつゝ何事をか論判しつゝあり。語は聞えざれども、まさに踏切り番の無禮を咎むるものらし。

◉遠天、雲湧き、廣野にひろがる。踏切番は、番所に隱れて、見えず。吳服の行商人らしきもの、番所の側に、脊中を見せて佇立しつゝ、職人の怒鳴るを默聽しつゝあり。這般の光景、まさに新派劇の書割にして、職人は、小織桂一郎の適役なる可く、見れば見るほど、背恰好の、小織其の儘なり。

◉傍聽者は去りて、職人の男は、更に、番所の横に廻はり、昂々然として地を打つ。杖の音、鮮やかに聞ゆ。去らんとして立戻ること二三回。遂に、杖を振りつゝ、レイルを横ぎりて去る。花道の引込の見得なり。構内の機關車より、ケタヽマしき音して、汽烟を吐く。

◉道灌の祠といふもの、今は、何人かの宅地に編入せられ、垣根をめぐらして、畦上の途よりは入るを得ず。馬琴の雜家といふものも、此の近傍にありと聞けど、これも見ず。

◉成金らしき門構の、垣は、盜賊除けの設備嚴かめしく造りつけたる家の、二階に、籐倚子を出し、浴衣姿の、胸もあらはにて、三河島を見渡せる、赭ら顏の大男あり。

◉吾輩は、由來、無風流人の、屢、風流地に窟宅するを見る毎に、奇異の感に打たれずんばあらず。「猫に小判」と「成金に趣味」とは好對句なるべし、而して成金は、趣味の地に住む。

◉シャイロックの徒は、人より、シアイロックと云はるゝを耻づ。彼等は、土鼠の如く、暗處に横行し、光明に死す。然れども、土鼠は屢、花畑の下に住むものなり。花の趣味を愛するには非る也。

其五

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●畦上の、稍、廣き芝地に一本の古木ありて、樹蔭に、小學生徒二三人、腰掛けて、遠景をスケッチしつゝあり。甲は全景を描き、乙は唯だ、利根川水電の變壓所なる煉瓦の建築を描く。

●彼等は、繪具箱を開きて、色彩を風景に適應す可く、相等の苦心を致てす。吾等三人は、傍觀して興味に耽る。就中、未醒は、のぞき込みて、甘い〳〵と言ふ。此の大膽にして無邪氣なる少書家は、書伯に褒めらるゝとは知らざる也。

●畦上の途盡くれば、少數の人家あり。八千代亭といふ待合の門前に、唯だ四疊半一室ばかりの小さき家ありて、二三十の小鳥籠を、椽先に積み重ぬ。吾等は見れども名を知らぬ鳥多し。

●此の煤けたる家の、壁に、小さき扁額を掲ぐ。「聊自樂」と題す、萩原秋巖の筆也。小鳥籠は、賣品なるべしと思ひしが、或は「聊自樂」のものなるやも知れず。

●唯だ四疊半の一室の家にも、古人の書畫を玩ぶを知るは、日本人の美處なるべし。さればとて、此の事、必ずしも藝術の趣味、日本に磅礴し、浸潤せる證左とは爲す可らず。

●日本人は細工を解す。到處の山逕、村道にも、小風景ある如し。然れども大なる藝術に向へつは、未だ、渴仰の熱火を捧げたるにあらず。

●吾輩は、かばかり小さき家に、かく數多の小鳥を養ひ、其の美音を聞き分けるの、果して趣味ある事なりや否を思ひ、いろ〳〵の感想に耽りつゝ行く。

●此の家を離れて、右に、竹藪の畦あり。左方にも亦た小高き畦ありて、竹の翠光、低き途を蔽ひ、稍濕潤の氣あり。藪の下には、種々の艸、蘭などあり。

●此の畦の道を降り盡せば、曲がる角に炭團屋あり。煙草盆の炭團なども作りつゝあり。女の子の、眞黑な顏して、立ちて手を拭き〳〵、行人を見る。家の前に、少しばかり葉鷄頭を植ゆ。

●道路、漸く盡きて、鐵路に接す。此の邊、既に日暮里村なるべし。道の突き當りに石碑あり、唐木佐敬の碑と題す。二三本の楊柳など覆ひかゝり、蟬聲滿つ。

●此の處より右轉じ、阪を登る。右の畦は、前田侯の墓地なりとか、藪のしげみは石垣に溢れて、其の間より、蒼き大葉の、尤も威勢好くひろがれるは山獨活の大木也。竹煮草の蒼葉も亦た獨活に對抗するに足る。

●竹煮草は、其の汁を以て竹を煮て柔かにするもの。竹煮草の効能は、此の日、未醒の獨擅に歸す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●此の阪を上れば、諏訪神社あり。東京郊外の名勝の一とす。境内に隣して咽喉科の病院あり。途に沿へる窓に倚りて、青桐の葉蔭に、日を遮りつゝ、病人らしき女が小説を讀む。

●此の邊、日暮里を日ぐらしといふは、漢字に本づく洒落の地名なるべし。日暮里は、元と、新堀と書きしを見れば、日暮らしとなれるは、近世の事也。然れども、日ぐらしとか云へる蟬の樹枝に滴つるを見れば、日ぐらしの名、亦た甚だ詩趣あり。

●崕に臨みて、掛茶屋あり。三人は、老女の店に憩ふ。茶釜は煤けて、蓋の上にスルメ四五枚を置きたり。駄菓子と酒とばかりにて、茶は甚だ澁し。但しサイダはあり。

●境内に、氷店はあれども、一人の休める客をも見ず。長風は、筑波山の邊より吹き來りて、日ぐらしの掛提灯を搖り動かし、赤毛布も熱しとは思はず。坐蒲團無く、腰を掛ければ尻は稍痛し。

●此の社の創立は甚だ古しといふほどにあらず、長享年中、信州の諏訪より勸請したるものといふ。神殿の側に一大老木あり。落雷の爲に、僅に、皮肉の四分一ばかりを留むるのみ。すべて神社に、落雷の老木あるは、莽蒼、崇嚴の感を起さしむ。

●遠景を眺めつゝ、談、旅行に入る。未醒は、栗山鄕の舊游を語りて、人をして抱腹せしむ。栗山鄕は、日光の裏の桃源村、吾儕、嘗て、田山花袋の游記を讀みしを記憶す。然れども、此の村の名、未だ、世人に知られず。

●話題一轉して俳諧に入る。秋の草花に及び、歳時記の存立問題に到る。瓊音は「己の番だ」といふ氣勢を以て、其の利弊を論じ來り、結局、歳時記廢す可しといふに一決す。

●歳時記は、もと、京都人の手に成る。これを、其の儘、東都に應用するに當りては、假令、新舊曆を改算するも、尙ほ不便の事少からず。若し歳時記を、嚴格に適用せば、文藝の眞味を沒却せん。現に、眼前、今日の事、立秋の風物、これを直寫するに於て、歳時記と一致す可くもあらず。

●瓊音曰く、古の大家は、遠慮無く、歳時記を破り來る。大家の前に、歳時記あること無しと。

●文法を知るは、文章に必要事たり。然れども、文法は文學と、必須の關係あるに非ず。古來、大家、所謂文法を破らざるものあること無し。歳時記を知るは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

造句に便利なるも、これが爲に捕はれ易し。寧ろ知らざるに若かず。

●立秋の、このごろ、暦には秋といひ、人には猶ほ夏なり。この時、郊外を發策し、自然を觀察するには、俳諧の眞學問なり。若し、吾輩の手に、歳時記一卷あらしめば、却つて、自然の興趣を沒却せしならん。

●眼下、日暮里の町を越えて、蓮池あり。白蓮花、蕾を破り、蓮葉、時々、白き裏を波立たしめ、茫々たる青田の、色彩の單調を破る。

●諏訪神社より、阪を下りて日暮里に出づ。吾等、小兒の時、以來、見慣れたる草花、蔓草、路傍に滿つ。互に、其の名を聞き合はすれども、知らざるが多し。吾輩は、病牀に横たはりつゝ、あらゆる雜草、花草に精しかりし子規を憶ふ。

其 六

●日暮里の町を通過し、郊外に出づ。青田の中に村道あり。路傍に茅屋などあり、石燈籠などに、風雅を凝らしたる田舍宗匠の家らしきもあり。芋畑の芋に、天地生々の氣を集む。

●日暮里の舊火葬場を過ぐ。今は、枳殻の垣をめぐらし、中に雜草鞠して掬となすべし。垣の外に、氷の屋臺店より、途を隔つて水田也。

●日暮里より三河島に到るの道は、水田に沿ひ、小川に緣取られ、到處に、水あり、水に近くして森あり。家は、農家多く、概ね樹木の生垣に圍まれ、生垣の中に、並木あり。而して、古木は低き平濕の野の中に、點々、聳えて、恰も、鳴海絞りの浴衣地に、藍色の滴點を見るの趣味あり。東京を離れて、荒川に到るの間、一の古水郷なり。

●此の間の道路は、細沙乾きて風に飛ぶ。田畑の肥えて、菜蔬に宜しきは、年々の洪水に、浸さるれば也。「三河島」の村名あるは、此の地帶の趣味を表章するもの也。

●舊火葬場を過ぐれば、東方、人家無く、青田遠く連りて、利根水電の變壓所、巍々然、赤煉瓦の色彩、蒼翠に映發し、變壓所より遠く東に去る一列の大電柱、巨人の平原に濶歩するにも似たり。繪に見る明帝陵前の石人の行列の、生きて、立秋の晩雲に嘯くが如き乎。

●水に沿ひて水の曲がるところ、うね／＼として門巷をなす。村園、處々、皆相似たり。垣を放ちて、水に臨み、洗ひ場の石段あり。水靜かにして飯粒沈めり。

●到處の人家、菜蔬あり。花草は、畑を縫ひて開き、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家の跡の庭地などには、小さき菊科の白き草花、一杯に咲く。

●垣を設けざる畑には、玉蜀黍、列を爲し、伸びて青果を放つ。吾輩嘗て、菜蔬爭奇の一書を讀む、支那臭を脱せざるも逸趣無きに非ず。未醒の筆、瓊音の句、以て、這般の新趣味を發揮せしめたし。而して菜蔬の相當にや、玉蜀黍の、鋭く伸びたる葉を長劍に代へて、畑を護らしむべきものならずんばあらず。

●日、漸く傾き、稍陰もる。富士、筑波を見ずと雖も、此の地帶、地、平かに、天遠く、青緑地に滿ち、雲は水平線より湧き、水は脈管のように、地に滿ち、氣澄める日は、富士筑波は、畑打つ鍬の先きに落ち來るべく、到處の水に浮ぶ可く、草花の肩にも、碁盤の面にも映ずらん。若し、洪水の害を防ぎ得る方法あらば、此の如き地に隱棲すべきものをと、此の時、思ひぬ。

●三人齊しく手を拍ち、其の響きに、吾輩の空想の夢は破れぬ。水にのぞみ、蘆芽を洗へるが、清新、潑溂、人の心目を一掃す。此の邊、蘆芽、新にして柔美、葉と根と、新に水に洗はれたるが、勁香、新趣味を、强烈に、刺激し來る。これぞ水郷の生氣也。三人は、覺えず、快哉を呼びたる也。

其七

●三河島の喜樂園は、停車場の附近に在り。園内より坐してプラットホームの屋根を望み得べし。而して門内、一種、別天地を劃し、花草撩亂、町に近きものとも思はれず。

●門の前に、小さき土橋あり、池に架す。池には、睡蓮を浮ぶ。盆栽の睡蓮は、葉々花も小さし、池中に放任するに若かず。

●喜樂園は、盆栽を主とし、草樹を排列して、平かなる園を爲す。萩の花はうね〱門を沒する位。園の中心には泉池あり、水淀みて青萍を浮ぶ。池に臨み、處々、亭を設く。女竹、萩花などを穿ちて逕あり。逕、旋回して逍遙するに適す。武藏野の面影は少く、自から水郷の趣味漂へり。

●月、草より出て丶草に入りしは、昔の事、今の武藏野は、月、甍より出て丶甍に入る。東京の郊外と雖も、人烟相望む。蒼茫、荒涼の趣味の味ふべきものある無し。今、郊外、野趣の饒き地に來り、草園の中に、晩雲を眺むるは、稍、超脱の感無くんばあらず。

●池邊、程宜きところの亭に、寢ころびて、警語、俳語口を衝いて出づ。此のところ、人家に近く、「自」古

雲林遠二市朝一の趣無きも、亦た「白眼看他世上人」の昧無くんばあらず。偏へに、干菓子を喰ひ、澁茶を飲み、談論以て、日の暮るゝを忘る。此の頃の清遊也。

●瓊音は、月を愛し、秋を愛し、蟲の聲を愛する人也。彼は、多感、多情、秋の人也。彼が秋を愛するは、戰後の沈靜の趣味を愛するなりといふ。秋は涙の季節也。彼は、興感、容易に高調に達し、顔、紅を潮し、目は涙に輝く。

●明治の藝術を論じ、溯りて、馬琴に及ぶ。瓊音は、馬琴を好まず。彼は、何を說くも、つねに、人を抑ふるの態度あり、若し美少年錄の如きものばかりを書きしならば、彼を好みしならんなどいふ。

●吾輩謂ふ、馬琴には俳趣詩趣無し。彼は、學者たる可きものが、小說家となりたる也。然れども、彼や、思想博大、當代のすべてを代表す。彼の小說には、幕末の政治、藝術、人文皆こもれり。一人の創作にして、能く、時代のすべてを現はす者は、明治の文壇、彼の如く偉大なるものあること無し。

●劇の團十郎、三味線の團平、謠の寶生九郎は明治中興の太なる產物とす。吾輩其の二を知る。團平に至つては、三人皆知らず。

●瓊音は、目を光らして團十郎を語る。未醒が、嘗て彼を見ざりしといふや、瓊音は、刎ね起きて、「何に、團十郎を知らずとや、如何に哀れなる藝術の人よ」、彼の目には涙あり。

●「武藏野は、今日はな燒きぞ、若草の、妻もこもれり、われもこもれり」と、若き女の聲して、草の中より口吟さみしは伊勢物語の昔なり。此の頃の武藏野の人は、ことさらに歌詠みしにはあらで、語々皆韻あり、性情は詩を爲したる也。草の中の韻語は、蟲の聲ばかりにあらずして、人の詩も有りし也。武藏野の詩は、家の中の詩人の口より出でず、草の中の女より歌ふ可き也。

●未醒は描かず、瓊音も句を作らず。三人して詩の話に暮れかゝるこそ古めかしかりけれ。プラットホームに、電燈の光、淡く輝き初めて、亭の傍なる枝折戸の女郎花、夕闇の中に戰ぐ。

其八

●夕雲湧き出てゝ稻妻の遠く光る。園を去り、町に出て、烟草の火に、覺束無くも路を照らして、大なる建物の裏を曲がりて行く。

●明かるき處に出づ。片側の長屋町なり。角の長屋に、

コスモスの若葉の中なる格子に、一杯に燈火の映ず。ランプの下に、茶ブ臺に、夕飯の團居せる也。日暮里にゆく道を聞けば、出て來りて、丁寧に指示す。

●稍、開きたる野の中に出づ。向ふに、雲の峯立ちて、其の後ろに、稲妻の燃えて閃めく時、前なる黒雲の、鮮やかに黒く、畸異の形を現ず。怪しき人の形と見れば見らるべし。未醒は、神話に、空中に人の形、現はれて長く消えずと云ふ譚は、眼前の光景の如きものにては無かりしか。悽き雲やなどいふ。

●小川に沿ひて里道を辿る。蟲聲を穿ちてゆく。稲妻絶えず光り、その度に、怪しき黒雲の人立す。闇は、低く、先きに過ぎし野原を覆ひて、海のよう、遠くに見ゆる田端驛の電燈は、高く低く、綺羅星の如く、龍宮城は彼處かとも見ゆ。

●日暮里の町に入れば、小川の端、橋の畔などに、氷店ありて、大がたゝ浴衣せる男女、團扇もちて涼み臺に腰掛けつゝ、汗浸みたる吾等の洋服姿を、あつ苦るしそうに眺む。

●日暮里驛より、三人相携へて、山の手線に搭じ、涼しき風に吹き上げられつゝ、田端に歸る。(完結)

此稿を草る時、樺太滯留中の高木生、ロツペン島の繪葉書を送り來るオツトセイの群集すること、豆を散らすが如し。莽蒼たる北海の涼天地を懐ふ。

黒頭巾記

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

好評
拾版

文學博士 幸田露伴先生新著

努力論

洋裝函入頗美製本
全一冊四百卅餘頁
正價壹圓六拾錢
送費十貳錢

徒らに生活難を嘆ずる勿れ、徒らに行路難を喞つ勿れ。天は自ら助くる者を助く。本書は其の人即ち努力の人たる幸田文學博士が、多面なる半生の經驗を基礎とし、驚嘆すべき該博深邃の蘊蓄を傾倒して、人力と運命との關係より、如何にして自己を革新向上せしむべきかを述べて、幸福を招致すべき三大哲理に及び、更らに吾人の人格を博大高尚ならしむべき修學の四標的、物に接するの覺悟、最良最上の努力を爲すべき者の心身の準備、自然と人身との相關の理法、人生の最大不幸たる疾病の排除策等を縱横絜說して、筆路一進、人間活動の根元たる精氣死活の玄機に入り、成敗、利鈍、禍福、榮辱等の因つて來る原理を喝破して、宇宙造化の秘鑰を闢き、讀者をして千挫不屈の大勇猛心と、世に處し、事を成すの一大活機を體得せしむ。先生の說を立つるや、汎く古今偉傑の實迹と、最新科學の鐵案とを根據として、微を穿ち、幽を闡き、諄々として人を敎へて倦まず、讀む者其の識見の精と、人格の大に氣呵せられて、發憤蹶起せずんば已まざるの慨あり。自己が現在の生活能力に對し不安不滿を抱けるの士は、乞ふ必ず此書を見よ。本書は彼の大家の美名の下に狗肉を售れる例の談話筆記の編纂物に非ず。始終一貫、幸田博士の心血を濺がれたる字々金玉の一大活書也。

■發行元 東京神田今川橋大通 東亞堂
電話本局八八四番
振替東京一七一番

新版
特賣

加藤咄堂先生新著

世態人情論

美裝函入六百貳拾數頁
正價貳圓參拾錢
◉九月三十日限り
特價壹圓八拾錢
送費十貳錢

善く戰ふ者は敵を知る。活動社會の勝利者たらんと欲する者は先づ須く世態と人情とに通ぜよ。彼の學窓に在つて秀才と稱せられし士の、一度校門を去るや、忽ち社會落伍者の班に墮し、就職難、生活難に惱む所以の者は、豈活社會の實情と人心の機微とに通ぜざるの罪に非ざんや。本書は則ち加藤先生が該博なる學識と奇警なる觀察とを經とし、實社會の統計と、多趣味なる世界の活史實とを緯とし、趣味津々たる快筆を以て、古今世態人情の變遷、地理と人情、生活の意義、生活と世態人情、職業と人情、世態と宗教、宗教と人生、男女の問題、世態心理の基礎群衆心理の應用等に亘り、滔々數萬言、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試み、以て處世の妙諦を指示せられたる一大新研究にして、男女を問はず、有爲なる生活を營まんと欲する者の、何を措きても先づ一讀すべき、活ける社會の活ける教科書とす。特價期限極めて短期間なれば、明日と言はず今日直ちに購讀せられん事を

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

山路愛山先生著

御家騒動叢書

（全拾册）

第一編 伊達騒動記

△第二編 加賀騒動記 九月廿日發行以下續出

菊版上製 装幀頗優雅　定價金壹圓　送料 内地金八錢 清韓金卅錢

著者序して曰く『御家騒動は惡人時を得て善人悲境に陷るに始まり善人榮へて惡人亡ふるに終るとは、是れ講談師のする千篇一律の紋切形なり、されど世に醇乎たる善人もなければ、徹頭徹尾の惡人もなし、史學の批判よりすれば御家騒動は畢意政黨の爭にして、幾篇の權力爭奪史に過ぎず。されば誠に御家騒動を研究するものは則ち政治的の人間を研究するものにして其研究の科學的なればなるほど政界陰陽二面に存在する秘密の鍵を捉み得べきものなり、此の意味を以て此の叢書を我か讀書社會に提供す』と

而して其第一編たる伊達騒動は著者獨得の史眼と博識とを以て其顚末を明快に敍述せるもの、その精緻なる科學的考察と公正なる人格判斷とは相俟つて該騒動の紛紜を闡明して餘蘊なからしむ世の所謂伊達騒動の眞相を知らんとするもの幸に受讀の榮を賜へ

發行　東京神用小川町　振替一二三三六　敬文館

（中付一の二）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

アクチナ

奇効可驚

主治効能　眼、耳、鼻、咽喉、船暈頭痛ニ奇効を奏す（說明書無代進呈）



登録商標

電氣帶發明者　サンデン博士之像



主治効能

神經衰弱諸症—腦神經衰弱—不眠症—消化器衰弱—胃擴張—胃下垂—常習便秘—消化不良—營養不良—生殖器衰弱及無氣力—遺精—夢精—早漏—遺尿—慢性腎臟炎—糖尿病—一般内臓の衰弱—諸神經痛—坐骨神經痛—神經性頭痛—肋間神經痛、諸腕部神經痛—リューマチス—腰痛—脚氣—婦人諸病—ヒステリー—月經不順—子宮病、冷え、脊髓、中氣、產後一般の衰弱（說明書無代進呈）

サンデン電氣帶

魔法壜



約三合入　參圓參拾錢
同　參圓八拾錢　｝圓筒形
同　四圓五拾錢
同　四圓八拾錢　｝水筒形

右の外四合入五合五勺入各種金貳拾圓迄

○魔法壜吊皮（並八拾錢　最上貳圓五拾錢）

○本魔法壜は冷なるものは冷に溫なるものは溫に約二十四時間を保つ一般家庭は勿論旅行等には缺くべからず

▲▲凡て代金引換は前金貳割御送附を乞ふ

營業品目

●電話●電鈴●表示機●避雷針●醫療用感電機●電池類●電球類各種●電線類●電燈花笠各種其他電氣に關する一切の諸器具御小賣並に設計

●電燈類取次販賣御希望ノ方ハ照會アレ最モ安價ヲ以テ貴需ニ應ズ

●本店（東京市京橋區尾張町二丁目（銀座通東側）電話新橋二四二二番…振替東京一八四七三番）

●支店（大阪市東區心齋橋筋博勞町南入西側　電話南二二〇五番…振替口座大阪七三四四番　横濱市吉田町一ノ二九…電話一九三一番）

サンデン電氣商會

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

治肺新藥

グアヤコーゼ



▲グアヤコーゼは各種の呼吸器殊に肺結核の卓越なる治療藥にして咳嗽を治し喀痰を軟化して其分泌を容易ならしむるのみならず大に食慾を增進せしめ解熱を助け盜汗を防止する特効あり故に獨逸國にありては專ら本劑を家庭に於ける肺結核の治療劑として賞讃せらる（全國の藥舖にて販賣す）說明書進呈

發賣元 橫濱市山下町一八三番 神戸市明石町四十七番 バイエル會社



精神的又は肉體的障害の爲めに消化器衰へ食慾減退し神經も肉體も共に衰憊に陷りたる紳士諸君に**ソマトーゼ**の服用を推奬す。

滿天下に知られたる滋養强壯劑ソマトーゼは食慾消化を鼓舞し、全身の新陳代謝を盛んにし、健かなる血液を增殖し、各器官の營養を佳良ならしめ、神經をして安靜なる休養を得せしむ、即ちソマトーゼ服用後は大いに氣力を增進し、全身症狀を佳良ならしめ、次て生活上の幸福を得せしむべし、而かもこの作用は耐久的に高上し來るを以て同時に神經過敏、倦怠、無氣力、記憶力の減退等の諸病狀を消滅す。

全國の藥舖に販賣す

（說明書進呈）

輸入元

神戸市明石町四十七番
橫濱市山下町一八三番

バイエル會社

（中付一ノ四）

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和歌

尾上柴舟選

安井竹美

○

しのびきて夏はあはれに身をつゝむ死にたく思ふ事のしげかり

ヂギタリス薄き陰影する卓に凭り夏やせし身をいとしがるかな

こほろぎが疊を這へるうすき陰影そのかげにしも秋は立つらむ

えもわかぬいとあやしげのまぼろしに胸をいためて日を消してゆく

手を重ねあれば片手のぬくもりの人の手のごとなつかしまるゝ

○

桝垣菁花

いたみやすき心にいちはつのみだれ散りなみだをさそふ夏のあけくれ

酔ひにわが寂しき心晴らさむと一としづくづゝ酒を味ふ

たそがれの明るき空に夏の雨ふればみだれてひとのこひしき

なにとなくさびしきうちに身のかろさひとりとなりておもふ秋かな

なにごとも心にをさめひそやかに泣くにふさはし秋と對ふ日

○

若林牧春

散る花となみだと悔に春はゆくこの天地のいかにさびしき

ざら／＼と撫づれば痛くのびし髯あかるき街を面ふせてゆく

相そむく心ふたつに瓦斯の灯があり／＼と射す夜のさびしさ

ふるさとの山に萌ゆらむ百合の芽の赤きをおもひ君をおもひぬ

つばくらめ別れ／＼に海越えてかへる親子のうたのかなしさ

相そむく親子ふたりのこゝろをば夜はあつむる小さきともしび

○

内田月城

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青じろき柑子の山にひとすじの黄なるひかりを
なぐるつきの出

はてもなくつゞける畑の麥のいろみどりいやこ
く夏となりけり

あざやかにひとみにうつる青麥のいろと野中の
白き停車場

夜ふかくふたりがあゆむ淺茅原九月九日月はあ
かるし

縱の木のこずゑに朝のとりなけりつらきこころ
に野の草をかぐ

○　　　後藤むくろ

なやましき夏のおとづれあはれにもちさきわが
身を燒きつくすべし

ふと仰げば月夜がらすがしづやかにしづやかに
ゆく夏の夜の空

霧こむる夏の夜の海はりあげて歌をうたふによ
ろし砂濱

いかにせばわれらうれしくなるべきか思ひまど
ふに疲れおぼゆる

柔かく尖りし夏の野の草に額をうづめて悲しむ
ひとり

夏草にふして思ふは何なるか何なるかわれ死な
むこのまゝ

○　　　前田黄昏

敗殘のこの長崎に淋しくも立てるホテルの窓の
夕映

たゞれたる心にゝがく染みて行く酒の味こそ忘
れかねたれ

春は來ぬ街行く若き女の瞳ものあこがるゝ色の
仄めく

悲し悲しこの天地の中にあるものゝすべてが灰
色をなぐ

○　　　大眉一末

あをき凪なみだをさそふ白川の淺瀨に立てばき
みの戀しや

ものおもふわが眼の前にさわ〳〵としづごころ
なく暮るゝ夏の海

死ぬばかり人戀へばとて淚するわれならねども
泣きたき今夜

○　　　苗加白光

わがこゝろ寄るところなき淋しらにふと神にこ
そ死を願ひたれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いと甘き愛の油に我が胸の生命の車よろこび廻る

眼とづれば惡の形の少女だち戯れ狂へる酒のまぼろし

青服の水夫等評す甲板に港の酒肆のたはれ女だちを

○　南の旅人

桑の果の赤黒きをば吹いてゆく風のあとより渇き覺ふる

誰となき女の顏をつくりゆく此のパステルの粉の悲しさ

街より街へ夏の匂ひをむさぼりて歩きし夜のさまざまの夢

○　大蘆政子

わか葉かげゆく時あへりその白きネクタイはいと心地よかりき

あらはなる我が心みる心地する此の四五日の日記はめてたし

金色のファオンテンペンのさき光る朝の机のより心地よさ

○　齋藤微花

入り海の波の碧さを漕ぎゆけば薄暮となりぬ人思はしき

夏の夜を月あは〱とのぼりけり海のあなたの潮にほふ空

ま青なる海よしづかに飛びゆくはなみだに濡れしたましひのかげ

○　越野花聲

ものすべて靜まれること染々と覺えてさびし六月の朝

神を見む術だにしらでわがどちの酒を好むといふはさびしや

○　鈴木風影

すく〱と青草伸びし野に立ちてひるの光の男々しさを見る

河風に艪聲流るゝ湊町歌咏む人のふたり住むてふ

驛夫來て呼子鳴らせば動き出づ曇天の日の哀しき列車

○　中村紫竹

物思ふ事さへ二人となりにけり初夏の夕べの淋しなづかし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

寄宿舍の窓に寄り見る工女等に淋しかりけり若葉の反射

○　厨川てふ子

三人の子母よとすがる今もなほ少女のやうに君を戀する

紅色のふさはずなりし悲しさをことごとしくも問ひますな君

○　白蓼子

忍びつゝあるかなきかの風に動く母家の古きかけのれんなど

入月よ出水の後の泥石に蛇殼とゞめ夏去りてゆく

○　中村かのえ

藥局のがらすの瓶にぎらぎらと白くいきつく初夏の日光

目醒めたる午前三時の病院の長き廊下の板の冷たさ

○　逸名氏

わが胸に深き泉の湧くごとく又ある時は塵塚のごと

ダイヤなどちりばめたりし杯にくちづけをする裸體の女

○　村山泰勝

一片の雲空をゆく見てあればふと兄います代々木なつかし

君は能登われも生れは能登なれど不幸なる子は能登をおもはず

○　山村芳郎

燕が赤き腹見せ砂濱のさゝくれだちのなきゆふべかな

初夏の野末を汽車のよぎる時あかるく裏をかへす草かな

○　三島穗明

青やかに蓬そよげる草原にこゝろもとなき蝶の黄色さ

深みゆく夏のあはれさ疲れたる心の上に光り散る花

毒草の芽にうす苦き雨そゝぐこの夜死になばよみかへるなし

○　相良十一郎

いささかの肉の疲れにこし方のはかなき旅を思ふ如月

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はかなしと思ひ知るこそ湖に雪の消ゆるに似て佗びしけれ

○　　　　沖の島人

灰色の破衣のすそを闇にひき吾が日吾が月吾がいのちゆく

夏の夜は雨にふけたり蠟の火のちらちらするよ靜かなるかな

○　　　　唐澤章

日曜を何處へも出ずに只一人物を食ふは淋しきものよ

撫子や街の床屋の白熱のガスの明るき頃となりける

○　　　　佐々木菊枝

三味線のあまき調のたゞよひしあかき灯ともる町の夕ぐれ

わすれんとせし人胸に浮びたる夏のゆふべの窓の悲しみ

○　　　　宮本幸三郎

海見れば心たのしむこともやとわが來し夕べなほ悲しかり

八月の小暗き庭に仄りと甘く匂ひて月見草咲く

○　　　　村上夕人

いつしかも遠蛙なく時のきて夢多き子となりにけらしな

蚊遣火の香と青鷺のなくこゑと夏の夜頃のなつかしきかな

○　　　　田中壽夫

バナヽむく眞白き君が指先にガスの光のふるふさびしさ

しみ／＼と泣きたる後の心よさ庭の青葉を風渡り行く

○　　　　山本浴の貝

薄月の果實園に立つわが胸を光らして散る白き花ちる

じと／＼と雨降りそゝき明け暮るゝ重き瞳にうつる紫陽花

○　　　　安江華雫

青草の中に色濃き花かきつ夕霧に浮きてやがて悲しき

○　　　　酒井賢

ふくらめる宵の灯(ともし)のしみてゆくなれが瞳のかな

しみのいろ

○　竹村天双

獨り居て物を思ふは快し悲しき事が胸にあつまる

○　兼田駿一

老の樹々王者のごとくならべるを透す地平にけひりうく見ゆ

○　井筒千律

初夏や少女の帶の緋の色が眼を射る如く際立ちて行く

○　芥川葉雨

曇り日のくもりしまゝに夜となれば夢のやうにも光る街の灯

○　宮内麻茅郎

かつてわれ泣くによしとてもたれ泣きし白楊は伐られ月は寂しや

○　二木富郎

ふくらめる薔薇(ばら)のつぼみのやはらかき浴後のおよびそとふれてみる

○　須賀紫浪

乾きたる白き河原を細き雨濡らすゆふべを消息を聞く

○　那本湖香

夜となれば若さがまたも甦る蚊張の匂ひよお白粉の香よ

○　西野白紘

一日の勞働了へて倚る柱こころよきかな生きむと思ひぬ

○　田坂幻花

山百合の花なでしこの花盛り君とまろびて潮騒をきく

○　早川水骨

さら／＼と白楊の葉のなり出づる夕べ木に葬り物を思へる

○　橋場逆流

ポプラアの葉と葉と觸れてなる日なり衣縫ふ母のやつれ瞳(め)に沁む

○　栗田佛來

君います「都會」と言ふに憧憬れぬこの頃心ことにせつなし

○　高添翠

よりては別れよりては別れいやはては海をへだ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てて二人病むかな(兄を思ふ)

○　　　　　　　　　　村山放羊

山に入り山を出づれば何物か山に忘れし淋しきこころ

○　　　　　　　　　　碧天地

わがもてる心かなしや天地をすべて涙にぬらさまほしき

○　　　　　　　　　　糸川夕霧

夜の渚砂地に光る石ほどのかなしさもなくわれは歩めり

○　　　　　　　　　　守野午後草

麥畑の夜風ひそかになきぬれし吾のまつげにひやゝかに觸る

○　　　　　　　　　　中里富

ありあらず風もこゝろも只しづか靜かにありぬ夕べの木ぬれ

○　　　　　　　　　　村手晃陽

枕邊を飛ぶ蚊の音にうたゝねの惡しきねざめのよりどころなき

○　　　　　　　　　　原赤穗

灯も見えぬ多摩川べりの夜の霧にひたりて一人

時鳥聞く

○　　　　　　　　　　横田湖峰

六月の海と空との鈍色が手をとり合うて心に來る日

○　　　　　　　　　　白川茂吉

夜遲くかへるわが家のくらがりに父の吐息のいたましさかな

和歌應募の注意

○東京市小石川區原町百十五尾上柴舟氏宛
○用紙は半紙大の原稿紙に限る
○封筒の表面には必「中央公論歌稿」と朱書すべし
○氏名住所明記の事

俳句

七夕

高田蝶衣選

碁布の島々星と點く灯も七夕や　鎮西郎
垣の夕貌筧の音も星の宿　同
辻固めし人に散る五色紙のあり　同
洗ふ硯と拭く机未定稿もあり　同
硯洗ひて日高し客を引接す　同
七夕や厳めく庫裡のさゝめ言　銀竹
僧の戀も咎めて星を祭る里　同
妻に質せば泣く一事あり星祭　同
强ゐし縁なるを此の仲星祭　同
御城賦役の留守に子女あり星祭　圖桑子
星にはかなし闇の雨咲く花も見て　同
親子内侍の賜暇星一夜詠み明かす　同
返歌なき意趣の家七夕賑やかに　同
星迎へて流れ渡りの舟見居る　雨春草
いと易くて願の絲のもの足らず　同
梶の葉や札所なる筧石を穿つ　同
立琴や緒に探れそよぐ青芒　萩泉
七夕や母と住めれど悲歌の我　同
宿の妻七夕髮の襟に榮えて　同
富士にかゝる輕けき月や星迎　更二
星も更けて來ぬ鑛山の香のする人よ　同
旅衣が儘に馴れ初めて星まつる哉　同
星今宵島長娶る艤　不寝庵
流れ拔けて織殿覗くお供星　同
七夕宴杖ゆれて時服賜はりぬ　明兮
裸温泉を蔽ふ榎や契り星　同
筵のそよぎを星の聲とも帳にきく　竹梅
星斗鵲に駕せしか窓樹ゆらめける　同
亂れ穗草の髮かり夜露の石枕　國郎
七夕や恨歌賦せば月も影長く　同
七夕凪の裏山岩に祭るあり　三光鳥
唐奴泊めしよりの浦の名星祭　同
棕梠村や七夕竹の虹かゝる　美田
星合や風呂の捨火の草けぶり　同
女蘿どちに僧もまじりて星祭　哭鬼哉

眼病みて

星の歌書くも手探り字重なりつ　同
黒戸庇の一夜織女に料理せん　句瑠璃
星の宵解衲に香木を燻べもす　同
七夕の灯や水郷も明日立たん　雲洞
親船に女も見たり星今宵　同
牽牛は若く織女はふけて在すらん　鬼水
星祭黍の葉摺れに夕さりて　同
幼き身にも位や星迎へ　竹美
七夕や萩茶屋に五日泊りして　冲雲
ありのみを歌にもよみて星祭　紫明
暮街廣う河岸めきて星祭せる　湖峯
後れ雲低くとぶ野や星迎　芳葩
七夕や流行らぬ衣も思ひ出に　耳山
故實明るき翁あり七夕他より寂ぶ　碧外子
七夕や下山道の西明り踏む　笠聲
拾ひ貝にも書く歌や七夕海に來て　麻窓子
星祭る日の茶式師に訪はれけり　三碧水
洒涙雨や沖島宮の灯も見えず　冬湖
試射の群ねぎらう舞樂星今宵　雨齋人
門は星にもの焚くや楠は高澄みて　三石
七夕や藤の實さがる祀り岩　帶柿

課題　秋の雲　九月十日〆切
　　　鷹　十月十日〆切

規定　一人卅句限、用紙半紙、淡路假屋在釜口高田蝶衣宛、中央公論句稿と表記

蝶衣

鞍師藁を打てり秋立つ戸口石
留守に來て呉れあるものや秋立てり
饐え飯を糊に揉む婦も秋暑き
菱の葉の艶照りや鳥渡り初む
桔梗涼し嗽盥すゝめて退く女

正誤　閑古鳥岩毎に名ある景に住む　國郎

評論

最近に於ける佛露同盟

一

最近の露國は、宛然政治的活動の中心地たる觀ありき、七月上旬獨逸皇帝往き、同月下旬桂公又往き、八月中旬佛國首相ポアンカレー氏も其同盟國を訪問しぬ然かも最大の成功を收め得たるは最後に赴きたる法曹出身の政事家なりしが如し。

獨逸皇帝ウヰルヘルム二世は一代の雄主也、叡明にして經綸雲の如く湧生す、然かも其バルチスキーポルト寄港は刻下巴爾幹問題の紛糾せるありて露國の注意を惹くものあると露獨接近の機運熟せざりしとの爲め巴爾幹に於ける利益相扞格する兩國の結托を促さずして止みぬ、桂公の露都訪問は、多少双方の意思疏通を謀るを得たりと雖も、第二日露協約以上に明確なる効果を收むると能はざりしと言ふを正當とす可きに似たり、然るに獨り佛國首相に至ては、豫期以上に成功を齎らしたりしを疑はず、何ぞや、最近に於ける一切の國際的疑惑を一掃し且つかねて巴里に於て協議したる佛露海軍協約を明かに成立せしめ（よしや巴里にて定めたるもの以上に何等附加せる所はあらざりしとするも）、佛露同盟の安全を保證したれば也。

顧みて近年の佛露關係を見れば、往々疎隔し來れるの觀なきにあらざりき、一九一〇年巴里大洪水に際し、列國民皆醵金、以て窮民救助に聲援したるに、同盟國たる露國民は最も冷淡なりしか如き、又佛國上院團が露都を訪問するや官民の態度、路傍の人を見るの状ありしが如き其實例の一二に外ならず、而して此感情の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

疎隔を甚しくしたるは、最近伊土戰爭干涉問題に關する佛露兩國の衝突なりき。

伊土戰爭遷延決定せざるや、ラコニギ伊露兩帝會見以來、伊太利に親善なる露國は、此際土耳其に壓迫を加へ、戰爭を終了せしめて、一は伊太利が感謝を得、一は自國の利益の爲めダーダネルス海峽問題を解決せんと欲せりき、而して先つ之を佛國に諮りたるに、佛國は容易に之に賛成せざりき、蓋し佛國は北阿弗利加に多大の領土を有し、多數の回々敎徒其領內に生活せるか故に、又巨額の資本を土耳其に投じ居るか故に、此際土耳其に壓迫を加へ、土國民及一般回々敎の感情を損するを欲せざりし也、是に於て露國政府、激怒、罪を駐露佛國大使ルイ氏の職分に忠ならざりしに歸し其召還を佛國に要求し、玆に兩國關係は風雲面白からざるに至れりき。

然るに今回首相の訪露は、一切の誤解を掃盡し、佛露關係に新らしき紀元を劃することを得たり、之をしも成功と言はずんば、何をか成功と言ふ可けん哉。

二

併し吾人は毫も此成功を不思儀とせず、又首相ポアンカレー氏の靈腕に出でたりとも思惟せず、寧ろ當然の現象となすに躊躇せず、

何ぞや、今日に於ける佛露同盟の必要は一八九一年政治協約、一八九二年軍事協約若くは一八九六年政治協約成立の時期と毫も異る所なければ也。

先づ佛國より見ん乎、その陸軍力は到底獨逸の敵にあらず、況んや獨逸の同盟國として墺伊兩國の後援あるをや、而して其親善なる英國は專ら海軍國にして陸軍力頗る微弱に、到底巨大の援軍を大陸に揚ぐるを得ず、從つて萬一の際露國陸軍を賴む外はあらざる也。

然かも利益は獨り佛國側のみにあらず、露國も亦た佛國の協力を要求す、その理由は他無し、第一露國は今猶巴爾幹に對する野心を放棄せず、宗敎的系統の關係より君斯丹丁堡を回復するの志依然たり、然るにその强敵として同じく巴爾幹を窺ふものは、獨墺兩國となす、已に兩國と相和し難しとせば、勢ひ兩國の敵手

たる佛國と相結托協同するの外ある可からず、第二、露國は西伯利發展に對して佛國資本の後援を得たりしが、今や蒙古其他に發展せんとするに當り、一層佛國資本の必要を感ず、是亦同盟繼續の可なる所以に外ならず。

兩國の立場已に斯くの如し、ポアンカレー氏の雄腕無しと雖も、必らずや二十年前成立せる同盟關係を一層深くし得たることを疑はず、況んやポ氏自ら往きたるに於てをや。

然かも吾人は終りに一言を加ふ可きものあるを覺ゆ曰く露佛兩首相會見の結果、軍事協定以外に、佛國が蒙古に於ける露國の活動を援助することを約定せると共に、之と前後して佛國首相ポアンカレー氏と我が本野大使との會見を見たると是也、今此現象をして最近支那に於て一方に米獨兩國接近し、他方に佛露日英接近しつゝある各種の事實と相照映せしめよ、亦自ら無限の意義なくんばあらざる也。

土耳其帝國の危機

一

七月下旬、ガジ、ムクタル、パーシャの新内閣、土耳其に成る、其顏觸下の如し。

宰相　ガジムクタル、パーシャ、
陸相　ナジム、パーシャ
藏相　ジアベイ
海相　マヽツド、ムタタル、パーシャ
外相　ガブリエル、エフエンチ
法相　ヒルミ、パーシャ
樞密院議長　キヤミル、パーシャ、
内相　フエリッド、パーシャ
文相　サイド、ベイ

是れ土耳其の内閣としては、第一流的内閣也、何となれば、宰相ガジ、ムクタルは露土戰爭の勇將として、名聲夙に高く、之迄中央政界に立つ能はざりしは、その自由的思想が、土國癈帝の忌憚する所となり、久しく埃及政務官に貶せられたるが爲めのみ、樞相キヤミ

ルバーシヤと法相ヒルミ、バーシヤとは曾つて土國宰相たり、前者は外人間に聲望高く、後者はマセドニヤ問題に關して大名を擧げたりき、若しそれ內相フエリツドに至ては、アルバニヤ出身者なるが故に、目下アルバニヤ叛徒鎮撫を必要とする狀勢に照し、最も適任者を得たりと言ふ可し、而して此內閣は、八月上旬議會を解散し、新總選擧に依りて、民信の己れに在るやを問はんとしつゝあり、換言すれば、前內閣即ち青年土耳其黨の中央機關たる合同進歩期成會と新內閣とは孰れか土耳其國民の信用を有し、孰れの政策がその輿論に合するかを檢せんとしつゝあり、思ふに是れ土耳其帝國が盛衰興亡の岐れ路に際會せるを意味するものと言ふ可き也。

二

知らずサイド、バーシヤの前內閣は如何にして仆れたる乎、該內閣は青年土耳其黨の內閣也、其政策は土耳其化の政策、土耳其人中心主義の政策なりき、左れば廢帝アブダル、ハミツド時代に於て半獨立を許し、課税を免したる歐州土耳其のアルバニヤ、亞細亞土耳其のエーメン州に對しても、著々中央集權主義を實行し、人民の武器携帶を禁じて之を沒收し、且つ着々徴税を斷行するに至りたりき、青年土耳其黨が一九〇九年の大革命を實行せる愛國の至誠は、頗る麗しかりしと雖も、執政後三年間の成績に至ては、其壓迫的なる所、殆んど前朝と異るものあらざりき、玆に於て乎、アルバニヤ、エーメン諸州の叛亂相次ぎ、加ふるにマセドニヤの騷擾を見るに至れる也。

然らば則ち新內閣の政綱は如何、蓋し狹小なる土耳其人主義を排して、民族宗教の如何を問はず擧國一致の實を擧ぐると、アルバニヤ人にアルバニヤ語の保存を許すと、前內閣の壓迫政策を排するを等是なるに似たり。

三

知らず總選擧の勝敗は如何。

目下帆を順風に擧げたるの外觀ある點より見れば、勝利は現內閣の物たるに似たれども、運動機關の完全

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にして、内部の團結堅牢なる點より見れば、青年土耳其黨の優勢を見んも知る可からず。

然かも局外者より言はしめは、現内閣の勝利こそ望ましき所ならん、何ぞや、是れ第一にアルバニヤの紛擾を解決し、第二マセドニア其他に於ける基督教徒壓迫程度を減小し、第三土伊戰爭の平和的落着を促す可きものなれば也（青年土耳其黨は強硬なる戰爭論者なれども現内閣は寧ろ平和克復の速かならんことを望めり）、之に反して事青年土耳其黨の勝利に歸せん乎、獨り之等問題の解決困難なるのみならず延ひて勃牙利、塞爾比以下諸國とも紛擾を醸すの虞あり、吾人は現内閣派の勢力永續を期せずと雖も、兎も角一時的の勝利にても之を得んことを望んで止まず、是亦同じく黄色人たるより出づるの同情乎否乎。

白人の爲めの土民

公果共和國、白耳義に合併せられて已に四年、英米諸國未だ合併を承認せず、面積九十萬方哩、人口一千五百萬の境土は今以て國際的地位を明かにするを得ず是果して誰の罪ぞ。

最近公果に至れる通信に曰く白耳義政府は土民の私有地を沒收し乍ら猶返還を拒み、土民は祖先傳來の土地を離れて苦境言ふ可からず、政府は陽に聲言すらく「彼等種族に土地を分配せんとするも、昔年の境界線判明せず、境界線判明せずは、却て彼等の間に又々境界紛爭を生ずるの恐あり、所有地を返還せざるは却て彼等を憐れむ所以也」と、然かも何ぞ知らん、是全く口實に過ぎずして、眞成の理由は、萬一彼等に土地を返還しなば、在公果白人に使役せらるゝ勞働者の缺乏を來す可きを恐れたるに存ぜんとは。

是に至て、吾人はアルベルト皇帝即位に於ける公果改革の誓辭が實現せられざるを遺憾とす。

英國政府黨動搖

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英國政府黨の一たる勞働黨、候補をハンレー補缺選擧に立つ。次て自由黨又候補を立てゝ、兄弟相爭ふの愚を演ず、勞働黨員等憤然として曰く、悖德行爲一何ぞ玆に至る、政府は我黨の分離し去るを欲する乎と

次て最近一說あり英國內閣動搖近かる可きを傳ふ又た首相アスキス、藏相ロイドジオジ衝突說を流布するものあり。

自由黨執政以來、六年十月の久しきに及ふ、政局變動の因は暗々裏に兆しつゝあるを見る可き也。

米國新政黨

八月五日ロオスヱルト派、大會を市俄高に開催し、ロ氏を大統領候補に、カリフオルニヤ州知事ジヨンソン氏を副統領候補に推し、且つ黨名を「進步黨」と確定したり。

一見氣勢大に揚るが如きも、吾人は寧ろロ氏の爲めにその末路の近からんとを憂ふ、何ぞや、先きにロ氏を推擧したる諸州知事及び上院議員等の過半數は今や之に背き去れるを以て也、吁嗟「奈翁は愈々ウオターローに近けり」

佛國屋外廣告取扱

佛國代議院、屋外廣告稅案を通過す、曰く六ヤード以下の屋外廣告は一方ヤードに對して一年二十圓、十ヤード以下の屋外廣告は一方ヤード一年四十圓、二十ヤード以下のものは一方ヤード八十圓、二十ヤード以上のものは一方ヤート一年百六十圓の稅を收納せざる可からずと、顧みるに巴里、リビイエラに於ける屋外廣告は佛國風景の汚點たりき、政府が此擧に出でたるもの專ら此汚點を一掃するの意に出づるや知る可き也。

然かも翻つて想へば、屋外廣告の風致を損する、何ぞ獨り佛國のみならん、天下の美鄕を以て自ら居る我日本の如き寧ろ之れ以上に取締策を講ずるの必要あらざる乎。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊批評

▲名將逸話 時代の武士

東海林辰三郎著
博文館發行

「名將逸話」と割註はしてあるけれども、必らずしも名將とのみに限つてゐない。近世の部には學者の逸話もあれば政治家の逸話もある。要するに武內宿禰以下大久保甲東に至る百四十偉人の逸話を集めたもので、青年の修養に資する所極めて多い。且つ著者の各時代に對する概觀を掲げ、又逸話中の疑はしきものにも、著者の論議を挾めるなど、何處までも叮嚀懇切を極めて居る。(定價一圓十錢)

▲世態人情論

加藤咄堂著
東亞堂發行

口も八丁、手も八丁、おまけに筆も八丁なる咄堂氏の新著である、人情世態に關して種々の點より解説を試みたもので、一息にスラ〳〵と讀ませる手腕は確かである。引例などもなか〳〵氣が利いて居るし、敍述の仕方も明瞭である。咄堂氏の著述中最も讀み應へあるもの丶、一つである。(定價一圓二十錢)

▲入蜀記詳解

原穗郎註
城北出版社發行

陸放翁の入蜀記は、其名の高きに拘らず、餘りに博く愛讀せられざるものなるが、これは其文簡淨に過ぎて、青年子弟には眞の妙味の分らざる故なるべし。此篇譯文と共に字解を附したれば、初學者其れを讀みて後原文に對すれば、簡淨の妙味、いよ〳〵讀みていよ〳〵盡きざることを覺ゆべし。(定價六十五錢)

▲恩寵溢るゝの記

松本雲舟著
警醒社發行

「天路歷程」の著者として誰知らぬものなきジョン、バンヤンの自敍傳ともいふべきものを譯したるものなり。譯者は曩きに同じ著者の「聖戰」をも譯したる事あり、バンヤン通ともいふべき人なれば充分なる信用を以て讀むことを得べし。宗教界の事に冷淡ならざる人の愛讀に値すべし。(定價一圓)

▲桂月文集

大町桂月著
隆文館發行

桂月の文必ずしも調高からず、辭句洗錬ならず、又識見も精透なりといふべからず。然れども思ふ所、感ずる所を正直にいひ、思ふ所、感ずる所を直截に寫し出す所氏の獨壇場也。桂月の文に對すれば、老書生趺座をかいて一杯を傾けつゝ心置きなく談論するやうなる快感あり。青年子弟が氏の文を面白がるも理ありといふべし。(定價四十五錢)

▲悲しき玩具

石川啄木著
東雲堂發行

逝ける歌人石川啄木氏の和歌約貳百首及び對話一篇感想文一篇を收めたり。啄木氏の歌はドシ〳〵俗語も入れ、調も勝手なるもの多けれども、大抵よく著者の心持あらはれ。調、形整うて而かも內容の空疎なるものに優ること萬々なり。今此篇に對して、漫ろに薄倖なりし詩人の生涯を憶ふ(定價五十錢)

▲アラビヤ縱斷記

山岡光太郎著
東亞堂發行

「世界の神秘境」と稱せられて、異教人の容易に入るべからずとせられたるアラビヤを縱斷せる記事にして、之を異樣なる宗教、風俗、習慣

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を有する異域を跋渉せる探險記としても面白く、又將來必らず世界の問題となるべき回敎徒に對する研究錄として見るも面白し(定價九十錢)

▲社會學十回講義　樋口秀雄著　二松堂藏版

社會學を以て社會の科學的研究なりと見る著者が社會學に關する一般著述の「或は高遠に馳せ或は浩瀚に過ぎ或は難解に陷り爲に初學者をして斯學に指を染めざらしめた缺點」を補はんとして著はせるもの即ち本書なり。敍述平明を缺き稍簡潔を失するの厭あれど、論じて略要を悉したるは初學者入門の書として好箇のものたるのみならず、批判的に見れば多少異見の樹つべき點なきにしも非ずと雖、かなりに專門者の要求をも滿足せしむるの價値あるは疑はず斯學の著述至つて尠少なる今日本書を得たるを喜ぶ。(金壹圓五十錢)

▲靑民遺書　原善久編　發行所未詳

本書は弟子たる原氏が先師靑民七回の忌辰に當り遺稿の一部を公刊したるものにて至つて眞面目なるものなり。我等は固より著者並に編者の人格乃至敎義の一端をだも知る所なしと雖、時將に新秋、風冷たく燈火親しむべきの候、徐ろに本書を繙かば修養に資する所決して尠少ならざるべし。(定價未詳)

▲變り者　榊保三郎著　實業之日本社發行

書名が變なので一寸小說か何かの樣に誤解され易いが別名を「通俗精神病的性格論及其發生」といつて斯學の泰斗たる榊博士が曾て福岡日々新聞に「精神病的性格」と題して連載したるものを今般大に增補訂正したのが本書である。從て本書の目的も「精神病者と健康者との中間にある所謂精神病的性格者をして自分で其病のある處を悟つて而して其に對して衛生法を講ぜしむる」にある。文章平明で而かも常に正確なる科學的根據の上に立ち乍ら說いて居られるのは一般讀者にとつて好都合である。近代文明の惡結果として一般神經過敏になり精神疲勞者乃至異常者の增加する今日本書の出てたのは世の要求に應じた必然的事實でもあり且又一面悲しむべき事實でもある。(定價金壹圓)

▲亂彈下　矢野榮著　廣文堂發行

所謂戰爭文學の一つである。今其内容を揭げると、出征の卷。旅順の卷。奉天の卷。凱旋の卷の四項に分れてる、著者は步兵大尉であるが序文によると五十嵐力、田中介二兩氏の助力を得たとある。文章が未だ純な言文一致になり切らないといふ難はあるが全體として誇張の分子が少く質實謙抑な態度で事實を正しく描かうとしてる努力は十分に窺はれる。讀んでる中に熱い淚が流れた所も處々あつた。人生の意義とか深さとかを書いたものとしては大したものではないが此方面に興趣を有つてる人の一讀には十分適すると思ふ。(定價金九拾錢)

▲新山水行脚　坪谷水哉著　博文館發行

先づ瀟洒たる裝訂が氣に入つた。中の寫眞や未醒氏の瓢逸な挿繪を見てる丈でも氣持がいい。敍事の筆も可成詳しいがどうも抒情敍景の筆にウマミがない。もつと洒脫な、輕い氣の利いた俳的な所がなければ紀行文の上乘なものといはれまい。ローカル、カラーとか空氣とか氣分とかもう少し餘計に出てあつたらばと慾をいひたくなる。といつた樣な難點はあるが新たに旅につかうとする人、又は旅から歸つて來て美くしい想出に耽らうとする人の參考として一本を座右にすすめるに於ては何の遺

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

憾もない。（定價金七拾五錢）

▲徒然草詳解　藤森花影講述　良心堂發行

題の如く詳解である。全部を上下二段に分ち本文の假名文字には漢字を宛て解義を附し更に一文毎に語釋を加へた上に上段には其大意を記してる。卷頭に本書の解題や價値や兼好の略傳などを添へたのも親切である。尾上柴舟學士の校閲でもあるから初學者、獨學者の參考となる事が少くないだらう。（定價金五十錢）

▲法華物語　境野黄洋著　東亞堂發行

著者が序文にいつてる通り法華經の價値ある事は誰れでも知つて居乍ら大抵な人は其一部をも了解せずに居る。これは從來良參考書がなかつたからである。本書が此欠缺を充たす爲めに出版されたものであるが之を繙いて見るに深遂難解の意義を平易な、そして趣致ある行文で說述して居られるのは恐らく其目的を達したものだらう。著者の勞を多とする。（定價金八拾五錢）

▲貝殼（現代文藝叢書第十三篇定價廿五錢）　島村麥三著　春陽堂發行

▲藥柳（同第十四篇定價同上）　笹川臨風著　春陽堂發行

の諸篇何れも長大篇にて已に出來上りたるに拘らず、紙數豫定より超過せる爲め、本號に掲載する能はざりしは編者の遺憾とする所なり。次號には必らず掲載すべきを以て寄稿者及び讀者の御寬恕を乞ふ。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子供が見たら云うだらう、『ヤァ僕達の事が書いたらァ』と、親が見たら云うだらう、『まあ自家の事が出てるよ』と、そして怒るか、笑ふか悔しがるか面白がるか、夫れ共又極り悪がるか、それを繪で見たいものだとは、著者と畫工の云ふ所である。其の著者は犀利の觀察を以て聞えた人、その畫工は輕快の筆致を以て知られた人、此人々が腕に撚をかけて、彼を寫し是を描くに夫々**ピント**を失はぬ所は、目下の文壇界を見渡して、恐らく他に類と眞似はあるまい。すれば本書は僅に三百頁を出でず**スケッチ**五十景に充たずとも、現代家庭の眞相を寫して、又餘地なきものと云へやう。世の子煩腦の方々に敢て此書をお薦め申す。

いろはスケッチ 子供四十八景

小波著　榮畫　凡骨刻　非水裝

■ 四六長方形、本文二色刷二百六十餘頁

■ 挿繪木版四十八面、美裝帙入優美無比

■ 正價金壹圓也（送料）（內地八錢）清、鮮、臺、樺、各三十錢

發行所 **中西屋書店**

東京神田駿河臺下
振替東京二八一六

（中付二の一）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

敢て萬人に薦む此二大名著

新刊

九州醫科大學教授醫學博士榊保三郎先生著

變り者

定價壹圓　郵税八錢　菊版上製　金文字入

本書は博士が多年專心研究せられたる結果にして精神病的性格の症狀及び其養生法を述べたるもの、第一章は精神病性格並に原因を明かにし遺傳、姙娠中に生ずる原因及生後の原因を細說し第二章に於て本症の徵候を論じ遺傳變質、神經衰弱、ヒステリー、癲癇性、外傷性、中毒性等の諸性格を說き智力の程度、浮浪、職業、病的愛情、病的色慾、自殺、犯罪、—保護及び教育並びに精神病的性格と精神病との關係に及んで詳述し第三章に於いては右の豫防法及治療上の注意を述ぶ。各種の犯罪は此性格者に依りて行はれ各人並一家の不幸は此處に原づく事少からず本書は之等人生の一大不幸を除き社會人類の幸福の增進を期す。教育に從事する人は勿論、父兄又は一個人として熟讀すべき良書なり。

新刊

大王アレキサンダー

文學士小尾範先生著

△定價四十錢　△郵税六錢

英雄の起るや大風の如く烈火の如し歷山大王は英雄の魁　本書は大王一代の雄圖を叙し其面目を寫すに勇健暢達の美文をもつてす眞に肉躍血沸の快著也萬人それ速かに必讀あれ

（中付二の二）

發行所　東京京橋南紺屋町　實業之日本社　振替貯金口座東京參貳六番

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告は揭載を謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大町桂月先生新著

箱根山

地圖及寫眞數十個入

特製美本全壹冊

三五形携帶至便

正價金八拾錢

郵税 内地六錢 清鮮廿錢

大町桂月先生箱根山に遊ぶ事前後數十百回蘆の湖を中心とせる七八里四方の大山舊七湯新七湯は言ふも更なり熱海、湯河原、伊豆山、諸溫泉のある處所謂八里の古道の通ずる處箱根、三島、伊豆山、三權現、道了、早雲等古祠名寺のある處先生の足跡到らぬ隈もなく其獨得の**紀行文**に**案内記**を兼ねて**雲烟紙上**に**浮動**し一讀人をして神逝かしむ殊に里程旅費宿料溫泉の効能等最新の調査に依り詳記して漏らさず裝幀の堅牢優美にして携帶の至便なる亦破天荒！

大町先生序に曰く

天下の山水は我が庭園到る處の旅館はみな我が別莊なりと思へば世の中は廣し高樓の美酒可也茅店の麥飯亦可也流水我が爲めに管絃を奏し幽禽我が爲に歌ふ靈泉病魔を驅逐し淸風天籟を傳ふ海邊の日出山間の明月魂も空に飛揚せんとす朝に鮮鱗を釣り夕に山中白雲を伴うて眠る俗念拂ひつくして一心天地と合す旅行の趣味を解する者は世にも幸福の人なる哉方今遊覽地として溫泉場として避暑地として何人も第一の指を箱根山に屈するなるべし……山中溫泉の多きこと天下無双也頂に蘆の湖あり山脚は直に海に接す頂上より熱海の山路五里跳望の佳なる事他に其比を見す小田原より七里の海岸奇景應接に遑あらず連山名所舊蹟古戰場一々擧ぐるに遑あらず峯聳峩立して變化多く四方六七里の地盤を有する一大山何處からも上る路あり自働車にて上らるゝ大山は日本中唯箱根山あるのみ殊に箱根山の大觀は富士を負ひ駿相二海に面し……十ヶ國を見渡す天下他にこの壯觀あらんや未だ箱根に遊ばざるものは共に山水を談ずるに足らざる也吾れ箱根に遊ぶこと前後幾十百回なるを知らず殊に最近二年は東京に在るの日少なくして箱根山にあるの日多し玆に禿筆を呵してこの篇を草し遊人の參考に供し遊ぶを得ざるものの臥遊に養せんとす……………

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 **至誠堂** 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

思想と趣味

雄辯

演說と評論

一册金二十錢 郵税一錢五厘

九月號

一年前金二圓十錢
半年前金一圓十錢

▲雄辯の新研究(一)……(每號連載)……加藤咄堂

◎治國の大義 守屋此助
◎社會の基礎 島田三郎
◎神秘の崇嚴 永井柳太郎
◎英國にての感想 澤田學士

■青年と政治 尾崎行雄
■我國現時の財政 田尻稻次郎
■官吏の積極責任 岡崎邦輔
■船舶の進步と衝突 市村富久
■明治思想史 堺野黄洋
■米國最近の辯論界 大山千代雄

◎問題の人桂公 東臺隱士
◎鐵道院の一異才 冬湖學人
◎藤田東湖の酒癖 紫峯閑人
◎お伽談話 巖谷小波

●西歐の雄辯(飜譯四篇)
●青年と懷疑 建部遯吾
●聖書の創造 ラッセル
●札幌より 眞山孝治

●小說やどなし トルストイ
●門の內 風塵郎
●和歌 吉井勇
●俳句 內藤鳴雪

▲大行天皇の御逸事……伊藤痴遊謹講

東京本郷駒込阪下
大日本雄辯會
振替口座東京三九三〇

(中付二ノ四)

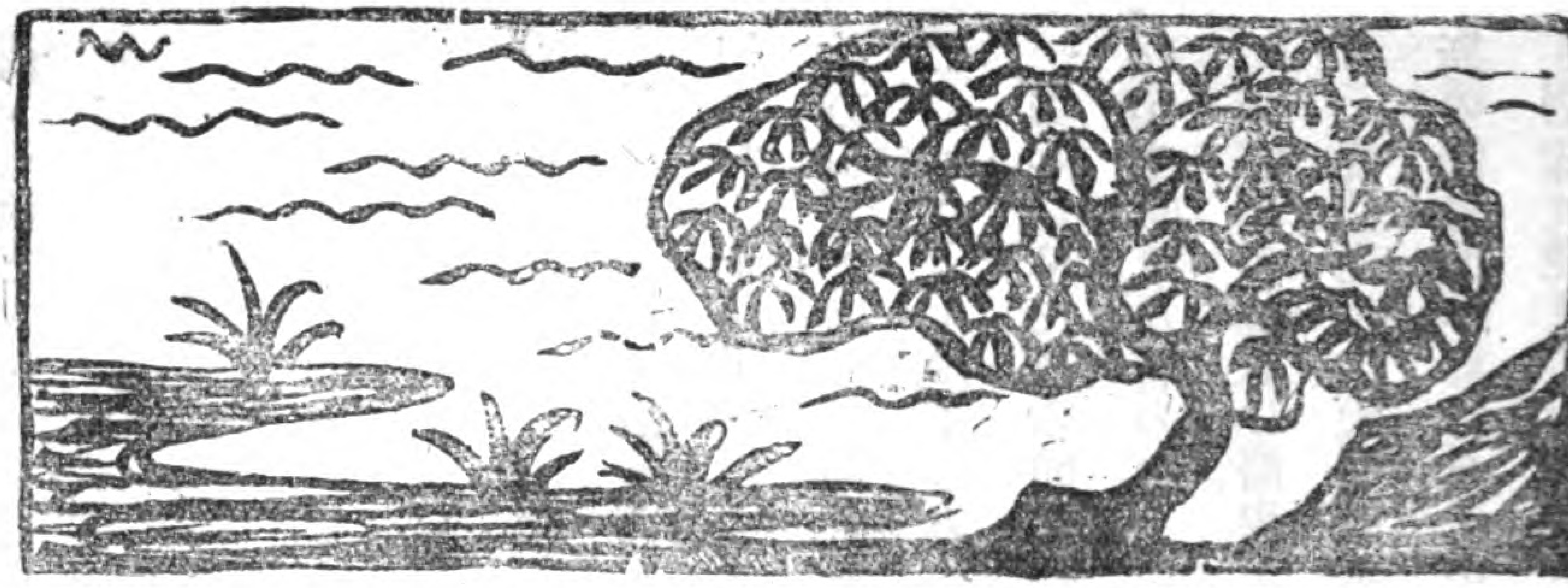
信用なき書店及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋期附録小説

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



岩石の間

島崎藤村

懐古園の城門に近く、桑畠の石垣の側で、櫻井先生は正木大尉に逢つた。二人は塾の方で毎朝合せて居る顔を合せた。大尉は塾の小使に雇つてある男を尋ね顔に、

『音は奈何しましたらう。』

『中棚の方でせうよ。』と櫻井先生が答へた。

中棚とはそこから數町ほど離れた谷間で、新たに小さな鑛泉の見つかつたところだ。

淺間の麓に添ふた傾斜の地勢は、あだかも人工で堀割られたやうに、小諸城址の附近で幾つかの深い谷を成して居る。谷の一つの淺い部分は耕されて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

舊士族地を取圍いて居るが、その桑畠や竹藪を背にしたところに櫻井先生の住居があつた。先生はエナアゼチックな手を振つて、大尉と一緒に松林の多い谷間の方へ長大な體軀を運んで行つた。

谷々は緑葉に包まれて居た。二人は高い崖の下道に添ふて、耕地のある岡の上へ出た。起伏する地の波はその邊て赤土まじりの崖に成つて、更に河原續きの谷底の方へ落ちて居る。崖の中腹には、小使の音吉が弟を連れて來て、道をつくるやら石塊を片付けるやらして居た。音吉は根が百姓て、小使をするかたはら小作を作るほどの男だ。その弟も屈強な若い百姓だ。

兄弟の働いて居る側て先生方は町の人達にも逢つた。人々の話は鑛泉の性質、新浴場の設計なぞて持切つた。千曲川への水泳の序に、見に來る町の子供等もあつた。中には塾の生徒も遊びに來て居て、先生方の方へ向つて御辭儀した。生徒等が戯れに突落す石は、他の石にぶつかつたり、土煙を立てたりして、ゴロ／＼崖下の方へ轉がつて行つた。

堀起された岩の間を廻つて、先生方はかはる／＼薄暗い穴の中を覗き込んだ。浮き揚つた湯の花はあだかも陰氣な苔のやうに周圍の岩に附着して、極く靜かに動搖して居た。

新浴場の位置は略崖下の平地と定つた。荒れるに任せた谷陰には櫟林なぞの生ひ茂つたところもある。櫻井先生は大尉を誘つて、あちこちと見て廻つた。今ある自分の書齋――その建物だけを、先生は斯の鑛泉側へ移さうといふ話を大尉にした。

對岸に見える村落、野趣のある釣橋、河原つゞきの一帶の平地、遠い山々――それらの眺望は先

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生方を悦ばせた。日あたりの好いことも先生方を悦ばせた。斯の谷間は割合に豐饒て、傾斜の上の方まて耕されて居る。眼前に連なる青田は一面緑の波のやうに見える。士族地からこゝへ通つて來るといふことも先生方を悦ばせた。あの樹木の蔭の多い道は大尉の住居からも左程遠くはなかつた。

その翌日から、櫻井先生は塾の方で自分の受持を濟まして置いて、暇さへあればこゝへ見廻りに來た。崖下に浴場を經營しやうとする人なぞが廻つて來ないことはあつても、先生の姿を見ない日は稀だつた。そして、そこに土管が伏せられるとか、こゝに石垣の石が運ばれるとか、何かしらづゝ變つたものが先生の眼に映つた。河原續きの青田が黄色く成りかける頃には、先生の小さな別莊も日に〳〵形を成して行つた。霜の來ないうちに早くと、崖の上でも下でも工事を急いだ。

雪が來た。谷々は三月の餘も深く埋もれた。やがてそれが溶け初める頃、復た先生は山歩きでもするやうな服裝をして、人並すぐれて丈夫な脚に脚絆を當て、持病のリヨウマチに侵されて居る左の手を懐に入れて歩いて來た。殘雪の間には、崖の道まで滲み溢れた鑛泉、半ば出來た工事、冬を越しても落ちずにある茶色な椚の枯葉なぞが見える。先生は霜のために危く崩れかけた石垣なぞまで見て廻つた。

斯の別莊がいくらか住まはれるやうに成つて、入口に自然木の門なぞが建つた頃には、崖下の浴場でもすつかり出來上るのを待たないで開業した。別に、崖の中途に小屋を建てゝ、鑛泉に老を養はうとする隱居さん夫婦もあつた。

春の新學年前から塾では町立の看板を掛けた。同時に、高瀬といふ新教員を迎へることに成つた。學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年前の休みに、先生は東京から着いた高瀬をこゝへ案内して來た。岡の上から見ると中棚鑛泉とした旗が早や谷蔭の空に翻つて居る。湯場の煙も薄く上りつゝある。

櫻井先生は高瀬を連れて、新開の崖の道を下りた。先生がまだ男のさかりの頃、東京の私立學校で英語の教師をした時分、教えた生徒の一人が高瀬だつた。其後、先生が高輪の教會の牧師をして、かたはらある女學校へ教えに行つた時分、誰か櫻井の家名を繼がせるものをと思つて――その頃は先生も頼りにする子が無かつたから――養子の話まで仄めかして見たのも高瀬だつた。その高瀬が今度は塾の教員として、先生の下で働きに來た。先生から見れば弟子か子のやうな男だ。

石垣について、幾曲りかして行つたところに、湯場があつた。まだ一方には鉋屑の臭氣なぞがして居た。湯場は新開の畠に續いて、硝子窓の外に葡萄棚の釣つたのが見えた。青黑く透明な鑛泉からは薄い湯氣が立つて居た。先生は自然と出て來る樂しい溜息を制へきれないといふ風に、心地の好い沸かし湯の中へ身を浸しながら、久し振で一緒に成つた高瀬を眺めたり、田舍風な淺黄の手拭で自分の顔の汗を拭いたりした。假令性質は冷たくとも、兎にも角にも自分等の手で、各自に鍬を擔いで來て、斯の鑛泉の脈に堀當てたといふ自慢話なぞを高瀬にして聞かせた。

「正木さんなぞは、まるで百姓のやうな服裝をして、シャベルを擔いでは遣つて來たものでサ……」

何ぞといふと先生の話には、「正木さん、正木さん」が出た。先生は又、あの塾で一緒に仕事をして居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る大尉が土地から出た軍人だが、既に恩給を受ける身で、讀み且つ耕すことに餘生を送らうとして、昔懷しい故郷の城址の側に退いた人であることを話した。

「正木さんでも、私でも――矢張、この鑛泉の株主といふことに成つてます。」

と先生は流し場の水槽のところへ出て、斑白な髪を濡らしながら話した。

東京から來たばかりの高瀨には、見るもの、聞くもの、新しい印象を受けるといふ風であつた。

二人は浴場を離れて復た崖の道を上つた。その中途にある小屋へ聲を掛けに寄ると、隱居さんは無欲な百姓の顔を出して、先生から預かつて居る鍵を渡した。

「高瀨さんに一つ、私の別莊を見て頂きませう。」

と言つて先生は崖に倚つた小樓の方へ高瀨を誘つて行つた。「これが湯の元です」といふところを通つた。先生は岩の間に造りつけてある黒い扉を開けて高瀨に見せた。そこには、隱れた地の底から涌いて來たまゝの鑛泉が淀んで居た。

「どれ、御案内しませう。まだ疊もすつかり入れてありません。」

先生は隱居さんから受取つた鍵で錠前をガチヤ／＼言はせて、誰も留守居のない、暗い家の中へ高瀨を案内した。閉めてあつた雨戸を繰ると、對岸の崖の上にある村落、耕地、その下を奔り流れる千曲川が青疊の上から望まれた。

高瀨は欄のところへ行つて、川向ふから傳はつて來る幽かな鷄の聲を聞いた。先生も一緒に立つて眺

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めた。

『高瀬さん、斯の家は見覺えがありませう――』

先生に左樣言はれると、高瀬にも覺えがある。高瀬は一度小諸を通つて先生の住居を訪ねたことがある。形は變へられたが以前の書齋だ。

『どうせ、斯の建物は斯うしてありますから、皆さんにお貸し申します……御入用の時は、何時でも御御使ひ下さい。』

と言ひながら、先生は新規に造り足した部屋を高瀬に見せ、更に樓階の下の方までも造れて行つて見せた。そこは食堂か物置部屋にでもしやうといふところだ。崖を崩して築き上げた暗い石垣がまだ其儘に顯はれて居た。

二人は復た川の見える座敷へ戻つた。先生は戸棚を開けて、煙草盆なぞを探した。

『しかし、先生も白く成りましたネ。』

と高瀬が言出した。

先生が長い立派な髯を生したのも斯の地方へ來て隱れてからだ。

年はとつても元氣の好い先生の後に随いて、高瀬はやがて斯の小樓を出、元來た谷間の道を町の方へ歸つて行つた。一雨ごとに山の上でも温暖く成つて來た時で、いくらか濕つた土には日があたつて居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『櫻井先生、あの高輪の方にあつた御宅は奈何成さいました。』

『高輪の家ですか。あれは君、實に馬鹿々々しい話サ……好い具合に人に胡麻化されて了ひました……』

高瀨は先生の高輪時代をよく知つて居る。あの形勝の好い位置にあつた、庭も廣く果樹なぞも植えてあつた、恐らく永住の目的で先生が建てた家を知つて居る。あの時代に居た先生の二度目の奥さんを知つて居る。あの頃は先生もまだ若々しく、時には奥さんに輕い洋裝をさせ、一緒に猿町邊を散歩した……先生にも左樣いふ時代のあつたことを知つて居る。

話し〳〵二人は歩いた。

坂に成つた細道を上ると、そこが舊士族地の町はづれだ。古い屋敷の中には最早人の住まないところもある。破れた土塀と、その朽ちた柱と、桑畠に礎だけしか殘つて居ないところもある。荒廢した屋敷跡の間から、向ふの方に小諸町の一部が望まれた。

『淺間が燒けてますよ。』

と先生は上州の空の方へ靡いた烟を高瀨に指して見せた。見覺えのある淺間一帶の山脈は、旅で通り過ぎた時とは違つて、一層ハッキリと高瀨の眼に映つて來た。

先生の住居に近づくと、一軒手前にある古い屋敷風の門のところは塾の生徒が出たり入つたりして居た。寄宿する青年達だ。いづれも農家の子弟だ。その家の一間を借りて高瀨はさしあたり腰掛に荷物を

解き、食事だけは先生の家族と一緒にすることにした。横手の木戸を押して、先生は自分の屋敷の裏庭の方へ高瀬を誘つた。

先生の周圍は半ば農家のさまだつた。裏庭には田舍風な物置小屋がある。下水の溜がある。野菜畠も造つてある。緣側に近く、大きな鳥籠が伏せてあつて、その邊には鷄が遊んで居る。今度の奥さんには子供衆もあるが、都會育ちの色の白い子供なぞと違つて、『坊ちやん』と言つても强壯さうに日に燒けて居る。

東京の明るい家屋を見慣れた高瀬の眼には、屋根の下も暗い。先生のやうな淸潔好きな人がよく斯のむさくるしい爐邊に座つて平氣で煙草が喫めると思はれる程だ。

高瀬の來たことを聞いて、逢ひに來た町の青年もあつた。どうして斯樣な田舍へ來て吳れたかなぞと、挨拶も如才ない。今度の奥さんは ミッション・スクウル を出た婦人て、先生とは大分年は違ふが、取廻しよく皆なを歎待した。奥さんは先生のことを客に話すにも、矢張『先生は』とか『櫻井が』とか親しげに呼んて居た。

「高瀬さんに珈琲でも入れて上げたら可からう。」

「私も今、左樣思つて――」

斯樣な言葉を奥さんと換した後、先生は高瀬と一緒に子供の遊んて居る緣側を通り、自分の部屋へ行つた。庭の花畠に接した閑靜な居間だ。そこだけは先生の趣味て淸淨に飾り片付けてある。唐本の詩集

なぞを置いた小机がある。一方には先の若い奥さんの時代からあつた屏風も立てゝある。其時、先生は近作の漢詩を取出して高瀬に見せた。中棚鑛泉の附近は例の別莊へ通ふ隱れた小徑から對岸の村落まで先生の近作に入つて居た。その年に成るまで眞實に落着く場所も見當らなかつたやうな先生の一生は、漢詩風の詞て、その中に言ひ表してあつた。

其晩、高瀬は隣の屋敷の方へ行つて、一時借りて居る部屋て、東京の友人に宛てた手紙を書いた。一間ほど隔てゝ寄宿する生徒等の何かゴト／＼言はせる音がする。まだ他に部屋を仕切つて借りて居る人達もあると見え、一方の破れた襖の方からは貧しい話し聲がボソ／＼ボソ／＼聞える。旅の行李の側に床を敷いてからも、場所の違つたのと、鼠の騷ぐのとて、高瀬はよく寢就かれなかつた。彼の心はまだ半ば東京の方にあつた。自分のために心配して居て呉れる人達のことなぞが、夜遲くまて、彼の胸を往來した。

朝早く高瀬は屋外に出て山を望んだ。遠い山々にはまだ白雪の殘つたところも有つたが、淺間あたりは最早すつかり溶けて、牙齒のやうな山續きから、陰影の多い谷々、高い崩壞の跡などまて顯はれて居た。朝の光を帶びた、淡い煙のやうな雲も山巓のところに浮んて居た。都會から疲れて來た高瀬には、山そのものが先づ活氣と刺激とを與へて呉れた。彼は淸い銳い山の空氣を饑えた肺の底まても呼吸した。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

塾で新學年の稽古が始まる日には、高瀬は知らない人達に逢ふといふ心を持つて、庭傳ひに櫻井先生を誘ひに行つた。早起の先生は時間を待ち切れないで疾くに家を出た。裏庭には奥さんだけ居て、主婦らしく畠を見廻つて居た。

「でも、高瀬さん、田舎ですね。後の方にある桑畠まで皆な斯の屋敷に附いてるんですよ――」

と奥さんは言つて聞かせた。

草の芽が見える花畠の間を通つて、高瀬は裏木戸から桑畠の小徑へ出た。その淺く狹い谷一つ隔てた岡の上が、直ぐ塾の庭だ。樹木の間から白壁だの教室の窓なぞが見えるところだ。高瀬は谷を廻つて、いくらか勾配のある耕地のところで先生と一緒に成つた。

「こゝへは燕麥を作つて見ました。私共の畠は學校の小使が作つてます。」

先生はその石の多い耕地を指して見せた。

塾の庭へ出ると、櫻の若樹が低い土手の上にも教室の周圍にもあつた。ふくらんだ蕾を持つた、紅味のある枝へは、手が屆く。表門の柵のところにはアカシヤが植えてあつて、その邊には小使の音吉が腰を曲め乍ら、庭を掃いて居た。一里も二里もあるところから通ふといふ近在の生徒なぞは草鞋穿でやつて來た。

まだ時が早くて、高瀬は先生の室を見る暇があつた。教室の上にある二階の角が先生のデスクや洋風の書架の置並べてあるところだ。亞米利加に居た頃の樂しい時代でも思出したやうに、先生はその書架

を背にして自分でも腰掛け、高瀬にも腰掛けさせた。

『好い書齋ですネ。』

と高瀬は言ッて見て、窓の方へ行つた。蓼科の山つゞきから遠い南佐久の奥の高原地がそこから望まれた。近くには士族地の一部の草屋根が見え、ところ〳〵に柳の梢の薄く青みがゝつたのもある。遲い春が漸く山の上へ近づいて來た。

『高瀬さん、これを一つ君に呈しませう。』

と言つて先生が書架から取出したのは、古い皮表紙の小形の洋書だ。先生は鼻眼鏡を隆い鼻のところに宛行つて、過ぎ去つた自分の生活の香氣を嗅ぐやうに其の古い洋書を繰りひろげて見て、それから高瀬に呉れた。

正木大尉は幹事室の方に見えた。先生が高瀬と一緒にその室へ行つた時は、大尉は隅のところに大きな机を控えて居た。高瀬は、大尉とは既に近づきに成つて居た。

『正木先生は大分漢書を集めて被入つしやいます――法帖の好いのなぞも澤山持つて被入いしやる。』と先生は高瀬に言つた。『何かまた貴方も借りて御覧なすつたら可いでせう。』

『えゝ、まあボツ〳〵集めてます……なんにも子供に遺して置く物もありませんから、せめて書籍でも遺さうと思ひまして……』

大尉は黒い袴の中へ兩手を差入れながら笑つた。

其日、高瀬は始めて廣岡理學士に紹介された。上田町から汽車で通つて來るといふ。高瀬から見れば親と子ほども年の違つた學者だ。

「高瀬さんは三年といふ御約束で、私共の塾へ來て下さいました。」

先生は今度雇ひ入れた新教員のことを學士に話した。

初めての授業を終つて、復た高瀬が斯の二階へ引返して來る頃は、丁度二番の下り汽車が東京の方から着いた。盛んな蒸氣の音が塾の直ぐ前で起つた。年のいかない生徒等は門の外へ出て、いづれも線路側の柵に取付き、通り過ぎる列車を見やうとした。

「どうも汽車の音が喧しくて仕樣が有りません。授業中にあいつをやられやうものなら、硝子へ響けて、稽古も出來ない位です。」

大尉は一寸高瀬の側へ來て、言つて、一緒に停車場の方へ向いた窓から見下した。大急ぎで馳出して行く廣岡理學士の姿が見えた。學士は風呂敷包から古い杖まで忘れずに持つて、上田行の汽車に乘り後れまいとした。

これと觸違ひに越後の方からやつて來た上り汽車がやがて汽笛の音を殘して、東京を指して行つて了つた頃は、高瀬も塾の庭を歸つて行つた。周圍にはあだかも船が出た後の港の靜かさが有つた。塾の庭にある櫻は濃い淡い樹の影を地に落して居た。谷づたひに高瀬は獨り桑畠の間を歸りながら、都會から遁れて來た自分の身を考へた。彼が近い身の邊にあつた見せかけの生活から——甲斐も無い反抗と心勞

とから——其他あらゆるものから遁れて來た自分の身を考へた。もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることは無いか。そのために、彼は他にもあつた教師の口を斷り、すこし土でも堀つて見やうと思つて、わざ〳〵斯の寂しい田舍へ入つて來た。

「高瀨さん、一體貴方はお幾つなんですか——」

櫻井先生の奥さんは庭づたひに隣の家の方から廻つて來た高瀨に尋ねた。奥さんは緣側のところに出て、子供に鷄を見せて居た。

高瀨は庭に立ちながら、「二十八です、」と答へた。

「まだお若いんですねえ。」

「左樣言へば、奥さんはお幾つです。女の方の年齡といふものは、よく分らないものですネ。」

「私ですか——貴方より二つ上——」

奥さんは聞かなくても可いことを發つて聞いたといふ顏付て、やゝ皮肉に笑つて、復た子供と一緒に鷄の方を見た。淡黃な色の雛は幾羽となく母鷄の羽翅に隱れた。

先生が庭を廻つて來た。町の方に見つけた借家へ案内しやう、といふ先生に随いて、高瀨はやがて斯の屋敷を出た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

城門前の石碑のあるあたりから、鐵道の線路を越え、二人は砂まじりの窪い道を歩いて行つた。並んだ石垣と桑畠との見える小高い耕地の上の方には大手門の殘つたのが裏側から望まれた。先生はその高い瓦屋根を高瀬に指して見せた。初めて先生が小諸へ移つて來た時は、その太い格子の嵌つた窓と重い扉のある城門の樓上が先生の假の住居であつたといふ話をして聞かせた――丁度、先生はお伽話でもして聞かせるやうに。

坂道を上ると、大手の跡へ出る。士族地の方へ行く細い流が其邊の町の間を流れて來て居る。二人は廣岡理學士の噂なぞをしながら歩いた。

先生は思ひやるやうに、

「廣岡さんも今、上田で數學の塾を開いてますが、餘程の逆境でせう……まあ、私共も先生に同情して、いくらかの時間を助けに來て頂くことにしたんです……それに、君、吾儕の塾も中學の設備をして、認可ても受けやうといふには、肩書のある人が居ないと一寸これて都合が惡いからネ。」

高瀬も笑つた。

細い流について行つたところに、本町の裏手に續いた一區域がある。落葉松の垣て圍はれた草葺屋根の家が先生の高瀬を連れて行つて見せたところだ。近くまて汁粉屋が借りて居たとかて、古い穴のあいた襖、煤けた壁、汚れた障子なぞが眼につく。胡燵を切つたあたりは疊も燒け焦げて、紙を貼り着けてある。住み荒した跡だ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まあ、斯様なものでせう。」

と先生は高瀬に言つて、一緒に奥の方まで見て廻つた。

「一寸、今、他に貸すやうな家も見當りません……妙なもので、これで壁でも張つて、疊でも入れ替えて御覧なさい、どうにか住めるやうに成るもんですよ。」

と復た先生が言つた。

同じ士族屋敷風の建物でも、これはいくらか後で出來たものらしく、蠶の種紙をあきなふ町の商人の所有に成つて居た。高瀬はすこしばかりの畠の地所を附けてこゝを借りることにした。

小使の音吉が來て三尺四方ばかりの爐を新規に築き上げて呉れた頃、高瀬は先生の隣屋敷の方からこゝへ移つた。

家の裏には別に細い流があつて、石の間を落ちて居る。山の方から來る荒い冷い性質の水だ。飲料には用ひられないが、砂でも流れない時は顔を洗ふに好い。そこにも高瀬は生のまゝの刺激を見つけた。斯の粗末ながらも新しい住居で、高瀬は婚約のあつた人を迎へる仕度をした。月の末に、彼は結婚した。

長く東京で年月を送つて來た高瀬には、塾の周圍だけでも眼に映るものが多かつた。庭にある櫻の花は開いて見ると八重で、花束のやうに密集つたやつが教室の窓に近く咲き亂れた。濃い花の影は休みの

時間に散歩する教師等の顔にも映り、建物の白い壁にも映つた。學生等は幹に隱れ、枝につかまり、まるで小鳥かなんぞのやうに其下を遊び廻つて戯れた。

「廣岡先生も隨分關はない人ですネ。」

と高瀨が櫻井先生と正木大尉との居る前で言ふと、大尉は笑つて、

「關はないんぢやなくて、關へないんでせう……」

と言つた。左樣いふ大尉は着物から羽織まで惜氣もなく筒袖にして、塾のために働かうといふ意氣込を示して居た。

斯の半ば家庭のやうな學校から、高瀨は自分の家の方へ歸つて行くと、頼んで置いた鍬が屆いて居た。塾で體操の教師をして居る小山が屆けて呉れた。小山の家は町の鍛冶屋だ。チョン髷を結つた阿爺さんが打つて呉れたのだ。高瀨はその鐵の目方の可成あるガッシリとした柄のついた鍬を提げて、家の裏に借りて置いた畠の方へ行つた。

不思議な風體の百姓が出來上つた。高瀨は頬冠り、尻端折りて、股引も穿いて居ない。それに素足だ。柵の外を行く人はクスクス笑つて通つた。とは言へ高瀨は關はず働き始めた。堀起した土の中からは、どうかすると可憐な貝割葉が李の種について出て來る。彼は地から直接に身體へ傳はる言ひ難い快感を覺えた。時には畠の土を取つて、それを自分の脚の弱い皮膚に擦り着けた。

塾の小使も高瀨には先生だつた。音吉は見廻りに來て、鍬の持ち方から教えた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毎日のやうに高瀬は塾の受持の時間を濟まして置いて、家へ歸れば斯の畠へ出た。ある日、音吉が馬鈴薯の種を籠に入れて持つて來て見ると、漸く高瀬は畠の地ならしを濟ましたところだつた。彼の妻――お島はまだ新婚して間もない髪を手拭て包み、紅い色の腰巻なぞを見せ、土堀りの手傳ひには似合はない都會風な風俗て、土のついた雜草の根だの石塊なぞを運んて居た。

「奥さん、御精が出ますネ。」

と音吉は笑ひながら聲を掛けて、高瀬の掘起した畠を見た。サクの切り方が淺かつた。音吉は高瀬から鍬を受取つて、もつと深く切つて見せた。

「この邊は、まるて燒石と砂ばかりのやうなものてごわす。上州邊と違つて碌な野菜も出來やせん。」

と音吉が言つた。

彼は持つて來た馬鈴薯の種を植えて見せ、猶、葱苗の植え方まて教えた。

斯の高瀬が僅かばかりの野菜を植え試みやうとした畠からは、耕地つゞきに商家の白壁なぞを望み、一方の淺い谷の方には水車小屋の屋根も見えた。細い流て近所の鳴らす鍋の音が町裏らしく聞えて來るところだ。激しく男女の勞働する火山の裾の地方に、高瀬は自分と妻とを見出した。

塾ては更に校舍の建増を始めた。教員の手が足りなくて、翌年の新學年前には廣岡理學士が上田から

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家を揚けて引移つて來た。

子安といふ新敎員も、高瀨が東京へ行つた序に賴んで來た。子安は、高瀨も逢つたことが無い。人の紹介だ。塾では奈樣な新敎員が來るかと皆な待受けた。子安が着いて見ると案外心易い、少壯な學者だ。

斯うなると敎員室も大分賑かに成つた。櫻井先生はまだ壯年の輝きを失はない眼付て、大きな火鉢を前に控えて、盛んに話す。正木大尉は正木大尉で强い香のする刻煙草を卷きながら、よく「軍隊に居た時分」を持出す。時には、音吉が鈴を振鳴しても、まだ皆な火鉢の側に話し込むといふ風であつた。

「正木さん、一寸この眼鏡を掛けて御覽なさい。」

「まだ私も老眼鏡には早過ぎる――ヤ、これは驚いた――斯う側へ寄せたよりも、すこし離した方が猶よく見えますナ――廣岡先生、いかゞ。」

「成程、よく見えます。」

「ヒドイものですなナ――」

斯樣な話をしても、時は樂しく過ぎた。

近くて湯のある中棚は皆なの交歡に適した場所だつた。子安がいくらか土地に馴染んだ頃、高瀨も誘はれて塾から直ぐに中棚の方へ歩いて行つて見た。子安が東京から來て一月ばかり經つ時分には藤の花などが高い崖から垂下つて咲いて居た谷間が、早や木の葉の茂り合つた蔭の道だ。暗いほど深い。

岡の上へ出ると、なまぬるい微かな風が黄色くなりかけた麥畠を渡つて來る。麥の穗と穗の擦れる音が聞える。強い、掩ひ冠さつて來るやうな叢の香氣は二人を沈默させた。二語、三語物を言つて見て、復た二人とも默つて歩いた。

崖の道を降りかけて、漸く二人は笑ひ出した。隱居さんの小屋のあたりで、湯場の方から上つて來る正木大尉の奥さんにも逢つた。大尉の奥さんは湯上りの好い顔色で、子供を連れて、丁寧に二人に挨拶して通つた。

浴場には櫻井先生も廣岡學士も來て居た。先生は身體を拭いて上りかけたところで、學士だけ礦泉の中に心地よさそうに入つて居た。硝子戸の外には葡萄の蔓も延び／＼として、林檎の植えられた畠なぞも見える。

「子安君はナカ／＼好い身體ですネ――」

と學士に言はれて、子安は隨分苦學もして來たらしい縮つた毛脛を撫でた。

「奈何です、我輩の指は。」

と其時、學士は左の手をひろげて、半分しかない藥指を出して見せた。

「ホ。」と子安は眼を圓くした。

「一寸氣が着かないでせう。これにはそも／＼歴史がある――ベエスの紀念でサ。」

學士は華やかな大學時代を想ひ起したやうに言つて、その骨を挫かれた指で熱球を受け損じた時の眞

似まてして見せた。

三人が連立つて湯場を出、櫻井先生の別莊の方へ上つて行つた時は、先生は皆なを待受顏に窓に近い庭石に水をそゝいで居た。先生は石垣の上に試みたアカシャの差木を高瀨に指して見せた。門の內には先生の好きな花も植えられた。

別莊の入口には樓の名を彫つた額も掛つた。明るく深い綠葉の反射は千曲川の見える座敷に滿ちて、そこに集つた湯上りの連中の顏にまで映つた。一年に二度づゝ黃色くなる欄の外の眺めは綠に調和して畫のやうに見えた。先生は茶を入れて皆なを欵待しながら、靑田の時分に聞える非常に澤山な蛙の聲、夕方に見える對岸の村落の灯の色などを語り聞かせた。

間もなく三人は先生一人を斯の隱れ家に殘して置いて、町の方へ歸つて行つた。學士がユックリ〳〵歩くので他の二人は時々足を停めて待合はせては復たサッサと步いた。

「しかし、女でもよく働くところですネ。」と子安は別れ際に高瀨に言つた。

高瀨も立留いて、「畢竟、よく働くから、それで斯う女の氣象が勇健いんでせう。」

「左樣です。働くことはよく働きますナ……それに非常な質素なところだ……ですけれど、高瀨さん、チアムネスといふものは全く斯の邊の娘に欠けてますネ。」

子安は心から出た聲で快活に笑つた。「まるて、ゴツ〳〵した岩みたやうな連中ばかりだ。」と彼は附添した。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「しかし、君、その岩が好くなつて來るから不思議だよ。」と高瀨は戯れて言つた。

子安は先へ別れて行つた。鐵道の踏切を越した高い石垣の側で、高瀨はユックリ歩いて來る學士を待受けた。

「高瀨さん、私も小諸の土に成りに來ましたよ。」

と學士は今迄にない忸々しい調子で話し掛けて、高瀨と一緒に石垣側の段々を貧しい裏町の方へ降りた。

「……私も今、朝顔を作つてます……上田ではよく作りました……今年はウマくいくか奈何か知りませんがネ、まあ見に來て下さらんか。」

斯う歩き／＼高瀨に話し掛けて行くうちに、急にポツ／＼落ちて來た。學士は家の方の朝顔棚が案じられるといふ風で、大急ぎで高瀨に別れて行つた。

大きな石の砂に埋つて居る土橋の畔あたりへ高瀨が出た頃は、雨が彼の顔へ來た。貧しい家の軒下には、茶色な——茶色なといふよりは灰色な荒い髮の娘が立つて、ションボリと往來の方を眺めて居た。高瀨は道を急がうともせず、顔へ來る雨を寧ろ樂みながら歩いた。そして寒い凍え死ぬやうな一冬を始めて斯の山の上で越した時分には風邪ばかり引いて居た彼の身體にも、いくらかの抵抗する力が出來た

ことを悦んだ。ピッショリ汗をかきながら家へ戻つて見ると、その年も畠に咲いた馬鈴薯の白い花がうなだれて居た。雨に打たれる乾いた土の臭氣は新しい書籍を並べた彼の勉强部屋までも入つて來た。

七月に入つて、廣岡理學士は荒町裏の家の方で高瀬を待受けた。高瀬の住む町からも左程離れて居ないところで、細い坂道を一つ上れば體操敎師の家の鍛冶屋の店頭へ出られる。高い白壁の藏が並んだ石垣の下に接して、竹藪や水の流に取圍かれた位置にある。田圃に近いだけに、濕氣深い。

「お早う。」

と高瀬は聲を掛けて、母屋の横手から裏庭の方へ來た。

深い露の中で、學士は朝顔鉢の置並べてある棚の間をあちこちと歩いて居た。丁度學士の奥さんは年長のお孃さんを相手にして開けひろげた勝手口で働いて居たが、其時庭を廻つて來た。

奥さんは性急な、しかし良家に育つた人らしい調子で、

「宅ぢや斯の通り朝顔狂ですから、小諸へ來るが早いか直ぐに庭中朝顔鉢にしちまひました――斯の棚は音さんが來て造つて呉れましたよ――まあ斯様な好い棚を――」

と高瀬に話した。奥さんはユックリ朝顔も眺めないといふ風に言つたが、夫の好きな花に趣味も持たない人では無いらしかつた。彼女は學士が植えて樂む種々な朝顔の變り種の名前などまでもよく暗記んじて居た。

「高瀬さんに一つ、私の大事な朝顔を見て頂きませうか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と學士が言つて、數ある素焼の鉢の中から短く仕立てた「手長」を取出した。學士はそれを庭に向いた緣側のところへ持つて行つた。鉢を中にして、高瀨に腰掛けさせ、自分でも腰掛けた。

奥さんは子供衆の方にまで氣を配りながら、

「これ、繁、塾の先生が被入しつたに御辭儀しないか——勇、お前はまた何だッて其樣なところに立つて居るんだねえ——眞實に、高瀨さん、私も年を取りましたら、氣ぜわしくなつて困りますよ——」

奥さんの小言の飛沫は年長のお孃さんにまで飛んで行つた。お孃さんは初々しい頰を紅めて、客や父親のところへ茶を運んで來た。

斯の子供衆の多勢ゴチャ〳〵居る中で、學士が一服やりながら朝顏鉢を眺めた時は、何もかも忘れて居るかのやうであつた。

「今咲いてますのは、ホンの丸咲か、牡丹種ぐらひなものです。」と學士は高瀨に言つた。「眞實の獅子や手長と成つたら、どうしても後れますネ。そのうちに一つ塾の先生方を御呼び申したい……何がなくとも皆さんに集つて頂いて、これで一杯進げられるやうだと可いんですけれど……」

翌朝高瀨は塾へ出やうとして、例のやうに鐵道の踏切のところへ出た。線路を渡つて行く塾の生徒なぞもあつた。丁度そこで與良町の方からやつて來る子安に逢つた。毎時言ひ合せたやうに皆なの落合ふ

ところだ。高瀨は子安を待合せて、一緒に塾の方へ歩いた。
線路側の柵について先へ歩いて行く廣岡學士の後姿も見えた。
「廣岡先生が行くナ。」と高瀨が言つた。
子安も歩き〱、「なんてもあの先生が上田から通つて被入つしやる時分には、大變お酒に醉つて、往來の雪の中に轉がつて居たことがあるなんて――そんな話てすネ。」
「私も聞きました。」
「どうして廣岡先生のやうな人が斯樣な地方へ入り込んで來たものてせう。」
「それは、君、誰も知らない――」
塾の門前に近いところて、二人は學士に追ひ付いた。
朝顏の話はそこても學士の口から出た。
「高瀨さん、今朝も咲きましたよ。」
「どうも先生の朝顏は六ケしくッて、私にはまだよく解りません。」と高瀨は笑ひながら言つた。
「町の方てポッ〱見に來て下さる方もあります……好きな人もあるんてすネ……しかし私はまだ、斯の土地にはホントに御馴染が薄い……」
學士は半ば獨語のやうに言つた。
正木大尉が桑畠の石垣を廻つてニコ〱しながら歩いて來た。皆な連立つて教員室の方へ行つて見る

と、櫻井先生は早くから來て詰掛けて居た。先生は朝のうちに一度中棚まで歩きに行つて來たとも言つた。

塾の庭にある樹木の緑も深い。淸しさうなアカシヤの下には石に腰掛けて本を開ける生徒もある。濃い櫻の葉の蔭には土俵が出來て、そこで無邪氣な相撲の聲が起る。斯の山の上へ來て二度七月をする高瀨には、學校の窓から見える谷や岡が餘程親しいものと成つて來た。その田圃側は、高瀨が行つては草を藉き、土の臭氣を嗅ぎ、百姓の仕事を眺め、畠の中で吸ふ嬰兒の乳の音を聞いたりなぞして、暇さへあれば歩き廻るのを樂みとするところだ。一度消えた夏らしい白い雲が復た窓の外へ歸つて來た。高瀨はその熱を帶びた、陰影の多い雲の形から、青空を流れる遠い水蒸氣の群まで、見分けがつくやうに成つた。

休みの時間毎に、高瀨は窓へ行つた。極く幼少い時の記憶が彼の胸に浮んで來た。彼は自分がまた髮を長くし、手造りにした藁の草履を穿いて居たやうな田舍の少年であつたことを思出した。河へ抄ひに行つた鰍を思出した。榎の樹の下で欄鳥が落して行つた青い斑の入つた羽を拾つたことを思出した。栗の樹に居た虫を思出した。その虫を踏み潰して、緑色に流れる血から糸を取り、酢に漬け、引き延ばし、乾し固め、それで魚を釣つたことを思出した。彼は又、生きた蛙を捕へて、皮を剝き、逆さに棒に差し、蛙の肉の一片に紙を添へて餌をさがしに來る蜂に與へ、そんなことをして蜂の巣の在所を知つたことを思出した。彼は都會の人の知らない蜂の子のやうなものを好んで食つたばかりでなく、田圃側に薬を垂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れて居る「すいこぎ」、虎杖、それから『すい葉』といふ木の葉て食べられるのを生てムシャ〳〵食つたことを思出した。

高瀬の胸に眠つて居た少年時代の記憶はそれからそれと復活つて來た。彼は幾年となく思出したことも無い生れ故郷の空て遠い山のかなたに狐火の燃えるのを望んだことを思出した。氣味の惡い夜鷹が夕方にはよく頭の上を飛び廻つたことを思出した。彼は初めて入學した村の小學校て狐がついたといふ生徒の一人を見たことを思出した……

學士が窓のところへ來た。

『廣岡先生の御國はどちらなんてすか。』と高瀬が聞いた。

『越後。』

と學士は答へた。

晝過に高瀬が塾を出やうとすると、急に門の外て、

『斯の野郎打殺して呉れるぞ。』

と呼ぶ聲が起つた。音吉の弟は人をめがけて大きな石を振揚げて居た。

「あれて、冗談てすぜ。」

と學士もそこへ來て言つて、高瀬に笑つて見せた。

荒い人達のすることは高瀬を呆れさせた。しかしその野蠻な戯れは都會の退屈な饒舌にも勝つて彼を

悦ばせた。彼はしばらく斯の地方に足を留め、心易い先生方の中で働いて、もつと〳〵素朴な百姓の生活をよく知りたいと言つた。谷の向ふの谷、山の向ふの山に彼の心は馳せた。

それから二年ばかりの月日が過ぎた。約束の任期が滿ちても高瀨は暇を貰つて歸らうとは言はなかつた。『勉强するには、田舍の方が好い。』そんなことを言つて、反つて彼は腰を落着けた。

更に二年ほど過ぎた。塾では更に敎室も建增したし、敎員の手も增した。日下部といつて塾のためには忠實な敎員も出來たし、洋書家の泉も一週に一日か二日程づゝは小縣の自宅の方から通つて來て呉れる。しかし以前のやうな賑かな笑ひ聲は次第に減つて行つた。皆な默つて働くやうに成つた。

敎員室は以前の幹事室兼帶でも手狹なので、二階の角にあつた敎室をあけて、そつちの方へ引越した。そこに大きな火鉢を置いた。鐵瓶の湯はいつでも沸いて居た。正木大尉は舶來の刻煙草を卷きに來ることもあるが、以前のやうにはあまり話し込まない。幹事室の方に籠つて、暇さへあれば獨りで手習をした。櫻井先生は用にだけ來て、音吉が汲んで出す茶を飲んで、復た隣の自分の室の方へ行つた。受持の時間が濟めば、先生は頭巾のやうな隱士風の帽子を冠つて、最早若樹と言へないほど鬱陶しく枝の込んだ庭の櫻の下を自分の屋敷かさもなければ中棚の別莊の方へ歸つて行つた。

子安も默つて了つた。子安は町の醫者の娘と結婚して、士族屋敷の方に持つた新しいホームから通つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て來た。後から仲間入をした日下部——この教員はまた性來默つて居るやうな人だ。
斯の教員室の空氣の中て、廣岡先生は由緒のありそうな古い彫のある銀煙管の音をポン〳〵響かせた。高瀬は癖のやうに肩を動つて、甘さうに煙草を燻して、梯階を降りては生徒を教えに行つた。
ある日、高瀬は受持の授業を終つて、學士の教室の側を過つた。學士も日課を濟ましたところであつたが、まだ机の前に立つて何か生徒に說明して居た。机の上には大理石の屑、鹽酸の壜、コップなぞが置いてあつた。蠟燭の火も燃えて居た。學士は手にしたコップをすこし傾げて見せた。炭素がその玻璃板の間から流れると、蠟燭の火は水を注ぎ掛けられたやうに消えた。
高瀬は戸口に立つて眺めて居た。
無邪氣な學生等は學士の机の周圍に集つて、口を開くやら眼を圓くするやらした。學士がそのコップの中へ鳥か鼠を入れると直ぐに死ぬといふ話をすると、それを聞いた生徒の一人がすくつと起立つた。
「先生蟲ぢやいけませんか。」
「えゝ、蟲は鳥なぞのやうに酸素を欲しがりませんからナ。」
問を掛けた生徒は、つと教室を離れて、窓の外の桃の樹の側に姿を顯した。
「ア、蟲を取りに行つた。」
と窓の方を見る生徒もある。庭に出た青年は櫻の枝の蔭を尋ね廻つて居たが、間もなく戻つて來て、捕へたものを學士に勸めた。

「蜂ですか。」と學士は氣味惡さうに言つた。

「怒つてる――螫すぞ〳〵。」

と口々に言ひ騷いで居る生徒の前で、學士は身を反らして、螫されまいとする樣子をした。蜂はコップの中へ押し入れられた。それを見た生徒等も意味もなく笑つた。「死んだ、死んだ、」と言ふものもあれば、「弱い奴」と言ふものも有つた。蜂は眞理を證するかのやうに、コップの中でグル〳〵廻つて、身を悶えて、死んだ。

「最早マイりましたかネ。」と學士も笑つた。

間もなく學士は高瀨と一緒に成つた。二人が教員室の方へ戻つて行つた時は、誰もそこに殘つて居なかつた。櫻井先生の室の戸も閉つて居た。

正木大尉も歸つた後だつた。學士は幹事室に預けてある自分の弓を取りに行つて、復た高瀨の側へ來た

「奈何です、弓は。是節はあまり御響きに成りませんネ。」

誘ふやうに言ふ學士と連立つて、高瀨はやがて校舍の前の石段を降りた。

生徒も大抵歸つて行つた。音吉が獨り殘つて教室々々を掃除する音は餘計に周圍をヒッソリとさせた。音吉の妻は子供を背負ひながら夫の手傳ひに來て、門に近い教室の内で働いて居た。

學士は親しげな調子で高瀨に話した。

「音さんの細君はもと正木先生の許に奉公して居たんですッてネ。音さんも先生の家の畠を造りに行く

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うちに、畢竟出來たんてせう……先生があの二人を夫婦にしてやつたんてせうネ。」

二人が塵拂の音のする窓の外を通つた時は、岩間に咲く木瓜のやうに紅い女の顏が玻璃の内から映つて居た。

新緑の頃のことて、塾のアカシヤの葉は日にチラ／＼する。薮のやうに茂り重なつた細い枝は見上るほど高く延びた。

高瀬と學士とは懷古園の方へ並んて歩いて行つた。學士は弓を入れた袋や、弓掛、松脂の類を入れた鞄を提げた。古い城址の周圍だけに、二人が添ふて行く石垣の上の桑畠も往昔は嚴しい屋敷のあつたといふ跡だ。鐵道のために種々に變へられた、砂や石の盛り上つた地勢が二人の眼にあつた。

馬に乘つた醫者が二人に挨拶して通つた。土地に殘つた舊士族の一人だ。

學士は見送つて、『あの先生も鷄に、馬に、小鳥に、朝顏——何でもやる人てす。菊の頃には菊を作るし。よく何處の田舍にも彼樣いふ御醫者が一人位はあるもんてす。「……なアに、他の奴等は、ありや醫者ぢやねえ、藥賣だ、……とても、話せない……」なんて、エライ氣焔だ。ても面白い氣象の人て、近在へても行くと、藥代が無けりや畠の物ても何ても可いや、慾が出來たら提けて來い位に言ふものですから、百姓仲間には受が好い。奇人てすネ。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

左様いふ學士も維新の戰爭に出た經歷のある人で、十九歳で初陣をした話がよく出る。塾では、正木大尉はもとより、櫻井先生も舊幕の旗下の一人だ。

懷古園とした大きな額の掛つた城門を入つて、二人は青葉に埋れた石垣の間へ出た。その邊は晝休みの時間などに塾の生徒のよく遊びに來るところだ。高く築き上げられた、大きな黒ずんだ石の側面はそれに附着した古苔と共に二人の右にも左にもあつた。

舊足輕の一人が水を擔いで二人の側を會釋して通つた。

矢場は正木大尉櫻井先生などが發起で、天主臺の下に小屋を造つて、楓、欅などの綠に隱れた、極く靜かな位置にあつた。丁度そこで二人は大尉と體操の教師とに逢つた。まだ他の顏觸も一人二人見えた。一時は塾の連中が擧つてそこへ集つたことも有つたが、次第に子安の足も遠くなり、櫻井先生もあまり顏を見せない。高瀨が園内の茶屋に預けてある弓の道具を取りに行つて來て學士に交際ふといふは彼としてはめづらしい位だ。

『そも〳〵大弓を始めてから明日で一年に成ります』と仲間うちでは遲く始めた體操の教師が言つた。

『一年の御稽古でも、しばらく休んで居ると、まるで當らない――なんだか冗談のやうですナ』。强弓をひく方の大尉も笑つた。

何となく寂びれて來た矢場の中には、古城に滿ち溢れた荒廢の氣と、鳴を潛めたやうな松林の靜かさとに加えて、そこにも一種の沈默が支配して居た。皮の剝げたほど古い欅の若葉を通して、淺間一帶の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大きな傾斜が五月の空に横はるのも見えた。矢場の後にある桑畠の方からはサクを切る百姓の鍬の音も聞えて來た。そこは灌木の藪の多い谷を隔てゝ、大尉の住居にも近い。

學士は一番弱い弓をひいたが、熱心てよく當るやうに成つた。的も自分て張つたのを持つて來て、掛け替えに行つた。

「こりや難いた。尺二てすぜ。しつかり御頼申しますぜ」。と大尉は新規な的の方を見て矢をつがつた。

「ポッン」。と體操の教師は混返すやうに。

「左樣はいかない」。

大尉は弓返りの音をせさて、神經的に笑つて、復た沈鬱な無言に返つた。

桑畠に働いて居た百姓もそろ〳〵歸りかける頃迄、高瀨は皆なと一緒に時を送つた。學士はそこに好い隱れ家を見つけたといふ風で、愛藏する鷹の羽の矢が白い的の方へ走る間、一切のことを忘れて居るやうてあつた。

大尉等を園内に殘して置いて、學士と高瀨の二人は復た元來た道を城門の方へとつた。

途中て學士は思出したやうに、

「……私共の勇のやつが、あれて子供仲間ぢやナカ〳〵相撲が取れるんてすとサ。此頃もネ、弓の弦を褒美に貰つて來ましたがネ、相撲の方の名が可笑しいんてすよ。何だつて聞きましたら——岡の鹿」。

トボケて學士は舌を出して見せた。高瀨も子供のやうに笑出した。

「兄のやつも名前が有るんですよ。貴様は何とつけたと聞きましたら、父さんが弓が御好きだから、よく當るやうに、矢當りとつけましたとサ。矢當りサ。子供といふものは眞實に可笑しなものですネ」。

斯ういふ話を高瀨に聞かせながら歸つて行くと、丁度城門のあたりて、學士は弓の仲間に行き逢つた。舊士族の一人だ。斯の人は千曲川の谷の方から網を提げてスゴ／＼と戻つて來るところだつた。

「此節は弓も御廢してサ」。

とその人は元氣な調子て言つて、更に語を繼いて、

「もう私は士族は駄目だといふ論だ。小諸てすこし骨ッ柱のある奴は塾の正木ぐらゐなものだ。」

學士と高瀨はしばらくその人の前に立つた。

「御覽なさい、御城の周圍にはいよ／＼滅亡の時期がやつて來ましたよ……これて二三年前までは、川へ行つて見ても鮎やハヤ(鮠)が捕れたものてサ。いくら居なくなつたと言つても、まだそれても二三年前までは居ました……此節はもう魚も居ません……この松林なぞは、へえもう、疾くに人手に渡つて居ます……」

口早に言つてサッサと別れて行く人の姿を見送りながら、復た二人は家を指して歩き出した。實に、學士はユックリ／＼歩いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

烏帽子山麓に寄つた方から通つて來る泉が、田中で汽車に乘るか、又は途次寫生をしながら小諸まで歩くかして、一週に一二度づゝ塾へ顏を出す日は、まだそれでも高瀨を相手に話し込んで行く。斯の畫家は歐羅巴を漫遊して歸ると間もなく眺望の好い故郷の山村に畫室を建てたが、引込んで研究ばかりして居られないと言つては、やつて來た。

高瀨は斯の人が來ると、百姓畫家のミレエのことをよく持出した。そして泉から佛蘭西の田舍の話を聞くのを樂みにした。高瀨は泉が持つて居る種々なミレエの評傳を借りて讀み、時にはその一節を泉に譯して聞かせた。

「君は田山君が譯したトルストイの「コサツクス」を讀んだことがあるか。僕は非常に愛讀してる。コウカサスの方へ入つて行く露西亞の青年が寫してあるネ。結局、百姓は百姓、自分等は自分等といふやうな主人公の嘆息であの本は終つてるが、吾儕にも矢張彼樣いふ氣分のすることがあるよ。僕なぞはこれで隨分百姓は好きな方だ。生徒の家へ行つて泊まつて見たり……人に話し掛けて見たり……まあいろんな機會を見つけて、音さんの家の蒟蒻の煮付まであそこの隱居やなんかと一緒に食つて見た……どうしてもまだ百姓の心には入れないやうな氣がする」。

斯う高瀨は泉に話すこともあつた。

相變らず皆な默つて働いて居る塾の方から、高瀨は家へ歸らうとして、午後の砂まじりの道を歩いた。停車場前へ出た。往來の兩側には名物うんどん、牛肉、馬肉の旗、それから善光寺詣の講中のビラなぞ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が若葉の頃の風に嬲られて居た。ふと、その汽車の時間表と、ビイルや酒の廣告と、食物をつくる煙なぞのゴチヤ〳〵した中に、高瀬は學士の笑顔を見つけた。

學士は「ウン、高瀬君か」といふ顔付て、店頭の土間に居る稼ぎ人らしい内儀さんの側へ行つた。

「ふ内儀さん、今日は何か有りますかネ」。

と尋ねて、一寸そこへ來て立つた高瀬と一緒に汽車を待つ客の側に腰掛けた。

極く服装に關はない學士も、その日はめづらしく瀟洒なネクタイを古洋服の胸のあたりに見せて居た。そして高瀬を相手に機嫌よく話した。どうかすると學士の口からは軽い佛蘭西語なぞが流れて來た。

「そこはあまり端近です。まあ奥の方へ御通りなすつて――」

と亭主に言はれて、學士は四邊を見廻はした。表口へ來て馬を繋ぐ近在の百姓もあつた。知らない旅客、荷を負つた商人、草鞋掛に紋付羽織を着た男なぞが是方を覗き込んでは日のあたつた往來を通り過ぎた。

「廣岡先生が上田から御通ひなすつた時分から見やすと、御蔭で吾家でもいくらか廣くいたしやした」

斯う内儀さんも働きながら言つた。

そのうちに學士の誂へた銚子がついて來た。建増した奥の方の部屋に小さなチヤブ臺を控えて、高瀬は學士とさしむかひに坐つて見た。一口やるだけの物がそこへ並んだ。

學士は斯の家の子のことなぞを親達に尋ねながら、手酌で始めた。

「高瀨君、まあ話して行つて下さいナ。こゝは心易い家でしてネ、それにお内儀さんがあの通り如才ないてせう、つい前を通ると斯樣なことに成つちまうんです」。

「私も小諸へ來ましてから、いくらかお酒が飮めるやうに成りました」。

「てせう。一體に斯の邊の人は强酒です。どうしても寒い國の故でせうネ。これで塾では誰が强いか。正木さんも强いナ」。

　高瀨は酒が欲しくないと言つて唯話相手に成つて居た。彼は學校通ひの洋服のポケットから田舍風な皮の提げ煙草入を取出した。都會の方から來た頃から見ると、髮なぞも長く延ばし、憂鬱な眼付をして、好きな煙草を燻し〳〵學士の話に耳を傾けた。

「どうてせう、高瀨君、今度塾へ御願ひしました伜の奴は。あれて弟と違つて、性質は溫順な方なんてすがネ。彼は小學校に居る時代から圖畫が得意てして、その方ては何時でも甲を貰つて來ましたよ。私が伜に、お前は何に成るつもりだッて聞きましたら、僕は大きく成つたら、泉先生のやうに成るんだなんて……あれて物に成りませうか……」

　學士はチビリ〳〵やりながら、言葉を繼いた。

「妙なもので、家内はまた莫迦に弟の方を可愛がるんです。弟の言ふことなら何でも聞く。私がそれぢや不可と言ふと、そこで何時でも言合てサ……家内が、父さんは繁の贔顧ばかりして居る、一體父さんは甘いから不可、だから皆な言ふことを聞かなくなつちまうんだ、なんて……兄の方は弱いてせう、つい

私は弱い方の肩を持つ……」

學士は頬と言はず額と言はず顏中手拭で拭き廻した。

「しかし、高瀬君、どうして斯樣なに御懇意にするやうに成つたかと思ふやうですネ……貴方のところでも、今、お子さんはお二人か……實際、子供は骨が折れますよ。お二人位の時はまだそれでも宜う御座んす。私共を御覧ない、あの通りウヂヤ〳〵居るんですからネ……加に、大飯食ひばかり揃つて居て』と言ひかけて、學士は思ひ出したやうに笑つて『まさか、子供に向つて、そんなに食ふな、三杯位にして控えて置けなんて、親の身としては言へませんからナ……」

包み隱しの無い話は高瀬を笑はせた。學士は更に、

「ホラ、男の下に女の兒が居ませう。上田で生れた兒です……眞實に親の言ふことなぞは聞かない……苦しい時代に出來た兒は彼樣いふものかと思ひますネ……ウッチャリ放しに育つた兒ですからネ……子なぞに關つては居られなかつたんです……しかし、考へて見ると、私の家内もよくやつて來ましたよ。貧苦に堪える力は家内の方が反つて私より強い……」

しばらく石のやうな沈默が續いた。そのうちに微かな酔が學士の顏に上つた。學者らしい長い眉だけホンノリと紅い顏の中に際立つて斑白に見えるやうに成つた。學士は樂しさうに兩手や身體を動かして、胡座にやつたり、座り直したりしながら、高瀬の方を見た。そして話の調子を變へて、

「左樣言へば、佛蘭西の言葉といふものは妙なところに洒落を含んでますネ』。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と言つて、二三の連がつた言葉を巧みに發音して聞かせた。
「私も一つ、先生のお弟子入をしませうかネ」と高瀬が言つた。
「え、すこし御遣りなさらないか」。
「今私が讀んでる小說の中などには、時々佛蘭西語が出て來て困ります」。
「ほんとに、御一緒に一つ遣らうぢやありませんか」。
佛蘭西語の話をする時ほど、學士の眼は華やかに輝くことはなかつた。
やがて高瀬は斯の家に學士を獨り殘して置いて、相生町の通りへ出た。彼が自分の家まで歩いて行く間には、幾人となく田舍風な挨拶をする人に行き逢つた。長い鬚を生した人はそこにもこゝにも居た。

休みの日が來た。
高瀬が馬場裏の家を借りて居ることは、最早假の住居とも言へないほど長くなつた。彼は自分のものとして自由にその日を送らうとした。
南の障子へ行つて見た。濡緣の外は落葉松の垣だ。風雪の爲に、垣も大分破損んだ。每年聞える寂しい蛙の聲が復た水車小屋の方からその障子のところへ傳はつて來た。
北の緣側へ出て見た。腐りかけた草屋根の軒に近く、每年虫に食はれて弱つて行く林檎の幹が高瀬の眼

に映つた。短い不恰好な枝は、その年も若葉を着けた。微かな甘い香がプンと彼の鼻へ來た。彼は縁側に凭れて、五月の日のあたつた林檎の花や葉を見て居たが、妻のお島がそこへ來て何氣なく立つた時は、彼は中人病人のやうな、逆上せた眼付をして居た。

「なんだか、俺は――氣でも狂ひそうだ」。

と串談らしく高瀬が言ふと、お島は縁側から空を眺めて、

「髪でも刈つて被入しつたら」。

と輕い返事をした。

　急に大きな蜜蜂がブーンといふ羽の音をさせて、部屋の中へ舞ひ込んで來た。お島は急いで晝寢をして居る子供の方へ行つた。庭の方から入つて來た蜂は表の方へ通り拔けた。

「鞠ちやんは奈何したらう」。と高瀬が斯の家で生れた姉娘のことを聞いた。

「屋外で遊んでます」。

「また大工さんの家の娘と遊んでゐるぢやないか。彼の娘は實に驚いちやつたあんな荒い子供と遊ばせちや困るナア」。

「私も左樣思ふんですけれど、泣かせられるくせに遊びたがる」。

「今度誘ひに來たら、斷つちまへ。――吾家へ入れないやうにしろ――眞實に、串談ぢや無いぜ」。

夫婦は互に子供のことを心配して話した。

血氣壯んなものには靜止して居られないやうな陽氣だつた。高瀨はしばらく士族地への訪問も怠つて居た。しかし其日は塾の同僚を訪ふよりも、足の向くまゝに、好きな田圃道を歩き廻らうとした。午後に、彼は家を出た。

岩と岩の間を流れ落ちる谷川は到るところにあつた。何度歩いても飽きない道を通つて、赤坂裏へ出ると、青麥の畠が彼の眼に展けた。五度熟した麥の穂は復た白く光つた。土壁、白壁の並び續いた荒町の裏を畠づたひに歩いて、やがて小諸の町はづれにあたる與良町の裏側へ出た。非常に大きな石が畠の間に埋まつて居た。その邊で、彼は野良仕事をして居る町の青年の一人に逢つた。

最早青年とも言へなかつた。若い細君を迎へて竈を持つた人だ。しばらく高瀨は畠側の石に腰掛けて、その知人の畠を打つのを見て居た。

その人は身を斜めにし、うんと腰に力を入れて、土の塊を掘起しながら話した。風が來て青麥を渡るのと、谷川の音と、その間には蛙の鳴聲も混つて、どうかすると二人の話はとぎれ〳〵に通ずる。

「櫻井先生や、廣岡先生には、せめて御住宅ぐらゐを造つて上げたいのが、私共の希望なんですけれど……町のために御苦勞願つて……」

とその人は畠に居て言つた。

別れを告げて、高瀨が戻りかける頃には、壯んな蛙の聲が起つた。大きな深い千曲川の谷間はその鳴聲で滿ち溢れて來た。飛驒境の方にある日本アルプスの連山にはまだ遠く白雪を望んだが、高瀨は一つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

場處に長く立つてその眺望を樂まうともしなかつた。不思議な寂寞は蛙の鳴く谷底の方から匍ひ上つて來た。恐しく成つて、逃げるやうに高瀬は妻子の方へ引返して行つた。

「父さん」。

と呼ぶ子供を見つけて、高瀬は自分の家の前の垣根のあたりて鞠子と一緒に成つた。

「鞠ちやん、吾家へ行かう」。

と慰撫めるやうに言ひながら、高瀬は子供を連れて入口の庭へ入つた。そこには畠をする鍬なぞが隅の方に置いてある。お島は上り框のところに腰掛けて、二番目の女の兒に乳を呑ませて居た。

「鞠ちやんは、先刻姉や(下婢)と一緒に懷古園へ遊びに行つて來ました」。

とお島は夫に話して、復た乳呑兒の顏を眺めた。その兒は乳房を押へて飲むほどに成身して居た。

「俺にもお呉れやれ」。と鞠子は母が口をモガ〳〵させるのに目をつけた。

「オンになんて言つちや不可の。ね。私に頂戴ッて」。

お島はなぐさみに鰑を嚙んで居た。乳呑兒の乳を放させ、姉娘に言つて聞かせて、爐邊の戸棚の方へ立つて行つた。

「さあ、バン上げるから、お出」。と彼女は娘を呼んだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「うゝん、鞠ちやんパンいや——錫」。
と鞠子は首を振つたが、間もなく母の傍へ行つて、親子でパンを食つた。
「鞠ちやんに呉れる〳〵ツて言つて、皆な母ちやんが食つて了ふ」。と鞠子は甘へた。
斯の光景を笑つて眺めて居た高瀬は自分の方へ來た鞠子に言つた。
「これ、惡戯しちや不可よ」。
「馬鹿、やい」。と鞠子はあべこべに父を嘲つた。——それが極く尋常なやうな調子で。
高瀬は歎息して奥へ行つた。お島が茶を入れて夫の側へ來た時は、彼は獨り勉强部屋に座つて居た——何事もせずに唯、座つて居た。
「なんだか俺は心細く成つて來た。仕方が無いから、斯うして座つて見てるんだ」。
と高瀬は妻に話した。
その日の夕方のことであつた。南の戸袋を打つ小石の音がした。誰か屋外から投げ込んでよこした。
「誰だ」。
と高瀬は障子のところへ走つて行つて、濡縁の外へ出て見た。
「人の家へ石など放り込みやがつて——誰だ——惡戯も好い加減にしろ——眞實に——」
忌々しさうに言ひながら、落葉松の垣から屋外を覗いた。惡戯盛りの近所の小娘が、親でも泣かせそうな激しい眼付をして——そのくせ、飛んだ器量好しだが——横手の土塀の方へ隠れて行つた。

「どうして斯の邊の娘は、斯う荒いんだらう。男だか女だか解りやしない」。

斯う高瀬は濡縁のところから、垣根越しに戸外に立つて居るお島に言つた。

「大工さんの家の娘とはもう遊ばせないツて、先刻誘ひに來た時に斷りましたら、今度は鞠ちやんの方から出掛けて行きました……必と喧嘩でもしたんでせう……石なぞを放つて……女中でも子守でも斯の邊の女は、そりや氣が荒いんですよ……」。

お島は奈何することも出來ないやうな調子で言つて、夕方の空を眺めながら立つて居た。暮色が迫つて來た。

「鞠ちやん、吾家へお入り」。と彼女はそこいらに出て遊んで居る子供を呼んだ。

「オバケ來るから、サ吾家にお出」。と井戸の方から水を汲んで來た下女も言葉を掛けて通つた。

山家の娘らしく成つて行く鞠子は、とは言へ親達を泣かせるばかりでも無かつた。夕飯後に、鞠子は人形を抱いて來て親達に見せた。そして、「お一つ、笑つて御覽」。なぞと言つて、その人形をアヤして見せた。

「かアさん、かさん——やくらか、やくや——ほうちさ、やくやくう——おんこしやこ——もこしやこ——」

何處で教はるともなく、鞠子は斯樣なことを覺えて來て、眠る前に家中踊つて歩いた。

五月の町裏らしい夜は次第に更けて行つた。お島の許へ手習に通つて來る近所の娘達も、提灯つけて

歸つて行つた。四邊には早く戸を閉めて寢る家も多い。沈まり返つた屋外の方で、高瀨の家のものは誰の聲とも一寸見當のつかない呼聲を聞きつけた。

「高瀨君――」

「高瀨、居るか――」

聲は垣根の外まで近づいて來た。

「ア」。

と高瀨は聞耳を立てゝ、そこにマゴ〳〵して震へて居る妻の方へ行つた。お島が庭口へ下りて戸を開けた時は、廣岡學士と體操敎師の二人が暗い屋外から舞ひ込むやうに入つて來た。

高瀨は洋燈を上り端のところへ運んだ。馬場裏を一つ驚かして呉れやうと言つたやうな學士等の紅い磊落な顏がその灯に映つた。二人とも脚絆に草鞋掛といふ服裝だ。

「これ、水でも進げナ」。

と高瀨が妻に吩附けた。

お島はやゝ安心して、勝手口の方から水を持つて來た。學士は身體の置き處も無いほど醉つて居たが、でも平素の心を失ふまいとする風で、朦朧とした眼を瞠つて、そこに居る夫婦の顏や、洋燈に映るコップの水なぞをよく見やうとした。

學士のコップを取らうとする手は震へた。お島はそれを學士の方へ押しすゝめた。

「どうも失禮……今日は二人で山遊びに出掛けて……酩酊……奥さん、申譯がありません……」

學士は上り框のところへ手をついて、正直な、心の好さそうな調子で、詫びるやうに言つた。

體操の敎師は磊落に笑出した。學士の肩へ手を掛けて、助けて行かうといふ心づかひを見せたが、その人も大分上機嫌で居た。

よろ〳〵した足許で、復た二人は舞ふやうに出て行つた。高瀬は屋外まで洋燈を持出して、暗い道を照らして見せたが、やがて家の内へ入つて見ると、餘計にシーンとした夜の寂寥が殘つた。

何となく荒れて行くやうな屋根の下で、其晩遲く高瀬は枕に就いた。時々眼を開いて見ると、部屋の内まで入つて來る餓えた鼠の朦朧と、しかも黑い影が枕頭に隱れたり顯れたりする。時には、自分の身體にまで上つて來るやうな物凄い恐怖に襲はれて、眼が覺めることが有つた。深夜に、高瀬は妻を呼起して、二人で臺所をゴト〳〵言はせて、捕鼠器を仕掛けた。

その年の夏から秋へかけて、塾に取つては種々な不慮の出來事があつた。廣岡學士は荒町裏の家で三月あまりも大患ひをした。誰が見ても助かるまいと言つた學士が危く一命を取留めた頃には、今度は正木大尉が倒れた。大尉は奥さんの手に子供衆を遺し、仕掛けた塾の仕事も半途で亡くなつた。大尉の亡骸は士族地の墓地に葬られた。子供衆に遺して行つた多くの和漢の書籍は、親戚の立會の上で、後仕末

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のために羅賣に附せらた。

櫻井先生の長い立派な鬚は目立つて白くなつた。毎日、高瀨は塾の方で、深い雪の積つて行くやうな先生の鬚を眺めては、また家へ歸つて來た。生命拾ひをした廣岡學士がよく〃〃酒に懲りて、夏中奥さん任せにしてあつた朝顔棚の鉢を片付け、種の仕分をする時分に成ると、高瀨の家の屋根へも、裏の畠[illegible]は垣想放しい霜が來た。凩も來た。土も、岩も、人の皮膚の色までも、灰色に見えて來た。日光そのものすら、見える日があつた。そのうちに思ひがけない程の大雪がやつて來て、戸を埋めた。北側の屋根には一尺ほども消えない雪が殘つた。鷄の聲まで遠く聞えて、何となくすべてが引被らせられたやうに成つた。灰色の空を通して日が南の障子へ來ると、雪は光を含んでギラ〃〃輝く。軒から垂れる雫の音は、日が一日單調な、佗しい響を傳へて來た。

冬籠りする高瀨は火鉢にかじりつき、お島は炬燵へ行つて、そこで凍える子供の手足を暖めさせた。家の外に溶けた雪が復た積り、顯はれた土が復た隱れ、日の光も遠く薄く射すやうに成れば、二人は子供等と一緒に半ば凍りつめた世界に居た。雲ともつかぬ水蒸氣の群は細線の群合のごとく寒い空に懸つた。劒のやうに北側の軒から垂下る長い光つた氷柱を眺めて、漸の思で夫婦は復た年を越した。

更に寒い日が來た。北側の屋根や庭に降つた雪は凍つて、連日溶くべき氣色もない。氷柱は二尺、三尺に及ぶ。お島が爐邊へ行つて子供に牛乳を呉れやうとすると、時にはそれが淡い綠色に凍つて、子供に飮ませることも出來ない。臺處の流許に流れる水は皆な氷りついた。貯へた野菜までも多く凍つた。

水汲に行く下女なぞは頭巾を冠り、手袋をはめ、寒さうに手桶を提げて出て行くが、それが歸つて來て見ると、手の皮膚は裂けてところ／＼紅い血が流れた。斯うなると、お島は外聞なぞを關つて居られなく成つた。どうかして子供を凍えさせまいとした。部屋々々の柱が凍み割れる音を聞きながら高瀨が讀書でもする晩には、寒さが彼の骨までも滲み徹つた。お島はその側で、肌にあてゝ、子供を暖めた。斯の長い／＼寒い季節を縮こまつて、あだかも土の中同樣に住み暮すといふことは、一冬でも容易でなかつた。高瀨は妻と共に春を待ち侘びた。

絶頂に達した山の上の寒もいくらかゆるんで來た頃には、高瀨も漸く蟲のやうな眠から匍出して、復た周圍を見廻すやうになつた。その年の寒さには、塾でも生徒の中に一人の落伍者を出した。遙かに復活るやうな暖い雨の降る日、泉は亡くなつた青年の死を弔はうとして、わざ／＼小縣の方から汽車でやつて來た。その青年は、高瀨も四年手掛けた生徒だ。泉と連立つて、高瀨はその生徒の家の方へ歩いて行つた。

赤坂といふ坂の町を下りやうとする途中で、廣岡學士も一緒に成つた。

『なにしろ、十年來の寒さだつた。我輩なぞはよく凍え死なゝかつたやうなものだ。若い者だつて斯の寒さぢや堪りませんナ。』

と學士は言つて、汚れた雪の上に降りそゝぐ雨を眺め／＼歩いた。

漸く顯れかけた暗い土、黄ばんだ竹の林、まだ枯々とした柿、李、其他三人の眼にある木立の幹も枝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も皆な雨に濡れて、黒々と穢い寢恍顔をして居ない者は無かつた。

大きな洋傘をさしかけて、坂の下の方から話し〳〵やつて來たのは、子安、日下部の二人だつた。塾の仲間は雨の中で一緒に成つた。

有望な塾の生徒を、しかも十八歳で失つたといふことは、そこへ皆なの心を集めた。暮に兄の仕立屋へ障子張の手傳ひに出掛け、それから急に床に就き、熱は肺から心臟に及び、三人の醫者が立會て心臟の水を取つた時は四合も出た。四十日ほど病んで死んだ。斯う學士が立話をすると、土地から出て植物學を專攻した日下部は亡くなつた生徒の幼少い時のことなぞを知つて居て、十歳の頃から病身な母親の世話をして、朝は自分で飯を炊き母の髮まで結つて置いて、それから小學校へ行つた……病中も、母親の見えるところに自分の床を敷かせてあつた、と話した。

式は生徒の自宅であつた。そこには櫻井先生を始め、先生の奥さんも見えた。正木未亡人も部屋の片隅に座つて、頭を垂れて居た。塾の同窓の生徒は狹い庭に傘をさしかけ、縁側に腰掛けなぞして居た。

亡くなつた青年が耶蘇信者であつたといふことを、高瀨はその日初めて知つた。黒い布を掛け、青い十字架をつけ、牡丹の造花を載せた棺の側には、櫻井先生が司會者として立つて居た。讃美歌が信徒側の人々によつて歌はれた。正木未亡人は宗教に心を寄せるやうに成つて、先生の奥さんと一緒に讃美歌の本を開けて居た。先 生は哥林多後書の第五章の一節を讀んだ。亡くなつた生徒の爲に先生が吊ひの言葉を述べた時は、年をとつた母親が聖書を手にして泣いた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

士族地の墓地まで、しと〳〵降る雨の中を高瀬は他の同僚と一緒に見送りに行つた。松の多い靜かな小山の上に遺骸が埋められた。墓地でも讃美歌が歌はれた。そこの石塔の側、こゝの松の下には、同級生などが佇立んで、斯の光景を眺めて居た。

ある日、薄い色の洋傘を手にしたやうな都會風の婦人が馬場裏の高瀬の家を訪ねて來た。この流行の風俗をした婦人は東京から來たお島の友達だつた。最早山の上でもすつかり雪が溶けて、春らしい溫暖な日の光が青い苔の生えた草屋根や、毎年大根を掛けて干す土壁のところに映つて居た。

丁度、お島は手拭で髮を包んで、入口の庭の日あたりの好いところで餘念なく張物をして居た。彼女の友達がそこへ來た時は、『これがお島さんか』といふ顏付をして、暫く彼女を眺めたまゝで立つて居た。お島は急いで張物板を片付け、冠つて居た手拭を取つて、六年ばかりも逢へなかつた舊の友達を迎へた。

『まあ、岡本さん――』

とその友達は、お島がまだ娘で居た頃の姓を可懷しさうに呼んだ。

一汽車待つ間、話して、お島の友達は長野の方へ乘つて行つた。その日は日曜だつた。高瀬は淺黄の股引に、尻端を折り、腰には手拭をぶらさげ、憂欝な顏の中に眼ばかり光らせて、他から歸つて來た。お島は勝手口の方へ自慢の漬物を出しに行つて來て、爐邊で夫に茶を勸めながら、訪ねて呉れた友達の話をして笑つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「私が面白い風俗をして張物をして居たもんですから、吃驚したやうな顔してましたよ……」

「そんなに皆な田舍者に成つちやつたかナア。」

と高瀬も笑つて、周圍を見廻した。煤けた壁のところには、歳暮の景物に町の商家で出す暦付の板繪が去年のやその前の年のまで、子供の眼を悦ばせるために貼付けて置いてある。

「でも、貴方だつて、小諸言葉が知らずに口から出るやうですよ。人と話をして被入つしやるところを側から聞いてますと――「ようごわす」だの――「めた〳〵」だの――」

「お前もナカ〳〵隅へは置けなく成つたよ。」

二人とも鼻へ皺を寄せて笑つた。

「お前のお友達は、それで何て言つたネ。」と高瀬が聞いた。

「旦那さんが今洋行してますから、ちと高瀬さんにも遊びに被入しつて下さいつて。」

「俺にか。旦那さんが居るから遊びに來いツてんなら解つてるが、旦那さんが留守だから遊びに來いは可笑しいぢやないか。」

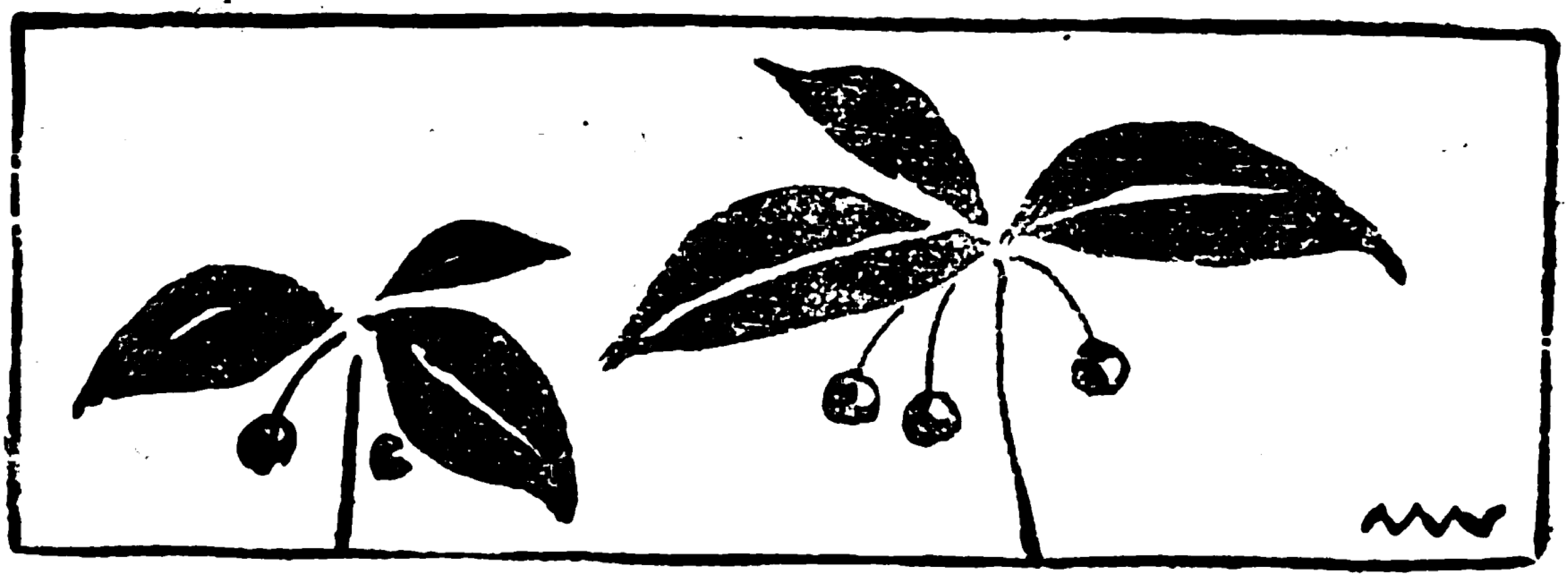
復た二人は笑つた。

鞠子は大工さんの家の娘にも劣らないほど、いたずらに成つた。北風が來れば、樫の葉が直ぐ鳴るやうな調子で、

「畜生ッ。打つぞ。」

髮を振つて、娘は遊び友達の方へ走つて行つた。（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



凶兆

鈴木三重吉

乙也が小母と小さい下女とを伴れて、長い仕事に鎖されてゐた、忘れがたい村を引き上げて來たのは、お民が出て行つてから五六ヶ月もたつた後であつた。お民が去つてから間もなく、たつた一人の目の見へない祖母が床につき出してたうとその村で亡くなつた。お民はあゝして出るには出たけれど、情ない事に腹に子供が止つてゐたので、またごた〳〵と息の黒くなるやうな面倒が附き纏うた。

さういふ色んな事が續いたりして、長い仕事が濟んでも乙也の頭の休まる間とてはなかつた。お民の事については、自分だけはどんな厭な目を見やうともそれは受くべき至當の刑罰だけれど、此事について、何から何まで一々小母が

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

交渉してくれなければならなかつたのが辛かつた。考へると一人の祖母をあんな村へつれてつて死なせたのも、自分の罪のやうに責められる。いろ〳〵盡し足りなかつた事もあつて、いつまでも心持がよくない。子を姙んでゐる女や、その母たちに對しても、結局は自分の罪を悔いずにはゐられなかつた。

女は歸つてから此二月まで母のところにゐたのだけれど、追々姙娠の狀態が人目にも附くやうになつては、世間體があるので、どこか他處へ出て始末をつけなければならなくなつた。小母はこちらからそのやうな事にまで一々厄介を見て、自身の從妹に當るものが、お民のゐるところから汽車で五時間ばかりかゝる××に行つてゐるのへ手紙を出して、お民を子が生れるまで預つてくれるやうに頼んだのである。小母の話では、その家は何かの工場へでも勸めてゐるらしく、二三人の子供もあつて、餘り裕福でもないらしかつた。それでも先方は、自分の身内のものが乙也のところで養はれてゐるのにくらべても、そのくらゐの世話をするのは何んでもない事だとて快く引き受けてくれ、とにかく何んにも案じないでゐてくれと親切な手紙をよこした。お民は二月からそこの家の厄介になつて、お針などを敎はりつゝ出産を待つてゐるのである。乙也は自分が平素小母に對してどんなにして來てゐるかを考へれば、そこの家でそんなにまで言つてくれるのが何だか向を欺いて面倒を掛はせてゐるやうに氣が咎るけれど、此小母の從妹がゐてくれたので、どんなにか好い都合であつた。乙也は小母の手を經て、事がすむまでの何くれの費用だけは見積つて送つた。

こんな事につけて何かと自分のこれ迄の事をさらへ出せば、自分には一つも取るところがないやうで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

厭になる。自分のした色んな罪の蔭が、まだ切るにも切られないで纏ひついてゐるのを考へると、くさ〳〵する。

乙也はもうこれて、こちらへ引き上げて來たのを區劃として、自己の内外の生活を洗ひかへて了ひたいと考へた。もうこれまでの事の悔や、いろ〳〵厭はしい自分だつた事もすつかり忘れて了つて、自分の持つてゐる、取るべき性情にのみ生きたいやうな心持になつてゐた。――

下女と三人は、てんでに持ち得るだけの荷物を提げて、山の手線の小さい驛に下りた。

五月の末の曇つたやうな午後で、どんよりとした日影は目に入るものゝすべてを小寂しく濁らせてゐた。乗り降りする人も、自分たちの外には一人もなかつた。生れてはじめて、自分の村を出たばかりのお力は、目の下に果てもなく廣がつてゐる屋根の續きや、いくつともなく突き出た大きな煙筒の群から、濃い黒い煤烟がだく〳〵と上る、黒ずんだ空の色を見る目に、かういふのが自分のこれから住む處だといふ不安と物珍らしさとを注がれたやうに、額際に小さひ汗を滲ませて、人の地面をても通り抜けるやうにして、下の柵外に下ろしてゐる車を傭ひに行つた。

小母は一昨年の冬、あちらへ祖母をつれて行く時に、途中の乗換驛に赤帽かゐなかつたので、小母がいろんな手荷物なぞを二人て抱へ、乙也が洋服の背中に祖母を負うて、よち〳〵とブリッヂを上つて行つた事なぞを思ひ出して、何だか祖母がゐないのが大きな荷物ても忘れて來たやうて變だと言つたが、心てはもつと他の事を考へかけてゐるやうに、出口に佇んてごた〳〵したそこらの町を見下ろしつゝ待

つてゐる。その容子には、かうしてこちらへ出て來るには來たけれど、これからはまたどういふ毎日が開かれて行くのだらうといふ不安が、暗に漂うてゐるやうにも見えるのだつた。乙也は、これだけの事ても何だか小母が、いつも自分とは別々の事を考へてゐるのだといふ事を示すやうな氣がして、物足りないやうな氣に喰はない心持になりかけるのを押へるやうに努めつゝ、小母のさうした氣分を忘れさせたいために、下の町のがたくさした屋根の間に、そちこちとこんもりした青葉が固つてゐる向うを指さして、これから自分たちの這入る家の見當を敎へたりした。小母は此前にたゞ電車でステーションからステーションへ行つた事があるばかりで、まだ東京は一寸も知らないのだつた。小母はそれよりも今度の家の勝手の容子などが氣になるらしく、何事をも措いて水の出口や戸棚の事などをまた聞くのである。

「さうてすか、水は水道ぢやないのてすかのい。力がゐてくれるけまあいゝけど、てはあそこあたりは町ぢやないのてすかのい」。

と、氣を換へればかういふ單純な事を問題にした。かうして出て來はしても、まだこれといふ極つた口もない乙也には、かういふ、コンベンシャンの外には何んにもないやうな小母によつて、また一人くさくするやうな日々を生きるのが、もう目に見えてゐるやうで、窃かに寂しい心持にもなりかける。

見るとお力が四臺の車の先に立つて小急ぎに戻つて來る。お民から讓られた、丈の少し足りないネルの着物に、毛繻子の赤い帶をして、十六とかいへどまだ何んにも別らないナイーブな女心に、たゞ勤め大事と仕へてゐる。髮形も土くさい儘に物裹れてある。いつも自分のまはりに何等の理解といふものも見出

し得ないて、つまりはたゞ一人、うすら淋しい自分自身をのみ見入つてゐなければならない乙也の、からいふどんよりした日の心には、此やうなお力でも、素直な純朴な小鳥のやうに自分に附いてゐてくれるのが、これからのたゞ一つのたよりのやうにさへ思はれた。

三人は車に乘つて町筋へ這入つた。先に立つた一臺にはさし向要るだけのものゝ這入つた行李と、二三枚の蒲團とが積まれてゐた。

此あたりは、たつた近頃水田を埋め立てゝ出來たばかりの町で、古木の多いがた普請に灰色の土ぼこりがざら〱かゝつて、往來には小汚い芥物などが泥まぶれになつて散らかつてゐるやうな處であつた。半分下ろした店の戸に、ぼろけた小供の着物が引つかけてあるだゞ黒い古道屋や、僅かに干魚ばかりを乏しくならべた肴屋なぞが貧しく並んでゐる間を、汚ない荷車や荷馬車ががたびしと土を窪めて通る。小母は自分の前に、洋傘を披げた背中を見せて、邪魔物を避け〱する車上にがた〱と搖られて行くのてあつた。

乙也が借りといた家のある、生垣や立木の多いひつそりしたところへ着くまでには、まだ大分間があつた。

乙也たちは、あちらからすべての荷物が來るまでは、昨夜着て寢た蒲團の外には、間に合はせに買つ

た安七厘と土鍋と小母が行李の間に、紙にくるんで入れて來た庖丁に二つ三つの茶碗や小皿と、それはかりのもので一日二日の間不自由を忍ばなければならなかつた。

ことさらにかういふところを求めたのだつたから、少し不便は不便でも、仕事をする爲には書てさへ物靜かである。世間馴れない小母たちに取つても、氣の置けないのんびりした場處であつた。ぐるりには栗の木なぞが列んで立つてゐた。家は大分黒ずんだ、がさつな普請て、安つぽい厭な唐紙が嵌つてゐたりしたけれど、これまでが、あゝした村の、唯だゞ廣いばかりて、淀んだやうなぼろ〳〵の家にゐたのだつたから、小母は氣分が引きしまつて、明るくなるやうだと言つていそ〳〵しつゝ、間數は少なくても間取が便利よく出來てゐるからなどと、そんな事を言つても解らないやうな顏をして聞いてる下女を相手に、何とか言ひながら、バケツに水を汲んて、そこらを一々拭いて廻るのだつた。小さい二階も二た間附いてゐた。そこはまだ掃除をしない儘なので、乙也は爪立をして、さら〳〵した疊の上を歩きながら、雨戸の半分閉つたなりの小暗い中に、押入の襖を開けて覗いて見たりした。大工を入れてそこらを直してもしたものと見えて、押入の中には鉋屑の切れなぞがそれなりにころがつてゐた。

下へ下りてもまだどこもがらんとしたばかりて何一つないのだから、變に取りとめのないやうな心持がする。

やがて小母は午の仕度に下女をつれて通りへ出た。乙也は中心の疲れ沈んだやうな、空虛なムードをしてごそり〳〵椽側から下りたり上つたりしてゐた。じめ〳〵しく黒ずんだ、稍面積のある土の上に

は、小さい無果花の木が二本植つたばかりで、その外には何んの立木もなかつた。朽ちかけた竹垣の根に、ばら〳〵と生へたどくだみが、淋しい白い花をつけてゐた。かうした飾りのない目の前は、乙也のこれから續けやうとする、色の刺戟のない、單朴なライフに裏附をしやうとしてゐるやうに懷しくも思へた。乙也のかういふムードの下には、脂つこい女の匂ひと、癇障りな無智とに飽き〳〵して、やつと、くだ〳〵しい面倒から遁れ得た安心と、たどぐろい悔や自責の侵入とが、色を交へて沈んでゐた。

乙也は家主から箒を借りて來て、椽側の下にころがつてゐる紙屑なぞを裏口へ掃き出したり、その邊の壁板に腐りかけた針金が釘附けになつてゐるのを捩ぢ切つて除けたりした。垣の外の、家主のところと共用の吸上井戸のぢき傍から、靑い穗の揃つた、一寸した麥畠の一劃になつてゐて、ぐるりに桐の木が植はつてゐた。向ふの、黑い板塀が續く下を、牛乳屋の水色の車が通つて行つた。

臺どころの次の間の、出張つた六疊へ上つて格子窓の障子を開けると、今の麥畠の續きがすぐ下になつてゐる。乙也はそこの柱に何をか貼りつけたあとのあるを、手拭を塗らして來て剝がしたりした。

小母はこの一と間に、持つて來得ただけの二つの行李を披いて、ごた〳〵取りちらしてゐた。その中には、今は、亡くなつた祖母の形見となつてゐる着物なぞが、一まとめにして片寄せてあつた。祖母がよく見えない目を皺めて、丹念にかゞり〳〵してゐた、寄せ切れの色の哀れつぽい珠數袋が、紙に包んで一ばん上に載せてあつた。

そのやうなものを見ると、これまでゐた村での、いろ〳〵の事がしめつぽく目に浮んで來る。自分を

氣づかふやうな暗い目をして、一人さびしげにのそ〳〵來て、自分の仕事をしてゐる後ろから、口を開きたさうにして覗いたりする祖母を、いら〳〵した頭に五月蠅がつて、つけ〳〵小言を言つて叱つては後ではそれがまた氣にかゝるので、窃つと行つて見ると、祖母は、うす暗い一と間に、だれとて取り合つてもくれないやうにたつた一人俯つ伏してゐる。何とかして相手になつて上げたいと思つても、自分の頭にはさういふ餘裕もない。小母は下らない事にぷり〳〵膨れて、何かといへば直ぐに行李を出して括つたりしてゐる。お民は出されて行くと極つてからは、じめ〳〵と、ひねくれたやうに人と口を開かないで、目を泣き膨らして引つ込んでゐる。自分はだれ一人かまつて上げるものもない祖母と、かうしたくさ〳〵する中に、一人氣の腐るやうな仕事に追ひまくれてゐる自分自身とを慘みながら、そこの襖の蔭に立つて祖母を見つゝほろ〳〵とやるせない涙を嚙んだ。——

乙也は今、さうした涙の續きが、まだ目の後ろに溜つてゐるやうな心持に曇らされる。それからそれへと、出した女の事も心に上つて來やうとするのだつた。

乙也はもう女の事は何事も考へたくない。すべてを暗く消し忘れやうとするやうに、氣を換へて再び下へ降りて表口の方へ行つて見る。小さい門の内には、先にゐた人が作つてゐたらしい花壇の跡が、ぐぢや〳〵に掘り返されて、腐つた子供の下駄などがわびしく泥に塗みれてころがつてゐる。そこには低い柘榴の木が乏しい赤い花を附けてゐる。ぐるりには青い草が一面に延びてゐる。乙吉のための五月には、午の日向にも寂しみが青く漂うてゐた。

門口へ出て灰色の往來を見ると、丁度向うから小母とお力が歩きくたぶれたやうに、とこ〳〵かへつて來る。二人とも青物のやうなものや、何かしら容積ばつた包みものなぞを、持ち惡さうに提げてゐる。どうせ入り用の小道具なぞが、ちび〳〵買ひ集められるらしかつた。

みんなは不自由な思ひをして荷物の來るのをばかり待つてゐた。

二日目の夕方、驛まで見にやらせた力が歸つて來て、さき一昨日車で通つた町筋の、小さい運送屋に、うちの荷物が積み上げてあると言つた。十能や柄杓を突つ突き込んで、裸のまゝ繩を紮げられた、瀬戸物の火鉢や、いろんな壞れものも、何の怪我もなしに、下駄なぞの入つた盥なぞと並んで片寄せられてゐたといふ。乙也は日ぐれに湯へ行く序でにそこへ行つて催促して置いた。

歸つて型ばかりに食事を濟ますと、乙也は紙入を懷ろに入れて、電車のある方へ向けて出かけた。こちらへ移つて來たまゝ、動き出るのも物憂いやうで、ぐつたりした小暗いムードに家にばかりごろんとしてゐたが、今宵は、このあたりの淋しい町筋にぽつ〳〵點つた灯影を見ると、何だか、青い瓦斯が水の中の色のやうに漲つた賑やかな市中へ出て、何を繼ひるともない物戀しい心持に、いろんな色の反物なぞのかゝつた、ショー、ウインドーなぞを覗きながら、女たちのちらほら行きかへる都會の夜の中をあてもな

くぶら／＼して見たいやうな氣持にそゝられて來た。考へると、出て來て早々、顏を出して置かなければならないところもそちこちにあつたが人に會ふのは面倒であつた。

乙也は電車に乘つたけれど、どこへ行かうといふ事もまだわからないなりに、向ひに座つてゐる若いおかみさん風の女の、頭や帶やをまじ／＼と見てゐた。何だか義太夫の三味線が聞きたいやうな、または、さつき迄聞いてゐたあとのやうなリヽカルな心持が、寂しく疲れた心の下に烟つてゐた。

やがて乘換場で乘りかへて、珍らしく銀座の方へ來て電車を下りた。

ざわ／＼と往きかふ人ごみの中を、一人だけ別の人のやうな心持にぶら／＼歩いてゐる乙也は、これまでしばらくの間、黒い蔭の外には何物もない、山合ひの村にのみ夜を見てゐた目に、見るものが一々フレッシユに心を引き附けるやうに思へた。歩道のふちに枝を垂れた柳の並木が、青いガスの灯影を受けて、遠くのは、霧に烟るやうに續いてゐる下を、ネルの着物に、いろ／＼の帶を結んだ女たちが、搖れ／＼に通つた。乙也は行きちがふ女の着物だけを刻々に目に入れて、顏はかたはしから忘れ／＼しつゝ、何か買ひたいものを考へ求めるやうな心を包みながら、闇の空の中に正宗の廣告の赤い電氣が、附いたり消えたりする方へ向けて行つた。雜貨を賣る店の窓から、下のペーブメントへレンズを向けて、幻燈のやうに廣告の文字の灯を青く寫したりしてゐるのがあつて、それが手を引かれて通る女の子の白い胸かけに射したりした。

向い側には夜店の灯が低く明つて、人の形が黒く群つて動いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

乙也は或カッフェの窓の中の、眞つ白いテーブルクロースにベースに、挿した赤い西洋花が置かれ、向うに小さつぱりした二人のいてふ返しの女中が、黒い目をして骨牌を引いてゐるのが薄いカーテン越しに目に這入つた。何かあちらの酒が飲んで見たくもなつた。

乙也がまた後がへりをして、這入つてテーブルにつくと、向うにかゝつてゐた女の一人は急いで骨牌を止めて立つて來た。側て見ると、安つぽいなりなぞしたくせに厭につんとしたやうな女であつた。注文した冷たい肉の皿とヰスキーの壜とを持つて來て注いで行くと、再びもとの椅子へかけて編物をはじめる。そこには、青色の壁かけの側に、粗末なピアノが一臺置いてあつた。もう一人の女は目のふちに大きなほくろのある、しめくくりのないやうな表情をした女であつた。

乙也はうすつぺらな、さういふ女たちにはインディフェレントに、テイブルの上の赤い花を見ながらちび〳〵と唇に巵をあてた。かういふところに來て、ざわ〳〵しい町筋の電車の音なぞの間に酒を飲んだりするのも久しぶりであつた。乙也は、これまでいかに寂れたところに黑く暮らしてゐたかに氣がついたやうに、一人淋しい自分のやうな心持がした。

乙也は一人で壜を傾けながら、何だか、自分のさびれた心を托する何物かが欲しいといふやうな事を考へかけた。

自分の欲してゐるタイプの女がどこかに一人ぐらゐはゐるに極つてゐる。弱い自分はどうしても自分の全心を投ずるに足る、女らしい女がゐなくては生き得ないのだといふ事が解つた。たゞ女の上つ皮に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

附帶した色彩や、口と口だけの接吻や、女が自己をすつくり捧げた積りて、死に入るやうな事に倒れても、戰く肉の外に何の意味もないやうな戀には飽きた。目の前に見入つてゐる此赤い西洋花のやうに厚ぼつたい脂つこい戀に引かるるには餘りに心の色調も黑ずんで了つた。もう自分はロマンティックな戀の中に彷徨ふやうな時代の幕が下りて、これからはたゞ食ふためにかせぎ、コンベンシャンに生きて自分の繋累のものを養うつて行く外には何の意味もなく老いるやうな、平凡なライフに降服しなければならなくて來たやうな氣がする。何の色氣もない束ね髮に、行李からぼろ布なぞを出して小供の着物に繼ぎ合せるやうな、世帶負けのした女を側に見る日が、やがては自分を包むのかと思ふと情ないやうな心持がする。それもどんな女と結びつけられて厭々に伴らつてゐるやうな事になるのだらう。――

女が得たい。さういふ黑い目に敗北する前に、しめやかに自分の刻々の心を理解して附いてゐてくれる女が得たい。自分がどんなになつても、どんなにしても、どこまでも自分に喰つ附いて廻るやうな、素直な黑い目をした女が得たい。

乙也は自分が女を焦れてうろついて來たこれまでの日の帳締めをでもするやうに、自分の接したすべての女を掘り集めて見た。はじめて自分が戀を見た女は、自身を縛つてゐるすべての約束に反抗し得ないて、自分を置いて人に嫁して、さま〴〵の不幸を見た揚句、毒を仰いで死にかけたりして、毛の抜けた古人形のやうに剝げ壞れたからだを、今はたゞ子供のためにのみ生きてゐる。自分は今日までも此女との戀の日を忘れる事が出來ない。自分は今てゝも此女を得やうとすれば得られない事はないけれど、そ

れは最早剝げしなびた遺骸に過ぎない。此の女の後に自分が作つた相手は、いづれも、此女と開いた戀の日の續きを見やう、此女の性情の再現を追はうといふ迷ひに過ぎなかつた。自分は相手によつてそのイリユージヤンが壞されたら、相手の缺點をのみ目に見て相手を捨てた。お民は最後に、わが戀した女の妹だのに――それが自分を戀ひて吸ひ附けられるやうに走つて來たのに――とうと自分はそれをも拒けた。――拒けたといふよりも、女が自分を解してくれないイグノランスと、自分に腐つた果實を食はせるやうなそのバルガリテイとが、自分に投じたる最後の女を奪つたのだ。

自分は此女に戀ひてゐた。はじめての女を戀するやうに戀してゐた。女は夜毎に血に燃へて、黑い髮を亂してわが肘に投じた。自分も此女に戀ひ纏はつて、晝は人目を隱れるための私語きに、裏の谷合ひの、丈高き青草の中を分れ〳〵に別け降りつゝ、合歡の木に張る黃色い蜘蛛の、小暗い眠りの床を奪つて口附けに隱れてゐた。さういふ間にも自分の女に語る事は、女となれ、女らしき女となれとにいふ一事であつた。女は溶け入るやうなる目に涙をためて首肯くけれど、自分の腕からはなれて、家人の間に立つ時の女は、ひや〳〵するやうに下卑た性格を披げるのであつた。自身の母へ出す手紙の封じ目に、下手なSといふ字をかいて見たりするやうな一寸した事でも、乙也には、痒くなるやうに安つぽくて厭てたまらなかつた。――

かう思ふと、乙也は、女が言つた事、した事の、さま〴〵の不愉快な記憶が、一時に頭を襲うて來た。あんな女に、何物をか求めやうとして、遂には下らない面倒を浴びた自分の下劣さが、嘲けられるやう

に氣はづかしい――。

こんな事を考へつゝ、自分が今どういふところに來てゐるかを忘れて茫としてゐた乙也は、さつきの厭味つたらしい女中がピアノの蓋を開けて、下手な手に掻き鳴らし出したので我に返つた。何だか下品な活動寫眞にでも這入つてゐるやうでぞく／＼する。乙也はお民の事を考へる自分が餘計に嘲られるやうに不愉快で、逃げるやうに金を拂つて外へ出た。

どこかへ行きたい。氣の利いた上品な女のゐるところへ行きたい。

乙也はあれこれと考へたけれど、二年もこちらにゐなかつたゝめにどこへ行つても、もう顔なじみもないやうな氣がした。行つたところで、どうしてどうなるといふ事も見え透いてゐて拙らない。

仕方がないから、久しぶりで小石川へでも出かけて見やうかといふ氣になる。あの陰氣な女に會ふのは厭だけれど、他に行くべきところもない。或はそれよりも、例のあそこへでも行つて、頽敗した、女の腐をでも見やうかといふ氣にもなりかける。

またあてもなくぶら／＼歩き出した乙也は、いつしか暗い横町へ這入つて、自分の形と闇の空氣とに區別もないやうに寂しい心持をしてとぼ／＼と歩を運んだ。上を見ると、何かの不吉と後悔とを暗示するやうなどす黑い空に、星が疎らに、剝げたやうに白んでゐる。乙也は人の見る目を隱れて、どこへかさもしい戀を求めて行きつゝある、内心の饑え疲れた、慘ましい自分のやうな氣持がするのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

乙也はいつまでも雨戸を閉ぢて寢てゐたが、次の間で小母と力とががさごそ言はせるので目が覺めて、床を出た。朝早く荷馬車が來て、荷物がすつくり着いのだといふ。二人はそこで釘付けにされた箱を開けて、籾殼の一ぱいに詰つた中から皿や小鉢などの壞れものを取り出してゐた。そこらには上包の蓆や、解いた繩などが亂れてゐた。

上り口の四疊には、その外の蓆包や行李などが引き上られてゐた。臺所には、裸のまゝで來たいろんなごた〳〵ものが取り亂してあつた。外は陰氣に曇つて、小さい雨がしめ〳〵と降つてゐる。

乙也は朝寢の重たい頭を不愉快に載せて、臺所の水口の柱に綰つて、濕つた土の上に吐いた齒磨きの泡が、雨に滲んで行くのを見守りつゝ、けたるいムードに昨夜の自分を考へ返してゐた。

あれから、自づと小石川のわき子のところに行かうとして、電車のところまで行つたのだつたけれど、考へると、あの女に會つて、折角忘れかけてゐた交渉を再び突つ突き返すのも五月蠅いやうな氣がするので思ひ止つたが、何かしなければ淋しいので、たうと別のあゝいふところへ行つて了つた。けれどもあんな女と向き合つて坐つたところで何の足しにもならなかつた。自分は何こそする事のない索漠の餘りに、忘れてゐた用事を急に考へ出したやうな顏をしてわき子へ出す手紙を書いた。自分の事を言つて、それが少しでも解つてくれるものと言つてはわき子の外にはだれもゐないのだつた。

「わたしはあなたがいつもどんなにしてゐるかを考へない日はない。またこちらへ出て來て、どこそこに

ゐる。」

こんな事から書き出して、女の同情を引くやうな事を拵へて書いた。

「いつか一度わたしから尋ねて行きたいと思ふけれど、母上に對して變なやうで出かけ悪い。あなたはたつた一人のやうに生きてたよりないだらうと思ふと氣にかゝる。いつかどこかでお目にかゝる事もないではなからうけれど、何だかもうあれきりで再び顔を見ないで了るのではないかといふ氣がする。來られたら、いつか出て入らつしやい。」

こんな手紙を書いて直ぐに女中を出しにやつた。自分は目の前にゐる女を好かなかつた。さういふ女に冷やかに對して不愉快に氣を沒ませてやる事に、反語のやうな寂しい快感もあつた。

今朝になつて考へ返すと、わき子に手紙を出したのは餘計な事である。乙也は自分のさもしいところが嘲けられると共に、冷酷にあんな女を調弄はうとでもしたやうに心に咎められる。

此わき子といふのは元乙也のところへ來たがつてゐた女であつた。乙也が學生時代に小母をつれて借りてゐた家の家主の娘て、五六年の間交際つてゐた。女は乙也の事については、小母からも聞き、自身にも目撃して、大抵な事は知つてゐた。こちらに取つても、性質のわかつた大人しい女であつたけれど、何となく小淋しい、色彩の薄いやうな女なのが物足りないで、母親の方から、家へ取つて欲しいやうに小母まで持ち出して來たのをにべなく拒けた。女はそれから二三年はぶら〳〵してゐて、乙也が學校を出るのと共に、二十二で、或商人のところに貰はれたが、男に嫌はれて、いろんな辛い目はかり見た揚

句、一年足らずゐて、少しばかりの失策を盾にして突き返されて歸つた切り、未だに一人で母のところにゐるのであつた。時々小母を求めて出て來た。あちらにゐる間も小母へはちよい〳〵手紙を寄越して淋しい不幸な自分の事を悲しんでゐた。乙也にもその都度見舞の手紙などを同封してゐたが、こちらからは一々返事も出さなかつた。

あゝした素直な性質や、もと自分になついてゐた事を考へれば哀れであつたけれど、それがために自分がどうしてやるといふ義務がある譯もない。時にはわき子からの手紙を見ると、何だか自分にじめ〳〵しい暗い或物が蔭を引いてゐるやうで不愉快に思ふ事さへ多かつた。自分が、十六七の時の此女からたつた一度でも、キッスを盗んだ事のある記憶も不愉快であつた。別れてゐれば哀れな思があるけれど、目の前に見れば、蔭の薄いやうなしめつぽい厭な女である。小母は、よく、わきさんは、心の底にはいつまでもあなたの事を忘れ得ないでゐるのだから氣の毒だなどゝ、そんな事を言つた。

もしあの手紙でわき子が出て來はしまいかと思ふと、小面倒な心持がする。會つたつて仕方もない。何であんな餘計な事を言つて突つ突いたのだか自分ながら氣が知れない。此やうな事から、思はない面倒な關係をも引き起して、あとでは悔いても及ばないのが、これまでの自分の常だつた。お民の事だつて、自分がしつかりして、取るべき筋道さへ誤らなかつたら、彼の女のためにもいくら仕合せであつたか知れなかつたのである。

わき子のところに手紙を出したといふ事が小母に聞えてもしたら、無い腹を探られさうで不愉快でも

ある。——けれどもう仕方がない。

乙也はもう、そのやうな事は忘れて了はうと努めつゝ、六疊の窓を開けて、裏の麥畠に青く降る雨を見つゝ深い呼吸をしたが、さうして息を吹ひ入れたりする心の下には、まだ、何かにつけて自分のすべてを下げすみ悔いるやうな、氣はづかしいだゞ黒い心持が漂うてゐた。すると小母が出て來て、

「あとでもいゝですけ、一寸これを見て置いて下さい。」と言つて、どこからか來た手紙を、そこの行李の上に置いて、眼鏡をはづして手に持ちながら、少らく、じつとそこに立つて、何を見るともない目に茫んやりと外の方を見てゐる。氣になる事が出て來たやうな顏色である。またお民に關した事だらうと思ふと厭な心持がする。乙也は小母が餘計な事をても言ひに來たやうに、わざと見向きもしずに息を吹うてゐた。小母は取り附く術もないやうに、思案さうな顏をして向うへ行つた。

氣になるのでその手紙を開いて見る。やはりお民に關した事だつた。假名ばかりて細々と認めた、小母の從妹からの手紙てある。

「乙也はいつまでも自分を責めさいなむやうな消息を手にするのが、堪らなく不愉快てあつた。要らないところは飛ばして讀む。——

「お民さんは此八日の朝急に產氣がついて、十時ごろに、月たらずて女のお子をお產みになり、けふて五日になります。お二人ともお無事てすから御安心下さい。お產は大分重うございました。」

とある。それては八ヶ月て生れたのだと見える。

お民は、すぐに電報を打つて自分を呼び寄せてくれと言つて泣き立てる。しかたがないから局まで行つたけれど、考へ直して、お民にはさうしたやうに僞つて、實は今日まで知らせずにゐた。かねて言つて來てゐるやうに、生れた子供が男の子だつたら、すぐに貰つてくれるやうに話のついてるところがあるのだつた。それは、此手紙によると、お民が厄介になつてゐる家の主人の上役て、立派にやつて行つてゐる、夫婦きりて子供のない或技師ださうてある。その細君といふのが、度々お民にも會ひに來て心安くなり、お產の時も早速知らせを受けて出て來て附いてゐた。生れた子供は女だつたけれど、何だか自分が生みてもしたやうな氣がするからと言つて、母の情合の纒はらない內に、早く貰つて育てたいといふのてあつた。それはこちらに取ても何よりの仕合せて私も一と安心してゐましたところ、お民さんは生れた段になつて、その子を引きはなされたくないと言ひ出して、いろ〳〵言つても聞いて下さらない。電報を見てきつと來てくれるにちがいないから、來ましたら私が一生の願として賴んて見るつもりだと言つて淚にくれる。それは此子一人は自分がどんな辛苦をしても、どうにかして育てゝ行くから、自分に伴れてゐさせて貰ふやうに賴むのだと言つて泣いてゐられる。とにかく產後てまだ血が收まらない間てすから、表面では何事もお民さんのいふのを消し止めやうとはしずに、床上げを待つてゐますが、先方の奧さんの方へは、どうしてもどこかに貰つていたゞかなければ濟まないのだから、どうかお願ひしますと賴んて置いた。

一つ困つた事には、生れたお子さんは右の手の指が六本ある。親指の中程から枝が出て蚯蚓のやうに

小さいのが一寸ばかりぶら／＼と下つて、小さい爪が生へてゐる。どうした事だらうと皆んなて心配して、早速二日目に奥さんが抱いて病院へ診せに行つて下さつたところ、これはもう少し大きくなつてから切り取れば何の仔細もないといふ事なので少しは安心しました。その時醫者が參考のためにその手を寫眞に寫させてくれと言つたさうて、奥さんはひどく怒つてぷん／＼して歸つて見えました。お民さんが見なさると愕きなさるから、皆んなて右の手を見させないやうにして隱してゐます。お民さんは、まだ返事が來ないのか、ひよつとしたら汽車て下つて、來る途中てはないてしやうかなどゝ言つて、毎日涙を浮べて待つてゐられますから、何だかお可哀想てたまりません——。

乙也はかういふ意味の手紙を、假名をたどり／＼して讀んだ。そのあとの方は小母が千切つてゐて、途中て切れてゐるのてあつた。

乙也は手紙を卷き返して、もう一度拾ひ讀みに方々を讀んだ。お民が一人ぐち／＼しく泣いて、例の聞きわけのないあの性質として、下らない事をあとさきも思はず一途に突き通さうとしてる心持が目に見えてじれつたい。いつまでもその子をつれて一生一人て立てゝ行くといふのは、生れない先からお民が手紙にも書いて來た事てあつた。そんな事がもし出來得るものとしても、それがどのくらゐこちらに對しての復讎になるかといふ事は考へてはくれない。自分が突き出した女が、自分の子をつれて一生その子の犧牲となつて暮らす、そんな事をどうして自分が平氣て見てゐられやう。あれ程よく言ひ聞かせたのに、解らない女てある。あの女がそんな事をいふのは、母として子に引かれるといふ前に、自分へ

の當て附けに、自分を困らせるために、言ふとしか思へない。女のくせて、出來もしないのに、何かというと一生獨身て通すとか、二人の夫には仕へないとか言つて、小學校の敎師が歷史を敎へるのに淚をこぼして見せたりするのと同じやうに、安つぽく見え透いた事をいふのが、せゝら可笑しい。

けれどもそんな事よりも、生れた子供の手の事が氣にかゝる。何だか自分のこれまでの罪惡の記號が何んにも知らない子供の手に括りつけられて、人の目に恥ざらしに會ひてもしたやうに不愉快な心持がする。人のよい小母の從姉が、自分たちのために、いろんな厄介を一人て負うてゐてくれるさまも目に見えて、自分の下らない事をしたのが責められる。さつきの、子供を引き取つてくれるといふ女の人が、お民に附いてゐて世話をしてくれるのに對しても、何だか氣が引けてはづかしい。最後にはあゝした羽目になつてゐる女自身も哀れてある。乙也は氣分が堪らないやうにくさ／＼して來た。かうした、いろんな悔にのみ塗られてゐる自分を寸斷／＼に切り刻んて、眞白く洗つて捏ね直したいやうな心持がする。

乙也は小母に顏を合すのも氣拙くて、こゝが出られないやうな氣もした。

腐れるやうな心持にぐつたりした乙也は、ごだ／＼と物の取り散らしてある間に轉んだまゝ、物を貼つた跡の殘つてゐる、傷だらけの小黑い壁を見つめてゐた。

「まあ、大きな蜘蛛、」

と、ぞつとしたやうに獨りごとを言ひつゝ、お力が這入つて來た。

「旦那さま、おかみさまが、御本やお机なぞはどこへ運べばいゝかお聞き申して見いと仰しやつてゐ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ますが。』と、入口に手をついて、乙也がどのやうな心持に包まれてゐるかとも知らないお力は、いつものやうに、乙也の前に畏まつた顔をしてゐる。大きな、眞つ黒い蜘蛛か、何物かの間諜でゞもあるやうに、根性惡くいぢろく〳〵こちらを見つゝやつて來て、氣味惡く壁に這ひ上つた。

やがて乙也は、お力に手傳はせて、上り口に積まれた莚包みを開けて、氣乘りのしない顔をして自分の本などを出しにかゝつた。お力は、机や文庫などを拭巾で拭いて、ぶつ〳〵つからないやうに、そろ〳〵と二階へ運んだ。

「ね乙也さん、」

と小母は氣になるやうにこちらへ出て來て、

『あなたはどうしてもお民さんをもう一度歸して見るお積りはないのですね。』

と上から下りて來かけてゐるお力に聞えぬやうに、小さい聲でいふ。

「何でそんな事を言ふの？」

と乙也はどういふ氣で知れ切つてゐる事を改まつて聞くのだらうと、面倒くさく思へど、もうそんな事て口を費すのも厭はしいやうにかう言つて、取り合はないで一つの本をめくつてゐた。

「力や、お前は一寸途中てそこのものだけ勝手口へ運んて了つておくれよい。そこのところが足も踏み込まれんけのい。」

と場を外させるためのやうにかう言つて、

「今更こんな事を言や あなたがお怒りになるのは知つてるけど、從姉が妙な事を言て來ましたし、考へて見ればお民さんだつて可哀想だしするもんてすけのい。」

「何を言つて來たんてす？」

「わたしは、あなたにお見せしない方がい丶と思つて手紙の仕舞を千切つて取つたんてしたけどのい。何だかお民さんは、あの子を自分てつれてゐれば、その内にはまた小供にも不憫が出來て、こ丶へ歸して貰はれはすまいかといふやうな事を思つてゐるのらしいてすのぞ。これはたゞ從姉の推察だけてすけれど、とにかくどうかして歸して貰ひたがつてゐるのは本當てすと。毎日あなたの事ばかり言つて泣いてるんてすとのい。それて從姉も、それから例の子供を取つてくれるといふ奥さんも、これまでの惡いところを直してもう一度一處に置いて見ては貰へまいかつて、お民さんに同情して、そつとわたしまで賴んて來たのてすのぞ。民さんも、自分が惡かつたから、こんどはどんなにても言はれるとほりに自分を直すからつて言ふんださうてすけれどのい。」

乙也はどうせそんな事を言ひ出すのだらうと思つてゐた。

「だつて私はまたお民を女房にしてゐたんぢやないぢやないか。下らない事を言つて、わたしを突つ

突かないておくれよ小母さん。あんたはお民よりか子供が惜しいやうな氣がするからそんな事を言ひ出すんだろ？拙らない事なんだ。」

小母の心持はちやんと見えてゐる。

「別に何も子供の事だけどうと言ふんぢやないんですよ。お民さんだつてあの人の心持ちになつて見れば可哀想ですから。――まあ、それぢや私が餘計な事を言ひ出したのは許して下さい。それてのい。」

と氣を換へたやうに、

「此手紙の仕舞に、お父うさんに早く名を附けて貰つて下さいと書いてあるんですけれどのい。一體わたしは從姉の仕方が少し存在だと思ふんてすのい。子供が生れたら、何が何んでもすぐに電報を打つて安心させてくれるのが當り前だのに、こんなにして七日も八日も立つてから知らせて來るといふのは少し手ぬかりぢやありませんかのい。子供の生れたといふ事は大事な事なのに、それを片親が今日まで知らないてゐるといふのは、子供に取つてどんなに罪だか知れないに。」

こんなつまらない事を言つて不平さうな顏をしつゝ、いつしか帶の間からでも出した手紙の、上袋の消し印なぞを調べてゐる。手紙は先の村へ向けて來たので、附箋が二枚も附いてゐた。小供といふ事て小母の考へがぐらつき出したのにきまつてゐるのてある。小母のさうした心持は乙也にはよく解つてゐる。子供が變な形になつて生れてゐるといふ事によつて、餘計に乙也も哀れな氣持もするけれど、だと言つてどうする事も出來はしない。女はかねて母からも小母からも向ふの夫婦へ頼んて、どこか相當なとこ

ろへ嫁入口を探してくれる事になつてゐるのだつた。女がさうしてよそへ行くためにも、子供はこちらに關係のないところへくれて了ふのが、女に取つても氣殘りがない譯である。

「あんたはこゝのところを最うあちらへ知らして置いたの?」

と乙也は沈んだ心持を包んで聞いた。

「ではあんたの名前て電報を打つて置くよ。何といつても今さら仕方がないのだから子供は直ぐによそへやつてくれ。女の事はこれまで話してゐたとほりに、よろしくたのむつて言つて置かうね。また何とか言つて來ると面倒だから。」

「さうてすぞのい。」と、考へたが、

「では私が今夜にでも詳しい手紙を出しますから、いゝ名前を考へて置いて下さい。」

小母はこれまでの心持に返つたやうにかう言つて、少くしてまた荷物を解きにかゝる。小母はいろいろの人間の心になつて見て、どれにもそれ〳〵同情があるやうな、しめつぽい顏をしてゐる。

「まあ此事がどうにか片づいたら、あなたも早く奥さんをお貰ひなさいよのい。どうせ一から十まで氣に入つたものはないけ、たゞ家のしまりさへよければ、あとはどうでもいゝといふ氣になつて、いゝ加減てもう極めておしまいなさいよ。』

と何を考へ出した續きからか、乙也を憫むやうにこんな事をいふ。

「此事が片附いたら私まてゝ夜が明けたやうにさつぱりするてしやうぞ。」

乙也は默つてお民の事を考へ入つてゐた。電報を打つといふ事も少し極端のやうにも思はれた。

乙也は何を考へるのも黑く責められるやうな氣がして、すべてを忘れやうとするやうにぐつたりと俯つ伏した儘、ひとりでに寢入つて了つたのだ。何だかたつた一人うすら淋しく、村の裏山の木の根に倒れて、昔の三千代に會ひたくも會へないのを恨んでゐる自分だと思つてゐたが、目を開けて見れば自分がさつきすつくり片づけたこゝの二階の一と間であつた。もうそろ〳〵日もくれかけてゐる時分である。乙也はいつの間にか旅行用の敷布を裾の方にかけられてゐた。

坐り直つて、倦怠るい心持に卷煙草に火を附けて、茫んやりと室内を見廻した。障子を外した窓から、外に並ぶ栗の木の若葉が靑い感情を投げ入れて、片隅に立てた二枚折の、淀んだ銀屏に風どんよりと傳はつてゐる。

屏風の前には、小さい赤土の色の壺に、ふだん草の黃色い花を活けて、こちらの櫺子の障子の前に何んにも載せてない紫檀の机と、古代さらさの座蒲團とを置いた外には、何んにも出してない。これから硯や紙やを出して、何かの仕事にかゝらなければならないと思へど、當分はまだ何んにも出來さうにはない。したくもない。心の底には堪えず何か氣になるやうな黑い心持が烟つてゐる。裏の家主の家の屋

樓に射してゐた日ざしは、もう薄どんよりと淀んで、白壁のぼろけかゝつた倉の庇の下に、雀の子が、小さくこゞんで日のくれるのを見つめてゐるやうに、時々小暗くちゝ〳〵と啼いてゐる、

乙也は何だか、まだ村にゐる日の續きのやうな寂れた心持を見入つてゐた。何だか、かうした心には、これまでのやうに、思案深い目をしたお民が、次の間の襖の蔭に悄んぼりと座つてゐるやうな心持がする。縫い上げた仕事を疊まうとしかけたのを其儘に、面やつれのした頰にかゝる髮を掻き上げやうともせて、一人しめ〳〵と、どうしても別れて出ねばならぬ悲しい中に、腹に子供の止つてゐるらしい疑ひに惑うてゐるお民が、次の間にゐるやうな心持がする。もうそれは、いつともわかぬ昔の事のやうにも思はれるけれど、さうした女の面影は、たつた昨日のやうに目にも浮んで來る。その頃は、乙也は此の机にかゝつて仕事を續けてゐると、いつもすぐ次の襖の向うに、お民がしく〳〵と泣き入つてゐるやうな心持がしていら〳〵するのだつた。どうしてそのやうに聞きわけのない女だらうと癇障りて、仕まひにはついと立つて行つて襖を明ける。すると。お民は、そこに、根の弛んだ解れた髮をして俯つ伏してゐる。泣いてゐると思つたのはこちらの氣のせゐて、女は悲しい子供が泣き寢入りに寢入つたやうに、哀れつぽい痩せた背中を見せてうたゝ寢をしてゐる。どうしても出て行かなければならないやうになつてからの、毎日の悲しみに疲れたやうに俯つ伏してゐる。乙也は自分も暗く淋しく哀れになつて、女の肩に手を置いて、亂れ髩けた髮を見入りつゝ考へる。自分はやつぱり此女を女房に取つてやらうかと考へ惑ふ。暑いきら〳〵しい日の漲る中に、血のやうに眞つ赤に咲いた紅葉葵の花の前に、はじめて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戀の男に思ひを告げる辱かしさに、袂を顏に押しあてゝ自分の膝にすがつた日の、悄しさに充ちて水々しかつた髮の毛も、今は破るゝ戀に此やうにわびしくかき亂れて色もなくなつたのが哀れつぽい。夜毎枕もとを守る蠟燭の明りの搖れる蔭に、死のやうに絶え入つて、描けるやうに俯つ伏した此女の、二十(はたち)の脣の肩のほとりに、大きな黑いほぐろの見えた記憶さへ、何だか此女を捨てがたく思はせる。

「おい、起きないか。おい。」と劬はるやうに搖り起せば、女はがつくりと顏を上げて、きよろ〳〵と目を見張る。やつぱり自分の女ではない。もう自分の女ではない。自分はいつからか、さうした女の目の蔭に、何だか厭な色を見るやうになつてゐた。バルガリティと無智とを示したあの眉のあたりにも厭氣がさした。

「そんなところに寢てゐてはいけないよ。」と、さうした冷やかになりかける心を隱すやうに、靜かに言へば、女は媚びるやうに乙也の膝に顏を伏せて、急に泣き入りたいやうな形を見せる。それは取つて附けたやうな下手なアートである。いかにかして自分を元に引き入れやうともがいて、意識的にいろんな事をするのが、多くの場合に見え透いてゐる。

「ね、あなたは、わたしが出て了つたあとは、一と月位はわたしの事を思つてゐて下さるてしやうかね。」

こんな安つぽい女のいふやうな事をいふ。そのやうな下手な辭をどこて習つて來たんだ。

「そんな拙らない事をいふものぢやない。」と手を振り放して自分は立つ。どうして此のやうなふはふ

はしい女が、一生の自分の裏貼りにしてゐられやう――。

乙也はいま、さうした厭な、一日も早く振りはなしたかつた心持の續きが漂ひ上つて來た。考へ出すとばかばかしくもなる。此やうな女にイッウジャンを被せて、わが求める女として縋らうとした、自分の迷ひと心の飢とが嘲けられる。自分は此女と別れるのにまだいくらかの未練があつた。女に一つかみの黑い髮を切らせて形見に取つた心持は、今て思へばいかにさもしい齒切れの惡い自分であつたかを語るやうに氣ばつかしい。

乙也の文庫の中にはまだその髮が入つてゐる筈である。

乙也には自分が自から嘲けられると共に、何か欲しくてならないものを求めて與へられない心持が、餘計に食ひ入るやうに寂しくなつた。いつそ昔のやうにデストラクチブになつて了ひ、剝げ腐れたやうな歡樂を求めてあばれて廻りたいやうな氣持もする。

乙也は何とも知れない不愉快な心持に襲はれつゝ、いつしか窓の側に立つて、黑ずんだ柱に靠れながら、靑暗く暮れて行かうとするやうな、外の通りの生垣の續きを見入つてゐた。自分の家の杉垣の上には、いつからか拂はれた事のない蜘蛛の巢が、雨上りの雫に濡れて、方々に淋しく固つてゐる。乙也はかういふわびしい住居のなかに、何の了解といふものもなしに、一人剝げたやうに鎖されてゐる自分だと思ひつゝ向うを見る。

向うの、垣の續きの中にたつた一軒店を出してゐる荒物屋の前を、車が一臺ごとりごとりと來る。乘つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐる人はもう夕方も近い蔭りの中に、白い蝙蝠傘をさしてゐる。どこか此あたりの奥さんぶつた女が、市中から疲れて歸つて來たのだと思はれる。左の方を見ると、遠くに高く續いてゐる丘の林の上に、雨の上つた灰色な雲が浮んで走せてゐる。乙也は、茫んやりとそれをいつまでも見入つてゐた。と、

「下ろして下さい、こゝですから。」と車の上の女が家の門口へ來て梶棒を止めさせる。何か門ちがひでもしたのではないかと思つて見てゐると、車から下りて洋傘を疊みかける後姿はわき子である。やつぱり昨夜の手紙で出て來たのだ――。

乙也は厭なものに附き纏はれたやうに當惑した心持を見つゝ、そこに轉がつた烟草の箱や灰皿を片附けて、わき子にどんな風に應對しやうかと思ひつゝ、此儘じつとそこにゐやうとした。入口の鈴が鳴つてわき子は格子戶を開けたやうである。

しばらくさうした儘待つてゐたけれど、わき子は小母に挨拶をしてゐると見えて、容易にこちらへ上つて來ない。乙也は何だかそわ〳〵落ち附かないやうで、のそ〳〵階子段を下りて行つた。

と、わき子が小母と後先になつて上つて來かけた。

「おや、お下りなさるの?」と上り口に立ちとまつた。

「どちらでも――。おやお上りなさい。わたしの上等のお部屋へ來て御覧なさいよ。」と乙也は、つとめて快活さうにかう言ひながら、中途から引返した。

「おや、御免下さい。小母さんお先に失禮よ。」とわき子は精一杯のやうに挨拶をしつゝ上つて來た。

「まあ、こゝからは向ふの方がすつくり見えますのね。」と窓のところに覗いて、極り惡さうな口許にハンケチを當てゝ、乙也の方を見る目を避けるやうにしつゝ、もじ〳〵してゐるのである。

「こちらへ入らつしやい。はじめて來たのによくこゝが別りましたね。」と乙也も變に面映いやうに、押入から蒲團を出して敷く。

「ずつとそちらへ入らつしやいよ、わき子さん。」と小母は自分の待つてゐたものが來たやうに、いそ〳〵してゐる。

「御免下さい。わたし隨分まごついたんですのよ。番地を取りちがへて、飛んでもないところを、ぐる〳〵探して廻つてゐたものですから、こんなに夕方なぞに上つて。」

「なぜもつと早く出て入らつしやらなんだのでしやうぞのい。遲いてすぞのい。」と二人でそちらに固まつて話してゐる。わき子は思ひ出したやうに、

「しばらくでございます。どなたも御變りもございませんで。」と改つて乙也に挨拶をする。小母は何をか取りに行くらしく下へ下りて行つた。

「よくかういふいゝところが目つかりましたのね。」とわき子のくせて初心の女らしく俯つ向きがちに

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なつて口を聞く。
「わたしは餘んまり別らないものですから、もう諦めて歸つて行くところでしたのよ。さうしたら、丁度あながこゝへのぞいて入らつしやつたものですから、まあこゝだつたのだと思つて急いで下りたのですの。」
と淋しい笑顔をして、はじめて乙也の顏に目を注いだ。
「ぢやあ、どちらから來たんです？市中の電車で？」
「えゝ。考へて見ると、一ばんはじめ、此處をずん〳〵通り越したのですわ。」と言つたが、
「あの、昨晩は御手紙を誰有うございました。小母さんからも今日おはがきを下さつたさうですけれど、それはまだ拜見しない内にこちらへ上りましたのよ。」
「わたしから手紙が行つたといふ事を小母に言つたんですか。」
「いゝえ。あたしつい ね、あの……。」と言葉を途切つて、乙也がそんな事を聞く心持を見さぐるやうな目もとになる。乙也は、
「何、なんでもないのですけれど、一寸あれだつたから。」と誤魔化すやうに言つた。
別に此女へ手紙を出さうが出すまいが何んでもないわけだけれど、昨夜のやうな心持で出したのだから小母には隱してゐたので、一寸ばつが惡かつたゞけである。小母はそれでは自身のはがきで來たのだと思つてゐるだらうから丁度いゝ。

『わたしは、あゝ言つて下さつたのにをいゝ事にしてすぐにお邪魔に上るのも何だしと思つて、今朝はお午迄考へてゐたのですけれど何だかどうしても今日上りたくなつたものですから……何だか小供のやうですこと。』と微笑んでゐる。

『いゝんです。よく來て下さいました。わたしはこちらへ出て來てから、どこへも出ないで茫んやりしてゐるもんですから、何だか退屈て仕方がないのです。』と乙也は何んにも言い出す事がないやうに、拙らない事を言つた。

『今何時頃でしやうね。もう直き暗くなりますわね。』

『まだ早いんですよ。曇つてるからこんなんでしやう？』

『わたしは今日はこれでお暇をいたしますわ。母に默つて出た來たんですから。』とそわ〳〵してゐる。

『お母あさんは何もお變りはありませんか。隨分久しくお目にかゝらないやうな氣がしますね。』と乙也は相手を悠つくりさせようとするやうにこんな事を言つた。何だか、此女とかうして話してゐる事に、近頃なかつた、溫い或物が味はれるやうな、昔の日がなつかしいやうな心持もするのであつた。

『でも母がどこへ行つたんだらうと思つてゐますわ。』

かう言つてゐるところへ小母は風呂敷包みを持つて上つて來た。

『乙也さん、何んにも御愛想がありませんけ、只今いたゞいたお土産を出しまやうよのい。』と

と後ろに力が持つて上つた茶道具の盆を受け取つて坐につく。

「小母さんそんなものをお出しになるときまりが惡いわ。」

「のい、あなた、いゝ家が見附かつたてやうわき子さん。」

「えゝ、ほんとにお靜て何よりてございますはね。――わたしあなたにお挨拶もしない内に、すつくりそこいらを見せて戴きましたのよ。」と半分を乙也に向いていふ。

それから小母と二人は、勝手もとの事や、ぐるりの家の事などを話し合つた。

乙也はさうしてゐる間に、わき子の顏を、つく〲と見る事が出來た。わき子とは二年ばかり會はなかつたのだつたけれど、ひどく變つてゐるやうに見える。たしか二十六になるのだつたが、すべての作りがじみなのに、もとから脆弱さうに痩せて、顏の色も惡いので、一寸目には二つ三つは更けて見える。いつ見ても眉毛や目のあたりの陰氣にさびしい女てある。すべの感じが、骨々したやうて、何か病氣の床をはなれたばかりの女のやうにうす青い、もろい心持がする。黑色のお召の着物に、薄い水色の麻しぼりのお召織の帶をして、眞珠の這入つた白い帶留も何となく淋しい。此前に見たときには、まだ赤い色のものがちら〲見えてゐたけれと、帶上げの色も、今はもう、とき色の褪せたやうなのを覗かせてゐる。

『つかん事てすけれど乙也さん、私はすつくり別の人間のやうになりましたてしう？』とわき子は乙也がさうしてじろ〲見てゐたのを知りてもしたやうにかう言ふのてある。―― 乙也は他の方を見てゐた續きのやうに目を外らした。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何うしてゝす?」
「ほゝゝ。」と此女の持徵の人懷つこい笑ひやうをする。
「お婆さんになつたやうな氣がするの?」
「いゝえ、お婆さんはもう疾うからお婆さんてすけれど、わたしは此頃すつくり氣分を入れかへた積りなんてすのよ。それは母ても愕いてゐる程のんきな女になりましたわ。――わたし小母さんにいろんな面白いお話をして笑はせて上げるつもりて考へてゐたのてすのに、こゝいらをまごついてゐる間にすつくり忘れて了ひましたわ。――おや、何てしたらうね。」
と口にはかういへど、毎日何かくよ〳〵と考へ入つてばかりゐるのを告げたいといふやうな、しめ〳〵しい目をしてゐる。
「わき子さんは、つまらない事を一人て考へ込むからいけないね。」
「ほんとてすわのい。」と小母は茶を注ぎ入れる。乙也は女の土産のカルヽス煎餅をぱしり〳〵食べた。學校へ行つてゐる頃には、この煎餅がすきて、いつも青木堂て買つて來ては袋戸棚に入れて置いて、そこらを行き返りする序には、何度となく出して食べ〳〵した。わき子はそれを知つてゐてわざ〳〵持つて來てくれたものらしい。乙也は、その頃の、まだ赤い色のまじつた帶などしたわき子の容子などが考へ返された。
「てもわたしは此節、どこへても一人て飛んて廻るのてすのよ。少しお天氣てもいゝと、ぶら〳〵植物

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

園へ行て來たりして、それは苦勞がないんですわ。尤、もう日中は暑うございますから、そんなにも出られませんけれど。」

「そしてあれきりお嫁入りをなさらないでぶら〳〵していつしやるのだから不心得ですぞのい。わき子さんならどこからだつて貰ひたがつてるのでしやうに、何でお出てにならないの?」と小母は、おどけたやうな調子でいふ。

「ほゝ小母さん、こんな別嬪はもうどこへも行かれはしませんわ。考へて見ると、年だつてもう隨分なんですもの。」と微笑んだが、

「だつて、家も母がたつた一人になりましたしね。今に弟にいゝお嫁さんを貰つてやつて、母とわたしと二人で隱居をしますわ。」と眞面目な顏をして言つてゐる。

このやうな事をいふ外に、乙也には何こそこれといふ話も出なかつた。女たち二人は女同志の話を續ける。

これだけの事で、わき子はとうと歸つて行くのであつた。小母が、一緒に夕飯でも食べるつもりで、

「まあ少らく二人で話してゐて下さいよのい。」と言つて下へ行くと、わき子はもうそんなにしても

ゐられないと言ふやうに、附いて下りたが、それなりてずつと歸ると言ひ出した。小母がいろ〳〵に言つて止めたけれど、夜になると家に氣づかふからとて、挨拶をして玄關に出た。乙也は何だか、女をあつけなく歸らせるやうな氣もして、氣の毒に思つたけれど、强いて止めるわけにも行かなかつた。

「ぢやわたしが電車のところまで送つて行くからお待ちなさい。車はさつき小母が歸してしまつたんださうですよ。」

乙也はわき子の氣の毒がるのを制して一緒に出た。

　何だかたゞあれだけの事をいふために來たのでは何の事だか別らないやうな氣もした。別に此女に對して何といふ氣もないけれど、此まゝで別れて了ふのは拙らないやうな氣もする。此女は今、自分に對してどんな心持を持つてゐるのだらう。女がもう堅く蓋を鎖したまゝに冷へたやうに、たゞのところへ來るのと同じに、つい、あゝして出て來て歸るだけでは、何だかリヽックが少しもない。自分と二人がこれから段々に戀に這入つて、遂には離れられず結びつくといふ事が、假りに想像出來ないものでもない。女は自分がもし求めたら、自分に投じて來るであらうか。かうした淋しい女と戀に入れば、女は私の肘に投じてどのやうな事を私語くであらう。——

　話しが途切れて、少らく何をか考へ入るやうにして、默つてとぼ〳〵行くわき子の後ろから、乙也はこのやうなムードを包みつゝ歩いて行つた。市中の電車へ出るには、歩いてもさまで時間がかゝるわけでもなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もう小早い灯のちら／＼と見え初めた杉垣の内に、二三人の小さい女の子が、低い聲でメランコリーな調子の唱歌を歌つてゐるのがあつた。そこらの垣の根には、白い、ほろ／＼しい野いちごの花なぞが、夕方の中に咲いてゐた。下級の勤め人らしい人の群も、ぽつ／＼歸つて來た。さういふ通りすがいの人たちは二人のつれ立つて歩いてゐる狀に目を附けつゝ行つた。

「わたしは乙也さんに一つ御相談したい事があるんですけれどね。」と稍あつてわさ子がいふ。

「今日それを聞いていたゞかうと思つて來たのですのに、小母さんが入らつしやるからつい、あれてしたけれど。」

「何です？」

「一寸一と口には言はれない事なんですけれどね。わたしはだれ一人相談相手になつて下さる方がないのですから、あなた御迷惑でも、いつかとつくり話を聞いて下さいませんか。」

「そんなに他人がましく言はないでも、私で役に立つなら何んでも言つて下さつたらいゝ。」

「實はね、一寸わたしの内裏に厭な事でごた／＼してる事があるんですけれどね。――乙也さんあなた此頃お忙がしいんでございますか。」

「なぜです？」

「ではいつか近い内にどこか一處に散歩して下さらない？わたし隨分勝手な事をお願ひしますわね。」

「そして話しをしやうといふんですか。――それはいつても行くのは行く。」

乙也は厭々にかう言つた。何だか女がずう〳〵しく、自分の上から出て來て、年下のものでも扱ふやうに對してゐてもするやうなのが癪に障る。恰も自分にそのやうな事をしてやる義務でもあるやうにいふのだ。此女の言葉附きに、俗世間の事にかけては自分よりも喰へないやうに、世馴れてゐるやうなところも見えるやうで厭である。何だかもう昔のやうな單純な女ではない。いつでも行くのは行くと仕方なく言ひはしたものゝ、餘計な事に此女へ手紙など出して呼びつけて、下らない面倒を見る自分もばかげてゐるやうな氣持もする。

「ではいつでも都合のいゝ時に手紙を下さい。わたしが出かて行つて上げてもいゝから。」

乙也はさうした心持を隱さうとするためにかう言はなければならなかつた。

「でもわたしのところへ入らつして下さつては一緒に出るのが變ですから……。」

「さうね。――一體一寸どういつたやうな事なの？」

「それはね……わたし隨分口惜しい事があるのですよ。」

と、わき子は、いつしか目に涙をためてゐる。

「どうした事です？」

わき子は默つて指先で涙を拭くのであつた。さういふ、涙になる心持は實際でも、口で言つてゐる事はいゝ加減の事のやうな氣持もする。何か自分の同情を引かうとするために、又は自分と接觸する機會を深めやうとするために、出鱈目な事を拵へて言つてゐるのぢやないかと思ふ。乙也はこんな、他人の事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にかゝはつてゐるより前に、何か自分自身の背後に迫つてゐる重大な事をその儘にして出て來てゐるやうな、不安な心持がする。

乙也の心の裏面には、痩せてやつれて産褥に寢てゐるお民の事が考へられるのであつた。

「急ぐ事なんですか。」と乙也は、そんなお民の事なぞは思ひ忘れたいやうにわき子の返事を引き出さうとした。

「いづれ悠つくり聞いていたゞきます。――ですけれど、わたしはあなたに勝手な事ばかり言つてづうづうしいやうですわね。お厭でございましやう？――私は或人に欺まされたのですわ。――今でも欺まされてるところぢやないのかと思ふんですけれど。わたしは一寸惡い事をしたのですわ、乙也さん。」

「どんな事を。」

「此次に言ひますわ。」

二人はそのまゝて少らく默つて歩いた。

「もうそこて電車の終點ですが、――ではいつか入來ますか？」

「えゝ、どうぞもう一度上らせて下さいまし。あなたもう澤山ですからお歸りになつて下さいませんか。とうとこんな方まで送つていたゞいて本當に失禮でございました。」

「何、ついてにそこまで行きましやう。」

「本當にすみませんわ。わたし今日はどうかしてるんてしやうね。」と、ふらふらするやうな顏色をし

て女は電車に乘つた。

『では御免下さいまし。』

『左樣なら。』

『どうぞ。もう澤山ですから。』といふやうにわき子は釣革につかまつて會釋をする。少しほつれて頸足にかゝる、乏しい髮の恰好が哀れつぽく見える。考へれば萬更わたしに嘘を言ひつゝあつたものとも思はれない。——わき子は延び上つて會釋をする。電車はぎい〴〵と音を立てゝ動き出した。

町筋にはもう灯がついてゐる。

乙也はとぼ〳〵家の方へ引き返した。わき子がどうしたといふのだらうと、いろ〳〵に考へて見る。あの陰氣な顏が厭に目に浮ぶ。どうして自分はあんな女に手紙なぞを出して要らないかゝり合を見せられやうとするのだらう。——

乙也はやがて杉垣のつゞく方へ歸つて來た。何だか、たゞ黑く押へられるやうな、死體をでも見て來たやうな不愉快な心持が心に漂ふ。また夜は雨にでもなりさうな、うす暗い雲が、低く頭の上に廣がりかけてゐる。何といふいやな氣持のする自分であらう。——

乙也は、またわき子の事が頭に浮んだ。これは、こんな事から、何か二人が厭な關係に落ちて行くのを暗示する心持てはあるまいか。——けれどもそんな事があり得る譯もない。そんな厭な事になる譯もない。たゞわたしに相談するといふ事が、どんな厄介を導き出すかといふ事は不安である。何か私が厭

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な事の當事者を務めさせられてもするやうに不安である。――

自分はそれどころではない。女は自分の子を產んで、まだ半はわたしの繋累として纏つてゐる。生れた子供には指が六本あるといふ。蚯蚓のやうなのに小さい爪が附いた餘計な指が。――

乙也は此やうな事を考へかけた。これで自分は父である。小供を生んだ父である。けれどもそれによつてどういふ變化がわたしに上つて來てゐるだらう。少しも父らしい心持はしやしない。すべてが嘘のやうな氣がする。たゞ黑くうなされてゐる惡夢の中の幻影のやうな心持がする。――

乙也は自分の家の門口に近づいた。

見ると、門の内に、お力が悄んぼりと立つてゐる。片方の下駄を脫いで、前鼻緒の拔けたのを小枝の切れで直してゐる。

「そんなところで何をしてゐる。」

「御門をしめにまゐりましたのでございますけれど。」

乙也は、少らく立つてお力のしてゐる事を見てゐた。あんなわさ子なぞを、わざ〳〵あしこまで送つて行つたりして手間取つたのを、小母が何とか要らざる事のやうに思ひはしまいかといふやうな氣がする。

門を這入ると小母が小暗くなつた障子を開けて覗いてゐた。

「乙也さん。電報が來てゐますよ。」と、待つてゐたやうにいきなりいふ。

『お民さんの事でしやうけれどのい。』とお力に聞こえぬやうに小聲でいひつゝ、渡すのであつた。どうせろくな事ではないのだ。もう中に書いてある事も大抵わかつてゐる。お民が子供を離さないとか何とか言つて困るから、一寸と出て來てくれといふくらゐな事だ。封を開く。差出局は××である。

『どうしたといふのですのい。』と小母が覗く。――乙也の手はわく／＼と振へ出した。

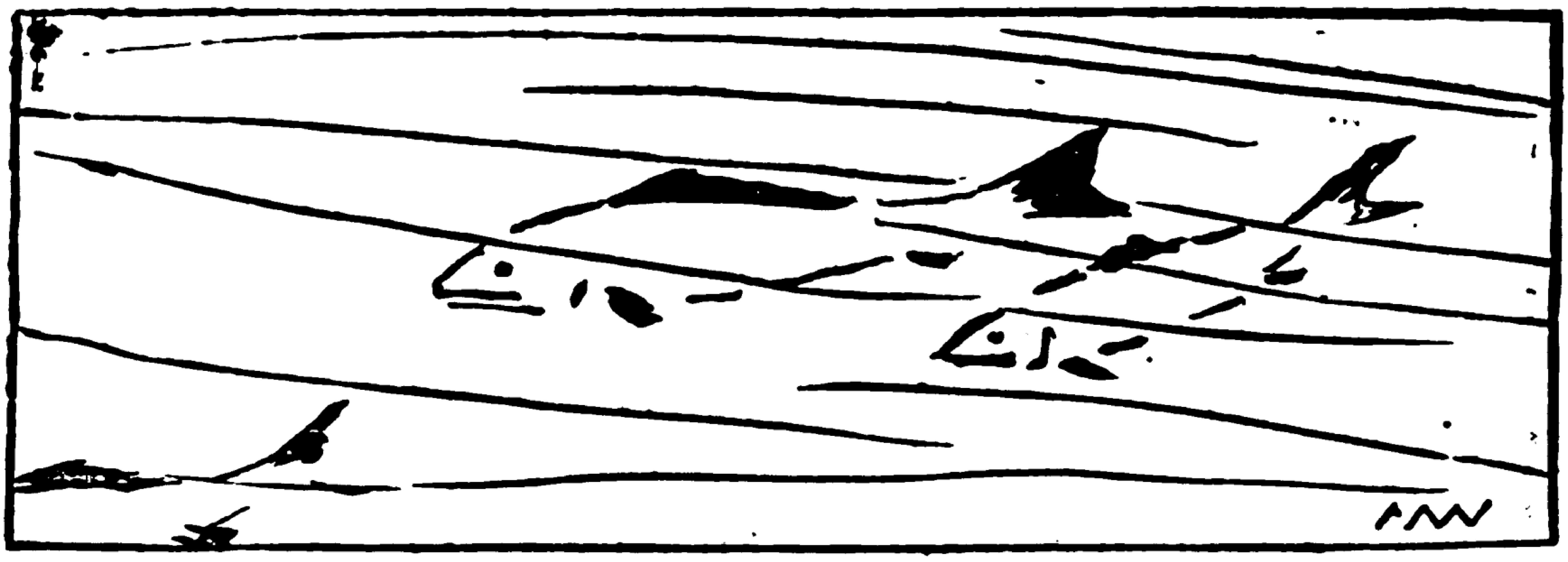
『何か變つた事ですかい。』と小母はそれには氣が附かないで、大した事でもなさ相に聞く。見てゐる内に乙也は、くしや／＼とその電報を捩ぢ束ねて了つた。

『まあ何をなさるんです。』

『退けよ、大變な事になつたんだ。――お民が小供を殺したんだ。』と言はうとしても、乙也は言葉が出なかつた。

『こつちへお出でよ、小母さん。こつちへ、お出で。』と聲も振へを帶びた。

お民が發狂して子供を殺した。すぐ來いとした電報なのであつた。



青蛙

正宗白鳥

小さい青蛙は先日の大雨に早稲田田圃から匐出して、泥溝を通り石垣を攀ぢ、この家の庭へ這入つた。木蔭や床下をのそ〳〵匐つてゐたが、今日は朝から便所際の袖垣へ登つて、手水鉢の柄杓の端にへつたり身を吸付けてゐる。

黃金色の美しい瞼を細く開けて、底深い黑い瞳て、照付ける空間を見詰めて、何時までもじつとしてゐる。

羽の硬い大きな黑い蝶々がその側をヒラ〳〵飛廻つた。氣忙しい蜂がブン〳〵音をさせながら、その脊を掠めた。が、彼れは脇見もしない。此處の妻君は白い手の平て水をすくつて、青蛙に浴せかけた。が、彼れは微塵動ぎもしない。

眞夏の光は刻々に暑さを增して、手水鉢の水は溫み、柄杓の柄も熱を含んて來たけれど、彼れは其處を離れやうとはしない。平然として、青い脊の焦

付くまゝに任せてゐる。

縁側近く座つた此處の主人は、額に汗を浮かせ、たるんだ目をしてゐる。眩しい庭を眺めたり、靜止した青蛙を見詰めたりしてゐたが、すると、次第に心が盪かされて、キラ〳〵した光の中に蛙の姿が大きく幻のやうに見え出した。そして、座つてゐる力も失せて、われ知らず倒れるやうに横になつて、其處にあつた洋書を枕に、假寢の夢に入つた。深い谷へでも落ちて行くやうな氣持で、睡りに落ちた。

歯並の不揃ひな口を半ば開けて、唇を微動させてゐたが、その呼吸は弱かつた。勇ましい周圍を飛んでゐた二三匹の蠅の一つが、甘い物でも見付けたやうに、ふと主人の汗ばんだ首筋に留まつた。汗を甜めながら耳朶から頬を傳つて、小鼻の上で羽音を立てた。主人は無意識にそれを拂ひ退けて、無様に寢返りした。

……彼れは手足の逞ましい餓鬼大將の六郎に引摺られて、赤土の食出た山道を、喘ぎながら上つて行つたが、何時まで立つても道は捗らない。と、やがて、六郎の顔が恐ろしくなつて、榮螺のやうな拳で、彼れを下へ突落した。…………

石ころの上を轉び落ちてゐた彼れは、足をピク〳〵動かしたばかりで、再び空虚な睡りを貪り出した。

一しきり泣いてゐた隣の子供は裸體のまゝころび寢をして、シンとしたその家では、開放された便所の戸のみギイ〳〵と幽かな音を立てゝゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふと輕い靴音がして、靜かに格子戸が開いた。入つて來たのは此家の妻君の從妹てあつた。ふは〳〵と肥つて、凉しさうに澄んだ眼をしてゐる。

「私明日つからお母さんと箱根へ行くのよ」。と、立ちながら云つて、「この家は暑いわね」と、庭の方を見やつて微かに眉を顰めた。

「箱根は凉しいんてせうね。……長く行つてるつもり?」と、妻君は羨ましさうに云つた。屢々耳に馴れて懷かしい者になつてゐる箱根といふ名は、心の中に美しい影を呼起させた。

「一月ぐらゐ行つてるんてすつて。……だから、色々の者を持つて行くのよ。どつさり荷物があつてよ。」

さう云ひながら、從妹はふと編物針を入れ忘れたことを思出した。外に何も忘れ物はなかつたかと、上目を使つて考込んて、小聲て自分の持物を數へてゐたが、やう〳〵安心して、「姉さんも入つしやらない?。二三日ても」と、浮いた聲て云つて、相手を見上げた。

「さうねえ。行けるといゝけど」と、妻君は言淀んて、「彼地へ行つたら、繪葉書を寄越して頂戴な」

「えゝ。繪葉書なら毎日ても出してよ。……私彼地へ行つてる中お稽古したいことがどつさりあるの。」

從妹は躍立つやうな心て、また何をか考へて樂んてゐた。

「何を御馳走しようかね。……貞ちやんは白玉が好きだつたわね」

「えゝ」

從妹は一つ所に座つてはゐないで、茶の間の窓から隣の家を覗いて見たり、鼠入らずの上に置かれた重い水差しを、爪立足て取り下ろして珍らしさうに見たりした。

妻君は白玉を水に冷してゐる。臺所には血汐の付いた鼠取り機械と、大きな南瓜とがあつて、二つとも從妹の目を惹いた。鼠取りを引寄せて、その仕掛けを不思議がりながら、怖々弾機を動かして見た。

「それで、もう五匹も取つたのよ」と、妻君は振返つて仰山さうに云つた。

「あら、さう?。これぱかしの針金て鼠が死ぬるの」

從妹は思はず指を震はせながら身を退いた。機械の板に染付いた血汐の跟に心は戦いた。

「餌を取らうと思つて、側まて來ると、直ぐに掛金て首が締められるのよ。ガチャッとそれは大きな音がするの」

「まあ怖い。私厭だわ、こんな者」と、從妹は顔を背けた。が、今まて晴々してゐた心の中には、ふと、氣味の悪い鼠のみが驅け廻はり出した。血を垂らしてキイ〱鳴きながら…………

妻君の頭にも醜い鼠の姿が浮んだ……「夜中に掛つた時には痛さうに啼出して、その機械を引摺つて其處等中暴れ廻るんだよ。それは氣味が惡いの。……でも、今掛るか今掛るかと思つて待つてると、何だか樂みな氣がするよ。……鼠つて何故あゝ馬鹿なんだらう。一匹引掛つたら外の鼠は氣が付きさうなものなのにね」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さうね。……だけど、そんなにどつさり捕つたら、もう鼠はゐないんでせう。まだゐて?」

「ゐますとも」と、妻君は言葉を强めて、「まだ幾つゐるか知りやしない。家が古いんだもの……ほら、茶の間の天井で音がしてるでせう」と、仰向いて耳を澄した。

コツ〳〵驅けてゐる鼠の足音は、從妹の耳にも觸れた。それは今夜首を締められる鼠のやうにも思はれた。すると、急に茶の間にゐるのさへ無氣味になつて、緣側へ辷り出て、熱さに乾いて土の裂けた庭を眺めた。

蜂が飛んでゐる。楓の枝から枝に渡した蜘蛛の巣には大きな蠅が掛つてゐる。小さい蟲の死骸を幾つもの蟻が力を合はせて引摺つてゐる。從妹は柱に凭れて唱歌を口ずさみ出した。そして、醜い鼠の姿は次第に心から薄らいだ。

……主人は堅い洋書の枕から頭を辷らせながらも、まだ睡りに沈んでゐた。……見覺えのあるやうな無いやうな人間が、枕許に立つて、不明瞭な口を利いて騷いでゐたが、その男の大きな身體は次第に彼れの上に蔽ひかぶさつて、呼吸も妨げられるやうになつた。押退けやうとしても手は些しも自由にならない。……燃えるやうな熱い空氣は一面に漲つて、遠くの方は紅色に染んでゐる。……彼れの手足には重い錘が付られてゐるやうだつた。……知らない男の顏は何時の間にか、孰く知つてゐる人の顏付に變つた。そして、幾人も〳〵知人の顏が左右に現はれ出した。どれも〳〵親みやうのない醜惡な姿をして動いてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「君は今度の帝劇を觀ましたか。……」
「あの踊りは非常に美術的だつた……」
「君は信州へ旅行してたつてね。彼方はどうです……」
「彼奴は信用の出來ない奴だよ。おれは先日酷い目に會はされた。京橋のある會社にいゝ口があるから周旋してやらうと云ふから、僕は……」

誰れが話すともなく、いろ〳〵の話で左右が賑はつた。が、睡れる主人のみは、口を利かうとしても言葉が出なかつた。

やがて、半ば夢も醒めかけたので、彼れは誰れかゞ大きな聲でこの苦しい夢から呼起して呉れゝばと望んだが、其處にゐる知人の誰れの聲も、彼れを目醒ますだけの强い力を含んでゐない。側へ來て手で搖起して呉れさうな人もゐない。

彼れは自から醒めやうとして、身體に力を籠めたが、目蓋は重くつて如何にしても開かなかつた。知人の顏もぼんやりして、再び恐ろしい夢の底へ引込まれさうになつたので、心を凝らしてゐた。褪せた脣を開いて、瘦せた小鼻のあたりをピク〳〵させながら、術なさうな顏付をしてゐた。

……從妹はふと青蛙に目を着けた。そして、緣側傳ひに手水鉢の側へ來て、兎見(とみ)から見してゐたが、やがて、妻君と同じやうに手の平で水をすくつては浴せかけて面白がつてゐた。

「姉さん、一寸入らつしやい。面白いんですよ」と、思はず高い聲を出した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「なあに」と、臺所から妻君が答へた。

その聲と足音とて、主人は俄かに夢を破られて、吃驚したやうに目を開けた。ほんの今奇怪な酷い奴に取つかまつて怖い目に會はうとしてゐたと思はれるのに、それが何であつたか、目が開くと共に最早記憶に跟をも留めなかつた。周圍を取捲いてゐた人の顏も話聲も消えて、明るい光を前に、妻君と從妹とが笑顏で緣側に立つてゐるのが目に映つた。

懷かしい者を見付けたやうな氣がして、主人はすつと起上つた。欠伸をして緣側へ出て、『何を見てるんだい』と訊いた。

「こんな蛙が今朝から此處にゐるんですよ」と、妻君は指差した。

「何故そんな窮屈な所にゐるんだらう」と、主人の目も二人の女と同じ方へ向いた。從妹の手で柄杓の柄がぐる／＼手水鉢を廻されると、青蛙も平然としてぐる／＼廻つた。その樣が可笑しいと云つて、皆んなが一緒に笑つた。

「此奴を見てる中に眠くなつて、餘程寢てゐたやうだが、まだ日が高いね」と、云つて、主人は端近く出て空を仰いてから、從妹を見下し、

「貞ちやんはこんな暑い日によく遊びに來たね」

「私、お暇乞ひに上つたのよ。明日つから箱根へ行くの」

從姉は得意らしい面持した。箱根といふ言葉をば殊に力を籠めて云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「てね。お母さんから兄さんにお言傳てがあつたの。……私の家が涼しいから、何時でも氣の向い亢時に御勉强に入らつしやいつて」から媚びるやうに云つて、相手が喜ぶだらうと思つて待つてゐたが、主人は氣のない返事をしたばかりだつた。

靑蛙は相變らず飛出た眼を見据ゑたまゝ、畏まつて柄杓に止まつてゐたが、最早女達の目を惹かなくなつた。妻君は從妹を連れて茶の間の方へ行つた。

白玉は丼に冷されてあつた。妻君はコップへ抄ひ込んでは砂糖を入れて、從妹の前に置いた。

「美味いてせう」

「えゝ美味いわ」從妹はさも味さうに食べてゐた。

「この白玉を鼠の餌にするのよ。あの針金の側へ絲てくゝり付けとくの」

「さう?。鼠は好きなんてせう、こんな者は」從妹は平氣て云つて、鼠取りの方を横目て見てゐた。

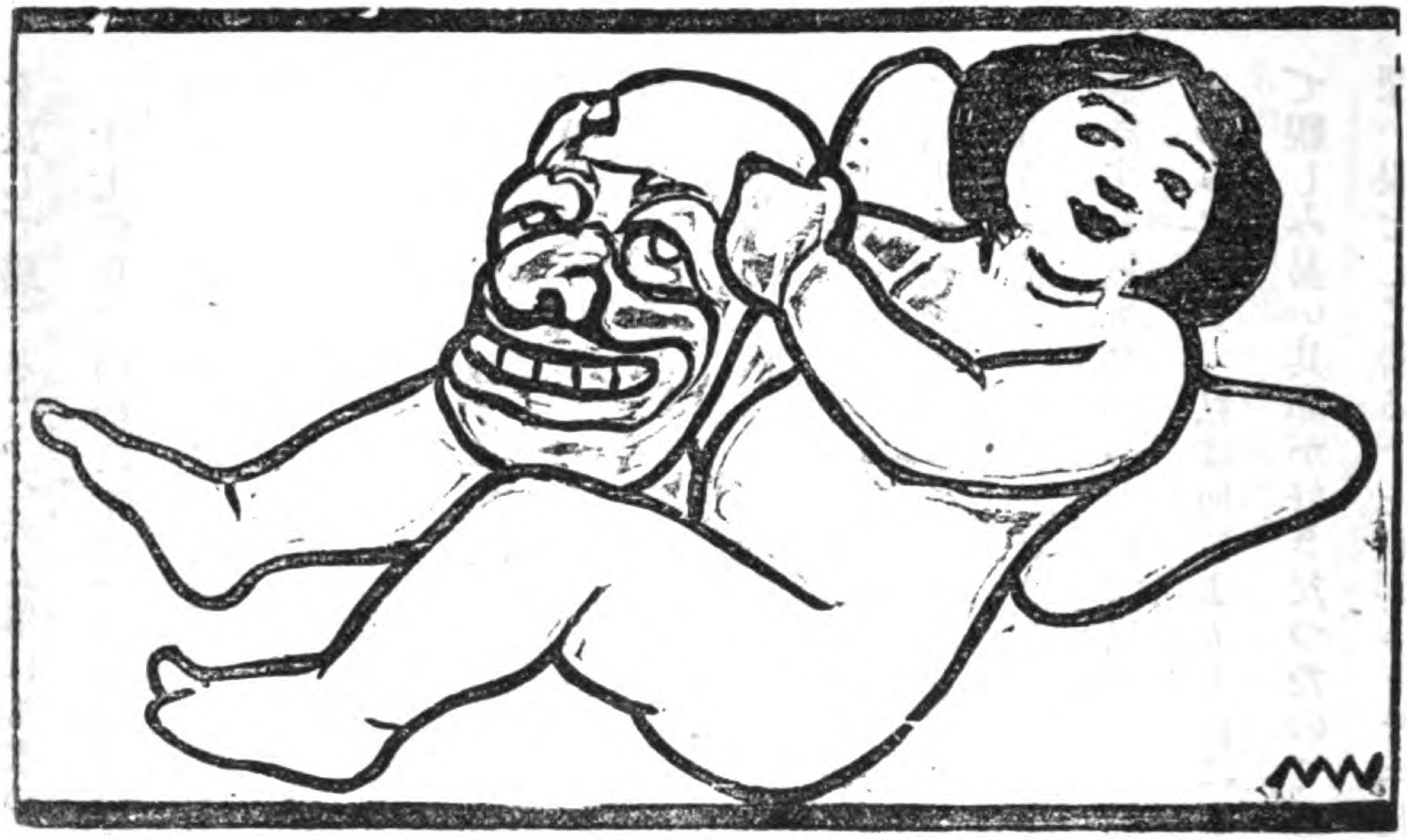
隣りの子供は熟睡から醒めると直ぐに、氣立たましい泣聲を出して、母を呼び慕つた。

主人はその聲に惱まされながら、所在なく庭を見てゐた。黑い蝶や赭い蜂が光の中を飛んでゐる。蜘蛛の巢には小さい蟲が幾つも引掛つてゐる。小さい蟻は反返つた土の上を小さかしく匍ひ廻つてゐる。こんな者をぼんやり見てゐる間に、次第に光も退いて、涼しい夕暮れの影は庭を蔽うた。何處からか風が靜かに吹いて來て、快く肌に觸れた。

彼れは行水を使つて、夕餐を食べると、散步がてら、午睡の夢に見た知人の一人を訪ねて、午睡の夢

の中で聞いたやうな事を與ありげに暫らく話合つた。そして、家へ歸ると、妻君を手傳つて、鼠取りの仕掛をして、寢床へ這入つた。(了)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



大津順吉

志賀直哉

第壹

一

「自分の生涯にはもう到底戀と云ふやうな事は來はしない」かう云ふ事を思つては私はヨク淋しい想ひをした時代があつた。仕事にもマルデ自信がなかつたし、「戀が何んだ！」とそんな強い音は迚も出せなかつた。

其頃私は生ぬるい基督信徒だつたのである。

境遇として色々な誘惑に遠かつた私はポーロの「汝等淫を避けよ」と云ふ言葉を殆どモットオとして居た。私にとつて此モットオを敷衍すると、妻にする決心のつかない女

を決して厭するな、と云ふ事にもなつた。こんな事が私を益々女に縁のない生活に導いたのである。

十七の夏、信徒になつて、二十過ぎた頃からは私には女に對する要求が段々強くなつて行つた。私は何んとなく偏屈になつて來た。其偏屈さが自分でも厭はしく、もつと自由な人間になりたいと云ふ要求を時々感ずるやうになつた。然しそんな事も私の信仰を變へる迄には其頃の私としてカナリ長い時日と動機となるべき色々な事件とが必要だつたのである。

小供から學校が嫌いて、物に厭ッぽくて、面白くない事にはマルデ努力出來なかつた私は信仰上の事にも實際怠惰者であつた。私は自分の信仰は十七の時からヅーッと教えを聽いて居る角筈のU先生に預かつて居て貰ふやうな心持て居た。尤も先生はイッモから云つて居た。「人間が同じ弱い人間に倚つて信仰を保つて居る位危險な事はない。第一吾々が師と呼ぶべき者は唯一人しかない。それはキリストである」然し我の强い、いゝ意味て一本調子な先生は少しでも自分と異つた信仰を持つやうになつた弟子は只出入りする事さへ快く感じなかつた。それは弟子となつて居る者は誰でも感じないワケに行かなかたらうと思ふ。まして私は運動事と小說本を讀む事、これ以外に殆ど得意のなかつた頃て先生の考へを批評する氣もなかつたし、只々偉い思想家だと決めて、それを手頼つて居たのであつた。

のみならず、私は何によりも彼によりも、先生の淺黒い、總て造作の大きい、何んとなく恐しいやうて親しみ易い其顏が好きだつたのである。高い鼻柱から兩方へ思切つて、グッと彫り込むだやうな鋭い深い眼をして居る。それがニーチエにもカーライルにも何所か似て居る。ベートーヴエンが歐羅巴第一

の好男子であると云ふやうな意味で、先生は日本第一のいゝ顔をした人だと私は獨り決め込むで居た。

――「淫を避けよ」と云ふ言葉をモットオにしてゐた位で、私にとつて教えての最も不調和なものは姦淫罪の律であつた。教えに接するまでの三四年間に男同士の戀で自由を行つて來た、その習慣からも姦淫は私にとつて殆ど唯一の誘惑になつてゐた。私は教えに接すると間もなく烈しく自身の肉體を呪ふやうになつた。

其頃私はレイノルズの「天使の頭」と云ふ題の寫眞銅版の額を自分の部屋の鴨居にかけて置いた。可愛らしい子供の頭が四ッ五ッ、首のッケ根から生えた小さな翼で空を飛び廻はつて居る畫だ。肉體を切りに呪つて居た私には此繪が殆と來世での理想だつたのである。

或る日、先生の居ない時、弟子達が十人ばかり寄つて、「復活の時には此肉體は如何なるか？」と云ふ問題の相談をした事があつた。文科大學へ通つて居る人が、

「靈魂だけで飛び廻はつて居るとは僕には考へられないネ。若し何かそれの宿るべき物がなければならないとすると、それは今の此肉體であつて欲しいネ」かう云つた。それては私には困るのである。未だ新米の信徒だつたから私は恐る〳〵小聲で云つた。

「僕は首から上だけで復活して呉れないと困ると思ふんです。左うでないと天國も此世も結局同なじ事になつて仕舞ふと思ふんです」

誰も相手になつて呉れなかつた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

醫科大學へ行つて居る人が云つた、
「毎日學校でアルコール漬けの人間を見て居ると、此肉體が其儘復活するとは考へられないからナ」

二

こんな相談をして居た頃からは五六年經つて、或るクリスマスの晩だつた。皆圓形を作つて膳に就くと、先生は快さゝうに一座を見渡して、
「此中ではもう中野君と大津君が一番古狸だネ」と云つた。私もそんな事を云はれるやうになつた。尤も此長い間には自分の仕事と云ふやうな事に就いても色々と考へが變つた。「結局自分は傳導者になるやうな事になりさうだ」から云ふ聖いやうな、淋しいやうな心持になつた事もあつた。(宗教を聽く迄の私は外國貿易で大金持にならうと考へて居たのである)又私は哲學者にならうと思つた事もあつた。而して仕舞に私は純文學へ行く事に決めた。然し此間最初から變らずに絶えず私を苦めて來たものは私の肉體に湧く力であつた。

或時先生がから云ふ話をした。
「姦淫の大きな罪である事を本統に強く云ひ出したのはキリスト教が初めて、而して姦淫は殺人と同程度に大きい罪惡である。」
私は此言葉から恐しく不愉快な響を受けた。

それは私の「心」と「體」とが絶えず戀する者を探しながら、「境遇」と「思想」とにさまたげられてゐる、その不調和が苦しくて〳〵ならない時だつたからでもあつた。其頃私は自分の部屋の床の間に人間の顔より少し大きいヴィーナスの石膏の首を懸けて置いた。私は美術品への愛好心からでも、文學的な洒落氣からでもなく此石膏の女に一種の愛情を持つてゐて、悶えるやうな堪えられない氣分になると時々私は其冷めたい固い唇に接吻をした。私の鼻を觸れ合ふヴィーナスの鼻が仕舞に薄黑くなつた。私は或日自分が入る時、湯殿にそれを持ち込むでシャボンですつかり洗つた事を忘れない。

左う云ふ私は先生の言葉に反對して「闕子と眞三」と云ふ小説を其時書いた。これが私には初めての出來上つた小説であつた。內容は結婚した夫婦の間にも姦淫罪はある。結婚しない相愛の男女の性交にも姦淫てない場合が幾らもあると云ふ考へて、一體姦淫とは何んだ、と云ふやうな事を書いたものであつた。

三

或日――其日は殊に私の不機嫌な日だつた。親しい友達の一人が近頃眞理を恐れ始めた。とそんな事を私は獨り部屋の中て考へて居た。私は所感を書きとめて置く小さな手帳を開いて、小むづかしい顔をしながら、「人間も自分が眞理を知る事を恐れるやうになれば、もう救はれない墮落てある」とこんな事を書いて居た。

其所へ女中が女の人から電話がかゝつたと云ひに來た。珍らしい事て私は少し胸を跳らせながら電話

口へ出た。

「今度の水曜日に皆さんに來て頂いて遊ばうと思ひますから、貴方もどうぞ……」

「どんな人が出ますか？」

「明光さんや佐藤禮吉さんもいらして下さいます」

「何時からですか」

「八時からどうぞ……　今度はダンスは致しませんから是非……」

「大概あがります」

「大概なんて仰有らないで是非ね」

電話を斷つて二階の部屋へ歸つて來ると、もう私の氣分は餘程變つてゐた。私は坐蒲團を四つ折りにして、それを枕にして寢ころんだ。而して私は四五年前、新富座で川上音次郎が「狐の裁判」と「浮かれ胡弓」のお伽芝居をした時に隣の桝に來てゐた十二三の眞圓に太つた何の表情もない顔をした混血兒の小娘を憶ひ起して居た。

其時から私は其小娘の兄と知り合ひになつて二三度往き來をした。

一年か一年半程して、其男がドレスデンへ行く事になつた時、私は其家へ招かれた。仲間の會があつて、餘程晩くなつて私が行つた時には食事が濟むで應接間の大きなテーブルて知つた顔の四五人がピンポンて夢中になつて居る所だつた。隅のソーファてそれを見てゐると、少し醉つて赤い顔をした男が入

つて來て、

「日本間で百人首が始まるとさ。出來る奴は行かないか——大津はうまいんだらう」こんな事を云つた。

日本間へ行くと其所には新富座で見た時とは見違える程美しく、大きくなつた娘が居た。其母も兄も居た。私は其二人に挨拶をした。然し娘は何かしらんイヤに高慢な顏つきをしてゐるので、それが自然私をも娘にだけは高慢な顏つきにして了つて、遂に挨拶は互に仕舞ひまで仕ずに了つた。

一度組になつて私は偶然其娘と並ぶ事になつた。私から娘、其向ふ隣りが娘の兄、と、かうなつてると、娘はツヽクサ起つて、

「私と更つて頂戴」と兄の向ふに身を差し入れて、無暗と兄の體を此方へ押してよこした。私は「生意氣な奴だ！」と獨り思つた。

——娘とは其後色々な所で會つた。新橋の停車場で會つた。大晦日の晩に銀座で會つた。高等商業學校の外國語の大會で會つた。歌舞伎座で八百藏が土佐坊昌俊の芝居をしてゐる時に會つた。上野の或る音樂會で馬車に乘つて來るのに門の所で會つた。麻布の谷町で擦れ違つた。而して其度々いつでも兩方で知らん顏をしてゐた。

或時速夫といふ、其頃大學へ通つてゐた五六年前にヨク遊んだ年上の友達が、

「ウィーラーの所のダンスで男が足らないから君に來て吳れとさ」と云つた事がある。

「ダンスは閉口だ」

「西洋人が澤山來るから會話の稽古になるぜ」

「西洋人も閉口だ」

「なぜ？――そんなら何時か見に來いよ」

「見にだけなら何時か行かう」

「そんな事を云つたつて、直ぐ引つぱり出されるけど……」こんな事を云つてゐた。

暫くすると速夫と其娘とが互に有頂天になつて居ると云ふ噂があつた。

所が、間もない或日娘から電話がかゝつて、――私は其時初めて娘と口をきいた。

「男の方が足りないんですから、是非……」と云ふ。それが私には「習ひたての下手な方があつて、其相手に困つてるんですから」と云ふやうにも聞えた。少なくも其所まで用心しなければ――左う云ふ氣が直ぐ起つた。斷ると、

「でも此間速さんにいらつしやると仰有つたんでせう」詰るやうな調子だつた。

又半月程すると同じやうな電話がかゝつた。其時も私は斷はつた。其時でも前の時でも、不愛想に斷はつて置きながら、後で暫く其事に就いて私は色々な事を考へないでは居られなかつたのである。而しては仕舞に私はヨク自己嫌惡に陷つた。

其暮れ、娘からクリスマス・カードを送つてよこした。それを受取つた日私はワザ〳〵丸善まで出か

けて賣れ殘りから長い事かゝつて三枚撰むで、歸つて又それから一枚撰むで娘へ送つてやつた。——尤もかう云ふ事は相手が何者でも多少は必ず働く私の癖てはあつた。

——其の後娘からは電話がかゝらなくなつた。速夫は鎌倉て別莊を隣り合はせにしてゐた人の娘と結婚して、間もなく三井物産會社へ入つて、其所の綿の方の係りて米國のオクラハマへ出かけて行つた。而して彼と有頂天になつてゐた娘はそれからヒステリーのやうになつたと云ふ噂を私は聞いてゐた。

……………四つ折りにした座蒲團を枕にして、かう云つた色々な事を憶ひ出して居る内に私は不意に身を起すと、本箱の抽斗から一冊の女の雜誌を出して來た。

其口繪に、或る外交官の家て、日露戰爭が濟むだ祝ひの宴會てした活人畵の寫眞が出てゐた。日の出前の海の背景て英國大使の娘の平和の天使がヤシの葉を片手に持つて、片手て大和姬の手を高くさゝげてゐる。大和姬の一方の手には白い鳩がとまつて居る。神代風の兩方へ分かれた髮の端が輪になつて、それが兩乳の上あたりに輕く垂れて居る。耳を隱し、豐かな頰に添つて垂れた髮が肉附のよい顏を一層可愛らしい形に輪廓を取つて居る…………

四

水曜日と云ふ日が來たが、私は朝から氣分が惡かつた。體も妙に太儀て、午后一寸學校まで行つて歸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るともう坐つてゐるのもツライ程に疲れて了つた。が、病氣とは思つてゐなかつた。
日が暮れると曇つて來た。私は部屋へ寢ころんで、不愉快な心持で、ボンヤリ迷つてゐた。其内七時半になつた。イヨ〳〵決心して倬を呼びにやると、私は大學の制服に着かへて、秋の寒い晩だつたから外套も着た。
倬は其家から半町程手前の坂の上で降りて私はソロ〳〵と其所から歩いて行つた。其時背後（うしろ）から坂路を勢よく倬が二臺私を追ひぬいて、娘の家の門を入つて行つた。
其二人とは私は玄關の中で出會つた。――顏も名も互によく知り合ひながら、知り人ではないと云ふ關係が都會の生活では殊に多いと思ふ。――其二人も私にとつて左う云ふ類の人々であつた。背の高い方が帽子掛けに附いた鏡の前でネクタイの傾を直してゐる所だつた。而して二人共燕尾服で踊り靴を穿いてゐた。
二人と入れ更つて私は右手の其小さい部屋に入つて外套と帽子をかけると、不快な氣分に被はれながら二人の入つた客間へ足を運んだ。
「アー、大津さんでいらつしやいますか」久しぶりで會つた娘の母が直ぐ愛想よく迎えた。娘は其所に見えなかつた。明光も禮吉も見えなかつた。娘の母は、
「暫く。お變りもありませんで？　何より！」
妙な切れ〳〵な詞を使つた。

「ジョージさんは御變りありませんか」

「ありがたう。どうもあれは甚く筆不精な見てすから、大方何方も御不沙汰てムいませう。心ては充分思つてるんてムいますが……」

こんな事を云いながら、ピアノの上の譜を撰り分けて居た二十四五の前にも此家で會つた事のある混血兒の女に

「ミス高木」と呼びかけた。

「ハ」

「貴女御存知てせう？」と紹介の手だけを私の方へ延ばして「大津さん」今度は私の方を向いて「ミス高木」と云つた。

こんな風に毛ば立つた制服にあみ上げの靴を穿いてゐる私が、燕尾服からタキシードと順々に紹介された。

「ジョージさんは矢張りドレスデンてすか？」

私にはこれより他に話の種はなかつた。

「此春からロンドンの方へ參つて居ります。實は來年の春位まであちらへ置く心算てしたが、獨逸はどうも性に合はないとか申すもんてすから……」

髮を奇麗に分けた男が寄つて來て、馴々しく娘の母に

「お絹さんは？」と云つた。

私は後ろのソーフアの端に腰を下ろした。

「あちらで何かしてませうよ」

「病氣はもうスツカリおよろしいんですか」

こんな會話を聞いてゐると、同じソーフアの他の端にゐた四十格好の赤ら顔の西洋人が腰をずらして私の方に寄つて來た。私は「オヤ〳〵」と云ふやうなイヤな氣がした。西洋人は私の學校の事に就いて英語で話しかけた。然し獨逸人らしかつた。――――娘の母は娘の病氣の話をしてゐる。

「一時は貴方、何を頂いても上げて了うんでネ、頂く物がないやうなソケてしたのよ。ツイ先頃まで林檎のおつゆだけ吸つて居ましたが、よくまあ、持ちました。それが貴方五六日前不圖、久し振りでダンスでもやつて見やうかと云ふもんですからネ、父も喜びまして、疲れたら直ぐ休むやうにと申しましてネ、今晩皆さんに御いでを願つたんですの……」

西洋人は文科ならフロレンツ君を自分はよく知つてゐるなど云ふ。

外國語――中でも會話の不得意な私は人の居る所で話をするのがイヤで〳〵ならなかつた。然るに……

――餘談になるが――――私は大學では英文科に籍を置いて居た。そればかりでなく、私は卒業後は田舍の中學の英語の教師にならうと考へてゐたのである。生涯の仕事としては其頃から私は文學上の創作をしやうと云ふ考へであつた。それには相當の自惚れもあつた。然し仕た仕事が殆ど一つもない點で其自

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

惚れにはマルデ裏うちが出來てゐなかつた。私は時々の氣分次第で根こそぎ其自惚れを見失つて了ふ事が少なくなかつた。「イマニ何かする」かう思つても、それが何時の事か少しも見當がつかなかつた。

「君は大きくなつたら何になるんだい？」

「僕はネ、陸軍大將になるんだ」

七つか八つの小供――勿論私も實際に其一人だつた――がかう云ふ事を云ふ。それと殆ど變らなかつた、假令、それに「僕は世界的の大文豪になるんだよ」と云ふ言葉を用ひなかつたにしても……。只異つてゐる所は小供はそれに不安を感ずる事はないが、私にはそれが時々來る事である。

所で、私の父は私に就いてかう思つてゐた。

「偏屈で、高慢で、怒りッぽくて、泣蟲で、獨立の精神がなくて、怠惰者で、それにどうも社會主義のやうだ」

而して私にはヨクかう云ふ。

「貴樣は大學を出たら必ず自活して呉れ。ええ？　これは貴樣を一個の紳士と見て堅く約束をして置くからナ」

私が學習院の高等科になつた頃から、將來の話の出る度々に父は決してこれを云ひ忘れなかつた。父はかうして實世間的に私を教育しなければならぬと考へてゐた。所が、私はこれを云はれる度に「臆試し」の遊びて臆病者が強い子供に意地惡をされる時のやうな心細い心持を感じずには居られなかつた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私には自分の書いた物が實際に金と代へられる場合をどうしても考へられなかつた。――書いた物ばかりてはない、自分の仕た事の報酬が金になつて自分の手に渡されるどんな場合をも想像する事が出來なかつたのてある。――假りに、或る時期に書いた物から金を得る事があり得るとしても、それで生活出來る程、左う多く書く事は私には到底出來ない。若しそれをすれば私は生涯の仕事として只ヤクザな作物を量に於て殘すだけて、それも人類の間にてなく、自分の子孫（それらが若し祖先を尊ぶ氣の多少ある人々てあれば）それに殘すだけてある。こんなに思つて居た。

其位なら、持つてゐる或る固定した智識を見せては引込まし、見せては引込まし、十年一日の如く、そんな事をしてゐても立ち行き得る中學教員になつて、生活の費用はそれて得た方がいゝと考へた。或る限りある食物を三度づゝ食つて、それを毎日繰返して行くといふ物質的な生活の爲めには實に格好な職業てある、と考へて居た。慾のいゝ私は散々にナマケて來た自分の「中學時代」に其場合どれ程ひどい裏切りをされるかはマルデ考へてゐなかつたのてある。而して私はそれに英語を撰むだ。尤もそれは不得意さの程度が國文も漢文も全く變りなかつたからてもあつた。

…………西洋人は何の文學を研究してゐるかと訊いた。私は日本文學だと答へた。後ては、それてかまわなかつた、と思つたが、其時は答へながら烈しい不快に陷らずにはゐられなかつた。これ程明らかなウソを自分は何年ぶりて云つたらうと思つた。

西洋人は又何か私に尋ねたが、それが解らなかつた。問ひかへしても、未だ解らなかつた。私は當惑

したやうな不機嫌な顔をして、もう默つて了つた。西洋人も少し當惑したやうな顔をしてゐたが、微笑しながら起つて行つた。クサ〳〵して堪らなくなつた。少し前屈みになつて靜かに歩いて行く西洋人の丸い肩を私は親みなく見送つた。其時私は少し離れた所から、サッキ玄關で會つた男の一人がそれとなく此方を見て居たのに氣がついた。

廣間との堺の大戸が兩方に開かれた。寄木の床はスッカリ拭込むであつて天井の電燈を其儘に映(うつ)して居た。私の氣分は益々惡くなつて行つた。額から油汗のやうなものが出る。私は太儀な體を起こして、廣間に懸けられた色々な繪を見に行つた。黑い眞圓な椽(ふち)に入つた文晁の浪の繪があつた。其他は主(おも)に浮世繪派の物で、北齋の八十七歳の肉筆で雨中の獵人と漁夫の對幅などが其三四年前錦繪のコレクションに熱中しただけに私の心を惹いた。私は左う云ふ物で四圍を忘れやうとしたが、それは體の方で許さなかつた。私は元のソーフアに還つた。明光や禮吉は未だ來なかつた。

和服で紫がゝつた袴を穿いた十六七の脊のスラリとした細面ての美しい娘が其邊を歩いて居る。それが永い病氣で左うなつた此家の娘だとは私は心づかなかつた。メランコリックな顔の表情と細々と如何にも疲れたやうな弱々しい體の表情とが其所にゐる他の男や女の誇つたやうな一種緊張した心持て見得を張つて居る中に際立つて私に親しみの感じを起させた。コルセットて緊めた程に腹の所が細くなつて居て、心持前のズリ下がつた帶の上に輕くふつくりと懷(ふところ)がたるむでゐる。その洋服のやうな着方にも一種の感じがあつた。

暫くして氣がついて、私はその烈しい變りやうに驚かされた。二三日前自分の部屋で見た雜誌の口繪とは殆ど同人と信ずる事が出來なかつた。

プログラムがくばられた。金椽の小さなカードを二つ折りにして、小楊子より少し大きい金屬性の美しい色をした鉛筆が絹のヒモでそれへ下がつて居た。男共は直ぐそれを持つて女に相手を申込み始めた。女のを受取つて其番へ自分の名を書き込むでゐる者もあつた。

「貴方は？一番は誰方と？」腰かけたつきりで居る私の所へ又娘の母が來た。

「オドリは出來ませんから、拜見してゐます」私は溜息でもするやうに答へた。

「エヽ？　お上手なんでせう……」と笑ふ。

私は「底に鋲の打つてないだけの此靴を御覽下さい」と云ひ度かつた。然し第一にそれが輕く云へる程開けた人間で私がなかつた上に、其時の氣分が益々私をカタクナにして居たから、返事を仕ずにゐた。

「遠藤さんの奧さん」娘の母はかう美しい混血兒の女に呼びかけた。それは私の家から半町程離れた所に居る或る外國の會社の代理店の支配人をして居る人の細君で、內氣ないゝ人であつた。

「貴女、どなたかと一番御約束があるの？」

「エヽ」

「二番は？」

「ありません」

「左う……。大津さんと御約束をして下さい」

輕く首肯いて其人は往つた。私にはもう直樣にそれを斷はる元氣もなかつた。

「二番は？」と鉛筆で帶へ挾むで下げてゐたプログラムを取上げて見ながら、「ツゥ・ステップスですネ。易しいんですもの直ぐ出來ます」から云つて娘の母も私の傍をどいた。

間もなく廣間には男と女と二人づゝ並むで立つた。高木といふ女の彈くピアノが鳴り出すと同時に皆が動き出した。

私の性質からも趣味からも、かういふ事は好きである筈だつた。然し私には禁慾的な思想と、それから作られた第二の趣味と性質とがあつた。しかも、それらは本來の趣味や性質より私の意識でイヤに明らかなる點で私は知らず〳〵それへ義理立てをしないではゐられなかつた。私は殊更な輕蔑と呪ひの眼で、顏に血の氣を上げて踏り廻はつてゐる人々を見てゐたのである。今の私は思想に義理立てをするやうなかういふ弱い心を耻じてゐる。けれども、若し同じ事が今の私に來やうとも私は私の本來の性質や趣味にコダワリなく從ふ事が出來るかどうかを疑ふ。多分出來ない。

…………………それが濟むと廿人近かい人々は私の居る部屋へ還つて來た。

娘とは未だ挨拶をしなかつた。娘は時々私の方を見てゐた。けれども私が私の顏に表はして居た表情が娘の近よる事をこばむでゐるらしかつた。

二番目の踊りが始まらうと云ふ時に內氣らしい若い細君が私の側に來た。

「失禮します」私は或る努力を以つて、それを靜かに慇懃に斷はつたつもりだつた。所が、氣分と體から來る不快が私の聲帶で裏切つて居たから何んにもならなかつた。

内氣らしい若い細君は顏を少し赤らめて只首肯いて行つて了つた。

トゥ・ステップスが濟むで、スケーティングが濟むで、四番目がウォルッだつた。

其頃は私はいつか自身の不愉快な氣分に中毒して了つて居た。私はソーファに腰掛けた儘、不愉快な凝結體にでもなつたやうな氣持がして居た。

人々は愉快さうに、時々話しながら、時々笑ひながら電燈の强い光りを頭や背にあびて烈しく踊つて居る。

娘は背の高い若い西洋人と踊つてゐた。西洋人は左手で娘の體を支へ、右手はハンケチと一緒に娘の左手と握り合はせて、それを高く擧げた儘、クルリ／＼と輕くよく廻はつた。廻はる度に娘の體は兩足共に殆ど床を離れた。娘は太儀さうに自身の肩の上に首を傾けて居た。青白く見えた顏には血の氣が見られた。

其内如何にも疲れたらしい樣子で、娘は相手の耳に何かさゝやいた。西洋人は首肯くと、其儘踊り續けながら、娘の體を抱くやうにして巧みに人々の間を拔けて其けん外に出て來た。

娘は私とはステヂカイの隅の椅子に腰を下ろすと手近かな團扇を取つて獨りあほいでゐた。

娘は時々此方を見た。私は踊りの方ばかり見て居た。少時すると娘は兎も角もと云ふやうに起ち上つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。其時私はヂッと寧ろ一時堅くなつて前からの姿勢を保つてゐた。其場合若し私が少しでもクッロイだ姿勢に變れたら娘は必ず私の方へ寄つて來たに相違なかつた。娘は體て話しかけた。所が私の體はそれに答へる自由を失つてゐた。娘はその儘ピアノの傍へ行つて、その側面に輕く倚り掛かると何氣ない風て又踊りの方を見てゐた。私も踊りの方を見てゐた。然し私の意識は私の視野の最も端に置いてある娘の體にひたすらに集まつてゐた。

娘は思ひ切つたやうに體を此方へ向けると足を四分の一步程ふみ出しかけて――又ヤメた。而して娘は首を垂れて了つた。遂に娘は首を垂れたまゝ進むで來た。

ソーファに並むで腰かけた。娘はダンスの事も明光や禮吉の來なかつた事も一ト言も云はなかつた。而して兄の噂とか遠夫の噂とかをした。

「遠さんから二三日前御手紙を頂きました。此方の奥様にもうお兄さんがお出來になつたんてすつてネ」娘は少し笑ひながら、それに小供らしい惡意を見せてこんな事を云つた。

話してゐる内に私は段々に堅くなつて行く結びッこぶがゆるめられるやうな快さを感じた。

「兄と歌舞伎へいらした時、六代目の樂屋へいらしたんてせう？」

「エヽ」

偏屈な、邪氣のある、不愉快な心理を散々にくゞつて來て私は今、意味もない小供らしい會話の相手になつて了つた。

「川上のお伽芝居で御一緒になつた事がありましたわネ。あの時分、私九つか十位でしたのネ」娘は覗き込むやうに私の顔を見た。

「そんな事はないでせう」と私は答へた。

踊りは中々濟まなかつた。

「東京座の道成寺は御覧なりましたか?」から私がきいた。

「エヽ。中々よござんすのネ。貴方は所作事がお好きなんでせう?」

「日本の踊りは大好きです。然しかう云ふダンスなんか見て居て不愉快です」

私には皮肉を輕く云ふと云ふやうな藝當は迚も出來なかつた。

娘はそれには濟まして、直ぐ、

「十一日明治へ連中で參らうと思つてますが貴方も御入り下さいませんか。宅の親戚の者で大層左團次を贔負にしてる者があるんですの」と云つた。

私は此所でも、知らない人の中に入るのは、つまらないからイヤだ、と重つ苦しい嫌味をいつた。娘は笑つた。然しこんな事でも私の氣分は幾らかづゝよくなつて行つた。

其踊りが濟むと皆は、輕い食事の用意された隣の部屋へ行つた。女の連中は既に盛つてある皿と飲物とを受取つた。

凝結しきつた心持から多少自由になつた私はもう歸らうと思つて、男の連中が皆受取る空いた皿は受

取らずにゐた。それを見て娘の母は物を盛つた皿を持つて來てくれた。どうしたのか少しも食慾がない。若しかしたら病氣かナ、と思つた。

間もなく、私は娘と娘の母と、其他口をきいた三四人の人々に挨拶をして此家を出た。十二時を少し過ぎてゐた。

五

翌朝も具合の惡い事は同じだつた。私は朝の食事もせずに部屋にトヂ籠つて、前晩の事などを繰返しく考へてゐた。考へれば考へる程、私が通俗な言葉で云ふ「開けない男」である事が腹立しくなつた。自分は何時の間にこんな男になつて了つたらうと云ふやうな事を考へた。

私は又、娘の美しい細々とした體や、小供らしい其ツマラナイ言葉をてにをは一つ誤らずに憶ひ浮べては、長いく痴考に耽つて居た。

其末に私は娘へ手紙を書かうと思つた。――哀哉、偏屈な心！――私はそれに前夜の不快を書いて送らうと考へた。

午後、私は手紙はヤメて、それを云ひに出かける事にした。太儀な體を起して洋服に着更へて家を出た。

幼年時代を過ぎてからの私には女の友達と云ふものが全くなかつた。だから、それは殆ど初めての經

驗と云へた。然し男の友達を多く持つてゐる、あの娘にとつては私から訪ねられると云ふ事は左う突然な事てはあるまいといふのが僅かに私に勇氣をつけてゐた。

けれども、其日私はとう／＼娘の家まで行かずに了つた。それは其途中て娘の母に會つたからてあつた。

直ぐ引きかへす氣もしないので、其儘澁谷の友達を訪ねたが、友達は留守だつた。私はどうにもならない體を運ぶやうにして其屋敷の裏の廣い空地になつてゐる原へ來ると、木の影になつた草の上に横になつて、暫くは深い溜息をついて居た。

澄み切つた空の高い／＼所を白い雲が靜かに動いてゐた。時々烏が飛むで行つた。

――不知眠つて、再び眼を開いた時には日が入つて其邊の風物が總て青味を帶びて、烏の群が忙しさうに一方へ一方へと飛むで行く頃てあつた。私は幾らか輕い氣分になつてゐたが、もう友達は訪ねずに其儘俥を雇つて歸つて來た。

六

歸ると、上の妹と其次の妹とが飛び出して來て、上の妹が直ぐ、

「お兄樣！高ちやんが赤痢になつたんてすつて……」と其表情をしながら云つた。

「五日間は誰れも外出出來ないのよ」と次の妹が附け加へた。門番が其邊に石灰を撒いてゐる所だつ

た。

其晩から私も下痢を始めた。醫者は矢張り類似赤痢になつてゐる。然し極く輕いのだから此の方は警察へ屆けなくてもいゝだらうと云つた。

谷中の寺のだつた表の門を入ると、直ぐ左に小さな石の門があつて、それを入つた右が母屋の臺所で、左の突き當りがヤクザ普しんの二階建ての離れ家の玄關になつてゐる。此離れの事を自家では「書生部屋」と云つて、階下に近頃田舍から出て來た書生がゐて、二階に此家が建つて以來十何年か私が住むでゐるのである。

高子といふ四つになる妹は奧の母の部屋で母と看護婦だけの看護で、家の中で交通遮斷と云ふ事、又私は七十二になる祖母の看護で上下を通ずる恐ろしく嶮しい梯子段を堺にして矢張り自家の中ての交通遮斷と云ふ事になつてゐた。

祖母は隣りの四疊半の本箱や机や椅子などの置いてある狹苦しい中に寢て、私の腹を溫める爲めの蒟蒻を時々起きて冷えたのと熱いのを取り更へてくれた。夜中も二時間毎に起きては煮てあるのを乾いた日本手拭に包み、それを又西洋手拭で卷き、私の幾重にも卷いたフランネルの腹卷の間に挾むで呉れた。段々に熱くなつて來て、腹の皮がヒリ〳〵して來る。それが如何にも利きさうな氣がして私には快かつた。

私は病氣の場合いつも祖母の世話にならぬと云ふ事はなかつた。傳染病では六つの時にした腸チブスで、其時は全く祖母一人の手で看護されたやうなものであつた。一つは私が祖母以外の人の世話をこばむからでもあつたらう。

「どんな傳染病でも氣さえ張つてゐれば……」これが祖母の信念であつた。

私は何年ぶりかで又祖母だけの看護を受けた。或時仰向けに寢ながら、祖母の仕てくれるまゝに腹の蒟蒻を取更へて貰つてゐた。すると私には不圖幼年時代の情緒が起つて來た。それは祖母の體の獨特な香が私に幼年時代――其頃はいつも抱かれて寢てゐた――を突然に憶ひ起さしたのであつた。

「犬だネ」それを聞いた友達が私を笑つたが、此經驗から色々な人の獨特な香――それは其人々の顏程に異る香を中々多く自分が知つてゐる事に心着いた。

七

十日程すると病氣は段々よくなつて行つた。よくなるにつけ私は段々食辛棒になつた。竹葉の鰻に、風月の西洋料理に、大金の鳥に、梅園の汁粉に……寢ながら切りとこんな事を考へるやうになつた。然し少しでも固形物を食ふと直ぐにサワッた。下腹を絶えず懷爐で溫めて置かないと直ぐ具合が惡くなる。

外へ出られるやうになつてからは散歩して來ると云つては土橋の先の壺屋の陰氣臭い二階に行つて、

シュークリームのクリームだけを舐て嘗めた。

クリームがサワつたのではなかつたが、暫くすると遂にブリ返して、又烈しく血を下した。それが慢性のやうになつて了つた。

私は大きな金火鉢の炭火で部屋を溫くして、床に入りながら呑氣な氣分で本などを見るやうになつた。

然し一寸でも懷爐は離せなかつた。仕舞に凹むだ下腹には縮が出來て、いつの間にか自然に燒けて其所の皮が赤茶けた色になつてゐた。

娘からは其後全く電話がかゝらなくなつた。

而して其頃は私も竹葉とか大金とか風月とかをそれ程考へなくなつた。

第貳

一

春の末から初夏へかけて私は毎年少しづゝ頭を惡くする。左うなると泥水に浮び上つた錦魚の心持て

あつた。それに焦々した氣分の加はるだけが錦魚よりも苦しいと私は考へてゐた。

或午後私は獨り左ういふ心持で二階の部屋に寢ころんでゐると、隣りの西洋人の家の芝庭でおほむがけたゝましく地聲で鳴き立て始めた。私はおほむが薄黑い圓い舌を見せて、羽ばたきをして、頭を振り立てながら、わめき立てる其ヤケらしい樣子を想ひ浮べると、人間にもあんな眞似が出來たら、こんな時には幾らかいゝだらうにと云ふやうな事を考へた。おほむは中々それを止めなかつた。仕舞に此方の氣分までが段々焦立つて來る。

暫くすると、言葉はそれ程ハッキリしないが、アクセントだけは正確に、「前へ　オイッ」とか「氣を附けッ」とか色々な號令をタテ續けに叫びだした。私の家の裏が師團の一聯隊で、西洋人の家の向ふ隣りが旅團司令部になつてゐる。それて自然そんな事を覺えてゐるのである。

千代といふ色の淺黑い十七八の女中が梯子段を登りきつた所に膝をついて、

「お茶が入りました」とそれを知らせに來た。私は起き上つて、椽へ出て、靜かになつた、隣りの庭を眺めた。おほむは其時短かい首を出來るだけ延ばして籠の針金を熱心に嚙むでゐる所だつた。

茶の間で茶を飮むでゐると、急に前の建仁寺垣の向ふに七八人の靴音がして、大聲に話しながら倉の橫を庭の方へ行く。

「何んだ……」かう云つて吾々は顏を見合はせた。

「なりたけ長いのを借りて來い」こんな聲がする。

私は直ぐ下駄を突つかけて、出て往つて見た。——兵隊だ。「どうだい、こいつの方が少し長えだらう」汚れきつた作業服を着た二人が物置の軒下にかけてあつた、三挺の梯子を取り下ろしてゐた。私などは眼中にない風だ。その一挺をかついて倉の方に行くから私もついて行つた。

「どうだ、それて屆くかな」と伍長が云つた。伍長の後ろに五六人の兵隊がかたまつて、三階になつてゐる土藏の屋根を見上げてゐる。

「マア登つて見い。左う高くなくてえゝ」。

「けれども、木がありますから……」

「いゝや、あの釘にかけたら見える」

伍長から疊一ぢやうよりも少し大きい布れの標的を受取つて一人が梯子を登り始めた。——其時私は不意に怒り出した。兵隊共は吃驚して私の顔を見てゐた。

「オイ降りないか」私は可恐い顔を仰向いて梯子の上の者にも鋭くいつた。

伍長は山本小隊長殿からどうのかうのと辯解を始めたが、私はそれを諾かなかつた。

私の大きな聲て、小さい妹と千代とが出て來た。それについて、白といふイタヅラな小犬と赤と云ふ年寄りの利口な犬とが出て來た。白は嬉しさうに切りに私の足にからまりついた。ト、直ぐ又かたまつてゐる兵隊の汚れた脚絆に其房々とした美しい毛を擦りつけたりした。

千代は少し離れた所から、私に
「今朝旦那樣がお出かけ遊ばした後に士官の方が御出でになりました」と云つた。
「何んだつて？」私は怒つた顏を其儘千代の方へ向けた。
「よく解らないから」と笑ひながら「お留守ですと申上げたんです」と云つた。
私は又伍長の方を向いて、云つた。
「そんなら駄目ぢやないか。何しろ歸つて貰はう」
何故私がそんなに興奮してゐるのか兵隊には解らなかつた。私は只ガミ〳〵と丁度鸚鵡がけたゝましい地聲を出すかのやうにワメキ立てたのである。小さい妹はそれに驚いて還つて行つて了つた。
然し伍長も兵隊も皆善良な人々だつた。元通りに梯子を物置の軒下に仕舞つて、標的を卷いて歸つて行つた。
人が集つたので白はヒトリはしやいて、千代と私とに交る〳〵飛びついた。
私は怒つたやうな顏をして自分の部屋へ歸つて來た。然し其時は今迄の氣分が大分直つてゐるのを感じてゐた。

二

白のイタヅラには皆弱つた。妹の植えた花壇の草花を根こぎにする。下駄の鼻緒を嚙み斷る。父の大

切にしてゐる盆栽の土を堀る。尤もこれはいか、するめを煮た汁をかけて置いたからでゝもあるか。毎日何か惡い事を仕ない事はない。雨降擧句の泥足で座敷中を歩き廻はつた時に、私は竹箒を振りあげて大きな聲をしながら庭中を追廻はした事がある。仕舞に追ひつめられると尻を丸くして地面へ腹もノドも着けて了つて、目を細くして閉口しきつて小便をもらしてゐる。其癖二つ三つ撲つて許してやるともう直ぐ足へからまりついて來る。こんな事が何遍かあつた。

或日私は學校から歸つて來て直ぐ茶の間の椽側へ行かうとすると、庭の方から尾を下げて白が一生懸命に逃げて來た。立つて見てゐると倉の角から不意に千代が竹箒を丁度私がやるやうな格好に振り上げて飛び出して來た。私を見ると千代は急に笑ひ出して後ろを向いて了つた。耳から首筋まで赤くして笑つてゐる。

「何かやられたのか？」

「………」向ふを向いた儘で笑つてゐる。

「馬鹿！」から云ひ捨てゝ私は茶の間へ來た。

茶をいれてゐた松といふ女中が、

「千代の外行きの下駄を嚙まれたんでムいますよ」と母に話した。母は、

「まア白にも本統に困りもんだ」と云つた。

其時庭の方から未だ赤い顔をしてゐる千代が入つて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「下駄を啣まれたつて?」母は浴衣を縫ひながら云つた。千代は只笑つてゐた。
「もう穿けないやうにされたのかい?」
「エヽ」と笑つてゐた。
千代は私に
「順吉様に先刻御電話がムいました」と云ふ。
「誰れから」
「伺ひましたが仰有いませんてした」
若しかしたらあの娘からだと私は思つた。
「女の人か?」
「エヽ」千代は少し云ひよどむて左う答へた。「又後程御かけ致しますつて……」
「よし」
祖母も母も押黙つてゐるのが何んとなく無心てないやうに感じられた。

三

電話は夜になつてからかゝつた。
「何んだか餘ンまり度々てすから止さうかと思ひましたが、昨日歸つて參りましたもんてすから……」

こんな事を云ふ。私には何の事か解らなかつた。
「それからネ、今日は貴方に少し御願ひがあるの……」
誰れによらず、かう云ふ順序で物を云はれるのが私は嫌ひであつた。其事の程度が知れない一種の不安を感じて私は胸を轟かすやうな事がある。
私は默つてゐた。
「あのネ、貴方の御寫眞を頂かして下さい」
「……それより貴女の大和姫の寫眞を下さい」。
「アラ、私ぢやありませんよ、あれは」
「いゝえ」
「貴方が本統に下されば、他のを差上げませう」
「今ないから寫して送りませう」
「先に兄の頂いたのが厶いましたのネ」
「エヽ。然しあれはもうありません――兄さんには向うから送つて頂く筈になつてたんですが來ませんよ」
「それはネ。宅に參つて居りますよ」
娘のと娘の兄のとを送つて貰ふ事にして、私も近かい內に寫して送ると云ふ約束をして電話を斷つた。

「餘ンまり度々ですから」と云ふのが不思議に思へた。「昨日歸りましたから」といふのも何の事か解らない。私は私の留守にかゝつた電話を故意に取次がなかつた事を考へずにはゐられなかつた。

私は千代を呼むで、少し荒い語氣て

「乃公の留守にあの女の人から電話がかゝつたらう」ときいた。

「エヽ」

「何故乃公が歸つた時取次がない」

千代は眞面目腐つた顏をして私をにらむやうな眼つきをして默つてゐる。

「エヽ？」と促すと、

「御隱居樣が申上げなくてもいゝと仰有つたんです」

「何遍かゝつた」

「二三度」

「よし」

私は不機嫌な顏をして机の方へ向き直つた。千代は默つて起つて行つた。

翌日娘からジョーヂの寫眞だけ送つて寄越した。其翌日に娘のが届いた。茶の間にゐる時來たのを私は其場て開封して、母に先づ見せてやつた。其後て祖母も見て、二人は着物の批評などをしてゐた。そ

れは浪に鶴の裾模様で袖が裾位まである着物を着た全身の寫眞であつた。

私は寫眞屋で一枚、友達で上手な人がゐたから其人に二枚寫して貰つた。寫眞屋から來たのは如何にも氣六ケしさうに、寧ろ陰氣な顏に寫つてゐた。友達の寫したのゝ一つが最も通俗な意味でいゝ顏に撮れてゐた。然しベートウヴエンやＵ先生の顏がいゝと云ふ標準からは寫眞屋で作つた氣六ケしさうなのが一番いゝ事になる。その點で私は多少考へなければならなかつた。私は迷つた。ベートウヴエンも偉いが、モッツアルトも偉い。又ミケルアンゼロも偉いが、ラフアエルも偉いと思つた。其他ツルゲネーフとトルストイ、こんな比較も作つて見た。が、結局私は矢張り可恐く寫つた方を選ばずにはゐられなかつた。向ふから何も書かずに送つてよこしたから私も何も書かずに送つてやつた。

其晩娘から電話がかゝつて來た。

「私のは別に仕舞つて置いて下さるんでせう？」

「いゝえ」

「どうしてらつしやるの？」

「友達のと一緒に文庫に入れてありますよ」

「いけませんよ。チヤント別にしといて下さらなければ……。誰方にもお見せんなつちやあイヤですよ。貴方も餘まり見ちやあイヤですよ」

「承知しました」

其寫眞は實際に餘り見なかつた。私にはそれが其娘より何んとなく美しくなく見えたし、又前の年の秋見て、以來半年の間私が頭に描いてゐた娘とは別人のやうに再び肥つて了つたからでもあつた。

四

濕氣の烈しい、うつとうしい氣候から來る不機嫌には私は中々打ち克てなかつた。而して其不機嫌は多くの場合他人に對する不快と一緒になつて私を苦しめるのが常であつた。私は其頃祖母に對して何んとなく不快でならなかつた。娘に對して或る警戒でもしてゐるやうなのも私の氣分を焦々させた。私は其時の氣分で二日も三日も此方からは一切口をきかない事などもあつた。祖父は前年の正月に胃癌で亡くなつた。而して今は私と云ふものに唯一の望を置いてゐる七十才を越した祖母に對してする科としては少し殘忍な感じも時々はした。然しこんな殘忍もそれを安心して働ける人間は私にとつて祖母以外一人もない。こんな事が自分には云ひわけになつてゐた。

或午後、私は二階の部屋で新しく着いた外國の雜誌を見てゐると、祖母が登つて來た。

「角筈は何日てす」如何にも機嫌を取るやうな調子で云ふ。私は一寸間を措いてから、

「あしたてす」と答へた。

「お庭い枇杷がよく熟したけど、持つてつて上げませんか？　もう烏がかゝつたから此次と云つたらアラカタ無くならうもの……」

私が取り合はない様子を見せてゐるので、祖母は椽側へ出て往來を眺めてゐた。私は又祖母が其所にゐると云ふ意識ばかりハッキリして雜誌に讀み耽けれなくなつた。私は同じ便て來た、The Theatro と云ふ演藝畫報を開けてその寫眞版に只眼をさらしてゐた。

「米國の田中さんからか？」

「エヽ」

「此方からもお送りしますか？」

「送つてますよ」

「矢張り雜誌てすか？」

「エヽ」

私は一字でも餘計な字をいへば、それだけ好意が現はれてでも了ひさうに或る努力を以つて出來るだけ切りつめた返事をしてゐる。

「近頃雜誌にいゝ小說が出ますか？」

「どうてすかネ」

又話が途斷れた。

祖母は後手をして今更らしく鴨居の額などを見て廻はつた。

「何か丸善から買ひたい本でもありませんか？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「今は別にありませんネ」

又沈默が來た。とう／＼祖母もそれに堪えられない風で獨言のやうに、

「明日先生のお家へ枇杷を持つて行くなら。今日の内に熊吉にでも庄兵衛にでも取らせなければならない」こんな事を云ひ／＼靜かに用心をしながら、急な梯子段を降りて行つた。ドンと一番下のを降りる音が暫くして聞えて來た。

其後で私は獨り泣いた。泣くと、いつも頭痛のするのが私の癖であつた。私は其儘晝寢をして了つた。――茶を云ひに來た千代の聲で眼を覺ますと、氣分の惡い時には一番いけない事を天井でやつてゐる。ギラ／＼とそれで赤味を帶びて、それがふるへてゐる。どんな時でもこれを見ると私は焦々して了ふ。

自家との堺の塀に近かく隣りの溫室があつて、それが私のゐる二階から見下ろされる。或る嵐の時に其溫室の後側の屋根のガラスに被ぶせてあつたよしずが破られて、それ以來、其所へ夕日が反射すると私の部屋の天井へ來て、ギラ／＼と赤味を帶びたものが震へるのである。これが堪らない。――それは主に夏の事だが、冬は冬で、スティームを作る石炭の油煙が風によると、私の部屋の椽側へ來て、コロコロ／＼何か小さなイタヅラ者でも遊むでゐるやうに行列を作つて轉げ廻はる。若し障子を閉め忘れてゞもゐると、机の上へ來てそれをやる。左う云ふ時は本氣で腹を立てゝ、隣りに手紙でも出してやらうかと思ふ事もあつた。が、惡い事ばかりでもなかつた。夜更けて靜まりかへつた頃、讀み物でもして

起きてゐると、あたりがシーンとして、何となく淋しさに襲はれるやうな事がある。そんな時、よく長火鉢などの銅壺がやるやうに、ゴトツ〳〵と老人でもつぶやくやうな厚味のある音をチユーブの中でスチイームがたてゝくれる。出所の知れてるだけに、それが私の不安な心持を大變に慰めてくれるのである。だから一途にも憎めなかつた。

私は起き上ると其側の雨戸を閉めて、下りて來た。

赤いたすきをかけて、手拭を被つた千代が直ぐ下の椽側で花莚を敷いて單衣の引きのしをしてゐた。

而して私の姿を見ると脱ぎ捨てて置いた私の下駄を其所へそろへた。

五

私は茶の間から部屋へ還ると

「何も彼も云つて了はう」と左う思つた。

私は梯子段の上の小さい硝子窓を開けて、下て未だ引きのしをしてゐた千代を呼むだ。

「お祖母さんに一寸二階に……」

「お呼びするんですか?」と千代は輕く口を開いたまゝ見上げて居る。

「直ぐ」かう云つて私は部屋へ入つて歩きながら待つた。ソロ〳〵と登つて來た祖母は最後の段を上る時

「どつこいしよ」といつて入つて來た。
「何だ?」と祖母は如何にも穩かな調子で云つた。
「……若しお祖母さんに少しでも僕を監督しやうといふやうな氣があれば、それは大變な間違ひですからネ」突然にこんな事を云ひ出した。然しそれで、私が何を云はうとするかは祖母にも直ぐ解かつた。祖母も調子を變へた。
「お前はお父さんが平常どんな事を云つとんなるか知らないからそんな事を云ふんです」
「そんな事は別の問題です」
「……全體お祖母さんが何を監督しました?」
「仕なくても絶えず左う云ふ氣があるからいけないんです。僕ばかりの話ぢやありません。房子や順三にだつて同じ事です」
「孫の世話はお前でもうコリ〳〵です」かういつて押出すやうに祖母は笑つた。
「眞ンからコリて貰ひたいもんだ」
「勝手にしろ。自分では何一つ本統に出來もしない癖に他の小言ばかりいつて、年を取つたお祖母さんをイヂメル……」祖母は少し赤い顏をして私をにらんだ。「こんな眼には會ふし、お父さんや親類からはお祖母さんが甘やかしたからあんなヤクザになつたと云はれるし、もう本統に早く死んで了つた方がいい」

祖母は極端に私を價打ちのないものにしてゐる。それが少し可笑しくも思はれた。

「そんな事を云つて、一體僕が何をしてゐるか、何を考へてゐるかゞお祖母さんに解かりますか？」

「エヽ、解かります。毎朝寢坊をして、學校は休んでばかりゐるし、毎日お友達の所へ行くか集めるかして、やあ芝居だ寄席だと、そんな話ばかりしてゐる‥‥」

「へえ。それが何んです？」

「用と云つたら手紙一つ本統に書けもしない癖に‥‥書けないのもいゝが讀めもしない癖に‥‥」

亡くなつた祖父の兄弟が未だ田舍で村長をしてゐる頃で左ういふ人々からよく來る手紙を讀まされる。毛筆で走り書きにしてある昔の人の手紙はよく讀めなかつた。て、大概いつも決まつてる内容の意味だけをまあ大體恁んな事てすよ」と云つてやる。すると、祖母は返事を出して置いてくれといふ。候文の手紙を書く機會の殆ない私には、假令言文一致を使つても候文的な内容さり書けさうもない叔父や叔母への手紙は容易に書けなかつた。「困つたものだ」と祖母は其度々に嘆息した。

「兎も角近頃はお祖母さんに解かつて貰はうとも思はないけど、邪魔だけはなるべくして貰ひたくないんですよ。おかげで世間並な意久地なしになつたかも知れませんが、私はそれに少しも不平は持つてゐませんし、今更お祖母さんがウマク監督をやつた所で直るワケもなし。それに私だつてイマに何か仕ますよ。それがお祖母さんを喜ばす事かどうかは別問題として吃度何か仕ますよ。其『何か』は云つてもどうせ解かりはしないのだから、只『何かする』と云ふ事を信じてゐて貰へばいゝんです。それ以上は此方

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も望まないから、お祖母さんもいゝ加減な所であきらめをつけてゐて下さらないと困りますよ」「どうせ理解は出來ないのだから、迷信的に信じておいてなさい」こんな事を私は繰返し繰返し云つた。

祖母は何を云はれてるのかよく解らなかつた。それに第一、二つの時から三週間と嘗つて自身の傍を離した事のない此孫の中に理解するとか、信ずるとか、そんな事をすべき物が何所にあるのだらう？、又若しあるとすれば、何時の間にそんな物が出來たんだらう？、祖母は默つてこんな事を考へてゐる態だつた。

然しこんな事でも私の氣分は大變すぐれて來た。祖母も何んとなく愉快さうに見えた。

二番目の妹が登つて來て、隣りの部屋で手をついて、「お兄樣御飯。お祖母樣御飯」と云つた。

食事の時急に話が起つて、翌日、祖母と上の妹と私とで、明治座の堀江の人形芝居を見に行く事になつた。忠臣藏の通しで、大隅太夫が七段目の由良の助と九段目一段を語る筈であつた。

六

私はいつか、段々に千代を愛するやうになつて行つた。私は不機嫌な時に殊に其事を感じた。不氣嫌な時に千代と話をするとそれが直ぐ直る事がよくあつたのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は日記の七月十一日の所に次のやうな事を書いてゐる。
「自分は彼を單に好きだと云ふだけてはない。何故なら、彼の事を考へる時に必ず一種の苦みを感ずるもの……。自分は三時間その顏を見ないと或る淋しさを感ずる。彼も自分の傍で用をする事を好むやうてある。自分にはどうして愛を云ひ表はすだけの勇氣がないのだらう？　それは惡い意味て自分は利口だからてある。自分は彼を愛しつゝ、彼が美しい女てない事を知つてゐるからてある。然し又彼が自分と自分の仕事を解するやうな女てないと云ふ氣もするからてある。一言にいへば結婚はしたくないと云ふ氣が充分にあるからてある。結婚する氣のない戀を云ひ表はすのは只彼に大きい苦痛を與へるだけてある。

自分は何も云ふまい。自分はもう眼て彼を追ふまい。二人の眼は日に幾度會ふか知れない。然しそれもヤメなければいけない」。

七月十五日の所に

「外出しても自家の事が頭を去らなくなつた。千代は少なくも自分一人にとつては美しい女てある。これまての自分の空想は自分の妻として無限に美しい女を描いてゐた。この描かれた美しい女に比較されてはどんな女ても醜婦になる。千代も初めはそれに比較されてゐた。然し今は千代は自分の頭からその女を消してくれた。自分にとつては今は千代は唯一の美しい愛らしい女てある。

自分は K.W. をも愛してゐるかも知れない。然しあの貴族主義な女とは徹頭徹尾結婚は出來ない事を

よく知つてゐる。
自分は自分が其人をよく知り、又自分を其人によく知らせないては結婚しまいと決めてゐる。次に自分は其人を愛し、又自分が其人に愛されなければ結婚しまいと決めてゐる。最後に自分は自分の仕事と撞着する結婚は斷然出來ないと決めてゐる。K.W.とは此の最後の條件でどうしても相容れない。それはよく解かつてゐる。
千代に於ては此點に少しの撞着もない。
自分は千代との關係が雇人と雇主の關係であるのが甚だ物足らない」
廿日の所に
「自分は千代を愛するやうになつて、雇人と云ふ者に對して今迄になかつた同情を持つやうになつた。雇人が台所でどういふ物を食つてゐるだらうと云ふ事を初めて考へて見た。雇人は雇はれてゐる間は一度でも自分が毎日入つてゐるやうな全くアカの浮いてゐない澄むだ風呂に入る事はないのだと云ふ事を初めて思ひついた。
自分は昨夜千代と話して彼が彼の家で兩親や兄から丁度自分が祖母や祖父に愛されてゐたやうに愛され、丁度自分が自家の者に我儘を云ふやうに我儘を云つて育つて來た事を聽いて一寸異樣な感じがした
――神經質に日に幾度か手を洗ふ癖のあつた私は殊に夏は何度となく湯殿に出入して其所の水道を使つた。湯殿の小窓の直ぐ下が井戸端の三和土で、洗物の多い頃で千代がよく其所で洗濯をして

ゐた。私は其小窓を貫して千代とよく眼を見合はせた。見まいと思ひながらツイ見る。すると千代は…つても怒つたやうな可恐い眼つきをして私の方を見てゐた。

七

或る午後私は二階の部屋で本を讀むでゐると、表の往來で不意にキアーン〳〵と烈しい犬の啼聲がして、續いて、棒か何かで肉體を直接に撲るパッタン〳〵と云ふ氣持の惡い音が聞えて來た。全く受け身な、むごたらしい犬の悲鳴と棒の音とが暫くは入り亂れて聞えてゐたが、段々に犬の啼聲が細つて行くと、パッタン、パッタンと棒の音だけが續いて、仕舞にそれもとう〳〵止むで了つた。

私は急に落着かない氣分になつて椽へ出て其方を見たが梅の枝の茂みで見えなかつた。其所に前の家の末つ子で其春から小學校へ通ひ出した太つた男の兒が大きな洋傘をさしたまゝ肩にかついで堅くなつて二三歩ゞ地面を見つめて、急足で其方面から歸つて來た。顔色を變えてゐる。而して息をはづませながら、小聲で、

「犬が殺された…犬が殺された」こんな獨言を云ひながら眞直ぐに自分の家の門を入つて行つた。車をひいた羅宇屋烟管の爺が「坊つちん〳〵」と聲をかけたが小供は振り向きもせずに入つて行つて了つた。

其時私は「若し」といふ氣が一寸したので直ぐ二階を降りて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「白、白」と呼むで見た。

庭の方から白が頭も尻尾も低く下げて、轉がるやうに滅茶苦茶に驅けて來た。而して無暗と胸へ飛びついた。赤も少時すると庭の方から馳けて來た。

「まあ、どうしたんだらう」と物干から下りて來た千代が笑つてそれを見てゐる。

「今、外て犬が殺された」

「まあ」千代は驚いた顏をした。

「赤も一緒に、そつちて菓子でもやつて、暫く門を出さないやうにしといて呉れ」

から頼むで私は門の所へ行つて見た。勞働者としては奇麗な顏立ちをした若者がシャツ一枚でむしろをかけた小さい荷車を惹いて急ぎ足で丁度前を通る所だつた。私は其興奮した赤くなつた顏を見ると、立派に「兇行者」の表情があると思つた。

——三四日すると急に白が見えなくなつた。何んと云ふ事もなく私には此小犬が私と千代との間で何かの役をしてゐるやうな氣がしてゐたから、變な淋しい感じを私は感じた。眞白な房々とした美しい毛を持つた犬の事て、若しかしたら殺された、左もなければ盜まれたと皆思つた。兎も角警察へは屆けて置いて、更に車夫や門番の男に近所を探さして見た。千代も五つになる高子の守をしながら自分て町へ探しに出たりした。

見えなくなつて、二三日すると不圖した機會に飯たきの女が物置の炭俵を積むだ裏の狹いあはひから

からその死骸を發見した。

私が見に行つた時にはそれが物置の前に持出されてあつた。眞白かつた毛が炭の粉で薄よごれて、前足は前の方へ、後足は後の方へ眞直ぐに延ばしたまゝ腹をベッタリ地へつけて、妙に平つたくなつて死むでゐた。伯父さんと云ふ格だつた赤は少しシャクレた平氣らしい顏で、死骸の方は見向きもせず其所に立つてゐた。赤が近所での憎まれ犬だつたから、それへやるつもりの毒をこれが食べたのに相違ないと云ふやうな事に一致した。

いやな顏をして立つて見てゐた千代は赤が腰を下ろして横腹の蚤を噛むでゐるのをイキナリつかまへて、

「エイ、憎らしい！」と平手で強く其頭を撲つた。皆は笑つた。

八

八月に入つて、私は祖母と妹二人と弟一人とを宰領して函根の蘆の湯に行かねばならなかつた。女中は千代を連れて行きたいと祖母はいつた。然し私はそれに反對して、前からゐる松を連れて行く事に決めた。

「お祖母さんはお前を連れて行きたいとそ云ひなるがネ」と私は自分の部屋で千代にいつた、「松が舊くからゐて左ういふワケに行かないから乃公が反對してやつた」

千代は只笑つてゐた。

それも私自身では二週間でも三週間でも千代を離れて考へる必要があるといふのが主な理由であつた。

私は函根で考へた。が、それは狹苦しい中で、ドウ〳〵廻りをしてゐるやうな考へ方であつた。小さな帳面に千代の事をひとして、私は色々な事を書いてゐた。要するに私は私の躊躇は千代がそれ程美しくない事、及び千代の家が社會的に低い階級にあると云ふ事などから來てゐるといふ風に寧ろそれは脅迫觀念的に左う考へられた。私は私のヴアニテイーを殺す事が出來ればそれで此問題は型がつくのだと考へた。

滯在中私は二葉亭の譯した「片戀」といふツルゲネーフの小説を其所の眼のタヾレた見すぼらしい貸本屋から借りて讀むだ。その終りの方に、「若い私は未來と云ふものを際限もない永いものに思つて、何のこんな事（こんな戀）はこれから先にもまだ幾らでもある、もつと嬉しい事があると考へてゐた。然し遂に來なかつた」といふ意味の句を見つけると私にはそれが此問題に與へられた運命の暗示でゝもあるやうに感じられた。私は與へられた此機會を出來るだけ注意して進まねばならぬと考へた。今自分がこれを進まずに避けるならばそれは思慮あるしかたとはいへない、臆病者の行である。こんな事を思つてゐた。

八月廿日に歸つて來た。然し其時も未だ私には堅い決心が出來てゐなかつた。私は私の帳面に「若し

此決心が一年も變らなかつたら……」とか「結婚するにしても今の口本は二三年間の學校教育が必要てある」こんな事を書いてゐた。

私は何にしろ千代が私をどう思つてゐるかをハッキリ知らずにこんな事を考へてゐても仕方がないといふ氣がした。若し千代に約束した人とか好きな人とかゞあれば自分は一も二もなく想ひ切つて了はうと思つた。私には千代に左ういふ人があつてくれゝばいゝと思ふ心さへあり得たと思ふ。若し千代が許嫁があるといつたら私は失望しながら喜むだかも知れなかつた。

函根から歸つた翌々晩私は千代を部屋に呼むて、自分が愛してゐるといふ事を話した。然し決して熱烈な愛といふ程度のものではないといふ事をも話した。

私は緣側へよつた隅の机に背をつけてゐた。千代は次の四疊半から敷居を越した所に、かしこまつて坐つてゐた。

私は結婚の事は一ト言も云はずに千代がどう自分を思ふかを尋ねやうといふつもりであつた。私はまわりくどい自分でもよく分らない事を切りにいつてゐる。それが、自分の思つてゐることはスッカリ云はずに向ふの思つてゐることをスッカリきかうといふ樣なズルイ態度であつた。その內に自分でもそれがミニクヽてく堪はなくなつてきた。

千代は想つてゐる。然し想つても、どうにもなりはしないからアキラメてゐる、といふ意味の返事をした。

其所で私も何も彼も露骨に尋いて了はうといふ氣になつた。
「約束したとか、愛してるとかいふ人はないのか？……惡い事でも耻しい事でもないんだぜ」
「ありません」千代は眞面目腐つた表情をしてゐた。
「そんなら、若し乃公が結婚を申込むだら貴樣は承知するか？」
「……………」千代は一寸驚いたやうな顏をして默つて下を向いて了つた。
「返事は何時でもいゝぜ。一週間でも十日でも考へていゝぜ。只自家の人に相談して決められちやあ困るんだ。お前だけの考へが聞きたいんだ」
私は「若し申込むだら」と或る場合として初めは話した。が、事實はその儘申込むだ事になつてゐた。千代は最初「身分が……」といふやうな事もいつた。それは私は諾かなかつた。私はいつか興奮してゐた。私は起つて用箪笥の抽斗から亡くなつた母の不細工な金の指環を出して來てそれを千代の指に穿めてやつた。而して私は肖を抱いて接吻してやつた。
私が千代の體に觸れた事は二ケ月程前暗い所で千代の持つて來た私の懷中時計を受取る時に私の指の先が千代の掌へ一寸さわつたのを覺えてゐるばかりだつた。其時私は自分の愛する女の掌が案外堅いのに驚いたのでよく覺えてゐる。
抱きすくめるやうにして接吻してゐると、何んだか千代の體が急にグッタリと重く私にかゝつて來た。少し私が身を離すとガックリ首を前へ垂れて、氣を失つたやうになつて了つた。何かいつても默つ

てゐる。

其時私は驚くよりも不圖、或るいまはしい邪推を起した。それは接吻以上の事をされはしまいかといふ恐れからする芝居ではないかしらといふ考へであつた。汗で後れ毛の附いた首筋を見せて千代は疊に突伏してゐる。私の心は妙に冷かになつた。一寸の間私は少し離れた所からジッとそれを見てゐた。而して起して見ると、千代が餘りに青い顏をしてゐるのに今度は本統に驚いた。

私は直ぐ硯に使ふ水で寶丹を含ませてやつた。

「女中部屋まで歸れるか？」

千代はカスカに首を振つた。

「誰れか呼むで、――乃公も一緒に連れてつてやらう」かういつたが千代は又首を振つてそれをこばむだ。もう少し此まゝにして置いてくれと勢のない聲でいつた。

「そんなら、もつといゝ水を持つて來てやらうか」

千代は眼を眠つたまゝ首肯いた。

私が段を急いで降りると段の下で岩井といふ、顏色のよくない、肥つた田舍から出たばかりの書生が狼狽した態で獨りマゴ〳〵してゐた。

「せいても松でもいゝからコップに直ぐ水を持つて來さしてくれ」

岩井にかう命じて私は直ぐ又二階へ登つて來た。私は直ぐ千代の指から指環をとつて、それを机の抽

斗へ入れた。

三十分程して他の女中二人に助けられて女中部屋に還つて行つた。

其後暫くは私は一種云ひ難いイヤな心持を感じてゐた。

九

翌朝起きて行つた時には千代は血の氣のない顏をして他の女中と、緣側にピッタリと坐り込んで、新聞紙を開いた上にとぎ板を置いて前晩父の客て使つた、ナイフやフォークを磨いてゐる所だつた。千代は成るべく私に顏を見られないやうにしてゐた。

午前九時頃になつた私はペンと紙とを持つて奥の中二階に行つた。口ていふと直ぐ興奮して了ふ恐れから、手紙にして自家の人へ發表してやらうといふ考へてあつた。庭て蟬が八釜しく啼く、私は其部屋にある唐木の机に倚りかゝつて、書くべき事を考へてゐた。其所へ未だ靑い顏をした千代が登つて來た。

「具合が惡いか？」

千代は笑つて、

「もう、スッカリ直りました」といふ。

「時々あんな事があるのか？」

「イヽエ、……あんな事は今迄て一度もなかつたんですけど、どうしたんですか……」

私は今自家の人にどういふ風に發表しやうかと考へてる所だと話した。千代は、暫く當惑したやうな顏をしてゐたが、それについては何も云はなかつた。

其日は午後になつて友達が來た。夜又一人來て私には遂に手紙を書く機會も云ひ出す機會もなかつた。其晩千代が來た時、

「お祖母さんとお母さんは大概いゝと思ふがお父さんが何んか吃度云ひなるよ」

「旦那樣は六ケしい事は仰有いますまい……」と千代は氣樂な顏をして云つた。

「そんな事ない」から首を振つて打消すと、

「左うですかしら」と千代は不審さうな顏をしてゐた。

――――翌日の朝私は祖母を奥の中二階に連れて行つて、總てを打明けた。終いに

「然し、これはもう相談ぢやありませんよ。約束はして了つたんだから、その報告ですよ」

此高飛車な物言ひは私にとつて政略でもなんでもなかつた。

祖母は母に來て貰つて、自分で、簡單に私の云つた事を繰返した。

「山本さんのお雪さんも元は矢張り女中だつた」

祖母は知つてゐる或る金持の家の事を云ひ加へたりした。

二人は勿論贊成はしなかつた。然し別に不贊成も云はなかつた。兎も角母から父に話すといふ事にして、三人で其中二階を降りて來た。

其晩も私は一時間餘り自分の部屋で千代と話した。

——翌朝私が獨り部屋にゐると祖母が登つて來た。

祖母は大津家として、そんな事は嘗てない事だから、それに口約束だけなら何んでもないから斷つて了へといつた。實は加藤さんの二番目のお娘が評判だから心ではあの人でもと思つてゐた所だつたといふ。尚祖母はかういふ事は大事な事だからと切りにそれを繰返した。

「大事な事だから僕はお祖母さんのやうな人には迚も任かして置けないんですよ」私はそのまゝ祖母を措いて部屋を出て了つた。

其日私は三浦岬へ行つてゐた重見といふ友達に手紙を出して「直ぐ歸つてくれ、こんな我儘は君だからいふ」といつてやつた。其晩私は千代と事實で夫婦になつた。私は初めて女の體を識つた。私は直ぐ又重見へ手紙を書いた。「事の內容を少しも書かずにこんな手紙を度々出すから隨分君に心配をかけてゐる事と思ふ。然し、もう歸つて來てくれなくていゝ」かういふ意味の事だつた。

——翌朝、祖母の部屋へ行くと祖母は父が「そんな事は決して許さん」といつてゐる事を話して、

「今、どうして千代に暇をやらうかと考へてゐる所だ」といつた。その云ひ方が如何にも憎々しかつた。

私は急にカッとして了つた。

「若しそんなことをすれば、僕はお祖母さんを捨てる計りです」私はそれから烈しく祖母を罵つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

祖母もスッカリ興奮して了つた。而して烈しい劍幕で覺悟があるといつて立つて倉の方へ行つた。その倉の二階に刀簞笥といふのがあつてツマラナイ刀や短刀が七八本入れてある。

芝居氣だとは思つた。然しそれから本統になり兼ねない位に祖母は興奮してゐると私は思つた。又芝居氣もそれをハッキリと意識してゐないから場合によつては興奮からズル〳〵と他愛もなく本統の境へノメリ込み兼ねないと云ふ氣がその時トッサに或る感じとして私に感じられた。私には「勝手におしなさい」とは云へなかつた。其所に母も出て來て止めた。

其晩も私は部屋で千代と十二時過ぎまで話した。

翌日の朝早く重見から、今歸つたといふ電話が掛つた。私は急いで糀町の彼の家へ行つた。

「海が荒れて船がチットモ出なかつたけど、昨晩一艘だけ出たんで歸つて來た。」と重見は云つた。それが私の初めの手紙を見て間もなくの事で「歸らなくていゝ」といつた手紙の屆かない内だつた。

私は嬉しい興奮で何も彼も打明けた。

「然しチットモ熱烈でないから時々迷ふやうな心持が起るんで不愉快で仕方がないんだ」

から云ふと、重見は

「前後の考へも浮ばずに押し通すんなら左う偉くはないさ。今は心中する奴の戀がいゝとも美しいとも思へないからナ。前後を考へる餘裕があつて其上で自分の行くべき道を自覺しながら進むで、それで敗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れなければ、本統に偉いんだと思ふんだ」と云つた。

私は自家の者には少しも弱い態度を見せずに來たけれども却つて千代に對して弱い音を吹いたのを非常に氣にしてゐた時だつた。

夕方まで話して、私は元氣になつて歸つて來た。

歸つて部屋へ入ると直ぐ千代が登つて來た。千代は其日、私の留守に祖母と母とに、一切私の部屋に入つてはならぬし、而して兎も角一つたんは宿に下つてくれと申し渡されたと泣いてゐた。

千代は私にもうなるべく家を空けないやうにして呉れとそれを繰返えして云つた。

千代を還して私は直ぐ母に部屋に來て貰つた。

「家庭の問題でもありませうが、それ以上に私自身の問題ですからネ」私は興奮から息をハヅマセながらいつた「私も一切陰廻はりな事は仕ませんから、自家でも一切それはよして貰はないと困ります」

而して私の承諾なしには決して千代を宿へ下げないと云ふ約束をして貰つた。

母は私が千代と約束した事は早計であつて、その事には同情出來ないが約束して了つたものは添はねばならぬと云ふ意味を云つて同情して呉れた。話してゐる内に母は私が十三の時自家に來た其頃からの二三年間の我の強い祖母との關係での苦しい經驗を話して泣き出した。私も惹き入れられた。十年間マゝ母と云ふ言葉から聯想出來る只一つの不快な感情をも嘗て私に經驗させなかつた母に對しては私も涙を流がさずにはゐられなかつた。而して私は心から又祖母を憎く思つた。(祖父の沒後は殆ど私一人の爲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めに生きてゐるやうな祖母――我の強い祖母は長い間、一人孫であつた私を、殆ど無意識的に自身の想ひ通りにしやうとする、私は又殆ど無意識的に左うなるまいとする、而して反つて祖母を自分の想ひ通りにしやうとする。二人のこの烈しい爭ひは互に愛し合ひながら私の少年時代から絶えた事がなかつたのである。私は此祖母といふ敵を常に愛されながら、又愛しながら一方では憎まずにはゐられなかつたのである。）

私は母と話して大變いゝ氣分になつた。

「大學を卒業したら二三年も洋行をさせて、歸つた所で相當の家から嫁を貰ふ事にしてあるのだし、今度のやうな事は決して許さん」かう云つてゐるといふ父には母からよく話して貰ふ事にした。

「何々する事にしてあるのだからと將來の事をいくらお父さんだからつて他人に左ふ勝手に定められちやあたまりませんよ」笑ひながら私がこんな事を云ふ時分にはもう母も笑へた。

十

翌朝重見が來てくれた時に千代に會つて貰つた。話もなかつた。千代は少し横座りになつて下を向いたり、外を見たりしてゐた。暫くして、私は

「もうあつちへ行くといゝや」かういつて還えしてやつた。

此日祖母は朝から眼まひがすると云つて居間て寢てゐた。私はそれに邪推を起したが、元來腦の弱い

祖母の事で部屋へ行つて其ノボセたやうな顏を見ると滿更手段の病氣とも思へなかつた。

午後私は重見と芝公園から銀座の方を散歩した。

「なるべく早く歸らないか」途々重見は二三度かういつた。

其晩も十二時過ぎまで千代と話した。

「どうせ貧棒して暮らすんだぜ。お前は貧棒してもいゝか」

「いゝ事はありませんけれど、仕方がないぢやありませんか」

「貧棒はいやか？」

「えゝ、いやですよ」千代は輕く答へた。

「うまいものが食いたいのか？」

「いゝえ」

「何んだい……いゝ着物が着たいのか？」

「えゝ」

「いゝ着物が着たい」

「えゝ、着物は着たうムいますよ」

「うまい物は食はなくてもいゝから、いゝ着物が着たいのか」

「えゝ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こんな會話も私の耳には何んとなく物珍らしく響いたのである。

こんな話もした。

千代は未だ肩揚げをしてゐた。

「女は幾つ位まで肩揚げをつけてるだらう？」かう云つた時に千代はアゴを引いて自身の肩揚を見ながら田舍の自家の隣りの齒醫者に未だ肩揚げをしてるのかとからかはれた時「これかい？これは未だ中々とらんないよ」といつてやつたと云ふ話をワザと田舍詞のダイレクトナレーションで云つて笑つたりした。

四國に全く味方のなかつた千代は重見を切りに頼りにした。而して「今度は何時來て下さいませう」などといつてゐた。

翌朝私は現在の事について巴里にゐる友人へ手紙を書いた。手紙の紙に三枚ばかり書き進むだ時に小供から一緒に育つた四つ上の叔父が鎌倉から上京して來た。松の知らせでペンを置いて私は茶の間へ出て行つた。

「鎌倉の方も段々人が減つて來ましたよ」叔父は紅茶を飲みながら母にこんな事をいつてゐた。

少時すると、

「一寸座敷へ來てくれ」

から云つて、叔父は傍に散らばして置いた卷烟草の函を三つばかりカタビラの袂に入れると烟草盆を自分て下げて先に立つて大きなからだをユスリながら緣側を座敷の方へ行つた。

「乃公は電報て出て來たんだ。今單簡な事はお姉さんから伺つたよ。然し乃公も贊成はせんぞ」黑溝臺の戰て片眼つぶしてから、軍人を止めて建長寺て參禪してゐる叔父は、かういふ調子て物を云つた。

「勿論乃公だつて、社會上の地位なんかは問はんけど、貴樣のお父さんがそれを問はれるのは至當だと思ふんだ。然し貴樣に廢嫡されても何んでもかまわんといふ決心があるなら、いゝからそれでやつて見るさ、」

其所まではよかつたが、

「千代は變な奴だと思つたよ叔父は」とこんな事を附加へた。

更に呑氣な叔父は繰返して千代にはコケテイッシュな所があると思つたよと云ふ意味の事を云つた。これは母か祖母にいふべき事て其時の私に直接に云ふべき事ではなかつたのである。私は腹を立てた。

此叔父は私については自ら常に或る責任を感じてゐるらしく私の爲めに出來るだけの事は仕やうといつてゐた。

其午後頃見から長い手紙が來た。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今神田に行く時君達のことを考へた、何となく、目が濕ふて來た、「もし君達のことが甘くいつたらどんなに嬉しいだらう」と思つた、僕の理窟は「君が苦しめば苦しむ程爲になる」と云ふが、實云ふと早く君達の笑顏が見たい、

自分は出來るだけのことがしたい、手紙を書いて君に送つたら、君の勇氣を付けることが幾分か出來ると思つた、すると、早く歸りたくなつた、

「どうしたらいゝだらう」と歸りに自分は思つた、その結果次ぎの小說(?)を書くことにきめた、まだ例の如く終りまで考へてない、

……………………………………

不幸な祖母さん、

「實際、彼もその女も可哀そうだ、涙もろい彼はどんなにつらいだらう、それは察してゐる、またその女の人も、全く他人の意思によつて自分の身が定るのであるから不安でもあるし、つらくもあるだらう、しかし自分は祖母さんを一番不幸な方と思ふ、ありふれた小說風にゆくと、それは祖母さんが一番憎まれ役だ、しかし祖母さんになつて見玉へ、

七十幾才になる身で、自分の杖柱とも思つてゐた彼に、自分の最も愛してゐる彼に、その人にのみ望をおき、樂しみにしてゐた彼に、「見捨てる」と云はれたと思つて見玉へ、どんなにつらいかわかりはし

ない、祖母さんと云ふものは、いくらいゝ人でも、ひがみと云ふものがあるものだ、彼にそう云はれたらほんとに彼が自分を愛してゐないと思ひ、自分のことなんかどうでもいゝと思つてゐると、思ふのは無理がないと思ふ、そう思つたと考へて見玉へ、今迄蔭になりひなたになり、二十何年と云ふ永い間、彼のために骨折り、それが爲にどのくらい苦勞し心配したかわかりはしない、この事を祖母さんは明らかに自覺してゐる、自分がこんなに思つてゐるのに、こんなに骨折つたのに、こんなに心配したのに、ハイハイの出來ない時から大學に入つた今まで、一日否一時間だつて彼のことは思はないことはないのに、この自分を何とも思つてゐない、じやまに思つてゐる、こう思ふのは無理はない、決して無理のないことじやないか、こう思つたとしたまへ、祖母さんが不平に思ひ、悲しく思ひ、彼に口をきかず、彼の苦しみを察せず、なほ苦しめるのは無理はないと思ふ、祖父さんの死んだ後祖母さんの樂みは實に彼より他にないのだ、たよりに思ふのは彼より他にないのだ、そのことを明きり考へて見玉へ、僕は祖母さんが一番可哀そうだと思ふ、

それは君の云ふ通り、祖母さんが「ウン」と一つ承知すれば、彼も喜び祖母さんもどんなに幸福か知れない、しかし君、昔の人なる祖母さんにこのことがわからないと云つたつて攻めることは出來ないと思ふ、それが分る樣なら、祖母さんを不幸な人とは僕は云はない、

彼は今になつて、いくら祖母さんが泣こうが、笑おうが、怒らうが、おどかそうが、聞きはしまい、聞くような弱い男ではない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

弱い男なら祖母さんは不幸ではない、聞かないに定つてゐる人を無理に聞かそうとするから、祖母さんを不幸な人、お氣の毒な人と云ふのだ、

この場合祖母さんが折れるより仕方がない、祖母さんが折れたら、彼はどんなに喜ぶだらう、そうして必ず祖母さんの思つてゐる通り、望んでゐる通り、孝行をするにちがひない、それを知らないで、折れることの出來ない彼を折ろうとして、彼を益々怒らせる、祖母さんは不幸な方ではないか、

どうしてこんなことがわからないのだらうと思ふかも知れないが、そこが昔の人だから、やむを得ない、

幸になれるのに、ならないで、可愛い孫を苦しめ、杜と思ふ孫に嫌はれる、祖母さんを不幸と君は思はないか、祖母さんのことを考へると涙が出る、

彼もそれはつらいだらう、祖母さん思ひの彼が、祖母さんに「見捨てます」と云ふまでにはどんなにつらいかわからない、しかし彼は若いし、勝つにきまつてゐるし、自らつくつたことだから、今こそつらいが、望みがあるから、祖母さんよりいくらいゝか知れない、その女の人もつらいにちがいない、一番つらい位置にゐる、しかし彼にたよつてゐればいゝのだ、彼を信じてゐるらしいから、不幸な内に望みがある、

どうしても一番不幸なのは祖母さんだ、

責任の重いのと複雜な苦しみをしてゐるのは彼にちがいない、約束した今その女の人をすてれば、大

婦人になり一生の不幸である、さうかと云つて祖母さんを捨てることはどのくらいつらいか知れない、彼は祖母さんの自分を賴より、自分を愛してゐることをよく知つてゐる、彼は常に、祖母さんのことを心配してゐた、しかしこの苦悶は意味のある苦悶である、祖母さんのはさうではない、

しかし誰れが一番不幸であると云つたつて始まらない、たゞ僕等は祖母さんが承知して三人が互に愛し、幸福に生活するように努力しなければならない、

僕は無論、彼とその女の人とは結婚しなければならないと思ふ、祖母さんがいかに反對しても結婚するのがほんとゝ思ふ、だからどうかして祖母さんに、彼は折れるわけはないと云ふことゝ、彼の思ふ通りにさす方がいゝ、さゝなければいけない、さうした時に、どのくらい幸福を得られるかを知らせたいと思ふ、實際君の云ふとうり、祖母さんさへ承知すれば、極上吉で三人とも幸福であるし、めでたしくだ、しかしそこがわからないと云つて攻めることは出來ない、昔の人だもの、

實際彼の心が祖母さんにわかればいゝのだがね」終

……………………………………

なんの爲めにこれを書いたかは御存じと思ひます、早々

此手紙は强い感動を與へた、私の其時に此位適切な手紙はなかつた、私は淚ぐむだ。

重見はそれを祖母に讀むでやれといふつもりで書いてくれた事はわかつてゐたが、其日は其機會がな

かつた。

十一

夜八時頃になつて、千代は戸を閉めに登つて來た。其時私は本を讀むでゐた。戸を閉めると千代は部屋に入つて來て、

「私の爲めにこんな騷ぎが起つたと思ふとツラクツテ〳〵……」

こんなことを切りに云つた。

「自家の奴が、皆ワカラズ屋だからさ」私はこんな事をいつた。

こんな話ても一時間ては何程も話せなつかた。九時頃湯に入るといつて千代は降りて行つた。すると千代は直ぐ又登つて來て、オド〳〵した調子て

「順吉樣村井さんのおカミさんが今お茶の間に來てるんてムいますよ」といつて息をはづませてゐた。

父の出てゐる鐵道會社の下役をしてゐる男の妻て千代を世話した四十格好の女てある。

「何を驚いてるんだ!」私は叱るやうに云つた。「乃公が承知しなければ決して下げない約束がしてあるんぢやないか、馬鹿な奴だナ」私は驚きから赤い顏をして私の眼を見つめてる千代の顏を見て笑つてやつた。

「千代!千代!」硝子窓の下から角のある聲て呼んてゐる。

「村井さんですよ。順吉樣、村井さんですよ」

千代は膝頭で寄つて來た。私はその女が千代を連れて來た時に「お千代さん」と云つてゐた事を記憶してゐた。吾々が眞面目に正面から行つてゐる此出來事に對する皆の失禮な態度が、此女の此呼捨てに露骨に現はされてゐるやうに感じて私は急に腹を立てた。

「千代！千代！」かういふトガ〳〵しい聲が梯子段の直ぐ下からして來る。

「あんなに怒つてゐる……………」千代は泣きさうな顏をしてオド〳〵した。

「行けよ、乃公も一緖に行くから……………」

私は立つて千代の肩を其方に押してやつた。私が段の上へ行くと其女はそれを登りかけてゐた。

「何か用なのか？」私は怒りから銳い調子でいつた。

「えゝ左うです」

「何の用だい」

「……………」

「何の用か知らないけど、乃公も一緖にいつて聞かう」

「貴方には何んにも用はありませんよ」

「生意氣いふな」私は大きい聲をした。

茶の間へ行つた。其所には茶や菓子が出てゐて、母が一人坐つてゐた。

座につくと其女も興奮から眼の色をかへたまゝ、

「何にしろ急用てこれの兄が先程の汽車て上つて來て宅て待つとりますから、急いてゐると此の方がどうしたんだか大變な怒りやうて……ワケが解りやしない」と一寸流し眼て私の方を見た。

「失禮ぢやあないか。何んだつて貴樣は不遠慮に乃公の部屋へ入らうとした」

「だつて下女が主人の部屋て話し込むてるつて法がありますか。私はそれを怒つたばかりですよ」

「生意氣云ふな」

私は若しかしたら松か、或はセイといふ飯たきかゞ、手柄顏に世話した此女に知らせたのてはないかしらと思つた。會つても口をきく事さえない村井といふ下役の男やその妻などが自分達の或る運命に一ト言ても何かいふさえがヒドイ侮辱に思はれて氣持が惡くてならない所に、女中までが、と思ふと取りかへしのつかない輕蔑を受けてゐるとしか考へられなかつた。私は一層烈しく腹を立てた。然し證據も何もない事を私はどうしていゝか解らなかつた。

「此方が正面から仕てる事に、若し陰廻はりをして手段的な事てもする奴があつたら、それこそどんな事をしても罰してやるからナ。決して許さないぞ」

私は一ト間と臺所とをへだてた女中部屋まで聞えるやうな大きい聲て、こんな事を繰返した。

寢間着の姿て祖母も起きて來た。

「何をいつてるんてす。千代は用が濟めば直ぐ歸つて來るんてす」祖母はたしなめるやうにこんな事を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云つた。母も、その女に
「此方にも今、少し片附かない事があるのですからネ、明日は用の濟み次第、吃度直ぐ還して下さいよ」といつた。
　私は若しかしたら自分が餘ンまり氣が早過ぎたかしら、とも思つた。前から一ッコクな女だと云ふ事を母から聞いてゐたし、千代の返事が遲いので腹を立てたのかも知れなかつたといふ氣もして來た。それでも危ぶまれた。私は皆の前で千代に
「此事が何方(どつち)とも ハッキリ決まらない間は決してお前に暇はやらない事になつてるんだからネ」二人の間では幾度か話された事を此所でも繰返して、尙叱るやうな調子で
「あしたは吃度歸つて來なくちやいけないぜ。………それから若しも向ふで事情が變る樣な場合があつたら、其時は必ず電話で一應乃公に相談しなければいけないぜ」といつた。
「ハイ」興奮してゐる千代はかうハッキリ答へると部屋へ着物を着更へに下がつた。私は起つて暗い椽側を往き來してゐた。
　その女と千代は臺所口から出て行つた。出て行く時千代に
「あしたは兄さんと一緒に歸つて來い。いゝか」と云つた。千代は何かしら不安な眼差して、へつゝいの側に起つてる私の顏を見上げて首肯いた。

十二

私は其儘物置の屋根に作つてある、物干場へ登つて、又そのヤグラの上へ乗つた。星の多い晩だつたが、割りに蒸し暑かつた。

兎も角今の場合千代を一寸でも此所から離すのは不利な事だつたと考へた。此方の都合で還す事はならない。用ならあしたでも兄を寄越すやうにしろと云つて我を張れば、それで何の事もなかつたのにといふやうな考へも起つて來た。

私は遠く見える灯を見ながら、あの女に連れられて不安な心持をしながら急ぎ足で行く千代の姿を想ひ浮べずにはゐられなかつた。而して物足らない淋しさを感じた。

私はあした兄といふ男に會つたら何も彼も話して、向ふの方だけはどうか型をつけられるだらうといふやうな事も考へてゐた。錘のついたくさりで閉めてある小門を開けるケタ丶マシイ音がした。その音で夕方から其春結婚した細君の實家へ行つてゐた四つ上の叔父が歸つて來たことがわかつた。私は同時に物干を降りて行つた。

「未だ起きてたのか？」

叔父はこんな事をいひながら臺所から母家へ入らうとしたのを

「一寸二階へ來てくれ玉へな」といつて一緒に私の部屋へ連れて來た。

私は其晩の事を話して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「若しかすると、陰て此事に邪魔しようとしてる奴がありやしないかと思ふんだ。誰か、他の女中ぢやないかと僕は疑つてるんだがネ」といつた。

「女中なもんか。お父さんさ」と叔父は輕くいふ。

「何故」私はもう興奮して來た。

「今日會社で村井に『千代には何の過失もないが、セガレが不埒をしたに就て、兎も角千代には暇を取つて貰いたい』と云ひなつたんだ」

「そんな筈はない。此問題が或る解決に達する迄は千代は決して還さない約束になつてるんだもの」と私は叔父のいふ事を信じなかつた。

「的になるものか、そんな事が。お父さんは貴樣の事を痴情に狂つた猪武者だと云つとんなるんだぜ。約束に一々責任なんぞ持ちなるものか」

私は怒りから體が震えて來た。

「よし！此方が何所までも眞正面から話をしてゐるのに皆が陰げ廻はりをする氣なら此方も考へを變えるからネ」

かう云ふ事も私はもう叔父に對して云つてゐた。

叔父は切りに慰めて暫くして臺所口から母家へ歸つて行つた。

私は又物干場へ登つた。十二時頃だつた。汽車の笛とか電車のレールをキシル音などが未だ聞えて來

た。

私は直ぐ其所の屋根の下に今まで居た千代はもう決して再び歸つて來る事はない、と云ふ樣な事。明日から松か君かゞ自分の用をするんだといふやうな事、などを思つて感傷的な氣分になつて行つた。又若しかしたら千代は今晩の内に佐原の方の郷里へ送りかへされたかも知れない、こんなことを思ひながら時々稻光りのする東の遠い空を見て私は今更に千代と自分との空間的な距離を感じた。父は今度の事については絶對に自分と直接に會はうとはしない。それはいゝ。自分もその前年の夏の下らない事からの烈しい衝突を考へると出來る事なら父とは直接に會はずに問題を進めて行きたいと思つてゐた。然し今晩のやうな事に會つて只痴情に狂つた猪武者のする事位に輕蔑されてゐる位なら、どんな衝突をしても、直接に會つて、もう少しは解かつて貰はなければと思はれた。

私はそれだけの事を知りながら、私には少しも話さずに夕方から外出して了つた叔父に對しても、用が濟めば千代は直ぐ歸つて來るといつた祖母に對しても「此方にも今、少し片附かない事があるのだから………」といつてゐた母に對しても、その空々しさ、その行爲の趣味の惡さ、其幼稚さなどを思ふと堪へ難い不快と惡意とを持たずにはゐられなかつた。

實際これらの人々には私は變則な發育をとげた小供以上には見えなかつたかも知れない。皆は私共のいふ事がいつまでたつても價値のない空想であつてそれが實際の人生では仕舞迄何の役にも立たぬものと決め込まずにはゐられなかつたであらう。私共は絶えず、何かしら自惚れ強い事を云はずにはゐられ

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なかつた。然し仕事に對するその烈しい野心と、實際持ち得る自信とには何所か不均衡な所のあるのは自分でも感じてゐたのである。いひかへれば其時の現在に於ては多少なり自信を持ち得るやうな仕事が出來なかつた、その事が何となく私共の自惚れをいふのに幅のない聲をり出させなかつたのである。如何にも甲ン走つた聲であつた。而して此キイ〳〵聲でいふ自惚れは實際その仲間以外には通用しなかつた。私が痴情に狂つた猪武者であるやうに仲間以外の人には私共は皆何かに狂つてゐる猪武者に過ぎなかつたのであらう。然し其所で吾々も止つてはゐられなかつた。而して其止ることなき若者についてそれから先を考へやうと全くしなかつたのが、それ等の人々が私共との關係で彼等自身を或る意味で不幸にした一つの原因なのだと思ふ。これは然し殆ど避けられない事とも思ふ。

十三

私は部屋へ歸つても迚も寢られさうにもなかつた。雨戸をしめた椽側を往き來して考へた。どう考へても、腹立たしくてならなかつた。自家の者のやり方が餘りに此方を輕蔑したやり方であると思ふ。

私はボンボリをつけて、其時はもう一時近かつた。臺所口を叩いて、女中に其所を開けさせて、父の寢室に行つた。

父は中々返事をしなかつた。私は少しお話したい事があるから起きて頂きたいといつたが、父は承知しなかつた。

「そんなら明日の朝聞いて頂きます」
「明日は早く外出するから會つてゐられない」
「どうしてもそんなに早くお出かけにならなければならないんですか？」
「左うさ今は會社で一番忙しい時だもの」
父は或る鐵道會社の專務取締りといふ役をしてゐた。其時は丁度其鐵道が官有になるについて、四五日で引渡しをするといふ時だつた。
「左うですか。そんなら聞いて頂かなくてよござんす」
私はハッキリ强い調子でかういふと起ち上つて來た。それが自身にすら「何をするか知れませんよ」とでも云つてるやうに聽えた。
部屋へ歸ると私は只々興奮した。
私は部屋の中を暫く歩るき廻はつてゐた。何か物でも叩きつけてやりたいやうな氣がしてならなかつた。私は机の上から埃及煙草の百本入りの空箱を取るとクリッケットの球でも投げるやう手を延ばしたまゝ力まかせに疊へ叩きつけて見た。角が當つた所が三角に疊の繝を切つて、函はイピッになつてハヅムだ。中からは小さな紙切れが五六枚飛び散つた。二三年前洋書家のF氏の所でデザインの參考になるべき小さな物をハッたスクラップブックを見て、左う云ふ事に或る程度の興味を持つ私は其時から氣をつけて外國の雜誌や廣告などから左ういふ物をキリヌイてはためてゐた。その內の小さい部を百枚バカリ

その小函に入れて置いたのであつた。

私は此時程の急烈な怒りと云ふものを殆ど經驗した事がなかつた。然しこんなヤケらしい様子も餘儀なくされてするのではない事を其時の現在に於て明らかに知つてゐた。若し側に人かゐたら私はヴァニティーからもそんな事は出來ないと知つてゐた。それでも腹立しい心持には何かそんな事がして見たかつた。それを努力して壓する必要もあるまい。こんな事が其時の現在て私の頭に浮むてゐた。

私は輕いブリッキの函の如何にも手答へのない物足らなさに戸棚を開けて九磅の鐵亞鈴を出して、それを出來るだけの力て又叩きつけた。

鐵亞鈴は斜めに一間餘りハズムて、部屋の隅の机に飛び乘つて更に障子に當つてガタ〳〵〳〵と音をして机の裏へ落ちた。

私は戸棚の段にヒヂをつけて興奮から起る體の心の震えをおさえるやうにしてヂッとうつ伏しになつてゐた。ト、私の頭に不圖下に寐てゐる岩井の様子が浮むて來た。鼻の低い顏色の惡い、然し肥つた、如何にも田舍者らしい新らしく來た書生が、眞夜中寢てゐる直ぐ上の天井に今のエライ音を聞いて暗の中にムックリ起き上つた様子を想ひ浮べて了ふと、私には堪えられない可笑しさがコミ上げて來て獨りクスリ〳〵笑はずにはゐられなかつた。

(其後二年程して疊がへの時見たらカナリ厚い根太板が眞ン中から折れてゐた。其時も私は其晩の事を考へて獨り笑はずにはゐられなかつた。あれ程の怒りの中にあんな止められない可笑しさを感じた事を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は面白い經驗だと思つた。又、「こんなヤケらしい樣子も仕まいと思へば直ぐよせる、然しそれを應えつて偉らくもない」一方でこんな事を思ひながらしてゐる心の餘裕、——これを考へた時私は其時に鐵亞鈴が机の上のランプとは五寸と離れない所へ飛むで行つた、それを見ながらヒヤリとも何んとも仕なかつた事を想ひ出して、自分は矢張り平常の心持てはなかつたと思つた。——私は子供からランプには非常に用心深くシツケられて來て、下の書生がそれをつけ忘れて寢た場合など私は本氣になつてそれを怒つたものであつた。)

暫くして私は巴里にゐる繪かきの友達へ手紙の續きを書き始めた。

「今は夜の一時だ。

僕は今晩程の怒りを嘗て經驗した事がない。今、僕は獨り如何にも愚な亂れ方をした所だ、亂れまいと努力するのが面倒臭いからだ。今晩は迚も眠れない。起きてゐれば益々氣が焦立つばかりだ。それで午前の手紙を書きつゞける事にした……」

私は興奮から切れ〳〵な文章で書いた。

「……これでも僕は怒つては惡いか?」こんな句が所々にある。

レターペーパーの裏表に九枚書いた。仕舞に

「父は僕を廢嫡するとも此事は許せぬと云ふさうだ。

祖母は廢嫡は家のカキシてある。これに比すれば地位の違つた女でも入れる方がよいと云ふさうだ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そんな事はどうでもよい。兎も角僕はこんな人達とは共に暮らせない。僕が孤獨で平氣でゐられる人間でない事は君もよく知つてゐやう。僕には君と重見と千代とがゐる、實を云ふと、もう一人祖母がゐると加へたいのだ。

もう書けない。」

書き終つて私は傍の懷中時計を見て又

「明治四十年八月卅日午前三時半」

と入れてペンを擱いた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前南極探檢隊書記長 春樹多田恵一君著

四六版洋裝美本全一冊約五百頁
色版コロタイプ各一葉網版十三葉入

定價八十五錢 郵稅八錢

南極探檢私録

好評忽ち三版

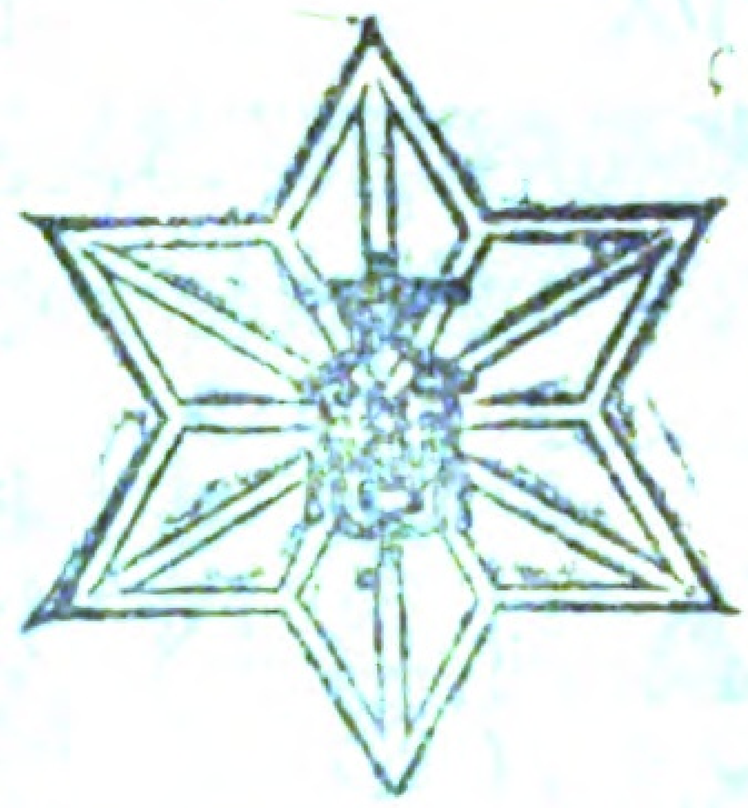
著者筆を載せて南極探檢の壯擧に從ひ往反四萬浬氷濤を突破して能く極地に到達す本書は前後二ヶ年中壯擧發表の當時より歸般上陸の後に至るまでの顛末を細叙したるものにして隊長秘書の好地位にありたるだけ隊員の內情行動歴々指掌に示すが如し思ふに日本探檢隊の成績に關しては世上猶若干の疑惑を懷くものあり著者亦之が實狀を告白し併せて再擧の計畫を發表す筆鋒風霜の氣を含み言々血を吐くの槪あり卷中掲ぐる五十餘頁の繪日記は珍中の珍にして洒落の天眞を寫して遺憾なし

▲發行所

東京日本橋區
振替東京一二〇五五
電話本局二一〇〇番
株式會社 啓成社▲

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



本會員帽章



本會員徽章

文學講義錄

第三回新學期開講

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ!!!

本會に入會すれば

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◎本會員には文章其他無料添削の特典を與ふ◎本會員には各種の大特典を與ふ◎本會卒業生には學資貸與の特典あり◎本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◎本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◎教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之れ本會の常に聞とする所なり

講義錄 見本附き **無代進呈** 規則書 申込次第

初等科 五ヶ月卒業

教授科目

論文。小說。新體詩。和歌。俳句。書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學。文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例。雜科

高等科 五ヶ月卒業

教授科目

近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇通論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百講。

東京神田西小川町（電話本局四五四七番 振替東京五二一九番）

大日本文學會

（中付三の二）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 芳賀矢一先生新著

最新刊

日本人

▲新海畫伯裝釘▼

古人の風俗、習慣、説話、文學を基礎として教育勅語の大旨を明かにし、國民道德の淵源を説く。何人も讀まざるべからざる書にして、何人も讀みて卷を措く能はざる興味あり。家庭教育の書也通俗教育の書也苟も國家教育に志あるもの、第一に讀むべき書也。卷末添ふるに

博士新選の國體百首を以てす悉く國民必誦の名什也。

洋裝四六判全一冊
紙數二百四十余頁
定價金六十五錢
小包料内地金八錢
臺灣樺太朝鮮清國各金二十錢

本派本願寺 大法主猊下題辭

文學博士前田慧雲先生編

最新刊

眞宗聖典

前田博士の創意に依り朝夕勤行用の聖典は勿論親鸞蓮如兩聖人に關する假名文に記せられたる總ての聖典を網羅せり、最も確實なる史料に依て兩聖人の感話と風丰とに親灸せんと欲する者は本書を看よ、紙質最良印刷鮮明裝釘優美、一見人をして尊嚴の感に打れしむ、舊式活字にて粗紙に印刷したる似而非袖珍聖典に比すれば内容外見豈唯に天淵月鼈の差のみならんや謹みて瀏覽を仰ぐ。

總皮三方金菊半裁
紙數千三百五十頁
函入一冊定價二圓
特價金一圓五十錢
小包料内地十二錢
臺樺朝清各三十錢

(中付三の三)

東京神田 小川町一

文會堂書店

振替東京 三五一三

信用なき小店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依ふ旨御附記を乞ふ

坪内博士序 水谷不倒校訂

世話淨瑠璃大全

上下 貳册

▲解題評説あり ▲挿繪寫眞版數葉 ▲優美績装紙箱入毎冊八百五十頁以上 ▲正價一冊金一圓五十錢市外郵税十二錢二册金三圓（二册購入者に限り送料不要）

本書は淨瑠璃に統系あること丸本中より世話物の粹を集めこれに嚴密なる校訂を施したるものにして元祿前後の名編佳作四十餘種及び歌祭文正本十種を收め一々淨瑠璃に統系あることを示し作者壇の變遷を知らしめたれば近代文學研究家の好資料たり、即ち近松、海音をはじめ都太夫一中、宮古路豐後の正本等世話淨瑠璃の名作は本書に網羅されざるなし。

平出鏗二郎校訂 改題及索引附

室町時代小說集

全一册

口繪寫眞版（付裏神繪卷、富士の人穴）田村の草紙、あきみち物語）菊版五百頁錦クロース美本 正價壹圓廿錢 市外小包十二錢

平安朝貴族文學の素地を脱して元祿平民文學の源泉をなし、ものは實に室町時代の文學とす。而かも世、平安元祿の文學に精しくして室町文學に疎なるはその書の流傳するもの稀なるによる本書は多數の室町小說の中より其代表的名作數十種を抽き、これに嚴密なる校訂を施したるものにして家庭小說あり、教訓小說あり、諷刺小說あり、宗教小說あり、後世傳唱する所の童話傳說の基をなすものまたこの中にありて光彩を放ち光華を競ふ國文學攻究の士の必讀書たるは勿論一般讀書家に座右の珍たらんとす。

饗庭篁村著 〔大好評〕

雀躍

全一册

口繪（著者の少年時代より今日に至る迄の寫眞數葉）

菊版五百五十頁 錦クロース上製本 正價金一圓五十錢 送料十二錢

本書は饗庭篁村翁が德川文學に關する記述、評論、戯文、短篇小說四十五種を收めたるものにして翁が文學的生涯の一半を窺ふに足るものなり。

脚本

山守

ルウドヰヒ作 山口小太郎閲 中島清譯

全一册 正價金六拾錢 郵税六錢

本書は獨逸文豪ルイドヰヒ作「エルブフエルステル」即ち「累代山守」を忠實に譯したるものなれば學生諸君が原著繙讀の好案內書たるは勿論イブセン、ハウプトマン以外我が脚本界に新趣味を提供したるもの

新刊樂曲

タンホイゼル

Der Erbförster.

ワグネル作 秋元蘆風譯

金拾錢 郵税二錢

全一册 正價四拾錢 郵税六錢

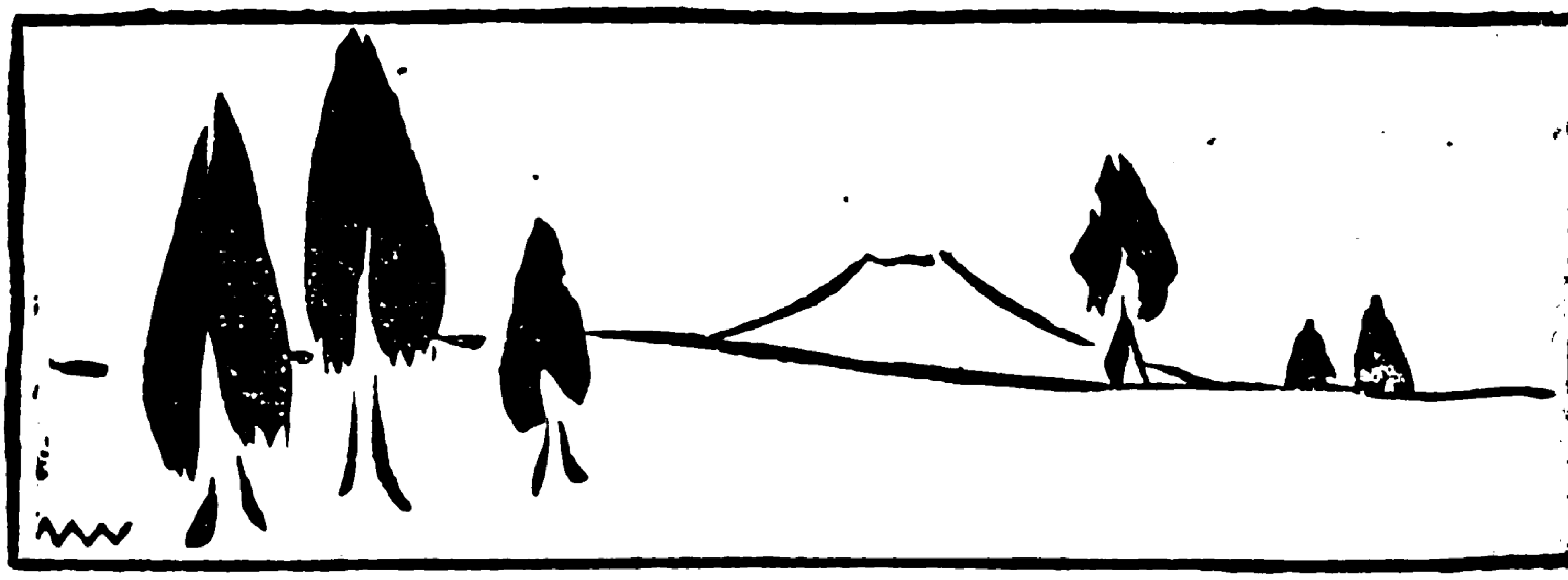
近世獨逸文藝においてワグネルが樂劇家の泰斗たることは今更喋々を俟たず。而して其傑作と稱せらるゝものを「タンホイゼル」となす。「タンホイゼル」は獨逸中古の口碑傳說を材料として成功したる樂劇の一なり。此の作によりて獨逸國民性の如何を知りかねて中古の人情風俗を窺ふを得べし。譯文また頗る流麗にして此の名著をして躍如たらしむ。

東京市牛込區津久戸町六番地 精華書院 電話番町一七一五七番 振替口座四三六六番

（中付三の四）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



馴染の家

徳田秋聲

脩吉はこれまで二三回も歸省した度毎に、何時も行つて見やうと思ひもしなかつた、自分の昔し育つた家の居周を、今度歸つたら是非一度見ておきたいような心が動いて居た。これ迄は自分の現在と、前途のとばかり考へて暮して來た脩吉は色々の事をして來た揚句、時々暗い過去のずッと奥の方に、微かに透し視られる自分の幼時のことなどを、折にふれて懐しく憶出して見ることがあつた。今までは振顧つて見るのも厭であつた其頃の自分の慘めな姿や、暗い家の居周の様子が、敗れ果て廢れはてたような頭の底に、をり〳〵煤け切つた古い畵像か何かを見るように閃くのであつた。彼は渚に晒された棒片か貝殻の屑のように散々離々に遺つてゐる其等の古い記臆を拾ひあげて、時々心のうちで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

繋合せて見たりなどした。

彼はもう三十三四になつてゐたが、賣色あがりの妻のお絹は三つ年上の三十七といふ齢であつた。お絹は脩吉がまだ田舍の町の高等學校にゐる時分からの馴染であつた。その頃お絹はその町の遊廓で左褄を取つて可也賣れてゐた。三味線も達者に彈ける方ではなかつたし、踊の手一つ知らないほどの女であつたが、すらりとした姿や顏立は相當に揃つてゐた。城下の士族の零落であつた父親が、商業に失敗してから、中年てふと其樣ところへ出ることになつたので、それに長いあひだの勤めでもなかつたから、脩吉が法科大學へ入ることになつて二年目の上京のをりに、一緒に東京へ出で、夫婦暮をしてゐても、些とは誰も氣着かないくらゐ、ぼんやりした野暮くさい女であつた。しかし其頃はもうヒステレーて、色澤も惡く、肌なども荒れて、長みのある表情の乏しい淋しげな顏に、體の衰が見えてゐたが、癖のない髮を丸髷に結つて、紅い手絡などをかけると、耳の附根から頸のあたりが、すつとしてゐて、どこかに垢脫のしたところがあつた。手足の節もすんなりと伸びた方で、近よつてみると、どこに難があると云ふほどでもない代りに、甘味のない顏であつたが、押出の立派なとだけは、人目を惹いた。

さうなるまでに、脩吉は可也金を費つた。學事も荒んだし、健康も衰へたし、町から程遠くもない在の方にある家や父親の信用も悉皆失してしまつた。しかし一つは母親が繼母であつたゝめに、脩吉の頭は一層荒んで、意地になつて、無理な遊蕩をするようなとが多かつた。脩吉はお絹を東京へ連れだして來た頃から、女に對する興味がさめかけて來た。もう好いくらゐの年て、無智な心が凝りすぎてゐたから、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お圓丸出しの言葉一つ直すにも隨分骨がをれた。どこと云つて、撓みのない感情や神經は、差向ひにゐても意味の聯絡のある會話すら交すことが出來なかつた。幾年かのあひて、色町の空氣に浸つてゐたと云ふ女の背景を除いては、脩吉に取つて、お絹は色の剝落ちた木伊乃としか思はれなかつた。

「この婆ア。」

　脩吉は時々ぐづり／＼した女の口の利き方や體度に神經をいら／＼させられると、駄々ッ兒のように喚いた。一度は嫁入をしたことのある世帶崩して、苦界にもゐた女でありながら、お絹は年下の亭主の心持を理解したり、世話を燒いたりするような氣の利いた女ではなかつた。そして脩吉に然うした言葉を浴せられると、直にしよげてしまふのであつたが、口のうちでは矢張ぐぢ／＼言續けてゐた。

　長いあひだ遊び癖のついた脩吉は、お絹との差向ひに倦怠を感じて來ると、時々外へ出て酒を飮んだり女を獵つたりした。初めの一學年だけは、眞面目に講師の講義をも聽いたが、直に飽いてしまつた。そして遊びから歸つて來ると、善く胃が惡いとか、頭腦が重いとか云つて、引籠つて寢たり起きたりしてゐたが、お絹も氣が鬱ぎだすと、口も利かずに獨て善く泣ていた。

　脩吉はその頃、是限一切學資の要求はしないと云ふ條件で、父から少し纏つた金を請取つて、牛込の方て二十ばかりの客室を有つた下宿屋を一軒買取つて、お絹に營業させる事にした。その時は父親もわざ／＼出て來て、何くれとなく世話を燒いた。同時にお絹も四五日逗留してゐた父親から、色々の責任を負はせられた。脩吉はそこから學校へ通ひながら、帳場を見てゐたが、客の待遇や、材料の仕入、賄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

などについては、お絹はかいなての素人よりも目端が利かないくらゐ頭脳が鈍かつたが、自分では一ぱし働いて見せる心算で、何となく調子が浮ついてゐた。そして其當座は、一日臺所へ出詰でごちや〱何かをやつて居たが、オムレツを燒損ねたり、コロツケーの芋と肉との分量を間違へたりするのは、普通のことであつた。其方こつち下宿屋などを渉り歩いて、酒を出す時の手心などを知つてる女中に、何かをさせて當分それを見習ふことになつてゐたが、早呑込のお絹は、直にそこへ出しや張つて行つて、女中に邪魔にされるようなことも度々であつた。

遊び癖のついた脩吉は、下宿を初めてからも、ノオトを擴げるようなことは滅多になかつた。そして帳場や臺所の間をうろ〱して、白金巾の前垂をかけた女の働き振を、物希しさうに眺めてゐた。

「如何だい、ちつとは手加減が解つて來たかい。えゝお絹。」脩吉は鐵灸で色の惡い鮭の切味を燒いてゐるお絹の肩越しに、顏を出してにや〱笑つてゐた。

「譯のないもんですのね。私はもう何も彼も覺えてしまうたぞね。」お絹は甘えるように言つた。

「何だか怪しいもんだぜ。鮭の切味を買ふなら、お前注意せんと駄目だよ。非常に甘いのと不味いのとある。然う鹽のじわ〱出るのは不味いに極つてら。」

「然かつて、お値段とも相談せんならさかえね。男が臺所へなんぞ出て、そんな世話やくもんぢやないわ。」

「何を....。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

脩吉は冷笑つて、形の好い女の肩口へ兩手をかけて引倒すと、お絹はそこへぺつたり尻餅を搗いた。

「あんた何するんですよ。人の忙しいとこへ出て來て……。」

お絹は起上りしなに、撓ふ手てひしやりと男の膝を打つた。そして其手で毛筋の立つた綺麗な鬢を撫ぜてゐた。お絹は今でも、そんな時に顏を赧めた。脩吉はハッハと笑ひながら奧の方へ入つて行つた。水口の方で漬物を小皿に盛分けてゐた女中は、じろりと此方を眺めてゐた。

「ほんとに家の旦那くらゐ、ふざける人はないよ。」女中はいけぞんざいな口を利きながら呟いた。

お絹は脩吉と馴染んでからの長いあいだのとを憶出してゐた。そして到頭望が叶つて、こゝで慇して下宿屋などしてゐる狀を、田舍の町で、年取つてから、貧しい骨董品の賣買などをしながら、細々と暮しを立てゝゐる父親や、リウマチで年中足腰立たずにゐる氣苦勞の多い母親に見せたいような氣がした。それよりも、今二三年もたつて、脩吉が學校を出て、高等官か何かの口に有着く時のとを考へると、一緒に揃つて田舍へ歸る時の、綺麗に着飾つた自分の姿などが目に浮出して來るようであつたが、それを待つ間の耐えがたい不安と忘屈さとが、却つて頭に悩ましく感ぜられた。

「お前のような踏切のない女が、將來己の一家を切廻して行けようとは思へないよ。」脩吉は時々揶揄面で嗤つた。

「そんなら如何云ふ人を、貴方奧さんに持つ心算け。」女は暗い顏に淋しく笑つた。

「己は己の腕で、好な女と結婚して見せる。お前なぞに話して見たつて解りやしない。」

脩先は半分は女に氣を揉せたり、焦燥せたりするのが面白さに、嵩にかゝつて々の事を言立てたが、お絹も負けぬ氣で、やきもきしながら爭つた。

下宿屋の成立つて行きさうもないことが、三四ヶ月もたつと直に解つて來た。二人のあひだには其頃から一層いさこさが多くなつた。月末になると、二人は能く帳場の奥で、錢勘定のことなどで言分をしてゐたが、その度に、お絹はこんな屋臺を張つて行くだけの能力すらないことを脩吉に責められなどした。

「他日己が辯護士か、政事家にでもなつた曉に、そんな事でお前は家政を執つて行けると思ふのか。」脩吉は言かけた。

「そんなら貴方も、その心算で女買ひなどしないでおいて下さい。」

「けどお前の方の下宿營業の決算と、それとは別問題だぞ。己が遊ばなくとも、收支の償はんものは、矢張駄目なんだ。己は慘な内職などして、學問しようとは思つてゐないのだよ。」脩吉は、落窪んだ目をぎろつかせせながら、痩ッぽちな肩を聳かしたが、つまり自分で金策に歩くより他なかつた。

暮に、建物を抵當に、少し纒まつた金を手に入れたときも、脩吉は札束を懷ろにして、行きつけた小塚の女の方へ出かけて、そのまゝ二日も流連してゐた。お絹は善く花や棋を打ちに來る、年嵩の或醫學生の友人に頼んで、脩吉をつれに行つてもらつたが、その男も行き限りそこに引懸つて、うちやちやけて居た。

「お絹さんぢや、迚もあの世帶は持切れませんよ。」その男は、翌朝途中で飯を食つてゐる時、脩吉に忠

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

先じみたとを言出した。そして一つ二つ、脩吉の氣のつかぬお絹の非などを言告げた。

「何しろ若い男を相手の商賣ですから、あの人だつて陽氣で面白いんでせう。」その男は揚枝で細かい綺麗な齒をせゝりながら附加へた。

脩吉は、これ迄にも口やかましく言立てゝ、お絹を責めたのであつたが、それにすら尚自分の贔負目があつたとさへ思はれて來た。然し「森さん〳〵」と言つて、浮ずつたような調子でゐるお絹から、小遣などを假りて行つたとのある此男ののつぺりした顏にも、何處か油斷のならぬ處があるようにも思へた。

「下宿を賣つちまはう。」脩吉は何だかむしやくしや腹で、そこの勘定をすますと、彼此三分の一にも足りなくなつた金を些と勘定して、暗い顏をして、それを袂の底へ突込みながら考へた。一昨日の朝、寢床でちらと札束で脹らんでゐる紙入を見てから、人なつこそうに絡はりついて、品垂れかゝつた小塚の女の、ニツと笑つた笑顏も、何だか氣にかゝつて來た。其女は一二度家へも訪ねて來たとがあつた。更まつたお絹の其時の待遇振さへ、憶出すと莫迦々々しいようであつた。

「これを持つて、また何處かへ行かうか。えゝ森さん如何だね。」脩吉は飲食店の前を離れると、充血した目の眦に小皺を寄せながら、相手を振顧つた。

「けど森の金ですからね。」森はニヤ〳〵しながら、ちよつと首を捻つた。

脩吉は行くとも歸るともつかずに、ぶら〳〵歩出した。

脩吉は、卒業後二年も東京の下宿や友人の家などにごろついて、怠け癖の取れない自分にも出來さうな高等職業を捜しまはつたり、何でもなささうに見える政治運動などに取着かうとして、首領株の門に出入りしたり、雜誌を興すつもりで、金主を見つける運動を試みたりして、悶踠きぬいだ揚句に、色の褪せた脊廣一着で、此頃田舎の町へ歸つて來たのであつた。

それまでにも、脩吉は幾度女を振棄てようとしたか知れなかつたが、矢張別れきりに別れることが出來なかつた。

東京で職業を捜してゐるあひだ、田舎の町の父親のところへ送り返してあつた、病身なお絹から來る手紙が、時々脩吉の心に、慘(みじめ)な女の生活を思浮ばしめた。

脩吉はその頃友人の勸めで、左(と)に右(かく)出て見ることになつた或新聞社の外交記者としての、自分の職業と云ふことの悲哀を感じてゐる折からであつた。初めは友人の手から、論文などを提出して、それから平記者と一緒にこき使はないと云ふ約束で、比較的閑散な方面を擔任させられることになつたのであつたが、政客の玄關や、政黨の倶樂部などへ出入りする度に、脩吉は自分の風采の揚らないことや、服裝の慘(みじめ)なことを氣にしない譯に行かなかつた。車賃や、晝辨當代なども、今の手當だけでは心細かつた。氣の利いた問題を捉えることも、容易でなかつた。脩吉は、編輯局へ入ると、外の記者とは口(くち)も利(き)かずに、始終殆ん

ど孤立の姿で、新聞や雑誌にばかり讀耽つてゐたが、偶に取つて來た自分の種子が、いつも其まゝ主任の手に握潰されるのを見ると、自分の生きる道が、直り止まつたやうな苦痛と侮辱を感じた。

脩吉はその頃、ふと社で親しくなつた、相場擔任の一人の男と、京橋の或裏通に、部屋を借りて自炊生活を初めてゐた。脩吉は時々首を突込んで見ようと考へてゐた、その社會の事を知りたさに、此男と交際することになつたのであつた。

「何をするたつて金の世のなかだからね。」脩吉は、酒など飲むと、其男に自分の鬱憤を洩した。

「君達は儲けようと思へば、譯はないだらう。」

「なか〳〵然は行きませんよ。それでも一二度は些と浮んだこともありましたがね。」其男はニヤ〳〵して居た。接近して見ると、意つたよりも世間通であることが解つて來た。

脩吉は話がはづむと、此男と時々遊びなどに出かけた。金の無心をして來るお絹の長たらしい手紙なども、此男にだけは見せることにしてゐた。

――私も時々ぢびようの癪がおこつて、難じういたしをり候。また父も年を取りてしなれぬ商賣ゆゑ思ふほどのお金も入らず、いつも貴方のよばかり言暮しをりますゆゑ、御都合つき次第、いかほどでも小使をお送りくだされたくたのみ入候。人の話に、黒壁と云ふ魔の山へたてこもり三日のあひだ斷食してお祈りするを、どんな癪もちてもなほるといふことを聞き候ゆゑ、死ぬか生きるか行つて見る積りにござ候。また此節もまだ貴方さま好い口も見つからぬやう、それのみ待遠しく候まゝ何卒々様子

をお知らせ下されたく候。……

脩吉は、そんな手紙まで衣兜から出して讀んで聞せた。

「もう迚も駄目なんだね。死んでしまへば可いんだ。」脩吉は顔を顰めたが、女がまた東京へ出て來て、一緒に暮す日の來るのを待つてゐることを考へると、慄然とするようであつた。そして未だ東京にゐる時分に、持切れなくなつた下宿を人に貸して、其から揚る四十圓許の家賃で、別に夫婦で小體な借家住をしてゐた頃のことから、その家賃が左右滯りがちで、小さい世帶すら張切れなくなつてから、以前からの馴みであつた下宿に轉げ込んで、そこで二人暮してゐた時分のことなどが、憶出された。卒業試驗の準備に忙しい時すら、ヒステリー性のお絹は、狹い部屋のなかで、毎日爲ることもなしに暮す體屈さに、男にノオトばかり擴げさせてはゐなかつた。修吉は始終痛む頭を抱えて、うん〳〵唸つてゐた。そして疲れて來ると、そこへ横になつて頭を枕に持たせた。

机の側に仕事を擴げて、針を動かしてゐるお絹は、男の一寸とした動作にも體を戰がせながら、甘えるような樣子をして時々額越に目を睜つた。脩吉はそれを感ずると、氣がいら〳〵するようであつた。

「お前は暫く田舍へ歸つてをれや。」脩吉は焦つく神經を壓えつけるようにして、優しい言葉をかけた。

「何てね。」と女は冴えない目を上げた。

脩吉は默つて、伸びた髮毛を指て仕扱いてゐた。

「貴方が卒業もせんのに、どの顏さげて私が田舍へ歸れると思つて……。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「卒業々々つて、己の卒業が當(あて)になぞなるものか。」

脩吉はへら〳〵と笑つた。

「己のような惰けものが、假にお情(なさけ)で學校を出してもらつたところで、細君を養つて行けるか何か其も疑問だぞ。それかと言つて、此上鐚(びた)一文だつて親父から財産を讓受ける望みはないし。」

女はハアと溜息を吐くばかりであつた。

「明日にも下宿を賣拂つて、金を拵へてやるから、それを持つてお歸り。」

「そして貴方(あんた)は如何するのや。金滿家の養子にても行くのけ。」女は冷かすような調子て、獨語のように言(い)つた。

「いや己は如何ても好い。お前は何が樂しみて、己のようなものに喰着いてゐるのかと云ふのだ。」

「だつて、貴方は森さんなぞに、善く養子の口を賴んでおいてやさかえ。」

「さうさ、己には義理の弟があるからね。」

「私等のとを、善くも言はない阿母さんなぞに、貴方は義理を立てなけアならん譯があるのけ。」

「貴樣(きさま)なぞに、己の心持がわかるかい。」

お絹はその事をくど〳〵しく言立(いひた)てゝゐたが、終に脩吉もムキになつて怒り出した。

脩吉は如何かすると、夜中に部屋を飛出して、森の宿へ逃げて行つた。お絹も後を追かけて見え隱れに尾いて行つた。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

森は婚約をしたとも爲ないともつかぬ女學生上りの女と一緒に暮してゐた。そこへ夫婦は入つて行つて、周章てゝ起出す二人の枕頭へ坐込んだ。

「徹宵くつついてゐて、煩くて爲様がない。」

脩吉は二人の前で、お絹を横目にかけながら言出した。女が何か言はうとするのを、押伏せるようにして、不足を並べた。と、森はランプの心などを掻立てゝ、開直つて双方の言分を聽きにかゝつたが、女は寢床を片隅へ押遣つて、長火鉢に火を起しはじめた。ネルの寢衣の上に、太い絣の銘仙の羽織などを引かけて火を吹いてゐた束髪の横顔が、脩吉の目に媚めかしく見えた。

「森の言ふことでさへあれば、何でもお前は聽くのか。」

脩吉は歸り途で、少し離れて歩いてゐる女を振顧りながら詰つた。

「さうかつて、貴方が邪魔になると言ふから、森さんが當分來てをつてもいゝと言ひますものを……。」

脩吉は默つて歩み出した。森とお絹とのなかゞ、また新らしく彼の心を曇らした。

「あの女も森に絞られるんだらう。」脩吉は呟いた。

「貴方かつて、森さんの奥さんに目尻をさげてる癖に……。貴方は本當に可怪な人や。私は貴方の氣が薩張解らんのえ。」

脩吉は如何か恁か肩書の取れたとき、職業に有つくまでと云ふ双方合意上の約束で、その時下宿を實拂つて、それで負債を片着けなどして、多少手についた金で、少許着物を拵へたり、請出すものも請出

したりして、女は一旦田舍へ歸つて行つたのであつた。その時は新橋まで見送つてやつた脩吉は、窓際に涙含んでゐる女の顏が、目の前から消えて行くと、ホツとしたやうな安易な心持に返つた。そしてはづむやうな步調でプラツトホームを出て、廣々した場外へ出た。衣兜に遺つてゐる金で、何處へ行つて何をして今夜を過さうかと考へてゐた。

銀座通の柳には早や夏らしい蔭ができて、淡色の洋服や白い帽子などが、目に新しく映つた。

二つあつた影が、一つ消えたやうな寂しさが、直に脩吉の心に漲つて來た。三月四月を支え得るだけは殘しておいた金も、何か彼して費ひはたして了ふと、女に對する執着の强さが一層堪えがたく喰込んで來るのを感じた。

脩吉が町へ歸つて、またお絹と同棲するとになつてから、もう一月餘にもなつた。

脩吉は寧ろ田舍の町で根據を拵へて、代議士として打つて出る準備でもした方が、順序らしく考へられたので——然う思ふと、何も彼も忘れて歸つて來たのであつた。

逢つて見ると、お絹は思つたほども衰へてゐなかつたが、一日も速く自分の手許へ引取らなければならぬやうな、事情の下にゐるとが、荒れた父親の店頭に立つた瞬間に、脩吉の胸に感ぜられた。

場末に近いその店には、古い書畫の掛軸や、城下の舊家から出たやうな家具、ちぐはぐの佛具などが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ごみ／＼並べられてあつた。

父親は、口を利合つても何の親しみをも感じないほど、耄れてゐたが、入口に暖簾のかゝつた暗い納戸て、寢床のうへに蹲踞まつてゐた母親にも、脩吉の顏は殆んど見忘られてゐた。

脩吉は漸と物心を覺える頃に、父親に今の後添か來てから預けられることになつた叔母夫婦が、昔し棲んてゐたような、或靜かな屋敷町に可也手廣な家を一軒借りて、そこに久振てお絹と同棲することになつた。長いあひだ自分に適合した職業も見つからずに苦しい放浪生活を續けてゐた脩吉は、古い知合などの比較的多い此町へ來てから、金の融通などもいくらか利くので、さほど不自由も感じずに暮すとが出來た。それに此處の新聞社では、時々彼の論説などを載せてくれた。

いつ逢つても、氣に斑のないお絹は、未だに職業にも事業にも有つかない脩吉に、惡い顏一つ見せなかつたが、一月も一緒にゐると、脩吉は直に倦怠を感じて來た。

薄暗い土間から上るように出來てゐるお茶の室には、時々お絹の以前の友達などが訪ねて來た。お絹の前生涯を能く知つてゐる、脩吉の遊び友達なども寄つて來た。お絹の勤めてゐた遊廓や、仲間の風評などが能く話題に上つた。その女のなかには、地方廳の事務官などに落籍かされて、今東京で何の某夫人と呼ばれてゐるようなものもあつた。大阪役者に引懸つたゝめに、土地に居堪らなくなつて、他國へ出稼に行つた女もあつた。

脩吉はそんな仲間に加はりながら、うか／＼した日を暮した。そして其等の閑人を相手に花を引いた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り、東京で流行る唄を歌つたりした。これまでに買つた多くの女の話なども出た。例の相場記者の取持て、或る小金持の家へ養子に入込まうとして、見合までして失敗した滑稽などもあつた。その家の主は、やと印刷局に勤めてゐた老官吏の未亡人であつた。脩吉はちんまりした物靜かなその住居の樣子や、堅氣らしい未亡人、嫺やかに茶を持つて出た氣高い令孃の素振などに、貧相らしい自分の慘な姿の反映を感づかない譯に行かなかつた。

「さうしてみれば、貴方にも自惚があつたのかね。」

お絹は男の顏を眺めた。

「……それ以來、己は養子を斷念した。そして矢張己には己の嬶が適當だと思つた。」脩吉は苦もなさそうに笑つた。

脩吉は、東京から歸ると、いつても一二度は顏を出さなければ氣のすまない、昔の馴染の家を折にふれて訪ねた。そこはお絹が左褄を取つてゐた場所とは、別の方面にある遊廓のなかにあつた。

そこの遊廓には、お絹がゐた場所のやうな東京擬ひの、脅かした三層樓や、金ぴかの家がない代りに、京の先斗町でも通るやうな、格子造に薄暗い金網行燈の出た家が、立續いてゐた。柳の枝が、道の眞中に垂下つて、しめやかに雨の降る日などには、晝間も暗い家の奧の間から、ポンポンと輕い鼓の音などが洩れ聞えた。

馴染の家と云ふのは、以前脩吉が育てられた叔母の家の隣にゐたとのある女の切廻してゐる一つのお

茶屋であつた。その女はもう彼此五十に間もない婆さんであつたが、いつ行つて見ても三十七八か四十そこいらにしか見えないような顔をしてゐた。

「あら、お珍しい、また歸つて入らしたのけ。」女はそこを世話してくれてゐる或年取つた商人の胤らしい子供に乳房を披けながら、格子戸を開けて、暗つぽい式臺のとこに突立つてゐる脩吉の顔を眺めあげながら、氣懈さうな聲で言かけるのであつた。

このお神は不斷に子供を産んでゐた。もう姉さん株になつてゐる娘も二三人あつたが、その娘の子のような小さいのが、後から〳〵蔓を引くように産れて來た。父親の知れないような子もあつた。醜い女の子や、男の子は、つぎ〳〵に里子や貰子にやられた。お神の容色の衰へは割合に目に立たなかつたが、慵げな體は何時見ても、長火鉢の側に据えられた限であつた。

脩吉は、來る度に此の家の荒れて行く様が目に着いた。昔し子供の時分に、隣にゐた此女が、此處へ來て商賣を初めてからも、ちよく〳〵遊びに來てゐた叔父につれられて、薄暗い此の家の茶の間から、泉水などのある涼しげな中庭を隔てた、離室の小座敷へ入れられたり、廣い二階座敷へ案内された折の微かな記憶が、近頃になつて彼の頭に還つて來た。手摺から見下ろしてゐた、廣いその町の盆踊の圓周、毛氈のかゝつた座席の間から眺められた祭の踊屋臺の有様などが、何の背景もなしに今でも憶出されるのであつた。手踊の出目も二つ三つは記憶に遺つてゐた。競つて派手を盡したその扮裝、地を彈いてゐる女の排列、見物の座席の中へ入込んでゐた踊り妓の鬘下地、友染縮緬の着物、白粉の匂、紅い隈をい

れた目などが、少年の胸に奇異な感覺を唆つた。内所の方へ來てみると、そこに一杯に取散らかされた抱妓の晴の衣裳などが見られた。お神はそれを叔父に見せながら、今年の費用の多いことなどを零してゐた。叔父は赤い顔を火照らせながら、燭臺の灯の下にそれを眺めてゐた。脩吉は、その時お神が取つてくれた金團の味や、蒲鉾の形を、時々憶出すことがあつた。

その頃識つてゐた町の遊び場所も、脩吉が高等小學から中學の學課に追はれる時分には、火の消えたように寂れてゐた。叔父に内密て、叔母から強請つた小使で、脩吉が時に胸を躍らせながら見に行つた近所の大きな劇場すら、外へ移されてしまつた。遊廓の祭は年毎に寂しくなつた。春秋二季に促された屋臺すら、もう廢れてゐた。

脩吉は陰氣らしい茶の間へ上ると、抱妓の影もしない家のなかを見廻したが、べつたり坐つた母親の側に、小さい塗膳を前に扣へて、晝とも晩ともつかず箸を取つてゐるのは、一番大きい方の娘のお須美であつた。

お須美は潤しい目をあげて、脩吉を見たが、二三年前に來た時のような内氣さは、もう除れてゐた。銀杏返しに結つた色澤の好い髮、揉上げの心持長めな意氣味のある色白の顔には、以前のような肉の丸味が亡せて、一層垢脱がしてゐた。小さい時分からのことを能く知つてゐる脩吉の目に、もう二十二か三になつた筈のお須美の姿が、此頃新しく映りだして來た。

脩吉は其頃はまだ舊の住居にゐた叔父のところへ、襟などかゝつた着物に前垂をしめた、母親につれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

られて、遊びに來たとのあるお須美のふつくらした柔かい顏の線や、ふさ〳〵した前髮の下から見える、瑞々した深みのある大きな目などが、大きくなるにつれて、外氣に當つて段々凝まつて行くような徑路を來る度に注意してゐた。

「好い女になつたね。こんな所におくのは惜しい。」

脩吉はそんなような顏が好きてあつたから、お神に向つて然う云つて讃めてゐた。しかし何だかそれが、自分の叔父の私生兒のような氣がしてならないのてあつた。其爲めに、お須美に馴々しい口など利くとが、何となく憚かられた。

「然かと言うて、餘まり東京などへ持出せる代物てもなからうがね。」お神は色憫さうな笑方をした。

「石垣下はもう厭になつたさかえ、私東京へ行つてお茶屋の仲居てもしませうかと思ひますの。」お須美は箸を箸箱へ仕舞ひながら、些と拜むような眞似をして、揚枝て虫歯をせゝりながら、言出した。

「東京へ行たら、あんた世話しておくんなはれ。」

「けど、此妓がゐなくなつたら、家は明日から潰れてしまふだらう。」脩吉はお神が汲んてくれた出花を飮みながら、笑つた。

「なアに、居つても、もう疾うに家は潰れてをるぞね。それに此妓は溫順しいばかりて、腕がないから一向明きまへん。」

「ても好い旦那がつくだらう。」

「それは貴方、然やつて商賣さへしとればね。是迄に好い旦那もついたのやけれど、慾のない妓やよつて、その場きりて、何にもなりやしまへんわ。お組ちやんの方が、あんな顏でも氣象ものだけに、能く稼いてくれるぞね。」

そのお組といふ妹娘が、店の方て片肌ぬいてお化粧してゐたが、いつか其を仕舞ふと大きな花簪などを挿して、脩吉に挨拶をしながら、直に駒下駄を鳴して何處かへ出て行つた。

納戸の暖簾越しに見える中庭を隔てゝ、向ふの離房の蒼苔の生へたような小屋根の修繕もされずに、ぼろ〳〵に朽ちてゐるのが、目に着いた。居崩しになつた此建物も、何時からか抵當に入つてゐるらしい、お神の口吻てあつた。

「貴方阿父さんにお金出して貰うて、値を好く買うてくれゝば可いのにな。」お神は然うも言つた。

がら〳〵と車を挽いて、菓子屋がまはつて來ると、軈て東京風の不味い櫻餅などが、盆に盛られてそこへ出された。脩吉は、横になつて其を食べながら、何時までも無駄口を叩いてゐた。づゝんゝゝゝと太掉の懈い音が、何處からか聞えて來たり、お化粧をすました二三人の女の、向の家の格子先て、キヤ〳〵言つて騷いてゐる、甘だるい聲などが、閴寂した晝間の廓に、色町らしい音色を漂はして來た。

脩吉は、時々町を彷徨きながら、子供の時分の記憶の辿られるような、本通から裏通、小路などを、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

折に觸れて見て歩いた。叔母の家のあつた邊は、町の勢力が高台へ移つて行つたにつれて、もう大略田畑になつてゐたが、思ひがけない所にぽつりとまだ殘つてゐる家もあつた。じめじめした廣い臺所に設はれた高い流し元の前にあつた、蓊鬱した大きな枇杷の樹、その枝葉の擴かつた濕地に、東隣の宅地との境を仕切るために結はれた垣根、そこには、年々木槿の花が咲いて、佗しげな月草や水引草の蔓るのを、脩吉は年々に眺めてゐた。庭には菓樹が多かつた。お神の家は西隣にあつたが、相場などをやるらしい赭ら顏の男の、夏など裸になつて、座敷で酒を飲んでゐる爲體が、脩吉の家の羽目に沿うて、目隱のやうに作つた高板塀の裾の方に蹲踞んでゐる脩吉の目に能く見えた。霧島などの植つた築山も見えた。

脩吉は時々その家へも遊びに行つた。如何かすると芝居の假聲などをつかつて、其男の圍ひものであつたらしい美しいお神から、錦繪を貰つたとなどが、憶出された。錦繪のなかには鳩に豆を撒いて居る南京の描かれたのなどがあつた。

脩吉は、氣のおける叔父などに見つからないやうな、羽目と板塀との間の、安易な狹苦しい空地へ入込んで、石筆で石に字や畫を書いて、長い時間をぼんやりとして過したり、直り體が地面に喰着いてゐるやうな秘密の場所から、高い碧空を漂ひ流れてゐる白雲などに、眺め耽つたりしてゐた。お須美のまだ產れないづつと以前に死んだ、お須美の姉に當るお八重と云ふ少女なぞと一緒に、脩吉はそこに敷かれた莚の上に坐込んで、花を束ねたり、木の實を繋いだりして遊び暮した。脩吉は、軀の大きい其小娘の膝に寢かされる眞似をしたり、抱合つて寢轉んだりした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そこへ叔母が出て來て、可怕い顔をして二人を睨めつけた。

お八重の父親が、脳充血で亡くなつたのは、その家が遊廓へ移つてから、間もなくてあつた。そして其前後に、熱病を患つて、お八重も死んだ。

脩吉は、誰の有になつてゐるとも解らない、それらの屋敷跡を、そつち此方物を堀返すように見て歩いた。そして其處いらに殘つてゐる木共や垣根の間を馳ずりまはつてゐた、七つ八つ時分の自分を思浮べた。子供を迎へに來た脩吉の父と、茶の間で言爭つてゐた叔母の樣子、惡漢のように思はれてゐる父の視線から脱れて、臺所の横にある、薄暗い物置へ逃込んで、小さい心臟を痛めながら、何時までも長持の蔭に佇立んでゐた自分の姿も、今の自分には可憐しくも思へた。

脩吉は、日に幾度渉つたか知れない、その屋敷町の入口の溝川に、今も昔のやうに架つてゐる石橋を渡つて、遁げるやうに其處を出た。體などに嬌態を作つて、年の割におませてあつたお八重の顔や手足の白い肉、淡紅い唇、それらが彼の目に絡はりついてゐるようであつた。

如何かすると、お須美の家の二階の小室に一人で横になつて、しめやかな雨の音でも聞しめてゐる時なども、脩合の目にそれが見えた。

脩吉は時々、この家へ來て、今でも多少づゝは面倒を見てゐるらしい、例の或る商店の隱居と棋を打つたり、偶には燭臺に灯を點させて、近所から二三人の女を呼んで、酒の酌をさせたりした。

お須美は、どんな客が來ても、滅多に座敷着を着るやうなとはないらしかつたが、餘所から座敷のか

ゝるやうな様子も、餘り見受けられなかつた。そして、小瀟洒して不斷の紛裝のまゝ、前垂かけ姿て、座敷へ物を運んだり、容の送迎ひをしたり、藝妓たちに交つて、ちよッと薄い下唇の反つたやうな口に捲莨を吸つたりなどして、そこに坐込んでゐた。

「須美ちやんは、もう座敷へ出ないと極まつてゐるのだね。誰かの持物になつてゐるのかね。」

脩吉は蔭でお組などに訊いて見た。

「然うい ふ譯でもないけれど……」と、お組はたゞ曖昧な返辭をするだけであつた。

「お座敷へ出んと極まつてゐる譯でもないのえ。たゞ、あの人は、一體がお客など取るのが嫌ひなの。

「いづれ然うするのやらうと思ふの。けれど今はまだね……」お組は姉には似もつかぬ强味のある顔に前から然うてすぜ。」

「そんなら速く足を洗つてしまへば可い。」

淋しい笑を洩した。

「あの人は誰の子なんだい。」

脩吉は訊いた。

「さア誰の子ですやらう。」

「組ちやんとも阿父さんが異ふだらう。」

「そんな事知れアしません。」お組は赤い顔をした。

この子が、あの鼻頭の赭い隠居の子でないかと思ふと、脊はすらりとはしてゐるが、手足の骨の硬さうな體格が、何となく似てゐるやうに思へた。此子は顔が醜いので、產れ落ちてから餘所へやつてあつたのであつたが、何時頃かまた母親の側で遊藝などを仕込むとになつた。父親が誰だか、そんな事も知らぬらしい顔であつた。

脩吉は寢轉んでゐた下座敷の簞笥の上にある寫眞函にふと目をつけた。幼い時分こゝへ來る度に、その時全盛であつた町の劇場へ乘込んで來て、人氣を取つて行つた色々の役者の寫眞のあるのを、能く持つて來て見せられたとがあつた。誰某の栗山大膳だことの、誰とかの鍋島の猫だことの、そんな寫眞が一杯にあつた。中には廓の大溫習などの時の、藝妓の紛裝もあつた。抱えの藝妓達は、そこへ寄つて來ては何とか彼とか云つて役者の品定をしてゐた。今はそんな色つぽい寫眞なども悉皆亡なつてゐるらしかつた。そして、函を引くら返してみると、軍曹の寫眞だとか、鳥打を着た商人の寫眞だとか、そんなものが少許りある限であつた。中にはぽつ〳〵斑點の着いた、此處にゐたとのある抱えのらしい藝者の寫眞が五六枚あつた。その中に、初めて一本になつた時の、お須美のもあつた。椅子に腰かけたお須美の姿は、全然婚禮に行く娘のようであつた。

「いやよ、そんなものを見ては……。」

お須美は手簞笥の抽斗へ、何かを搜しに來ながら、ちよッと寫眞を覗いた。

「これは何時頃だらう。」

「裏に書いてあるぢやありませんか。」
脩吉は裏を返して見た。
「須美ちやんの姉さんの寫眞はないかね。」脩吉は、それを搜した。
「私の姉さんとは誰。」お須美は濃い地藏眉毛のところを、些と顰めたが、氣がついたらしく、
「そんなものはそこには無いわね。」
お須美は然う言ひながら、寫眞を二三枚何心なく手に取上げて眺めてゐた。
「お八重姉さんの寫眞なら、たしか戻鵜籠の禿か何かのが、一枚あつたけれど……どこへ行つたか。」
お須美はつまらなさうに呟いた。
「これは誰かね。」
脩吉は女の見てゐた、商人風の一枚の寫眞を取上げた。
「大阪の羅紗問屋の旦那よ。家へよく來た人。」
「どうしたね、その人は。」
「失敗したとか云ふ話ですのえ。」
「あれ程あつた役者の寫眞が、如何なつたらう。」
「役者なんか、私大嫌ひ。新派は好き。」
言棄てゝお須美は、茶の間の方へ出て行つた。

脩吉は、また下へ横になつて、淋しげにゆらぐ蠟燭の灯などを眺めながら、先刻口をかけた女の來るのを、待つともなしに待つてゐた。

茶の間には、來つけの客でもあるか、色の赭黒い、請負師か何かてゝもあるらしい、安洋服を着た四十年輩の男が、お神と話込んでゐた。

堅氣の商人などの外は、滅多にあげないことにしてゐた此處の客筋の、段々下つて來たことが、脩吉にも目立つて見えた。

五月に入ると、靜かな屋敷町の築地のうちに、能く青蛙が鳴立てる、深々と繁つた果樹や、黝い廂などに、雨がしと／＼と降灑ぐのであつた。雨があがると、どこか底黝みのしたような日が、じり／＼と泌みわたつて、神經の萎え疲れた脩吉などには、咽せるような若葉の匂や、そこらに漲つてゐる強い色彩に、頭がぐら／＼するようであつた。

二里ばかり隔つた濱の漁場から、鰯などを賣りに來る女や、山から出る蕨賣りの懈げな聲を聞きながら、脩吉は冷々した廣い部屋のなかに、毎日病人のように寢たり起きたりして暮してゐた。

「何か好いことあつたのけ。」

偶に車などに乗つて出かける脩吉の歸りを待受けて、お絹は、時々實家の父親などに訊かれるので、

氣にして尋ねて見た。

脩吉は少しづゝ、町の有志などの仲間入をして、何かに有つかうと、相當に玄關なども張つて、焦心つてゐたのであつたが、土地が狹いだけに、新學士などの働く場所が、容易くは見つかりさうもなかつた。

お絹は、町の醫學校の入學試驗を受けに出て來てゐる、脩吉の從弟と、外に東京の知人から紹介された高等學校の書生を一人おいて、賄の世話などしてゐるので、うかゝゝと紛れて暮す日が多かつたが、その從弟から預つた金に手のつくやうな事も希しくなかつた。

「私がどのくらゐ氣兼なか。」

お絹は時々脩吉に零した。

生絲會社などへ勤めて、可也有福に暮してゐた叔父が死んでから、在方の豪富へ再縁について行つた叔父の家は、町から五六里隔つてゐたが、幼い時分から可愛がつて面倒を見てくれた女だけに、今でも脩吉のとは氣にかけてゐた。脩吉は、今度歸つてから、まだ一度も顏出をしない其叔母に、つい金の無心に出かけて行つた。

「そんなら此方で何かせうてがけ。」

叔母は滅切視力の衰へて來た目を細めながら、頰骨など出張つて、酷く面窶れのした脩吉の顏を、最愛さうに眺めながら訊いた。

そこは海岸に近い村で、薄暗い家のなかゝら棧の音などが、洩れてゐた。町に育つた叔母は、家のなかに針仕事などをするだけで、そこの嫁達のやうに、野原へ出るやうなことはなかつたが、先妻の子供に、もう多勢の孫もあるやうな大家内なので、見かけほど氣樂でもなささうであつた。

「私も脩ちやの出世しるのを見てから死にたいぞね。」脩吉の學士などになつたことについて、衿を持つてゐる叔母は、些と脩吉の顔を見返したゞけで 厭味一つ言はずに、言つたゞけの金を古々した佛壇の下から出して來て、窃と渡してくれながら、言つた。

この叔母に甘やかして育てられた害毒が、今でも着絡はつてゐるのだと思ひながら、脩吉は父や繼母に對する癖はありながら、我儘に育つた自分の幼姿を思浮へてゐた。身に泌込んでゐる叔母の慈愛が、厭はしいようであつた。

お須美やお組やお神と一緒に、遊廓から程近い川の上流に、昔からある川魚料理で、晝飯を喰つてから、脩吉は赤い顔をしながら、ぶら〳〵と川岸を歩いてゐた。砂糖甘い田舍料理が、胸につかへてゐるようであつた。

女連は、揚枝など啣へて、今料理屋へ車で乘込んで行つた客や藝者の風評などをしながら、脩吉の後になり先になりして歩いてゐた。お神は、黒繻子の帶を、引かけに結んで、股廣に蓮葉な歩き方をしてゐたが、坂などを登る腰つきは、滅切婆さんじみてゐた。日南で見ると、汗ばんだような額の生際の、薄すらと禿げかゝつたのも、目に立つたが、まだ何處かにそれ者らしい匂が殘つてゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

お須美は不斷着のうへに、中古のお召の羽織を引かけて、つや／＼した髮に、白い簪搔などを挿してゐたが、縹緻などに負目のあるお組は、曇つた顏をして、默つて道端を歩いてゐた。

四人は町の方を避けて、人氣のない丘へ登つた、直に遊廓の裏にある、此界隈の産土神の社の方へ出て來た。山裾に建てられた其社の廣い境内には、今日の祭禮を當込んで出て來た物賣の大きな傘や幕などが、そつち此方に見られた。花火線香の破裂する響や、風船玉の笛の音などが、疎らな人影のなかゝら、寂しげに聞えてゐた。

「今日が毘沙門の宵祭や」。お神は脩吉に言かけた。

「お祭も、年々寂れて行くばかりや。昔みたようにお金かけて騷ぐ町内は、唯の一つもないぞね。秋祭なら、まだ然うでもないけれど。」

脩吉は自分の育つた町の祭禮に篝火のばち／＼燃えてゐる森の中の社などを彷徨いて、薄香糖や竹ゆべしなどを舐つてゐたことなどが思出された。秋祭に出るときに決つてゐた、祇園囃などの後について、知らぬ町から町を歩きまはつたり、靑物市場の四辻に架つた、義太夫や鶴賀新内の、三味線の音に牽着けられて、夜更までそこに聽耽つてゐたこともあつた。秋の風がはた／＼と蠟燭の灯を煽つて、一時出盛つた人が、段々散つて行くと、彼は軒毎の神燈の消えた町を、草履の音をさせながら歸つて行つた。家ではまだ大戶の錠がさゝずにあつた。脩吉は薄暗い臺所へ出て、內井戶の側にある甕の水などをがぶ／＼飮んで、私と臥床へ入つて行くのであつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暫くすると、脩吉は女達と一緒に、廣い二階の部屋で、赤飯などを食べてゐた。お神の拵へた手料理も、二三品そこへ出された。今初めて披露目をして歩いたと云ふ、十三四のお酌が一人、桔梗色の紋附などを着込んで、座敷へ現はれて來た。

「一本ばかり線香をつけてやつてね。」お須美が然う言ひながら、二階へ呼んで來たのであつた。面長の、綺麗な淋しい顔を赧らめて、膝のうへに振袖を重ねてお酌は坐つてゐた。

お神は側へ手を支いて、繻絆の袖などを引張つて見てゐた。

「綺麗やね。此妓はきつと賣れるやろ。」

東京から流れ込んで來たと云ふ女が一人、ぎろりとした目で、お酌の姿を、まじ／＼瞶めてゐた。

「東京のお酌さんも、こんなけ。」

お神は懈い調子で、訊ねた。

お酌が歸つて行くと、女達は小皿に盛られた赤飯を、むしや／＼食べはじめた。

「姐さんどうも御馳走さま。」

仲間からはづれてゐた、東京女も、箸を取りはじめた。土地の風に調子を合はさうと勤めてゐるらしい、その女は、時々苦味走つた厚手の唇を、きつと結んで、じれつたさうに他哩のない朋輩達の話を聴いてゐた。

「東京はどこにゐたの。」脩吉は、その女の方へ水を向けた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女は太い、しや嗄れたような聲で、珍らしげに返辭をした。

「……おえんさんの鳴してゐた時分に、私はまだお酌で、同じ家にゐたんですよ。隨分古いことですわね。」

女はさう言ひながら、煙管をはたいた。

「どうして斯様土地へなんか來たの。」

「少し此方に知合があつたものですから。」

女はきびきびした調子で、日本橋の方に商をしてゐた父親の失敗から、稚い時分に藝妓屋へやられたことなどを話した。

「こちらはお座敷だつて、東京のようなとはありませんけれどね、矢張不可ないんですよ。土地には土地の風がありますからね。」

「さう東京風ばかり吹かさんと、何か東京の唄でも謳ひなさいな。」お須美は脩吉に言かけた。

「ね、奴さん何かおひきなさい。」

東京女は、脩吉と顏を見合せて、默つてゐた。

脩吉は、少し醉がまはつて來ると、土地の女達を捌えて、拳などうつて、きやあきやあ言はせてゐたが、東京の女は、じろじろ傍から見てゐるだけであつた。

夜になると、脩吉は奥まつた小室で、お須美に奴と三人で花を引きはじめた。お須美は下からラムプを

點して來て、天井の眞中へ吊した。

脩吉は、目がちろ〳〵して、札が能く見えなかつたが、女連も氣乘のしない顏をして、附合つてゐた。

二三ヶ月すると、お須美は、客でもあがつたらしく、前二階の方へ行つたり來たりしてゐたが、そのあひだ殘された男女は、花札の散らかつた場に向合つて、默つてゐた。

「東京などゝ比べて、此方の人氣はどうだね。」

「まあ普通ですね。それは偶には好いお客もありますけれど、さアと云ふ場合に、片肌ぬいてくれるような方は一人もありませんね。然うかてつて、薄情て云ふんでもないんですけど……謂はゞ生温てすね。」

女は花札を揃へたり、散したりしてゐた。

脩吉は膝枕をしながら、骨組などの頑固に出來た、關東風のその顏に目を据えながら、生返辭をしてゐたが、表二階の方へ食物や、銚子を運んでゐるらしいお須美の足音が、時々耳についた。分明とは思ひ出せない、うろ覺えのお八重の目つきや口つき、お須美に酷肖の、東京の或女義太夫の若い高座姿などが、目先に見えたりした。

「藝者衆の方だつてもね……。」

「ふ……。どうせ淫賣だもの。」

廂にしぶ〳〵と音がして、雨が降つて來たらしい。

少時してから、お須美は座へ戻つて來たが、もう誰も花札を手にしようとはしなかつた。

女が歸る時分には、雨の音が一層繁くなつて來た。樋を流れる音さへ加はつて來た。

「さよなら。またどうぞ。」

女は裏梯子の方から、ミシ〳〵と降りて行つた。

脩吉はしと〳〵と降る雨の音に、耳を澄しながら、側にゐるお須美の素直な手つきや、髮の黑々した横顏などに目を閉ぢてゐた。

お須美は人馴れのした鳩か何ぞのやうに坐つて、火鉢の隅へ吸殼を掻寄せてゐた。

「こゝぢや近頃如何云ふ風にして女を買ふんだい。」

「色々あるわ、藝妓によつて……少し好い子になれば、初めに三十圓なり五十圓なり、お金を積むの。」

「ぢや全然上方風だ。」

「けど、然うてなうても可いわ。貴方泊つて行くの。誰か一人呼びませうか。此雨ぢや歸れんわね。」

「それはまア其として、須美ちやんは自分の父親を知つてるの。」

「知つてるの。立派な身分の人ですよ。家も知つてゐますよ。義理の兄さんの顏も。私は、他が兄さんなんやと然う思うても、向は何も知らんのやぞね。つまらんと思ふわ。」

「何と云ふ人だ。」

「それは言はれんわ。先の顏にかゝるさかえ。私がたゞお肚てさう思うてるだけ。」

「ふ――。」

下へ小用を足しに行つた脩吉は、旋て蒲團を延べてゐるお須美を別の室に見出した。薄暗い籠行燈が、そこに點されてあつた。脩吉はその部屋を見たともなかつた。窓などの高く取られた、ちんまりした其室へ入るゝ、脩吉は急に安易と焦燥しさとを感じた。

「あゝ。」

酒くさい息を吹きながら、脩吉はそこへ臥そべつた。

お須美は側に、枕の被を取替へてゐた。

淺黑い手と白い手とが、灯の蔭に動いた。

お須美は、長いあひだ世話になつてゐる、或在方の若い男のとを考へてゐた。

ばた〱と駈出す女の足音が遠かつて行くと、脩吉はあゝと欠をして、夜着を引破いた。

そこへ衿のかゝつた着物を着て、娼妓らしい女が、障子を開けて入つて來た。

「あら厭な、あんたもう寢んでおいてるがけ。」

女は獨てお世辭笑をしながら、側へ寄つて來た。はづむような卑しい女の息遣ひが、脩吉に感じられた。

醜いものに對する、不思議な殘忍性と饜とを心のうちに藏しながら、脩吉は枕頭の莨盆を引寄せて、莨などを喫ひはじめた。

直に脩吉は寢床から跳起きた。疲れた頭が、痛いほど興奮してゐた。顏に氣味の惡い上熱がして、ね

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ばく〳〵した空唾液が、舌のうへに溜つた。

間もなく腕車が來ると、脩吉はお須美に送られて、そこを出た。ぼそ〳〵幌に降灑ぐ雨の音が少しづつ萎されて來る耳に、快く聞かれた。

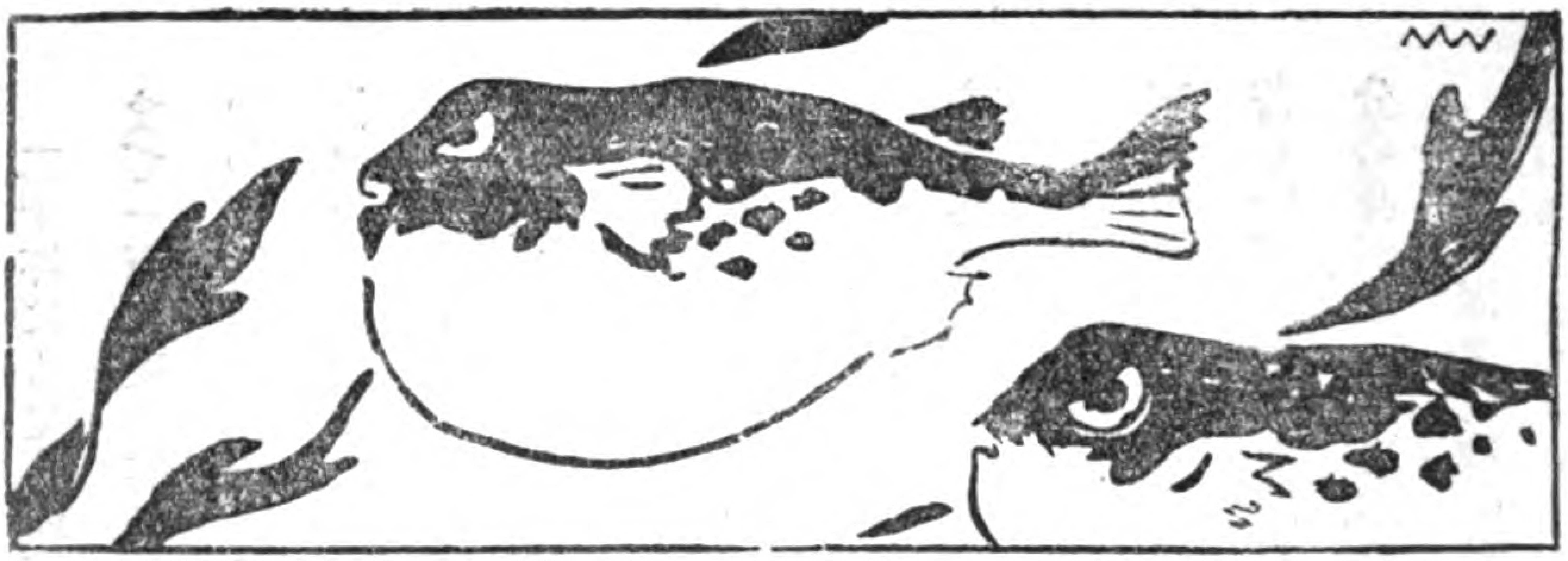
家へ歸ると、お絹はまだ目さめてゐた。脩吉の顏を見ると火鉢の側に寢轉んでゐた、從弟が、ニヤ〳〵笑ひながら、起あがつたが、直に悄々と部屋へ退つて行つた。

「寢るのなら、今直き床延べてあげるぞね。」お絹は浮ついたような聲で從弟に言ひかけた。顏が上氣したように紅味を有つてゐた。

脩吉は、何かを嗅出さうとするように、じろ〳〵と其處らへ、目を配つたが、盆の上に、蜜柑の皮がある限てあつた。

（をはり）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



尼僧

長田幹彦

一

智月は、ほの暗い庫裡の行燈の火影で貧しい夕饗を濟ますと、やがてまたいつものやうに本堂へ通ふ長廊下へ出て、暮れてゆく空を眺めながらしよんぼり佇んだ。

夕陽はいつのまにかもう愛宕の山彙の彼方に沈んで、黄味を帶びた夕映えが漸次と暗紫色に變つてゆく西空をうつすり夢のやうに染めてゐる。淨念庵は東山寄りの小高い阪の上に建てられてあるので、樹立ちの隙間からは京の街の一部がひとめに見渡された。四條から中京へかけて隙間もなくごちやごちや建込んだ家並は寺々の高い屋根と塔影を黑く浮き出させたまゝ、一樣の薄闇に閉ざされて、潤むだやうな濕んだ灯がもうそこ此處にぽつりぽつりと瞬きはじめた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二十坪にも足らぬ庭の面にもやがて夜の闇が漸次と匍ひ寄つて來た。築山の陰から水の枯れた池の汀まで一面に咲き零れた蜀紅の花はいつか黯ずんた毒々しい色に變つて、柴折戸の傍の木蓮が吹く風もないのにほの白い花辨をぽとりぽとりと落とす音が地の底に浸み入るやうに寂しく響いて來る。そして露氣を含んだ冷たい大氣の底からは智恩院の鐘が餘韻をひきながら斷れぎれに聞えて來て、何處か遠い空の彼方を鴉の群が騷々しく啼いて通つた。

揚子をつかひながらその寂しい黄昏をうつとり瞻もつてゐるうちに、智月の心はいつかしら夜の闇とゝもに迫つて來る行く春の淡い愁ひに染められてしまつた。取り留めのない遣る瀬なさが頻りに胸の底から湧きあがつて來る。抑へやうとしても抑へきれないその執拗な力は不知不識の間に彼女の心を遠いところへ誘なつて行つて、彼女の眼の前には此の頃になつて漸次と蘇つて來る或不思議な心持ちがまたありありと浮んて來た。

それは心持ちと云ふよりも一種の病的な神經作用に近かつた。丁度思ひがけない空から驟雨が落ちて來るやうに、どんな明るい氣持ちてゐる時ても、彼女はふとした機（きつかけ）て何とも名狀することの出來ない重苦しい强迫觀念を感じるのてある。それとゝもに深い深い悲しみが心の底の底まで浸み徹つて來て、自分の身が唯一途に心細くなつて來る。

彼女は漸次と胸を壓し狹められるやうな呼吸ぐるしさを感じて來た。それとともに時々輕い迷眩を覺えて深い坑のなかへひとりてにずるずると吸ひ込まれてゆくやうな悲しさが犇々と迫つて來た。彼女は

到頭耐らなくなつて法衣の袖を顏に押し當てしくしく泣き出した。そしてその刹那の暗い氣持ちから跪き出やうとするやうに譯も分らぬ譫語のやうな言葉を續けさまに口走つた。

「智月はん。あんたはん其處で何してゐやすの？」若い、晴れやかな聲がふと何處からか闇のなかゝら呼んだ。そして庫裡の方から重々しい足音が漸次と近づいて來て、白い襟と、頭が闇のなかにぼんやり浮きあがつてみえた。それは同宿の妙眞だつた。今迄臺所で夕饗の跡かたづけでもしてゐたらしく、手拭て手を拭きふき近寄つて來た。

「何にしとゐやすの？」返事がしないので妙眞は低い聲でまた呼びかけながら、肩もすれずれに寄り添つて、そつと智月の顏を覗きこんだ。そして彼女が聲を忍んで泣いてゐるのをみると、俄かに頓狂な聲を出して、

「あんたはん、泣いとゐやすか。まあ、まあ。こりやえらいこつちや。何もそないにお泣きやすことは無いやおへんか。」と、彼女の肩に手をかけて荒々しく搖り動かした。

智月はさすがに妙眞に氣を兼ねて漸う泣きやんだ。そしてそつと鼻を啜りながら、法衣の袖て恥かしさうに涙を拭いた。

「ほんまに、何ないにおしやした。何や惡い便りでも來ましたか。そないに隱さんと、聞かしてお吳れやすな。」

「何も隱すやうなことてあらしまへんけど……。」と、智月は涙ぐむだ聲て呟やいて、「何やしらん、唯悲

しうて悲しうてな‥‥。」

「怪體(けつたい)な人。」と、妙眞は態とらしく高く笑つて、「あんたはんのはほんまに病氣やわ。何たら云ふた、ほら、‥‥‥」暫らくの間思ひ出せないやうに口をもぐもぐ云はせてゐたが、やがて又頓狂な聲を振り絞つて、「そや、そや。比斯的利亞(ヒステリイ)や。」

智月も思はず微笑まない譯にはいかなかつた。何の苦勞もなく、思ひ惑ふこともなく、その日その日の生活に安住してゐる妙眞の心が羨ましくなつた。

「あんたはん、ほんまに何時みてもえゝ元氣やな。悲しいことなんかてんとおへんやろうな。」

「そら、私かて間(たま)にや悲しいことも、辛氣臭いこともありますけど、そんなことどないに思うたかてあかしまへん。悲しいからちうて毎日泣いてばかりゐたら、なんぼ達者な體かて病氣になりますがな。それよりや氣安うしてな、世の中をよう諦めてな、おいしいものなと仰山喰べて暮らした方が自分に得(とく)どすがな。」

妙眞は自信のある調子で笑ひながら云つた。そしてふと思ひついたやうに懷を探つてゐたが、やがて其處から何やら白い紙包みのやうなものを取り出して、

「あんたはん、粽(ちまき)好きどすか？　どうどす、ひとつ呼ばれまへんか。今婢衆(をなごしゆ)が町から買うて來ましたんえ。」と、自分からがさがさ笹葉をむいて喰べはじめた。

夜はもう殘る隈もなく四邊に浸潤して來た。黑い樹立の陰には灯の數が漸次と增して、五條阪から七

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

條の方へかけて南京珠を貫(ぬ)き聯(つら)ねたやうな細かいその列が幾條となく隱見した。西山のうへには薄雲の絶え間から蒼ざめた星がちらちら瞬いて、氣忙はしい汽車の汽笛が遠くの方から絶えず聞えて來た。

妙眞はやがてそれだけの粽を一人で平げてしまうと、詰まらなさうに包紙を圓くまろめて、庭先へぽんと投げながら、

「あのなあ、智月はん。今夜は竹千代はんの立唄やさうてな、婢衆(をなごしゅ)がきつうやかましう云うてやはりましたさかい、あんたはんと二人でこれから都踊(をどり)みに行きまへうか。そないに氣の鬱ぐ時には、賑やかなところへなと行てな、面白う遊んで來た方がすつぱりしまつしやろえ。」

「さうな。いても宜ろしいけど、晴れがましうてな。」と、智月は氣の進まぬ聲で云つたが、その胸の底にはまださつきの限りない悲しみが少しづゝ甦へつて來た。暗い夜が氣味の惡い眼眸をして彼女の心の底をじつと差し覗いてゐるやうに思はれて、譯もない不安が頻りに襲いかゝつて來た。

「そんなこと云はんと、お出でやすな。そらほんまに面白うおすつせ。そして歸り途に京極へいて、活動寫眞をみて來まへう。」

さう云いながら彼女は智月の返事も待たずに庫裡の方へばたばたと驅けて行つた。智月も詮方なしにその跡に續いて庫裡へ入つたが、耐力もなくずるずると何者かの方へ引摺られてゆく氣持ちが胸のなかで混亂して、柱の陰へ立つてゐる間にも輕い眩暈が幾度か頭に上ぼつて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

平生の居室になつてゐる十疊にはいつものやうに古風な黒骨の四行燈がぼんやり點つてゐた。そして年老つた婢衆がたつたひとり大きな目笊を前へ置いて、薄い光のなかで眼をすがめながら豆の莢をむいてゐた。彼女は言葉をかける勇氣がなく、苦しい胸をじつと抑へた儘その樣をみてゐると、そこへ妙眞が噪いだ顏容をしながら二人分の外出の法衣を抱へて奥の間から出て來た。

「さあ、着物お換へやす。早うせんと遲うなりまつせ。」と、彼女はその儘手早く着換へをしはじめた。素絹をぬぐと下には眞岡木綿の白袷を襲着にして、白の平帶をぐるぐる巻にしてゐた。

「えゝ格好どつしやろ。」と、彼女は罪のない聲で笑ひながら肩を張つて歩くやうな滑稽けた容子をしたが、その樣はどうみても脊の低い醜男だつた。智月はそれをみると急に何とも云へない淺猿ましい氣がして、

「私またの時にしまへう。氣づゝなうてとても戸外へ出られやしまへん。」

「そなこと可かんわ。折角べゝまで換へたんやないか。」と、妙眞は法衣を着ながら拗ねるやうに云つて、どうしても連れ出さなくては承知しないと云ふやうな氣振りをみせた。そして剝ぐやうにして智月に着換へをさせ、威儀細まで自分で掛けてやつて、それが濟むと今度は臺所から鼠緒の下駄を二足持つて來て、椽先の沓脱の上へ並べながら、

「さあ、行きまへう。」と、急きたてた。

智月はしかたなしに重い氣を引立て、暗い庭へ降りた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

葛蔦のからみついた寺門を出ると、だらだらさがりの寂しい樹下路には月の光が斑のやうにこぼれてゐた。春の宵ながら冷たい夜氣はしつとりと膚に迫つて遠くて吠えてゐる犬の聲が更け靜まつた冬の夜を思はせた。

二

二人は肩をすぼめて歩いた。襟に卷いた白羽二重の帽子が冷々と頸に觸れて、口をきくのも何となく慵いやうに思はれた。高臺寺の手前から西へ折れる小徑を曲ると、やがて樹立が漸次と開けて來て、兩側には細目格子から鈍い燈の光の洩れてくる家が疎らに續いた。そして思ひがけない木蔭からは高い八阪の塔がすぐ鼻の先に屹然と聳えたつてゐるのが見えて來た。東山の頂から射してくる明るい月光は斜めにその半面を照らして、雲形や、迫持が浮彫りのやうな朦朧とした陰影を浮きださせたまゝ深い沈默に閉ざゝれてゐた。今迄默つてゐた妙眞は急に物に憑かれたやうに口まめに饒舌りだした、下河原から祇園へ來るまで煩いほど話題をかへた。

山から久し振りで下りて來た彼等にとつては、祇園町の春の夜の賑はひがまるで祭の夜でゝもあるやうに華かに映つた。丁度その頃は新らしい「時代」が盛んにこの歴史をもつた町筋を破壞してゐる最中だつたので、白堊建ての生々しい商店や、白熱瓦斯の輝く飾窓などが無意味にとり擴げられた燒跡のやうな町々を明るくしてゐた。そして半ば出來あがつた工事小舍や、鐵管や、電車用の平石などが亂雜に取散らされた間には、さまざまな露店が出て、喧ましく往來の客を呼んでゐた。

つなぎ團子の紅い提灯のともつた角から花見小路へ入ると、其處には又都踊をみにゆく人の群が殆んど肩と肩とを摺りあはせんばかりに込み合つてゐた。ところどころに燃えさかつてゐる篝り火の煙りは彩旗や、飾り電燈をうつすりと染めて騷々しい人聲のなかにアイスクリウム賣りの異樣な呼び聲が響いてゐた。そして酒に醉ひ痴れた若い男の群も行く、鼻にかゝる滑らかな言葉で笑ひ興じながら美しい藝妓の群もゆく、そのあとからは又だらりの帶を華やかにゆらめかしながら人形のやうに衒燿に着飾つた舞妓たちが輕ろやかに木履を踏みならしながら通つてゆく。すべての複雜な色彩と音響のなかに春の夜の甘い情趣が限りなく蕩めいてゐた。

沈みきつてゐた智月もさすがに漸次と浮きたつて來ない譯にはいかなかつた。そして明るい電燈の光に照らし出された歌舞練場の切符賣場の前へ立つた時にはやさしい微笑さへ彼女の唇へ上ぼつた。彼等は群衆に肩を押されながら切符を買つて場内へ入つた。

手垢の光る丸太で仕切つた馬小舍のやうな幾つもの客溜りにはもう觀客がぎつしり詰まつてゐた。明るい電燈は紅殼色に塗つた壁に不調和な反映を描いて、人蒸息でぼうつと霞んだ空氣のなかには酒の匂ひや脂粉の匂ひや、浮々した笑聲が一緒になつて溶けてゐた。

「まあ、仰山な人やなあ。」と、妙眞はもの奇らしさうに四邊を眴はしながら小聲で呟いて、「こら隅へいとらんと壓殺ろされまつせ。」と、突如智月の手を執つてちよこちよこ奥の方へ引張つて行つた。そしてそこに飾つてある踊り妓の衣裳や、繪端書を一々叮嚀に眺めながら頻りに感嘆の聲を放つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

間もなく場が開いた。觀客は潮のやうに雪崩をうつて狭い入口の方へ押寄せてゆく。舞妓や藝妓は態と黄ろい聲を出して戯れ騒ぐ。巡査や係員は眉を寄せながらその雑踏を制してゐる。彼等はいつか人込みのなかへまぎれて、長い廊下を渡つて、觀客席へ入つた。そして花道の下の後側へ行つて、柔い緋毛氈の上へ坐つた。

一面に青い飾紐を垂らした天井や、つなぎ團子の紋を白ぬきにした紅提灯や、繪模樣を繡とつた緞子の幕。觀客の顔。すべてさうした生々しい色調は鈍い尼寺の壁の色に馴らされた彼等の眼には此上もなく華麗に映つた。

「ほんまに何時來ても美しいなあ。」と、妙眞はしみじみ云つて、そわそわしながら方々を眴はした。殊に觀光の外國人達が込み合つてゐる二階棧敷はひどく彼女の好奇心を動かしたらしく、魂を奪はれたやうな間のぬけた顔容をしながらじつといつまでもそつちを瞻めてゐたが、やがて突如例のもちまへの頓狂な聲で、

「智月はん。山の慶順はんが來とゐやすせ。ほう、あすこに。」と、彼女は端の人の思惑も打忘れて、不遠慮に指てさし示しながら、「あすこに女の異人が仰山ゐまつしやろ。あの下に此方向いとゐやすがな。」

智月は周圍に氣を兼ねながらそつとその指す方をみた。其處には二十四五になる眉目清秀な若僧がゐた。黒い法衣に金襴の威儀細をかけて、金縁の眼鏡の下から折々神經質らしい眼を輝やかしてゐる。そして白い額にも鋭い鼻にも感情の急激らしい色がほのみえてゐた。それは慶順と云つて、彼等が六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

年の秋加行を受けた時、長い間世話になつた智恩院の僧だつた。

「ひとりやろか、それともお連れがあるのやろうか。」と、妙眞は自分達が來てゐることを知らせ度さゝうな顔をしながら延び上つて見てゐたが、そのうちに若僧はついと横を向いて、すぐ隣りに坐つた今一人の若い男と笑ひながら話をしはじめた。その連れと云ふのは矢張彼と同年輩の男で、長い髪毛を房々と額に垂らして、同じやうに眼鏡をかけてゐた。可成り醉つてゐるらしく、明晰な東京辯で談笑してゐるその言葉が折々彼等の坐つてゐる處まで聞えて來た。そして彼等の周圍を取り圍んでゐる三人の可愛いゝ舞妓と二人の藝妓も同じく連れとみえて、やがて彼等は浮々した聲で一緒になつて笑ひ興じはじめた。

　智月はそつとその樣を偸みゝてゐるうちに何とも云へぬ不快な氣持が湧き上つて來た。加行が終つてから後智恩院の本堂で大法會が行はれた日の朝、あの金壁燦爛とした須彌壇の前へ立つて不斷の香華の薫りに浸りながら專念に念佛を唱へてゐた彼の姿は實に美しかつた。白綸子の切袴に紫衣を着て片手に中啓を持ちながら靜々と佛前を立去つてゆく彼の氣高い顔を彼女は今も猶ほ忘れ得なかつた。そしてその時は鏡張りのうへに肅然とした足音を殘して漸次と遠のいてゆく彼の白足袋にさへ何となく悲しい名殘惜しさを覺えたが、今、桟敷の欄へ片肱凭せかけて女と戲れてゐる彼の姿をみると、もう何處にもその時の美しさを見出すことが出來なかつた。まるで別人のやうに何處となく賤しげなところさへ見えて今迄は豫期しなかつた近づき易さが彼を一個の俗人のやうにみせてゐる。彼女は平生から考へてゐる男

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といふものを更らに低い階段に落してもう一度考へなほしてみなければならなかつた。

鈍い柏子木の音が何處かでかすかに鳴つた。と、左手の花道のうへの幕のなかゝら突然、

「はあ、おう、いやあ。」と、いふ纎麗な金屬性な懸聲が聞えて、冴えた皷の音が二聲ばかり響き渡る。それとともに三方の幕はきりきりと卷き上げられて、總ての觀客の眼の前には眼を奪ふやうな艶麗な踊り舞臺が展開された

「大君の、あまねく照らす御惠の……」悠長な地唄は三味線の噪音にもつれながら右手から起つて、觀客の頭の上を越えて囃の大鼓や皷と相應ずる。そして撥の手さばき皷の懸緒とは一樣の律をなして、少しの間隙もない情趣を織り出す。いろ〳〵な美しさが自然と此の間から生れて、明るい光りに照らされながら輕く搖蕩する。やがて、

「都をどりはえゝ。」と涼しい聲が呼ぶと、その聲に誘はれて揚幕のなかゝら

「よういやさあ。」と黄い聲で叫びながら、兩方の花道の上を一隊の舞妓の列が花環のやうに美しくゆれながらしづしづと現はれて來る。草色地に色絲で櫻狩の模樣を繡つた長い袂と、緋地に金絲で龜甲を繡つただらりとが縺れたり解けたりする間に舞の手振りは漸次と鮮かになつて來る。

智月は今迄考へてゐたことも何も打忘れてたゞ眼の前に廣がつた繪のやうな美しさに魅せられてしまつた。すべてが夢幻的な濃い色彩を帶びてきて、自分達の住んでゐる塚穴のやうな冷たい生活からは全然かけ距つた世界の出來事のやうに思はれる。そこには何の抑壓のない放恣と、自由ばかりとがある。

そして自分達の見も知らぬ數限りのない悅樂が常に人々を樂しませてゐる。平常は至極簡單に、平に考へてゐた樣々のことがその瞬間に極めて重大な意味をもつてゐるやうに思はれて來て、自分達の世界と今眼の前に展開してゐる世界との間に橫はたつてゐる遠い遠い距離が不知不識の間に彼女の心に際涯ない悲しみと寂しさとを與へた。そして殊に何等の暗い裏面をも持つてゐないやうにみえる舞妓達の無心な瞳や、微笑の浮ぶ口元が彼女の心を傷ましめて、甘い三味線の音色をじつと聽めてゐる彼女の眼眸はいつともなく淚に濕んで來た。

踊りの場面はその時季折々の風情を殘して手際よく漸次と變つて行つた。祇園囃しの透明な鐘の音がすべての旋律のなかに際だつて浮きあがつて來ると、やがて踊り妓達は輕ろやかな足拍子を刻みながら大太鼓の轟響に送られて再び揚幕のなかへ吸ひ込まれてしまつた。それと同時に無數の燈火と、薄紅い光の霧に彩られた圓山の夜櫻の場面も幕に掩はれて、囃しの舞妓の姿も、地唄の藝妓の姿も、三味線も小皷も眼盲ゐてゆくやうにいつともなくすうつと幕の裏にかき消されてしまつた。そして踊りを急、觀客達の喧騷が俄かに場內に充ち溢れて來た。

「ほんまに美しうおしたえなあ。そろそろ歸りまへうか。」妙眞は男のやうな逞ましい二の腕をあらはに出して、不遠慮に欠伸をしながら云つた。そして自分からさきへ立ち上つて慵さうに四邊を眴はしてゐたが、人氣の薄くなつた二階棧敷にはもう慶順の姿はみえなかつた。

「おう、もう慶順はんは見えんえ。美しい女子(をなご)はんと一緒に何處へ往なはつたやろな。怪體な坊さんや

な。」

智月はさう云ふ妙眞の顏を涙ぐむだ眼でじつと見あげた。自分ひとり灰色の溷濘のなかへ取殘されたやうな果敢ない氣がして、容易に立つ氣になれなかつた。

幾度か激しい眩暈に襲はれながら彼女は再び群衆に揉まれて場外へ出た。宵にも增した雜踏が篝火の烟のなかを流れてゐた。明るい白熱瓦斯の輝く四辻まで來かゝると、少しづゝ風だつて來た空からは冷たい夜氣が毒々と降りて來て、二人は思はず體を摺り寄せた。その時、すぐ後から賑やかな笑ひ聲と、木履の音が騒々しく近寄つて來て、

「智月はんやないか。」と云ふ優しい男の聲が聞えて來た。ふと振り顧へるとそれは慶順だつた。

「何處へ行たんえ? 四條か?」

「都踊みに參じました。あんたはんのおゐやすのをよう知つてましたけれど、お連れはんがおゐてやすさかい、御挨拶しては却つて可かんやろと思うてな、控へてゐましたんえ。」と、妙眞はおどおどしてゐる智月の言葉を引き取つて、差出がましく蓮葉に饒舌りかけた。

「さうか。そりや惡いところを見られたんやな。」

と慶順は美しく笑ひながら、云つて、「今日は東京から客が訪ねて來たもんやて、久振りて散財にいた。」

五六歩後れて來た連れの男も、藝妓も舞妓も一齊に彼等の周圍に立ちどまつた。そしてもの珍らしさうに尼僧達の顏を眺めた。智月は顏から火が出るほど恥かしくなつて、一刻も早く彼等の注視から遁れ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度いと思ひながら徐々歩を運びだしたが、やがて誰れからともなくそれに誘はれてみんな一團になつてぞろぞろ歩き出した。ものみ高い往來の人はこの不思議な集團を笑ひながらみて通つた。

妙眞は臆面もなく噪いだ聲を出して慶順と語りあひながら歩いた。その跡から例の連れの男は四邊の情調にそぐはない言葉で舞妓にからかひながら歩いた。

「どないにしまへう。あてえもう厭やわ。こつちやの旦那はん好かんわ。」と、一人が叫ぶかと思ふと、他の二人は少し遲れて、

「なあへ、雛蝶はん。西洋の異人はんて怪體なものどすなあ。あてえな、よんべお振舞ひて三蝶はん姐はんや、お壽美はんと一緒に山へ行たんえ。ほしたらなあそらほんまに美しい美しい異人はんの女子はんが居やはつてな、茶湯を招ばれてゐやはつた。お足をちよこんと投げ出してな、かうしてグッと一息に飲まはんの、そらほんまに面白うおしたえ。ほしてな、晩やのに「おはよう、おはよう。」ちやはんのそんな怪體な云ひやうておすか？……」流れるやうな滑らかな言葉で頻りに無邪氣なことを語りつゞけてゐる。

智月はそれをきいてゐるうちつい引入れられてそつと舞妓の顏を偷みゝた。稚けない人形のやうな黑い瞳のなかにも、こつてりと扮つた白い頰にも言葉には謚くせぬ可憐しさが浮き上つてゐるのをみると、彼女は突如ぐつと抱き緊めて頰ずりしてやり度いほど可愛く思つたが、そのうちにふと彼等の華やかな衣裳のなかに見えかくれしてゐる妙眞の黑い法衣をみると、その色のない醜さが心を衝いて、急に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

妬ましいやうな悲しいやうな強い強い反感が彼女の胸一杯に込みあげて來た。彼女は耐らなくなつて、明るい光に顔を背けながら歩いた。

四條通りへ出ると、彼等はちりぢりに別れなければならなかつた。慶順は智恩院の方へ、連れの男は妓達と一緒に茶屋町の方へ、そして尼僧達は眞暗な山の方へ歸らねばならなかつた。

「さいなら。」

「さいなら。今度お出てやしたらまた知らしとくれやすや。ほんまどつせ。」

舞妓達は小禽のやうに賑かに云ひながら明るい光のなかを歸つてゆく。慶順は暫らくの間笑ひながら立止まつてそつちを見送つてゐたが、やがて、

「そこまで一緒に行かうか。」と、火の消えたやうな聲で云ひながら尼僧達と肩を並べて歩き出した。そして途々もの優しい調子で智月に話しかけたが、彼女が言葉少なに受け答へするばかりなので、終いに到頭傍を向いて妙眞とふたりで妓樓の話などしはじめた。

圓山の池畔のアーク燈の下で彼等は又右と左へ別れた。別れる時、慶順は今迄とはまるで違つた馴れ馴れしい調子で、

「智月はん、一度寄せて貰ろたら可かんか？」

「どうぞ、お暇どしたら……。」と、彼女は壓しつけられるやうな低い聲で答へた。

二人の尼僧は態々雜踏を分けて又下河原まで引返へして、軒燈の光の疎らな街を歩いて歸つた。夜櫻

から歸る人々が戯れ唄をうたひながら時々彼等を追ひ越して行つた。妙眞は、「慶順はんは氣がすつぱりしとゐやすさかい私好きや。」と、繰り返へし繰り返へし云つてゐたが、智月はそれに返事さへしなかつた。そしてうどんでも喰へて歸らうと云ふのを強ゐて斷はつて、眞暗な道を俯向きながらすたすた歩いて行つた。

三

その晩から智月の心には少しづゝ妙な變化が起つて來た。衆俗と、僧侶との二つの生活の間に横はつてゐる截然とした差別が今迄になくはつきりと思はれて來た。それと同時に世間といふものに對する別な眼が朧ろげに開いて、「何故」といふ執拗な疑問が絶えず凡てのものゝ上に置かれるやうになつた。

かうした不思議な心持ちに囚はれる前までは、恐らく彼女ほど尼僧の生活に馴致されてゐた女はあるまい。彼女は常に尼僧たることを喜び、その閑寂な生涯を愛し、全くその位置に安住してゐた。朝起るから晩寢るまで心はいつも平靜で、何等の不滿も、疑ひも起らなかつた。殊に檀家の法要や、儀式の席に連なる場合などには丁度醫師が患者の家で感ずるやうな明るい矜りと、自尊心とを感じさへした。これも一つには佛教といふものにその大半の機能を支配されてゐる京都の都市生活が然らしめたのではあつたが、併し反面では僧職といふ教養のある可き階級にあるにしては餘りに無智な彼女の憐れな本性がそれをさせる源になつたのであつた。

その證據、彼女が尼僧を生活に安住してゐる狀態は極めて呑氣なものであつた。つまりそれが衆俗の

生活よりも遙かに精神上にも、物質上にも安穏てあつたからてある。庵主の命にさへ服してゐればその他誰れに憚るところもなく、遠慮するところもない。三界常住の身には固より親兄弟や、良人や、姑舅に對する氣兼ね苦勞がある筈はなく、彼女は或種の開放された女として唯自分一人の體を宗法の掟に順應するやうに支配してゆきさへすればよかつたのてある。それに宗法の掟と云つても外面から見るほど苛酷なものてはなく、唯生活に或制限を置かれると云ふ迄にすぎなかつた。精進ものゝみの飲食物も女性には却つて都合好く、兩性間の肉體上の交通は絶對に禁ぜられてゐたけれども、生れてからこの年齡になるまてさう云ふ荒んだ情緒の激動に五體を浸したことのない彼女にはそれさへさまてに苦痛てはなかつた。

折につけ人々に寂しくはないかと問かれる毎に彼女はいつも笑ひながらかう答へた。

「ちよいとも寂しいちうことはおへんな。かうして居れば食べるものは寺てして呉れられますし、頭はこの通りやさかい髮のものかて要らんしな、着物も垢のつかん法衣さへ着とればえゝし、そらほんまに呑氣なもんどつせ。なまじに男はんなんか持つて辛氣臭い思ひをするより、この方がなんぼえゝや知れまへん。」眞實彼女は心からさう思つてゐたのてあつた。

それが二十一歳の今になつて、初めて身心に深い自覺を與へる動搖の日が來た。比斯的利亞の激しい發作は煩惱の波に漂はされる衆愚の上にばかりは來なかつた。四海を遍照する御佛の光に縋つて生きてゆく神聖な菜食者の上にも等しく襲ひかゝつて來た。而もその恐ろしい破壞力が身心の調和を破ると、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今迄の安固な信條は忽ちにして醜い破綻を示して、俗化してゐればゐるだけ卑しい人間本然の血がより多く目醒めて來た。彼女はもう「寂しいちうことはおへんな。」では濟まされなくなつて來た。

事實、彼女は何となく尼僧が厭になつて來たのであつた。それも何が爲めにと云ふはつきりした根據がある譯ではなく、唯寺門の外に廣がつた明るい世間が無上に慕はしくなつてくると同時に、何故自分がかうした寂しい、色のない生活を固守してゆかなければならないのか、その理由がまるで分らなくなつて來たからであつた。そしてつい近來身持ちになつたゝめに還俗した鹿谷の尼僧の話を思ひ起こすと氣の毒なやうな、最ものやうな種々な氣がしたが、もし假りに自分がそんな場合に立至つたならと思ふと、寺門の外にはこれといふ親身のものさへない自分の身がこの上もなく心細くなつて來て、今迄刻苦して蓄めて置いた二百圓ばかりの貯金が今更らのやうに嬉れしく、心强く思はれて來た。

彼女は今迄に考へたこともないやうな捨鉢なことまで思ひあぐねて、到頭二三日の間うつらうつらといろんな情感に身を浸しながら慵い日を送つた。

四

智恩院の敕諡慶讃法會は三日の間つゞいた。所謂おのぼりはんや觀光客の續々集まつて來るさなかではあるし、殊に四五日來麗らかな日和が京の街を長閑につゝんでゐたので、山は思ひがけない盛大な光景を呈した。

丁度中日であつた。智月はいつもより早めに晝餐を濟まして、他の尼僧達と一緒に庵主に連れられて

本山へ御參詣に上つた。

仕立卸しの法衣に正式の袈裟をかけて輪珠數を手弄りながら明るい町を歩いてゆく智月の心は近頃になく輕かつた。態と町の景色をみるために彼等は松原へ出て、大和大路を北へとつて歩いた。四條へ出ると、鐵筋コンクリートの眼鏡橋に變らうとしてゐる四條大橋の工事場から、祇園の石段下まで一帶に廣がつた新開町のやうに醜い町筋には行樂を逐ふ人の群が織るやうに往來してゐた。觀光の外國人達はホテルの小旗をさした人力車を連ねて、もの珍らしさうに四邊を眺めまわしながら人込みのなかを蜿々と練つてゆく。黯ずんだ羽蟲の群のやうな雜踏のなかには商家の娘達の着飾つた姿と、强い色彩をもつた洋傘が明るい白晝の日射しに照らされながら斑のやうにゆれてゐた。

軒毎に法會の大提灯を吊した小堀を通つて、薄綠の嫩芽にかはらうとしてゐる櫻林から山門へあがつた。本堂前の廣庭には新らしく舞樂殿が設けられて、二人の伶人が舞樂を演じてゐた。騷々しい群衆のどよみのなかに長閑な樂聲が流れて。唐風の異樣な冠や、裝束が靑くゆれる度に、戈の尖がきらきらと光つた。人垣をつくつて餘念もなく打眺めてゐる人々の額には汗が薄く滲んでゐた。

彼等ももの珍らしげな顏容をしながらその群衆のなかへ加はつたが、やがて庵主にせきたてられて橫手の階段から本堂へあがつた。そして殊勝らしい眸を疊へ落としながら、しづしづと南寄りに設けられた尼僧の席へ就いた。

慶順の名で寄越した命令書ともつかず、案內狀ともつかない印刷物にあつたとほり、その日は淨土宗

に屬する尼僧講の參詣日であつたので、彼等の周圍には老若さまざまの尼僧がぎつしりと坐つてゐた。なかには加行(けぎやう)や、夏安居(げあんご)の折などに見知り越しになつた顔もみえてゐたが、いづれもきちんと法衣の襟を正して專念に祈念をこらしてゐるやうにみえた。そして横手から後へかけて信徒の席が連らなつてゐたが、いづれも唯一樣の眞黑な人ごみで、人顔さへ辨別することが出來なかつた。

式は朝から始まつてゐるので、順序はもう大分進んでゐた。華頂猊下の昇殿もすんで、丁度お練りがはじまらうとしてゐた。宏大な本堂の千疊敷には各國の末寺末寺から集まつて來た三百ばかりの僧侶が波のやうな列をつくつて一杯に趺坐してゐる。紫や青やさまざまの美しい色をした法衣と、金襴の威儀細は花畑をみるやうに疊や鏡張りの上にこぼれて、曲彔(きよくろく)や、磬子(けいす)や、禮盤などの金具がその間にいかにもしつとりした深い色彩をおびて輝いてゐる。須彌壇の近くは靄のやうな薄闇に包まれて、數多く點されたる白蠟の光がぼうつと明暗する度に燭臺や蓮坐の金色が夢のやうに朧朧と光る。そして金色に塗りつぶされた大柱の陰には緋衣を着た小さな御前樣が影像の如く靜かに蹲踞してゐられる。陰暗とした薄明と、すべての沈靜のなかに不可思議な宗教的な壯嚴さが流れてゐた。

やがて第一の木柝(かいしやく)が鳴つた。最前列に坐つてゐた若僧の群は影の如く立上つて靜々と須彌壇の方へ近づいた。第二の木柝と共に陰々とした鐘の音が起つて、何處からともなく十念を唱へる聲がひそひそと聞えて來た。そして時と共にその聲は漸次と强さを增して行つて、緩やかな悲しげな律を刻みながらいつともなく堂に充ち溢れた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勤行が濟むと、趺坐してゐた大衆は一齊に立上つて、低く念佛を唱へながら動きだした。蟲の爬よりも徐い歩調で、數多い大柱の陰を幾度か圓行した。鐘の音と、十念の聲はその靜かな重々しい足音に和して一種の情調を釀成すると同時に、攪亂された冷たい空氣の底から强い强い沈香の薫りが尼僧達の席の邊まで流れて來た。

智月は何となく深い感銘に打たれて、俯向きながら心のなかで頻りに念佛を唱へてゐた。彼女の眼の前には曼陀羅に描かれた如來涅槃の姿が髣髴として現はれて來た。沈んでゆく夕陽の餘映に彩られたやうな悲しげなその幻像は煤けた金色と綠色とで殊更彼女の心を傷ましめた。そして幼少の折から眼馴れてゐる多くの御佛の顏がとりどりの美しさ、懷かしさを以つて自然と心の底に浮び上つて來たが、それとゝもに澤瀉の咲き零れた古池の水の面をじつと凝視してゐるやうなしんみりした沈靜な氣分が漸次と彼女の五體に溢れて來た。

すぐ耳の傍で調子の低い外國語で囁く聲が聞えるのに驚ろかされて、ふと頭を擡げると、彼女は坐つたところから三四歩距たつた大柱の前に禮裝をした脊の高い一人の外國紳士がいつの間にか來て立つてゐた。その傍には紫衣に奉書羽二重の帽子をきた慶順が水晶の珠數を弄びながら立つてゐて、式の次第でも說明してゐるらしく流暢な外國語で何やら頻りに物語つてゐた。紳士は一句每に輕く微笑みながら合點く、短かく刈つた白鬚の生へた橫顏をみると、彼女はすぐ二三日前新聞に出てゐた寫眞を思ひ出して、それが觀光中の英國の貴賓であることを知つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「慶順はんどすな。」と、すぐ隣りに坐つた妙眞は輕く彼女の膝を指先で突きながら呟いた。そして念佛も何も打忘れてしまつたやうな愚鈍な顏をしながら二人の樣子を眺めてゐたが、やがて、さも感に耐へないやうに、「怪體な言葉やけど、よう使やはりますな。何いふてなはんのやろ。」

智月はともすると隣に坐つた人々に聞きとられさうなその話聲が氣になつて、厭な顏をしながら返事もせずに押默つてゐた。そして時々そつと流し眸をはしらせて慶順の横顏を偸み〻た。此間逢つた時よりも少し面窶れのしたやうな蒼白い横顏が、薄暗い本堂の空氣を背景にして又なく美しく見えた。そして流れるやうな抑揚のある語を洩らす度に男らしくきり〻と緊まつた唇のあたりに何とも云へぬ氣品が現れて、じつと見てゐる間に瞳までその方へ吸ひ取られてしまいさうな氣がして來た。都踊の席でみた近づき易い風がまるきり消えて、何處となく僧侶らしい嚴肅さが彼の身のまわりを包んでゐた。彼女は幾度となくみてゐるうちに何とも知れぬ焦だ〻しさを覺えて、胸が譯もなく激しく躍つて來た。

三時頃になつて漸う式は終つた。それまでじつとして柱に凭れて熱心に見物してゐた外國紳士は疲れた風も見せずに慶順の後について大方丈の方へ歩いて行つた。丁度彼女達の前を通る時、慶順は智月の姿をみつけて輕く挨拶した。彼女はその刹那云ひ知れぬ恥かしさを感じて、耳の附根からかつと眞紅になつた。そしておどおどした眼眸をしながらそつと四邊の人顏を眴はした。

式が全く濟むと、尼僧一同は執行所の大廣間へよばれて、一場の法話を聽かされた。法然上人の御逸事やら、宗法の訓戒などがその話の主な部分をしめてゐた。それが濟むと茶菓の饗應があつて、二人三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人づゝ隨時に解散して行つた。

智月は方々の末寺に行つてゐる尼僧黌時代の舊友達が見知り越しの誰彼と久濶の挨拶をかわしてゐるうちに思はず時を過ごしてしまつた。そして庵主や妙眞達よりも三十分ほど遅れて、同じ方角へ歸る伏見の尼僧と一緒に執行所の大玄關を出やうとすると、そこへ一人の稚ない給仕が慌たゞしく駈け出して來て外事部で一寸用があるからといつて、再び彼女を事務所の方へ連れ戻した。そしてそこから更らに常侍局へ通ふ大廊下を通つて奥の方へ導いて行つた。彼女は何事が起つたのかと思ふてひどく胸を躍かせながら從いて行つた。特別信徒達へ淨齋を出すのでまるで戰場のやうな騷ぎをしてゐる臺所の物音を聞きながら最も奥の廊下へ入ると、片側は中庭で片側は寄宿舍のやうに細かく仕切られた僧房の續いた一棟の建物に出た。給仕はそのなかの一室の杉戸をあけて、

「勝野さん。淨念庵の人お出になりました。」

「さうか。どうぞ。」なかゝらは思ひがけない慶順の聲が聞えた。智月ははつとしてその儘そこへ立止まつたが人の思惑もあるので强ゐて躍る胸を抑へながらなかへ入つた。

なかは八疊ばかりの薄暗い座敷で、寺らしい鼠色の壁がひどく四圍の空氣を陰鬱にしてゐる。隅の方に褐色の麻布をかけた大机が置いてあつて、その上には和綴の書籍や、脊皮の洋書や、種々な雜誌のやうなものがごたごたに積み重ねてあつた。その傍の壁側の衣桁には法衣や、袈裟や、脊廣服などが妙な對照をみせながら亂次なくかけ聯ねてあつて、何處をみても男世帶の寂しさを思はせるやうな色彩が充

ち溢れて居るほかには何の裝飾もなかつた。強ゐて言へば慶順自身が敷いてゐる友染模様のメリンスの座布團と壁に張つてある雜誌の口繪らしい三色版の風景書とが寺門の外の世界と直接な交渉をもつてゐる色彩であつた。

慶順は妙に改つた調子で彼女に座布團をすゝめながら、自分で大火鉢に炭をついだ。そして炭取りと一緒に置いてあつた、般若湯と小さな張札をした素燒きの土瓶をそつと後へ押隱しながら、

「この間はえらいことやつたな。あれからすぐ歸つたか。」と、優しく笑ひながら云つた。

「はあ。」智月は上から何かで押被せられて居るやうに俯向きながら少さな聲で答へた。そして丁度小娘がするやうに膝のうへで矢鱈と珠數を弄りまわしてゐた。

「長いこと逢はなんだ友達が東京から訪ねて來たもんやて、毎日方々案内して歩かんならんので閉口しとるえ。圓山の彼岸櫻で耐えて居ればえゝのに、舞妓がみたいの、藝妓が見たいの何のと云ふてな、そらほんまに叶はんのや。」と、慶順は辯解らしく云つて、好奇心に充ちた眼で智月の姿をぢつと見てゐた。

智月は氣持ちにそぐはない微笑みを洩らしたきりで返事もしなかつた。

開け放した肱掛窓のすぐ下は浴堂だつた。淨齋の振舞酒に醉つたらしい僧侶達の聲高な話聲がはつきり聞えて、時々都々逸のやうな鏽びた唄聲さへ聞えて來た。寺男達が薪を割る響や、水を汲む釣瓶の音などもそのなかに騷々しく入混つて、本堂の時鐘の響とゝもに夕暮の氣持は漸次と四邊に露出して來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。

幾度か云ひ出さうとしては躊躇してゐた慶順は到頭思ひ切つてその用と云ふのを云ひ出した。それは金談だつた。

「私の位置として こんなことを 頼むのは甚だ可かん ことやけど、今の處ほかに 頼む口もないさかい、出來るものならどうか少してもえゝから融通して貰へんもんやろか。何ちうても末寺から上つて來た人達や佛教記者の連中にお振舞ひもせんならんし、寺には秘密て運動もせんならんしな。そらほんまに金が要るのや。……實は今日北野の瑞圓はんな、あの人にも頼んでみたのやけど、今は生憎持つとらんから、あんたに頼んで見たらどうやちうて言なはつたもんやて。……」慶順は額口に汗を滲ませながらくどくどしく訴へるやうに呟やいたが、そのうちに自分でも氣恥かしくなつたとみえて、心持顔を赧めながら

「ほんまにこんなこと頼むのは厭やけど、どうやろ、出來るやろか？」

「何程ほどどす？」智月は餘りの事に驚きながらもかう訊かない譯にはいかなかつた。

「さうな、二十圓ほどあつたらえゝんやけど、出來んなら十五圓でもえゝ。」

「さうどすな、二十圓と。……」智月は右手を頬に當てながら少し首を傾げて考へるやうな風をした。併し彼女の心のなかは妙に混亂してゐてとても思慮する餘裕などはなかつた。ずつと以前にまだ加行に上つてゐる時分にも彼女は慶順から頼まれて少しばかり融通してやつたことがあつたが、それから長い間さほど近しくも交際つて來なかつた今の場合、彼女にとつてはその願ひが餘りに意外で、普通なら無論

断はるのであつたが、彼女にはそれをするだけの勇氣がなかつた。て、妙にそわそわしながら、
「それ位なら大方出來るやろと思うてますけど。…ほんまはな、いま法衣屋へお拂ひをせうと思うて二十五圓ほど持つてますのつせ。そんなかゝらほんなら二十圓だけお貸し致しまへう。」
「併しそれを貰うたらあんたが困るやろ。」
「いゝえ、法衣屋の方はちよいと位遲うなつたかてどうもあらへんのどす。」
「さうか。そやけどほんまに濟まんな。私の方に出來たらすぐ返へすから、ほんならそれを十日ほど貸してんか。」慶順は頰を輝やかしながら嬉れしさうに云つた。
「後ほどお屆け致しまへう。」と、智月はそろそろ坐をたちかけた。
「いや、屆けて貰うたら濟まんから六時ごろ私の方から使ひを出しますわ。どうぞ分らんやうに封筒へなど入れてな、えゝか。…ほんまに長いこと引留めて濟まんな。いづれそのうちに御禮は仰山せんならんさかい…。」
慶順は先に立つて彼女を大玄關まで送つて行つた。そして手に手に大きな折詰めを抱へながら歸つてゆく信徒達の雜踏にまぎれて、別れの言葉も云ひ交はさず袂を分つた。
彼女は歸る途すがら都踊の藝妓の顏など思ひ起こして、何となく不快なやうな妬ましいやうな氣もしたが、云ひ憎くさうにもぢもぢしてゐた先刻の慶順の顏を再び心に描き出すと、何となく自分が特に選ばれたやうな氣がされて、強い嬉れしさが胸先へ込みあげて來た。そして又一方には二人が互に接近す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る絶好な機會が作られたやうな氣がして、これから以後本山で何かと特種な便宜が計つて貰へるのが自分にとつて非常に幸福であるやうにも思つた。石階を下りて山門の方へ出てゆく時、彼女の心には何故か此頃に覺えぬほどの強い力が溢れて來た。

五

朝の勤行が濟むと、彼女は例のやうに庫裡の奥の間へ入つて、經机に倚りかゝりながら習字の稽古をはじめた。奮弊な庵主は文字といふものに對して非常な敬意を拂つてゐた。昔の阿佛尼や、蓮月尼のことを引合ひにだして、僧職に身を置くものは美しい手蹟をもつてゐなければならないと云ふことを始終口やかましく云つてゐた。智月をはじめ同宿の尼僧達は必ず一日に一度は日課として習字をしなければならなかつた。

いつもは割りに熱心に筆を運ばす彼女がその日は何故かまるで氣合が乘つて來なかつた。そして現になつた心の底を折々紫衣を着た慶順の姿が靜々と歩いて行つた。火のやうに燃えてゐるその流眸が彼女の血を著しく熱しさせた。

そのうちに彼女は昨夜金と一緒に封じ込んでやつた手紙の文句を一字殘らず思ひ出した。何處となく色つぽい文句や、氣を持たせた文句が自分でもよくあれだけ云ひまわせたと思ふほど巧みに書かれてあつた。そして最後に藝妓や舞妓達と遊ぶために此金子を費つては困るといふことを書き添へたのを思ふと、自分ながらその大膽さが嬉れしくなつて、彼女は四邊を胸はしながら微笑を漏らしさへもした。

無心に運ぶ筆の尖端からは「數ならぬ身に申し聞け下され難有く……」とか、「兄上樣とも思ひ居るあなたさま」とか云ふ文字の連鎖が、種々な書體を以つていろいろに書き表はされた。そして勝野慶順樣と云ふ名が幾度か書かれて、幾度が黑く塗り消された。そして書き疲れると彼女はいつも癖で片手で頬を抑へながらうつとり庭の面に眺め入つた。萠えたつた新綠の草葉の上に强い日の光が明暗する每に彼女の頬には譯もなく熱い淚が零れて來ることもあつた。

黃昏時であつた。

一人の穢らしい風姿をした老婆が智月へ宛てた差出人の知れない一封の書狀をもつて淨念庵へ訪ねて來た。玄關から庫裡の勝手口へまわつて、丁度そこで夕餐の仕度をしてゐた婢衆にそれを渡して、その儘何とも云はずに歸つて行つた。

いつものやうに廊下へ佇んで夕陽の色を眺めてゐた智月はそれを受取ると、急に激しい胸騷ぎを感じて、他人には見せてならない秘密を得たやうに人氣のない本堂へ入つてそつと封をきつた。それは慶順から來た手紙だつた。

「昨夜は御厚志まことに〳〵嬉れしく存じ候。おかげさまにて愚生の面目も立ち、萬事好都合に運び候まゝ何卒御放慮の程願入候。就而是非一度逢うてお話し致さねばならぬ儀出來致し候間、若し御閑暇も候はゞ左記のところまで一寸御足勞仰ぎ度候。萬事は拜眉の上。」

智月はいろいろな疑惑に心を奪はれながらいつ迄も亂暴に書きなぐつたその手紙の文面を瞻めてゐた。淡い豫期が群り起つて徒らに彼女の胸をふるはした。そしてどうしても行かなければならぬと云ふ強い強い刺衝を胸に感ずると、彼女は譯もなく氣を焦つてその儘驅け出してゞも行き度くなつた。丁度庵主は西陣へ行つてゐるし、妙眞と圓淸は鹽小路へ行つてゐる留守なので、庵をあけてはいけないのを知つてゐながら、彼女は到頭そのまゝ衣換へもせずにそつと庭口の柴折戶を開けて戶外へとび出してしまつた。そして明るい月の光が黃昏と爭つてゐる寂しい町を殆んど夢中で步いて行つた。

左記のところと添へ書きしてあつた家は小堀にあつた。祇園の石段下から廓を西に見て白川端の方へ出ると、智恩院の門前をちよつと上つたところに細い路次が幾つも橫にきれてゐて、軒燈の瞬く宵闇のなかに細かく仕切られた長家が同じやうに建ち並んでゐた。その家はさうした路次の一つを入つた二軒目の角にあつた。二間にも足らぬ紅殼塗りの千本格子の側に漸う人の入れる位な小さな覗り戶がついてゐて、煤けた障子の面には薄暗い灯の光がぼんやり映つてゐた。彼女は細かく戰へる手先でその入口をあけて中へ入つた。

なかは暖簾越しに勝手元へ通ふことの出來る狹い土間で、上端の六疊と、その奧の四疊位な穢ろしい室がほの暗い行燈の光に照らされながら暗くみえてゐる。そして家財と云つては長火鉢と鼠不入が置いてあるばかりの室の隅には、一人の瘦せほうけた老婆が、反古で張りつぶした木箱を前に据えて、竹の屑に塗れながら頻に扇の骨の手內職をしてゐる。

「おいてやす。」その老婆は顏には不似合な若々しい聲て云つて、ニッケル縁の大眼鏡の底から小さな眼を輝やかしながら智月の顏をみてゐたが、やがて輕く微笑みながら、

「あゝ、勝野はんをお訪ねになりましたんやろ。まあ、まあ、えらい早いことどしたえなあ。さあ、お上りやしてお呉れやす。さきからどないにお待ちやしたか知れまへんえ。」

老婆はそわそわ立上つて來て、手を執らんばかりにして彼女を上へ上げた。そしてすぐ鄰りの間の押入れの陰にある眞暗な階段口へ案内した。彼女はまだ落着かぬ息苦しさに喘ぎながら梯子のやうな急な階段を慄へながらのぼつた。

階上は六疊ばかりのこれも恐ろしく穢るしい室だつた。天井は舟底のやうに急な勾配をなして、格子のはまつた一方の窓は高さ三尺にも足りなかつた。そこへ煤と手垢て黑光りのした古櫃や、行李や、その他のがらくたがごちやごちやに置き並べてあつて、荒壁に張つてある色の褪めた繪ものゝ江戸繪や、暦などが殊更强くその室の空氣に頽廢した匂ひを色づけてゐる。

そこにも一つの古風な圓行燈が點してあるぎりだつた。ほの暗い光のゆらぐ影に慶順は袈裟もなにもかけたまゝだらしなく橫に寢そべつて、枕元には食ひ散らした肴や、空になつた銚子が置き散らしてあつた。彼は上り端に智月の顏がみえると、忽ち飛び起きて居坐いをなほしながら、

「お、よう來て呉れたな。もう今夜は逢へんかと思うて、氣づゝなうて耐らんかつたのや。」と、そわそわしながら隅の方へ置いてあつた坐布團を取出して彼女にすゝめた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さあ、ずつとこつちやへ寄つとくれやす。それでは暗うて顔が見えんがな。」

智月は云はれるまゝに彼のすぐ間近かに進み寄つて、法衣の袖で口を掩ひながら細い聲で挨拶した。

「おほきに。昨夜はほんまに濟まんことやつたな。餘りな賴みやさかい跡で怒つとりやせんかと思うて氣が咎めて氣が咎めて仕樣がおへなんだ。併しあれだけ融通して貰うたんでどないに助かつたか知れやへんのや。あんたの親切は死んでも忘れんえ。」さう云ふ慶順の聲は調子までまるで昨日と變つてゐた。醉つてゐるせいかしんみりした感傷的な言葉がいかにも自然らしくついついと出て來た。

智月は返事もせずにその顔をじつと瞻もつてゐた。ぼやけたやうな赤黄い光のなかにくつきりと浮き出してゐる青い頭や、ほの白い頬が彼女には繪のやうに美しく見えた。そして心が漸次と靜まつて來るにつれて、彼の唇を出る言葉が一句一句胸を撫でゝゆくやうに快く思はれて、親身の兄弟とでもしめやかに物語つてゐるやうな親しみが自づと湧いて來た。

「そんなにお云ひると却つて恥かしうおすわ。誰かてお金の要る時にはほんまに困るもんやさかい、……」と、彼女は慶順の言葉を遮ぎるやうに云つて、「そんなこともあらしまへんやろけど、もし又お困りやすやうなことがおしたら、どうぞ云うとくれやす。私で出來るほどやつたらどないにでも致しますさかいに。」

「嬉しいこと云ふて呉れるやないか。そないに云ふてくれるとつけあがつて、どんな無理なことを云ひ出すか知れんえ。今度は百圓貸して呉れつたら云うてな。は……。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人は顔を見合はせて晴れやかに笑つた。互に共鳴する情緒がその笑ひの底に流れて來ると同時に、もうすつかり相手の氣心を理解し合つたやうな氣がした。

そこへ階下からさつきの老婆が新らしい銚子と、湯葉の煮つけを盛つた小皿をもつて上つて來た。そして二人の容子を仔細ありげにつくづく打眺めてゐたが、やがて、

「ほんまにお二人さんともまだお若いのやなあ。在家しておゐやすのやつたら、お年頃はえゝし、御容貌はえゝし、……ほんまに惜しい事どすえなあ。」

慶順は新らしい銚子を手許へ引寄せて、手酌でぐびぐびやり出したが。

「婆さん。そなこと云はんと措いてえな。頭は圓うしてゐたかて、人間は人間や。情事位出來んてどないにするのえ。」

「まあ、まあ、えらいこと。どうどすえなあ。ほんまに山のお坊んさんがたは開けとゐやすさかい、うつかり出來まへんな。まあ宜しうおあがりやす。何ぞまた御用がおしたら呼んどくれやす。」婆さんは賤しい愛想笑ひを洩らしながら、また降りて行つた。

智月は默つてその後姿を見てゐたが、やがて足音が階下へ消えてしまうと、少し赧らめた顔を慶順の方へ向けて

「あんたはんも怪體なことをお云ひやすなあ。」と、媚びのある眼眸てみつめながら小娘のやうに肩をすべらして嬌態をした。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「はゝゝ。そやかて、ほんまにそやないか。坊主はしとつても體は人間や。間にや牛肉も食べたうなるし、女子も欲しうなる。どうて法衣なんちうものは商賣の方便に着とるのやさかい、惡いことしては可けんちう法はないやないか。出來るならなんぼしたかてえゝのや。唯人目にかゝると困るちうだけのもんやなあ。はゝゝゝ。」

「きつうお云ひやすなあ。」智月はぱつと顏色を染めながら細い聲て云つたが、その儘俯向いた。

「今時淨土宗の尼僧て男を持つとらんものがあるか？ なんぼ阿呆かてちよこちよこやり居るがな。」と、慶順は張りきつた興味を醉ひの出た眼の底に輝やかしながら、片肱[illegible]の上へ突いてぐたりと横に臥た。そして下から覗くやうにして智月の顏をみた。

彼女は黒い法衣の袖て顏を隱しながら

「そんなに見んとお措きやすな。私恥かしいわ。」

「はゝゝ。きつい氣やな。美しい顏やさかい、滅多と私なんかに拜まれては困るちうのやろう。もうえゝ。拜まんと措くがな。そのかわり、喃、そこなる觀世音菩薩、執着無劫の雲吹きはらひ、眞如の月をみせて給べ。」と、謡曲のやうな戯れた調子てうたいながら、彼は彼女の手を抑へて、顏から法衣の袖を引離さうとした。

「もう、厭やわ。」と、智月は眞紅になつた顏に感情の激動を示めす妙な笑ひを見せながら云つて、「ほんまに餘り嬲らんと措いとくれやすな。ほんてないと、私もう歸りますわ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「今歸つて吳れたらあかんがな。そなこと云はんともちつと此方へお寄りいな。實はな。えゝ話しがあるのや。今朝な、あんたの處の妙眞な、あれが私のところへ怪體な艶書（ふみ）を寄越し居つたんえ。」「あんたはんのことばかり思ふて居ります。」なんて甘い甘い文句を書き居つてな。」

「妙眞はんがどつか？」と、智月は呆れて、「ほんまどつかいな？」

「ほんまや。見せてやろか。そらほんまに怪體（けつたい）なもんえ。」と、慶順は懷中を掻き探つて一封の手紙をとり出した。表書きには小堀のその家宛てに勝野樣と拙い鐵釘流で書いてあつて裏には唯「御ぞんじより」としてあるばかりであつた。それをみると、慶順はどきまぎしながら「は、しまうた。こりや違うた。惡い洒落やな。」と、急いでまた懷中へ押隱して、今度は別の一封をとり出した。そして笑ひながら「これや、これや。よう見ておみい。笑うたらいかんぜ。」と、智月の前へぽんと投げ出した。

彼女は慄へる手でそれを取上げて、漸次と繰り展げながら讀んでいつた。それは紛れもない妙眞の手跡だつた。片假名交りの改まつた書體で、殆んど滑稽にみえるほど幼稚な云ひ廻はして、綿々とした思慕の情を書き綴つてある。そして最後に「ぜひいつぺん何處ぞて逢うて下され」と書き添へてあつた。

彼女は讀み終ると噴笑し度いやうな氣になつて、

「ほんまに厭らしい人やなあ。何と思うてこんなこと書かはつたんやろ。」

「ほんまになあ。あれても女（をなご）やと思うとるところがえゝやないか。お枕を潰ぶしたやうなあの顏をみると、誰かてぞつとするかな。あんな人こそじつとして後生なと願うとりやえゝのに、なまじに色氣なん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

か出すさかいにあないな怪體なことになんのや。」

「ほんまに。あの人こそ固いやろと思うてましたのに、人の氣ちうものは分らんものどすなあ。」

「それや、それや。あんなんてさへ此れやさかい、あんたのやうな美しい人はどないなことしとるか分らへんのや。堅さうなことは云うとるけどな。」と、慶順は又起きなほりながら、「なあ、智月はん、どうやろ。」

「厭えなあ。私らはほんまにそんなこと知りまへんえ。町方とお交際しとりますさかいに、出來るだけ堅う暮らしとりまへんとな。……」

「そやかて、惚れられたら何うするのえ。」慶順はその言葉と一緒にすつと智月の側へ摺り寄つて、「もし男があんたを思うて死ぬちうたらどないにするのえ？」

智月は體ぢうびりびりと痙攣するやうに覺えて、胸が裂けるやうに躍つて來た。そして酒臭い男の體を突き退けやうとしたが、もう兩手が彼女の云ふことを聞かなかつた。

「そなことあらしまへんもの。」と、消え入るやうな細い聲で呟いた儘、袖を顏に押當てゝ突俯してしまつた。

慶順はその樣をじつと見つめてゐたが、急に彼女は何とも云へぬ恐怖を感じて、突如彈ちかれたやうにぱつと飛び退いた。そして眞蒼になりながら

「私もう往にます。往にます。」と、吶りながら云ひ放つて、階段の方へ後退りして行つた。

慶順は魂をとられたやうな間の拔けた顔をしてその樣をみてゐたが、
「えゝやないか。そないに厭はんてもえゝやないか。」と、云つて、その儘立上つて、づかづか彼女の方へ近寄つて行つた。そしてその肩へ手をかけながら、頻りに甘い言葉で掻口說いたが、彼女は唯「往にます。往にます。」と云ふだけて、少しも彼の云ふ事に耳をかさなかつた。

終には慶順も持て餘して、
「ほんならもうえゝ。あんたのやうな情なしにやなんぼ云ふたかてあかへん。ほんまに惡い小兒やな。」と、腹たしさうに云つて、彼女の跡に續いて、そろそろ階段を下りた。
「おう、もうお往にやすのか。まあ宜しいやおへんか。」と、勝手元て何かしてゐた老婆は小さな雪灯を持つたまゝとび出して來て、頻りに止めた。
「今夜は早う山へ歸つとらんならんから、又寄せて貰う。」と、慶順は冷たい聲て云つてその儘智月の後から小さな潜戶を開けて戶外へ出た。

空はいつの間にか眞暗に曇つて、怪しげな貌をした雲の塊が長い層をなして頻りに流れてゆく。少し風の吹き添つて來た街には往く人の影も何處となく寂れて、軒燈の暗い光のなかには煙のやうな砂塵が立迷つてゐた。

二人は默つて肩を並べて步いて行つた。まるて別々な思考(かんがへ)がふたりの胸に充ち溢れてゐた。石段下まで來かゝると、慶順はそつと智月をよび止めて、今迄とは似てもつかぬ靜かな聲て、

「あんた怒つてるか？」
「いゝえ、そんな事あらしまへんけど、……」
「ほんならえゝけど。悪いことばかり云うておほきに濟まんかつたな。そのうちに手紙で詫びるさかい、どうぞ許してや。今日は少し醉うとるのやからほんまに惡う思はんてな。」
その物柔かな、優しい聲を聞くと、彼女は急に胸が迫つて來て、
「あんたはんこそ、怒つとゐやしまへんか。ほんまに我儘ばかり云ふて……。いづれまたいつなと逢はして欲しいのどすけど。……」
「あんたの都合のえゝ日に逢はうか。今の家は山の給仕の家でな、親子ふたりぎりで安氣に暮らしとるのやさかい。いつ來て貰うても構やへんのや。私の洗濯ものなんぞみんなあの婆がして呉れるのやし、ほんまに親切もんやさかい、どうぞいつなと一度彼處へ來てな、婆に私を呼ばしてお呉えな。」
「へ、おうきに。いづれ是非參じますわ。」
「それからお金も出來たらその時に返やします。」
「いゝえ、あんなもの何時でゝ構やしまへん。それより……。」何か云はうとしたが、悲しさが胸に溢れてきて、言葉が妙に縺たやうとするので、その儘口を噤んでしまつた。
「ほいちやこゝで別れやうな。」慶順は山へ上らうとする大道の石崖の下まで來ると、ふと立止まつて別れの言葉を呟やいた。

「ほんならまたいづれ。」智月も小さな聲で答へて、その儘安井前の方へ別れて行つたが、暗い山の方へ登つてゆく慶順の後姿をみると何とも知れぬ離れ難なさが烙きつくやうに燃えてきて、もう一度取つて返へして、あの手に縋つて自分の頑なゝ心を詫び度いやうな氣が頻りにして來た。そして煩さくつけて來る車夫を避けながら、とある小陰に佇んで、慶順の姿を何時までも見送つてゐた。

暫らく歩きつゞけてゐた慶順はやがてふと立止まつた。と、何と思つたかその儘ぐるりと後を向いて、もと來た道をとつて返へし、往來の人に氣を配りながら再び急ぎ足に小堀の方へ曲つて行つた。それをみた彼女は不審な氣に打たれて、無意識に小陰を立出てゝ、その後に見え隱れしながら隨いて行つた。そして彼が廓の方へ曲つたのを見ると、急にその行先の何處であるかゞ分つて、腹立しさが胸を衝いて來た。その儘自分もその角を曲つて彼の跡を慕つて行つた。

道の兩側には家號を書いた角行燈を懸け連ねた同じやうな妓樓が犇々と建連なつてゐる。方々の二階からは浮れ騷ぐ妓達の唄聲や、三味線の連彈が賑やかに洩れ聞えて、明るい障子の面には島田に結つた妓の首や、男の横顏が折々影繪のやうになつて大きく映る。酒臭い嫖客は取留めのない戯語を云ひかはしながら三々五々薄暗いその家並の陰を縫ひ歩いてゐる。その群に交つてゆく智月は幾度か男の坊主と間違へられて、引子（ひきこ）に出てゐる小娘に法衣の袖を控へられた。

「山の旦那はん。お上りやすな。お寄りやすな。」と、彼等は雀のやうに騷々しく囀つて、危くすると彼女を樓（うち）のなかへ引込まうとする。彼女はかうした巷へ足を踏み入れた自分が今更のやうに淺猿ましく思

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はれて、荒々しくそれ等の手を振り拂ひながら、到頭小走りにその狹い街をかけぬけた。そして後で。「ごつい坊んさんやなあ。」と云ひながら四五人て嘲けるやうに笑つてゐる聲を聞くと、耐らなくなつて、きりきりと齒を喰い緊りながら口惜しさを抑へた。

慶順の後姿はとある小路を曲つて、今度は圓い軒燈の續いた甲部の妓樓町を眞直に辿つてゆく。ひつそりと靜まつたなかに小砂利を踏む木履の音が聞えて、暗い横町から美しい舞妓が不意に歩み出て來る。そのなかの一人は

「あら、勝野はんの旦那はん。先日はおほきに。何處へお出てやすの？」と、涼しい聲で呼びかけて、その儘慶順と並んで歩いてゆく。ひそひそと物語つてゆくその話聲は聞えなかつたが、氣のうはづつた彼女の耳には何か甘い戀でも囁いてゐるやうに聞きなされて、留途もない妬ましさが胸一杯に込み上げて來た。いつそ後から走り寄つて、自分のゐることを彼に知らせてやらうかと思つて幾度か足を早めたが、その都度眼のくらむやうな激しい眩暈が襲つて來て、危く倒れやうとするのを漸く踏みこたへながら歩みつゞけた。

彼等は「宇津木」と書いた軒燈の出てゐる妓樓の前で立止まつた。暫らくの間大聲で笑興じてゐたが、なかゝら今一人仲居らしい女が出て來ると、彼等は其儘その後に續いて潜戸のなかへ隱れてしまつた。

その前を通りすぎるとき、彼女は躍る胸を抑へながらじつと格子のはまつた店口の窓を覗んで通つた。なかではその時、晴れやかな舞妓の聲が、

「早う君千代はん姐はん知らしとあげやすな。今も大勝はんて、あんたはんのことさつう云うてやはりましたえ。」

それを耳にすると彼女は又かつと迫きあげて、心のなかて男の名を呪ひながら、その町を殆んど夢中て通りぬけた。

賑やかな四條の橋詰めへ出ると、低い空からは思ひ出したやうに生温い風が落として來て、それと一緒に大粒の雨がぽつりぽつりと降つてきた。夢のやうな心持ちて、暫らくの間明るい南座の表看板を眺めながら佇んてゐたが、そのうちに矢鱈と自分の身が悲しく、情けなくなつてきて、その儘何處か遠くへ姿を隱してしまひ度いやうな突き詰めた氣がして來た。そして降りまさつて來る雨のなかを泣きながら山の方へ歩いて行つた。

五

庵へ歸りついたのはもう十一時を過ぎて後のことてあつた。眞暗な臺所の戸をあけてそつと庫裡へ入ると、彼女はぐしよぐしよに濡れしほつた法衣をすぐさま寢衣にぬぎかへて、奥の間の寢所へ音のせぬやうに忍び込んだ。

毎夜枕を並べて寢る妙眞と圓淸は黒紬の夜具にくるまつて、ぐつすり寐込んてゐた。暗い行燈の光はその寢顔をぼんやり心細げに照らし出してゐる。妙眞は晝間の疲れが出たと見えて、齒並の惡い口をだらしなく開けて、いぎたない寢態をしてゐる。それをみると彼女は慶順から見せて貰つた艶書のことを

思ひ出して、息づまるやうな憎惡の念にふるへながら、臥床の上に横樣に坐り崩れたまゝ、その顏を穴のあくほどまじまじと瞻めてゐた。

宵の口からの出來事が漸次と夢のやうになつて彼女の心の底へ浮き上つて來た。もの優しい慶順の聲が迷はすやうな粘ばつこさをもつて犇々と耳の底へ迫まつて來る。と、今度はあの涼しい舞妓の聲が「君千代はん姐はん。君千代はん姐はん。」と、煩いほど口まめに饒りつゞける。そしてあらゆる情感の旋轉してゐるなかに、自分が慶順に愛されてゐるのではないと云ふ事實と、彼を愛してゐる女が自分の他にもあるといふ事實だけが際立つて露出して來ると、彼女は云ひ甲斐もなく悲しくなつて身を悶えながら聲を呑んで泣きはじめた。

折角投げ與へられた鑵を自分は拾はなかつたのである。否、男に對する臆病な恐怖から到頭拾へなかつたのである。そして暫らくしてから今夜またと得難いその好機會を逸してしまつたのに漸う氣がつくと、彼女は胸も張り裂けるほどの殘念さを覺えて、

「いつそあの時に……。」と、心のなかでひそかに呟いたが、その考へとともに胸は激しく躍つて來て、男の匂ひがいつとも知らず鼻のあたりに漂つて來た。そしてどんな犧牲を拂つても今一度どうにかしてあの優しい言葉を取戾したいと思つて、頻りにその手段を考へた。

それから四五日の間、慶順からは何の音沙汰もなかつた。どうにかして逢ひ度い逢ひ度いと思つてゐ

ながら、彼女は明るい日の光をみると、何となく自分の身の周圍のことが思はれて、思ひきつた大膽な氣にはなれなかつた。

春はいつのまにか全く死んで、初夏の綠が眼にみえるほど生々と萌えはじめた。京の街をとり圍む山々には、柔かい嫩葉がめつきり色づいて、日に日に溫氣を增して來る南風が人々の心に行樂を逐ひつくした後の淡い哀愁を吹き込んで來た。彼女のやうな纎弱い神經をもつたものには蒸し薰るその匂ひが甚だしい刺衝をなして、異樣な興奮と、倦怠とが日に幾度となく去來するやうになつた。

或晩のことであつた。木屋町筋のさる壇家に法要があつて彼女達は夕餐時からその家へ招かれて行つた。そして庵主や他の尼僧達と膝を並べて讀經してゐる最中に、彼女はふと比斯利亞の激しい發作に襲はれた。强い眩暈とゝもに四邊が漸次と眞暗になつてゆくやうに覺えたが、そのうちに全く人事不省に陷つて、蒼ざめた額から冷たい汗を流しながら介抱して呉れる眞の法衣の袖にしたゝか生唾をもどした。

その晩から彼女は全く病褥のなかの人になつてしまつた。男を戀ひ、慕ふ心と、神經の奇怪な顫動とが彼女に限りない不安を與へた。中京から來る年老つた醫者は徼くさい煎藥を飮ませて、藥よりも何よりも精神を安靜にする爲めに念佛を唱へるのが大事だと云つた。そして二三日の間、取留めのない病苦に惱まされた揚句、彼女はやつと再ば起き上ることが出來たが、その時はもう全く別人のやうに變つて、長病ひをした人のやうな窶れが、彼女の頰にも、額にも傷々しく現はれてゐた。平生から餘り口數

の多い方ではなかつたのが、一倍無口になつて、朝夕の勤行を型のごとく勤めるほかは大方薄暗い庫裡の窓際へ坐つて、暗く乾いた眼眸をしながら自分の心の奥底をみつめるやうにうつらうつら深い思ひに沈んでゐた。

庵主をはじめ同宿の尼僧達は頻りに心配して、親切に慰めたり、劬はつたりした。殊に妙眞は宗法の掟を破つて、牛乳や、雞卵をとることをすゝめた。壇家の老婆は息子が朝鮮から送つて寄越したと云つて、態々人參の包みを持つて見舞ひに來て呉れた。その度毎に彼女はその人達の親切をしみじみ嬉れしく思つて、云はれるが儘に出來るだけ體力を增すやうな食物や、藥品をとつたが、それ等の不秩序な養生法は却つて病勢を拗けさせてゆくばかりで、さまざまに手を盡くした割に一向驗がみえて來なかつた。

そのうちに彼女は漸次と人氣を厭ふやうになつた。殊に明るい日の光が緣端へ一杯さしかゝつて來るのをひどく嫌つた。そして日が一日、本堂の須彌壇の後の薄暗い板敷の間へ机を持ち込んで行つて、その上に兩肱を凭かけながら、死んだやうに押默つてゐた。千本格子になつた高い窓からは折々冷たい山氣が吹き込んで來た。その冷たさの底に流れてゐる香の薫りと、濕々した朽葉の匂ひを嗅ぎながら、今はもう殆んど消すことの出來ない創痕のやうになつた慶順の姿を思ひつゞけた。そして時々六萬遍でも唱へてゐるやうに靜かに日課珠數を爪操つてゐるかと思ふと、その次の瞬間にはもう法衣の袖を顏に押し當てゝ悲しげに噓りあげて泣いてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

庵主はそんな病的な容子をみる度に彼女を本堂へ呼び入れた。冷たい板敷きの上へ端然と坐らせたまゝ、固く合掌させて、その前で厳かに十念を唱へて聞かせた。それが濟むと今度はもの優しい聲に歸つて、信仰といふことをこまごまと物語つて聞かせた。世故に長けた正直な老尼は決して高遠な敎義を說くことはしなかつたけれども、そのかわり方々の寺々を經めぐつて來た彼女の長い閲歴は若い智月の心を支配するに充分だつた。しんとした本堂の冷たい空氣の底に消えてゆく淳々としたその言葉を聞いてゐると、彼女は漸次と胸がすいて來るやうに覺えて、今自分の心を苦しめてゐる事實を有りの儘に打開けてしまはうかと思ふことも度々てあつた。そして彼女のほそぼそと嘘嘘く忍び音が森閑とした庫裡の方まで響いて來ることも珍らしくはなかつた。

六

智月が淨念庵を出たのは、もう東山の頂にほんのり月明りの射す頃だつた。

その日は朝から體の工合もよくて、何となく氣が輕かつたが、そこへ午後になつて慶順から思ひがけない嬉しい便りがあつた。慶讃法會の跡始末て、殆んど寸暇もなかつたのが、今日漸う年あけになつたから、久振りて是非逢つて話し度いと云ふのてある。會合の場所は態と人目を忍んて、鳥邊山の本法寺の門前を撰んて來た。

彼女は西の大谷の角から東へ東へと上つて行つた。細徑は古風な練塀に添つて、晝ても薄暗いやうな氣のされる鳥邊山の方へ導いてゆく。途すがら彼女は恐ろしさも何も打忘れて、頻りに慶順の事を思ひ

つゞけた。僅か一週間ほど逢はずにゐたのに、もうその間に一年も二年も經つてしまつたやうな氣がする。その間彼は何んなことをして暮らしてゐたらう。自分があゝした病苦に惱まされてゐたことも何も知らずゐたらうか。君千代と云ふ美しい藝妓の名は片時も忘れなかつたがいづれ彼がその女と幾度かの嬉れしい逢瀬を樂しんだであらうと、思ふと、譯もなく妬ましい氣もしたが、彼女は今の場合出來るだけそんな厭な思ひを心から拭ひ消してしまはうと力めた。そして逢つたら最初に何と云つて挨拶しやうなどゝ思ひまどひながら歩いてゆくうちに、彼女は何かしら無上に嬉れしくなつて來て、かうして自分を捨てゝさへ呉れなければ外にどんな女がゐやうと、どんな苦しい思ひしやうとそんなことは何でもないやうに思へて來た。

本法寺の高い石崖が夜目にもはつきりと見えて來た。それとゝもに彼女は一歩、一歩、胸の動機が激しく狂つて來るのを覺えて、暫らく歩いては立止り立止りしながら上つて行つた。そしてやつとのことで低い寺門の前まで辿り着くと、彼女は俄かに力を得て石段を狂氣のやうに驅け登つた。

手紙に書いて寄越した門の扉の陰には人影さへみえなかつた。彼女は不審に思つて石敷きの道を本堂の方へ入つたり、墓地の方へ入つたり方々尋ね歩いたが、遂に彼の姿は何處にもみえなかつた。彼女は張詰めた氣もゆるんで甚しい失望を覺えながらぼんやり突立つてゐたが、そのうちに漸次と疲れが渾身に襲いかゝつて來て、到頭冷たく夜露の降りた石階の上へくづをれるやうにがくりと腰をおろした。そして闇なから歩いて來る人の足音に犬のやうな聞耳をたてた。

熬りつくやうな氣持ちで待つてゐると、もの丶三十分も經つたと思ふ頃、愈う山下の方から戞々と石を踏む下駄の音が上つて來て、寺門の前まで來かゝると、ふと立止まつた。彼女はそれをきくと、我を忘れて石階を驅け下りながら

「慶順はんどつか？」と、息を彈ませて訊いた。

「おう、さうや。智月はんか。長いこと待たして濟まんかつたな。」

「いえ、そないに待ちやしまへん。」と、彼女は突如、慶順の前へ行つて「ほんまに久しいこと逢ひまへんどしたえな。私、長いこと病うてゐましんたえ。」と、氣もそゞろに云つた。

「そやつたさうな。一度見舞ひの手紙を出さんならんと思つてゐながら、私の方も忙がしかつたもんやさかい。……」

「ほんまに一度も尋ねてお吳れやしまへんどしたなあ。私の病氣のことを誰れから聞きやした？」

「妙眞からちよつと聞いた。」

「妙眞はんから？　いつお聞ひやして？」

「こないだ三條でふと逢ふてな、智月はんどないにしてるて尋ねたら、あんたは病うて寢てなはるちうて何やしらんきつう心配さうにしとつた。」と、慶順は態々らしい聲で云つた。

「さうどつか。あの人も怪體な人やな。私が始終尋ねてゐるのに、あんたはんにお逢いたこともちよつともお云ひしまへんどしたえ。」智月は何とも知れぬ疑ひにせめられて厭な氣になつたが、すぐそれを打消

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さうとして、

「ほんまに長いこと逢ひまへんどしたえなあ。あれからちよつともお消息もありまへんよつてに、何ないにしとゐやすやろうと思うて、それが氣になつて、氣になつてな。このあいだの時餘りなこと云ふたんで怒つとゐやすのやないやろか、もう私のことなんかちよつとも思うておくれやしまへんのやろかと、こないに思うて毎日泣いてましたんえ。」と、狂氣のやうに掻口說きながら漸次と涙聲になつて行つた。

「はゝゝ。あんたも苦勞性やな。私がなんてそなこと思うものか。ほんまに忙がしうて困つとつたんえ。」慶順は態と聲を落として、慰めるやうに云つた。清水の方から提灯が一つふらふら揺れながら降りて來た。それをみると二人は云ひ合はせたやうに歩き出して、漸次と新高尾の方へ下り行かうとしたが、暗闇てさつぱり足元が分らないので、その儘眞直に上つてゆくと、やがてとある簷陰でその提灯にはたと行き逢つた。茶屋女らしい三人連れの女だつた。彼等は態と提灯を慶順達の方へ差しつけるやうにして、好奇心にみちた眼でじろじろ眺めて行つたが、十歩ばかり行過ぎると、急に高聲をあげて笑ひ崩れた。

「厭らしい女はん達どすなあ。」と智月はあとを振顧りながら呟いて、「何處ぞ人の來んやうな處へ連れていてお呉れやすな。」

だらだら下りの小徑はいつのまにか深い樹立の中へ入つて行つた。澱んだやうな白熱瓦斯の光が時々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

清水寺の石階の方からかすかに射して來たが、樹陰に遮られてそれも見えなくなつてしまうと、四邊を罩めた闇の底に、何處にか水溜りでもあると見えてひとしきり蛙の聲が寂しく聞こえて來た。

「こなとこへ一人て來たらどうどつしやろ。」と、智月は男の肩へ寄り縋るやうにして云つた。

「なんぼ氣のきつい男かて、一人やつたら恐いな。しかしかうして歩いてゐると世のなかのことも思ひ出さんて嬉れしいなあ。」

「ほんまに。」彼女は嗄れたやうな細い聲でやう／＼斯う云つた。

月が出たとみえて、四邊はぼうつと薄明るくなつて來た。そしてところどころの樹の間から蒼白い光が斑のやうに落ちて來て、夜露に濡れた木の葉が銀色にきらきらと輝いた。二人は小流れの岸にある株臺を見つけだして、その上にひたりと並んで腰を卸ろした。

「ほんまにひつそりした晩やな。風の音も聞えやへんと。」と、慶順は四邊をみわたしながら獨語のやうに呟やいた。智月はもう語り合ふ言葉もなくして唯ぼんやりと押默つて居た。

病的な發作がその時ふと彼女の心の底に燃え上つて來た。彼女の五體には俄かに惱亂する血の歡びが目覺めて、その激しい力はすべての感情の理性が皆一時に押流してしまつた。そして激しく戰慄しながら胸を絞られるやうな聲を出して頻りに噓唏きをしはじめた。そして突然ばつたりと倒れた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

歸途にはどつちから云ひ出すともなく、彼等は新高尾へ出て、音羽の瀧の傍から石階を上つた。

智月は眩めくやうな息苦しさに襲はれて、幾度か途中で躓きさうになつたが、漸う慶順の手に縋つて、疲れた脚を踏みしめながらのぼつた。

白熱瓦斯の蒼白い光に照された寺内はもうひつそりと靜まり返へつて、四邊には散歩がてらにさまよつて歩く人の影さへみえなかつた。彼女は明るい光のなかで慶順と顔を見合はせると、さつきの取り亂した自分の姿を思ひ起こして名狀し難い羞恥を感じたが、やがて眞蒼になつた顔を背けながら、ずんずん先へ歩いて眞暗な舞臺へ上つた。そして冷たい欄干に疲れきつた體をぐつたり凭かけて、眼の前に廣がつた果しもない夜の姿を眺めた。

すぐ眞下は何十仭とも知れない深い深い谿間で、一帶に濃く澱んだ暗闇の底には、茶屋茶屋の椽臺の緋毛氈が明るい燈の光に照らされながら點々とみえてゐる。そしてだらだら下りになつた鳥邊山の樹立の彼方には京の街が數多い灯の氈に飾られながらまるで光の海のやうに廣がつてゐる。更け靜まつた夜氣のなかには折々消魂ましく騷ぐ夜鳥の聲と、鈍い瀧の音の響いてゐるばかりで、劇的な夜の布置の底からは限りない寂しさがぞくぞくとして湧上つて來る。

智月はうつとりとした眼を据えていつまでもその光景を凝視してゐたが、今迄の酔ひ心地は漸次と燃え盡きた灰のやうにほろほろと崩れて來て、たつたひとりで立つてゐるやうな心寂しさが犇々と胸に迫つて來た。しまいには到頭耐らなくなつて、すぐ側に佇んだ慶順の方を顧りみながら

「何考へてゐやすの。何ぞ面白い話など聞かしとくれやすな。」

「別に面白い話もあらへん。」と、順慶は艶のない聲で答へて、大きく欠伸をしながら、「面白い話でも出來るやうやとえゝけどな。この頃のやうに氣を使ふことばかり重なつて來てはほんまにどないにすることも出來やへん。」

「さうどつしやろな。君千代はんのことも思はんならんし。……」

「君千代?」慶順は慌たゞしく聞き咎めて、「何云ふてんのや。君千代がどないにした?」

「よう知つてゐまつしやろ。あんたはんはほんまにあの藝妓はんを思うておゐやすさうなゝ。」

「阿呆らしい。あんな女を思うてどないにするのや。それをあんたは疑つてるのやな。」

「疑うちうこともおへんけど。……」と、彼女はふと云ひ澱んで、急に改まつた調子になりながら、「私さへお捨てしまへんなら、その藝妓はんの事なかんかなんぼお思ひやしたかてえゝけど……。」

「あんたも餘程阿呆やな。今時の男が藝妓なんかに惚れてゐたらあかへんやないか。」

「そやかて、彼方で思うてかゝれば、あんたはんの方かて仕様がおへんやないか。」

慶順は側を向いて態とらしくくすくす笑つた。

「まあえゝわ。それ位に思うて居れば罪がなうて宜しい。」と、暫らくの間、口を噤んでゐたがやがて急に聲の調子を落して、「そやけど私が今氣を使うてゐるのは、ほんまに女のことやないえ。實はな、秘密な話やさかい人に云うてくれては困るけど、私は少し寺の金を費ひ込んでしまつたんて、その始末に窮

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

してんのや、僅か八十圓ほどやけど出來んときはどないにしても出來んもんやさかいな。……」

「何てそないにお費ひやしたの。お遊び過ぎやしたんと違ひますか？」智月は驚きを抑へながら靜かに云つた。

「そなことあらへん。寺には寺の秘密があるもんやてな。」と、彼は何氣ない聲で靜かに答へた。

「ほんて、お金の出來る當てはついとすのか？」

「さあゝそれがついとするほどならえゝにやけど。」と、慶順は急に途方に暮れたやうな聲で呟やいて、

「今のところはとんと見込みがないてほんまにどないにせうかと思うてな、朝から晩までそればかり考へてんのや。」

そこへ石階の下の方から夜警の寺男が冴えた木柝を叩きながら上つて來た。そして提灯の火で彼等の方を迂散らしく眺めて居たが、その儘默つて奥の方へ立去つてしまつた。

「ほんまにそら困つたことが出來ましたな。」と、智月はそれを機に欄干を離れて、そろそろ山門の方へ歩き出した。

二人て手を執りあいながら更け靜まつた淸水坂を下りてゆく時、智月は一心になつて慶順を救ふ手段を考へてゐた。いろいろに思ひあぐんてはみたが、差當たつて今自分てそれだけの金を調達してやるよりほかに良い方法は見當たらなかつた。

愈々廣道の四辻て袖を別つ時、彼女は近いうちに必ず金の道をつけてやるからと云つて、頻りに彼を

慰めた。そしてたつたひとりて、いろいろと行末のことを思ひ悩みながら街路の面に蒼白く流れてゐる水のやうな月光のなかをとぼとぼと歩いて歸つた。

七

翌朝、五時を打つと、彼女はふと眼を覺ました。もう机の小窓には明かるい朝の光りが一杯にさしかゝつてゐる。ひどく寢過ごしたやうな氣がして、急いで飛び起きやうとしたが、手も脚もまるで腑がぬけたやうに疲れきつてゐて、どうしても起き上る氣になれなかつた。て、その儘隅の方に點つた行燈の向けた光をみながらぼんやりしてゐると、彼女の胸にはまた昨夜の事が自然に憶ひ起された。

かうした不健康な妄想に耽つてゐるうちに臺所では婢衆がごとごと戸を開ける音がして鷄が勢よく啼き出した。彼女は無理に起き上つて、手箱から揚子をとりだして、それを啣へたまゝ裏の井戸端へ出た。すがすがしい朝の日光が彼女には餘りに强過ぎるやうに思はれて、きらきら草葉の上に輝く露の玉をみつめてゐると、輕い眩暈が續けさまに彼女の腦底を通りすぎた。

冷たい水て顏を洗つてゐるうちに彼女は急に風呂へ入り度くなつた。一時も早く身體を洗ひ淨めてしまはなければ氣が濟まなかつた。て、そのまゝ婢衆から襷をかりて、裸足になつて、息を切らしながらひとりて浴堂の風呂桶へ水を汲み入れた。

早起きの庵主はその物音をきゝつけて濡椽へ出て來た。そして小窓から顏を出して、怪訝さうに彼女の容子をみながら、

「智月はん、何をしとゐやす？」と訊いた。

彼女はその聲ではじめて庵主のゐるのを知つた。と、その瞬間に火のやうに顔を赧めてどきまきしながら暫らくの間は返事をすることさへ出來なかつた。

「朝からそんなにお働きやすと、又體に障りますつせ。」と庵主は笑ひながら云つて、「何をおしやすの？」

「少し頭痛が致しますさかい、お風呂を湧かして入たらえゝかと思ふて……。」

「あゝ、さうか。そらすつぱりしてよろしいやろ。昨夜は何處へお行きやしたんえ？」

何氣なく聞く庵主の言葉が彼女の胸にはまるで針のやうに鋭く響いた。ど、妙に吶つた聲で、

「北野の瑞圓はんのとこまで參じました。」

「さうやつてたか。瑞圓はんの伯母さんはどないにしておゐやしたえ。もう少しはえゝ方におなりやしたかいな。」

「はあ、おほきにえゝたら云ふてゐられました。」と、彼女は口から出任せを云つた。

「あゝ、さうか。そらえゝ。業病やさかい、なほるちうことはおへんやろけど。……あんたも並の體やないさかい、餘り夜遲う歩かんやうにせんと可きまへんえ。ほんまに體ほど大事なものはないさかいな。」

庵主はその儘ごほごほ咳き入りながら奥へ入つて行つた。智月はぼうつとしたやうな氣になつて、智

らくの間じつとその後姿をみてゐたが、その額には汗が薄く滲んで來た。

水を汲み入れてしまうと、彼女は生木の煙に咽せながら自分で火を焚きつけて置いて、すぐさま庫裡へとつて返へした。そして手早く法衣を着て、妙眞達と一緒に本堂へ上つた。

本堂で朝の行儀がはじまる頃には、もう日の光が中仕切りの疊の上まで一杯に射し込んで來た。半ば日向へ出てゐる妙眞の毬栗頭の上で二三疋の蠅がせわしげに戯れてゐるのを見ても夏らしい氣分が自づと四邊に漂つて來た。彼女はいつものやうに佛前へ白蠟を點した。そして一握の香を香盤に盛ると、やがて緩かなその烟りは斜に日光のなかへ言ひ出して、妙眞が打つ磬子の音にゆれながら紫色の渦を卷いて立騰ぼつてゆく。彼等はそれとゝもに合掌して、滅入るやうに低く沈んでゆく鐘の音につれて、

「南無阿彌陀佛。……」と、慵げな調子で十念を唱へはじめた。もう長い間の習慣になつてゐるので、經文は型の如く口を衝いて出て來たが、智月にはその朝ほどすべての儀式が莫迦らしくみえたことはなかつた。そして同じ經文を口で誦じながら、彼女は矢張り慶順の事を思ひ出してゐた。

勤行が濟むと、彼女はその足ですぐ風呂場へ馳けて行つた。そして法衣をぬぎすてるとさも待ち設けてゐたやうに浴桶のなかへとび込んだ。

すぐ壁一重向ふでは婢衆が頻りに洗濯してゐたが、智月が水音をたてるのを聞くと、突如櫺窓へ顏をだして、

「まあ、まあ。お庵主はんかと思うたらあんたはんどしたえなあ。」と、呆れたやうに云つて、「若いお方

の朝湯はいきまへんえ。まるでお勸行のお念佛を洗ひ落してお入りやすやうなもんやおへんか。」正直な信心家の老婢は難ずるやうな眼眸をして彼女の裸形の姿をみつめた。

智月は唯笑つて答へなかつた。温い湯に肌を浸しながら、井戸端の荒園に咲きこぼれてゐる眞紅な石竹の花をみてゐると、彼女の心には又昨夜のことが鮮かに映つて來た。そして澄んだ青白い水のなかに柔かな四肢の膚がいかにも生々しく浮き上つてゐるのをみると、耐らなく嬉れしくなつてじつと乳房を抱きしめて。うつとり限りない快感に浸つた。

そのうちに彼女は又ふと昨夜慶順に約束した金策のことを思ひ出した。あの男一人を買ふためには何んな犧牲も惜しくないとは思ふものゝ、三十錢。一圓。五十錢。と僅かな高を漸次と貯めて行つた勞苦を思ふと、彼女には八十圓と云ふ金が非常に大金であるやうに思へた。何か別にいゝ方法があれば、といろいろに手段を講じてみたが、格別これと云つて頭へは浮んで來ないので、彼女はそのまゝちやぼちやぼ洗濯する音に耳をとられながらうつとり體の處置に困じてゐた。

晝過ぎになつて、彼女の心は漸う定まつた。慶順の心を購ふために彼女は貯金のなかゝら五十圓だけ引出すことにした。

河原町まで買いものに行つて來ると云つて、彼女は庵を出た。丁度白晝のぎらぎらした日光が街路の面から眞白に照りかへされて來るなかを、汗みづくになつて急ぎながら、彼女は三條にある銀行へ行つた。そしていろいろな豫期や、恐れにふるへながら手續きを了へて、漸う五十圓の紙幣を手に握ると、

その儘心も空虚になつたやうに路を急いて古門前の廣道から小堀の例の家へ驅けつけた。そして老婆に賴んで慶順を招んて貰つた。

慶順が來たのはそれから二時間ばかり後のことてあつた。常になく背廣服を着て蒼ざめた顏には何か深い憂慮が彼を苦しめてゐるやうな色が浮いてゐた。待ち草臥れてゐた彼女は云はうと思つて考へて置いた事も打忘れて、突如彼の側へ摺寄つて、今取つてきたばかりの折目のない五圓紙幣て十枚ばらばらと眼の前へさらけ出した。

そして息づまつたやうな聲て、

「こんだけ、こんだけ出來ましたから……」異常な感動は彼女から言語の自由を奪つてしまつた。

慶順は呆れたやうな顏をしてまじまじとその樣をみてゐたが、やがて態とらしい驚きかたをして、

「こないな金何處から持つて來たんや。」

「何處やてえゝやおへんか。私かてこれぐらゐなお金なら持つとりますがな。」智月は嬉れしさうに笑い崩れながら誇りをみせて云つた。

「そやかて、妙やないか。五十圓ちう金は大金やぜ。」

「私の貯金のなかゝら出して來たのどす。」

「さうか。ほんならえゝけど。」と、慶順は眼を輝やかしながら紙幣の方をじつとみてゐたが、やがて何と思つたか、「しかし、まあこの金は借りんとおこ。何處ぞへ取つて置いてんか。」

「何てどすね。」

「何んてちうて、前のもまだ返やさんしな、なんぼ私が厚顏しいかて、そないに何遍も不義理なことな事が出來るか。」

「水くさいことお云ひやすな。困る時は誰かて困るのやおへんか。」

「なんぼ困つたからて、そら身から出た銹や。人に迷惑をかけて、自分ばかりえゝ目に逢うたら、義理知らずやないか。」

「堅いこと云はんとお措きやすな。ほんまにあんたはんが惡いのなら兎も角、寺の爲めにおしやした事やないか。折角かうして取つて來ましたんやさかい、どうぞこの儘御用に立てゝお呉れやすな。」智月は稍々失望の色を動かしながら云つた。

二十分計りの間、押問答ともつかず、口説ともつかぬ云爭ひをした揚句、慶順は一先づその金を借りることに納得した。衣嚢から小さな女持ちの財布とりだして、それへ紙幣を入れながら、彼は言葉とはまるで反對な嬉れしさうな容子をして頻りに禮を云ひ續けた。

七時を打つと、彼等はそろそろ身仕度をして、小堀の家を出た。

はじめて男と膳を並べて煮ものゝ鍋をつゝいたことが、智月にとつては忘れられないほど樂しかつた。すゝめられるがまゝに思はず二三杯の酒まで飲んだので、狹い小路から四條の大通りへ出た時には、四邊が夢のやうぼうつと霞んでみえるほどの醉いが彼女の頭へ上ぼつて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

矢鱈に嗅いてみたいのを强ゐて抑へて、彼女は慶順から少し離れて歩いた。けばしいイルミネーションに飾られた四條の橋詰めまで來かゝると、彼女はもう抑へきれないと云つたやうに浮々した聲で、

「京極へいて、活動寫眞みまへう。」と、せがんだ。

慶順はとつてつけたやうににやにや笑ひながら彼女の頭をみてゐたが、

「餘り人目に立つやないか。あんたがよろしけりや行てもえゝけど。」と、氣のなさそうな聲で云つた。

「そなことあらしまへん。あんたはんは服を着とゐやすやないか。なんぼ密着いて歩いたかて、怪體にみえやしまへんがな。」

「ほんなら行こ。」と、慶順は口では器用に云つて、緩い足調でぶらぶら歩き出したが、「そのかはり今夜は九時になつたら往なして貰ふぜ。ちよいと用があるて、三本木まで行て來んならんさかい。」

二人はその儘、四條の假橋を渡つて、巨大なアーク燈の光とカンテラの油烟のなかでせつせと夜業を續けてゐる橋脚工事の光景をみながら漸次と四條通りを西へ歩いて行つた。出來上つたばかりのデパートメントストアのけば〱しい店飾りや、新柄を陳列した呉服店の飾窓や、蓄音器をやつてゐる時計屋、さうした人眼を惹くところでは必ず足を止めて、勝手な笑談を云ひ合ひながら商品の品評めなどをしたりした。と、ある化粧品店の前へ來懸つた時、明るい飾窓のなかに京風に結つた舞妓の鬘がいくつとなく飾つてあるのをみると、智月は浮々した扮り聲て、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あれ買うとくれやすな。私、あれをすつとから被つてな、えゝ着物きて、長帶をだらりと締めて、いつぺん町を歩いてみたいわ。」と云つて、崩れるやうな笑聲をたてた。周圍にゐた三四人の女連れは怪訝な顔容をしてじろじろ彼女をみた。

慶順はその度外れな笑談を聞くと、急に厭な顔をしてつかつか歩き出した。智月はすぐまたその後に追ひ縋つて、丁度地下線を埋設したばかりの凹凸のはげしい泥濘路へ來かゝると、態と、「おゝ、恐わ。」と、云ひながら幾度か慶順の肩へしなだれ寄つた。その都度彼はそつと傍を向いて、頻に唾を吐いた。

宵の口なので、京極は丁度人の出さかる最中だつた。兩側のせゝこましい店々には電燈や、白熱瓦斯が眩ろしいほど明るく照り輝いて、小兒の喚く聲や、物を煮る匂ひの暑苦しく立罩めたなかを、ネルや袷の身輕な扮裝をした群衆が眞黑になつてぞろぞろ往來してゐる。軒から軒へ釣り渡された日蓋ひは大方兩方へ引かれて、低い家並の上には白堊建の活動寫眞館の表懸りが掩ひかぶさるやうに高く聳えたつてゐる。軒先から破風まで一面に點じたイルミネーシオンが消えたりついたりする度にしつきりと劃られた四邊の空が、まるで息をしてゐるやうにぼうつと明暗する。毒々しい色彩を施した繪看板は白熱燈の青白い光のなかに極めて不自然な色調をみせて、明るい出入口や、切符賣場には群衆が立ちかはり入換り呑吐されてゆく。軒を連ねた其他の劇場や、寄席などは丁度前世紀の遺物でもみるやうに暗く、悲しげな色に掩はれて、すべてを押し流してゆく時代の潮流がこの不格好な怪物のやうな建物にのみ幸し

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐるやうにみえた。

「闇と光」「トム君の旅行」など、成る可く人目を聳動させるやうに書き連ねられた表看板をみると、智月は自分達の知らない他界の消息が漏れ聞えて來るやうな氣がして、賑やかな樂隊の響とゝもに胸は強く躍つて來た。

「入りまへう。入りまへう。」と、彼女は肱で煩さく慶順の脇腹を衝いたが、しまひには到頭我慢しされなくなつて、千代田館の前まで來かゝると彼女はついと慶順から離れて、切符賣場へ行つて、自分の手で特等を二枚買つてしまつた。そして氣の乘らない顏をしてゐる慶順を引立てるやうに促したてゝ中へ連れ込んだ。

下足を預けて、ニス塗りの階段を上つて、給仕に案內されながら特等席へ入つた。丁度映寫中だつたので四邊は人顏も見分かぬ暗闇て、むつとするほど蒸し暑い人蒸息が何所からともなくさつと顏を打つ。そしてどの席もどの席も大入りらしく、咳嗽をする聲や、こそこそ呟く聲が鈍い響轟をつくつて場內に溢れてゐる。

舞臺の白幕に映つてゐる寫眞は西洋種の滑稽ものだつた。ビール樽のやうに肥へ太つた紳士が自働車に乘つて駛つてゆくうちに種々失敗を演ずるといふやうな筋だつた。そして蒼白い靄のやうな光の漂つた舞臺の片隅にはフロックコートを着た若い辯士が突立つてゐて、嗄れた聲を振絞りながら頻りに筋の說明をやつてゐる。そしてその說明と、寫眞の中の人物の誇張した仕草とがぴたりと一致すると、觀客

席からは崩れるやうな笑聲や拍手の音が湧き起つて、喧噪は嵐のやうに場内の空氣を攪亂する。

智月等の座席のすぐ前には藝妓や舞妓らしい女が五人ほど一塊りになつてきやつ〳〵騒ぎながらみてゐた。客にでも連れられて來てゐるとみえて、若い男の聲が頻りに種々な取留のない笑談を云つては彼等を笑はせてゐる。その歯切れのいゝ東京辯をきくと、彼女は何だか聞き覺えのあるやうな氣がしたが、そのうちに我知らず映畫の面白さに引入れられて、慶順の手を固く握りしめながら舞臺の方へ氣を取られてしまつた。

自働車が壞れて、紳士が跛をひきながら河のなかゝら匍ひあがつて來るところで終りになると、場内には明るい電燈が一時にぱつとついた。とみるとすぐ前には美しい舞妓の髮や、衣裳が花叢のやうにかたまつて、その前には若い藝妓の島田と、ソフト帽を被つた男の頭と、仲居らしい女の丸髷が行儀よく一列に並んで坐つてゐる。その中の藝妓の一人はやがて舞妓に何か話しかけやうとしてふと後を顧みたが、その途端吃驚したやうに眼を瞬つて、慶順の方をみあげながら

「あら、勝野はん。」と、小聲で叫んだ。

その聲に誘はれて、皆一齊に顔を振り向けて慶順の方をみた。ソフト帽を被ぶつた男はいつぞや都踊りで彼と一緒に見懸けた連の男だつた。

「よう。勝野君か。」と、その男も意外だと云ふやうな顔容をしながら、にやにや笑つて、「ひとりかい？」

「うん。」と慶順は少し顔を赧めながら煮え切らない返事をして、「實は今日是非君を訪ねんならんと思ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐたんやけど、少し用が出來たもんやさかひ……。」と、辯解らしく云つた。

「さうか。一昨日の話ぢや今朝來るつて云ふ事だつたから晝まで心待ちに待つとつたんだ。……それて一件の方はどう定まつたい？」

「實はな、そのことに就いて話さんならん事が澤山あるのやけど、」と、四邊を偸み見ながら、云ひ憎さうに口だけて微笑んでゐたが、やがて何と思つたか急に流暢な外國語てべらべら饒舌り出した。

　連の男は舞妓の肩越しに彼の方へ顏をつき出して、簡單な語て受答へしながら聞いてゐたが、話が入込んて來ると聞き取り憎くさうに何度も何度も問ひ返へした。そして折々好奇心に充ちた眼て智月の方を偸みみたり、にやにや意味ありげに笑つたり、呆れたやうな妙な顏容をしたりするのて、それを瞻つてゐた舞妓達は到頭我慢しきれなくなつたとみえてクスクス笑ひ出した。

「怪體なことお云ひやすな。もうそんな異人はんの眞似せんとお措きやすな。」と、ながて一番小さいのが云ふと、今度は大きいのが、

「あんな異人はんの言語使ふて、あてえらの惡いこと云ふてなはんのえ。よう聞いとゐてやす。フールちうことよう云ははるやろ、あら阿呆ちう事やわ。此間大學の學生はんに敎へて貰うた。」

「さうか。阿呆ちうことか。ほんまにいけずやな。」今一人の舞妓は眼を圓くして二人の顏を見較べた。

　漸う話の要領を得たらしく、連れの男は凡てが決定したと云ふやうに

「それてはさう決めてしまひ給へ。さうなりや一刻も早くその手段にとり掛らんと時機を失するぜ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「もう德義ちうやうなものには構うとられやへん。どうてどないにして暮らしかて一生やさかいな。」と、慶順は頰の邊に非常な興奮をみせて云つた。そしてもう一語强い調子の外國語て云放つと、彼は急に調子のはづれた聲てゲラゲラ笑ひ出した。

消魂しい呼子笛が鳴つて、次の日本物の悲劇「戀と戀」の映畫が映り出した。妓達は急に饒舌をやめて舞臺の方へ眼を落とした。そして漸次と筋が運んてゆくうちに彼等は辯士の巧みな聲色にひき入れられて、悲しげに鼻を啜りはじめた。

智月も一心に舞臺を瞻めてはゐたが、もうその時は彼女には殆んどそこに何が映されてゐるのだか分らなかつた。慶順と連れの男との間に交はされた會話が一々謎のやうになつて彼女の心の底に旋轉して來た。そしてともすると、それが彼女自身と深い關係を持つてゐることのやうに思へて來て、外國語て語られてはゐても、何となくその語勢て、內容が朧ろげに分るやうな氣がした。

「私をどないにせうちうのやろ。」と、彼女は暫らくすると心の底て拗ねるやうに叫んて、薄暗のなかにぼんやり輪廓だけみえてゐる慶順の顏をぢつと睨みつけてゐた。と、その顏は時々すぐ前に坐つた舞妓の方へ近づいて行つて、いつの間にかその髮の陰へ隱れると、何をするのか、舞妓は少しづゝ頭を左の方へ傾しげて手てそれを振り拂はうとする。そして小聲て笑ひながらひそひそと何やら呟き合つてゐる。それをみると智月は何とも知へぬ不快な氣に打たれて、突如慶順の手を强く强く引いた。そして人目も構はず、彼の耳へ口を持つて行つて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「出ませう、出まへう。」と、呼いた。
慶順はそつと智月の手から自分の手を自由にしながら、
「これが済んだら。」と、不機嫌らしい聲で呟いた。
その映畫が終ると、慶順は先へ立上つて、
「それぢや僕先へ歸りますわ。」と、連れの男の肩を叩きながら云つた。
「なんだ。まだいゝぢやないか。一緒に歸らう。どうせ今夜すつかり話をつけて置かなくちやならんのだから。」
慶順は智月の思惑を憚るやうに又外國語で話しはじめた。そして今度は妓達の方に向きながら、
「あんたがたは此れから眞直に宇津木へ歸へるのか？」
「いや、今夜はみんな僕の家へ連れて行くんだ。もう京都も愈お名殘りになつたから、一晩面白く遊ばうかと思つてるんだ。」
「そらえゝな。ほんなら誰てもえゝ、彼處な、分つてるやろ。」そのなかの藝妓の一人に眼配ばせしながら、「あすこへ電話かけて知らしといてんか。柴田はんからよう聞いてな。」
「おほきに。よんべもな、月花樓てきつう醉うてあんたはんの事云ふてやはりましたえ。なにもそないにいはんかて、もう譯の分つてる事やしなあ……。」と、隣りに坐つた藝妓に同意を求めるやうに云ひかけると、

「そや、そや。ほんまにきつい氣やな。あの人のしやはることはまるで狂氣どつせ。……ほんまに貴方はん罪なお方やな。」二人は責めるやうに云つた。

「そやかて仕様がおへんやないか。私が惡いのやないて。」と、慶順は態と眞面目な顔で云つて、その儘、連れの男と眼でものを云はせながら、出口の方へ出て行つた。

「さいなら。さいなら。」と、妓達が笑談半分に挨拶するなかを、智月は顔を赧めながらすつと立上つて、遁げるやうに慶順の後に引添ふて行つた。

八

三條小橋まで來ると、彼等は約束どほりに別れなければならなかつた。今一時間ばかり一緒に歩き度いと云つて、智月は眼に涙を浮かめながら哀訴してみたけれど、慶順は承知しなかつた。是非とも今夜三本木へ行かなくてはならないと云ひ張つて、どうしても聞かなかつた。しまひには別れを惜しむ餘りについ氣に障るやうな厭味や、口説も出て到頭お互に氣拙い思ひをしながら、

「さいなら。」を云ひ交はした。そして慶順は一刻も早くこの執拗な女の手から遁れたいと云ふ風に、足早に川添ひ道の闇に紛れてしまつた。

智月は長いことしよんぼり立ちすくんでその跡を見送つてゐた。彼女には彼が三本木へ行くことがどうしても眞實とは思へなかつた。必ずもう一度この道を引返へして、活動寫眞館へ歸るか、木屋町へ泊つてゐると云ふあの連れの男の處へ歸るに違ひない。そしてあの美しい舞妓や、藝妓に圍繞されなが

ら、殘りの夜をどんなに樂しく、どんなに華やかに暮らすであらう。さう思ふと彼女は俄かに胸を搔き捗られるやうな妬ましさを覺えて、

「もうあんな薄情な人には逢ふまい。」と、涙聲で繰返へしながら、再びもと來た道を步み歸つて、京極の熱閙のなかへ入つた。そして今度は晴れがましい燈の光を避けて、夷座の角から裏寺町の方へぬけた。

明るい京極のイルミネーションの殘映は何處からともなく流れて來て、片側に建ち續いた寺々の土塀の面にぼうつと立淀んでゐるやうにみえた。その癖道は殆んど足元も見えぬくらいな濃い暗闇で、他の片側には席がしと拙い文字で書いた小行燈を出した家がとびとびに二三軒づゝ並んでゐる。時々京極の方で賑やかな樂隊の響が起るかと思ふと、ひつそりと靜まつた寺の土壁の内側からは濕つぽい陰鬱な鐘の音が滅入るやうにひゞいて、熾んな歡樂境の光が時々時間的に息する度に土壁の後から先だけ出てゐる卒塔婆が白く浮き上つてみえる。そしてこの不思議な對照をもつた、町の暗闇のなかには幾組となき男女の群が三々五々步いてゐた。智月はさうした人達に出逢ふ每に態と道を避けもせず、こつちから喧嘩を賣るやうに肩を怒らかして步いて行つた。

漸次と道が捗つてゆくうちに彼女は譯もなく悲しくなつて來た。と、活動寫眞館のなかで聞いた連れの男との會話が急に再び耳の底へ歸つて來て、今何かしら重大な事件が慶順の身の上に掩ひかゝつて來てゐるのではあるまいかといふ疑がふと、彼女の胸に湧起つて來た。英語で話し合つてゐた彼等の顏容

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

には確かにたゞならぬ氣勢があつた。

「もう德義ちうやうなものには構うとられへん。どうてどないにして搾したかて一生やさかい……」

と、云ふ言葉が彼女には最も暗い意味をもつて響いて來た。もう私は此の儘捨てられてしまうのではあるまいか。そしてそれと同時に、慶順の身の上にも恐ろしい不祥事が起つて來るのてはあるまいか。と、思ふと彼女は何とも知れず口惜しくなつて、今迄賴みにしてゐたすべての事がみんな悲にもつかぬ惡夢のやうに思へて來た。そして態々自分から眞闇い道を選つて步きながら、彼女は幾度かそつと淚を押拭つた。庵へ歸り着いたのはもう十時に近かつた。

半ばかけた月は漸う東山の上に姿をみせて、靄のやうな淡い光は露に濡れた前庭の面にぼんやりたち迷つてゐた。彼女はその儘本堂へ上つて、人氣のないところて思ふさま泣いてみたかつたので、敷石づたひに長廊下へ出て、足音のせぬやうにそつと階段を上つた。

本堂はまるて地獄のやうに暗かつた。庇間から障子の上へ落ちてくる月光が僅かに須彌壇のほとりに夢のやうな薄明を漂はせて、そこにある金具はちらちらと冷たく光つてゐる。彼女は每日自分が坐る鏡張りの上に突俯して、暫らくの間いろいろな取留めのないことを思ひ盡してゐたが、そのうちに漸次と頭が惱亂して來て、淚は跡からあとから眼蓋を衝いて溢れて來た。しまひに自分でも制御することが出來ぬほど興奮してきて法衣の袖を强く强く噛みしめながら嗚咽を抑へた。

その時、何處からともなくひそやかな足音が聞えて來た。丁度柔かな嘆息がこそりとも音のせぬ夜の

闇にしみいるやうにそのもの音は漸次と近寄つて來る。と、やがて腰高障子の向側で、急に爪を掛けるかすかな音がして、にやあにやあと悲しげになく小猫の聲が聞えてきた。彼女はそれを聞くと口もきけぬほど激しい戰慄に襲はれて、突如泣き聲を止めて、顔を振りあげた。そして手探りにマッチを探して、夕方の勤行の時消し殘して行つた小柱の陰の燭臺に火を移した。

四邊がぱつと明るくなると、彼女の眼の前には不可思議な光景が展けた。半ば照らし出された夜の闇の底には龕の中の煤ぼけた黄金佛や、蓮坐や、燭臺や、小さな天蓋の瓔珞が一時に異樣な、深い深い陰影に隈どられたまゝ浮き上つて、黝んだ猖々緋の磬子敷が血のやうに滴つてゐる。柱の陰にはそれとゝもに眞暗な陰影が末廣がりに幾條となく倒れて、白蠟の火の搖れる度に四邊には空氣が皺だむやうな氣勢がはしる。ひつそりした沈默のなかゝらは嘆息のやうな香の匂ひが森々と湧いて來る。彼女はその光景を眺めてゐるうちに再び何とも知れぬ戰慄が襲ひかゝつて來て、そのまゝぢつと立ち悚んだ。そして椽端でなきしきる猫の鳴聲が神經の尖端に針をうつやうに鋭く響いて、疼くやうな惡感が頻りに胸に迫る。その猫がもしこつそり忍び入つて來て白い柔毛を自分の足に摺りつけたらと思ふと額には自ら冷汗が流れて來た。

その時、ふと庫裡へ通ふ門をぎいつと重々しく開ける音がした。と、誰かしら聞き馴れた聲が、

「そんなら又そのうちに一遍寄せて貰ひますわ。どうぞお歸りやしたら宜しう云ふてお呉れやす。」

「もう少しお待ちやしたら歸られるやろうと思ふてますが……餘り遲うなつても道が遠いさかいな。」そ

れに答へる妙眞の太い聲が聞える。
「おゝ、ほんまに美え月や、これなら提打も何も要らしまへん。嵯峨は夜露がえらいさかいな、夜はよう歩きまへんもんやて。……」
二人はごとごと小聲て話しながら石舗きの道を寺門の方へ出て行つた。足音が漸次と遠くなるに從つて、智月にはその聞き馴れた聲の主が北野の奥に庵寺をもつてゐる瑞圓だといふことがはつきり分つて來た。尼僧黌時代からの友て、淨土宗の尼僧中て最も美しく、最も多才な女てあつた。彼女はその懷かしい聲を聞くと、堪らなく悲しくなつて、後を追ひ驅けて行つて逢はうかとも思つたが、もう鬱しきつた心と體が云ふことをきかなかつた。て、その儘、障子際まて匍ひ寄つて、そつと二寸ばかり細目に開きながら戸外を見た。
月は丁度庭先の木立の上にあつた。蒼白いその光は水のやうに澄んて、前庭の平石や、萩の叢のうへに薄明るく淀んてゐる。二人の尼僧は同じやうに青い頭を並べながら石舗きの道を漸次と一つ一つひろつて出て行つたが、寺門の邊まて行くと、又立止まつて、叮嚀に挨拶を交はした。そして瑞圓はそのまゝ五條の方へ歸つて行つた。
妙眞は暫らくの間そこに佇んて瑞圓の後姿を眺めてゐるらしかつたが、やがて後を振向いて、さも力を落したといふやうにそつと歩を運んだ。本堂の入口まて來かゝると時ならぬ燈火の光に熊ろかされたのか彼女は急に立止まつて怪訝さうに此方をみつめてゐたが、やがて咳のからむやうな低い聲て、

「誰どす？　灯をつけたのは誰どす？」と、呼んだ。

智月はこれを聞くと、五體が攣縮するやうに思はれて、激しい戰慄が又襲ひかゝつて來た。

「智月どす。」と、小聲て呟いて、その儘そつと鏡張りの方へ匐ひかへつたが、冷汗は頻りに額に流れて、穴にでも隱れてしまひ度いやうな心弱い惑亂が彼女の全心を包んだ。

「誰どす。」と、妙眞は聞きとれなかつたとみえてもう一度呼びかけながら本堂の階段をのぼつて來たが、障子を開けると、急に吃驚したやうに聲の調子をかへて、

「まあ、智月はんどしたか。いつお歸りやした？」

「いまちよつと前に。」と、智月は消え入るやうに細い聲て呟きながら深く首垂れてしまつた。

「さうどつか。實はな、今夜は北野の瑞圓はんがおいてやしてな。何やしらんあんたはんに是非逢はんならん用があるちうてな、ほん今まで待つておいてしたえ。私今お往にやすのを送つて來たところやさかい未だそんなにもお行きいしまへんやろ。ちよつと驅けていて、さう云うて來まへう。」と、妙眞は氣輕に後を振返へつて出て行かうとしたが、智月はそれを見ると何とも云へぬ煩はしい氣がして、突如

「あゝ妙眞はん、もう行かんと措いてえなあ。用ちうのは分ててますさかい」。と叫んだ。

「さうどつか。ほんなら措きまへう。」と、彼女は不服らしく云つたが、今度はつかつか智月の傍へ歩み寄つて、鏡張りの上へばたりと腰を卸ろした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

異様な沈默は又本堂の隅々まで甦へつて來た。白蠟の瞬く光は深い不安を彩るやうに四邊の空氣を明暗させた。妙眞はその様をじつとみつめながら妙に口を噤んでゐたが、やがて周圍に氣を兼ねるやうに臆病な眼眸でそこらを見廻はしながら急に眞顔になつて、
「なあ、智月はん、あんたはんは山の慶順にお金をお貸しゝまへんどつか？」
智月は思ひがけないその問ひに驚いて、また胸を彈ませながら、
「いゝえ、そんことあらしまへん。」
「さうどつか。ほんならえゝけど。」と、妙眞は落膽したやうに嘆息をついた。そして何時にないしんみりした聲で、「實はな、私少しばかりあの人にお金を貸したのつせ。困つといやして餘りお氣の毒やさかいな、私たちて出來るだけなら融通して上げとことと、こないに思ふてな、十五圓ほど、貸して上げたのつせ。ところが今夜瑞圓はんの云はゝることを聞くと、あの慶順はんちう人はえらい惡やてな。私もうほんまにどないにしたらえゝや知らんと思ふてますの。」
妙眞は急に調子を落として涙聲になつた。
智月はそれを聞くと、自分の體に鋸を當てられるやうな氣がして、
「瑞圓はんは何て云はゝつたんどす？」
「いえ、なあ。まあ、聞いとくれやすや。慶順はんはなあ、祇園町の藝妓はんにきつう惚げはつてな、山のお金を千五百圓ばかり費はつたのどすて。ほんてなあ、その尻拭をしやはるつもりで御用商人と棒

組んで惡い惡い事をしやつてな、もう本山には居られんのどすて。」
智月は思ひがけない妙眞の言葉に先づ胸を壓し潰ぶされてしまつた。まさかそんな譯はあるまいと幾度か打消してはみたが、種々の出來事を思ひ合はせるとその眞實さが却つて明瞭になつて來るやうな氣がして彼女は氣が狂ほしくなるほどの激しい衝動を感じた。そして氣休めのやうに、
「ほんまどつしやろか。私まさかそな事はあらしまへんやろと思ひますけど。」
「いえ、まつたくほんまの事どつせ。御庵主はんもその事をきつう云ふてはりました。もう山ではえらい評判やさうにおつせ。」
「そやかて、あの人がそんな惡やとは思へまへんがなあ。……」と、智月は白蠟の焔をみつめながらわなわな慄へた。
「みんな自分が惡いのやさかい、仕樣がおへんけど、私口惜しうてな。お金はもう要らへんけどこないにきつい目に逢はされたのが。……」妙眞はくどくどと愚痴を零しはじめたが、漸次と聲は低く沈んで行つて、到頭しまいには泣き聲になつてしまつた。
智月は妙眞の話には耳をかさず、唯自分の胸に限りなく浮き上つて來るさまざまな疑ひをみつめてゐたが、そのうちに感情が急激な變調をなして來て、彼女は唯ひた泣きに泣きだした。ひつそりと更け靜まつた本堂の空氣には吃逆のやうな嗚咽が響いて、何處となく暗い物陰からその聲とゝもに深い悲しみが洪水のやうに湧き上つて來るやうに思はれた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九

翌日、彼女が智恩院の石段を登つて行く頃にはもう眞夏を思はせるやうな明るい日射しが眞白に石の面に燃えてゐた。彼女は額から玉のやうな汗を滴らせながら、それでゐて四肢には小刻みな戰慄がはしるほどの惡寒を感じてゐた。頭腦はもう一夜の不眠のために散々に攪き亂されて、時々昏醉に陷つてゆくやうな眩暈を覺えた。

智恩院の廣庭は參詣人の影も薄く、何處をみても强い强い日光が陽炎のやうに燃えてゐた。その靜けさのなかをたつたひとりで歩いてゆく時、彼女の心にはもう何の不安もなかつた。唯慶順に一目逢つて、思ふさま今の苦痛を訴へてみたいばかりてあつた。

涼しい風の通して來る大前て型の如く禮拜を濟ますと、彼女はその儘奥へ通つて、案內人の溜りへ行つた。そして兼て見知り越しの案內の老爺に賴んで、慶順を呼び出して貰つた。そして返事の來るあいだ柱の陰に腰を卸して待つてゐた彼女の周圍には地方から參詣に上つて來た質朴らしい老爺の群が來た。それから又奇怪な風姿をした西洋人の群が來た。それ等の人々に圍繞されたまゝ、彼女は胸をふるはせながらうつとりしてゐると、突如後から彼女の肩を叩いて、

「智月はんやないか」と、呼ぶものがある。ふと、振顧へると、其處には慶順達と同役の僧侶が四人ばかり勤行にでも上ると見えて、美しい袈裟をかけて立つてゐた。そして一齊ににやにや笑ひながら、

「御參詣かな?」

智月はそれを聞くと我にもあらず、顏を眞紅にして、

「は。」と答へて側を向いてしまつたが、その次の瞬間に自分でも驚くほどの大膽さが歸つて來ると、彼女は急に又彼等の方へ顏を振り向けて、

「あの勝野はんはゐやはりますか？」

「勝野君か？」その中の一人は驚いたやうな顏をしながら智月の顏をじつと見つめて、「勝野君は相憎昨日からまだ歸つて來んてな。又山門下へでもいて沈沒しとるのやろえ。」と、嘲けるやうに云つた。

それを聞くと、彼女は急に甚だしい失望を覺えて、いらいらするやうなもどかしさを感じた。て、その儘案内人の返事も聞かずに廣椽を下りて、又山門の方へ歩いて行つた。

山門を出ると彼女は何處へ行くと云ふ當もなく唯足に任せてぶらぶら歩いて行つた。眞蒼な新綠の色に掩はれた圓山公園の樹立には、扇子を使ひながら休んでゐる人の姿が多かつた。そしてもう處々に氷店が出て、花の去つた五月の慵さが何處にも一面に展がつてゐた。彼女はそのなかを通りぬけて、八坂神社へ降りる鳥居口まで來ると、疲れきつた彼女の心はふとそこにゐた手品師の曲藝に惹かされて、思はず立止まつた。

それは旅から旅へ流れて歩く醜い一群の藝人だつた。十七八才の男の兒を頭に五才位までの男女の小兒が僅かな觀客に圍繞されながら倒立ちやら、足藝やらを演じてゐた。汗に塗れた穢ら衣を着た娘達は破れかゝつた三味線や、太皷を打鳴らして、頻りに曲藝に氣合を入れやうとする。併し演ずる者共は觀

客が少ない爲めか妙に氣ぬけがして、愚鈍な顏に怖い表情を浮べながら同じものを幾度となく繰り返してゐる。そして紅や、青のけばけばしい、色彩のはげかゝつた彼等の襯衣はいつのまにか汗に濕つて、その手足は折々弱々しく打慄へた。

彼女はじつとその群をみつめてゐるうちに何とも知れぬ悲しさが胸に湧いて來た。かうした果敢ない業に生活のたづきを求めて生きてゆく人達と、香の匂いにひたりながら生きてゆく自分との間に横はつてゐるさまざまの運命やら、因緣やらが深い深い意味をもつて眼の前に描き出されて來た。と、彼女は今自分丁度高い高い尖塔の上に立つてゐるやうに思はれて來て、信仰と云ふよりも佛の嚴かな敎訓が今更らのやうに思ひ起された。そして慶順のことを顧みると、絕ち難い煩惱の念はありながら、急にその凡ての出來事が恐ろしく、煩はしくなつて來た。彼女は長いことぼんやり佇んでゐた後、財布のなかゝら五十錢の銀貨をとり出して、金を集めに來た女の兒にやつた。そして怪訝な顏をして見送る彼等の表情をみると、彼女は何とも云へぬ喜びを感じながら又とぼとぼと步いて行つた。

それから一時間ばかり後に彼女はひよつくら小堀の例の家へやつて來た。

いつもならば格子をあけるとすぐ飛んで出て來て、愛想よく迎へる老婆がその日はどうしたものか、ひどく浮かない顏をして出て來て、唯口だけて、

「お越しやす。」と云つた。

根底まで沈鬱になつた彼女はそれをみるとまるで當がはづれて、耐らなく寂しい氣がしたが、やつとそれを抑へて、

「勝野はんはお出てしまへんか？」

「いゝえ、今日はまだ。なんてもお晝過ぎにおいてやすさうに申してゐられましたが。」

「もうお晝過ぎてますすな。どこへ行かはつたんやろ。」と、彼女は首を傾けながら考へるやうな風をしたが、やがて、「えらい濟まんことゞすけど、どうぞお宅で待たして貰い度いのどすが。」と、云ひ澁りながら云つた。

老婆はたゞ默つて奥へ入つて行つた。

彼女はその儘、なるべく足音のしないやうに階段を上つて二階へ行つた。そして坐りなれた隅の方の柱の前へ、坐布團も敷かずに坐つて、穢らしい天井板をみつめながら時の移るのを待つてゐた。

暫らくすると、階段をみしりみしりと踏む音がして、老婆が茶道具を持つて上つて來た。そして赤くなつた番茶をすゝめながら思惑ありげに彼女をみて、

「昨夜はあれから何方へお越しやした？」と、尋ねた。

「あれから四條へ行て、別れました。」

「さうどつか。それてはよんべあんたはんはお寺へお歸りやしたのどすな。勝野はんはどないにおしやした？智恩院はんへお歸りやしたんどつしやろな。」と、老婆は探るやうな眼眸をして、彼女の表情を注視

した。

智月は何かて壓し伏せられてゐるやうに云ひ淀んで、

「どうや知りまへん。實は今日是非逢い度い用が出來ましたさかい、今一寸山へ上つて聞てみましたが、ゆうべから歸らんちうてな……。」

「よんべから。怪體な方どすな。どこへ行といてやすのやろ。私も是非今日お目にかゝつてお願ひせんならんことがありましてな……」

老婆はその儘妙に押し默つて疊の上にちらちらさしかゝつて來る日光を眺めてゐたが、急に思ひ切つたやうに口調を改めて、

「ほんまはな、かうなんどつせ。私もこないにして息子をお山へ上げてありますてな、始終何やかと御厄介になるのやさかい勝野はんのお世話もせんならんと思うて隨分そら出來ん工面もして盡して居りましたんどつせ。はじめはこの部屋だけ貸してんかちはゝるもんで、宅ではな、どうて明いとるもんやさかい、こないな穢いところでえゝならちうてお貸し致して居りましたんえ、するとなそのうちにいろいろな女子(をなご)はんは連れといてやす。婆、酒とつてんか。肴買うてんかとそらやかましう云はゝつてな、その御勘定だけても六圓ほど溜つて居りますがそれもまだ貰うてゐませんのつせ。」

「まあ、さうどつか。そしてその女子はんちうのはどんな人どす？藝妓はんどつか？」智月は妙に眼に險を持たせて訊いた。

「そら藝妓はんのやうな人もおいてやすし、仲居はんのやうな人もおいてやすしな、あんたはんの前で怪體なことを云ふやうどすが、尼僧はんもふたりほどみえましした。」

智月はそれと聞くと、顔を赧めながら側を向いてしまつた。彼女の胸には尼僧はんと云ふ言葉と一緒に醜い妙眞と、美しい瑞圓が一時に映つた。と、急にすべてが淺猿しく、情けなく思はれて、坐に居耐まれないやうな惡感が彼女の胸を包んだ。

「そらあんな美しい方やさかい、女子はんをお連れやすのは無理もないことどすけど、私のやうなその日ぐらしのものゝ金をな、拂うて下さらんちうのが聞えまへん。私もそなことおしいしまへんやろとは思うてますけど、この頃は山でも隨分評判がお惡いさかいな……」老婆は妙に氣負つて云つた。そして續いて何か訴へやうとしてゐると、その時、階下の入口の戸ががらりと開く音がした。

「お、誰ぞ來た。勝野はんどつしやろえ。」と老婆は急いで立上つて、階下へ降りて行つた。そして長いこと階下ではごとごと話し聲が聞えてゐたが、やがて小さなメリンスの風呂敷包みを持つて上つて、

「違ひました。勝野はんからのお使ひどした。これをな、あんたはんがお出てやしたら渡して呉れちうて。」と、その包みを智月の手に渡しながら、「早う開けてみとくれやす。」

智月はすぐその包みをあけてみた。なかには紫紺の鹽瀬のふくさに包んだ書類のやうなものと、彼女に宛てた一封の封書が入つてゐた。それをみると、彼女は何となく胸をひき絞られるやうな氣がして、手書を開けてみた。

例の二寸角ほどある亂暴な書體で、

「昨夜は失禮致し候、拙職こと只今出發、急用にて東京へ參り候　歸期の程は相分り兼ね候得共、孰れ近日中再び歸洛致し得ることゝ存じ居候。御用立被下候金品着京次第御返濟可仕、又拙職所持の血脈、戒書等一切貴尼へ御預致し置候間、御迷惑ながら歸山の日まで固く御秘藏被下成願入候。先は取急ぎ候まゝ右まで、委細は後便を待つて逐一申述ぶ可候。猶ほ宗法の爲御健在を祈上候。　敬具

慶順拜

智月尼どの

と、至極簡單に書きしるしてあつた。

智月はそれをみると俄かに眞蒼になつて、

「おかあん、人力車を招んでお呉れやす。早うせんと慶順はんは東京へ行てしまはゝる。」と吶りながら云ひ放つて、俄かに狂人のやうにおろおろしだした。

「勝野はんが東京へ。まあどないにしてそなことおしやすのやろ。」と、老婆はもう眼に角をたてゝ騷ぎ出した。

「今そな云うてゐたつてあきまへん。後から分ることやさかい、早う車を呼んでお呉れやす。」と、智月はもう涙聲になつて、包みもなにもその儘にして階下へ降りて行つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

階下の上り口には使ひに來た車夫體の老爺がぼんやり立つて返事を待つてゐた。

「今、あの包みを持つて來ておくれやしたのはあんたはんかいなあ?」と、智月は上端へ立つて訊いた。

「は、さうです。」老爺は怪訝な顏をして智月の風を眺めながら云つた。

「ほんならあれ何處から持つて來とくれやした。山からか?」

「いゝえ、木屋町の淸月から頼まれて來ました。」

「あゝ、さうどつか。そして頼うた人はまだ家にゐやはりますのか?」

「どうや知りまへんな。私は使い屋やさかい。」老爺は薄く笑ひながら答へた。

勝手元から出て行つた老婆は暫らくすると歸つて來た、息を彈ませながら、

「今丁度一臺も居やはりまへんさかいな、あんたはん何處ぞそこいらで探して行てお呉れやす。早うせんと遲れたらどもなりまへん。」

智月はその儘默つて土間へ下りた。そして鼠緒の下駄を爪先へつゝかけたまゝすぐ往來へとび出した。そしてまるで夢中で石段下まで驅けて來て、漸う車を探して、木屋町の淸月へ急がせた。

車の上で彼女はいろいろな考へを纏めやうと思つたが、徒らに焦るばかりで駄目だつた。唯火照つた頬を涼しい風が撫でゝゆくのを感ずるばかりで凡てはまるで昏醉に襲はれてゐるやうな狀態だつた。

淸月の前で梶棒がごとりと下ろされると、彼女は打水をした狹い路次を眞直に驅けて行つた。そして小さな式臺をした玄關に立つて案内を乞ふと、奧の金襖の蔭からは一人の小粋な年增が出て來て、不思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

議な客の來訪を怪しむやうに、
「お越しやす。誰方はんどす。」と訊ねた。
彼女は乾きゝつた喉をごくりと鳴らしながら、斷れぎれに
「勝野はんちう人お出てやすか？」
「勝野はん？」と、婢は眼を瞬きながら考へてゐたが、「あゝ、智恩院はんのお坊んさんて御坐いまつしやろ。あの方は今お客さんと御一緒に停車場へお出てになりました。」
「あゝ、もう往なれましたか。何時の汽車てお立ちやした。」智月は破れるやうに波打つ胸を抑へながら訊いた。
「たしか三時四十分の急行てお立ちやすやうに伺うとりましたが、宅をお出てになりましたのはほん今しがたどしたから、お急ぎになりましたら、間に合ひますやろと思ひますが。」
智月はそれを聞くと、急に勢づいて挨拶もそこそこにして、又停車場へ車を走らせた。
三條小橋から高瀨川に沿うて車はひた駛りに駛つてゆく。折々電車と摺れ違ふ度に彼女の頭には鈍い眩暈が襲ひかゝつて來たが、枳殻邸の裏から停車場通りへ出る頃には渾身に疲勞が掩ひかぶさつて來て、冷たい脂汗がひやひやと背なかに流れた。
停車場は非常な混雜だつた。赤帽や旅客の忙はしげに行通ふなかを彼女はおろおろしながら探して廻はつたが、待合室にも、切符賣場にも慶順の姿は見えなかつた。發車を報ずる鈴の音に驚ろかされて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふとプラットフォオムへ通ふ廣場へ出ると、正面の大時計は既に三時四十分を示してゐた。そしてその突差橋向ふのプラットフォオムに蜿々と横たはつた列車は消魂しい汽笛の響きとゝもにそろそろと動き出した。横腹にかゝつた新橋行の紅札を見ると、彼女は氣もそゞろになつて、一つ一つの車窓に燃えるやうな眼眸をとばして行つた。と、最後から二つ目の二等車の窓に例の連れの男の顔がみえて、その陰に慶順の青い頭がみえた。智月はその瞬間双手をあげて、

「勝野はん、勝野はん」と、大きな聲で叫んだが、その聲も騷々しい轟響にかき消されて彼方までは達しなかつたか、彼等二人は此方を振顧らうともしなかつた。そしてすべての列車が一つ一つブリッヂの陰へ隱れてしまうと、氣の上づつた彼女は泣きながらその儘停車場を驅けだして、もう人目も何にも構はず、その建物の角を曲つて、伏見の方へ通ふ陸橋のうへへ上つた。

眞晝の白い日射しはすぐ下に延びた數多い軌道の上にぎらぎら輝いてゐる。下からさつと吹きあげて來る風は煙のやうな砂塵を濛々と卷きあげながら、石炭の匂ひとゝもに四邊の空氣を黄ろく彩つてゐる。急行列車は轉轍器のうへて騷々しく喚めきながらそのなかを眞一文字に駛つて行つたが、いつか加茂川の鐵橋も渡つて、白烟だけを空に吹き靡けながら到頭家並の陰に隱れてしまつた。智月は橋欄を握りしめながらその後を見送つてゐたが、そのうちに惡寒が體ぢうに襲ひかゝつてきて、ぐらぐらと頭のなかゞ旋轉したかと思ふと、空虛をみつめたその瞳に涙を浮べた儘、丁度後から追ひかけて來た車夫の腕の上にぐたり昏倒してしまつた。

（完）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

三版

鮫島大浪氏著

わかれたる女の日記

四六版艶麗無比

定價四十五錢

郵税四錢

發賣元 良明堂

東京々橋區西紺屋町
振替東京一四七〇番



諸新聞雑誌評判記

中央新聞 別れて後の若き女の心理を日記體に綴りたるもの、文章輕快にして讀者を倦ませぬ流石に慣れたものなり、六ケ敷理窟は惜き電車の中や宿屋の二階に寝轉んで讀むには肩の張らぬ面白い讀物なり、装釘亦美くし。

新潮 輕快な筆、輕快な觀察、讀んで居て肩が張らず面白い。小説と謂ふよりは事實として見た方が一層興味が深からう。

成功 青年文士大浪氏が苦心の作の小説にして着想嶄新きび／＼しき筆致なか／＼に面白し

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

前田文學士著



熱狂的大歡迎

拾一版

五拾日間と

數金を提供せよ

本書は此短期間の講習にて實用英語を完全に熟達せしめ、英字新聞雜誌を自由に讀み、日常の會話作文を自在になし得るに至らしむ。殊に卷末無料質疑券を添附して絶對に教授の責任を負ふ

本月廿五日特價〆切

見本進呈

特製特價二圓廿錢
並製上下各壹圓

東京本郷森川町

英語速成普及會

振替二〇〇五三番

（後付の二）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

聖德餘聞

增補再版

本書は　大行天皇の御偉業今上陛下皇太后陛下皇后陛下の御高德につき畏こきあたりの御事に通ぜる人々にたゞして記錄し奉りたるもの也出所皆正確にして寸毫も苟もせず眞に萬民の寶典也、弊堂は此際特に實費を以て之を江湖に頒たんとす、苟も忠誠無比の國民は本書一卷を備ふるを以て無上の美事とせざる可らず

菊判
三百餘頁

定價金貳圓

特價金壹圓　送料十二錢

東京神田
振替一五九七
三省堂書店發行

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文壇世界の明星

作文叢書

文學士 内海月杖先生編

既刊書目

●文章作法
●日記文範
●記事文範
●小品文範
●評論文範
●儀式文範
●書翰文範
●古文評論
●今文評論

價各冊參拾五錢
送料各冊貳錢

由來、作文書の弊は、作文法をのみ說いて、文範を示さざると、文範をのみ擧げて、作文法を敎へざるとの兩端に偏するにあり、本叢書は、まさに、その兩面の用意を完うして、よつて以て、作文習得者の修習を完成せしむことを期せるもの、全部十二篇より成り、成るに從つて、これを刊行せむとす。本叢書一たび出でて、ここにわが國作文書の大成を告ぐることを得たるに庶幾からむか。

東京市日本橋通
成美堂書店
振替東京一七一九

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●本號定價金五拾錢郵稅四錢

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

廣告一手取扱 神田三河町一丁目 博報堂

送金注意

一郵便爲替 にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京市東片町局と指定あれば途中盜難の虞なし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加へらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用 必ず一割增の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄	金五錢	（集金委托料及送達料）
一金三圓迄	金六錢	
一金五圓迄	金七錢	

一受領證請求 は必ず返信料金を要す

大正元年八月廿七日印刷納本
大正元年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可

靴下定價

▼紳士用
カシミヤ製
四十錢以上
絹メリヤス製
一圓五十錢以上
駱駝メリヤス
一圓八十五錢
スコッチ製
四十錢以上

▼自轉車乘用
一圓五十錢以上

▼子供用
十六錢以上

▼赤ン坊用
毛糸製
四十錢以上

東京 三越呉服店 駿河町

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

MADE IN JAPAN

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA